新潟県埋蔵文化財調査報告書 第141集

磐越自動車道関係発掘調査報告書

北 野 遺 跡 Ⅱ

（上　層）

本　文　編

２００５

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

磐越自動車道関係発掘調査報告書

北野（きたの）遺跡 Ⅱ

（上　層）

本　文　編

２００５

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

磐越自動車道は、福島県いわき市を起点として常磐自動車道から分岐、郡山市で東北自動車道に連結し、新潟市で北陸自動車道と結ばれる総延長約213kmの高速道路です。平成９年10月に全線が開通し、太平洋側と日本海側を結ぶ一大動脈として、それぞれの地域の経済・文化活動に寄与しています。

磐越自動車道が通過した地域には、旧石器時代から近世までの様々な遺跡が存在し、これまでその成果を公表してきました。本書はこの磐越自動車道の建設に伴って実施した東蒲原郡上川村北野遺跡（上層）の発掘調査報告書です。

北野遺跡（上層）は、約5,000年前に噴火した沼沢火山の二次堆積層の直上に立地した遺跡です。沼沢火山の二次堆積層が形成された直後の縄文時代前期末葉から近年までの人々の活動の痕跡が残されていました。この中で中期前葉～中葉、中期後葉、中期末葉～後期初頭、後期中葉の住居跡や土坑など、集落を構成する遺構が数多く検出されました。また、これらの集落跡に伴う土器・石器などの遺物がたくさん出土しました。下層の状況とあわせるとこの地は、縄文時代早期以来たびたび集落が営まれていることが明らかになりました。

このたびの発掘調査で得られた資料や本書が、埋蔵文化財に対する理解や認識を深める契機となり、発掘調査の成果が地域の歴史の資料として広く活用されることを期待しています。

最後に多大なるご協力とご援助を賜りました上川村教育委員会、並びに地元の方々に対して厚くお礼申上げます。また、日本道路公団新潟建設局（現、日本道路公団北陸支社）・同津川工事事務所には格別のご配慮を賜りました。ここに深甚なる謝意を表します。

平成17年3月

新潟県教育委員会

教育長　板屋越　麟　一

例　　言

1　本報告書は、新潟県東蒲原郡上川村大字九島字長木3,429番地ほか（通称：北野）に所在する北野遺跡の発掘調査記録である。北野遺跡は間層を挟んで上層と下層に分かれるが、本報告書は上層の発掘調査記録である。

2　本調査は磐越自動車道の建設に伴い、日本道路公団（以下、道路公団という）から新潟県が受託したもので、発掘調査は調査主体である新潟県教育委員会（以下、県教委という）が、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という）に調査を委託し、平成５～７年度に実施した。

3　整理作業及び報告書作成にかかる作業は、平成15・16年度に埋文事業団が県教委から受託しこれにあたった。

4　出土遺物及び調査・整理作業にかかる各種資料は、すべて県教委が保管・管理している。資料の有無や閲覧希望は、県教委に問い合わせ願いたい。

5　遺物の注記は北野遺跡（上層）の略記号「北」とし、出土地点や層位を記した。

6　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

7　遺物番号は土器・土製品と石器・石製品、古代以降の遺物の種別で別々の通し番号を付した。本文及び観察表・図面図版・写真図版の番号は、種別で一致する。

8　本文中の注は第Ⅵ章を除いて脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は第Ⅵ章を除き、著者及び発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

9　石器・石製品の石材鑑定は、高濱信行氏（新潟大学積雪地域災害研究センター）・竹之内耕氏（糸魚川市立フォッサマグナミュージアム）にご教示をいただき、高橋保雄が個々の石材の認定を行った。

10　自然科学分野にかかる各種分析は、以下の方々・機関に委託した。分析結果については、再編集したものを掲載した。

北野遺跡出土の鍛冶関連遺物	株式会社九州テクノリサーチ
北野遺跡の古環境	パリノ・サーヴェイ株式会社
北野遺跡の埋設土器・土坑の内容物	パリノ・サーヴェイ株式会社
北野遺跡出土土器の熱ルミネッセンス年代測定	新潟大学　橋本哲夫

11　遺構図のトレース及び各種図版の作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿し印刷した。遺物写真撮影（剥片石器を除く）は、デジタルカメラ（ニコンD100）で撮影し、遺構写真と合わせ、CD化して編集を行った。剥片石器の写真撮影は、株式会社セビアスに委託した。なお、図版作成・編集作業にあたり、委託業者に提出した資料は、以下のとおりである。

本文・挿図：Word形式、Exsel形式のデータ、トレース原図、貼り込み版下
遺構図面図版：原図（修正済）、レイアウト図、文字データ
遺物図面図版：トレース図（個別）、拓影、レイアウト図
写真図版：デジタルデータ、レイアウト図

12　本書の執筆は、高橋　保（埋文事業団課長代理）、高橋保雄（同　主任調査員）、児玉泰裕（同　主任調査員）、斉藤　準（同　嘱託員）がこれにあたり、編集は高橋保雄が担当した。執筆分担は第Ⅵ章を除き、第Ⅴ章A1c・dを斉藤　準、第Ⅴ章Bを児玉泰裕・高橋保雄、第Ⅴ章4Aを高橋　保、これ以外は高橋保雄である。なお、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章は『北野遺跡Ⅰ（下層）』を改変し掲載した。

13　本遺跡については、［高橋1995・1996］などに概要が報告されているが、これらとの間に齟齬が生じた場合は、本報告をもって正とする。

14　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力を賜わりました。ここに記して厚くお礼申上げます。（敬称略　五十音順）

阿部昭典　諫山えりか　石川日出志　石田明夫　石原正敏　磯部保衛　伊藤喜代子　遠藤　佐　岡村道雄
小熊博史　国島　聡　駒形敏朗　佐々木亜貴子　佐々木彰　佐藤雅一　塩原知人　品田高志　鈴木　暁
関根愼二　関　雅之　高木公輔　髙桑弘美　田中耕作　田辺早苗　谷藤保彦　立木宏明　都築恵美子
鶴巻康志　富樫秀之　戸根与八郎　中島栄一　西田泰民　野田豊文　橋本哲夫　本間信昭　本間　宏
前山精明　増子正三　水沢教子　水沢幸一　横山勝栄　渡辺朋和　渡辺ますみ　渡辺美穂子
鹿瀬町教育委員会　上川村教育委員会　津川町教育委員会　三川村教育委員会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の経過 …… 2
A　一次調査 …… 2
B　二次調査 …… 3

3　調査体制 …… 5

4　整理の経過と体制 …… 6

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 7

1　地理的環境 …… 7
A　周辺の地形と自然環境 …… 7
B　沼沢火山灰の堆積について …… 8

2　歴史的環境 …… 9

第Ⅲ章　調査の概要 …… 13

1　遺跡の立地と微地形 …… 13

2　グリッドの設定 …… 14

3　基本層序 …… 14

4　遺構の層位と時期 …… 16

第Ⅳ章　遺　　構 …… 17

1　概　　要 …… 17

2　記述の方法 …… 17
A　はじめに …… 17
B　遺構名の略号 …… 17
C　遺構番号 …… 18
D　観察表及び本文の記載項目 …… 18
E　そ の 他 …… 21

3　遺構各説 …… 21
A　住居跡 …… 21
B　土　　坑 …… 47
C　埋設土器 …… 59
D　焼土遺構 …… 64
E　集石遺構 …… 64
F　掘立柱建物跡 …… 66
G　溝 …… 66
H　その他の遺構 …… 67

第Ⅴ章　遺　　物 …… 69
1　概　　要 …… 69
2　土器・土製品 …… 70
A　縄文土器 …… 70
B　土　製　品 …… 114
3　石器・石製品 …… 117
A　資料の提示方法 …… 117
B　石　　器 …… 120
C　石　製　品 …… 151
4　古代以降の遺物 …… 154
A　土器・陶磁器類 …… 154
B　土　製　品 …… 155
C　石　　器 …… 156
D　石　製　品 …… 158
E　金属器類 …… 158
第Ⅵ章　自然科学の分析 …… 159
1　北野遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 …… 159
A　いきさつ …… 159
B　調査方法 …… 169
C　ま　と　め …… 167
5　鉄滓・銑・鍛間のＰ分配理論 …… 169
2　北野遺跡の古環境および埋設土器・土坑の内容物について …… 183
A　北野遺跡周辺の古環境 …… 184
B　北野遺跡の埋設土器・土坑の内容物 …… 188
3　上川村北野遺跡出土土器の熱ルミネッセンス年代測定 …… 196
第Ⅶ章　ま　　と　　め …… 197
1　遺跡と遺構について …… 197
A　縄文時代の遺跡と遺構 …… 197
B　古代以降の遺構 …… 199
2　土器について …… 200
A　出土土器の編年的位置 …… 200
3　石器について …… 202
A　石器組成 …… 202
《要　　約》 …… 204
《参考・引用文献》 …… 205

挿図目次

第 1 図　磐越自動車道路線図 …… 1
第 2 図　上層：第一次調査トレンチ位置図 …… 2
第 3 図　下層：第一次調査トレンチ位置図 …… 2
第 4 図　遺跡付近の段丘模式図 …… 7
第 5 図　沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川の位置図 9
第 6 図　北野遺跡及び周辺主要遺跡位置図 …… 11
第 7 図　グリッド設定図 …… 13
第 8 図　小グリッド模式図 …… 14
第 9 図　極小グリッド模式図 …… 14
第 10 図　基本層序と沢Ａの土層堆積図 …… 15
第 11 図　種類別遺構分布図 …… 19・20
第 12 図　土器埋設複式炉と土器埋設石組炉の
　部位名称と長軸（炉軸）方向 …… 22
第 13 図　平面形の分類基準図 …… 48
第 14 図　土坑断面形模式図 …… 48
第 15 図　分類別土坑分布図 …… 51
第 16 図　搬入礫出土分布図 …… 69
第 17 図　縄文土器出土分布図 …… 70
第 18 図　土器計測基準及び部位名称 …… 72
第 19 図　器形分類図①（中期初頭～中葉） …… 75
第 20 図　器形分類図②（中期後葉～後期前葉） ・89
第 21 図　土器片円盤出土分布図 …… 115
第 22 図　土偶・土製耳飾り出土分布図 …… 116
第 23 図　主な器種の並べ方
　及び部位名称と計測基準 …… 119
第 24 図　石器出土分布図 …… 121
第 25 図　石鏃分類図 …… 122
第 26 図　石鏃出土分布図 …… 122
第 27 図　石鏃失敗品分類図 …… 123
第 28 図　石鏃失敗品出土分布図 …… 124
第 29 図　石錐分類図 …… 125
第 30 図　石錐出土分布図 …… 126
第 31 図　石匙分類図 …… 127
第 32 図　石匙出土分布図 …… 128
第 33 図　不定形石器分類図 …… 129
第 34 図　不定形石器出土分布図 …… 130
第 35 図　両極剥離痕のある石器分類図 …… 131
第 36 図　両極剥離痕のある石器出土分布図 …… 131
第 37 図　板状石器（円盤状石器）分類図 …… 133
第 38 図　板状石器（円盤状石器）Ａ・Ｂ・Ｃ類
　出土分布図 …… 133
第 39 図　板状石器（円盤状石器）Ｄ・Ｅ類
　出土分布図 …… 133
第 40 図　篦状石器（打製石斧）分類図 …… 135
第 41 図　篦状石器（打製石斧）出土分布図 …… 135
第 42 図　小型磨製石斧出土分布図 …… 136
第 43 図　磨製石斧分類図 …… 137
第 44 図　磨製石斧出土分布図 …… 138
第 45 図　石錘分類図 …… 139
第 46 図　石錘出土分布図 …… 140
第 47 図　敲磨石類分類図 …… 141
第 48 図　敲磨石類出土分布図 …… 142
第 49 図　多面体敲石分類図 …… 143
第 50 図　多面体敲石出土分布図 …… 144
第 51 図　石皿分類図 …… 145
第 52 図　石皿出土分布図 …… 145
第 53 図　砥石分類図 …… 146
第 54 図　砥石出土分布図 …… 147
第 55 図　石核分類図 …… 148
第 56 図　石核出土分布図 …… 149
第 57 図　剥片類出土分布図 …… 150
第 58 図　石棒・類石棒・玉類出土分布図 ……151
第 59 図　扁平加工礫出土分布図 …… 153
第 60 図　鏡面状の光沢を有する石器・軽石製品
　・その他の石製品出土分布図 …… 153
第 61 図　古代以降の砥石分類図 …… 156
第 62 図　古代以降の砥石（Ａ類）出土分布図 ‥ 157
第 63 図　古代以降の砥石（Ｂ・Ｃ・Ｄ類）
　出土分布図 …… 157
第 64 図　古代以降の砥石（Ｄ類）実測図 …… 158
第 65 図　鍛造剥片３層分離型模式図……168
第 66 図　椀形鍛冶滓・含鉄鉄滓の顕微鏡組織 ‥171
第 67 図　青銅塊（芯部：鋳鉄板）の顕微鏡組織 172
第 68 図　青銅塊（芯部：鋳鉄板）の顕微鏡組織 173
第 69 図　コークス？顕微鏡組織 ……174
第 70 図　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織 ……175
第 71 図　鉄塊系遺物の顕微鏡組織 ……176
第 72 図　含鉄鉄滓の顕微鏡組織 ……177
第 73 図　椀形鍛冶滓（KTN-1）のマクロ組織（×５）
　……178
第 74 図　含鉄鉄滓（KTN-2）のマクロ組織（×５）
　……178
第 75 図　青銅塊（芯部：鋳鉄板）（KTN-4）のマクロ
　組織（×５）……178
第 76 図　鉄塊系遺物（KTN-9）のマクロ組織（×５）
　……178
第 77 図　含鉄鉄滓（KTN-10）のマクロ組織（×５）
　……178
第 78 図　EPMA 調査　反射電子像（COMP）及び特
　性Ｘ線像〔70％縮小〕と定量分析値‥179

第 79 図　EPMA 調査　反射電子像（COMP）及び特性Ｘ線像〔70％縮小〕と定量分析値‥180
第 80 図　EPMA 調査　反射電子像（COMP）及び特性Ｘ線像〔70％縮小〕と定量分析値‥181
第 81 図　EPMA 調査　反射電子像（COMP）及び特性Ｘ線像〔70％縮小〕と定量分析値‥182
第 82 図　谷部基本土層と珪藻・花粉分析試料採取位置 ……184
第 83 図　10G 谷部断面Ⅲ'''層の主要珪藻化石群集 ……185
第 84 図　リン酸・カルシウム分析試料採取位置及び含量変化 ……190
第 85 図　10G 谷部断面Ⅲ'''層より検出された珪藻化石 ……194
第 86 図　10G 谷部断面Ⅲ'''層より検出された珪藻化石・花粉化石 ……195
第 87 図　遺構・遺物の分布と集落との立地 ‥‥198
第 88 図　中世の遺構と SD127 の推定範囲 ‥‥‥199

表　目　次

第　1　表　周辺の主要遺跡一覧……10
第　2　表　土坑分類別検出数……50
第　3　表　埋設土器分類別・埋設方法別集計表‥‥61
第　4　表　出土土器大分類（群）表……74
第　5　表　器種別土製品出土数 ……114
第　6　表　出土石器の図化数量と図化率 ……118
第　7　表　各器種の縮尺率 ……118
第　8　表　石器の器種別出土数 ……120
第　9　表　石鏃石材表 ……122
第 10 表　石鏃失敗品石材表 ……124
第 11 表　石錐石材表 ……126
第 12 表　石匙石材表 ……128
第 13 表　不定形石器平均計測値表 ……130
第 14 表　不定形石器石材表 ……130
第 15 表　両極剥離痕のある石器平均計測値表 ‥132
第 16 表　両極剥離痕のある石器石材表 ……132
第 17 表　板状石器（円盤状石器）平均計測値表 134
第 18 表　板状石器（円盤状石器）石材表 ……134
第 19 表　篦状石器（打製石斧）平均計測値表 ‥135
第 20 表　篦状石器（打製石斧）石材表 ……135
第 21 表　磨製石斧平均計測値表 ……138
第 22 表　磨製石斧石材表 ……138
第 23 表　石錘平均計測値表 ……140
第 24 表　石錘石材表 ……140
第 25 表　敲磨石類平均計測値表 ……142
第 26 表　敲磨石類石材表 ……142
第 27 表　多面体敲石平均計測値表 ……144
第 28 表　多面体敲石石材表 ……144
第 29 表　石皿平均計測値表 ……146
第 30 表　石皿石材表 ……146
第 31 表　砥石平均計測値表 ……147
第 32 表　砥石石材表 ……147
第 33 表　石核平均計測値表 ……149
第 34 表　石核石材表 ……149
第 35 表　石製品の器種別出土数 ……151
第 36 表　古代以降の砥石平均計測値表 ……157
第 37 表　古代以降の砥石石材表 ……157
第 38 表　供試材の履歴と調査項目 ……170
第 39 表　供試材の組成 ……170
第 40 表　出土遺物の調査結果のまとめ ……170
第 41 表　珪藻の生態性 ……184
第 42 表　珪藻分析結果 ……186
第 43 表　花粉分析結果 ……187
第 44 表　縄文時代の土坑のリン酸・カルシウム分析結果 ……191
第 45 表　縄文時代埋設土器のリン酸・カルシウム分析結果 ……193
第 46 表　備蓄線量と縄文土器の TL 年代値 ‥‥‥196
第 47 表　北野遺跡上層土器編年対比表 ……201
第 48 表　主要遺跡の石器組成表 ……203

別　表　1　遺構観察表 ……209
別　表　2　土器観察表 ……220
別　表　3　土製品観察表 ……244
別　表　4　石器観察表 ……246
別　表　5　石製品観察表 ……253
別　表　6　古代以降の遺物観察表 ……255

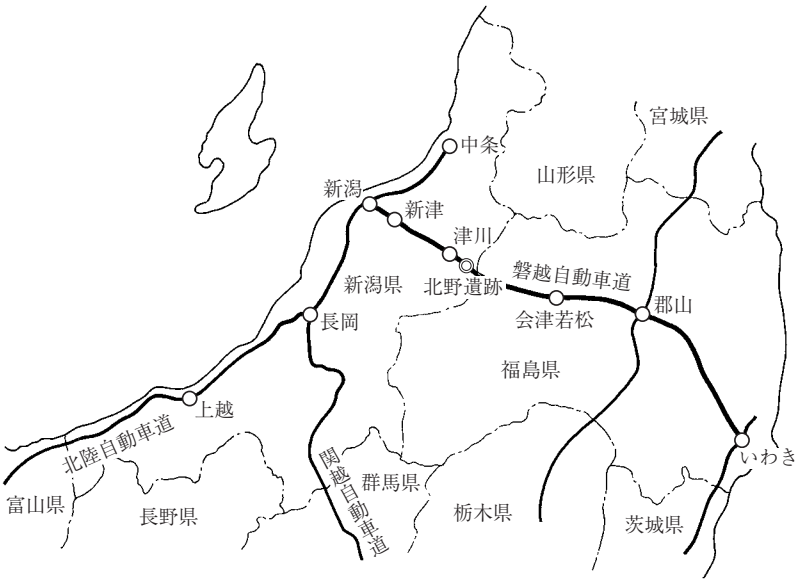
第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

基本計画～工事施工命令　磐越自動車道のうち北野遺跡にかかる区間（福島県会津坂下～津川間）は、延長約33.2kmを測る。この区間は全線の最後の工事区間であり、基本計画は昭和53（1978）年12月に決定された。昭和61年1月には建設大臣から日本道路公団新潟建設局（以下、道路公団）に対して整備計画が示され、調査開始の指示が出された。これを受けて道路公団は経済・地形・文化財など工事の施工に必要な調査を開始した。平成元（1989）年11月、道路公団は新潟県教育委員会（以下、県教委）に県境～津川間（13.8km）の法線内全域の埋蔵文化財包蔵地の分布調査を依頼した。県教委はこれを受け、同月に分布調査を実施し、北野遺跡を含む13地点について一次調査の必要性と各地点の調査対象面積を回答した。なお、この区間の工事施工命令は昭和63年1月に出され、路線発表は同年3月に示された。これ以降、本格的な道路建設の準備・工事が進められ、平成9年10月1日に全線が開通した。

一次調査　平成2年1月、道路公団と県教委は分布調査の結果を踏まえ協議を行った。その結果、津川～安田間の29地点の一次調査が終わり次第、この区間の二次調査に入ることとなった。北野遺跡は平成4年7月に一次調査を行った。この結果、沼沢火山灰の二次堆積物層（基本層序Ⅳ層）（以下、沼沢火山灰層）を挟んで上・下層から縄文時代の遺物・遺構が認められ、二次調査が必要であることが判明した。しかし、遺跡西側の低湿地部分は湛水状態、東側の墓地部分は未移転のために調査ができず、また下層は上層の遺構・遺物が密集することから範囲を確定することができなかった。したがって、これらの部分は、二次調査と並行して平成5年4～5月・11～12月、平成6年7月に行い、上層・下層の範囲を確定した。

二次調査　平成5年3月、道路公団と県教委は調査工程の協議を行い、北野遺跡の二次調査は平成5～7年度に実施することに決定した。二次調査面積は最終的に上・下層を合わせて17,800m^{2}であり、県教委から委託を受けた（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）があたった。なお、磐越自動車道の建設に伴う県境～津川間の二次調査遺跡は北野遺跡のほか、七堀道下遺跡（平成6・7年度調査）、上小島遺跡（平成7年度調査）の3遺跡である。

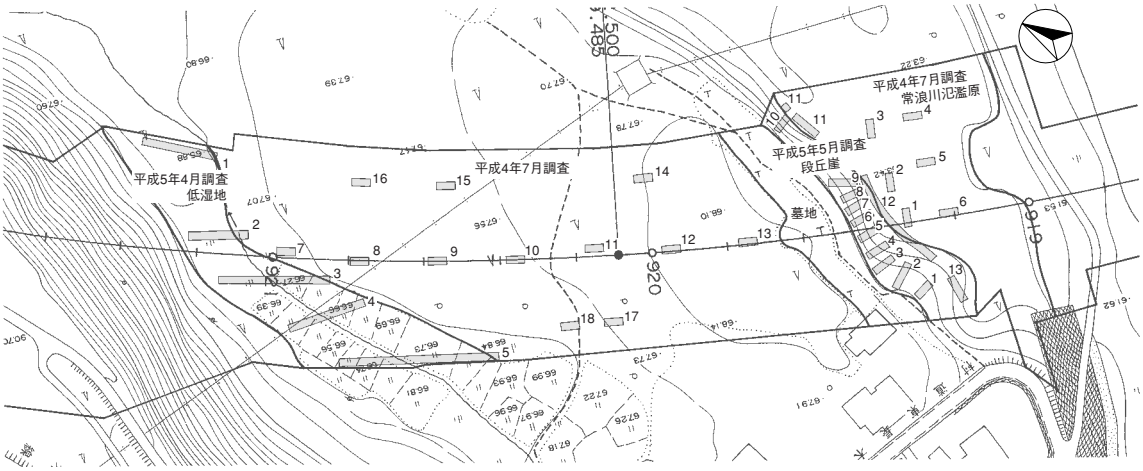


第1図　磐越自動車道路線図

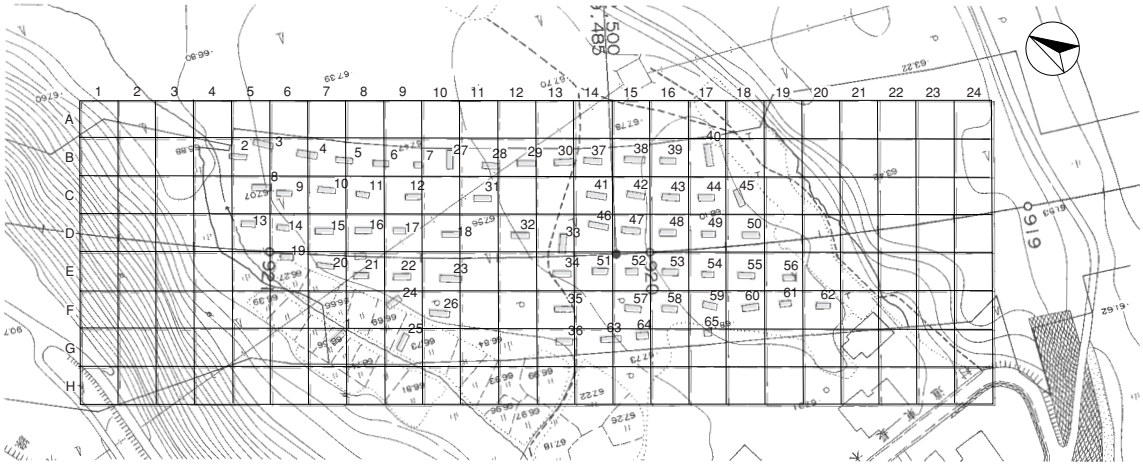
2　調査の経過

A　一 次 調 査

北野遺跡は過去にも遺物が採集されている場所で、新潟県遺跡台帳に登録されている周知の遺跡である。一次調査の対象面積は12,500m^{2}であり、１回目の調査は平成４年７月に行った。この時点では調査対象地の西側の湿地部分が湛水状態、東側の墓地部分は未移転のために調査ができず、これらを除いた部分に２×5mのトレンチを18か所設定した。各トレンチはバックホーと人力で掘り下げ、遺物・遺構の有無を確認し記録した。その結果、沼沢火山灰層を挟んで上層では、トレンチ８～17で縄文時代中期末葉～後期初頭が主体の土器・石器が多数出土し、複式炉や住居跡と推定される遺構も検出された。下層では、トレンチ７・８・18で縄文時代前期の土器・石器が出土した。上層は検出された遺構や遺物量から該期の拠点集落跡の可能性が推定された。下層は上層の遺物・遺構が密集していたため、下層まで調査できなかったトレンチが多かったものの遺物包含層の広がりを予想させる結果となった。しかし、前述の理由から上層・下層ともに二次調査面積の確定ができないことから、とりあえず上層の二次調査に着手し、並行



第２図　上層：第一次調査トレンチ位置図（数字はトレンチ番号）



第３図　下層：第一次調査トレンチ位置図（数字はトレンチ番号）

して調査面積の確定をすることにした。なお、一次調査対象地の最も東側の部分（トレンチ1～6）では遺物・遺構は皆無であり、二次調査面積から除外した。この部分は北野遺跡の存在する段丘面より約5m低く、洪水堆積物が厚く堆積していたため、常浪川の氾濫原と判断した。

2回目以降の調査は二次調査と並行して平成5年4月20・21日に西側低湿地部分、5月13・14・17日に墓地部分の東側段丘崖を対象として行った。西側低湿地部分には5か所のトレンチを設定し、バックホーで掘削した。いずれも遺物は少なく、流れ込みの土器・石器がわずかに出土した。また、有機質遺物は皆無であり、湧水・流水も少なく、乾期には干上がる沢と推定した。湿地部分は「沢A」と命名し、沢の底面から遺跡寄りを二次調査範囲とした。墓地部分の東側段丘崖には13か所のトレンチを設定し、バックホーと人力で掘り下げた。段丘崖部の覆土は薄く、西側の墓地部分からの流れ込みと推定される土器・石器がわずかに出土した。段丘崖裾部は洪水堆積物が厚く堆積し、遺構・遺物は皆無であった。この結果、東側段丘崖部分は、その裾部まで常浪川の氾濫原と判断し、段丘崖肩部までを上層の調査範囲とした。これにより、上層の二次調査範囲は8,900m^{2}と確定した。

下層の調査範囲の確定は、上層の調査の終了に合わせて行った。上層の調査範囲の西側（4～13・B～G列グリッド）は、平成5年11月27日～12月1日にかけて行った。約2×5mのトレンチを大グリッド（10×10m）に合わせ、36か所設定した。調査の結果、トレンチ2～13・35で遺構・遺物が確認され、西側は上層と同じ範囲を調査範囲として確定した。東側部分は、墓地部分を除いた部分の調査が終了した平成6年7月11～15日にかけて行った。トレンチは西側と同じように29か所設定した。調査の結果、すべてのトレンチから遺構・遺物が確認され、東側も広範囲に遺物が包含されると判断され、上層調査範囲と同じ段丘崖肩部まで二次調査範囲として確定した。これにより、下層の二次調査範囲も上層の調査範囲と同じく8,900m^{2}とした。

B　二次調査

二次調査は平成5～7年の3か年にわたり実施した。調査の前半（平成5年4月～平成6年7月）は主に上層、後半（平成6年7月～平成7年8月）は主に下層の調査であったが、墓地部分の移転が平成7年4月下旬であったため、平成7年度は上層と下層の調査を並行して行った。以下、調査日誌から経過を抄述する。

平成5年度

4月19日	器材を搬入する。
4月20・21日	西側低湿地部分一次調査。上層の西側調査範囲を確定する。
4月22日	西側低湿地部分（沢A）をバックホーにより掘削を開始する。
4月24日	西側5列グリッドから表土・包含層を掘削する。
5月13～17日	東側段丘崖一次調査。上層の東側調査範囲を確定する。
6月7日	9列グリッドより東は、遺物が極めて多く出土するため、表土からの人力掘削にする。
6月10日	5・6Bグリッド、実測・写真などの記録が終了する。以後、漸次東に調査が進行する。
7月14日	11列グリッドより東は遺構・遺物が多く、しかも性格不明の礫も多く存在するため、調査は困難をきたす。このため礫の全体状況を把握するため、表土層・包含層（Ⅱ層）の削平を先行させる。
11月4日	15～19列グリッドの礫出土状況を空中測量する。以後、性格不明の礫を除去しながらの調査となる。

11月27日～12月1日　下層の西側一次調査。下層の西側調査範囲を確定する。

11月30日　13列グリッドまでほぼ完掘、遺構平面図を空中測量する。

12月3日　遺物・諸記録類を撤収し、平成5年度調査を終了する。

平成6年度

4月12日　現地入り。調査準備を始める。

4月19日　14列グリッドから包含層削平・遺構確認・遺構掘り・実測などを中心に本格的な発掘調査が始まる。

7月7日　県教委の立会いにて、墓地部分を除いた上層の終了を確認する。

7月8日　下層の西側、4・5Bグリッドから包含層を削平する（下層二次調査開始）。

7月11～15日　墓地部分を除いた下層の東側を一次調査する。下層の東側調査範囲を確定する。

8月2日　下層の西側、4・5Bグリッド遺構掘りが終了する。

8月30日　4～12・B～D列グリッドの遺構掘り・実測が終了する。県教委の立会いのもと終了を確認する。

10月24日　沼沢火山灰層直下（基本層序Ⅴ層上面）の地形を空中測量する。

10月25日　下層のテフラ検出、植物珪酸体分析、花粉分析、寄生虫卵分析のための試料を採取する。

11月17・18日　13列グリッドまで調査をほぼ終了する。調査中の遺構に土嚢を詰め、シートを掛け保護する。沼沢層の年代測定のための炭化物を採取する。

11月22日　遺物・諸記録類を撤収し、平成6年度調査を終了する。

平成7年度

4月12日　現地入り。調査準備を始める。

4月18日　前年度からの遺構確認・遺構掘り・実測などを中心に本格的な発掘調査が始まる。

5月23日　下層：13～14・B～DグリッドのⅤ層上面の遺構をほぼ完掘する。遺構平面図を空中測量する。引き続きさらに下層（Ⅴ～Ⅶ層）を調査する。

6月25日　下層：墓地部分を残し、Ⅴ層上面の遺構を完掘する。遺構平面図を空中測量する。引き続きさらに下層を調査する。

7月25日　上層：墓地部分は21Dグリッドを残しほぼ完掘する。他のグリッドは下層調査に入る（墓地部分下層調査開始）。

8月28日　下層：すべてのグリッドで地山層（基本層序Ⅷ層）まで削平する。すべての遺構を完掘する。実測・写真などの記録を終了する。

8月29日　県教委の立会いのもと終了を確認する。全景写真を空中撮影する。

8月31日　器材・遺物・諸記録類を搬出し、調査を終了する。

3　調 査 体 制

一次調査（平成５年度以降は、二次調査と並行したため省略する）

調査期間　平成４年７月14日～７月17日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）

調査受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　本間栄三郎）

管　　理	総　　括	藍原　直木（事務局長）
	管　　理	渡辺　耕吉（総務課長）
	庶　　務	藤田　守彦（主　　事）
調　　査	調査総括	茂田井信彦（調査課長）
	調査指導	戸根与八郎（調査課調査第一係長）
	調査担当	北村　　亮（調査課主任）
	調査職員	阿部　雄生（調査課専門員）

二次調査

平成５年度

調査期間　平成５年４月19日～12月３日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　本間栄三郎）

調査受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　本間栄三郎）

管　　理	総　　括	藍原　直木（事務局長）
	管　　理	渡辺　耕吉（総務課長）
	庶　　務	藤田　守彦（主　　事）
調　　査	調査総括	茂田井信彦（調査課長）
	調査指導	藤巻　正信（調査課調査第一係長）
	調査担当	高橋　保雄（調査課主任）
	調査職員	北村　　亮（調査課主任）
		須藤　高志（調査課専門員）
		南　　雄二（調査課専門員）
		阿部　雄生（調査課専門員）
		春日　真実（調査課専門員）
		佐藤　　恒（調査課嘱託員）
		上村　利明（市町村職員実務研修生・栃尾市教育委員会）
		高橋　理彦（市町村職員実務研修生・柿崎町教育委員会）
		新保　誠吾（市町村職員実務研修生・吉川町教育委員会）

平成６年度（調査主体・調査受託は平成５年度に同じ）

調査期間　平成６年４月12日～11月22日

管　　理	総　　括	藍原　直木（事務局長）
	管　　理	渡辺　耕吉（総務課長）
	庶　　務	泉田　　誠（主　　事）
調　　査	調査総括	茂田井信彦（調査課長）
	調査指導	藤巻　正信（調査課調査第一係長）
	調査担当	高橋　保雄（調査課主任調査員）
	調査職員	南　　雄二（調査課文化財調査員）
		石山　精哉（調査課文化財調査員）
		佐藤　　恒（調査課嘱託員）
		清塚　則和（調査課嘱託員）

平成７年度（調査主体・調査受託は平成５年度に同じ）

調査期間　平成７年４月12日～８月31日

管　　理	総　　括	藍原　直木（事務局長）
	管　　理	渡辺　耕吉（総務課長）
	庶　　務	泉田　　誠（主　　事）
調　　査	調査総括	亀井　　功（調査課長）
	調査指導	藤巻　正信（調査課調査第一係長）
	調査担当	高橋　保雄（調査課主任調査員）
	調査職員	島田　昌幸（調査課文化財調査員） 石山　精哉（調査課文化財調査員） 佐藤　　恒（調査課嘱託員） 斎藤　本恭（市町村職員実務研修生・相川町教育委員会） 小鍛冶快弘（市町村職員実務研修生・村松町教育委員会） 栢森　秀之（市町村職員実務研修生・田上町教育委員会） 杉本　陽子（市町村職員実務研修生・柿崎町教育委員会）

４　整理の経過と体制

遺物及び図面・写真等の諸記録類の基礎整理は、発掘調査と並行して行った。しかし、遺物・諸記録類がともに膨大なため、未整理なものは調査年度の冬期に行った。遺物は洗浄・注記を民間業者に委託し、諸記録類の基礎整理、遺構カードの作成は調査職員が行った。本格的な整理作業は、埋文事業団が県教委から委託を受けて下層を平成14年度、上層を平成15・16年度に行った。上層の整理体制は、以下のとおりである。

平成15年度

整理期間　平成15年４月１日～平成16年３月31日

整理主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

整理受託　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　板屋越麟一）

管　　理	総　　括	黒井　幸一（事務局長）
	管　　理	長谷川二三夫（総務課長）
	庶　　務	高野　正司（総務課主任）
整　　理	整理総括	藤巻　正信（調査課長）
	整理指導	高橋　　保（調査課整理担当課長代理）
	整理担当	高橋　保雄（調査課主任調査員）
	整理職員	斉藤　　準（調査課嘱託員）
	整理作業員	小田美知子・本間利子・渡辺恵子・筒渕由美・山上敦子・中村恵美・大滝仁美 小田美子・齋藤文子・富樫佐登子・齋藤真由美・齋藤由香・水島里美 （以上、調査課朝日分室嘱託員）

平成16年度（整理主体・整理受託は平成15年度に同じ）

整理期間　平成16年４月１日～平成17年３月31日

管　　理	総　　括	黒井　幸一（事務局長）
	管　　理	長谷川二三夫（総務課長）
	庶　　務	高野　正司（総務課主任）
整　　理	整理総括	藤巻　正信（調査課長）
	整理指導	高橋　　保（調査課整理担当課長代理）
	整理担当	高橋　保雄（調査課主任調査員）
	整理作業員	児玉　泰裕（調査課主任調査員）
		斉藤　　準（調査課嘱託員）
	整理作業員	小田美知子・渡辺恵子・中村恵美・大滝仁美・富樫佐登子・齋藤真由美 （以上、調査課朝日分室嘱託員）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

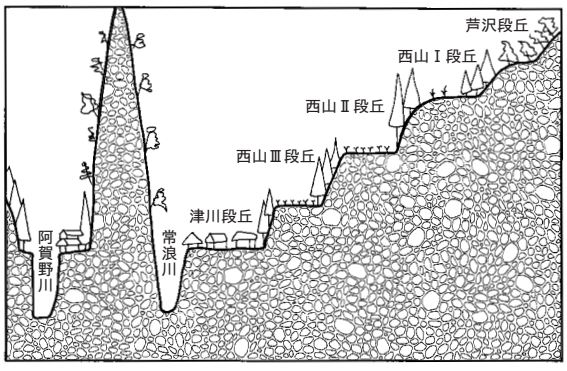
1　地理的環境

A　周辺の地形と自然環境

北野遺跡は新潟県東蒲原郡上川村大字九島字長木3,429番地ほかに位置する。東蒲原郡は新潟県の東北部に位置し、上川村を含む2町2村によって構成され、面積953km^2、人口は約17,000人（平成4年7月1日推計）である。郡内を西流する阿賀野川は、福島・栃木県境の荒海山に源を発する。郡内で常浪川、新谷川と合流して水量を増した流れは山間部を抜け、平野部の広大な水田地帯を潤しつつ日本海へ注ぐ。流路延長約210km、流域面積約7,710km^{2}の東日本屈指の大河川である。

上川村は東蒲原郡の東南に位置し、北は同郡津川町、三川村、西は中蒲原郡村松町、南蒲原郡下田村と、東南は福島県との県境を挟み西会津町、金山町、只見町と接している。面積は361.13km^{2}で同郡の総面積の3分の1以上を占め、人口は3,588人を数える（東洋経済新報社刊・都市データパック2002年度版より）。村の総面積の実に97％が林野で、南側には越後山脈が走る典型的な山村である。平野部が少ないことから、現在の集落の多くは常浪川を中心とした細長い盆地上に営まれている。気候は8月の平均気温が24.7℃なのに対し、1月の平均気温は0.2℃であり、寒暖の差が大きい。冬は北西季節風の影響で降水量が多くなる典型的な日本海型気候となる。当地では年平均2,293mmの降水量の約4割が降雪によりもたらされ、その最深積雪の年平均は111cmに達する（気象データは気象庁津川観測所1979～2000年、最深積雪のみ1980～2000年）。

北野遺跡の眼前を流れる常浪川は、中の又山の標高1,070m付近に源を発する。その流れは途中、広谷川、柴倉川、東小出川といった支流と合流しつつ、上川村内を曲流しながらもおおむね北東流し、津川町の麒麟山付近で阿賀野川に合流する。流路延長約30km、流域面積約385km^{2}の一級河川である。流域は、不動滝より上流の上流域、不動滝から栃堀間の中流域、栃堀から下流の下流域の3区間に大別される。この上・中流域には国指定史跡の室谷洞窟、小瀬ヶ沢洞窟があり、両洞窟とも河岸段丘の縁にあることから、常浪川により形成された隆起河蝕洞と考えられている。北野遺跡の位置する下流域は、津川盆地を流れる。津川盆地は、周辺の急峻な山地が古～中生代の非常に硬質な粘板岩やチャートによって形成されているのに対し、比較的軟らかいグリーンタフと呼ばれる凝灰岩層が厚く堆積している［天野ほか1995］。この地質の違いは地形に反映され、周囲と異なる丘陵性の山地と盆地を形成している。下流は上・中流に比べ、河床勾配が4/1,000以下と小さく、蛇行が見られるようになる。その河岸には低位の段丘がよく発達しており、北野遺跡もこの段丘上に位置している。



第4図　遺跡付近の段丘模式図［滝沢ほか1995］

遺跡の立地する段丘面は、阿賀野川との合流点から南に約3.5km上流、常浪川下流の左岸に位

置し、基本層序Ⅷ・Ⅸ層の砂礫層が示すように常浪川により形成された河岸段丘である。この段丘は地質学的には「津川段丘」［稲葉ほか1976］に区分され、常浪川の蛇行によって開析されている。遺跡はこの段丘の低位面にあり、上位段丘とは比高約20mの崖と小さな沢によって区切られている。この段丘低位面は長さ約450m、幅約130mの三日月状を呈し、常浪川の現河床との比高は約7mとなっている。

B　沼沢火山灰の堆積について

北野遺跡では縄文時代中・後期を主とする包含層（上層）と縄文時代早・前期の包含層（下層）の間層として、調査区ほぼ全域を覆いつくすようにサラサラの黄褐色砂質土・淡黄色砂が合わせて65～95cm前後堆積していた。この堆積層は基本層序Ⅲ・Ⅳ層に該当する。この砂質土は、堆積の特徴及び地質学的見地から、隣接する福島県大沼郡金山町の沼沢火山から供給された火山灰と考えられる。この火山灰は只見川・阿賀野川を伝い広域に分布することや、堆積時期が縄文時代前期末葉であると推定されることから、以前より地質学ばかりでなく考古学も加えた両分野により度重なる検討が加えられてきた。ここでは、今回報告する基本層序Ⅲ・Ⅳ層以下の包含層についての年代的位置付けを地質学の成果を交え、改めて確認することを目的とする。

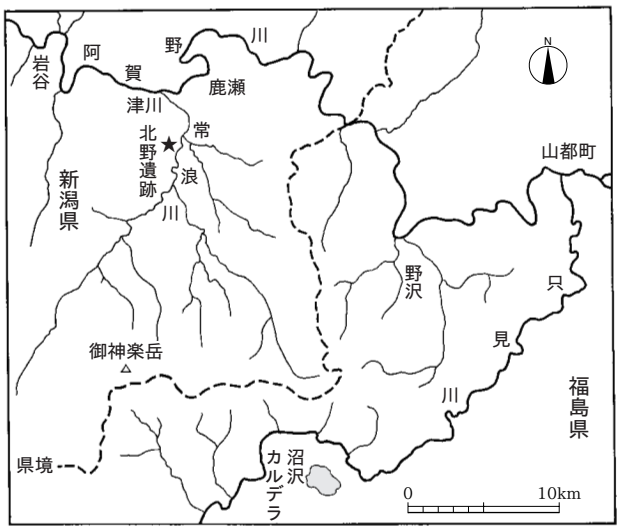
以下、これまでの研究を振り返ることで要点の整理を行いたい。なお、同火山灰層は「沼沢火山灰層」［滝沢ほか1995］、「鹿瀬軽石砂質層」［稲葉ほか前掲］、「沼沢浮石質砂層」［只見川第四紀研究グループ1966a・b］などと呼称されている。しかし、すでに指摘［滝沢ほか前掲］があるように煩雑で無用の混乱を招く可能性もあるため、以下では「沼沢火山灰層」に統一して記述する。

1）堆積過程

沼沢火山は、北野遺跡とは御神楽岳（標高1,386.5m）を挟んだ約26km南東、只見川の右岸に位置する。火口は現在、面積3km^2、最深部96mのカルデラ湖となっている。これは北野遺跡のⅢ・Ⅳ層を形成する堆積物を噴出した際の火口と考えられている。

この北野遺跡の下層を埋没させた沼沢火山灰層は、噴火に伴う直接的な堆積層ではない。通常、火山灰は偏西風の影響から主に火口の東側へ飛ばされるため、北西に位置する北野遺跡周辺には到達しにくい。事実、津川周辺では確実に降下火山灰層とされるものは確認されていない。北野遺跡の沼沢火山灰層は一度降下した火山灰が河川、つまり只見川を経由し、阿賀野川を流下する過程で形成された二次堆積層であることに大きな特徴がある。しかしながら、沼沢火山灰層が堆積する標高が両河川の現水面から20m以上も高いことから、その堆積過程は以下のように考えられている。①沼沢火山の噴火による大量の軽石・火山灰が、只見川・阿賀野川に沿って流下する（只見川流域及び会津盆地西部では、沼沢火山の火砕流堆積物が確認されている［柳田1979］）。②これらの火山性物質が流下する過程で阿賀野川の谷を埋積し、堰の役割を果たすことで一時的なダム湖を形成する。この堰は沼沢火山灰層の分布と地形から、津川の下流、岩谷付近の峡谷に形成されたと考えられる。ダム湖は火山灰で混濁した流水で満たされ段丘面を浸したが、水流は穏やかでそれまでの地表面（基本層序Ⅴ層）を流出させなかった。沼沢火山灰層の堆積の最高地点は現在の所、津川町猿額遺跡の標高88.3m地点で確認されている。このことからダム湖の湖水は一時的にではあるが西山Ⅱ段丘面まで到達していた［滝沢ほか前掲］。③このダム湖を満たした湖水に含まれた微細な火山灰（軽石は流下の過程で小さくなり、津川付近では含まれない）が湖底に沈積することによって水平層理の砂質土層が形成される。④ダム湖の水が引き、砂質土層が地表面となる。さらに火山灰流下の過程で幾

度となくこの過程が繰り返され、沼沢火山灰層が形成されたと考えられる。このような現象は津川盆地ばかりでなく、上流部の野沢盆地付近でも起こったと考えられており、広範囲に火山灰を二次堆積させた。このように只見川、阿賀野川を流下した火山灰の一部は段丘上に砂質土層を形成した。さらに下流にまで流下したものは河口にまで到達し、新潟砂丘の形成にも関与することから［坂井1981］、砂丘形成過程の鍵層として認識されている。



第５図　沼沢カルデラ・只見川・阿賀野川の位置図
［稲葉ほか1976を一部改変］

2）堆積年代

沼沢火山灰層の堆積年代については地質学、考古学の両分野から検討されている。只見川第四紀研究グループは沼沢火山灰層中の炭化自然木片のC^{14}による年代測定を試み、4950±100年B．P、5030±100年B．P［只見川第四紀研究グループ前掲］、4870±110年B．P［只見川第四紀研究グループ前掲］との結果が得られたことから、その堆積時期が「縄文前期の後半」であることを指摘する。その後、行われた考古学による発掘調査では、これを裏付けるように沼沢火山灰層の上下層から縄文時代前期末葉に比定される大木６式土器の出土事例が報告されている。

北野遺跡と同様に沼沢火山灰の二次堆積層に埋没した遺跡としては津川町猿額遺跡［滝沢ほか前掲］、福島県山都町上ノ原遺跡［芳賀ほか1983］などがあげられる。猿額遺跡では沼沢火山灰層により埋没した土坑から大木６式土器が出土しており、その上層の包含層からも大木６式が出土している。上ノ原遺跡でも沼沢火山灰層の直下から「大木６式の前半期」の土器が出土している。また、降下火山灰層（一次堆積層）が確認されている会津高田町鹿島遺跡［丹野・本間1991］、同町下谷ヶ地平Ｂ・Ｃ遺跡［芳賀・藤谷1986］、同町宵宮西遺跡［芳賀ほか1984・1990］、磐梯町・猪苗代町にまたがる法正尻遺跡［松本ほか1991］でも沼沢火山灰層の直下から大木６式土器が出土している。さらに、北野遺跡の下層からも大木６式土器が出土している。以上の例から、沼沢火山が噴火活動を開始したのは大木６式期で、その後の二次堆積もほぼ同時期に始まったことが推測できる。一方、火山活動の終了時期に関しては明確にし得ない。沼沢火山灰層の上層からは中期前半以降の遺構・遺物が出土することが多いが、猿額遺跡、法正尻遺跡では火山灰層の上層からも大木６式が出土している。このことから、大木６式の有する絶対的な時間幅をここでは明確にできないものの、噴火活動の終了から人々が再び痕跡を残すまでの時間差を考慮しても、噴火活動の開始から終了（二次堆積の終了）までが大木６式期内の比較的短い期間で完結したものと考えられる。

2　歴史的環境

東蒲原郡の遺跡分布状況を見ると、いずれも阿賀野川及びその支流によって形成された河岸段丘上に位置し、その大部分が縄文時代の中期から晩期にかけての遺跡である。しかし、今回の北野遺跡の調査を含む磐越自動車道の建設、県営常浪川ダムの開発に伴い、これまであまり知られていなかった旧石器時代や縄

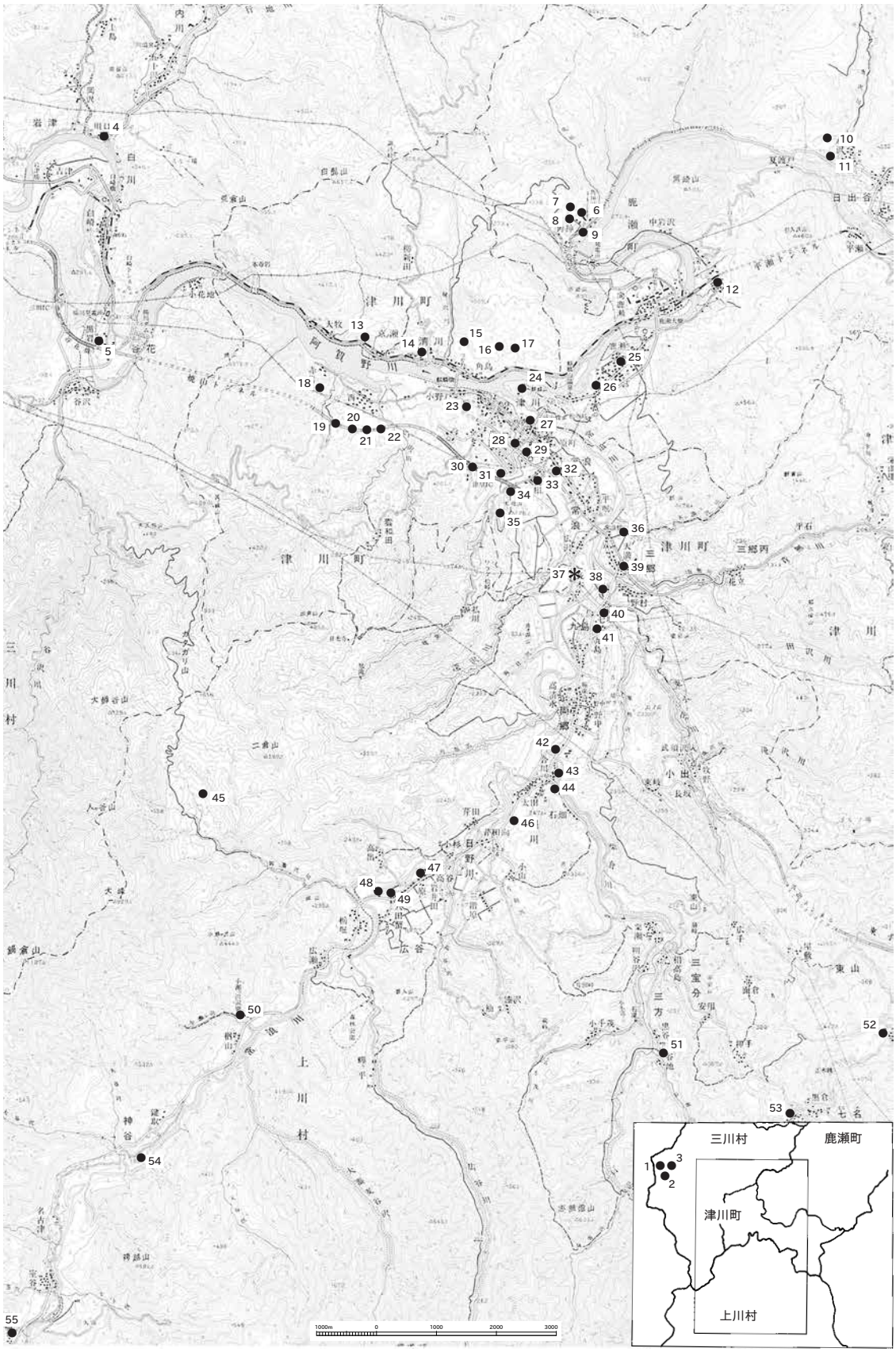
文時代草創期・早期・前期の遺跡の発掘調査が行われ、多くの成果が得られている。以下、縄文時代を中心に概観する。

草創期・早期では、上川村小瀬ヶ沢洞窟（50）、同村室谷洞窟（55）のふたつの国指定史跡が全国的にも著名である。しかし、近年の常浪川ダムの開発に伴い上川村大谷原遺跡（54）の調査が行われ、縄文時代早期における台地上での生活の痕跡も明らかなものとなっている。常浪川の中流域に位置する小瀬ヶ沢洞窟は、長岡市立科学博物館によって昭和33・34年に調査された我が国を代表する草創期の遺跡である。この調査で微隆起線文、爪形文、多縄文などの多量の土器と有舌尖頭器、植刃器、石鏃などの石器が出土した［中村1960］。また、近年新たな観点を交えた再検討が行われた［小野・鈴木編1994］。小瀬ヶ沢洞窟のさらに6.5km上流にある室谷洞窟も昭和35～37年にかけて長岡市立科学博物館と新潟大学医学部解剖学教室により発掘調査が行われ、草創期から弥生時代にかけての遺物が出土した。この調査で縄文時代前期初頭とされる女性の人骨が、ほぼ完全な状態で発見された。この人骨は埋葬されたことがほぼ確実と考えられており、当該期の埋葬形態を考える上で欠くことのできない資料である［中村・小片1962；谷口1996］。

早期の遺跡としては、既に報告されている北野遺跡下層（37）、上川村大谷原遺跡（54）があげられる。両遺跡とも早期中葉の貝殻沈線文土器期の集落跡が調査されている。北野遺跡では9基の竪穴住居跡と土坑が［髙橋ほか2003］、大谷原遺跡では竪穴住居跡や墓と考えられる土坑群、貯蔵穴群、水場などが検出されている［遠藤2000］。これらの遺構は県内でも類例の少ない当該期の集落跡、集落構成を考える上で注目されるものである。

No.	遺跡名	時　　期	No.	遺跡名	時　　期
1	堂田	縄文（中・晩期）	29	金鉢清水	縄文
2	吉ヶ沢	旧石器、縄文（前期）	30	上ノ山	縄文、平安
3	上ノ平	旧石器、縄文（前・後期）、平安	31	羽黒林	縄文
4	若宮洞窟	縄文（晩期）	32	中島	縄文
5	牧ノ沢	縄文（後・晩期）	33	奥田	縄文
6	角神A	旧石器	34	大舟	縄文
7	角神B	縄文	35	エンマ坂	旧石器
8	角神C	縄文	36	古天神	縄文（後・晩期）
9	角神D	縄文（中期）	37	北野	縄文（早・前・中・後・晩期）、中世、近世
10	長者屋敷	縄文（中・後・晩期）	38	楠川	縄文（中・後・晩期）
11	中貝	縄文（中期）	39	天満	縄文
12	深戸	縄文（中・後期）	40	七堀道下	縄文（中・後・晩期）
13	大師堂	縄文（後期）	41	キンカ杉	縄文（後期）
14	原	縄文（中・後・晩期）	42	大屋敷	縄文（中・後・晩期）
15	角嶋岩陰	縄文（後期）	43	入道岩陰	縄文（晩期）、弥生
16	小野戸	平安	44	開後	縄文
17	角嶋山	縄文（後期）	45	人ヶ谷岩陰	縄文（晩期）
18	赤岩	縄文（中・後・晩期）	46	山口	縄文
19	中棚	縄文（前・中期）	47	狐窪	縄文（中・後・晩期）
20	猿額	縄文（前・中期）	48	揚城	縄文（晩期）
21	大坂上道	縄文（中・後期）	49	八田蟹	縄文
22	今井野	縄文	50	小瀬ヶ沢洞窟	縄文（草創、早期）
23	御小屋	中世	51	粟瀬B	縄文（中・後期）
24	津川城跡	中世	52	中山	縄文
25	大鹿瀬	縄文（後期）	53	谷地	縄文（中・後期）
26	麒麟山東方	縄文	54	大谷原	縄文（早・中期）
27	上鉄砲町	縄文（中・晩期）	55	室谷洞窟	縄文（草創・早・前・中・後・晩期）、弥生
28	古志王	縄文（中・後期）			

第1表　周辺の主要遺跡一覧



国土地理院発行1:50,000
「津川」「御神楽岳」「大白岳」「野沢」を使用（1:100,000）

第６図　北野遺跡及び周辺主要遺跡位置図

前期の遺跡としても、既に報告されている北野遺跡下層（37）に加え、三川村上ノ平遺跡（3）、津川町猿額遺跡（20）、同町中棚遺跡（19）などがある。北野遺跡では前期前葉～中葉、後葉～末葉の二時期の集落跡が調査された。特に後葉～末葉の集落跡は前期末葉に二次堆積した沼沢火山灰層に覆われていたため良好な状態で保存されており、竪穴住居跡の周堤、土坑の掘り上げ土など沼沢火山灰層に覆われる直前の遺構・地形が調査された［髙橋ほか前掲］。上ノ平遺跡では大木６式期の竪穴住居跡１基、ピット１基が検出され、その規模からキャンプサイトとしての性格が指摘されている［沢田1996］。猿額遺跡は北野遺跡と同様、上下二枚の包含層の間層として沼沢火山灰層の二次堆積が確認されている。この上下の包含層から大木６式の土器が出土しており、下層では大木６式古段階、上層では大木６式新段階の土器が出土することを明らかにした［滝沢ほか前掲］。

中期になると遺跡数はさらに増加し、確認されている遺跡数の上では最盛期を迎えることになる。しかし、発掘調査が行われた遺跡は少なく、今回報告する北野遺跡の上層を含めても数例に留まる。発掘調査が行われた遺跡としては、上川村キンカ杉遺跡（41）、同村七堀道下遺跡（40）、津川町原遺跡（14）、同町古志王遺跡（28）、同町大坂上道遺跡（21）がある。キンカ杉遺跡は2,000m^{2}とそれほど広い調査区では無いにも関わらず、９棟の住居跡と59基の貯蔵穴が検出され、この地域の拠点集落と考えられている。同時に出土した会津地方の特徴を備えている土器群と合わせ、北野遺跡上層との関連が注目される［遠藤1995］。原遺跡は縄文時代中期から晩期、弥生時代にかけての遺跡である。津川町教育委員会によって広大な遺跡の一部分の発掘調査が行われ、土壙18基を検出、出土遺物の主体は大木８～10式期のものである［山武考古学研究所1985］。大坂上道遺跡から出土した土器は東関東や北陸の影響が強く見られ、県内の他の地域には認められない傾向を示している［滝沢ほか前掲］。また、発掘調査が行われていないものの、三川村堂田遺跡（1）、鹿瀬町長者屋敷遺跡（10）は表面採集資料などから中期以降の大集落であると推定されている。

後期の遺跡は中期から継続しているものが多く、それ以外では、北野遺跡の上層を含め、津川町大師堂遺跡（13）、同町楠川遺跡（38）、鹿瀬町深戸遺跡（12）、三川村牧ノ沢遺跡（5）などがある。遺物が単独で確認される例が多く、集落跡の調査が行われたのは北野遺跡の上層のみとなっている。

晩期の遺跡も中・後期から継続しているものが多く、それ以外では、上川村人ヶ谷岩陰遺跡（45）、津川町入道岩陰遺跡（43）、三川村若宮洞窟遺跡（4）などがある。人ヶ谷岩陰遺跡は三方を山々に囲まれた標高約350mの山間部に位置する。上川村教育委員会が昭和55年に行った発掘調査では晩期最終末の土器群や有柄式石鏃などが出土した［小野1986］。

弥生時代に入り、以後、奈良・平安時代までは遺跡数が極端に減少し、人々の生活の痕跡が希薄な時期となる。現在のところ当該期を知る手がかりは、いくつかの遺跡の上層部からわずかに出土する遺物・遺構に限られており、古墳時代・奈良時代の遺跡に関しては皆無という状況である。これは、山岳地帯が卓越し、平坦地が少ないという当地の状況により、弥生時代以降に確立した水稲稲作文化を受容し切れなかった地形的要因も大きかったと考えられる。

中・近世になると政治的な側面を交え、再び人々の痕跡が明確になる。この時代の遺跡としては津川町津川城跡（24）、同町御小屋遺跡（23）などがある。県指定史跡となっている津川城は、建長４年（1252年）に藤倉盛弘によって、阿賀野川と常浪川の合流点に位置する麒麟山に築かれた山城である。特に会津藩にとっては寛永４年（1627年）に江戸幕府の命により取り壊されるまで、越後口警備の重要な拠点であった。また、北野遺跡の上層からも中世の建物跡・溝、近世の墓及びそれらに伴う遺物が出土している。

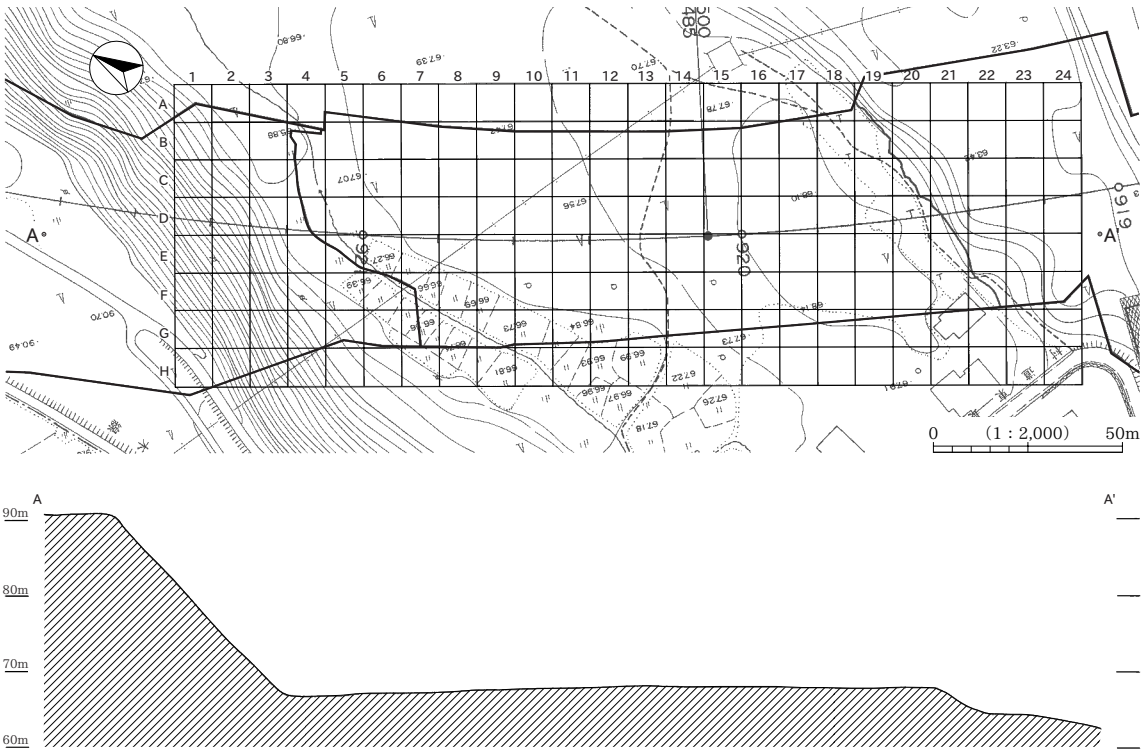
第Ⅲ章　調査の概要

1　遺跡の立地と微地形（図版1）

北野遺跡は阿賀野川の支流常浪川によって形成された左岸の段丘平坦地に所在する。この段丘は長さ約450m・幅約130mの広さをもち、北東－南西方向に三日月状に延びる。西側は比高22mの上位段丘の崖、南側から東側は常浪川、北側は常浪川の氾濫原により区切られる。遺跡の標高は68mで現河床との比高は7mを測る。遺跡はこの段丘のやや北東寄りに、長木集落は中央部から南東側に位置している。西側の段丘崖沿いには小さな沢が流れ[1)]、東－南側の眼前に常浪川が流れ、北－東－南側に開けた土地である。いうなれば南に開けた平坦地で、水場もあり、洪水などの危険も少なく[2)]、人々の生活に適した地に遺跡は立地していたといえる。

このことは発掘調査の結果、この段丘に人々の活動の痕跡が残される縄文時代早期以降～晩期までの遺物が出土し、早期中葉、前期前葉～中葉・後葉～末葉、中期前葉～中葉・後葉・末葉～後期初頭、後期中葉の住居跡が確認され、また、古代・中世、近世以降～現代までの遺物が出土していることからも裏付けられる。

なお、発掘調査以前は杉林、一部は畑・水田・墓地として利用されていた。また遺跡名の「北野」は、遺跡付近が「北野」と地区民に呼称されて来たことに由来する。現在、常浪川を挟んで対岸の津川町大字天満に所在する「北野天満宮」が、かつて遺跡付近に「北野神社（天満宮）」として存在していたという伝



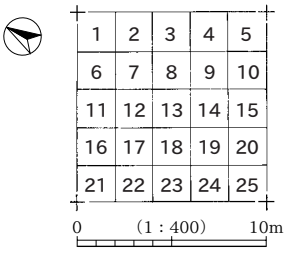
第7図　グリッド設定図

1）発掘調査時点ではほぼ埋没し水田として利用されていたが、段丘形成後～縄文時代には沢になっていたものと推定される。
2）調査の結果、沼沢火山灰層に覆われた縄文時代の一時期を除いて、洪水に見舞われた痕跡は認められなかった。

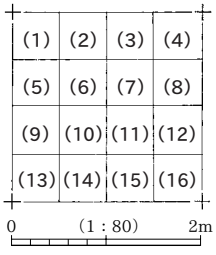
承が残されている。

2 グリッドの設定

グリッドの方向は、自動車道の法線と一致させるため、センター杭を基準とした。STA920（16E杭）（座標X=184,105.0298m、Y=85,494.8659m、北緯37度39分18.61783秒、東経139度28分08.22627秒）を基点とし、STA921（座標X=184,192.1811m、Y=85,445.8300m、北緯37度39分21.46092秒、東経139度28分06.26256秒）と結んだ線（横軸）と、これにSTA920で直交する線（縦軸）を基準線とした。これを基に1辺10mの方眼を組み、これを大グリッドとした（第7図）。このため、横軸方向は真北から約29.5度西偏している。大グリッドの表示は、第7図のように縦軸を左から右に算数字順、横軸を上から下へアルファベット順とし、これを組み合わせた。



第8図 小グリッド模式図



第9図 極小グリッド模式図

小グリッドは、大グリッドをさらに2m方眼に25分割した。小グリッドの表示は第8図のように、北隅を1（基点）に算数字順とした。包含層出土遺物の出土地点は、基本的に大グリッドと小グリッドを組み合わせた。

極小グリッドは、2m方眼の小グリッドをさらに50cm方眼に16分割した。極小グリッドの表示は第9図のように、北隅を（1）（基点）に、括弧付きの算数字順とした。微小遺物の検出のための土壌採取などでは、極小グリッドを使用した。

3 基本層序

既述のように本遺跡は常浪川左岸の段丘平坦地に立地する。しかし、西側にはほぼ埋没していたが、低湿地が存在し、東側は墓地移転のため撹乱があった。したがって、平坦地はどの地点においても層序は同一であるが、西側の低湿地部分では沢地の埋没堆積となり層序が異なる。また、東側の段丘崖付近ではⅣ層（沼沢火山灰層）が崖側に流出し薄くなる。

以下、基本層序Ⅰ～Ⅸ層まで説明する。なお、色調は『新版標準土色帖』［農林水産省農林水産技術会議事務局1993］を用いた。

Ⅰ層：10～20cm　10YR2/2黒褐色シルト　現表土・耕作土である。

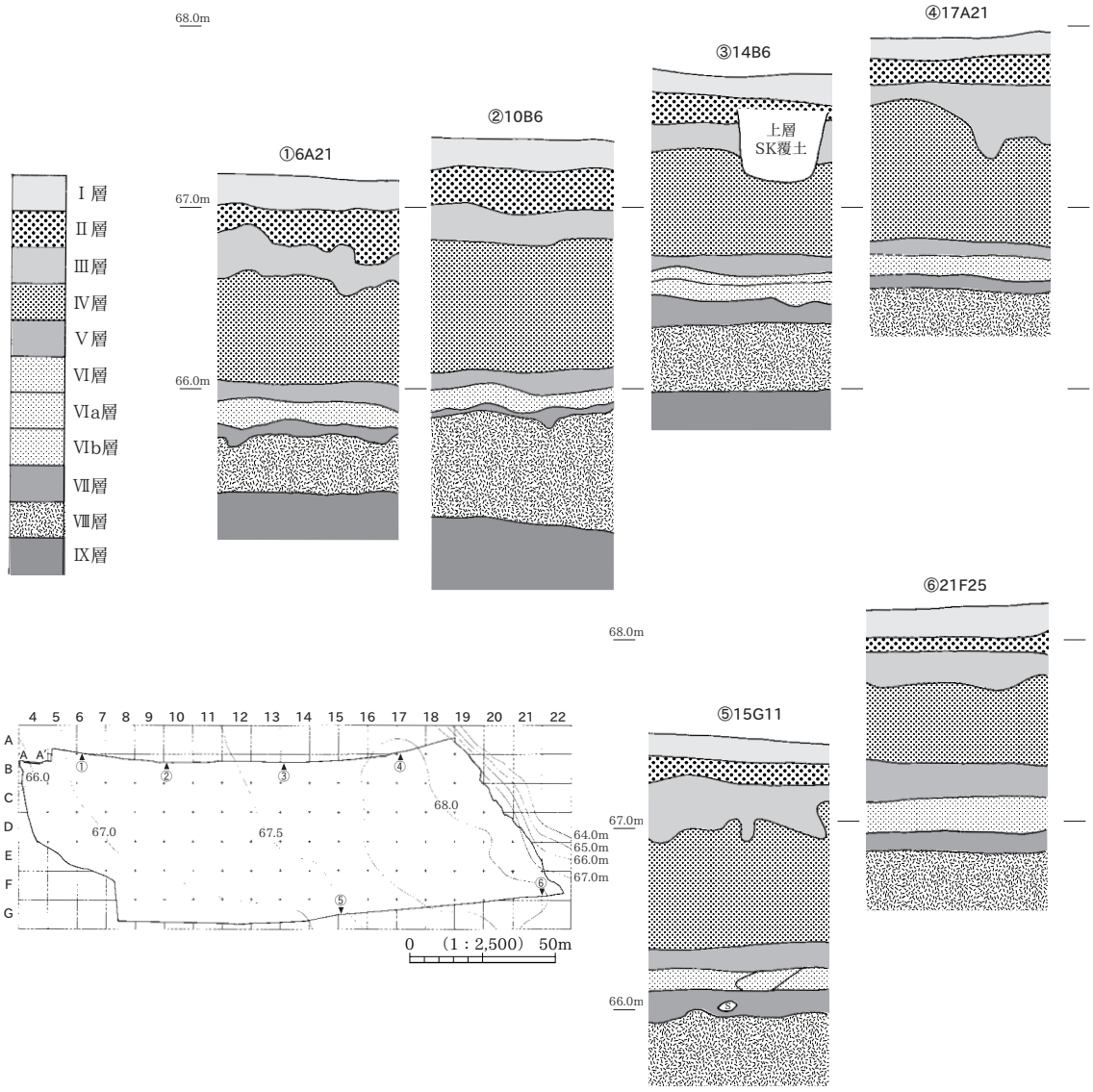
Ⅱ層：10～20cm　10YR3/3暗褐色シルト　縄文時代前期末葉以降の遺物包含層である。

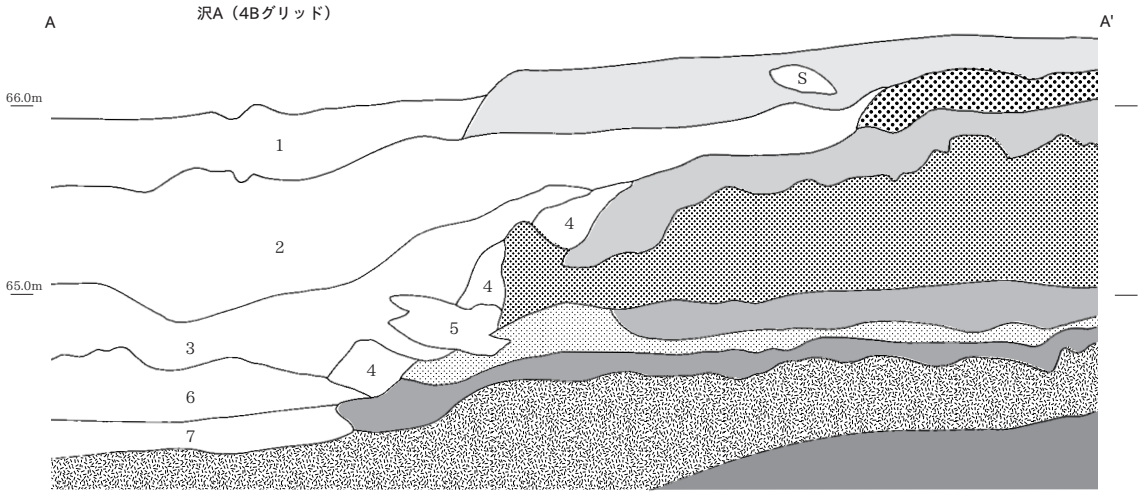
Ⅲ層：15～25cm　10YR5/6黄褐色砂質土　Ⅳ層への漸移層。Ⅱ層とⅣ層の混じり。

Ⅳ層：50～70cm　10YR8/6黄橙色砂・2.5Y8/4淡黄色砂　沼沢火山灰の二次堆積物層（沼沢火山灰層、約5,000年前）。Ⅳ層下部では、7.5YR7/4にぶい橙色を呈する。

Ⅴ層：10～15cm　7.5YR3/1黒褐色シルト　縄文時代前期の遺物包含層である。上面からは前期後葉～末葉の遺物が多く出土する。

Ⅵ層：10～15cm　7.5YR3/4暗褐色シルト。Ⅵ層は分層できる時のみａ・ｂを付したが、分層できないときは単にⅥ層とした。Ⅵ層最上部より約6,300年前の鬼界カルデラから噴出した





1　7.5YR4/1 褐灰色シルト　粘性、しまりやや無し。小礫を少量含む。
2　7.5YR3/1 黒褐色シルト　粘性、しまりややあり。
3　7.5YR2/3 極暗褐色シルト　2層に沼沢火山灰層が少量含まれる。粘性、しまりややあり。
4　3層と沼沢火山灰層の混合土　ブロック状に混ざり合う。
5　3層と沼沢火山灰層の混合土　ブロック状に混ざり合う。沼沢火山灰層が多くなる。
6　暗褐色シルト　3層と沼沢火山灰層の混合土。
7　礫層

第10図　基本層序と沢Ａの土層堆積図

鬼界アカホヤ火山灰（K－AH）が検出されている［(株)古環境研究所2003］。早期の遺物包含層である。

Ⅵａ層：0～5cm　　7.5YR3/3暗褐色シルト　Ⅵｂ層よりやや明るい。

Ⅵｂ層：10～15cm　7.5YR3/4暗褐色シルト　Ⅵａ層よりやや暗い。

Ⅶ層：5～15cm　7.5YR4/3・4/4褐色砂質土　Ⅷ層への漸移層。地山漸移層。

Ⅷ層：30～40cm　10YR5/6・5/8黄褐色砂　常浪川の洪水で堆積した砂。地山。

Ⅸ層：砂礫層　常浪川により堆積した砂礫。地山。

4　遺構の層位と時期

沼沢火山灰層は西側の沢地部分を除き、ほぼ全面にわたり確認できた。その層厚は、沼沢火山灰の純層（Ⅳ層）が約50～70cm、沼沢火山灰の漸移層（Ⅲ層）が約15～25cmである。このⅢ・Ⅳ層を合わせると約65～95cmの厚さになり、北野遺跡の上層と下層を明確に区別する間層となっている。

上層（Ⅰ・Ⅱ層）は約20～40cmを測り、古いものでは縄文時代前期末葉（大木6式新段階）、中期初頭（大木7a式）の土器がごく少数出土している。これ以降中期前葉～中葉、中期後葉、中期末葉～後期初頭の集落跡に伴う遺構・遺物が、また、古代、中世、近世～現代までの遺構・遺物も検出された。しかし、上層は土層の堆積が薄いことや耕作等の撹乱から、これらの遺構・遺物は混在し同一層面で検出した。主に遺物はⅠ～Ⅱ層から出土し、遺構は上層の地山に相当するⅢ層、Ⅳ層上面で確認・検出した。なお、遺構は縄文時代と中世以降では覆土のしまり、色調に違いがあることから、その多くは時期の判別ができた。

沼沢火山灰層は、前述のように厚く堆積するが、層状に堆積していることから緩やかな湛水状態での堆積と断定できる。このため、沼沢火山灰層直下では、湛水以前の地形が明確に確認された。また、同直下（Ⅴ層上面）では前期末葉（大木6式）の遺物、半埋没状態の遺構、住居跡の周堤・SK1052の掘り上げ土等の遺構構築時の盛土や廃土も検出された。この面で検出された遺構の覆土は、基本層Ⅴ層に近似するものであり、前期前葉～末葉の遺構と推定できる。

Ⅴ層（黒褐色シルト）とⅥ層（暗褐色シルト）では、層序の明るさに違いが認められた。Ⅵ層・Ⅶ層（地山漸移層）・Ⅷ層（地山層）で確認された遺構には、Ⅴ層上面やⅤ層中で確認された遺構と明らかに覆土の明るさ、しまりに違いが認められるものがあった。これらの遺構は、前期以前に構築された遺構と判断される。なお、科学分析の結果、Ⅵ層最上部より約6,300年前の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K－AH）が検出されている。しかし、分析結果は調査終了後に出されたため、発掘調査時ではしっかりとした意識の上での調査はなされなかった。おおむねⅤ層上面・Ⅴ層中で確認された遺構は縄文時代前期前葉～末葉に、Ⅵ～Ⅷ層で確認された遺構は、その多くは早期の遺構と推定している。

これまで述べたように沼沢火山灰層の上下で前期末葉（大木6式）の土器が出土している。下層では大木6式古段階［髙橋・荒谷2003］、上層では1点のみであるが大木6式新段階が出土している。したがって、沼沢火山層の二次堆積は、大木6式古段階から新段階の過程で比較的短期間で堆積したものと推定できる。土器の出土状況は沼沢火山の降下火山灰が堆積する福島県磐梯町法正尻遺跡［松本ほか1991］、会津高田町鹿島遺跡［丹野・本間1991］等でも同様である。

なお、上層では沼沢火山灰堆積後、一時遺跡内での活動の痕跡が少なくなるものの中期前葉（大木7b式期）以降、再び活動が活発になることが遺構・遺物の検出状況から推定できた。

第Ⅳ章　遺　　構

1　概　　要

第Ⅲ章で述べたように北野遺跡上層では、沼沢火山灰の二次堆積層（基本層Ⅳ層）の堆積後に構築された遺構が検出された。縄文時代中期前葉～中葉、中期後葉、中期末葉～後期初頭、後期中葉の集落跡に伴う住居跡や土坑、中世以降と推定される鍛冶遺構・掘立柱建物・溝、近世以降の墓壙・土坑・溝等である。図面図版２は主に基本層序Ⅰ～Ⅱ層で見つかった礫を中心とした遺構が、図面図版３は主に基本層序Ⅲ～Ⅳ層上面で確認された遺構が図示してある。したがって、図版２の遺構が図版３の遺構より上位に構築されたものが多い。

図面図版４はこの両者を合わせた図面で、第11図は遺構の種別ごとに色分けしたものである。それによれば全体的な遺構の分布は、13・14Bグリッドを中心とし、10～17列・Ｂ～Ｄ列の範囲に半円状に分布する。この範囲に収まる遺構は、縄文時代中期末葉～後期初頭の集落跡に伴う住居跡・土坑・埋設土器がほとんどで、これに中期前葉～中葉の土坑（フラスコ状土坑）が加わる。したがって、遺構を見る限り縄文時代中期末葉～後期初頭の集落跡に伴う遺構が主体を占めている。

上層で検出された遺構の種別は、時期的な検討があるものの住居跡（SI）64基、土坑（SK）328基、埋設土器132基、焼土18基、集石22基、掘立柱建物（SB）１棟、溝（SD）９条、性格不明遺構（SX）５基、近世墓壙２基、その他のピット（P）多数である。

2　記述の方法

A　はじめに

本遺跡の発掘調査は上層・下層合わせて３年間にわたったが、おおむね上層２年、下層１年である。上層・下層ともにこの地域の縄文時代の拠点的な集落跡を調査したために、極めて多くの遺構が検出された。特に上層では縄文時代中期前葉～中葉、中期後葉、中期末葉～後期初頭、後期中葉の集落跡に伴う住居跡や土坑・埋設土器を中心に多くの遺構が検出された。これら個々の遺構の説明にあたっては、本文・観察表・図面図版・写真図版等を用い、その記述や表記を遺構種別ごとに統一した。

B　遺構名の略号

発掘調査の時から遺構の種別によっては、下記のように考古学用語として用いられている遺構名の略号を使用した。本報告書でもそのまま遺構名として使用している。

SI……竪穴住居跡・平地住居跡・炉跡のみ検出され、住居跡の炉と判断できるものなど住居跡と推定したもの。

SK……一般的に土坑と呼称されているもの。

SB……掘立柱建物と呼称され、平面上の柱穴配置が長方形になるもの。

SD……一般的に溝といわれているもの。住居跡の周溝（壁溝）は含まない。

SX……分類不明な遺構である。

P……柱穴を含む一般的にピットと言われているもの。

なお、埋設土器・焼土・集石・近世墓壙は、略号を用いず「10B－１号埋設土器」「9D－２号集石」「8B－１号焼土」「18C－１号墓壙」などと略号を用いずに、遺構名をそのまま表記した。

C　遺構番号

遺構番号は下記のように発掘調査現場で種別ごとに使い分けた。発掘調査は複数名の調査員で行ったため、一部の遺構で番号の使い分けが統一されていないものも見られる。しかし、遺構番号の変更は、遺構名・注記記号等に混乱が生じるため、発掘調査で使用した番号をそのまま使用した。また、欠番になっている番号はそのまま欠番とし、番号が重複する場合は、番号の後にａ・ｂを付け区別した。

①遺跡全体で通し番号としたもの……SI・SK・集石の１部[1)]・SB・SD・SXである。欠番を含め１～482までである。なお、下層は千番台の番号で1001～1077までである。

②大グリッド単位で番号を付けたもの……埋設土器・焼土・集石の一部[2)]・近世墓壙[3)]である。ピットも大グリッド単位で番号を付けたが、非常に多数であるため前記の遺構とは別にした。なお、下層も上層と同じように焼土・集石・遺物集中地点とピットを区別し番号を付けた。

D　観察表及び本文の記載項目

本報告書で記載する観察表及び本文の記載項目の共通項目について説明する。

位　　置　住居跡・溝等の大規模な遺構は大グリッドで、埋設土器・土坑・焼土等の小規模な遺構は小グリッドで表記した。

規　　模　原則として、遺構の長さ（長径）は最大長を記入し、幅（短径）は長さに直交する最大幅とした。深さは遺構確認面からの深さである。なお、規模の表記として小型の遺構は「cm」単位で、大きい遺構は「m」単位を用いた。

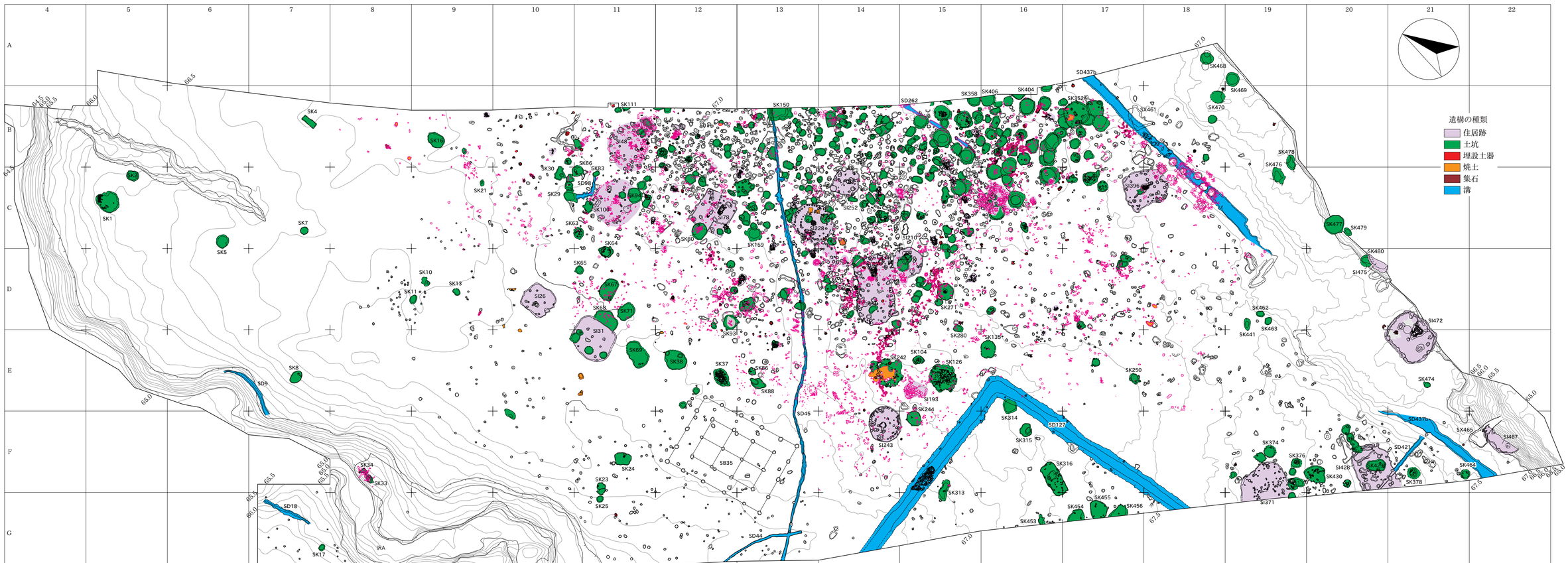
出土遺物　それぞれの遺構から出土した遺物であり、土器は数量／重量、石器は器種別の数量、土製品・石製品・古代以降の遺物は数量を記入した。また、上層は沼沢火山灰の二次堆積層上に立地するため、調査で出土した礫はすべて搬入礫であることから、数量／重量を記入した。なお、実測図の掲載遺物は、土器・土製品、石器・石製品、古代以降の遺物の種別ごとに掲載した遺物番号を括弧付の番号で記入した。

重複関係・新旧関係　遺構同士の重複や切り合い関係を分かる範囲で、古い遺構から新しい遺構へ「→」で示した。

時　　期　遺構の時期は、主に伴出遺物に基づいて決定した。このほか遺構の形態、重複関係、遺跡内における位置関係なども考慮した。できる限り詳細な時期記入に努めたが、時期が限定できない場合は例えば「中期末葉～後期初頭」のようにある程度の時期幅をもたせたものもある。

備　　考　観察項目に無いもので、各遺構の特徴で必要な事柄を記入した。

1）比較的規模の大きい集石である。
2）比較的規模の小さい集石である。
3）近世～昭和にかけての墓壙は、数百基存在したと推定されるが個人所有（管理）の墓壙であることや調査対象に含まれないことから２基のみ調査しただけである。調査した２基は所有者不明で、基壇と墓壙内部をサンプル的に記録した。



第 11 図　種類別遺構分布図

E　そ　の　他

発掘調査終了から既に10年以上が経過している。この間人事異動等で発掘調査にかかわった職員が大幅に入れ替わった。遺構の記述は調査日誌、遺構カード、遺構実測図、写真等により記述したが、これらの記録類の不備に対処できないところもあった。

3　遺構各説

A　住　居　跡

1）住居跡の認定

住居跡の認定基準は、次のようにした。

竪穴構造をもつ住居跡：考古学の用語として一般的に定着している「竪穴住居」である。柱穴・炉・床面・壁・壁溝等を備えている。

竪穴構造をもたない住居跡：考古学の用語として一般的に定着している「平地住居」である。竪穴構造でないため壁・壁溝は検出されないが、柱穴・炉・床面等が検出されている。しかし、本遺跡では床面は存在するが、その範囲を確定できないものが多い。また、他の住居跡との重複が激しく炉跡や床面周辺にピットが存在するが、あまりにも多いため確定できないものが多かった。

炉のみ検出された住居跡：床面が硬化していないことや遺構が密集していて柱穴が確定できない遺構で、炉跡のみ検出された住居跡である。本遺跡や周辺の同時期の調査例から前述の平地住居の炉跡と推定できる。

このほか、焼土のみ検出された遺構も存在したが、炉跡と断定できず、住居を構成する柱穴、床面等も検出されないこと、屋外炉や廃棄焼土などとの区別もつかないことから「焼土」遺構として取り扱った。

2）住居跡の記載項目

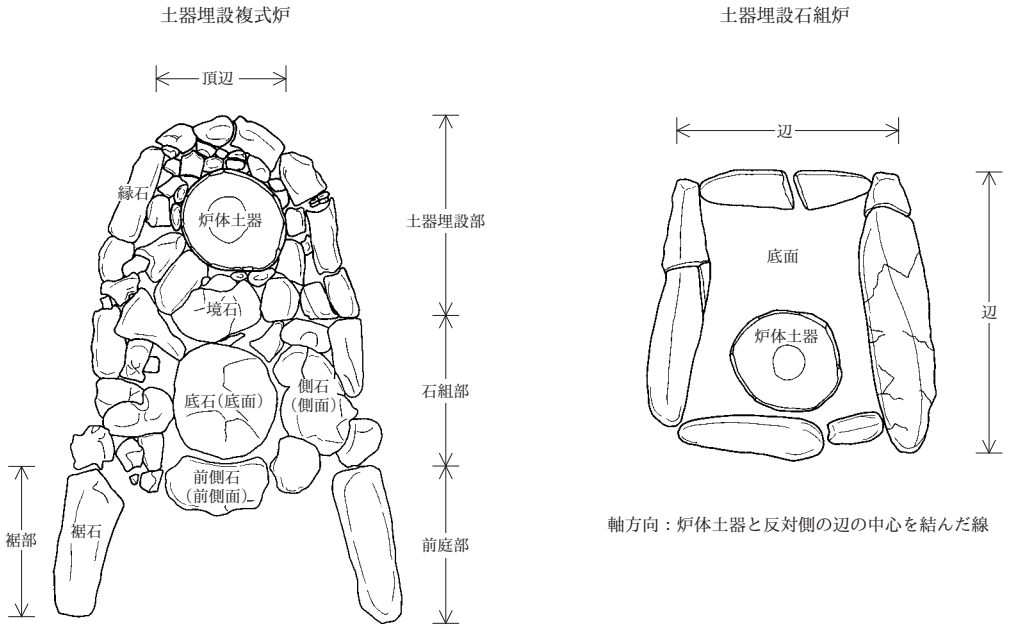
住居跡の記述は観察表を用いず、本文にて項目の箇条書きとした。主な記載項目については下記のとおりである。

検 出 状 況　遺構が極めて多く複雑な重複関係であったことや掘り込みの無い住居が多かったことなどから、炉のみ検出された住居跡、柱穴の確定できない住居跡が極めて多い。したがって、検出状況を記述することにより住居跡と認定した根拠を簡単に述べた。

平面形・規模・覆土　竪穴構造をもつ住居跡は記述したが、竪穴構造をもたない住居跡、炉のみ検出された住居跡では不明が多い。不明な記載項目については、特に触れる必要が無い限り、項目自体を削除した。

炉　住居跡とした遺構の多くは、炉をもって住居跡と認定したものが多い。炉は集落跡の時期から「土器埋設複式炉」「土器埋設石組炉」がほとんどである。これらの炉は多少複雑な構造をもつため、記載にあたっては特に用語の統一に努めた。また土器埋設複式炉は前庭部側を集落の中心部に向けて構築し、土器埋設石組炉は炉体土器を集落の中心部寄りに設置することが分かったため、これをもとに長軸（炉軸）方向を求めた。部位名称と長軸（炉軸）方向の求め方は、第12図のとおりである。

柱　　穴　炉の周辺や住居跡の範囲と推定できる場所からは、極めて多数のピットが検出されている。



第12図　土器埋設複式炉と土器埋設石組炉の部位名称と長軸（炉軸）方向

あまりにも多すぎて、発掘調査では柱穴の確定ができず、整理の過程で分かったものが多い。これらの確定できた柱穴について記述した。

時　　期　前述のように主に伴出遺物に基づいて決定した。土器の場合は土器形式で時期を示した。しかし、中期末葉～後期初頭の住居跡では時期決定の難しい粗製土器が多い。したがって、炉の形状から決定したものもある。中期末葉～後期初頭の炉は、土器埋設複式炉から土器埋設石組炉へ変遷することが明らかである。どの段階から変わるかは必ずしも明確ではないが、土器埋設複式炉の場合は中期末葉、土器埋設石組炉の場合は後期初頭と記述した。

以下、住居跡と認定された遺構について記述する。

3）個別住居跡の説明

SI26（図面9・10・206）

位　　置　調査区中央やや北西寄りの10Dに位置する。

検出状況　基本層Ⅲ層上面にてプランを確認したが、Ⅱ層削平中より遺物が出土していた。

平 面 形　隅丸長方形を呈する。

規　　模　確認面からの深さ23cm、長軸4.0m、短軸3.6m、面積12.2m^{2}を測り、長軸方向はN－11.5°－Eである。

覆　　土　上層は基本層Ⅱ層が、下層はⅡ層に近似した暗褐色土が堆積していた。いずれも粘性、しまりの無い覆土である。

炉　　撹乱を受けているものの中央部やや南西寄りに76×45cmの範囲、厚さ6cmで焼土を検出した。炉内には径25cm、深さ17cmの小ピットが認められる。

柱　　穴　大小あわせて10基のピットを検出した。いずれも炉の周辺に存在するが、並びは西寄りに

片寄る。径20～30cm、深さ25～45cm程である。P10は南壁際にあり、径70×58cm、深さ33cmと他のピットに比べやや大きく、浅い。

重複関係　無し。

出土遺物　縄文土器44点・1.27kg（1・2）、石器：敲磨石類3点・石皿1点・石核1点・剥片類25点、古代以降の砥石4点が出土している。また、搬入礫352点・93.871kg（うち被熱礫84点・16.833kg）が出土している。

時　　期　古代以降の砥石から縄文時代の遺構ではない。

そ の 他　SI31・SB35・SD127とは重複関係は無いものの、主軸方向はほぼ同じ北方向を向く。

SI31（図面12・13・206・207）

位　　置　調査区のほぼ中央10E・11D～Eに位置する。

検出状況　調査初期、土層・遺構・遺物を把握するため、遺跡中央部に掘削したトレンチから竪穴状の落ち込みを確認する。Ⅲ層上面にてプランを検出したが、Ⅱ層中より掘り込まれている。

平 面 形　隅丸長方形を呈する。

規　　模　確認面からの深さ46cm、長軸5.3m、短軸4.8m、面積22.0m^{2}を測り、長軸方向はN－4.5°－Eである。

覆　　土　4層に識別されるが、いずれも粘性・しまりの無い土で覆われ、自然堆積である。また、礫の分布が北東側に高く、南西側に低いことから、埋没過程で礫の投げ込みが行われたものと推定できる。

炉　　中央部やや北西寄りに70×40cmの範囲、厚さ4cmで焼土を検出した。地床炉である。

柱　　穴　ピットは炉の周辺に7基検出され、西寄りに片寄る。いずれも径は30cm前後であるが、深さは30～90cmとばらつきがある。P1・2・3・5が炉を囲んで方形状に並ぶこと、深さもしっかりしていることから柱穴と考えている。

重複関係　遺構内部でSK36・41・42・43と東壁でSK68と重複する。SK68を切り、SK41・42・43は覆土内で確認されたため、本遺構より新しくなる。古　SK68→**SI31**→SK36・41・42・43　新。

出土遺物　覆土上層から下層まで縄文土器570点・8.53kg（3～5）、石器：石鏃失敗品1点・不定形石器3点・箆状石器1点（215）・石錘1点・磨製石斧2点・敲磨石類14点・石皿2点・砥石2点・石核2点・剥片類70点、古代以降の砥石7点が出土している。また、搬入礫1,002点・192.989kg（うち被熱礫310点・98.174kg）が出土している。

時　　期　古代以降の砥石から縄文時代の遺構でない。

そ の 他　SI26と規模は異なるが、長軸方向や炉の位置、ピットの位置等において極めて近似する。また、SK41は土坑として処理したが、SI26のP10に位置・形状が似ている。SI26とSI31は類似遺構と推定される。SI26・SB35・SD127とは重複関係は無いものの、主軸方向はほぼ同じ北方向を向く。

SI47（図面14・15・207・208）

位　　置　調査区の中央やや北よりの11Cに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に土器及び礫を確認し、11C－7号埋設土器として調査する。その後、炉体土器と石組みということが判明し、また炉の周辺の礫が住居の壁際に敷かれた敷石と推定されたため、複式炉を伴う敷石住居として調査する。

平 面 形　壁際に敷かれた礫を見る限り、楕円形と推定されるが明確でない。

炉　　撹乱を受けているものの、土器埋設部と石組部の一部が検出されている。長軸方向はN－81.5°－Eである。

柱　穴　11C－P9・18・99・100・101が柱穴と推定され、五角形状に並ぶ。

その他の施設　炉と同レベルで、柱穴のやや外側に扁平礫が断続的に敷かれていた。壁際に敷かれた敷石と推定している。

重複関係　SK97・100と重複する。新旧関係は不明である。

出土遺物　炉及びその周辺より縄文土器282点・6.13kg（6～8）、石器：石鏃1点・敲磨石類3点・石皿7点・砥石1点・剥片類4点、P9より縄文土器3点・40g、P99より縄文土器4点・80g、P101より縄文土器5点・305g、剥片類1点が出土している。また、敷石に使用された礫など67点・41.536kg（うち被熱礫51点・14.99kg）が出土している。被熱礫は炉材に使用された礫がほとんどである。

時　期　炉体土器から大木10式期である。

SI48（図面14・15・197・208）

位　置　調査区やや北より11B～Cに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に扁平礫が多数確認された。まばらながらも柄鏡状に礫が配置されていることから柄鏡形敷石住居として調査する。

平面形　柄鏡形を呈する。

規　模　敷石部分は長軸7.4m、短軸4.7m、面積24.7m^{2}を測り、長軸方向はN－64.5°－Eである。

炉　　木根や耕作等の撹乱で炉石は原位置を保っていないと考えられるが、土器埋設石組炉と推定できた。

柱　穴　ピットは多数検出されているが、不明である。

重複関係　SK84・85・112・113、11B－5号埋設土器と重複する。いずれも敷石の礫が乗っている。古　SK84・85・112・113、11B－5号埋設土器→**SI48**　新。

出土遺物　縄文土器：床面とほぼ同レベルで336点・6.955kg（10・11）、炉より77点・1.59kg（9）、石器：不定形石器1点・両極剥離痕のある石器1点・磨製石斧1点（233）・敲磨石類8点・石皿9点（382）・石核2点・剥片類28点が出土している。また、搬入礫191点・872.99kg（うち被熱礫33点・115.578kg）が出土している。

時　期　炉体土器から大木10式期である。

SI49（図面9・10・209）

位　置　調査区の中央やや北よりの9Bに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に炉のみを確認する。

炉　　東側は撹乱のため確認できないが、土器埋設石組炉である。炉体土器は3個体（12・14・15）が入れ子状に埋設され、東側に寄っている。石組部分は東辺が破壊されているものの、約110cmの方形状と推定される。北辺・南辺は土器片（13）を重ねて構築している。軸方向はN－61°－Wである。

柱　穴　Ⅳ層上面でピット2基を検出した。柱穴と推定される。

重複関係　無し。

出土遺物　炉体土器・石組部から縄文土器68点・3.335kg（12～15）、搬入礫168点・6.182kg（うち被熱礫162点・4.04kg）が出土している。

時　期　炉の形状、出土土器から中期末葉～後期初頭である。

SI50（図面21・22・209）

位　　置　調査区のほぼ中央、12B・Cの境に位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に炉のみ確認する。

炉　　長軸約85cm、短軸約60cmの土器埋設複式炉で、長軸方向はN－97.5°－Eである。石組部の先端部・前庭部は撹乱のため破壊を受けるが、これ以外は扁平大型礫5枚を底部に2枚、側部に3枚組み合わせ構築している。土器埋設部の炉体土器は長軸方向に合わせ2個縦列させている。石組部に近い土器には一部礫が巡るが、これ以外は炉体土器に礫が巡らない。

柱　　穴　周辺から多数のピットが検出されているものの、P28・66・102・101・75・90が柱穴と推定される。

重複関係　SK153と重複するが、P102の上に構築されている。古　**SI50**→SK153　新。

出土遺物　炉体土器・石組部から縄文土器55点・1.89kg（16・17）、剥片類3点、搬入礫93点・32.205kg（うち被熱礫53点・18.57kg）が出土している。

時　　期　炉体土器から大木10式期である。

SI51（図面14・15・209）

位　　置　調査区のほぼ中央、11C・12Cの境に位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に炉跡と思われる石組みを確認する。

炉　　土器埋設石組炉である。被熱で割れているが、4個の長大礫を1辺約75～80cmの方形状に組み構築している。軸方向はN－103°－Eである。炉体土器は入れ子状に三重に巡る部分もあり、東寄りに埋設されている。

柱　　穴　炉周辺よりピットが多く検出されたが特定できず、不明である。

重複関係　SI136と重複するが、上に乗っている。古　SI136→**SI51**　新。

出土遺物　炉及び炉周辺から土器385点・6.71kg（18）、石器：石鏃1点・不定形石器1点・両極剥離痕のある石器1点・敲磨石類3点・石皿1点・石核1点・剥片類20点、搬入礫117点・32.403kg（うち被熱礫47点・22.38kg）が出土している。

時　　期　中期末葉～後期初頭の範囲に収まる。

SI52（図面37・38・209・210）

位　　置　調査区のほぼ中央、14C・15Cの境に位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に炉を確認した。

炉　　長軸約150cm、短軸約85cmの土器埋設複式炉で、長軸方向はN－45°－Eである。石組部の底面、土器埋設部との境は大きな扁平礫、これ以外は大小礫を組み合わせ構築している。土器埋設部は礫が巡るが、炉体土器は抜かれたためか不明であった。前庭部の裾石は、片側が撹乱のため無いものの、残りは径11cm、長さ40cmの長大礫を「ハ」の字状に配置している。

柱　　穴　炉周辺に多数のピットが存在するものの特定できなかった。

重複関係　SK342と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物　炉より土器15点・895g（19）、石器：不定形石器1点・敲磨石類3点・砥石1点・剥片類4点、搬入礫80点・63.053kg（うち被熱礫54点・37.61kg）が出土している。

時　　期　炉の形態から中期末葉と推定される。

SI53（図面37・38・210）

位　置　調査区のほぼ中央、15Cに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に炉を確認する。

炉　長軸約120cm、短軸約80cmの土器埋設複式炉で、長軸方向はN－43.5°－Eである。石組部の底面、土器埋設部及び前庭部との境石は扁平な大礫、これ以外は大小礫を組み合わせ構築している。土器埋設部は二重の礫が巡るが、外側は扁平楕円礫を横に立てて巡らせている。前庭部も前述の石組部との境石のほか、10cm程度の礫が並び、裾石は10×20cm程度の礫が「ハ」の字状に配置されると思われる。

柱　穴　炉周辺から多数のピットが検出された。P1・2・5・100とSK362内にあったと推定されるピットの5基が柱穴と思われ、いずれも径50～70cm程度の大きさである。

重複関係　SK362・15C－4号・5号埋設土器と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物　炉より土器42点・4.74kg（20）、石器：敲磨石類3点・石皿2点・石核1点・剥片類10点、搬入礫188点・84.987kg（うち被熱礫131点・63.335kg）、P2より土器3点・40g、P5より土器1点・50gが出土している。

時　期　炉体土器から大木10式期である。

SI54（図面52・53・210）

位　置　調査区のほぼ中央、15Cに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に炉を確認する。

炉　長軸約110cm、短軸約60cmの土器埋設複式炉で、長軸方向はN－12°－Eである。石組部の底面・側面は扁平な大礫を5枚組み合わせ構築している。土器埋設部も破壊を受けているものの、大礫が巡ると思われる。外側は扁平楕円礫を横に立てて巡らせている。前庭部は認められない。

柱　穴　炉周辺から多数のピットが検出された。P16・17・101・102・103の5基が柱穴と推定され、炉を中心に五角形状に並ぶ。いずれも径30～50cm程度の大きさである。

重複関係　15C－3号・9号埋設土器と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物　炉及び炉周辺から土器24点・5.345kg（21～23）、搬入礫66点・46.014kg（うち被熱礫54点・37.61kg）、P16から土器14点・300g、P17から土器8点・130gが出土している。

時　期　伴出土器から大木10式期である。

SI55（図面29・30・210）

位　置　調査区のほぼ中央、13Cに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に炉を確認する。

炉　土器埋設石組炉である。被熱の割れや撹乱を受けているが、礫を1辺約70cm程度の方形状に組み構築したものと推定される。軸方向は不明である。炉体土器も撹乱を受け、炉内に散乱していた。

柱　穴　炉周辺にいくつかのピットを検出したが、確定できなかった。

重複関係　SK132・133と重複するが、132の上に乗っている。古　SK132→SK133→**SI55**　新。

出土遺物　炉より土器55点・1.415kg（24）、石器：敲磨石類1点、被熱炉石6点・21.64kgが出土している。

時　期　炉の形状から後期初頭と推定される。

SI56（図面35・36・210）

位　　置　調査区のほぼ中央、13Dに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に被熱礫と土器を確認する。

炉　　13D24に被熱礫と土器の集中が確認された。しかし、撹乱が激しく、遺物が散乱しているものの下部において焼土が認められ、かろうじて炉跡と判断できた遺構である。したがって、詳細は不明である。

柱　穴　炉跡と推定される周辺からのピットは非常に少ない。柱穴と確定できるものは無い。

重複関係　無し。

出土遺物　炉跡と推定された地点及びその周辺から土器190点・4.0kg（25～29）、石器：両極剥離痕のある石器1点・敲磨石類6点・石皿3点・剥片類2点、搬入礫231点・29.013kg（うち被熱礫193点・24.314kg）が出土している。

時　　期　中期末葉～後期初頭の範囲に収まる。

SI58（図面29・30・199・210・211）

位　　置　調査区のほぼ中央、14Dに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に方形の石組みを確認する。

炉　　土器埋設石組炉である。被熱で一部割れているが、4個の扁平長大礫を1辺約50～55cmの方形状に組み構築している。軸方向はN－79°－Eである。炉体土器は東寄りに埋設されている。

柱　穴　炉周辺から多くのピットが検出され、13D－P6・14D－P21・100・101を柱穴と推定したが、明確でない。

その他の施設　西側の炉石外側には径15cm、長さ33cmの立石と埋設土器が認められる。土層断面から炉に伴うものである。

重複関係　SI59・129・SK338と重複するが、SI59が上に、SI129が下に構築されている。SK338とは新旧関係は不明である。古　SI129→**SI58**→SI59　新。

出土遺物　炉及び炉周辺から土器57点・1.21kg（30・31）、石器：敲磨石類1点、砥石1点（412）、搬入礫25点・38.387kg（うち被熱礫20点・25.527kg）、13D－P6より剥片類1点・被熱礫1点・13g、14D－P21より不定形石器1点・敲磨石類1点が出土している。

時　　期　炉体土器から後期初頭である。

SI59（図面29・30・199・211）

位　　置　調査区のほぼ中央、13D・14Dの境に位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に方形の石組みを確認する。

炉　　土器埋設石組炉である。被熱が激しく破砕しているが、4個の扁平大礫を1辺約70～90cmの方形状に組み構築している。軸方向はN－58.5°－Eである。炉体土器は東寄りに埋設している。また、扁平礫も東側は横に立てた状態で組まれており、これ以外は平らに並べたものとは異なる。

柱　穴　炉周辺から多くのピットが検出され、13D－P7・100、14D－P102・103を柱穴と推定したが、明確でない。

重複関係　SI58・129と重複するが、これらの上に構築されている。古　SI129→SI58→**SI59**　新。

出土遺物　炉より土器31点・1.21kg（32）、石器：石鏃失敗品1点・石皿2点・剥片類5点、石製品1点（512）、搬入礫64点・10.155kg（うち被熱礫42点・7.283kg）が出土している。

時　　期　炉の形状、切り合い関係から後期初頭と推定される。

SI60（図面37・38・211）

位　　置　調査区のほぼ中央、14Dに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に鉤形の石組み、炉体土器、焼土を確認する。

炉　　撹乱のため、東・南側の石組みは破壊されているが、遺存部分より土器埋設石組炉と推定できる。扁平長大礫を含む礫を方形状に組み構築したものと推定される。炉体土器は東寄りに埋設されている。

柱　穴　炉周辺に多くのピットを検出したが、確定できなかった。

重複関係　SI206・208・339と重複し、203号集石・14D－8号集石と近接する。SI206・208・339の上に構築され、203号集石・14D－8号集石とは新旧関係が不明である。古　SI206・208・339→**SI60**　新。

出土遺物　炉より土器64点・2.205kg（33）、石器：石皿1点・剥片類2点、被熱礫8点・7.7kgが出土している。

時　　期　炉の形状、切り合い関係から後期初頭と推定される。

SI61（図面14・16・211）

位　　置　調査区のほぼ中央、12C・12Dの境に位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に被熱礫、炉体土器、焼土を確認する。

炉　　木根や耕作等の撹乱のため、石組みの一部、炉体土器の底部、炉底面の焼土を検出したのみである。炉埋設石組炉で、炉体土器は集落跡の中心部の東寄りに埋設されている。南側の石組みは扁平大礫を使用している。

柱　穴　炉周辺にいくつかのピットを検出したが、確定できなかった。

重複関係　無し。

出土遺物　炉より土器17点・375g（34）、石皿2点、搬入礫25点・7.7kg（うち被熱礫8点・5.01kg）が出土している。

時　　期　炉の形状から後期初頭と推定される。

SI62（図面37・38・211・212）

位　　置　調査区のほぼ中央、15Dに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に方形の石組みを確認する。

炉　　土器埋設石組炉である。基本的に4個の扁平長大礫を1辺約40cmの方形に組み構築している。軸方向はN－65°－Eである。炉体土器は石組み内部の全体に埋設され、上部は入れ子状に土器が二重に巡る。

柱　穴　炉周辺にいくつかのピットを検出したが、確定できなかった。

重複関係　南側は207号集石と近接するが、新旧関係は不明である。

出土遺物　炉より土器49点・2.41kg（35～37）、被熱礫7点・20.87kgが出土している。

時　　期　炉の形状、遺構確認面の高さから後期初頭と推定される。

SI72（図面9・10・212）

位　　置　調査区の中央やや北寄りの10Bに位置する。

検出状況　Ⅱ～Ⅲ層中に遺存状況の極めて悪い石組みを確認する。

炉　　木根や耕作等の撹乱のため遺存状況は極めて悪かったものの、東側の礫、炉体土器の底部は原位置を保っていたものと推定される。土器埋設石組炉で、炉体土器は東寄りに埋設されている。

柱　穴　炉周辺にいくつかのピットを検出したが、確定できなかった。

重複関係　無し。

出土遺物　炉及び炉周辺より土器59点・1.535kg（38）、剥片類1点、被熱礫6点・7.933kgが出土している。

時　期　中期末葉～後期初頭の範囲に含まれる。

SI73（図面14・16・212）

位　置　調査区の中央やや北寄りの11Bに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に石組みと思われる被熱礫を確認する。

炉　　木根や耕作等の撹乱のため遺存状況は極めて悪い。被熱礫、炉体土器の一部、焼土、炉の掘形が検出された。掘形をみる限り、土器埋設複式炉と推定される。長軸方向の詳細は明らかでないものの、集落の中心方向を向く。

柱　穴　炉周辺にいくつかのピットを検出したが、確定できなかった。

重複関係　SK82と重複するが、上に構築されている。古　SK82→**SI73**　新。

出土遺物　炉及び炉周辺より土器44点・940g（39）、石器：不定形石器1点・石製品1点、搬入礫18点・15.62kg（うち被熱礫4点・14.19kg）が出土している。

時　期　炉の形状から中期末葉と推定される。

SI74（図面37・38・212）

位　置　調査区の中央やや東寄りの15Bに位置する。

検出状況　Ⅱ～Ⅲ層削平中に被熱礫を確認する。

炉　　撹乱により南から東側の礫は確認できないものの、土器埋設部と石組部の一部が検出され、土器埋設複式炉と推定できる。掘形は長軸約90cm、短軸約55cmを測る。土器埋設部の遺存状況から軸方向はN－36°－Eである。土器埋設部の礫をみる限り、扁平な長大礫を横に立て構築している。土器埋設部の土器は大型の深鉢を倒立させて埋設している。底部は打ち欠いている。前庭部は認められない。

柱　穴　炉周辺にいくつかのピットを検出したが、確定できなかった。

重複関係　南西側でSK265と接するが、新旧関係は不明である。

出土遺物　炉より土器29点・5.075kg（40）、石器：不定形石器1点・敲磨石類1点・剥片類2点、被熱礫7点・18.5kgが出土している。

時　期　炉の形状から中期末葉と推定される。

SI76（図面14・16・212）

位　置　調査区の中央やや北寄りの12Bに位置する。

検出状況　12B－3号埋設土器を調査中に、下部より炉を確認する。

炉　　長軸約120cm、短軸約80cmの複式炉で、長軸方向はN－102°－Eである。被熱により破砕しているが石組部の底面・側面は扁平な大礫を組み合わせ構築している。土器埋設部も大礫が巡る。前庭部は扁平大礫を敷き、両側に長大礫を並べ裾石としている。

柱　穴　炉周辺から多数のピットが検出された。P11・20・21・23・100の5基が柱穴と推定され、炉を中心に五角形に並ぶ。いずれも径20～50cm程度の大きさである。

重複関係　本遺構の上に12B－3号埋設土器、下にSK89が存在する。古　SK89→SI76→12B－3号埋設土器　新。

出土遺物　炉及び炉周辺より土器36点・2.265kg（41・42）、石器：石皿1点・剥片類5点、搬入礫56点・31.557kg（うち被熱礫42点・24.817kg）、P11から土器1点・10g、剥片類2点、P20から土器6点・60g、剥片類1点、P23から土器4点・60g、石匙1点、搬入礫5点・30gが出土している。

時　　期　炉の形状から中期末葉と推定される。

SI78（図面21・22・213）

位　　置　調査区のほぼ中央、12Cに位置する。

検出状況　SK80の調査により西側のプランを確認し、これを基に一辺約4.5mの方形状の落ち込みを検出する。

平 面 形　南西隅部は床面が高くなるものの方形を呈するものと推定される。

規　　模　東西約4.8m、南北約4.4m、確認面からの深さ約15cm、面積約20.9m^{2}を測り、長軸方向はN－92°－Eである。

覆　　土　黒褐色土を基調とする覆土に覆われ、3層に識別される。

炉　　住居内のほぼ中央やや南東寄りに土器埋設複式炉が存在する。長軸約115cm、短軸70cm、長軸方向はN－89°－Eである。石組部及び土器埋設部は基本的に扁平な大礫を用い、隙間に破砕礫を組み合わせ構築している。前庭部は認められない。

柱　　穴　プラン内から23基のピットが検出された。周囲で他の住居跡と重複しないことから、その多くは柱穴と推定される。P31・37・48が主柱穴と推定され、いずれも掘形が径40cm以上の大型であり、炉を囲んで三角形に並ぶ。

その他の施設　東壁沿いのほぼ中央に35cm空けて、棒状長大礫の立石が認められた。立石1が径10cm・長さ42.5cm（地中に14cm、床面上に28.5cm）、立石2が径18cm・長さ51cm（地中に24cm、床面上に27cm）である。

重複関係　南西側でSK80・155・156と重複する。SK80に切られ、SK155・156とは新旧関係は不明である。炉の形状、竪穴住居、遺構面の低いレベルから、この近辺では最も古い遺構と推定される。

出土遺物　炉及び炉周辺、床面上の覆土から多くの遺物が出土している。炉周辺、床面上の覆土のものは住居跡の落ち込みに廃棄されたものと推定される。土器888点・19.415kg（43～53）、石器：石鏃2点（3）・石鏃失敗品1点・不定形石器1点・敲磨石類7点・石皿5点・砥石2点・剥片類82点、搬入礫292点・168.812kg（うち被熱礫159点・77.519kg）、P22より土器2点・20g、P31より土器6点・160g、P33より土器1点・5g、剥片類3点、P41より剥片類2点、P44より搬入礫6点・180g（うち被熱礫3点・160g）、P47より搬入礫2点・50g、P48より土器4点・60g、剥片類2点、P49より搬入礫1点・20g、P185より土器2点20gが出土している。

時　　期　炉の形状、出土土器から大木10式期と推定される。

SI103（図面21・22・214）

位　　置　調査区のほぼ中央、12Dに位置する。

検出状況　12D－9号集石の遺物取り上げ中に約5cm下から石組みを確認する。

炉　　土器埋設石組炉である。被熱により破砕しているものの4個の扁平長大礫を1辺約50～70cmの方形に組み構築している。軸方向はN－67°－Eである。炉体土器は石組み内部の全体に埋設さ

れ、上部と下部の２段になる。しかもそれぞれ入れ子状に土器が二重に巡る。

柱　　穴　炉周辺にいくつかのピットを検出したが、確定できなかった。

重複関係　12D－９号集石と重複するが、12D－９号集石の下に構築されていた。古　**SI103**→12D－９号集石　新。

出土遺物　炉より土器293点・4.299kg（54～57）、剥片類３点、礫38点・44.757kg（うち被熱礫37点・44.702kg）が出土している。

時　　期　炉の形状から後期初頭と推定される。

SI122（図面21・22・199・214）

位　　置　調査区のほぼ中央、12D・13Dの境に位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に覆土の遺物、複式炉を確認する。

炉　　長軸約130cm、短軸約85cmの土器埋設複式炉で、長軸方向はＮ－88°－Ｅである。掘形は長軸155cm、短軸102cm、深さ29cmを測る。撹乱により土器埋設部の南側の礫は抜き取られている。石組部は10～20cmの礫を擂鉢状に並べ、土器埋設部は５～10cmの礫を土器の周囲に幅約15cm程度に巡らせている。土器埋設部と石組部の境は側縁が括れている。また、土器埋設部の端部に接して立石が認められる。立石は径15×22cm、長さ43cm（地中22cm、地上21cm）を測る。前庭部は認められない。

柱　　穴　炉の周辺よりピットが多く検出された。12D－P1・２・５・９・100、13D－P1・14・100が柱穴と推定され、五角形状に並ぶ。

重複関係　SK123・128、12D－２号埋設土器と重複するが、これらの遺構より古い。

古　**SI122**→SK123・128、12D－２号埋設土器　新

出土遺物　炉及び炉周辺、覆土より土器803点・29.377kg（58～66）、石器：両極剥離痕のある石器１点・磨製石斧２点・敲磨石類４点・石核１点・剥片類22点、礫200点・149.272kg（うち被熱礫132点・78.648kg）、12D－P1より剥片類１点、P2より礫４点・12.533kg（うち被熱礫３点・9.173kg）、P5より剥片類１点、礫５点・429g、P9より剥片類３点、13D－P1より土器６点・100g、礫３点・4.484kg（うち被熱礫２点・660g）が出土している。

時　　期　伴出土器から大木10式期である。

SI129（図面29・30・199・214）

位　　置　調査区のほぼ中央、13C・13Dの境に位置する。

検出状況　SI59等の上部の遺構を調査後、さらに下部を削平中に複式炉を確認する。

平 面 形　炉の東側から南側にかけてわずかに落ち込みが認められ、これを基に推測するならば円形または楕円形を呈するものと思われる。

規　　模　炉から東側のプランまで約2.8mを測る。

炉　　長軸約170cm、短軸約95cmの土器埋設複式炉で、長軸方向はＮ－47.5°－Ｅである。前庭部は掘り込まれていないが、石組部と土器埋設部の掘形は長軸130cm、短軸80cm、深さ35cmを測る。石組部は30×27cmの扁平礫を底面に敷き、周囲を10～20cm程度の礫を擂鉢状に並べている。土器埋設部は棒状礫を外側に巡らせ、５～10cmの礫を土器との隙間に敷き詰めている。前庭部は撹乱により裾石の一部が抜き取られているものの、片側の裾部は長く80cmを測る。太さ10～15cm、長さ40～50cmの棒状礫を２本据えている。

柱　　穴　炉周辺より多くのピットを検出した。13D－P5・101、14C－P100、14D－P104が柱穴

と推定される。いずれも径40～50cm程度で、炉を囲んで台形状に並ぶ。

重複関係　プランと推定される範囲でSI58・59・228・SK134・302・338・SD45と重複する。SD45・SI228に切られ、SI58・59は上に構築され、SK134・302・338とは新旧関係が不明である。古　**SI129**→SI58→SI59→SI228→SD45　新。

出土遺物　炉及び炉周辺より土器124点・9.895kg（67・68）、石器：不定形石器1点・敲磨石類1点・石皿1点・砥石1点・石核1点・剥片類14点、礫181点・124.316kg（うち被熱礫143点・106.999kg）、13D－P5より土器1点・5g、石皿1点、礫1点・3.2kgが出土している。

時　　期　炉の形状、他の遺構との重複関係から中期末葉と推定される。

SI130（図面29・30・214）

位　　置　調査区のほぼ中央、13C・13Dの境に位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に被熱した扁平礫と土器埋設部の被熱した礫を確認する。

炉　　長軸約105cm、短軸約65cmの土器埋設複式炉で、長軸方向はN－89°－Eである。掘形は長軸120cm、短軸75cmを測る。石組部は何らかの理由で側石の一部が抜かれているものの、底面・側面は扁平な大礫を擂鉢状に組み合わせ構築したものと推定される。土器埋設部も一部破壊を受けているものの、扁平礫が外側を巡り、土器との間に割石を埋めている。前庭部は認められない。

柱　　穴　炉周辺にいくつかのピットを検出した。13C－P18・70、13D－P13・50が柱穴と推定され、炉を囲んで台形状に並ぶ。

その他の施設　当初炉を確認した段階では、土器埋設部の上に大きさ20～30cm、厚さ5～7cmの被熱扁平礫が6個、積み上げられていた。前述のように抜かれた炉石を住居の廃棄時に炉体土器を蓋い被せるように積み上げた可能性も指摘できる。

重複関係　無し。

出土遺物　炉より土器10点・3.4kg（69）、石皿1点、礫77点・46.364kg（うち被熱礫64点・31.864kg）、13D－P13より土器2点・100g、剥片類1点が出土している。

時　　期　炉の形状から中期末葉と推定される。

SI136（図面21・23・215）

位　　置　調査区のほぼ中央、11C・12Cの境に位置する。

検出状況　SI51を調査後、下層に落ち込みを確認し、削平中に炉と判明する。

平面形・規模　炉の東側に立ち上がりを検出するが不明である。

覆　　土　炉及び炉周辺の覆土は、黒褐色土の単層である。

炉　　長軸88cm、短軸60cmの土器埋設複式炉で、長軸方向はN－77°－Eである。石組部は底面に25×30cm、厚さ5cmの扁平礫が敷かれ、側面を扁平礫で擂鉢状に並べ構築している。土器埋設部は、15～25cmの棒状礫が外側を巡る。前庭部は認められない。

柱　　穴　炉周辺にいくつかのピットを検出した。11C－P15・56、12C－P94が柱穴と推定され、炉を囲んで三角形に並ぶ。

重複関係　SI51と重複するが、下に構築されている。古　**SI136**→SI51　新

出土遺物　炉及び炉周辺の覆土より土器45点・6.235kg（70～72）、石器：不定形石器1点・敲磨石類3点・石核1点・剥片類10点、礫165点・86.572kg（うち被熱礫143点・62.948kg）が出土している。

時　　期　炉体土器から大木10式期である。

SI138（図面37・38・215）

位　　置　調査区のほぼ中央、14D・15Dの境に位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に炉石を確認する。

炉　　撹乱を受け一部破壊されている。長軸130cm、短軸77cmの土器埋設複式炉で、長軸方向はN－35°－Eである。石組部は東側が乱れているものの棒状礫が方形状に巡り、底面には礫が用いられていない。土器埋設部は、被熱で破砕しているが側石は扁平礫を横に立てて巡り、土器との間には割石を埋めている。土器埋設部の頂辺に接し、小型の深鉢形土器がさらに埋設されている。前庭部は認められない。

柱　　穴　炉周辺にいくつかのピットを検出した。14D－P1・60、15D－P20・21・22が柱穴と推定され、炉を囲んで五角形状に並ぶ。

重複関係　SI209・210と重複し、SI210の上にあり、SI209とは新旧関係は不明である。古SI210→**SI138**　新。

出土遺物　炉より土器52点・6.575kg（73・74）、石器：不定形石器1点・石皿1点・石核1点・剥片類2点、礫54点・32.216kg（うち被熱礫49点・32.005kg）、14D－P1より剥片類1点が出土している。

時　　期　炉体土器から大木10式期である。

SI139（図面52・53・215）

位　　置　調査区のほぼ中央、15D・16Dの境に位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に石組炉を確認する。

炉　　北側と西側が破壊されるが、おおよその形状は推定できる。土器埋設石組炉である。扁平な大礫を4個、方形状に組んで構築したものと推定される。被熱のためひび割れが激しい。

柱　　穴　炉周辺より多くのピットが検出された。P1・2・3・4・6・7・8が柱穴と推定される。いずれも径30～60cm、深さ14～26cmで炉を囲んでほぼ均等に並ぶ。

その他の施設　炉の北側に石組みとほぼ同レベルで、石敷きが認められる。いずれも30cm前後の扁平礫である。敷石住居の石敷きの可能性がある。

重複関係　無し。

出土遺物　炉及び炉周辺より土器7点・1.275kg（75）、剥片類2点、礫66点・81.388kg（うち被熱礫16点・47.55kg）、P1より土器5点・45g、P6より土器2点・13gが出土している。

時　　期　炉の形状から後期初頭と推定される。

SI151（図面21・23・215・216）

位　　置　調査区のほぼ中央、12Cに位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に炉を確認する。

炉　　撹乱を受け、石組部の底面と側面の一部が検出されたのみで、ほかは破壊されているものの土器埋設複式炉と推定される。石組部は底面に大きさ30cm前後の扁平礫を敷き、側面も扁平礫が並べられている。土器埋設部は12C－P15に切られ、遺存していない。

柱　　穴　炉周辺に多くのピットが検出された。12C－P4・5・8・57・58・60・79が柱穴と推定される。径40～70cmを測り、炉を囲んで長方形状に並ぶ。

重複関係　12C－6号埋設土器と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物　炉及び炉周辺より土器11点・190g、石皿2点、礫75点・31.036kg（うち被熱礫25点・

20.419kg)、12C－P4より土器５点・40g、剥片類１点、被熱礫２点・108g、P5より土器33点・530g、不定形石器１点・剥片類５点、被熱礫１点・9g、P19より剥片類１点、P57より土器２点・20g、P58より土器７点・140g、剥片類４点が出土している。

時　　期　炉の形状から中期末葉である。

SI175（図面21・23・216）

位　　置　調査区のほぼ中央、12C・13Cの境に位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に炉を確認する。

炉　　撹乱により東から南側の一部が破壊され、規模不明の土器埋設複式炉である。長軸方向はN－80.5°－Eと推定される。石組部は東～南側が乱れているが底面に扁平礫を敷き、側面にも扁平礫を並べたものと思われる。土器埋設部は、被熱で破砕している礫を幅15～20cmの帯状に敷き詰めている。頂辺には小型の深鉢形土器がさらに埋設されている。扁平礫を横に立てて巡り、土器との間には割石を埋めている。前庭部は認められない。

柱　　穴　炉周辺に多くのピットが検出された。12C－P71・103・104、13C－P3・25が柱穴と推定される。いずれも径40～50cmを測り、炉を囲んで五角形状に並ぶ。

重複関係　SK160・171、12C－８号埋設土器と重複する。SK160・171の覆土にピットの痕跡が見られず、12C－８号埋設土器とは新旧関係が不明である。古　**SI175**→SK160・171　新。

出土遺物　炉より土器69点・2.51kg（76・77)、石器：不定形石器１点・敲磨石類１点・剥片類７点、礫18点・12.044kg（うち被熱礫15点・7.835kg)、12C－P71より土器14点・160g、石鏃失敗品１点・剥片類10点、13C－P1より土器１点・10gが出土している。

時　　期　炉体土器から大木10式期である。

SI190a（図面52・54・198・216・217）

位　　置　調査区のほぼ中央やや東側、15C・16Cの境に位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に礫を敷き詰めた部分を確認し、炉も存在するため敷石住居とする。

平 面 形　敷石部分は礫が抜けている部分があるものの、ほぼ六角形状を呈する。礫は大きさ約20～60cmの扁平礫を用いている。

規　　模　敷石の範囲は長軸3.5m、短軸3.4mを測り、長軸方向はN－10.5°－Eである。

炉　　敷石の範囲内と敷石の南側に接して、都合４か所の被熱部分を検出した。広範囲に被熱していることや炉が石組状に礫を並べていることから、すべて炉跡とした。炉１は敷石の南側にあるため、SI190aとは別遺構の可能性もあることからSI190bとした。

炉２は敷石住居内の中央やや南側にある土器埋設石組炉である。石組みの多くは破壊され、しかも被熱により破砕しているが、炉体土器を入れ子に埋設し、その周囲の礫を方形状に組み構築している。炉体土器は北寄りに埋設している。遺存する南側の石組みと炉体土器から軸方向はN－11.5°－Eで、敷石住居の長軸方向とほぼ一致する。

炉３は敷石住居内の中央やや北側にある方形の石組炉である。石組みの多くは破壊され、東西の両側と南側の一部を残すのみである。遺存部より一辺約80cmの石組みと推定される。石組み内には、焼土が認められるが、炉体土器は埋設されていない。遺存する石組みの方向から炉の軸方向はN－23.5°－Eと推定される。敷石住居の長軸方向に近い。

炉４は敷石住居内の東側にある土器埋設石組炉である。石組みの東半分は遺存していない。敷石住居の

東縁にあたるため、敷石住居の構築時に東半分を破壊したものか判然としない。炉体土器は底部のみが遺存し、炉内北寄りに埋設されたものと推定できる。

柱　　穴　敷石住居の内外からいくつかのピットが検出されたが、特定できなかった。

重複関係　SK341・344・457・458と重複するが、これらの上に構築されている。古　SK341・344・457・458→**SI190a**　新。

出土遺物　敷石住居及び炉２～４より土器338点・9.045kg（78～82）、石器：石鏃１点・板状石器１点（202）・敲磨石類６点・多面体敲石１点・石皿２点・石核１点・剥片類37点、石製品１点、礫577点・773.397kg（うち被熱礫230点・460.747kg）が出土している。

時　　期　遺構のレベル、炉の形状、敷石住居、重複遺構との関係からこの付近では、最も新しい遺構の一つである。後期初頭と推定される。

SI190b（図面52・54・217）

位　　置　調査区のほぼ中央やや東側、15C・16Cの境に位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中にSI190aの敷石とともに確認する。SI190aの南側に接し、しかも敷石と同レベルのため、同遺構の炉跡と想定し調査した。しかし、SI190aに伴うかどうか不明のため、SI190bとした。

炉　　撹乱のため所々に破壊を受けているが、おおよその輪郭が分かる。土器埋設石組炉である。石組部は被熱でひび割れているが、比較的厚手の扁平長大礫を用い、方形状に組み込んだものと推定される。炉体土器は入れ子状に二重に巡り、石組み内の北寄りに埋設されている。軸方向は、おおよそN－11°－Eである。

柱　　穴　炉の周辺にいくつかのピットを検出したが、特定できなかった。

重複関係　SK341と重複するが、この上に構築されている。古　SK341→**SI190b**　新。

出土遺物　炉より土器65点・1.445kg（83～85）、被熱礫13点が出土している。

時　　期　遺構のレベル、炉の形状、重複遺構との関係から、この付近では最も新しい遺構の一つであり、後期初頭と推定される。

SI191（図面52・53・217）

位　　置　調査区のほぼ中央やや東側、16Cに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に石組部の礫を確認する。

炉　　撹乱のため一部欠損するが、土器埋設石組炉である。石組みは底面にいくつかの扁平礫を敷き、側面は40cm前後の扁平長大礫を一辺約65cmの方形状に組み構築している。土器埋設部は頂辺をはじめ多くの石組みを欠損するが、径約25cmの土器の周囲を幅約15cmの石敷きが巡るものと推定される。遺存部分から長軸方向を求めるとN－26°－Eである。

柱　　穴　炉の周辺にいくつかのピットを検出した。P15・19・20・21・345が柱穴と推定される。大きさにばらつきが認められるものの、五角形状に並ぶ。

重複関係　無し。

出土遺物　炉より土器24点・2.39kg（86・87）、礫22点・46.67kg（うち被熱礫18点・46.512kg）、P345より土器４点・160g、不定形石器１点、礫13点・338gが出土している。

時　　期　伴出土器から大木10式期である。

SI192（図面52・53・217）

位　置　調査区のほぼ中央やや東側、16Cに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に石組部の礫を確認する。

炉　土器埋設石組炉である。石組部は6個の棒状礫を長軸60cm、短軸50cmの長方形状に組んでいる。炉体土器は北寄りに埋設し、南側の隙間は礫を敷き詰めている。長軸方向はN－7.5°－Eである。

柱　穴　炉の周辺からいくつかのピットを検出した。16C－P6・7・11・12・13、17C－P2が柱穴と推定される。炉を囲んで巡るが、炉の東側の柱穴は、SK400と重複するため検出できなかった。

重複関係　SK400と重複し、この上に構築されている。古　SK400→**SI192**　新

出土遺物　炉より土器73点・2.35kg（88）、石器：不定形石器1点・剥片類1点、礫24点・32.118kg（うち被熱礫16点・31.856kg）が出土している。

時　期　炉の形状から後期初頭と推定される。

SI193（図面47・48・218）

位　置　調査区のほぼ中央、15Eに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に石敷きと炉を確認し、敷石住居とする。

規　模　敷石は炉の周辺に敷かれただけのものである。炉から南側で130cm、これ以外は60cm以内の範囲に大きさ25～60cm程度の扁平礫を敷き詰めている。

炉　撹乱で一部破壊されていたが、敷石内で70×115cmの範囲で礫が焼けている。その東寄りの敷石内では、ほぼ中央の60cm四方が炉の範囲と推定される。土器埋設石組炉である。遺存部分から推定すれば、軸方向はN－43.5°－Eである。

柱　穴　敷石内及びその周辺からは、ほとんどピットが検出されず特定できなかった。

重複関係　無し。

出土遺物　炉及び敷石より土器17点・690g（89）、石器：敲磨石類3点・砥石1点・剥片類3点、礫136点・377.721kg（うち被熱礫105点・304.783kg）が出土している。

時　期　炉体土器から大木10式期と推定される。

SI201（図面29・30・218）

位　置　調査区のほぼ中央、13Cに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に石組部の礫を確認する。

炉　撹乱を受け、一部破壊されている。土器埋設石組炉である。遺存する礫より方形の石組みと推定され、炉体土器は東寄りに埋設されている。遺存部分から軸方向を推定すれば、N－81°－Eである。

柱　穴　炉周辺からいくつかのピットを検出したものの特定できなかった。

重複関係　西側はSK287・482と重複し、この上に構築されている。古　SK287・482→**SI201**　新。

出土遺物　炉より土器1点・760g（90）、石器：敲磨石類1点・剥片類4点、礫27点・20.12kg（うち被熱礫18点・17.96kg）が出土している。

時　期　炉の形状から後期初頭と推定される。

SI202（図面37・39・219）

位　置　調査区のほぼ中央、14Dに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に石組部の礫を確認する。

炉　　撹乱を受け、一部破壊されている。石組部は南～東側を欠損するが、遺存部を見る限り、扁平長大礫を方形状に組み構築したものと推定される。炉体土器は北東隅寄りに埋設している。遺存部分から軸方向は、N－26°－Eと推定される。

柱　穴　炉周辺より多くのピットを検出したが特定できなかった。

重複関係　無し。

出土遺物　炉より土器８点・413g（91）、剥片類２点、被熱礫51点・17.249kgが出土している。

時　期　炉の形状から後期初頭と推定される。

SI206（図面29・31・219）

位　置　調査区のほぼ中央、14Dに位置する。

検出状況　SI60を調査後、さらに下層を削平中に石組部の礫を確認する。

炉　　他の遺構との重複により一部破壊されている。土器埋設石組炉である。石組部は南側が他の遺構のピットにより切られているが、東～北～西側は遺存する。被熱のためひび割れているが、棒状長大礫を一辺約60cmの方形に組み構築している。炉体土器は北寄りに埋設している。遺存部分から軸方向はN－32.5°－Eと推定される。

柱　穴　炉周辺から多くのピットが検出された。しかし、特定できなかった。

重複関係　南～西側にかけてSI60・203号集石と接するが、これらの下に構築されている。古SI206→SI60・203号集石　新。

出土遺物　炉より土器187点・5.66kg（92）、石器：磨製石斧１点・石皿２点、礫18点・17.085kg（うち被熱礫16点・17.01kg）が出土している。

時　期　炉の形状から後期初頭と推定される。

SI208（図面47・48・219）

位　置　調査区のほぼ中央、14Dに位置する。

検出状況　Ⅱ層で検出された礫を処理後、さらに下部を削平中に円形状の落ち込みを確認する。

平 面 形　東側はSI209と重複し、プランが不明であるが、楕円形を呈するものと推定される。

規　模　長径は柱穴の並びから推定約5.3m、短径4.7mである。面積（推定）約20.5m^{2}を測る。

覆　土　暗褐色シルトの単層で、しまりのある土が薄く堆積していた。

炉　　上部は撹乱のため、破壊されている。土器埋設複式炉と思われるが、土器埋設部及び石組部側面は欠損し、石組部の底面のみ検出された。扁平礫が敷かれている。

柱　穴　プラン内から多くのピットが検出された。P1・2・3・4・5・6・35・105・106・107・108が柱穴と推定される。

重複関係　SI60・209、SK332、14D－８号集石・12号埋設土器と重複する。SI60の下にあり、14D－８号集石に切られている。SI209、SK332、14D－12号埋設土器とは新旧関係不明である。

出土遺物　覆土、炉から土器86点・1.125kg（93・94）、石器：両極剥離痕のある石器１点・剥片類８点、礫72点・21.449kg（うち被熱礫37点・13.17kg）、P1より土器４点・50g（94）、P3より土器１点・20g、P4より礫３点・50g（うち被熱礫２点・40g）、P5より土器２点・50g（93）、P35より土器４点・60g、P107より土器１点・5g、石器：石鏃失敗品１点・不定形石器１点・磨製石斧１点・剥片類３点、P108より土器２点・25gが出土している。

時　期　炉の形状から中期末葉と推定される。

SI209（図面37・39・220）

位　置　調査区のほぼ中央、14Dに位置する。

検出状況　上部遺構を調査後、さらに下部を削平中に浅い落ち込みを確認する。

平面形　南西側はSI208と重複するため、プランが不明確である。遺存部分より推定すれば隅丸方形状を呈する。

規　模　緩やかな落ち込みのため明確に範囲をきめられないが、長軸4.7m、柱穴並びから推定短軸約4.2m、推定面積20.4m^{2}を測る。

覆　土　炭化粒子を多く含む黒色土の単層である。

炉　プラン内の中央やや北東寄りに位置する。長軸130cm、短軸97cmの土器埋設複式炉である。長軸方向はN－47°－Eで、掘形は長軸155cm、短軸105cmを測る。遺構の構築面が低いためかほとんど撹乱を受けていない。石組部は底面に扁平礫を敷き、土器埋設部との境石以外は側面に長さ30～40cmの扁平大礫を組み構築している。土器埋設部との境石は3個の棒状長大礫を縦に並べている。土器埋設部は10～20cmの礫を巡らせ、隙間に5～15cmの礫を敷き詰めている。頂辺付近は礫が抜かれ、焼土が見える。前庭部は認められるが、掘り込みが見られず、27cm程度の袖石が埋め込まれている。

柱　穴　炉周辺及びプラン内から多くのピットが検出された。P1～5まで柱穴と推定した。いずれも径50cm程度で他のピットより大きく、しっかりとした掘り込みをもつ。炉を囲んで五角形状に並ぶ。

重複関係　SI208・SK340・204号集石、14D－1号・2号・3号・13号・14号埋設土器と重複する。204号集石、14D－1号・2号・3号・13号埋設土器の下に構築され、14D－14号埋設土器に切られている。SI208・SK340とは新旧関係が不明である。古　**SI209**→204号集石、14D－1号・2号・3号・13号・14号埋設土器　新。

出土遺物　覆土及び炉より土器73点・2.217kg（95・96）、石器：敲磨石類1点・石皿2点・石核2点・剥片類68点、礫283点・94.808kg（うち被熱礫216点・90.803kg）、P1より土器4点・40g、P3より土器4点・50gが出土している。

時　期　炉の形状から中期末葉と推定される。

SI210（図面37・39・220）

位　置　調査区のほぼ中央、14D・15Dの境に位置する。

検出状況　周辺遺構の調査後、さらに下層を削平中に径約3.5mの円形の落ち込みを確認する。

平面形　西側の一部は、撹乱により破壊されているが、円形を呈する竪穴住居である。

規　模　長軸3.8m、短軸3.6m、確認面からの深さ16cm、面積10.9m^{2}を測る。

覆　土　暗褐色土を主体とする3層に識別され、自然堆積である。

炉　SK338により上部は破壊されている。土器埋設複式炉で石組部の底面、埋設土器の下半部のみ検出されただけである。炉の軸方向は集落の中心方向を向く。

柱　穴　プラン内よりいくつかのピットが検出された。P23～25が柱穴と推定される。炉を囲んで三角形状に並ぶ。

重複関係　SI138、SK278・337と重複する。SI138の下に、SK278の上に構築し、SK337に切られている。古　SK278→**SI210**→SI138、SK337　新

出土遺物　覆土及び炉より土器42点・2.565kg（97）、石器：不定形石器1点・両極剥離痕のある石器1点・敲磨石類3点・剥片類15点、石製品1点、礫230点・23.529kg（うち被熱礫43点・7.97kg）が出

土している。

時　　期　炉の形状から中期末葉である。

SI228（図面29・31・221）

位　　置　調査区のほぼ中央、13C・14Cの境に位置する。

検出状況　Ⅱ層で検出された礫を除去後、Ⅲ層削平中に径約4m余りの円形の落ち込みを確認する。

平 面 形　楕円形を呈する竪穴住居である。

規　　模　長軸5.5m、短軸4.5m、確認面からの深さ25cm、面積18.5m^{2}を測る。長軸方向はN－1.5°－Wである。

覆　　土　黒色土を基本とする単層である。

炉　楕円形の石組炉で炉底に土器敷き・土器埋設が施されている。長径76cm、短径66cm、深さ13cmを測り、長軸方向はN－7°－Eで住居の長軸方向とほぼ一致する。石組部は長さ20～35cm、幅20cm前後、厚さ7～10cmの扁平礫を横に立て並べている。炉底面には土器が敷き詰められ、西側に胴下半部の土器が埋設されている。

柱　　穴　プラン内から多数のピットが検出された。壁沿いに49基の小ピットが、炉と壁の中間に22基の小ピットが認められ、小柱穴と推定できる。後期中葉に見られる壁柱穴をもった住居であり、壁柱穴が二重に巡る住居である。

その他の施設　西側のほぼ中央より集石と径40～50cmのピット4基が検出されている。遺存状況からSI228と同時期ないしは新しくなると思われるが、詳細は不明であった。また、炉の北西側に焼土が2か所認められた。土層断面では床面上に浮いているため、覆土と推定できる。

重複関係　SI129・201、SK285・287・289・290・306・347・482と重複し、いずれの遺構も切っている。古　SI129・201、SK285・287・289・290・306・347・482→**SI228**　新。

出土遺物　覆土及び炉から土器229点・15.222kg（98～102）、石器：石鏃失敗品1点・石錐1点（45）・不定形石器1点・敲磨石類2点・砥石2点・剥片類63点、礫298点・134.595kg（うち被熱礫73点・95.71kg）が出土している。

時　　期　覆土、炉からの出土土器から加曾利B2式期である。

SI229（図面37・40・221）

位　　置　調査区のほぼ中央、14C・14Dの境に位置する。

検出状況　Ⅱ層中で確認された遺構を調査後、Ⅲ層削平中に炉を確認する。

炉　土器埋設複式炉で、長軸不明、短軸65cm、長軸方向はN－45.5°－Eである。石組部は撹乱のため前庭部側は欠損している。遺存する底面、両側面、土器埋設部との境石は、扁平な大礫を組み合わせ構築している。土器埋設部は入れ子状に三重に巡る土器を扁平礫で外側を囲い、土器との間に礫を詰めている。

柱　　穴　炉周辺から多くのピットを検出した。14C－P65・70、14D－P16・17・18が柱穴と推定される。いずれも径50cm前後を測り、五角形状に並ぶ。

重複関係　SK258、14C－1号埋設土器と重複する。14C－1号埋設土器が上部にあり、SK258とは新旧関係は不明である。古　**SI229**→14C－1号埋設土器　新

出土遺物　炉より土器6点・1.67kg（103）、被熱礫10点・24.7kg、14C－P65より礫1点・4.1kg、14D－P16より土器2点・30g、石器：不定形石器1点・剥片類2点、礫3点・15g、P17より土器3

点・100g、P18より敲磨石類1点が出土している。

時　　期　炉の形状から中期末葉と推定される。

SI230（図面37・40・222）

位　　置　調査区のほぼ中央、14Cに位置する。

検出状況　Ⅱ層で確認された遺構を調査後、Ⅲ層を削平中に炉を確認する。

炉　　撹乱により上部は破壊されているが、土器埋設複式炉である。石組部は底面のみ遺存するが、27×35cmの扁平礫が敷かれている。土器埋設部は埋設土器の一部が遺存するのみである。遺存部分から長軸方向は、集落跡の中心方向を示している。

柱　　穴　炉の周辺から多くのピットが検出されている。P30・31・61・63・71・255が柱穴と推定される。いずれも径約50～60cmを測り、六角形状に並ぶ。

重複関係　SK254・301・303・304、14C-2号・3号・7号・9号埋設土器と重複する。SK301を切り、14C-2号・3号・7号・9号埋設土器は覆土に構築している。SK254・303・304とは新旧関係が不明である。古　SK301→SI230→14C-2号・3号・7号・9号埋設土器　新。

出土遺物　炉より土器27点・2.95kg（104・105）、石器：敲磨石類3点・剥片類2点、礫179点・41.53kg（うち被熱礫122点・25.311kg）、14C-P30より土器5点・80g、石器：石鏃失敗品1点（26）・剥片類1点、礫3点・166g（うち被熱礫2点・124g）、14C-P31より土器2点・90g、礫5点・193g（うち被熱礫1点・55g）が出土している。

時　　期　炉体土器から大木10式期である。

SI238（図面37・40・222）

位　　置　調査区の中央やや東寄り、15B・15Cの境に位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に炉を確認する。

炉　　木根の撹乱、他の遺構との重複により大きく破壊されている。土器埋設複式炉である。石組部は底面、片側面、前庭部側の側面が遺存し、扁平な大礫を並べ構築している。特に前庭部側の側石は長さ71cm、幅31cmの扁平礫を用いていることから、大型の複式炉であったものと推定できる。土器埋設部は木根や他の遺構のため、埋設土器及びこれを囲む礫も大きくずれている。埋設土器は入れ子状に二重に巡る。前庭部は認められなかった。遺存部分から推定すれば長軸方向はN-33°-Eである。

柱　　穴　炉周辺から多くのピットを検出した。しかし、特定できなかった。

重複関係　ピット以外は重複無し。

出土遺物　炉より土器24点・2.59kg（106・107）、礫88点・49.24kg（うち被熱礫70点・43.78kg）が出土している。

時　　期　炉体土器より大木10式期である。

SI239（図面52・53・222）

位　　置　調査区の東寄り、15B・16Bの境に位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に炉を確認する。

炉　　木根の撹乱や他の遺構との重複のため、一部が破壊されている。土器埋設複式炉と推定される。石組部は前庭部側に他の遺構のピットがあり、これに切られている。遺存部分を見る限り、底面、両側面、土器埋設部との境石は、大型の扁平礫を組み構築している。境石に接して深鉢が正立の状態で認められるが、埋設ではないものと思われる。土器埋設部は土器が認められるが、石組みの多くは遺存してい

ない。遺存部分から長軸方向を推定すれば、N－21.5°－Eである。

柱　　穴　炉周辺よりいくつかのピットを検出したが、特定できなかった。

重複関係　SK388・420と重複する。SK388の上に構築され、SK420とは新旧関係が不明である。古　SK388→**SI239**　新。

出土遺物　炉より土器6点・2.96kg（108・109）、石器：敲磨石類1点・剥片類3点、礫69点・40.849kg（うち被熱礫51点・39.611kg）が出土している。

時　　期　炉の形状から中期末葉と推定される。

SI240（図面52・55・222）

位　　置　調査区の東寄り、16Bに位置する。

検出状況　237号集石と重複し、この調査の過程で炉を確認する。

炉　　木根により南から西側にかけて破壊されているが、土器埋設石組炉である。遺存する部分を見る限り、石組部は太さ10～15cm、長さ35～40cmの長大礫を方形に組み構築している。埋設土器は北側の石組みに接して埋設されているが、残りはよくない。遺存部分より軸方向はN－8.5°－Wと推定される。

柱　　穴　炉周辺よりいくつかのピットを検出したが、特定できなかった。

重複関係　237号集石の下にあり、SK440の上に構築されている。遺構確認面の層位・レベルから237号集石とともにこの周辺では最も新しい遺構である。古　SK440→**SI240**→237号集石　新。

出土遺物　炉より土器12点・370g、石器：敲磨石類1点・剥片類2点、礫74点・13.067kg（うち被熱礫30点・9.928kg）が出土している。

時　　期　炉の形状から後期初頭である。

SI243（図面35・36・198・223）

位　　置　調査区のほぼ中央、14E・14F・15Fの境に位置する。

検出状況　周辺には遺構が少なくⅢ層削平中に径約4mの円形の落ち込みを確認する。

平 面 形　楕円形を呈する竪穴住居である。

規　　模　長径4.5m、短径3.9m、確認面からの深さ15cm、面積14.0m^{2}を測り、長軸方向はN－50°－Eである。

覆　　土　暗褐色土を基本とする2層に識別され、自然堆積である。

炉　　撹乱により一部炉石が抜かれているが、径80～90cmの円形石組炉である。石組部は長さ約20cm、幅約10cm、厚さ5～10cmの礫を二重に巡らせている。

柱　　穴　西側の一部は撹乱により確認できなかったものの、これ以外の場所では壁沿いに2・3基が並列した状態で柱穴を検出する。P12～31の20基であり、径約20～30cmを測る。西側のP15・17は径約50cmを測り、他の柱穴と比べると明らかに大きい。

重複関係　無し。

出土遺物　主に覆土から土器116点・1.755kg（110・111）、石器：不定形石器1点・敲磨石類1点・剥片類7点、主に炉から礫24点・51.54kg（うち被熱礫20点・42.49kg）が出土している。

時　　期　出土土器、炉の形状から加曾利B2式期と推定される。

SI247（図面61・62・224）

位　　置　調査区の南寄り、16D・16Eの境に位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に炉を確認する。

炉　土器埋設石組炉である。石組部は４個の扁平長大礫を一辺33cmの方形に組み構築している。炉体土器は北寄りに埋設し、炉の軸方向はＮ－15°－Ｅである。

柱　穴　炉の周辺からいくつかのピットが検出され、P1～６が柱穴と推定される。

重複関係　P2が16E－３号埋設土器と重複するが、16E－３号埋設土器が上に乗っている。古　SI247→16E－３号埋設土器　新。

出土遺物　炉より土器15点・537g（112）、剥片類３点、礫20点・5.236kg（うち被熱礫１点・15g）が出土している。

時　期　炉体土器から大木10式期と推定される。

SI251（図面37・40・224）

位　置　調査区のほぼ中央、やや東寄りの14Cに位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に炉石を確認する。

炉　土器埋設複式炉と思われるが、SI230－P61をはじめとする遺構に破壊されている。石組部の底面及び側面の下部のみ検出され、側面上部及び土器埋設部は不明である。

柱　穴　炉周辺より多くのピットが検出されているが、特定できなかった。

重複関係　SI230と重複するが、P61（柱穴）に切られている。古　SI251→SI230　新。

出土遺物　炉より土器７点・140g、剥片類２点、礫11点・21.97kg（うち被熱礫５点・11.96kg）が出土している。

時　期　炉の形状から中期末葉と推定される。

SI252（図面37・40・224）

位　置　調査区のほぼ中央、やや東寄りの14Cに位置する。

検出状況　Ⅱ層で確認された遺構を調査後、Ⅲ層を削平中に径約3mの落ち込みを確認する。

平 面 形　不整方形を呈する竪穴住居である。

規　模　一辺約3.4m、確認面からの深さ20cm、面積9.4m^{2}を測る。

覆　土　炭化粒を含んだ黒褐色土と暗褐色土を基本とする覆土に覆われ、自然堆積と推定される。

炉　住居内のやや南東寄りに土器埋設複式炉と推定される炉が存在した。撹乱を受け多くは破壊されている。石組部は底面及び側石が遺存し、扁平大型礫を組み合わせ構築している。土器埋設部はその多くが破壊され、炉体土器の一部と縁石の一部が検出されたのみである。長軸方向は正確に求められないが、他の土器埋設複式炉と大きく異なり南東方向になる。

柱　穴　住居内からいくつかのピットが検出された。14C－P39・42・43・45・49・50が柱穴と推定される。炉を囲んでいびつな五角形状に並ぶ。

重複関係　無し。

出土遺物　覆土及び炉から土器65点・2.341kg（113～116）、石器：敲磨石類２点・多面体敲石１点（364）・砥石１点・剥片類10点、礫164点・46.839kg（うち被熱礫49点・37.125kg）、P39より礫１点・6g、P50より剥片類１点、礫11点・293gが出土している。

時　期　炉体土器から大木10式期と推定される。

SI261（図面52・55・225）

位　置　調査区の東寄り、16Bに位置する。

検出状況　237号集石を取上げ後、直下より炉を確認する。

炉　　土器埋設複式炉である。撹乱により上部は移動している可能性があるものの、長軸方向はN－5°－Eと推定される。石組部は底面、境石、側面の一部が遺存し、土器（120）が埋設されている。遺存部を見る限り扁平礫を組み合わせ構築している。土器埋設部は三重に土器が埋設され、縁石は巡らない。前庭部は認められ、裾石と思われる礫が片側のみ遺存していた。

柱　穴　炉周辺よりいくつかのピットを検出したが、特定できなかった。

重複関係　237号集石が上に乗っている。古　SI261→237号集石　新。

出土遺物　炉より土器67点・3.075kg（117～122）、石器：多面体敲石１点（360）・剥片類３点、礫39点・28.479kg（うち被熱礫35点・13.779kg）が出土している。

時　期　炉の形状から中期末葉と推定される。

SI288（図面63・64・225）

位　置　調査区の東寄り、16Cに位置する。

検出状況　Ⅱ層削平中に埋設土器を確認する。精査の結果、石組みを確認し炉と判断する。

炉　　撹乱のため大きく破壊されるものの、土器埋設石組炉である。石組部は東～北側を欠損するが、遺存部分より扁平長大礫を一辺約40cmの方形に組み構築したものと推定される。炉体土器は北側に片寄って埋設されている。遺存部分より炉の軸方向を推定すればN－約31°－Eである。

柱　穴　炉周辺からいくつかのピットを検出した。しかし、特定できなかった。

重複関係　SK434と重複し、この上に構築されている。古　SK434→SI288　新。

出土遺物　炉より土器42点・680g（123）、剥片類２点、被熱礫８点・7.715kgが出土している。

時　期　炉の形状から後期初頭と推定される。

SI294（図面52・55・225）

位　置　調査区のやや東寄りの15Cに位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に炉を確認する。

炉　　長軸80cm、短軸55cmの土器埋設複式炉である。長軸方向はN－21.5°－Eを測る。石組部底面は大きさ約25cm程度の扁平礫と土器片各１点を用い、側石も同様の扁平礫を用い構築している。土器埋設部は径25cmの深鉢を埋設し、縁石は長さ15cmの扁平礫を一重に巡らせている。前庭部は認められ、長さ17cmの礫で短い裾部としている。

柱　穴　炉周辺から多くのピットが検出された。15C－P3・6・10・11・12・104が柱穴と推定される。

重複関係　SK417の上に構築され、SI295、SK327とは新旧関係が不明である。古　SK417→SI294　新。

出土遺物　炉より土器９点・3.17kg（124・125）、石器：不定形石器１点・敲磨石類１点・石皿１点・剥片類５点、礫36点・16.285kg（うち被熱礫28点・12.829kg）、P3より土器６点・40g、P6より剥片類１点、礫２点・30g（うち被熱礫１点・15g）、P10より土器１点・10g、P11より土器15点・120g、礫１点・4.3kg、P12より土器４点・100gが出土している。

時　期　炉体土器から大木10式期と推定される。

SI295（図面52・55・225）

位　置　調査区のやや東寄りの15Cに位置する。

検出状況　SI190aの礫を除去後、周辺を削平中に炉を確認する。

炉　土器埋設複式炉で、長軸91cm、短軸66cm、長軸方向はN－45°－Eを測る。石組部は底面と東側面の一部が破壊されているが、底面は大きさ15cm程度の扁平礫を敷き、側面は15～30cmの大きさにばらつきのある礫を並べている。土器埋設部との境石は、大きさ35×19×6cmの扁平大礫を用いている。土器埋設部は径約30cmの深鉢を埋設し、縁石は巡らない。前庭部は認められなかった。

柱　穴　炉周辺から多くのピットが検出された。15C－P9・13・105・106・107が柱穴と推定される。いずれも径30～60cmでしっかりとした掘り込みをもち、五角形状に並ぶ。

重複関係　SK417の上に、SI54・190aの下に構築され、SI294とは新旧関係が不明である。古SK417→**SI295**→SI54・190a　新。

出土遺物　炉より土器2点・1.85kg（126）、不定形石器1点、礫55点・39.701kg（うち被熱礫53点・39.266kg）、P9より礫4点・3.843kg（うち被熱礫1点・330g）が出土している。

時　期　炉の形状から中期末葉と推定される。

SI339（図面37・40・226）

位　置　調査区のほぼ中央、14Dに位置する。

検出状況　上層のSI60・206の調査で、下層から炉の石組部を確認する。

炉　土器埋設複式炉と推定されるが、上層の遺構との重複により土器埋設部及び石組部の上部は欠損している。石組部底面及び前庭部側の側石、土器埋設部の焼土が遺存しているだけであり、被熱でひび割れているが扁平大礫を並べ構築している。

柱　穴　炉周辺から多くのピットを検出したが、特定できなかった。

重複関係　SI60・206の下に構築されている。古　**SI339**→SI206→SI60　新。

出土遺物　炉の覆土より土器66点・1.19kg（127・128）、剥片類10点、礫60点・35.205kg（うち被熱礫54点・34.725kg）が出土している。

時　期　伴出土器から大木10式期と推定される。

そ の 他　炉の長軸方向に沿って約2.6×0.9mの帯状の落ち込みが認められた。他の遺構のピットと炉の掘形が組み合わさった結果と推定される。

SI366（図面63・64・226）

位　置　調査区のやや南寄りの16D・17Dの境に位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に炉を確認する。

炉　撹乱のため炉石の多くを欠損するが、土器埋設石組炉と推定される。石組部は北側の一部に炉石が認められるのみである。土器埋設部は入れ子状に埋設されるが、東側は破壊されている。遺存部分を見る限り、炉体土器は北寄りに埋設されたと推定される。

柱　穴　炉周辺からいくつかのピットを検出し、P1～7が柱穴と推定される。径20～50cmとばらつきがあるものの、いずれもしっかりとした掘り込みをもつ。

重複関係　無し。

出土遺物　炉より土器183点・4.54kg（129）、石器：不定形石器2点・剥片類10点、礫26点・857gが出土している。

時　期　炉の形状から後期初頭と推定される。

SI371（図面76・77・226）

位　　置　調査区の南寄りの19F・19Gに位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に南調査区際に4.5×6mの範囲で落ち込みを確認する。

平 面 形　プランは調査区外に延びるが、大型長方形の竪穴住居と推定される。

規　　模　長軸方向4.6m、短軸方向6.0m、確認面からの深さ25cmを測り、長軸方向はS－43°－Wである。

覆　　土　基本層序のⅣ層（沼沢火山灰層）を多く含む暗灰黄色土に覆われ、自然堆積と推定される。

炉　　確認されていない。

柱　　穴　竪穴住居内より小ピットを含め多くのピットを確認した。比較的規模が大きく、しっかりとした掘り込みをもつP1～5が柱穴と推定される。これらは両壁沿いに並行する。

重複関係　SK375・451と重複するが、切られている。古　**SI371**→SK375・451　新。

出土遺物　覆土より土器532点・17.31kg（130～143）、石器：石錐1点・不定形石器9点（156）・磨製石斧1点（239）・三脚石器1点（181）・敲磨石類5点（293）・石皿3点・剥片類41点、礫408点・81.106kg（うち被熱礫56点・19.319kg）が出土している。

時　　期　出土土器から大木7b・8a式の過渡期と推定される。

SI396（図面68・69・198・227）

位　　置　調査区の南東寄りの17C・18Cに位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に約4.0×4.5mの不整方形状の落ち込みを確認する。

平 面 形　近世墓により一部破壊されているが、不整長方形を呈する竪穴住居である。

規　　模　長軸5.6m、短軸4.7m、確認面からの深さ23cm、面積22.2m^{2}を測る。長軸方向はS－50°－Eである。

覆　　土　木根による撹乱土が多いものの、黒褐色土を主体とする土に覆われ、自然堆積と推定される。

炉　　土器敷き長方形石組炉が住居内のほぼ中央に存在する。長軸86cm、短軸57cmを測る。長軸方向はS－46°－Eで、住居の長軸方向とほぼ一致する。石組部は10～35cmの長さにばらつきのある扁平礫を横に立てて構築している。炉内は大きさ5～10cm程度の土器片を敷き詰めている。土器片は数個体の破片からなっている。

柱　　穴　住居内から大小多くのピットが検出された。P5・10・11・12・13・14・16・25が柱穴と推定される。これらは径30～50cmでしっかりとした掘り込みをもつ。長辺の壁沿いに4本ずつ並行し、それぞれ対になる。

重複関係　SK398の上に構築され、南東側で近世墓壙に破壊されている。古　SK398→**SI396**→近世墓壙　新。

出土遺物　炉及び覆土から土器169点・5.075kg（144～150）、石器：不定形石器2点・剥片類10点、石製品2点（462）、礫147点・103.623kg（うち被熱礫57点・35.278kg）が出土している。

時　　期　炉敷き土器から新崎式Ⅲ段階（大木7b式新段階並行）と推定される。

SI428（図面78・79・227）

位　　置　調査区の最も南寄りの20F・21Fに位置する。

検出状況　Ⅲ層削平中に調査区際に約5.5×4.5mの範囲で落ち込みを確認する。

平 面 形　プランは調査区外に延びるが、大型長方形の竪穴住居と推定される。

規　模　長軸方向5.9m、短軸方向4.7m、確認面からの深さ25cmを測り、長軸方向はS－39°－Wである。

覆　土　基本層序のⅣ層（沼沢火山灰層）を多く含む暗褐色土に覆われ、自然堆積と推定される。

炉　確認されていない。

柱　穴　住居内から大小多くのピットを検出した。P1～6・21～23が柱穴と推定される。径30～100cmと大きさにばらつきがあるものの、しっかりとした掘り込みをもつ。東壁側に5基、西壁側に4基あり、それぞれ並行する。

壁　溝　P1・6の北側から北壁にかけて3本の小溝が検出された。いずれも幅20～30cm、深さ20cm程度である。SI428の壁溝と考えられ、建替え及び拡張が推定される。

重複関係　SK429、SD421に切られ、SK422とは新旧関係が不明である。古　**SI428**→SK429→SD421　新。

出土遺物　覆土及び壁溝より土器121点・2.56kg（151～156）、石器：不定形石器2点・剥片類8点、礫111点・15.049kg（うち被熱礫36点・1.176kg）、P21より土器1点・70g、P22より土器1点・40gが出土している。

時　期　出土土器から大木7b・8a式の過渡期と推定される。

SI467（図面81・228）

位　置　調査区の南縁の22Fに位置する。

検出状況　常浪川に接する段丘崖のため、基本層序Ⅳ層（沼沢火山灰層）は堆積せず、Ⅷ層を削平中に約1.5×4.5mの範囲で落ち込みを確認する。

平面形　遺存する部分から円（楕円）形、またはSI472のように隅丸長方形状を呈する竪穴住居と推定される。

規　模　住居の大半は常浪川の浸食により流失している。4.7×1.6mの範囲で住居の一部を検出した。

覆　土　褐色土を基本とする土に覆われ、自然堆積である。

炉　常浪川の浸食により流失している。

柱　穴　2基検出した。P1は一部破壊されているものの、径50cm、深さ35cm、P2は径62cm、深さ59cmを測り、しっかりとした掘り込みをもつ。

壁　溝　西壁沿いに幅20～50cm、深さ10～15cmの溝が検出された。壁溝が巡るものと推定される。

重複関係　SX465の下に構築されている。古　**SI467**→SX465　新。

出土遺物　覆土より土器48点・825g（157）が出土している。

時　期　住居の位置や方向性、掘り込みや壁溝、柱穴等の形状からSI472に近似する。このことから大木9式期の住居と推定される。

SI472（図面78・79・198・228・229）

位　置　調査区の南縁の21D・21Eに位置する。

検出状況　常浪川に接する段丘崖のため、基本層序Ⅳ層（沼沢火山灰層）は堆積せず、Ⅶ層を削平中に約6.0×5.0mの範囲で落ち込みを確認する。

平面形　隅丸長方形状を呈する竪穴住居である。

規　　模　横長の住居であり、長さ5.2m、幅6.2m、面積27.8m^{2}を測る。住居の軸方向はS－74.5°－Eである。

覆　　土　炭化粒を含んだ褐色土、黒褐色土のⅡ層に識別され、自然堆積である。

炉　　大型の土器埋設複式炉で、遺存状態とつくりは極めて良い。長軸181（掘形235）cm、短軸173（掘形193）cm、長軸方向はS－70.5°－Eである。石組部は底面、前庭部側、土器埋設部側に、大きさ約20cm程度の扁平礫を敷き並べ、両側面は10～15cm程度の礫を敷き詰め、擂鉢状に構築している。土器埋設部は径33cm（2号炉体土器）と23cm（3号炉体土器）の2個の深鉢を埋設し、さらにほぼ長軸線上45cm離れて石蓋付の径35cmの深鉢（1号埋設土器）を埋設している。周囲の縁石は2号・3号炉体土器には幅約20cmで帯状に巡るが、3号炉体土器の頂辺部分には礫は巡らない。前庭部は認められ、深いところで床面より18cm掘り込まれている。前庭部と石組部との境には長さ15cm程度の礫を2列に並べている。裾部の裾石は片側が抜き取られているが、45～50cmの長大礫を用いたものと推定できる。

床　　面　基本層序Ⅷ層を床面とし、ほぼ平坦である。北側のP1とP5の間、P1とP3の間に暗褐色土で貼床がされている。1.2×1.6m、1.1×1.2mの範囲で、極めて硬化していた。

柱　　穴　住居内から7基のピットを検出した。すべて柱穴と推定される。P7（深さ27cm）を除き、径60～100cm、深さ22～84cmを測り、炉を挟んで南北に3基ずつ並び、それぞれが対になる。P1・P2は規模が大きく深い。主柱穴と推定できる。

壁　　溝　幅20～30cm、深さ15cmの溝が壁沿いに全周する。また、炉の東側では二重に巡っている。

重複関係　21E－1号集石の下に構築され、近世墓壙の撹乱があった。古　**SI472**→21E－1号集石新。

出土遺物　覆土、床面、炉から土器299点・13.939kg（158～163）、石器：不定形石器2点・磨製石斧1点（243）・敲磨石類3点・砥石1点・剥片類35点、礫14点・3.808kg（うち被熱礫5点・1.238kg）が出土している。なお、P6の床面レベルから剥片13点と磨製石斧1点が集中して出土している。またP1から石製碗（508）が出土している。

時　　期　出土土器、炉の形状から大木9式期新段階と推定される。

SI475（図面75・229）

位　　置　調査区の南縁の20Dに位置する。

検出状況　常浪川に接する段丘崖のため、基本層序Ⅳ層（沼沢火山灰層）は堆積せず、Ⅷ層を削平中に約1.0×3.0mの範囲で落ち込みを確認する。

平 面 形　常浪川に大きく浸食され、竪穴住居であるものの平面形は不明である。

規　　模　3.0×1.1mの範囲で住居の一部が検出されたのみで、不明である。

重複関係　SK480の上に構築されている。古　SK480→**SI475**　新。

出土遺物　覆土より土器5点・120gが出土している。

時　　期　住居の位置、方向性からSI467・472と同時期と推定されるが、大きく欠損しているため断定できない。

B　土　　坑

おおむね長径70cm前後以上の穴である。土坑としたものは総数328基を数える。柱穴やピット（意味

不明の小さな穴）[1] と推定されるもの、複数のピットや柱穴の重複と思われるものをできる限り除外した。また、調査区東側の近世以降の墓壙は調査対象外のため含めていない。

1）観察表の記載項目

多くの土坑が検出されたため、本文で記述されている土坑も含め、すべての土坑の基本的な観察項目を観察表に記入した。土坑を対象とした観察項目について説明する。

分　　類　次項2）分類に詳述している。

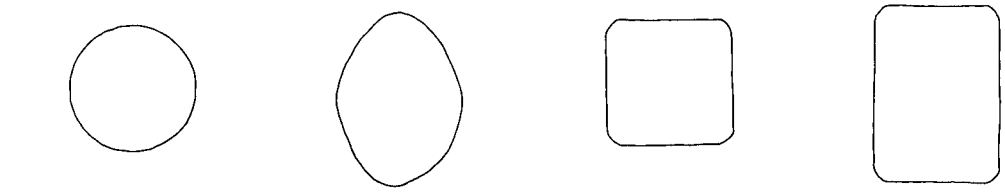
平 面 形　円形・楕円形の区分は、長径（長軸）が短径（短軸）の1.2倍未満のものを円形、1.2倍以上のものを楕円形とした。方形・長方形の区分は、長辺（長軸）が短辺（短軸）の1.2倍未満のものを方形、1.2倍以上のものを長方形とした。この平面形に近いが、いくらか形が整っていない（不整）ものは、それぞれの形の前に「不整」をつけた。しかし、どの平面形とも異なり、形が整っていないものは「不整形」とした。平面形のおおよその基準は、第13図のとおりである。

断 面 形　底面、側壁、深さの状態から7分類し、この分類からはずれ、形が整わないものは「不整形」とした。断面形はU字形、逆台形、皿形、椀形、スリ鉢形、フラスコ形（A・B）、小フラスコ形である。なお、フラスコ形の多くは、側壁が崩落し原形をとどめていなかった。覆土の状態から崩落前の断面を想定して判断した。また、U字形と小フラスコ形、逆台形と皿形などでいずれに分類されるか判断しかねるものも存在した。断面形の模式図は、第14図のとおりである。

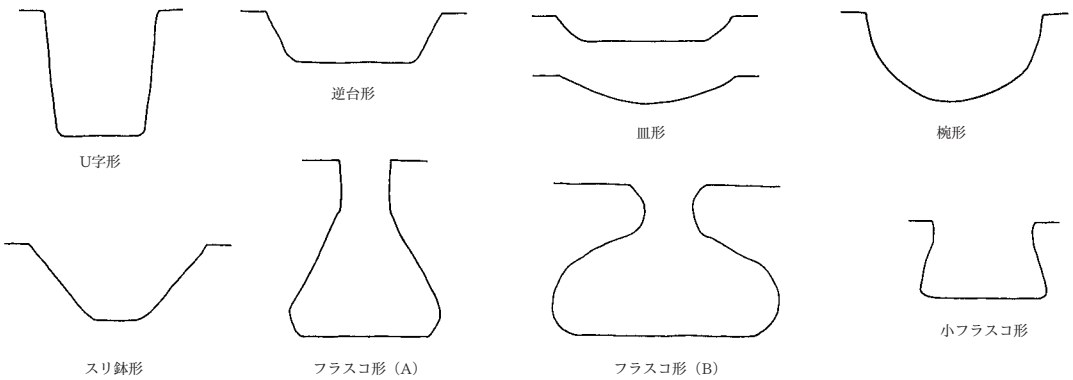
長軸方向　長径・長辺（長軸）の方向であり、北を基準に東にどれだけ向いているかを求めた。

2）分　　類

328基の土坑は、形状・規模・時期など様々のものを含んでいる。このうち、覆土の様子[2] から縄文



第13図　平面形の分類基準図



第14図　土坑断面形模式図

時代のものと縄文時代以降の遺構[3]に分けた。次いで縄文時代の遺構は断面形、平面形、規模（長径、深さ）により細分した。

A類　断面フラスコ状ないしは袋状を呈し、底面は開口部より広がる傾向にあるもの。地山の崩落により、断面フラスコ状ないしは袋状を呈しない場合もあるが、崩落以前を想定し判断した。

A1類　規模が大きく深いもの。基本層序Ⅳ層（沼沢火山灰層）の崩落が激しく、断面がほぼ円筒状になったものが多い。主に15～17、Ｂ・Ｃグリッドに集中する。

A2類　規模が大きく深いもの。基本層序Ⅳ層（沼沢火山灰層）の崩落が少ないため、断面三角フラスコ状ないしは袋状を呈し、典型的なフラスコ形土坑を呈する。主に19～21、Ｆ・Ｇグリッドに集中する。

A3類　A1・2類よりやや規模が小さく、断面は弱い三角フラスコ状ないしは袋状を呈するもの。いわゆる「小フラスコ状土坑」といわれるものである。

A4類　底面の形状や大きさ、立ち上がりの状態から、元々はフラスコ状土坑であったと推定されるもの。調査区東側の常浪川の段丘崖近くにあり、沼沢火山灰層をはじめとする基本層序の多くが流されたため、深さが浅くなったものと思われる。

B類　長さや幅が約1m前後、深さがやや深く（約30cm以上）、側壁の立ち上がりが急～垂直～オーバーハング気味のもの。底面はほぼ平坦である。A3類を浅くしたようなものも多く含まれ、区別しかねるものも存在する。

B1類　平面形がほぼ円形（不整円形を含む）のもの。

B2類　平面形が楕円形（不整楕円形を含む）のもの。

B3類　平面形が方形・長方形（不整方形・長方形を含む）のもの。

C類　長さや幅が約1m前後、深さがやや浅く（約30cm未満）、側壁の立ち上がりが緩いもの。底面はほぼ平坦である。

C1類　平面形がほぼ円形（不整円形を含む）のもの。

C2類　平面形が楕円形（不整楕円形を含む）のもの。

C3類　平面形が方形・長方形（不整方形・長方形を含む）のもの。

D類　Ｂ・Ｃ類に比べ、規模がやや小さい（径60～80cm程度）もの。柱穴かどうか検討を要するものもある。

D1類　深さがやや深いもの（約20cm以上）。側壁は急斜～垂直に立ち上がる。

D2類　深さが浅いもの（約20cm未満）。側壁は緩く立ち上がる。

E類　規模が大きく（径約1.5m以上程度のもの）、深さの浅いもの。

E1類　底面がほぼ平坦なもの。

E2類　底面が擂鉢状に窪むもの。側壁は緩く傾斜し、凹凸が激しいものが多い。

F類　覆土の様子から、中世以降～近年の土坑と推定されるもの。

1）ピットは極めて多く検出され、その多くが住居の柱穴と推定される。しかし、実際はその一部が柱穴と確定された以外、何ら意味付けされていない。

2）主に現地調査において判断されたものであり、感覚的であるが縄文時代の遺構は覆土にしまりがあり、地山との境もわずかに不明確である。これに対し縄文時代以降の遺構は、覆土にしまりが無く、地山との境も明確に区別できる。

3）縄文時代以降の遺構・遺物で確実に遡れるものとして、遺物では9世紀終わり～10世紀初めと推定される土師器であり、遺構ではSD127の中世である。縄文時代以外の遺構は、覆土や遺物から中世以降と考えている。

G類　その他、どの分類にも当てはまらないもの。遺構の重複や撹乱、調査区外に延びたりして全容が明らかでなく分類できないもの。

3）分類別検出数と分布

分類別検出数は第２表、分類別の分布は第15図のとおりである。時期が多様であるため一概に比較はできないものの、中期末葉～後期初頭の集落跡内外の11～17・B～Eにほとんどが分布する。この他、中期前葉～中葉の集落跡の19F～21F、調査区東側の段丘崖近くにいくつか分布する。分類別の検出数ではA類55基（16.8％）、B類69基（21.0％）、C類64基（19.5％）、D類34基（10.4％）、E類39基（11.9％）、F類14基（4.3％）、G（分類不可）類53基（16.2％）となり、著しい片寄りは認められない。

以下、分類別に詳述する。

A類　断面形がフラスコ状または袋状を呈するもので貯蔵穴と推定されている。A1類は15～17・B～Cに集中分布する。これらの土坑は中期末葉～後期初頭の集落跡の住居跡や土坑の下に構築され古くなる。遺物は極めて少ないものの大木7b～8b式期の遺構と推定される。また、断面形は第14図の模式図「フラスコ形B」に近いものが多く、側壁が基本層Ⅳ層であることもあり、多くは上部が崩落している。A2類は４基と少ないもののすべて19F～21Fで検出されている。一括遺物を多く伴い、大木7b～8a式期の遺構である。また、断面形は第14図の模式図「フラスコ形A」に近いものが多く、側壁の崩落が少ない。A3類はA1・A2類に比べやや小さくいわゆる「小フラスコ状土坑」と呼ばれているものである。B類の深いものと近似するものが多い。13基検出し、その多くは中期末葉～後期初頭の集落跡のやや外側に分布する傾向が認められる。A4類は８基検出し、７基が調査区東側の18A～20Dにかけて分布する。底面や側壁の立ち上がりの様子からフラスコ状土坑と推定されるが、側壁は遺存していない。調査区東側は常浪川の段丘崖に接し、基本層序Ⅳ層は流出していた。したがって、側壁の多くも流出したものと推定される。

B類　平面形で３細分した。分類別では楕円形（38基）・円形（25基）が圧倒的に多く、方形・長方形（6基）が少ない。平面形による分類別の片寄りが認められない。中期末葉から後期初頭の集落跡にほとんどが分布する。

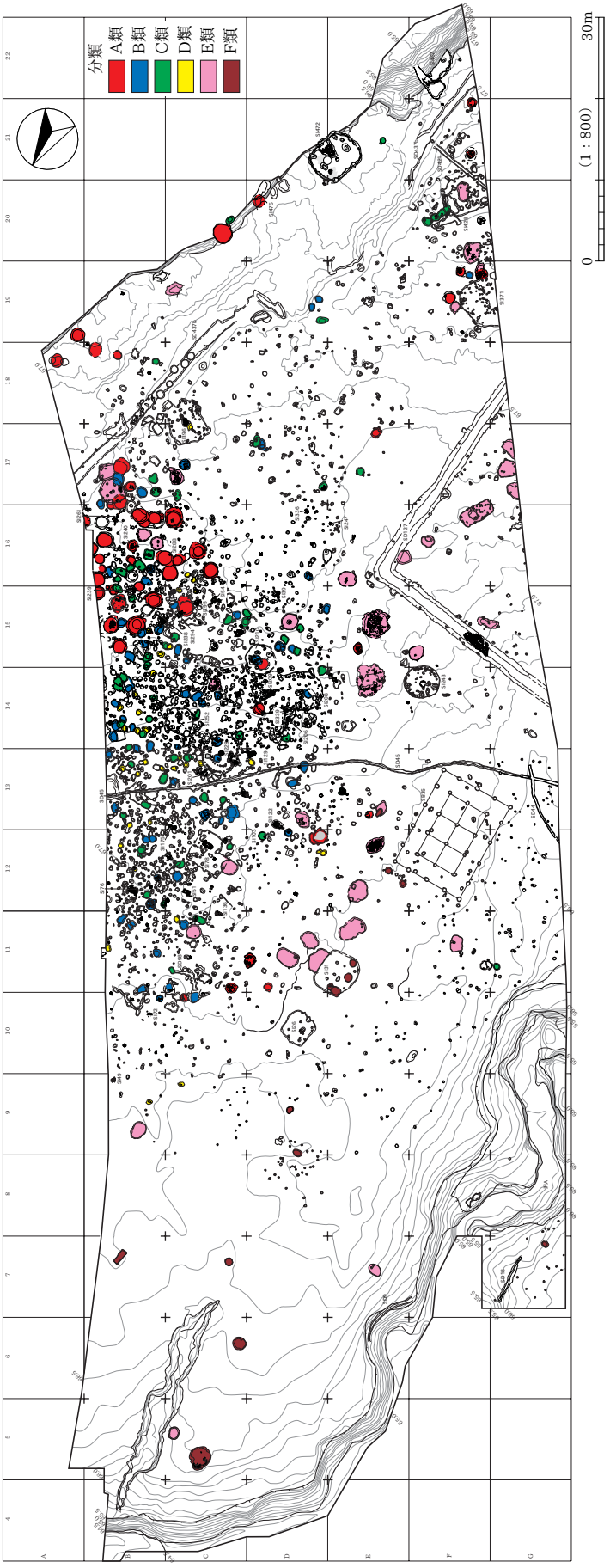
C類　平面形でB類と同様に３細分した。分類別では楕円形（35基）・円形（23基）が圧倒的に多く、方形・長方形（6基）が少ない。平面形による分類別の片寄りが認められない。中期末葉から後期初頭の集落跡にほとんどが分布する。

B類とC類は深さにより分類したが、検出数や分布に違いが認められなかった。

D類　B・C類に比べ、さらに平面形が小さくなる。柱穴やピットとの区別がつかないものも存在するが、深さにより２細分した。１・２類による分布の片寄りは認められない。しかし、B・C・E類と比べると、中期末葉～後期初頭の集落跡にほとんど分布するがその範囲は狭くなり、集落跡の中心部に集中傾向が見られる。

分類	検出数	分類	検出数	分類	検出数	分類	検出数	分類	検出数	分類	検出数	分類	検出数
A1類	30	B1類	25	C1類	23	D1類	25	E1類	26	F類	14	G類	53
A2類	4	B2類	38	C2類	35	D2類	9	E2類	13				
A3類	13	B3類	6	C3類	6								
A4類	8												
A類計	55	B類計	69	C類計	64	D類計	34	E類計	39	F類計	14	G類計	53

第２表　土坑分類別検出数



第15図　分類別土坑分布図

E類　深さが浅いものの規模（径）が最も大きい土坑であり、底面が比較的平坦なものと底面と側壁の凹凸が激しいものがある。礫を含めた遺物が極めて多い土坑と少ない土坑がある。分布は9～17・B～Eの中期末葉～後期初頭の集落跡の外側を巡るように分布する。伴出遺物から中期末葉～後期初頭に所属するものと考えている。なお、17～20・F～Gにもいくつかの分布が認められる。いずれも底面と側壁の凹凸が激しいE2類であり、伴出遺物から中期前葉～中葉に所属し、中期前葉～中葉の集落跡に伴う土坑と推定できる。

F類　覆土や遺構と地山の境の様子から明らかに縄文時代の遺構と異なるもので、平面形・断面形・規模・深さなどの形状は様々である。調査区北西部から西側にかけて散漫に分布する。この区域は中世以降の所産と推定されるSI26・31、SB35、SD127などの遺構が存在する区域であり、新しい土坑の分布と一致する。

G類　分類不可能な土坑であるものの中期末葉から後期初頭の集落跡に多く分布することから、多くは該期の所産と考えている。

4）個別土坑の説明

以下では個々の土坑で特徴的な事柄のみを抽出し記述した。これ以外は観察表に委ねる。

SK1（図版5・230）

覆土の様子から新しい遺構と推定される。北側から礫が廃棄され、礫142点・48.283kgを数えた。

SK4（図版6・8・230）

覆土の様子から新しい遺構と推定される。平面形は整った長方形、底面も平坦で、側壁も垂直に立ち上がる。

SK8（図版7・8・231）

縄文時代の遺構が密集した区域から離れた7Eに存在するものの、覆土の様子から縄文時代の遺構の可能性がある。長径178cmの大形土坑であり、平坦な底面の東側に長さ62cm、太さ18cmの棒状礫が、長軸と直交する形で置かれていた。

SK24（図版12・13・233）

縄文時代の遺構が密集した区域から離れた11Fに存在し、径208×152cmを測る大形土坑である。底面の東寄りに径24cm、深さ15cmのピットを検出した。ピットの側壁には被熱礫6点を貼り巡らせ、覆土には炭化粒が多く含まれていた。したがって、ピット内で火の使用が推定できる。但し、ピットがSK24に伴うかどうか判断できなかった。

SK28・63・64・65（図版14・16・17・234・237・238）

径130～150cm前後、深さ50cm前後の小フラスコ状土坑である。礫を含む遺物の混入がやや多い。10C・11C～Dにややまとまって認められる。伴出遺物から大木10式古段階の所産と推定される。ほかにSK66・81・82・95などやや浅いものもあるが、これらの近くに存在し同様の土坑である。

SK33・34（図版7・8・235）

調査区西側の沢Aの右岸、8Fに位置し、確認面から底面まで長さ10～40cmの大礫約40点で覆われていた。周辺には礫が無いことから、意図的に大礫を集中させたものと推定できる。遺物は礫のほかに、大木8a式期の土器片が礫の間やSK34の底面から出土している。このことから両土坑と礫の構築物は大木8a式期の所産と推定できる。

SK36・41・42・43（図版12・13・235・236・237）

いずれもSI31内に存在する土坑でSI31の覆土中で確認されていることから、SI31より新しい。

SK37（図版27・28・236）

中期末葉～後期初頭の集落跡の西はずれ、12Eに位置する。長径274cmを測る大形土坑である。覆土上～中層にかけて廃棄されたと推定される遺物が多く混入していた。伴出遺物から三十稲場式期の所産と推定される。

SK38・67・68・69・71（図版12・13・14・17・27・28・236・238・239）

11D・E、12Eにまとまって検出されている。いずれも長径２～3mの大型で浅い土坑である。底面が比較的平らなE1類に分類される。いずれも出土遺物が少ないものの覆土の様子や位置、類似遺構の伴出遺物から中期末葉～後期初頭に所属する。

SK75（図版14・17・239）

小型でやや深いE1類の土坑であり、覆土上層に深鉢１個体が横位に置かれ、直下に17×16×4cmの扁平礫が敷かれていた。伴出土器から大木10式古段階の所産と推定できる。

SK80（図版21・23・240）

長径216cm、深さ42cmの大形で浅い土坑である。上面～覆土最上層にかけて被熱礫を含む礫が多数出土したが、これ以外では遺物は少ない。前述のSK38・67・68・69・71と同様E1類の土坑である。

SK90（図版35・36・242）

覆土上層から下層まで土器が多く出土する。伴出土器から三十稲場式期と推定される。

SK93（図版21・23・242）

規模的にはA1類に相当するが、覆土や断面を見る限り、側壁の崩落は少なくやや抉れる程度の側壁と推定できる。小フラスコ状土坑（A3類）の断面に極めて近い。また、出土土器も中期末葉～後期初頭に属し、位置的に見てもA1類の集中分布区域から離れている。したがって、規模は大きいがA3類とした。なお、覆土中に２層にわたり、焼土の堆積が見られた。自然堆積の途中に焼土が廃棄されたものと推定される。

SK104（図版47・48・244）

上面に長さ35～60cm、太さ10～25cmの棒状礫４点を各２点ずつ直交するように並べている。うち２点は斜め状態であり、元々は立石の可能性がある。また礫の直交部分に深鉢の下半部分～底部が置かれている。礫の直交部分に置かれた土器から加曽利Ｂ式期の所産と推定される。

SK105（図版14・18・244）

遺物はわずかだったが、覆土中層に48×40×4cmの扁平礫が蓋状に置かれていた。扁平礫は軟質でもろい石材である。

SK115（図版14・18・247）

覆土中～下層から棒状礫（長さ47～61cm、太さ17～23cm）、扁平礫（約40×30cm、厚さ約5cm）、土器が出土している。廃棄か埋設かどうか判断できなかった。出土土器（183）から大木10式古段階の所産である。

SK126（図版47・48・249）

中期末葉～後期初頭の集落跡の外縁部、15Eに位置する。長径386cmの大形で、底面及び側壁の凹凸が激しいE2類の土坑である。断面形はおおむね中心部が窪む「擂鉢状」を呈する。覆土中には礫を含む

土器・石器など遺物が多数出土した。出土状況から廃棄と推定される。出土遺物から三十稲場式期と推定できる。

SK128（図版21・24・249）

中期末葉～後期初頭の集落跡の外縁部、13Dに位置する。SK126に類似する土坑であり、時期も同様に三十稲場式期と推定できる。

SK135（図版61・62・250）

中期末葉～後期初頭の集落跡の外縁部、15E・16Eの境に位置する。大形で底面が比較的平坦なE1類の土坑である。覆土上層より土器1個体が出土している。出土土器（211）より大木10式古段階の所産と推定される。

SK142（図版29・32・251）

小形で浅いD2類の土坑である。覆土中層より礫を含む遺物がやや多く出土するが、埋設等の意図したものでない。

SK144（図版29・32・251）

覆土下層よりまとまってはいないが、三十稲場式と推定される土器（213）が出土している。

SK145（図版29・32・252）

小フラスコ状土坑に近いB2類の土坑である。北西側斜め上方に13B－2号集石が存在するが、本遺構との関係は明らかでない。覆土に遺物がやや多く混入するが、意図的なものでない。

SK150（図版29・32・253）

中期末葉～後期初頭の集落跡の中心部付近と推定される13Bに位置する。東側は調査区外に延びている。したがって、全容は明らかでないが、不整（長）方形状になるものと推定される。一辺3.1m、基本層Ⅱ層中から掘り込み、深さ約110cmを測る。底面・側壁はやや凹凸があり、断面形は椀形を呈する。遺物は少なく、明確に時期決定のできる土器は出土していないが、おおむね中期末葉～後期初頭の土器片と思われる。覆土の様子からも該期の所産と推定している。

SK156（図版21・253・254）

覆土中～下層より深鉢が横位に置かれた状態で出土する。大木10式古段階と推定できる[1)]。

SK158（図版21・24・254）

小フラスコ状土坑に近いB2類の土坑である。覆土より礫を含む遺物がやや多く出土している。

SK159（図版21・24・254）

小フラスコ状土坑に近いB3類の土坑である。覆土より礫を含む遺物がやや多く出土している。時期は出土土器（220・221）から大木10式古段階と推定される。

SK165（図版29・32・254）

SK166と重複し、平面形は明確でない。覆土より大形の鉢が1個体出土している。時期は出土土器（222）から大木10式古段階と推定される。

SK211・212（図版29・32・256・257）

中期末葉～後期初頭の集落跡の中心部付近と推定される14Bに位置する。いずれも円形で浅いC1類の

1） 発掘調査後から整理作業前までに遺物の照合ができなくなっていた。発掘調査時の所見、記録写真から器種・時期を決定した。

土坑である。覆土から礫を含む遺物がやや多く出土している。時期は出土土器（226）から大木10式古段階と推定される。

SK216・217（図版29・33・257）

中期末葉～後期初頭の集落跡の中心部付近と推定される14Bに位置する。遺構確認面より上部から大きさ30cm前後の扁平礫が多く認められたものの、本遺構との関連は明確でない。

SK221（図版29・33・258）

覆土下層より礫を含んだ遺物がやや多く認められた。意図的なものとは認められない。土器片は時期を限定できるものはなく、粗製の深鉢の破片である。

SK242（図版47・49・260）

中期末葉～後期初頭の集落跡の外縁部、14Eに位置する。長径444cmの大形で、底面及び側壁の凹凸が激しいE2類の土坑である。断面形はおおむね中心部が窪む「擂鉢状」を呈する。上位に241号集石、14E－2号焼土が存在するが、本遺構の確認面とレベル差があり関連は不明である。覆土には礫を含む土器・石器など遺物が多数出土した。出土状況から廃棄されたものと推定される。時期は出土遺物から三十稲場式期と推定できる。

SK253（図版37・41・224）

覆土より礫を含む遺物がやや多く出土している。出土土器（229・230）は大木10式新段階と三十稲場式が伴出している。

SK254（図版37・41・261・262）

14Cに位置する小フラスコ状に近似するB2類の土坑である。覆土より礫を含む遺物がやや多く出土した。時期は出土土器（231）から加曽利B式期と推定される。

SK256（図版37・41・262）

14Cに位置する小フラスコ状に近似するB3類の土坑である。覆土より大礫を含む遺物がやや多く出土した。土器はいずれも破片で粗製土器である。

SK259（図版37・41・262）

14Cに位置する平面形及び断面形が不整形で、大形のE2類の土坑である。他のE2類土坑と同様、覆土に礫が多く混入していた。時期は位置・覆土の土器片から中期末葉から後期初頭の範囲に含まれる。

SK265（図版37・41・263）

15Bに位置するB2類の土坑である。覆土中～下層にかけて大礫がやや多く混入していた。

SK270（図版37・42・264）

15Bに位置するA1類の土坑である。覆土中層に礫1,052点・171.54kgが混入していた。フラスコ状土坑が埋没する過程で廃棄されたものである。

SK271（図版37・42・264・265）

15Dに位置し、径216×206cmを測り、底面が平らなE1類の土坑である。小形の竪穴住居状であるが、炉や柱穴は検出されていない。なお、15D－2号・3号・9号埋設土器と重複するが、これよりも古い。

SK278（図版37・39・220・266）

14D・15Dの境に位置するフラスコ状土坑である。規模的に見るとA1類であるものの、A1類が集中する15～17・B～Cから10mはなれて構築されている。また、断面形も側壁が直線的に立ち上がるな

どの違いが認められる。但し、中期末葉のSI210の下に構築され、周囲の遺構より古いものと推定できる。時期を判断できる遺物の出土が無いため、中期前葉～中葉または中期末葉のいずれか明確でない。

SK279（図版61・62・266）

16Dに位置するB2類の土坑である。覆土中～下層にかけて礫を含む遺物が多く出土した。時期は出土遺物から中期末葉～後期初頭の範囲に含まれる。

SK282（図版37・42・267）

15Cに位置するG類の土坑である。覆土に礫が多く混入し、21点・35.488kgを数える。

SK283（図版37・42・267）

東側の一部を撹乱で破壊されるが、遺存する部分の覆土中～下層から遺物が多く出土した。時期は出土土器（232～234）から大木10式期と推定される。

SK315・316（図版61・62・71・72・270・271）

いずれも16Fにある大形で底面の凹凸が激しいE2類の土坑である。出土土器（236）は多くはないものの、すべて中期前～中葉の土器であることから該期の時期と推定される。

SK319（図版37・43・271）

15Bに位置する小形のD2類の土坑である。上面に石皿2点を含む扁平礫3点が認められた。なお、SK317、フラスコ状土坑のSK318と重複し、これより新しい。A1類のフラスコ状土坑は15～17・B～Cに集中するが、土坑B・C・D・E類の下に構築され、この地区では最も古い土坑である。

SK322（図版52・56・272）

15Bに位置するフラスコ状土坑のA1類である。覆土下層より礫を含む遺物がやや多く出土している。時期は出土土器（237）から大木8b式期である。

SK329（図版37・43・273）

中期末葉～後期初頭の集落跡の中心部、14Bに位置するC2類の土坑である。扁平礫が上面に2点、底面に1点認められる。

SK333（図版47・49・274）

14Dに位置するG類の土坑である。遺物はわずかであるものの、三十稲場式の土器であり、該期の所産と推定される。

SK344・457（図版63・64・66・275・295）

いずれも敷石住居SI190aの下に近接して構築されている。上面に比較的大きな礫が数点ずつ認められ、礫のあり方が近似する。

SK347（図版29・33・275）

SI228の下に構築された土坑である。上部はSK228に破壊されているため浅いが、本来は深くB1類と推定される。底面から深鉢がほぼ1個体分出土している。時期は出土土器（239）から大木10式期と推定される。

SK348（図版52・56・276）

SI190a・295に接し、この下の構築されていると推定される土坑であり、小形のD2類に分類される。上面に大礫3点が認められる。

SK352（図版68・69・276）

中期末葉～後期初頭の集落跡の南東側外縁部にあたる17Bに位置する。径346×324cm、確認面から

の深さ16cmの大形で底面が平坦なE1類の土坑である。当初、竪穴住居の可能性も想定したが、柱穴や炉が認められないことから土坑とした。南西側の側壁の近くに石組みを伴う。長さ約45cmの棒状礫を3個並列し、両端は長さ30cmと25cmの礫をそれぞれ沿わせている。また、ほぼ中央に被熱礫を伴うピットを検出したが、覆土の様子から撹乱によるピットと判断した。周囲にはいくつかの遺構と重複するが、後期中葉のSK413に切られ、中期前葉～中葉のフラスコ状土坑SK360の上に構築されている。新旧関係から中期末葉～後期初頭と推定できるが、出土土器からも裏付けられる。

SK367（図版71・72・279）

中期末葉～後期初頭の集落跡の南側外縁部にあたる17Dに位置するC1類の土坑である。覆土より礫を含めた遺物がやや多く出土した。時期は出土土器（240）から三十稲場式期と推定される。

SK374（図版76・77・280）

中期前葉～中葉の集落跡にあたる19Fに位置するフラスコ状土坑である。周辺には同様のフラスコ状土坑が4基集中し、A2類に分類される。覆土上～中層にかけて礫を含んだ遺物が多数出土し、埋没過程で廃棄されたものと考えている。時期は出土土器（242～246）から大木8a式古段階と推定される。

SK375（図版76・77・281）

中期前葉～中葉の集落跡にあたる19Fに位置するフラスコ状のA2類の土坑である。覆土中層からは礫を含んだ遺物が極めて多数出土し、埋没過程で廃棄されたものと考えている。時期は出土土器（247～263）から大木8a式古段階と推定される。なお、上部にSK379が重複していたが、覆土は極めて近似し、出土土器（285～287）も同時期である。発掘調査で別遺構とされたが、同一遺構の可能性が高い。

SK376（図版76・77・281）

中期前葉～中葉の集落跡にあたる19Fに位置するフラスコ状のA2類の土坑である。覆土上～中層にかけて礫を含んだ遺物が極めて多数出土し、埋没過程で廃棄されたものと考えている。時期は出土土器（264～272）から大木7b・8a式の過渡期と推定される。

SK378（図版78・80・282）

SK376と同様、中期前葉～中葉の集落跡にあたる21Fに位置するフラスコ状のA2類の土坑である。覆土上～中層にかけて礫を含んだ遺物が極めて多数出土し、埋没過程で廃棄されたものと考えている。時期は出土土器（273～284）から大木7b・8a式の過渡期と推定される。

SK380（図版78・80・282）

中期前葉～中葉の集落跡にあたる20Fに位置する小フラスコ状のA3類の土坑である。覆土中～下層にかけて礫を含んだ遺物が極めて多数出土している。時期は出土土器から大木8a式古段階と推定される。

SK381（図版52・57・282）

中期末葉～後期初頭の集落跡の南東側、中期前葉～中葉のフラスコ状土坑が集中する16B・17Bの境に位置する。中期前葉～中葉のフラスコ状土坑SK360・402の上に構築されている。覆土からの出土土器は中期末葉～後期初頭期が多いものの、少ないながら大木7b～8a式期のものも認められる。

SK383（図版52・57・282・283）

中期末葉～後期初頭の集落跡の南東側、16Bに位置するC3類の土坑である。覆土より礫を含む遺物がやや多く出土した。出土土器（290・291）から後期初頭と推定される。

SK390（図版63・64・284）

中期末葉～後期初頭の集落跡の南東側、16Bに位置するB1類の土坑である。覆土中～下層に長さ約

30～40cm、太さ15cm前後の棒状礫7点が認められた。しかし、敷き並べたり、立てたりしたような状態ではない。時期は出土土器（292）から大木10式古段階と推定される。

SK391（図版63・64・284）

中期末葉～後期初頭の集落跡の南側外縁部にあたる16Dに位置する。深さの極めて浅いC2類の土坑である。覆土から礫を含めた多くの遺物が出土している。時期は出土土器（293～295）から三十稲場式期と推定される。

SK394（図版63・65・285）

中期末葉～後期初頭の集落跡の南東側外縁部、中期前葉～中葉のフラスコ状土坑集中区の南隣り、17Cに位置する。大形で底面がほぼ平坦のE1類の土坑である。覆土中～下層にかけて礫を含む遺物が多く出土している。時期は出土土器（298～300）から加曽利B1式期と推定される。

SK395（図版63・65・285）

SK394の南に近接するB1類の土坑である。覆土中～下層にかけて礫を含む遺物が多く出土している。扁平礫のあり方はSK394に近似する。

SK396（図版68・69）

調査区南東部の17C・18Cの境に位置し、SI396と重複する土坑である。セクション図を見る限り、SI396の下に構築されている。したがって、時期はSI396よりやや古い程度の土坑と考えている。

SK400（図版63・65・286）

中期前葉～中葉のフラスコ状土坑集中区の16Cに位置する土坑である。ほぼ底面近くから1個体に近い土器が出土している。出土土器（297）から大木7b式新段階と推定される。

SK404（図版63・65・286）

中期前葉～中葉のフラスコ状土坑集中区の16Bに位置する土坑である。出土土器（301・302）から大木8a式期と推定される。

SK410（図版63・66・288）

中期末葉～後期初頭の集落跡の南東側外縁部、17Bに位置するC1類の土坑である。覆土中～下層にかけて礫を含む遺物が多く出土し、扁平礫のあり方はSK394に近似する。時期は出土土器から加曽利B1式期と推定される。

SK411（図版63・66・288・289）

中期末葉～後期初頭の集落跡の南東側外縁部、17Bに位置するB1類の土坑である。覆土中～下層にかけて礫を含む遺物がやや多く出土した。時期は出土土器から加曽利B1式期と推定される。

SK412（図版68・70・289）

中期末葉～後期初頭の集落跡の南東側外縁部、17Bに位置するA3類の土坑である。覆土中～下層にかけて礫を含む遺物が多く出土した。扁平礫のあり方はSK394に近似する。時期は出土土器（303）から加曽利B1式期と推定される。

SK413（図版68・70・289）

中期末葉～後期初頭の集落跡の南東側外縁部、17Bに位置するB2類の土坑である。覆土中～下層にかけて礫を含む遺物が多く出土した。時期は出土土器（304）から加曽利B1式期と推定される。

SK394・395・410・411・412・413は覆土や遺物の出土状況がほぼ一致し、出土土器から時期が加曽利B1式期で一致する。これらの6基の土坑は17B～17Cにかけて弧状に並ぶ。

SK417（図版52・58・290）

中期前葉～中葉のフラスコ状土坑集中区の15Cに位置する土坑である。覆土より実測図に掲載した大木10式古段階の土器の一部が出土している（305・306）。流れ込みと推定される。

SK430（図版78・80・292）

中期前葉～中葉の集落跡にあたる20Fに位置する。径288×210cmの浅い落ち込みであり、南西側に接するSX427と合わせ、住居跡の可能性も考えられる。住居を構成する床面、炉、柱穴が明確でないため、土坑とした。覆土より大木7b式新段階の土器（307～310）、土偶（908）が出土している。

SK435（図版63・66・293）

中期末葉～後期初頭の集落跡の16Bに位置するE1類の土坑である。覆土より大木10式古段階と加曽利E4式の土器が出土している（311・312）。

SK454・455・456（図版71・72・295）

中期前葉～中葉の集落跡にあたる17Gに位置する。すべて大形で底面がやや凹凸のあるE2類の土坑である。覆土も黒色土で近似する。遺物は大木7b式新段階～8a式古段階のものが出土している（314～318）。

SK464（図版81・296）

中期前葉～中葉の集落跡にあたる21Fに位置するA4類の土坑である。常浪川の段丘外に近いため、沼沢火山灰層が流出し、深さが浅くなったものと思われる。土器はやや多く出土し、時期は大木7b・8a式の過渡期と推定される。

SK468・469・470・471・477・478・480（図版73・74・75・297・298）

調査区南東部の常浪川段丘崖近くに構築された土坑である。本来は深さのあるフラスコ状土坑と思われるが側壁にあたる堆積土が流出し、浅くなったものである。ほとんど遺物を伴わないため、時期は中期前葉～中葉のフラスコ状土坑の集中区やSI396との関連から中期前葉～中葉、またはSI467・472・475の中期後葉の集落跡との関連から中期後葉のいずれかと推定されるが判断できなかった。

C　埋設土器

埋設土器及び埋甕は、近年「竪穴住居内の入口部分と目される床面下に土器を埋設した施設を埋甕、これに対して屋外の場合は屋外埋設土器、また、屋内にあって奥壁部や炉辺部など、入口部以外に設けた施設は屋内埋設土器」［戸沢ほか1994］と区別している。しかし、本遺跡では土器埋設複式炉、土器埋設石組炉など炉跡に埋設された土器を炉体土器、これ以外で廃棄等でなく、明らかに土器を埋設したと判断されたものを埋設土器とした。

埋設土器としたもので確実に住居に伴うものは、SI472の1号埋設土器の1基だけである。これ以外は、住居の範囲の確定ができないために、炉の確認をもって住居と認定したものは、屋内に埋設されたものか屋外に埋設されたものか判断できなかった。したがって、SI472の1基を除いたものを屋内外に関わらず埋設土器とした。

埋設土器とした遺構は132基である。全体的な分布は第11図のとおり、3基を除いて10～19・B～Eに半円状に分布する。これは中期末葉～後期初頭の住居跡及び集落外縁部にあたる。集落跡の中心部と推定される14B及びこの周辺グリッドからの検出は少ない。前述の3基のうち、11G－1号、15F－2号、21F－1号埋設土器は、中期末葉～後期初頭の集落跡の範囲から外れる。11G－1号、15F－2号埋設土器

は粗製土器であるものの、胎土の精良さや器壁の薄さを本遺跡の時期様相に照らし合わせると、加曽利B式期と推定される。21F－1号埋設土器は、器形・文様から大木9式新段階と推定され、すぐ東側の大木9式期の集落跡に伴う埋設土器である。

1）観察表の記載項目

埋設土器の本文以外の説明は、観察表を用い説明している。埋設土器を対象とした観察項目について記述する。

土器状態　土器の埋設状態について分類したものであり、次項2）分類で詳述している。

埋設状況　埋設土器をどのように埋設したかであり、次項4）埋設方法で詳述している。

蓋　埋設土器の付随物のひとつである蓋について、その有無と種別を記入した。次項5）付随物で詳述している。

2）分　類

小千谷市城之腰遺跡の分類［田辺1991］、及びこれをもとに分類・分析を行った岩船郡朝日村アチヤ平遺跡［富樫2002］を参考にした。

分類は埋設土器の状態に着目し、土器底部の状態と底部以外の残存状況を細分し、これを組み合わせて行った。

≪底部の状態≫

A類　底部が有るもの。

B類　底部が無いもの。

C類　底部が穿孔されているもの。

底部がごく一部遺存しているものは、B・C類のいずれか明確に区分できないものが少なからずあった。

≪底部以外の遺存状況≫

1類　完形または胴下半部から口縁部まで遺存するもの。

2類　胴中央部付近から口縁部まで遺存するもの。

3類　胴中央部付近から下半部が遺存するもの。

4類　口縁部から胴上部、胴下部を欠き、胴中央部付近が遺存するもの。

本遺跡の現地表面から縄文時代の地表面と推定される遺物包含層までが薄いため、遺構の重複や後世の撹乱、発掘調査時の削平のため、正位に埋設された土器の口縁部が遺存しない可能性が高い。したがって、口縁部がわずかに認められた場合は、口縁部がすべて遺存していたものと判断したものがある。また、発掘調査から約10年が経過したため、土器の照合ができないものが3基あった。写真・図面等の記録から分類したが、実測図は掲載できなかった。

3）分類別検出数

埋設土器を分類別に集計すると第3表のようになる。底部の状態を見ると132基のうち、A類：底部が有るもの88基（66.7％）、B類：無いもの30基（22.7％）、C類：穿孔されるもの14基（10.6％）を数え、全体の2/3に底部があり、1/3が底部を欠く（何らかの加工がある）ことになる。

底部以外の残存状況は、1類：ほぼ完形57基（43.2％）、2類：胴中央部～口縁部残存17基（12.9％）、

3類：胴中央部～下半部残存47基（35.6％）、4類：胴中央部のみ残存11基（8.3％）となる。1類が1/2弱を占め、4類は少数である。3類は1/3強を占めるが、既述のように遺構の重複や後世の撹乱、発掘調査時の削平で胴上半部～口縁部が失われたものもかなり含まれていると推定される。

底部の状態と底部以外の残存状況を組み合わせた分類ではA1類：48基（36.4％）、A3類：40基（30.3％）を占める。逆に少ないものはB1類：底部の無いほぼ完形土器0基、B3類：2基（1.5％）、C3類：5基（3.8％）、C1類：9基（6.8％）である。C類が少ないのはもともと底部穿孔の土器が少なかったからである。B類はB2・B4類が比較的多く、B1・B2類が少ないのは、埋設するにあたり底部を除去するよりも胴下半部から底部にかけて除去した結果の反映かと推定される。

4）埋 設 方 法

埋設土器をどのように埋設したかであり、以下のように区分した。なお、斜位と横位の区分で明確に区分できないものが一部存在した。

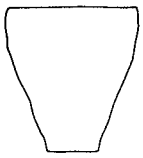
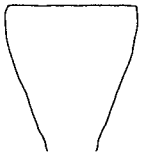
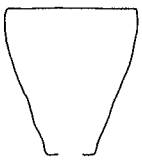
正位　土器の据え方が垂直方向のもの。

斜位　土器の据え方が斜め方向のもの。

横位　土器の据え方が横方向のもの。

逆位　土器の据え方が逆方向のもの。

集計結果は第3表のとおりである。132基のうち正位76基（57.6％）、斜位21基（15.9％）、横位17

残存状況／底部の状態	1類 ほぼ完形	2類 胴中央部～口縁部	3類 胴中央部～下半部	4類 胴中央部のみ	合計
A類 底部あり	 48基 （正29・斜9・横8・逆1・不明1）		 40基 （正24・斜6・横2・逆1・不明7）		A類計 88基 （正53・斜15・横10・逆2・不明8）
B類 底部なし		 17基 （正5・斜1・横6・逆4・不明1）	 2基 （斜1・横1）	 11基 （正8・斜1・逆1・不明1）	B類計 30基 （正13・斜3・横7・逆5・不明2）
C類 底部穿孔	 9基 （正6・斜3）		 5基 （正4・不明1）		C類計 14基 （正10・斜3・不明1）
合計	1類計 57基 （正35・斜12・横8・逆1・不明1）	2類計 17基 （正5・斜1・横6・逆4・不明1）	3類計 47基 （正28・斜7・横3・逆1・不明8）	4類計 11基 （正8・斜1・逆1・不明1）	総計 132基 （正76・斜21・横17・逆7・不明11）

第3表　埋設土器分類別・埋設方法別集計表

基（12.9％）、逆位７基（5.3％）、不明11基（8.3％）となる。正位が全体の1/2強、斜位・横位も一定の比率を示す。逆位は極めて少ない。分類別では横位・逆位がＣ類にはまったく認められず、Ａ・Ｂ類に片寄る。特にＢ類には逆位が多くなる傾向が認められる。底部穿孔のＣ類を横位・逆位に据えた場合、底部穿孔の意味が無くなるためかと思われる。また、底部を除去したＢ類では、正位・逆位の意味合いが薄れてくるように推定される。

5）付　随　物

付随物の一つである埋設土器の蓋について集計した。蓋が無いもの104基（78.8％）、礫蓋があるもの19基（14.4％）、土器蓋があるもの４基（3.0％）、不明５基（3.8％）である。不明はいずれも集石と重複するため、礫蓋かどうか判断しかねるものである。土器蓋が４基認められるが、２基は土器を縦位に半截し、一方を蓋として使用している。礫蓋は扁平礫が多いが、石皿の破片や棒状礫も少数認められた。また、約８割に蓋が認められなかったが、腐食しない礫や土器が蓋として残っていることから、木製蓋を想定している。

6）個別遺構の説明

これまで埋設土器の全体的な傾向や分類などを記述した。132基の膨大な数の埋設土器の各記載は、観察表に委ねる。

以下、各埋設土器のうち特徴的な事柄について詳述する。

10B－１号埋設（図版９・11・299）

覆土に焼土、炭化粒が多く含まれやや異質である。

10C－３号埋設（図版９・11・301）

大きさ33×6cm、厚さ13cmの厚みのある扁平礫を蓋とする埋設土器である。

11B－５号・14B－１号埋設（図版14・20・29・34・302・311）

いずれも横位に据えた埋設土器で土器蓋が伴う。土器蓋は土器を縦位に半截した一方を使用している。したがって、完形土器がつぶれたものでない。本遺跡でこのような埋設方法は、この２基だけである。

11B－６号埋設（図版14・20・303）

横位に据えた埋設土器であり、覆土に大きさ5cm前後の礫が数点含まれていた。

11C－２号埋設（図版14・20・303）

正位に据えた埋設土器である。若干ずれるが、口縁部に接するように大きさ22×18cmの石皿の破片が認められた。周辺の状況から蓋に使用したものと推定される。

11G－１号埋設（図版12・13）

中期末葉～後期初頭の集落跡から大きく外れた11Gに存在する。埋設土器の胴下半部は磨かれ、器壁の薄さや胎土の精良さは、中期末葉～後期初頭期のものと明らかに異なる。土器の状況を本遺跡の存続時期に照らし合わせると、加曽利Ｂ式期と推定される。

12B－１号埋設（図版14・20・305）

調査後、土器の照合ができていない。しかし、写真、図面等の調査記録によると埋設土器は地文が縄文の土器、土器蓋は櫛歯状の条線文の土器である。

12D－8号埋設（図版21・26・308）

覆土は基本層Ⅳ層（沼沢火山灰層）の汚れた土であり、他の埋設土器の覆土とはやや異なる。

13D－2号埋設（図版35・36・309）

B2類の埋設土器で、逆位に据えている。覆土には大きさ3cm前後の円礫が多く含まれ、その上に大きさ25cm前後の扁平礫2点を蓋石としている。

13D－4号埋設（図版29・34・309）

蓋石をもつ埋設土器である。同一個体の土器が二重に巡るように据えている。同一個体が二重に巡る例はほかに13E－4号・15D－3号埋設がある。

14C－2号埋設（図版37・45・312）

覆土中層から円礫が数点、底部内面から剥片1点が出土している。

14D－9号埋設（図版29・34・314）

A3類の土器を斜位に据えた土器である。胴部の大きく欠けた側を上にし、この部分に扁平礫の蓋石をしている。土器の残存状態（胴部の片側が大きく欠ける）と据え方（斜位）を意識した蓋石の仕方と推定できる。このような例は本遺跡ではこれのみである。なお、斜位に据えた埋設土器は他に2基（10C－2号、16D－6号埋設）認められるものの、この2基はやや正位気味である。

14D－12号埋設（図版47・50・314・315）

覆土は暗褐色土と基本層Ⅳ層（沼沢火山灰層）の混合で、しまりのある土である。沼沢火山灰層が多く含まれる点で、他の埋設土器の覆土とやや異なる。同様な覆土は15D－5号・16B－1号・16D－3号・16D－4号埋設でも認められる。

14D－13号埋設（図版37・45・315）

A1類の土器を横位に据えた土器であり、口縁部に扁平礫の蓋石をしている。横位にもかかわらず蓋石をするのは、本遺跡ではこの1例のみである。

15D－9号埋設（図版37・46・321）

B2類の残存状態の埋設土器を正位に据えている。埋設土器の周囲は同一個体の土器を二重に巡らせたり、扁平礫で囲わせたりしている。埋設土器を石で囲うのは、本遺跡ではこれのみである。他遺跡の例では、小千谷市城之腰遺跡［藤巻ほか1991］、中魚沼郡津南町反里口遺跡［石沢ほか1977］で数例認められる。また、土器内上部に同一個体の土器片を蓋状に並べている。なお、覆土は暗褐色土と基本層Ⅳ層（沼沢火山灰層）の混合土である。

15F－2号埋設（図版47・51・321・322）

中期末葉～後期初頭の集落跡からやや外れた15Fに存在する。埋設土器の器壁の薄さや胎土の精良さは、中期末葉～後期初頭期のものと明らかに異なる。約50cm北側にSI243（加曽利B式期）があることから、加曽利B式期と推定される。

16C－4号埋設（図版63・67・323・324）

A1類の土器を横位に据えた埋設土器である。覆土は小礫や炭化粒をやや多く含み、底部内面には大きさ約10cm程度の礫が認められた。

16D－1号埋設（図版63・67・324）

A1類の土器を正位に据えた埋設土器である。覆土には小礫が多く混入する。

21F－1号埋設（図版81・328）

中期末葉～後期初頭の集落跡から大きく外れた21Fに存在する。土器の文様から大木9式新段階の埋設土器である。なお、東側にはSI467・472・475などの大木9式期と推定される住居跡があり、該期の集落跡を構成する埋設土器である。

D 焼土遺構

焼土遺構としたものは、18基を数える。これらは住居や炉跡など他の遺構に伴わず、独立して存在した焼土である。しかし、下層で検出されたような焼け面としての遺構かどうか判断が難しいものが多い。明らかに廃棄された焼土も含まれている。

分布も他の遺構のように中期末葉～後期初頭の集落跡に伴うように分布せず､調査区に散漫に分布する。焼土に伴う遺物も少ないことから時期の不明なものがほとんどである。確認面はⅡ層上面及びⅡ層中が大半を占め、縄文時代の住居や土坑などよりレベル的に高い位置で確認された。したがって、縄文時代の遺構と重複する場合は、ほとんどが新しい。位置、焼土範囲、出土遺物等は、別表1の焼土遺構観察表に記載した。

14Ｅ－2号焼土（図版35・331）

検出された焼土遺構で確実に縄文時代の焼土と推定できるものである。範囲324×180cmの広範囲に認められている。重複関係は241号集石に切られ、SK242の上で検出された。重複関係から中期末葉～後期初頭の時期と推定できる。但し、焼け面としての遺構でなく、廃棄焼土である。

E 集石遺構

本遺跡で集石遺構としたものは、敷石住居や炉跡、掘り込みをもつ集石土坑などを除き、掘り込みをもたず礫が集中的に出土した遺構である。礫はほぼ同一レベルから出土する。したがって、機能・用途は不明であっても明らかに意図的に配列・組石した配石遺構から、礫が集中しているだけで意図的かどうか判断できないものなど、その意味付けが難しいものまで多様な集石が含まれている。

集石遺構としたものは22基を数える。5基を除いて、その多くは中期末葉～後期初頭の集落跡から検出され、中でも集落跡の南～東側に長さ約10mの集石をはじめとする大形集石遺構が集中する。

これらの集石遺構は遺構の位置や周辺遺構との新旧関係から、中期末葉～後期初頭の時期に所属するものと推定できる。

位置や範囲などの計測値、出土遺物等は観察表に委ねるが、以下、特徴的な集石遺構について詳述する。なお、遺構名はグリッド名の付いたものと通し番号の付いたものが存在する。発掘調査時に規模の小さい集石はグリッド名を付け、規模の大きい集石は通し番号をつけたためである。

10B－10号集石（図版14・18・332）

大形礫1点であるため、集石にするには検討を要するものの、大きさ約90×30cm、厚さ18cmの扁平長方形の礫が3分割され、置かれている。北隣に10B－11号遺構の硬化面が接しているが、関連は不明である。

10C－4号集石（図版9・10・332）

長さ21～39cmの扁平礫5点が重ねられた集石である。接する土坑・ピット等は無く、独立している。礫の数は若干異なるが、15B－9号集石に近似する。

12B－5号集石（図版14・19・332）

26点の剥片を13×11cmの範囲にまとめ置いた遺構である。したがって、集石に含めたものの、礫を集合させた集石とは異なる。剥片は2点の扁平礫と土偶（土製品913）を三角形状に並べた間に納められている。剥片の下にはピット等の落ち込みは見られない。26点の剥片は2つの母岩からなり、このうち20点は接合する（接合資料442～446）。周辺にチップ等は見られないことから、別の場所で剥離作業が行われ、選別された剥片が運び置かれたものと推定できる。

13B－2号集石（図版29・34・333）

長さ27・46・56cmの棒状礫3点を平行に並べ、端部は片端に径27cmの扁平礫、一方に約10cmの礫を置いた集石である。若干ずれるが、下にSK145が構築されている。関連は明らかでない。

14D－8号集石（図版37・44・333）

長さ39～48cm、太さ13～15cmの棒状礫4点を3～5cmの間隔で立てた立石遺構である。確認面（SI208の床面レベル）で地上に約25cm露出していた。この立石と約20cmはなれた位置に長さ57cm、太さ19cmの棒状礫が並行するように置かれている。SI208の北西壁近くにあるものの、SI208との関連は不明であった。

15B－9号集石（図版52・59・333）

大きさ約25cm前後の扁平円礫4点が重ねられた集石である。接する土坑・ピット等は無く、独立している。礫の数は若干異なるが、10C－4号集石に近似する。

16C－7号集石（図版52・59・333）

大きさ15cm前後の礫13点が、77×50cmの範囲に集中する。下にSK432が構築されるが、時期がまったく異なるため関連はない。

16C－8号集石（図版52・59・333）

16C－7号集石から約1m離れたところに存在する。大きさ20～30cm前後の扁平礫がやや多い集石である。しかし、2m前後の範囲に散乱するような状態であり、意図的に並べたようには見えない。すぐ下にSI288が構築されているが、関連は不明である。

21E－1号集石（図版78・80・334）

大きさ10～20cm前後の被熱礫8点が50cm前後の範囲に集中分布する。下にSI472が構築されているが、レベル差があり関連は認められない。

203号集石（図版29・34・334）

約2m前後の範囲に大きさ20～40cmの扁平礫・棒状礫を集中させている。東隣にSI60が存在するが、ややレベル差があり、関連は無いものと推定される。

204号集石（図版37・44・334）

大きさ40～50cmの棒状礫を長さ3.88mの緩やかな弧状に並べた集石である。下にSI209、SK340が構築されているが、関連は無いものと推定される。

205号集石（図版47・50・334）

長さ約4.0m、幅約2.0mの範囲に、10～40cm前後の大小様々な扁平礫や棒状礫が集中する。後世の撹乱のためか、規則性が無いようにも見えるが、平面形は帯状を呈し、立石状に斜めに立っているものも認められる。周辺の遺構に比べ最も上位で検出された遺構で、後期初頭に属するものと推定される。なお、西側約2mの延長先には241号集石があることから、同一遺構になる可能性がある。

207号集石（図版37・44・335）

長さ約3.6m、幅約2.8mの範囲に、10～50cm前後の大小様々な扁平礫や棒状礫が集中する。すべて横位に置かれ、立石状になるものは認められなかった。SI62の範囲と重複するが、この上に構築されている。周辺の遺構に比べ最も上位で検出された遺構で、SK271・274・276、15D－5号埋設より新しくなる。後期初頭に属するものと推定される。

237号集石（図版52・60・335）

16Bグリッドに位置し、西から東に断続的ながら長さ約10mの帯状に分布する集石である。礫は10～60cm前後の大小様々な扁平礫や棒状礫であり、一部立石状に立つものがある。SI240の上に構築され、16B－2号埋設が集石内に入り込んでいる。ともに後期初頭と考えられることから、本遺構も後期初頭である。

241号集石（図版47・50・334・335）

14D・E、15D・Eグリッドに位置し、おおむね西から東に長さ約10mの弧状に分布する集石である。礫は10～60cm前後の大小様々な扁平礫や棒状礫であり、一部立石状に立つもの及び扁平礫を小口立てにするものがある。東側2m先には205号集石があり、同一遺構の可能性がある。確認層も周辺遺構の中では最も高く、新しくなる。後期初頭の所産と推定される。

F　掘立柱建物跡

1棟のみの検出である。縄文時代の建物でない。

SB35（図版27・28・336）

調査区の西寄り12E・F・G、13F・Gに位置する南北棟建物（N－1.5°－W）で、桁行5間（12.8m）、梁間4間（9.2m）を測る。4面に庇をもち、庇の出は北面・南面が2.2ｍ、東面・西面が2.0ｍである。身舎は桁行3間（8.4ｍ）、梁間2間（5.2ｍ）で、柱間寸法は桁行が2.8ｍ、梁間2.6ｍの等間隔となり、総柱である。

柱穴の掘形は平面40～60cm前後の円形または楕円形、深さ20～50cm前後を測り、総体的に身舎の柱穴が庇の柱穴に比べ深くなる。身舎の中では桁行東側のP8・12・16・24、西側のP6・10・14・22が深くなり、中央のP7・11・15・23が浅くなる。覆土は掘形の埋土、柱穴の覆土ともに粘性・しまりの無い土で、縄文時代の覆土と異なり新しくなるものと推定できる。また、柱穴の掘形の底面には柱圧痕が認められたものがあった。平面形はおおむね円形で、15～20cm前後を測る。

主軸方位は前述のようにN－1.5°－Wで、SI26（N－11.5°－E）、SI31（N－4.5°－E）、SD127（N－5°－E）と同方向を示す。特にSD127とは位置も近い関係にあり、関連があるものと考えている。時期を判断できる遺物は出土していないが、SD127との関連から中世の建物跡と推定している。

G　溝

縄文時代の所産でない。SD127を除き、覆土等から近世以降の溝と推定される。

SD9（図版7・8・337）

調査区西側の沢Aの肩部沿いで検出され、高さを意識して掘削されている。覆土は暗褐色シルトで、調査区外の水田耕作土に近似する。用水路と推定される。SD9はSD18と形状、位置、レベルが近似する。同一遺構の可能性が高い。

SD45（図版27・28・337・338）

調査区の13列グリッドを北東～南東に横断する溝である。表土層（基本層序Ⅰ層）から掘り込まれている。重複遺構をすべて切り、最も新しい遺構である。覆土、底面の様子やレベルをみる限り、用排水路等の用途でない。13GでSD44と重複するが、覆土がまったく同じであり、類似の溝と推定される。

SD127（図版47・49・338・339）

調査区中央やや南西寄りの14G・15～16E～F・17F・18F～Gで検出された矩形の大形溝である。長さは延55.6m（北側26.9m・東側28.7m）を測り、それぞれ調査区外に延びる。断面形は逆台形または椀形を呈し、上幅1.6～2.2m、下幅0.7～1.2m、深さ66～77cmを測る。覆土は黒褐色土を主体とするしまりのやや無い土で、4層に識別され自然堆積である。北側の一部に長さ3.9m、幅1.5mにわたり礫の集中が認められた。覆土1層～2層上面に堆積し、溝が埋まる過程で廃棄されたものである。遺物は土器・石器、礫など多数出土するものの、最も新しいもので珠洲焼壷・甕破片（図版191-20・22）、金属器の研磨痕のある砥石44点（図版192-35・41・45・46）が出土する。時期は珠洲焼から珠洲焼編年Ⅱ～Ⅳ期［吉岡1994］に相当し、13～14世紀前半と推定される。

なお、SD127は明治期の長木集落の更正図に照らし合わせると、一辺約60mの方形溝（堀）になるものと推定できる。

SD437b（図版68・70・339）

常浪川の段丘崖沿いの17A～22Fにかけての溝である。19Dで5mほど西に曲がるがおおむね真っ直ぐである。表土層から掘り込まれ、幅92～160cm、深さ15～54cmを測る。SD437bの西側では東側に比べ、近世以降の墓壙の数が極端に変わることから墓地と民有地の境界溝と推定できる。

H　その他の遺構

これまでの遺構種別にあてはまらない様々な遺構である。

1）硬　化　面

10B-11号遺構（図版14・19）

10B25に位置し、76×53cmの範囲で非常に硬化している遺構である。硬化面は黒褐色土が硬化したもので、8cmの厚さがあり、下層ほど硬さは弱くなる。南隣に10B-10号集石が同レベルで存在するが、関連は不明である。時期は遺構検出面、周辺の遺物・遺構の状況から中期末葉～後期初頭の集落跡に伴う遺構と考えている。遺物は出土していない。なお、硬化面は下層の調査でも1か所検出され、前期後葉～末葉の所産とされている。

2）近　世　墓

調査区東側では長木集落の墓地として利用されていた。石塔はその紀年名から近世以降であり、大半が所有者の判明しているもので調査対象外であった。墓地移転前には石塔や基壇の下には数百の墓壙が存在したものと思われる。その中で石塔が存在せず、所有者が不明の基壇と墓壙をセットで2基調査した。

18C-1号墓壙（図版68・70・340）

基壇は広さ約95×80cm、高さ約20cmの長方形に盛土し、その上部に長さ30～40cm、太さ10～20cmの棒状礫を長方形に並べている。この礫敷きの上に石塔が立っていたものと推定されるが、存在し

なかった。基壇下には上場105×70cm、下場80×60cm、深さ125cmの直方体の墓壙が掘り込まれていた。底面は平らである。覆土は基本層Ⅰ～Ⅶ層の混合土で、しまり無く単層である。

18C－2号墓壙（図版73・74）

基壇は広さ約80×80cm、高さ15cmの方形に盛土し、その上部に大きさ20～40cm程度の棒状礫や扁平礫を方形に並べている。この礫敷きの上に石塔が立っていたものと推定されるが、存在していない。基壇下には上場径約100cm、下場径約40cm、深さ約190cmの円柱状の墓壙が掘り込まれていた。底面は平らである。覆土は基本層Ⅰ～Ⅷ層の混合土で、しまりの無い土である。

3）性格不明遺構

SX169（図版29・340）

13Bに位置する溝状の遺構である。長さ約5.4m、幅約80cm、深さ25cmを測り、平面形は「L」字状、断面が不整形な皿状を呈する。底面や側壁はやや凹凸が激しい。重複する土坑の連続などとも推定したが不明であった。覆土は周辺の遺構と同様であり、中期末葉～後期初頭の集落跡に伴う遺構と判断できる。SK108、SD45と重複するが切られている。遺物は土器12点・325ｇ、剥片類4点、礫1点・9gが出土している。

SX427（図版78・80・340）

調査区の南側、20F～Gに位置する弱い落ち込みである。広さ約2×2m程度の範囲で、周辺より5～10cm程度低くなる。SK430と重複し、これに切られている。しかし、SK430との関連から竪穴住居跡も推定したが、不明であった。遺物は土器125点・3.18kg、敲磨石類1点・剥片類11点、礫80点・45.808kg（内被熱礫24点・9.037kg）が出土している。時期は出土土器から中期前葉～中葉と推定される。

SX461（図版68・70・340）

調査区の東寄り17B・18Bの境に位置する。長径3.4m、短径1.9ｍ、深さ50cmの大形の落ち込みである。上位にSD437bが乗っている。当初土坑と判断して調査を進めたが、平面形が不整形、側壁も凹凸があり、覆土の堆積も複雑であることから、風倒木痕を想定したが、不明であった。遺物は土器2点・65gが出土している。

SX465（図版81・340）

調査区最南端の段丘崖付近、22Fに位置する遺構である。規模2.1×2.0m、確認面からの深さ28cmほど掘り窪め、底面には比較的大きな石が敷かれている。東側は幅1.1m、深さ29cmの溝が段丘外に延びる。覆土は礫を多く含んだ黒褐色土である。遺物は覆土から土器14点・200g、被熱礫2点463g、鉄滓多数（図版194－69・70）、周辺からも羽口（31）、鉄滓（78）が出土している。遺物から鍛冶遺構と推定できる。

第Ⅴ章　遺　　物

1　概　　要

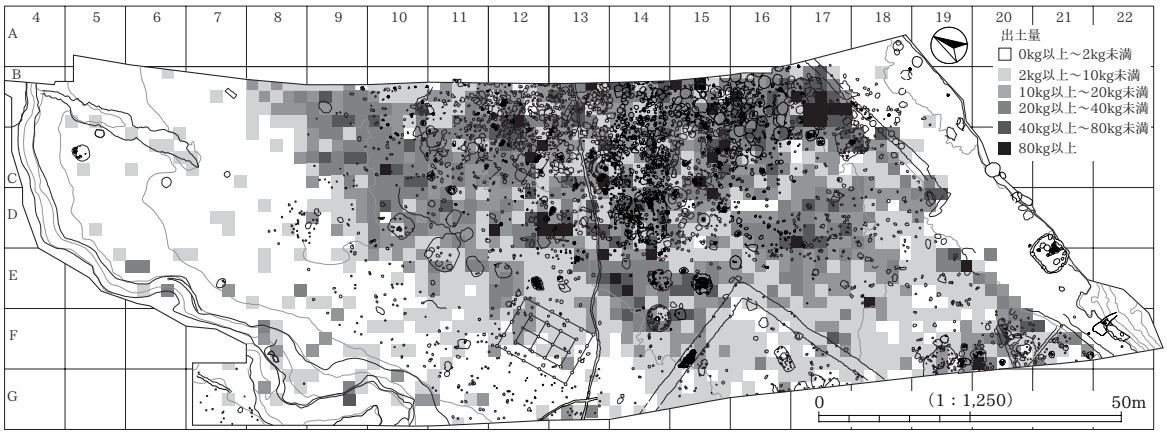
北野遺跡上層の遺物は、前期末葉（約5,000年前）に堆積した沼沢火山灰層（基本層序Ⅳ層）より上層で出土した遺物である。その出土量は膨大で、土器・土製品4.44t以上[1)]、石器・石製品37,421点、搬入礫218,053点・11.29tを数える。この他、古代の土師器・須恵器、中世の珠洲焼・磁器、近世陶磁器、鉄滓・金属製品などの古代以降の遺物が少量出土している。

礫を除いた遺物で最も多く出土したものは、縄文時代の遺物で全出土量の９割以上を占める。その所属時期は、出土土器から前期末葉、中期初頭、中期前葉～中葉、中期後葉、中期末葉～後期初頭、後期前葉、後期中葉、晩期の多時期にわたる。このうち、中期末葉～後期初頭に属する土器が圧倒的に多く、次いで中期前葉～中葉の土器である。これは発掘調査で中期末葉～後期初頭の集落跡の約半分、同じく中期前葉～中葉の集落跡の一部を調査したからである。この他、後期中葉と中期後葉の土器も少量出土した。これも該期の集落を構成する住居跡や土坑を調査したからである。前期末葉、中期初頭、晩期は極めて少なく断片的であり、伴う遺構も明らかでない。

土製品、石器・石製品、搬入礫は時期の特定が難しいものの、時期別の出土傾向・分布は、遺構、土器の時期別・地区別の分布とほぼ一緒と推定される。

この他、古代以降の遺物としてまとめて掲載した遺物は、調査区全体から散漫に出土している。古代以降と一括りにしても多時期にわたること、それぞれ遺物の種類が多い割りに出土数が少ないからである。

調査区における遺物の出土傾向は、第16・17図の土器・石器・搬入礫の分布を見れば、９～17・Ｂ～Ｅグリッドに極めて多く、次いで18～20・Ｆ～Ｇグリッドに多く分布する。９～17・Ｂ～Ｅグリッドは中期末葉～後期初頭の集落跡及び外縁部であり、18～20・Ｆ～Ｇグリッドは中期前葉～中葉の集落跡及び外縁部である。したがって、両集落跡からの出土が多いことになる。



第16図　搬入礫出土分布図

1）縄文土器だけで総重量4.44tであり、これに土製品を加えると若干総重量は増加する。

2　土器・土製品

A　縄 文 土 器

1）は じ め に

前述のように縄文土器は総重量で約4.44t出土し、その分布傾向は第17図のとおり9～17・B～Eグリッドに極めて多く、次いで18～20・F～Gから出土している。既述のようにこの分布は、中期末葉～後期初頭の集落跡、中期前葉～中葉の集落跡と一致し、縄文土器のほとんどが該期の時期に収まる。この他、後期中葉の土器は、SI228の存在する13C、SI243のある14F、SK413・412・401・410・394・395が弧状に並ぶ17B～Cにやや多い程度である。また、中期後葉の土器は、さらに少なくなるがSI472が存在する21D・E、22Fに認められる。これ以外の前期末葉、中期初頭、後期前葉等の遺物は極めて少なく、分布傾向は認められず散発的な出土である。

2）資料の提示方法

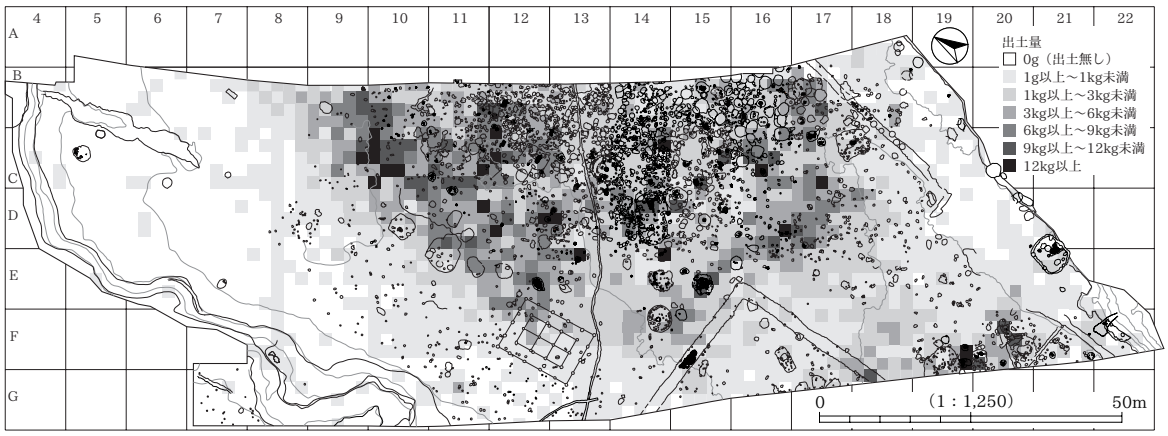
a　基 本 方 針

本遺跡で検出された縄文時代の遺構には、住居跡・土坑・埋設土器・焼土・集石・ピットなどがあり、これらが遺跡の主体をなしている。しかし、表土から遺構確認面までが浅く、また、住居跡は掘り込みが無いものが大半で、住居跡の範囲が確定されていないものが非常に多い。したがって、住居跡に伴う土器は極端に少なく、遺構に伴う土器は住居跡の炉体土器、土坑に伴うもの、埋設土器がほとんどである。しかし、これらの住居跡を中心とした遺構の所属時期を明らかにするため、遺構出土の土器はできる限り多くの図化に努めた。遺構に伴わないと判断された包含層出土土器は、分類や編年の好資料と思われるものを中心に図化・掲載した。

資料の提示はすべて実測図・写真・観察表で行ったが、必要に応じ本文で詳述した。

b　実測図の図化方法

縄文土器の図化は、大きさや文様の複雑さの程度により、通常の手取り実測、写真実測、簡易実測器を



第17図　縄文土器出土分布図

用いた実測の３通りの方法で行い、必要に応じ拓影を組み合わせた。なお、断面実測はすべて手取り実測である。

写真実測　複雑で凹凸のある文様をもつ大型土器に用いた。高倍率の望遠レンズで撮影した写真にマイラーベースを被せ、文様を写し取ったものに断面図を加えたものである。

簡易実測器を用いた実測　複雑で凹凸のある文様をもつ土器破片に用いた。簡易実測器［鈴木・髙橋1993］に土器を挟み、透明フィルムを被せ、文様を写し取ったものに断面図を加えたものである。

破片資料は拓影図や復元実測図を用いたが、断面図は径が出せるものはできる限り反転実測するように努めた。拓影以外で文様を表現した場合はできる限り図化したものの、基隆帯・隆帯・隆起線・隆線・半隆起線の区別は、必ずしも明確な表現になっていない。しかし、中期前葉～中葉の基隆帯には、スクリーントーンを貼り区別した。

断面表現には断面外形線・破損線のほか、観察できる範囲で「輪積み痕」は断面外形線より細い実線を、折り返し口縁の「折り返し部分」の内側は破線を書き加えた。また、実測図には土器理解の上で、必要と思われる推定部分を実存部分より細線で区別して書き加えた。

なお、実測図の理解を補助するためにスクリーントーンを貼付した。凡例は図版編の凡例で説明している。

c　写　　真

遺物写真図版はデジタルカメラで撮影したデータを編集した。遺物写真図版の縮尺は、実測図の縮尺と同じである。しかし、土器写真は破片資料を除いた多くは、俯瞰写真のため形や縮尺がいくらか実測図と異なるものもある。

d　観察表の記載方法

実測図、写真で掲載する縄文土器は856点である。ページ数の関係からすべてを詳述できないため、観察表を用い簡略化した。

記入項目・観察項目はNo.、遺構名・出土地点、層位、分類、器種・器形、残存部位、計測値、文様・施文等、縄文原体、色調（内／外）、付着物（内／外）、混和材、時期、備考である。

No.　土器の掲載番号であり、実測図番号、写真番号、観察表のNo.は一致する。

遺構名・出土地点　遺構出土のものは遺構名を、包含層出土のものは原則として小グリッドまでを記入した。なお、遺構出土のものは、炉跡、ピット、周溝など遺構内の細かな出土場所が具体的にわかるものは、これを遺構名の後に書き加えた。

層　　位　遺構出土のものは、遺構内のどの層位から出土したものか分かる範囲で記入した。具体的には覆土上・中・下層、覆土１・２・３層……、床面直上、底面直上などである。包含層出土のものは基本層序のどの層かローマ数字で記入した。

分　　類　掲載土器はそれぞれ時期や系統、文様等で分類されている。この分類記号を記入した。分類記号の詳細は次項、3）分類と遺物各説で記述している。

器種・器形　器種は深鉢・浅鉢・鉢・注口土器・蓋・器台などの器種名を記入した。器形は深鉢の器形をいくつかに分類した記号をアルファベットで記入した。なお、分類基準は中期中葉以前、中期後葉～後期前半、後期中葉で各々異なり、詳細は次項、3）分類と遺物各説で記述している。また波状口縁は「波」、

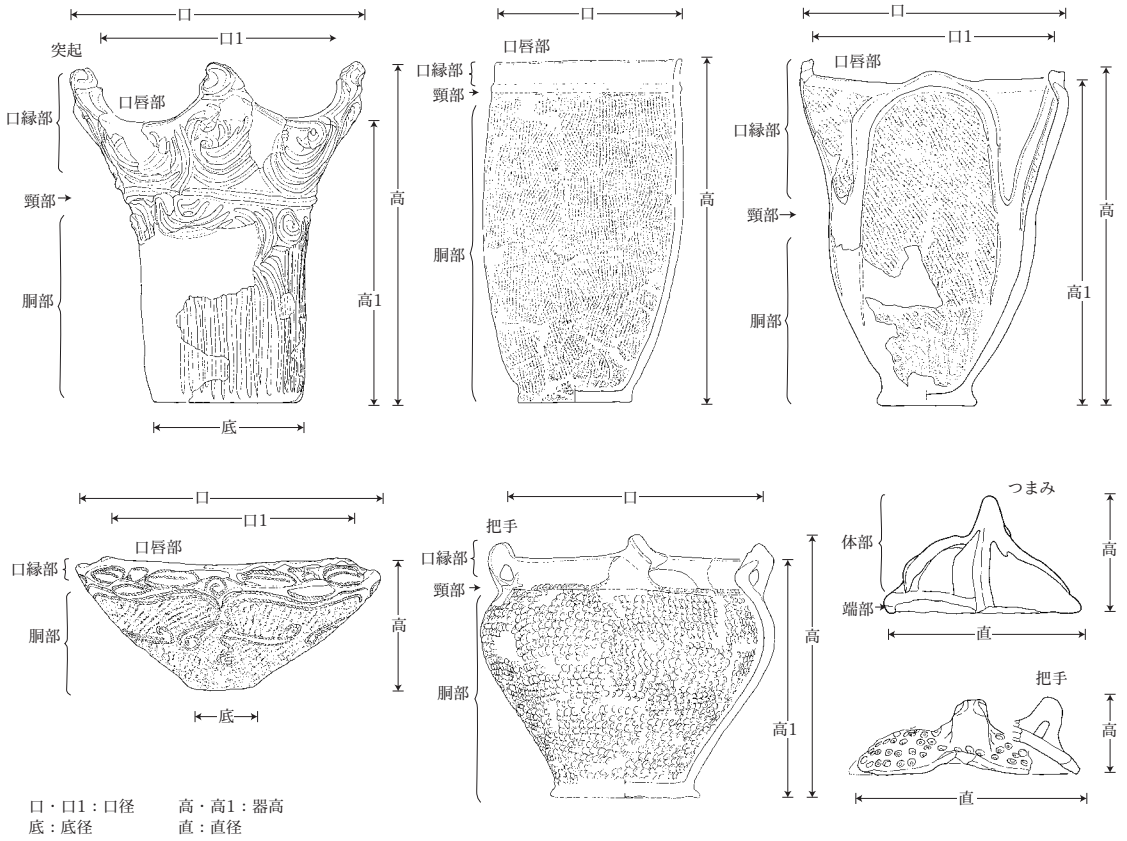
口唇部に突起が付くものは「突」を記入した。

残存部位　完形・ほぼ完形を除き、破損品は残存部位と残存率を分数で表した。破片は残存部位のみを記入した。

計 測 値　第18図の土器計測基準に従った。口縁部径（以下、「口径」とする）・底部径（以下、「底径」とする）・器高をcm単位で示した。波状口縁や突起付きの深鉢等は、口径・器高がそれぞれ2か所存在する。いずれの場所の計測値か「口」「口1」、「高」「高1」の別を計測値の前に示した。復元実測したものも同様であるが、推測の度合いが極めて強いものについては、（　）付きとした。

文　　様　口縁部、胴部など部位ごとに施文された文様を記述した。詳細に記入すべきであるが、記入欄の大きさから適宜省略したものもある。なお、中期後葉以降の土器は本文で詳述しているため、観察表には記入していない。

縄文原体　縄文原体の記号であり、『日本先史土器の縄紋』［山内1979］を参考に記入した。また、原体記号の後に施文方向を書き加えた。横位なら「→」、縦位なら「↓」で、不明ないしは規則性が無い場合は記入していない。施文方向はあくまでも方向だけ表記したものであり、施文の始まりである「右・左」「上・下」を表していない。撚糸文は「撚糸」と記入した後に縄文原体を記入した。軸に巻かれた「右巻き・左巻き」の別は記入していない。網目状撚糸文は縄文原体の後に（網目状）を書き加えた。磨消縄文については、沈線や隆帯による区画後に施文したものを（充填）、縄文施文後に沈線や隆線で区画したものを（磨消）とし、縄文原体の後に書き加えた。



第18図　土器計測基準及び部位名称

色調（内／外）　土器の内面／外面の色調であり、『新版標準土色帖1966年版』［農林水産省農林水産技術会事務局1996］を参考に記入した。

付着物（内／外）　土器の内面／外面の付着物であり、付着物が認められるものに名称（オコゲ・ススなど）を記入した。

混 和 材　胎土中に含まれる鉱物や岩片である。肉眼観察により特に多く含まれているもの、特徴的なものを記入した。礫と砂については粒径2mm程度を境に区別した。海綿骨針はほとんどの土器に含まれ、胎土の特徴の一つである。特に多く含まれている土器について「海綿」と表示した。

時　　期　掲載土器のおおよその時期であり、分かる範囲で記入した。土器型式名が分かる場合は型式名を記入した。粗製土器や破片資料であっても、遺跡の状況・出土遺構・出土地点により、ある程度時期の確定が判断できた。この場合は中期前葉～中葉、中期末葉～後期初頭などと表記した。なお、汎北陸系（北陸地方と越後系を含めたもの）の中期前葉～中葉の土器は、土器型式名を使用せず、魚沼市（旧堀之内町）清水上遺跡の編年［寺崎1996］の「前葉①・②・③、中葉①・②・③」を使用した。

備　　考　これまでの観察項目に無いもので、それぞれの土器の特徴で必要な事柄を記入した。

底部の敷物圧痕は、圧痕の認められるもののみ記入した。底部の敷物圧痕の種類は「網代圧痕」、「カゴ底圧痕」、「木葉圧痕」、「笹状圧痕」の４種である。

赤色塗彩の土器は、顔料等の特定はしていない。単に「赤彩」と記入してある。

e 部 位 名 称

土器の部位名称は原則として第18図のとおり、本報告書では統一に努めた。この他は一般的な呼称に従った。

3）分類と遺物各説

a は じ め に

既に述べたように縄文土器の出土量は膨大で、その多くは中期末葉～後期初頭の集落跡出土と、中期前葉～中葉の集落跡出土のものとに大きく二分され、後期中葉も一定量出土している。出土量が多い上に、この三つの時期の土器は、文様、器形、系統などがそれぞれ大きく異なる。したがって、分類・分析の視点もおのずから異なってくる。

このような理由から出土土器を、沼沢火山灰層の二次堆積（約5,000年前＝大木６式期）以降中期中葉（大木8b式期）まで、中期後葉～後期前葉まで、後期中葉の３時期に分け報告する。

なお、上層からの出土土器の大分類（群）は、以下のようになる。

第Ⅰ群土器　東北系の大木６式新段階～大木7a式期までの深鉢形土器。

第Ⅱ群土器　東北系の大木7b式～大木8a式期までの深鉢形土器。

第Ⅲ群土器　東北系の大木8b式期の深鉢形土器。

第Ⅳ群土器　粗製・素文の深鉢形土器。大木7b式～8a式期に伴うものと推定できる。

第Ⅴ群土器　汎北陸系（北陸系と越後系を含むもの）の深鉢形土器。大木7b～8a式期に並行する。

第Ⅵ群土器　東関東系（阿玉台式）の深鉢形土器。大木7b～8a式期に並行する。

第Ⅶ群土器　その他の系統（勝坂式、円筒上層式）の深鉢形土器。大木7b～8a式期に並行する。

第Ⅷ群土器　深鉢以外の浅鉢、器台、台付土器、有孔鍔付土器。出土数は少ないものの、様々な系統

大分類(群)	器　種	系　統	時　期
第Ⅰ群	深鉢	東北系（在地）	大木６式新段階～大木7a式
第Ⅱ群	深鉢	東北系（在地）	大木7b式～大木8a式
第Ⅲ群	深鉢	東北系（在地）	大木8b式
第Ⅳ群	深鉢	東北系（在地）	大木7b式～大木8a式（粗製・素文土器）
第Ⅴ群	深鉢	汎北陸系（北陸系＋越後系）	大木7b式～大木8a式並行
第Ⅵ群	深鉢	東関東系（阿玉台）	大木7b式～大木8a式並行
第Ⅶ群	深鉢	その他の系統（勝坂・円筒上層）	大木7b式～大木8a式並行
第Ⅷ群	浅鉢・器台・台付土器・有孔鍔付土器・小形鉢	－	大木7b式～大木8a式並行
第Ⅸ群	深鉢・鉢・浅鉢・台付土器・注口土器・壺	東北系	大木９式～大木10式
第Ⅹ群	深鉢・注口土器	関東系	加曽利Ｅ4式～称名寺式
第ⅩⅠ群	深鉢・鉢・浅鉢・注口土器・異形土器・蓋	在地系	三十稲場式
第ⅩⅡ群	深鉢	在地系	三十稲場式並行もしくはその前後
第ⅩⅢ群	深鉢・鉢・浅鉢	系統不明	中期末葉～後期前葉
第ⅩⅣ群	深鉢・鉢・浅鉢・台付土器・注口土器・壺	在地系・関東系	加曽利Ｂ式

第４表　出土土器大分類（群）表

が含まれる。大木7b～8a式期に並行する。

第Ⅸ群土器　東北系のいわゆる大木９～10式と認識できる土器群である。

第Ⅹ群土器　関東系の加曽利式や称名寺式の流れを組むと考えられる土器である。

第ⅩⅠ群土器　在地系でいわゆる三十稲場式土器である。

第ⅩⅡ群土器　三十稲場式並行もしくは前後に位置付けられ、口縁部に隆帯で文様を描くもの。

第ⅩⅢ群土器　系統不明のもの。東北系・在地系・関東系のいずれにも判別できなかったもの。

これをまとめると第４表のようになり、北野遺跡上層全体の分類表となる。

b　前期末葉～中期中葉の土器

ここで取り扱う土器群は、既述のように沼沢火山灰層の二次堆積（約5,000年前＝大木６式期）以降、中期中葉（大木8b式期）までに所属するものである。沼沢火山灰層の二次堆積の時期は、第Ⅱ章で述べたように大木６式古段階の比較的短い期間で完結されたものと考えられ［滝沢ほか前掲・髙橋ほか前掲］、下層から大木６式古段階、上層から新段階の土器が出土している［滝沢ほか前掲］。したがって、ここで取り扱う最も古い土器は、大木６式新段階からの土器である。

①　分　　類

分類は以下のとおりであるが、深鉢形土器の多いことが予想されたため、まず器種分類を行った。その結果、圧倒的多数の深鉢形土器とこれ以外の浅鉢・器台・台付土器・有孔鍔付土器・小型鉢に分けた。

器形分類

出土土器の大半を占める深鉢形土器は、器形に複数のバリエーションが認められる。それらを類型化し、大木7b～8a式期を中心とした土器器形の傾向を把握するため器形分類を行った。なお、深鉢形土器以外の浅鉢・器台・台付土器・有孔鍔付土器等は、出土数・掲載数が少ないため器形分類はしていない。

器形分類は主に胴上半部から頸部を経て、口縁部に至る器形の変化で分類した。第19図のように16器形を９分類にまとめた。

（深鉢）

Ａ：口縁部が球体状に大きく膨らみ、口唇部が短く外反する。福島県石川郡石川町七郎内Ｃ遺跡のⅡ群Ａ型深鉢［松本ほか1982］に同じ。

Ｂ：胴上半部が丸みを帯び、口縁部が短く外反する。胴上半部に最大径があり、いわゆる甕形器形にな

る。G器形に比べ、口縁部が短い。前述の七郎内C遺跡のⅡ群B型深鉢［松本ほか前掲］に同じ。

C：胴部から頸部は外反気味に開き、口縁部で直立ないしは内湾する。変化が急で頸部と口縁部に稜が認められるものと、変化がやや緩く丸みをもつものがある。

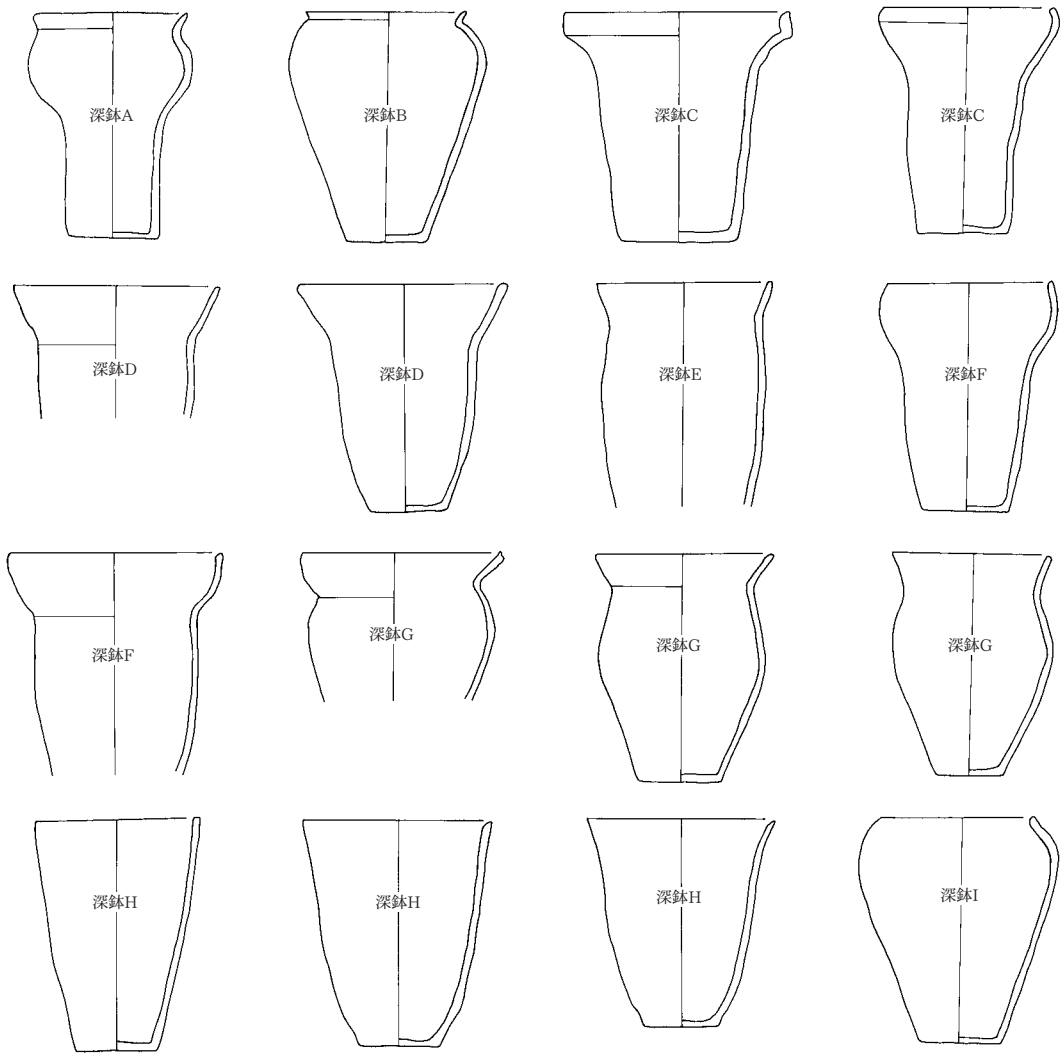
D：胴上半部から頸部を経て口縁部は緩く開くもの。直線的に外反するものと極めて緩く内湾気味に開くものがある。口縁部の長さがE器形に比べ長い。

E：胴上半部から頸部を経て口縁部は緩く直線的に外反する。口縁部の長さがD器形に比べ短い。

F：口縁部が内湾しながら開くもの。いわゆるキャリパー形の器形。頸部の屈曲がきついものと緩いものがある。

G：胴部が膨らみ、頸部がすぼまり口縁部が外反する。胴部の膨らみが胴上半部にあるものと胴中央部にあるもの、頸部のすぼまりがきついものと緩いものがある。B器形に比べ、口縁部が長い。

H：バケツ状に開くもの。直線的に開くもの、やや内湾気味に開くもの、口縁部がやや外湾気味に開くものがある。



第19図　器形分類図①（中期初頭～中葉）

Ⅰ：胴上半部が丸みを帯び、そのまま口縁部に至るもの。B器形に近似するが、口縁部は外反しない。最大径は胴上半部にある。

系統分類

さらに圧倒的多数を占める深鉢形土器は、文様・施文等からいくつかの系統に分かれるため、系統別に分類した。

東北系土器：在地の土器であり、出土土器の多数を占める。大木6式新段階～8b式期までの土器である。

汎北陸系土器：新保・新崎式の北陸系の土器とこれらの影響を受けた越後系の土器をまとめたものであり、一定量の出土が認められた。汎北陸系の土器は魚沼市（旧堀之内町）清水上遺跡の土器編年［寺崎1996］の中期前葉②・③、中葉①・②の土器である。大木7b～8a式期に並行する。

東関東系土器：阿玉台式土器の系統に属するものであり、阿玉台Ⅰb・Ⅱ式の土器である。一定量の出土が認められた。大木7b～8a式期に並行する。

その他の系統：出土数は極めて少ないが、関東系の勝坂式、東北北部の円筒上層C式の土器である。大木7b～8a式期に並行する。

なお、浅鉢・器台・台付土器・有孔鍔付土器・小型鉢は一括りにまとめてあるが、包含層出土土器の説明で系統について記述した。

時期分類

多数を占める東北系（在地）の深鉢形土器は、文様に時期的な特徴をもつ有文土器と特徴の少ない粗製・素文土器に分けた。有文土器は文様・施文を手がかりに大木式土器編年［丹羽1989・松本ほか1991；森1998］を参照し、時期別に大木6式新段階～大木7a式期、大木7b式～8a式期、大木8b式期に分類した。

以下、遺構出土の土器、包含層出土土器の順で説明するが、器形の分かるものは器形を含め、文様を中心に記述する。

②　遺構出土の土器（図版87・92～95・103～110・127・199・344・348・349・354～360・373）

住居跡出土の土器（図版87・92～95・344・348・349）

SI371出土土器（130～143）

覆土から多くの土器が出土している。130はA器形の深鉢である。横走隆線で口縁部文様帯を二分している。上部文様帯は突起から延びる橋状把手で区画され、区画内の地文は消され無文帯となっている。下部文様帯は隆線貼付により、楕円状に区画され、区画隆線に沿うように有節沈線が巡っている。頸部には隆線が貼付され、口縁部と胴部を区画している。胴部は突起下の延長に、縦位隆線で区画され、口縁部と同じように区画隆線に沿い有節沈線が施文される。文様単位は不明である。131は口縁部破片である。隆線による楕円区画内に2条の有節沈線が巡る。器形・文様ともに130と同様と推定される。132・133はC器形の深鉢である。口唇部直下に横走隆帯を貼付し、口縁部文様帯を上下に分ける。上部文様帯は132が4単位の貼付文で区画された内側を列点文、133が縦位短沈線を充填する。下部文様帯は頸部で3条の横走沈線が巡り、133は2条の沈線で4区画する。胴部は2～3条の沈線で、132が連孤文・渦巻文・縦位沈線文、133はクランク状文が施文される。胴部文様はともに4単位構成である。134・

135は同一個体で、第Ⅴ群汎北陸系（越後系）の深鉢である。D器形で４単位の大波状口縁をもつものと推定される。頸部で半隆起線及び爪形文の付いた半隆起線を横走させ、口縁部と胴部を分けている。口縁部文様帯は、口唇部直下に半隆起線及び爪形文の付いた半隆起線を沿わせ、頸部との間には、渦巻状文・玉抱き三叉文・円形刺突文・鋸歯状文が施される。胴部は縦位に半隆起線文を多く施文している。136はF器形の大形深鉢である。口唇部直下に隆帯貼付による横楕円区画文、頸部との間や口唇部及び口唇部内側に隆線を横走・波状・ジグザグ状に貼付している。137は胴部の膨らみが上半部にあるG器形の大形深鉢である。口縁部無文帯をS字状隆帯で４単位区画している。胴部文様は４単位構成で、S字状隆帯から列点文を垂下させ、沈線文を沿わせている。区画内は沈線で波状文・渦巻文・横楕円文等を施文している。139はA器形で、口唇部直下と頸部に２条の沈線を横走させている。140は波状口縁の浅鉢である。口縁部の多くは欠損するが、主突起・副突起が各４個ずつ付き、主突起は穿孔される。文様は口縁部の各突起間に２条の縄文LRが押圧され、胴部は主に胴上部に集中し、主突起の下に渦巻文・縦位文、各突起間の下には２条の孤線文が縄文LRで押圧されている。４単位の文様構成をとる。141は胴部から口縁部が内湾気味に開く浅鉢、142は円孔をもつ器台、143は台付土器である。

SI396出土土器（144～150）

図示した土器は、深鉢の破片で、長方形石組炉の炉底に敷き詰められていたものである。144は内湾気味に開く口縁部の破片である。口唇部直下と口唇部内側には横走隆線を貼付する。口縁部は渦巻状の隆線が貼付され、隆線沿いに沈線をなぞる。隆沈線であるが、隆線はやや太く、沈線はやや雑である。145・146は同一個体である。内湾気味に開く波状口縁の破片である。口唇部直下に隆線を貼付し、２条の沈線を沿わせている。147・148は胴部破片で、半隆起線文を147は横位に、148は縦位・横位・渦巻状に施文している。149・150は胴下半部～底部にかけての破片で、149は半隆起線文を、150は平行沈線文をやや密に垂下させている。

SI428出土土器（151～155）

151は第Ⅴ群汎北陸系（越後系）のいわゆる王冠型土器である。頸部に基隆帯を横走させ、口縁部文様帯と胴部文様帯を分けている。口縁部は４単位の大波状を呈し、基隆帯＋隆起線で渦巻文を中心とする曲線文が施され、波頂部下や波底部に各４単位の小さな橋状把手が付く。胴部も基隆帯＋隆起線で、渦巻文・曲線文のほかは、縦位に密に施文される。152はB器形の口縁部である。横走隆帯が貼付され、所々で渦巻状の瘤となる。153は交互刺突文をもつ口縁部の破片、153は交互に押捺のある横走隆帯と橋状把手をもつ口縁部の破片である。154はF器形の口縁部破片で、上下に細い隆線の貼付された口縁部文様帯に矢羽状沈線が充填されている。155は波状口縁の波頂部の破片であるが、波頂部左側の「エグリ」から王冠型土器の波頂部［品田1988］と推定できる。波頂部に隆帯の渦巻文や円文、波頂部下にはめがね状突起が付けられ、ここから基隆帯＋隆起線が垂下している。また波状口縁に沿って、２条の細く深い有節沈線（角押文に近似）が施文される。

土坑出土の土器（図版103～110・199・354～360）

SK322出土土器（237）

237はI器形の大形深鉢である。口縁部文様帯は太い隆沈線で区画し、横方向の渦巻文を連続させ、空間部は矢羽状短沈線が充填される。胴部は２～４条の沈線で曲直線を描いている。

SK374出土土器（242～246）

覆土から比較的多くの土器が出土している。242はE器形の深鉢である。口唇部は4単位の円環状の突起が付き、口縁部・胴部の文様も、突起下で区画され4単位構成をとる。口縁部は隆線の貼付による楕円区画文を配し、区画内には隆線に沿って2条の沈線が巡る。なお、楕円区画文の下部の隆線には交互の押捺が付けられる。胴部は3条の沈線で、渦巻状文・クランク状文等の曲直線が施文される。243は横「S」字状に隆帯の加飾された口縁部の破片である。244は第Ⅴ群汎北陸系の深鉢の口縁部破片である。半隆起線及び爪形文のある半隆起線で区画された文様帯に、縦位細沈線や細かい刻み目が施されている。245は第Ⅳ群の深鉢で、縄文RLに縦位の結節縄文Lが施文される。246は撚糸文Lに3条の沈線が横走する深鉢の胴部破片である。

SK375出土土器（247～260・285）

覆土中～下層から多くの土器が出土し、下層ほど破片が大きくなる傾向にある。285はF器形の大形深鉢である。頸部は3条の横走沈線と渦巻文で、口縁部と胴部を区分している。口縁部文様帯はさらに上下に二分されている。上部文様帯は隆帯・隆線・細隆線で「S」字文・渦巻文・橋状把手・円環状把手など派手に加飾されている。下部文様帯は3条の沈線でクランク状文や渦巻状文が施文されている。胴部は3条の沈線でクランク状文や渦巻状文、逆U字状文などの曲直線を連結させている。247はF器形の深鉢の口縁部である。頸部で沈線を横走させ、胴部と口縁部を区画する。口縁部の文様は上部に集中し、隆帯で「S」字文や渦巻文が4単位で装飾され、正面の突起が最も派手に加飾されている。各突起間は太い隆帯を貼付することにより、幅の狭い区画が作り出され、斜めの短沈線が充填されている。下部は縄文LRだけである。248はI器形のやや大形な深鉢である。文様は胴上半部から口縁部に集中する。口縁部は口唇部に横走隆線を貼付し、口唇部を肥厚させる。直下に3条の沈線が横走する。胴部は4条の沈線で4単位の「S」字状渦巻文を施文するが、正面のみ2条の隆線と沈線に置き換えられ、隆線は一方で発達し、隆帯の渦巻橋状把手となる。249はI器形の小形の深鉢である。文様は胴上半部から口縁部に集中し、細い隆線の貼付を多用する。口縁直下と胴上半部に横走隆線を貼付し、文様帯をつくる。この文様帯は4単位の渦巻文で区画され、区画内は隆線の貼付による斜格子目文、縦位の刻目文が施文される。胴部は細い隆線貼付により、曲直線が描かれる。251はF器形の大形深鉢の口縁部片である。隆帯貼付による渦巻状の突起が付く。口唇部直下・頸部に隆帯・隆線を貼付し、口縁部文様帯を区画する。さらに突起下より2条の隆線が垂下し、長方形区画とする。区画内の隆線沿いに2条の沈線が巡り、3条単位の沈線でクランク状文が施文される。252は隆帯の加飾がある深鉢の口縁部である。口唇部に隆帯を貼付し、「S」字文や渦巻文などの立体的な突起を付ける。突起は4単位と推定され、正面の突起が最も立体的になる。各突起間は交互に押捺のある隆帯で結ばれている。口唇部・突起の下は2条単位沈線の連孤文、細い隆線のジグザグ状文が貼付されている。254・255は同一個体でD器形のやや大形の深鉢である。口唇部に隆帯を貼付し、8単位の突起を付けている。突起は7つの渦巻状の小突起と1つの大きな袋状突起からなる。突起間は隆帯・円形列点文で結ばれる。口縁部は頸部の横走隆線、突起下から垂下する縦位の隆線で8単位の方形区画となる。区画内は区画隆線に沈線を沿わせ、3条の沈線でクランク状文・渦巻状文・横「し」字状文が施される。胴部は破片をみる限り、3条の沈線がクランク状に施文される。257はC器形の大形深鉢である。頸部に3条の沈線を横走させ、口縁部と胴部を分けている。口縁部の文様は上部に集中している。口唇部内外に隆帯を貼付し、肥厚した口唇部に太い沈線を1条巡らせている。また、隆帯貼付による渦巻状文が、大小含め8単位付くものと推定される。258はG器形の深鉢で、狭い口縁部の上下に隆

帯を貼付し、幅の狭い楕円区画文をもつ。区画内は無文で、隆帯上は指頭圧痕状の押捺が認められる。259・260は深鉢の口縁部片で、同一個体である。口唇部内外に横走隆線を貼付し、外側の隆線の上下に沈線を沿わせている。260をみる限り、口唇部上の１か所に渦巻文状の突起が付く。口縁部は細い隆線を縦位の菱形状に貼付している。250・253は第Ⅳ群のＨ器形の深鉢である。250は波状口縁で、口縁部付近に２条の沈線を横走させ、波頂部下に一対の逆「U」字状文が沈線で描かれている。253は地文に撚糸文Ｌが施される。

SK376出土土器（261～272）

覆土下層から完形品に近い土器が、多く出土している。261～263は残存率の高い浅鉢である。大きさは異なるが、いずれも器形・文様構成が極めて近似する。器形は底部から大きく開き、口縁部で強く内湾する。外面の屈曲部には隆線が貼付されるために稜ができ、口縁部文様帯を形成する。また、口縁部には肥厚する主突起・副突起が各４か所付く。主突起には隆線貼付による渦巻文、副突起には縄文LRの押圧による渦巻文、各突起間には縄文LRの押圧が３条施される。胴部の文様は、縄文LRの押圧による渦巻文を主体とする曲線文が上部を中心に施文されている。これら浅鉢の大きさ以外の相違点は、胴部の地文は261・263が縄文LR、262が縄文RLであること、261の口唇部の内側には細い隆線が貼付され渦巻文や横楕円区画文が付けられること、同じく口唇部上の４か所にやや大きい指頭圧痕状の押捺が加えられることなどである。264はＦ器形の深鉢である。口縁部の隆帯加飾は上部に集中し、隆帯上に細い隆線が貼付されたり、沈線文が施文されたりして立体的な加飾が全周する。なお有節沈線も一部認められる。口縁下部から胴部の文様は頸部で１条の横走波状沈線文、３条の横走沈線文で区画されるが、ともに３条の沈線でクランク状文・「コ」字状文などの直線文が施される。265はＣ器形の深鉢である。口唇部上に小瘤状の突起、口縁部は隆線貼付による幅の狭い横楕円区画文、区画内には沈線が巡り、列点文が充填される。266は第Ⅳ群のＧ器形の深鉢である。緩やかな４単位の波状口縁で、波頂部に渦巻状の隆線が貼付される以外、無文である。267はＣ器形の小形の深鉢である。口唇部に小瘤状の突起と隆線を貼付し、肥厚した口唇部上に刻み目が施される。268・269は円筒形の深鉢の胴部である。268は３条の沈線で渦巻状文やクランク状文が、269は上部に縦位短沈線と３条の横走沈線が施文される。

SK378出土土器（273～284）

底面直上から多くの土器が出土している。Ａ器形の深鉢と文様が簡素な第Ⅳ群土器でほとんどを占めている。273はＡ器形の深鉢である。頸部に３条の沈線を横走させ、口縁部と胴部を分けている。口唇部には４単位の突起が付くものと推定され、正面の突起は内向きの獣面突起である。外側には「Y」字状の短い隆線が貼付される。口唇部直下は２条の沈線を横走させ、以下、口縁部は沈線で逆「U」字状文を連続させている。胴部は３条の横走沈線を中央部と下半部に巡らせている。275はＨ器形のやや小形の深鉢である。口唇部には、やや大きめの突起と切れ込みのある小突起を、各４単位ずつ配すると推定される。口縁部はやや大きめの突起から断面三角形の隆線を貼付し、幅の狭い区画帯をつくり、円形刺突の列点文が施される。276はＡ器形の緩やかな波状を呈する深鉢である。波頂部には三角形の小瘤状突起が４単位付けられ、１条の有節沈線を口唇部の下に沿わせている。口縁部は上下を断面三角形の横走隆線と横走有節沈線で区画し、区画内には断面三角形の隆線を曲線状に貼付し、有節沈線を曲隆線に沿わせている。胴部は頸部の横走隆線と波頂部下の延長からの隆線で、方形区画される。区画内には２条の有節沈線で渦巻文などの曲線文を描いている。口縁部、胴部ともに４単位の文様構成と推定される。281はＡ器形の深鉢口縁部の破片である。口唇部には穿孔された突起が付くと推定される。口唇部下は幅の狭い無文帯がつく

られ、突起下の橋状把手と横走隆線で区画される。以下、口縁部の文様は波状沈線で区画（楕円？）され、区画内には沈線で渦巻文などの曲線文が描かれている。284はA器形の深鉢である。頸部で3条の沈線を横走させ、口縁部と胴部を分けている。口唇部には断面三角形状の隆線を貼付し、肥厚させている。隆線には指頭圧痕状の押捺が加えられている。口唇部の下は上下に2条の沈線を横走させ、無文帯をつくっている。以下、口縁部は2条の沈線で大きく緩やかな孤線文を描いている。口縁下部から胴部に2条の波状沈線が垂下する。破片資料のため明確でないが、縦位の波状沈線の上方に突起が付くと推定される。274・277・279・280・282・283は、文様が簡素な第Ⅳ群土器の深鉢である。274はH器形、277はE器形で、口唇部に指頭圧痕状の押捺が加えられる。279はH器形で、地文が撚糸文Lである。280はG器形で、口唇部に隆帯を波状に貼付し、隆帯上に円形刺突を施す。胴部は波底部から短隆線や波状沈線を垂下させている。282は胴上半部の丸みにやや欠けるが、B器形に近似し、頸部に2条の沈線が横走する。283はE器形で、切れ込みのある円形状の突起が付けられ、頸部に1条の沈線を横走させる。

SK380出土土器（288・289）

いずれも覆土下層から出土している。288はG器形の深鉢で、頸部に隆帯を貼付し、幅の狭い口縁部文様帯を作り出している。この文様帯には、太い粘土紐を「S」瘤状に貼付し区画している。区画内には縄文Lの縦位の押圧を充填している。なお、頸部の横走隆帯には指頭圧痕状の押捺が加えられている。289はE器形の小形の深鉢である。頸部の屈曲部に円形刺突の列点文・沈線・波状沈線を横走させ、口縁部と胴部を分けている。口唇部は4単位の突起が付くものと推定され、円孔をもつ山形突起と隆線貼付による鋸歯状の突起が付けられる。口唇部の下には横走隆帯が貼付され、幅の狭い文様帯が作り出される。この文様帯に細い短沈線が充填される。なお、288と同じように、横走隆帯には指頭圧痕状の押捺が加えられている。胴部は沈線でクランク状文・「コ」字状文、菱形状文などの直線文が描かれる。

SK400出土土器（297）

C器形の深鉢で、底面直上から出土している。頸部には断面三角形の横走隆帯を貼付し、口縁部と胴部を区分する。口縁部は上下に文様帯が分かれ、上部文様帯は隆線貼付による幅の狭い楕円区画文、区画内に3条の横位沈線が施文される。下部文様帯は沈線で波状文・逆「U」字状文・渦巻文などが描かれる。胴部は頸部の横走隆帯から「Y」字状に垂下する断面三角形の隆線に4区画され、区画内に沈線で横位・縦位の波状文（鋸歯状文）・「U」字状文が描かれる。口縁部・胴部とも4単位の文様構成である。

SK430出土土器（307～310）

覆土から比較的多くの土器が出土している。308はG器形の深鉢で、頸部のくびれに断面三角形状の横走隆線を貼付し、口縁部と胴部を区分する。口縁部の文様は無文帯に2条の沈線を横走させている。胴部は頸部の横走隆帯から「Y」字状に垂下する断面三角形の隆線に2区画され、区画内に沈線で横位・縦位の直線文・「U」字状文・渦巻文・菱形状文などが描かれる。胴部は2単位の文様構成をとると推定される。309は第Ⅴ群汎北陸系（越後系）の深鉢の口縁部破片である。G器形の頸部のくびれに横走する基隆帯を貼付し、口縁部と胴部を区分する。口唇部には欠損しているものの、突起が付く。口縁部文様帯は上下に二分される。上部文様帯は口唇部直下に太い横走基隆帯を貼付し、幅の狭い文様帯を作り出す。この文様帯に横走沈線文や基隆帯・隆線貼付による渦巻文などが施される。下部文様帯は3条の横走沈線、交互の切れ込みによる鋸歯状帯文が施文され、欠損しているものの橋状把手が付くと推定される。胴部は基隆帯＋隆起線で渦巻文などの曲直線を密に施文している。307・310は口縁部の破片で、区画内に交互刺突文を施している。

SK454出土土器（314～318）

覆土から比較的多くの土器が出土している。316はF器形の深鉢の口縁部である。文様は口唇部直下に集中し、太い隆帯を貼付し、「S」字状文や幅の狭い楕円区画文が作り出される。肥厚した口唇部には細い隆線を貼付し、渦巻文などが描かれている。317はG器形の深鉢の口縁部破片である。口縁部には太い隆帯を貼付し、幅の狭い楕円区画文を連続させている。なお、区画文の連結部は橋状把手となる。315は大形深鉢の口縁部破片で、隆線貼付の渦巻文に2条の沈線を沿わせている。318はG器形の深鉢の口縁部破片で、口唇部直下に横走する隆線を貼付し、指頭圧痕を交互に押捺している。

SK455出土土器（319～321）

319は有孔鍔付土器の胴上部の破片と推定され、無文地に太い隆帯を貼付する。320は浅鉢の口縁部破片で、縦位の隆線で区画し、細い半隆起線が密に施文される。口唇部の内側には円形の貼付文がある。浅鉢であることから第Ⅷ群に分類したが、系統は越後系である。321は第Ⅴ群汎北陸系の深鉢の口縁部破片である。波状口縁の波頂部で半隆起線と爪形文のある半隆起線が施される。

SK456出土土器（322）

E器形のやや小形の深鉢である。口唇部直下に横走隆線を貼付し、幅の狭い文様帯を作り出している。この文様帯を瘤状小突起で区画し、区画内は縄文Rの押圧を充填している。

SK464出土土器（323～325）

323・324は同一個体である。A器形の深鉢の口縁部破片であり、隆線の両側に有節沈線を沿わせている。325は透かしのある口縁部破片である。口唇部に細い隆線を添付し、鋸歯状文や渦巻状文を施している。口唇部直下には太い隆帯を貼付し、隆帯上に有節沈線が施文される。以下、口縁部には3条の沈線が横走する。内側にも細い隆線を2本単位で横走させ、間に有節沈線が施文される。

その他の遺構出土の土器（図版127・373）

15B－P5（465）

口縁部がやや外湾する波状口縁の波頂部破片である。口唇部は隆線を貼付し、肥厚する。肥厚した口唇部上にやや太い沈線が巡り、波頂部で渦巻状となる。波頂部の直下には小瘤が貼り付けられる。

SX427（470・471）

470は深鉢の口縁部破片である。隆帯を山形状に連続させ丸棒状の刻みを加えている。以下、隆線（区画？）を貼付した両側に沈線を沿わせている。第Ⅴ群の汎北陸系の深鉢である。4単位の緩やかな波状口縁は波頂部で肥厚し、口縁部に1条の幅広な半隆起線文を巡らしている。半隆起線文より上部は無文となる。系統から第Ⅴ群に含めたが、文様の観点からは第Ⅳ群といえよう。

③　包含層出土の土器（図版128～133・373～377）

包含層出土の土器は、17～21・E～Gグリッドにほとんどが分布する。この分布にほぼ一致する土器は、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ～Ⅷ群土器であり、東北系の大木7b～8a式期及びこの時期に並行する他系統の土器群である。この分布域は中期前葉～中葉（大木7b～8a式期）の集落跡の北東部分及びその外域を含んでいる。これ以外の第Ⅰ・Ⅲ群は出土数も少ないこともあるが、散漫に出土し分布傾向の特徴は認められない。

以下、大（群）分類ごとに説明するが、文様・施文を中心にさらに細分類したものもある。

第Ⅰ群土器（472～474）

東北系の大木６式新段階～大木7a式期までの深鉢形土器である。時期によりさらに２細分した。

A類（472）　大木６式新段階に相当するものである。

472は深鉢の口縁部破片である。瘤状の突起の周囲に細隆線を貼付し、細かな爪形文が施される。

B類（473・474）　大木7A式に相当するものである。

473はH器形の深鉢で、口縁部から胴上半部である。沈線で横位・縦位の沈線文、波状文や渦巻文などの曲直線を描いている。474はF器形の深鉢で、口縁部から胴上半部である。頸部に刻みのある断面台形状の横走隆線を貼付し、隆線の上下に各２条の横走沈線を沿わせ、口縁部と胴部を区分している。口縁部は２条の沈線で横走沈線文・横位楕円区画文・孤線文が施文され、各文様内には斜め短沈線が充填される。なお、横位楕円区画文内には三角形の掘り込みが交互になされている。

胴部は頸部から刻みのある断面台形状の隆線を垂下させ、方形区画している。区画内上部は三角形の交互掘り込みによる横位の鋸歯状帯文、区画隆線の両側に各３条の沈線を沿わせている。

第Ⅱ群土器（475～545）

東北系の大木7b～8a式期までの深鉢形土器である。中期中葉までの土器では、最も出土量が多い。文様により、さらに細分類した。一つの土器には多数の文様や特徴が複雑に組み合って文様構成されている。また、破片資料が多いため、個々の土器の最も適当な文様や特徴を欠くと思われるものもある。したがって、小さな破片資料は、破片なりの細分類を行ったが、検討を要するものも存在する。

A類（475～489）　交互刺突文が施文されるものである。

475～481は緩く内湾気味に開く、深鉢の口縁部破片である。破片資料のため明確で無いものもあるが、D器形の口縁が多い。475・477・479・481は口唇部直下に横位に交互刺突されるもので、476・478・480は区画内または２段にわたり交互刺突される。475～477・481は突起が、479・480は橋状把手が付けられる。

482はC器形の深鉢である。口縁上部の屈曲部には幅の狭い文様帯を作り出し、隆線を螺旋状に貼付し、橋状把手で区画する。区画内は交互刺突文が充填される。以下、口縁部は２条の沈線を「コ」字状に描き、沈線間に交互刺突文を施している。また、「コ」字状文の片方には、三叉文が見られる。胴部は横走沈線文と２条単位の交互刺突文が密に施文される。

483はEまたはH器形、484はH器形の深鉢である。口唇部の直下に１条の交互刺突文、以下、沈線を横走させる。

485～489はB器形の深鉢である。485～487は頸部に交互刺突文が、488・489は胴上半部に交互刺突文が巡る。また、485～487・489は貼付された隆線・隆帯に指頭圧痕状の押捺が加えられる。なお、486は橋状把手と把手上に渦巻状文が付く。

B類（490～495）「Y」字状の隆線が貼付されるもの。隆線は断面が三角形状のものが多い。

490～493は突起下から「Y」字状文が垂下するものである。490は渦巻状の突起であり、「Y」字状文は断面三角形の隆線である。491はめがね状の突起で、「Y」字状文に円形刺突が加えられる。492・493は同一個体で、H器形の深鉢である。平らでやや肥厚した口唇部に三角形の小突起が付き、そこから断面三角形の「Y」字状文が垂下し、胴部を区画する。胴部は沈線で渦巻文や直線文が描かれる。

494はD器形の深鉢である。横走隆線が貼付された頸部から「Y」字状文が垂下し、胴部を区画する。文様は口縁部・胴部ともに断面三角形状の隆線で区画されるが、区画隆線に２条の沈線を沿わせる。

495は破片資料のため器形は判然としないが、口唇部に縄文Ｌを刻目状に押圧し、直下に粗雑な「Y」字状の隆線を貼付している。

Ｃ類（496）　口縁部が球体状に大きく膨らみ、口唇部が短く外反するＡ器形の深鉢である。地文は縄文である。文様により、さらに２細分した。

C1類（496）　有節沈線を多用するものである。

496は口縁部破片であるものの、Ａ器形と推定できる。「ハ」字状に貼付された隆線に沿って、両側に各２条の有節沈線が施される。包含層では良好な資料は少ないが、遺構出土では130・276がある。

C2類　沈線文を多用するものである。

包含層出土のものは図示していないが、遺構出土では273・284がある。

Ｄ類（497～499）　口縁部に縄文Ｌが横位に押圧される深鉢である。他の文様と併用される。

497は縦位の縄圧痕文と併用されている。なお、口唇部上に横「し」字状の小突起が付けられる。498は上面観が横「C」字状の突起から垂下する波状隆線の左側が横位の縄文RLの押圧と列点文、右側が横位の沈線文と円形刺突の列点文が施文されている。499は波状口縁の口唇部直下に、２条の縄文LRの押圧が施され、波頂部から垂下する隆線に有節沈線を沿わせている。

Ｅ類（500～505）　口縁部または胴上半部に隆線を貼付し、楕円区画文を連続させるもの。

500～502は頸部が「く」字状に屈曲する頸部から胴上半部に隆帯を貼付し、楕円区画文を連続させている。500は扇状突起に近似する大突起が付き、突起下に橋状把手が付き、楕円区画文を分けている。501は小突起下で楕円区画文が分かれる。なお、破片資料のため明確でないが、楕円区画文が多段構成になる可能性もある。502は楕円区画文が２段構成になっている。

503～505は「く」の字に外反しない器形である。破片資料のため明確でないものもあるが、完全な楕円区画とならないものである。503・504は断面三角形の隆線を貼付するが、口唇部にはきちんと貼付されていない。505は隆線を「T」字・逆「T」字状に貼付し、隆帯が全周しない幅の狭い変形楕円区画文となっている。なお、隆帯上には爪形様の刻みが加えられている。

Ｆ類（506～508）　破片資料のため、適当な分類とはいえないが、沈線文を特徴とするものである。

506はＢ器形の胴上半部の破片と推定される。上部を断面三角形の隆線、沈線、波状沈線を横走させる。下部は断面三角形の隆線で曲線（区画文？）を描き、隆線に沈線を沿わせている。507はＢ器形の小形の深鉢で、口縁部から胴上半部の破片と推定される。短く外反する口縁部は無文で、小突起で区画する。胴部は指頭圧痕状の押捺のある隆線を横走させ、頸部との間に文様帯を作り出している。文様帯は小突起の延長から垂下する沈線で区画され、区画内の上下に沈線で連孤文（対孤文）を施文する。

Ｇ類（509～516）　突起・把手の破片資料である。ここで分類されたものは、大木8a式期の土器に多く伴う突起・把手のように、隆帯で派手に加飾されたものでなく、隆線や小突起が比較的単純に貼付されたものである。大木7b式期の土器に伴う突起・把手と考えている。

508は口唇部の小突起の下から橋状把手が付き、口縁部文様を区画する。509は山形突起、510は内向きの獣面突起で外側に円形貼付文が付く。511・512は波状口縁に波頂部に貼付文が付き、波頂部下の両側は沈線で三角形区画され、511には透かしがはいる。513は小突起に隆線を巡らせ、口唇部を肥厚させている。肥厚した口唇部には沈線が引かれる。外面は剥落して不明であるが、内面には細い隆線で円形文を施文する。514は大形皿状突起と剥落するものの突起下に橋状把手が付く。515は口唇部上に円形で中空の小突起が、516は波状口縁の波頂部の下に沈線による２重円内に小突起が付く。

H類（517～529）　口縁上部から口唇部が太い隆帯で加飾され、立体的で派手な突起が付くもの。口縁下部から胴部の文様、資料の遺存状況からさらに細分した。

H1類（517）　隆帯間の沈線や口縁部文様に有節沈線が残るもの。

517はD器形の大形深鉢の口縁部である。口唇部及び口唇部直下に隆線・隆帯が貼付され、渦巻状文、円環状文の突起が付けられる。肥厚した口唇部や隆帯内にやや粗雑な有節沈線が施文される。口縁下部は頸部の横走隆線で区分され、やや粗雑な沈線や有節沈線で渦巻文・連孤文、縦位短沈線、横走線などの曲直線が施される。図示していないが胴部の破片をみる限り、文様は隆線の貼付文（区画文？）、縦位（短）沈線文などが認められる。

H2類（518～521）　1類と異なり、隆帯間の沈線や口縁部文様には有節沈線が認められない。

いずれもF器形の深鉢の口縁部破片と推定される。口唇部及び口唇部直下に隆線・隆帯が貼付され「S」字文・渦巻文・円環状文・菱形状文などが組み合わさった立体的な突起となる。口縁下部は縄文地に沈線の曲直線が描かれる。

H3類　口縁下部から胴部の文様が極端に少なく、または無くなり、地文だけとなるもの。

包含層出土のものは図示していないが、遺構出土では247・248・257・316・317がある。

H4類　2類に近似するが、口縁下部は縄文地に細い隆線が貼付される。

包含層出土のものは図示していないが、遺構出土では136・252・259・260がある。

H5類（522～529）　隆帯で加飾された立体的な突起や把手の破片資料である。

破片資料のため断定的ではないが、F器形になるものが多いと推定される。522・523は波状口縁の波頂部に隆帯を貼付し、渦巻文と、522は上向きの菱形文、523は内向きの菱形文の突起を作り出している。524は大形板状突起に隆帯・隆線を貼付し、渦巻文・鋸歯状文・「S」字状文を作り出している。525～528は隆帯・隆線の加飾により、渦巻状文・円環状文などが組み合わさった立体的な突起が付く。529は524と同じように大形板状突起に隆帯・隆線を貼付し、内向きの渦巻状文をつくっている。外側の隆線には交互の押捺が加えられて、内面には細い隆線を菱形状に貼付している。

I類（530～539）　口縁部直下に隆帯または隆線を貼付し、幅の狭い文様帯を作るもの。この文様帯に縦位の短沈線をはじめとする様々な文様が充填される。

530～537は口唇部直下の幅の狭い文様帯に、縦位の短沈線が施文される。530はD器形の深鉢で、隆線による渦巻文で文様帯を区画している。531～533も隆帯・隆線の渦巻文で文様帯を区画している。533は渦巻文の下には橋状把手が付く。531・534・535は口縁部に2～3条の孤線文が描かれている。536・537はG器形と推定され、縦位の細い短沈線が施文される。また537は「C」字状、538は判別できないものの貼付文で、文様帯を区画する。538はF器形、539はA器形の深鉢で、538は矢羽状沈線文、539は縦位の縄文Lの押圧が施文される。口唇部文様帯以下の口縁部は、横走沈線・横走波状沈線など沈線文が多用される。540は2条の刺突列が充填され、以下の口縁部は無文帯となる。

J類（541・542）　口唇部直下に横走隆帯・隆線が貼付されるが、文様帯のないものである。

541は口唇部に三角状の突起が付き、口縁部（胴上半部？）は沈線で区画されている。口唇部直下の隆線には指頭圧痕状の押捺と横長の刺突が加えられる。隆線の下は2条の沈線が横走する。

K類　細い隆線を器面全体に多用するものである。

包含層出土のものは図示していないが、遺構出土では249がある。

L類（543・544）　多条の列点文や有節沈線が施文されるもの。

543は口唇部直下に断面三角形の隆線と１条の沈線を横走させ、この下に３条単位の列点文が弧状に施される。544はＦ器形の深鉢である。４単位の波状口縁であり、剥落するが波頂部に瘤状の貼付文があったと推定できる。口縁部に沿って４条単位の、口縁下部に１条の有節沈線が巡る。胴部は波頂部下の頸部から垂下する隆線で４区画され、区画内に１～３条単位の有節沈線が横位・縦位に施文される。

Ｍ類　口縁部に高さのある横走隆帯が貼付された口縁部破片である。

包含層出土のものは図示していないが、遺構出土では70・455がある。

Ｎ類（545）　その他の口縁部破片である。

545はＢ器形の深鉢で、口縁部から胴上半部の破片である。頸部は無文帯で、胴上半部は隆線の貼付により上下に区画し、区画内に隆線で渦巻文などの曲線文を施される。

Ｏ類　隆線文や沈線文の施文された胴部破片である。

包含層出土のものは図示していないが、遺構出土では315・268・269などがある。

第Ⅲ群土器（546～552）

東北系の大木8b式期の深鉢形土器である。第Ⅱ群土器に比べ極端に少なくなり、出土分布に集中が認められない。

546～548はいずれもＦ器形の小形の深鉢で、口縁部破片である。口縁部文様は横方向に展開する細い隆沈線が施される。546は口縁部の上下に隆沈線を横走させ、口縁部文様帯を区画する。区画内に渦巻文が施され、頸部に無文帯をもつ。547は波状口縁の破片で、４条の隆沈線を横走させている。548は口縁部の上下に隆沈線を横走させ、口縁部文様帯を区画する。区画内は細い矢羽状沈線が充填される。

549・550はＨ器形の小形深鉢の口縁部破片である。波状口縁の口唇部に隆線を貼付し、二重口縁とする。口唇部に１条の沈線を沿わせ、波頂部は小突起状となる。549は口縁部に１条の沈線を横走させている。550は波頂部から円形刺突のある隆線を垂下させ、右に縦位の沈線が、左に鋸歯状沈線文を施文する。

551は口縁部の上下を太い隆沈線で区画し、区画内に剥落するが隆沈線の渦巻文が描かれている。552は口縁部の上下を沈線で区画し、区画内に沈線の渦巻文を描いている。文様構成は551に近似する。

第Ⅳ群土器（553～563）

粗製・素文の深鉢形土器である。有文土器に比べ、文様や特徴に乏しいため、所属時期を決定するのは難しい。しかし、有文土器の出土量の傾向と調査区内における出土分布の傾向に照らし合わせれば、大木7b～8a式期の粗製・素文土器と推定できる。

553はＨ器形の大型深鉢形土器の口縁部である。口唇部直下に沈線を横走させ、やや粗雑な連孤文が描かれている。

554～557は口縁部に突起ないしは把手が付けられた深鉢である。554は刺突のある突起が付いている。555・556はＨ器形と推定され、555は波状口縁の波頂部に、556は平口縁の口縁部に円形文が貼付され、556は円形文の下に指頭圧痕状の押捺のある隆線が横走する。557は胴上半部の丸みにやや欠けるが、Ｂ器形に近似する。口唇部上に半円状の小突起、突起の下に橋状把手が付く。さらに一部剥落するが、橋状把手の下から隆線が垂下する。558・559はＨ器形の深鉢で、折り返し口縁である。558は口縁部に結束縄文の押圧、胴部は結束縄文・波状沈線・沈線を垂下させている。559は口縁部に縄文Ｌの押圧を鋸歯状に施文している。

560は波状口縁の波頂部に押捺と内面に弧線、口唇部上に沈線、内面の屈曲部に隆線が施される。

561はＤ器形の波状口縁である。562は地文が口縁部は縄文LRを横位に、胴部は縦縞状に施文してい

る。563は縄文Ｒの結束が横位に施される。

第Ⅴ群土器（564～585）

汎北陸系（北陸系と越後系を含むもの）の深鉢形土器。大木7b～8a式期に並行する。文様・施文でさらに細分類した。

A類（564・565）　蓮華文が施文されるものである。

564はＨ器形の深鉢と推定される。横走する半隆起線文で区画された無文帯を挟んだ上下に、粗雑な蓮華文が施文される。565はＤ器形の深鉢と推定される。波状口縁の波状部と頸部に半隆起線文と爪形文の付く半隆起線文を沿わせ、間に蓮華文を充填する。

B類（566～575）　半隆起線文及び爪形文の付く半隆起線文で、曲直線が施文されるものである。

566はＤ器形の平口縁の深鉢と推定される。横位・縦位・曲線状に半隆起線文及び爪形文のある半隆起線文が密に施文される。また、縦位の半隆起線の一つには、小瘤状の突起が付く。

567・569～573は波状口縁の深鉢である。波状部に沿って半隆起線文及び爪形文のある半隆起線文が施され、567・570・571・572は波頂部から半隆起線文が垂下する。568は口縁部の破片と思われるが、文様構成は566に近似する。なお、566・568・569は幅の広い半隆起線文及び爪形文のある半隆起線文が使用されている。

574～575は波状口縁の深鉢で、文様構成は近似する。574は波頂部から矢羽状沈線のある隆線を垂下させ、文様帯を区画する。区画内には半隆起線文及び爪形文のある半隆起線文が施文される。なお、波頂部は穿孔されている。575は爪形文のある隆線を口唇部直下に沿わせ、また波頂部から垂下させ、文様帯を区画する。区画内には半隆起線文及び爪形文のある半隆起線文が施文される。

C類（576～579）　大波状口縁をもち、口縁部から胴部までの器面全体に隆起線・半隆起線・沈線で、渦巻文・三叉文・区画文、縦走線・横走線などの曲直線を密に施文するもの。基隆帯は付かない。

576は比較的小型の深鉢の口縁下部から胴上半部の破片と推定される。やや細い横走隆起線に区画された無文帯の上下に刻目文、胴部の区画内に横位短沈線が施文される。また剥落するが、瘤状の小突起が貼付される。

577・578は大きさが異なるが、深鉢の胴下半部から底部の破片と推定できる。文様構成は近似し、半隆起線が多く垂下する区画内に横位短沈線が充填される。

579はＤ器形の４単位の大波状口縁をもつ深鉢の口縁部から胴上半部の破片である。波状部と頸部に隆起線を沿わせ、口縁部と胴部を区画する。波頂部下に渦巻文と両側に三叉文、円形刺突文などを配する。胴部は隆起線で幅の狭い区画文を密に描いている。

D類（580～585）　基隆帯＋隆起線、沈線で曲直線を施文するもの。

580はＦ器形の４単位の大波状口縁をもつ深鉢の破片である。頸部に基隆帯と隆起線を横走させ、口縁部と胴部を区分する。波状部に沈線と基隆帯を沿わせ、直下に基隆帯と隆起線で連孤文を施す。連孤文の連結部には、めがね状の小突起が貼付される。胴部は隆起線で縦位の幅の狭い区画文を密につくり、区画内には横位短沈線を充填させる。

581はＤ器形の４単位の大波状口縁をもつ深鉢の口縁部から胴部の破片である。頸部に基隆帯を横走させ、口縁部と胴部を区分する。波状部に合わせ刻みのある基隆帯を沿わせ、肥厚した口唇部にはやや太い沈線が巡る。波頂部と波底部には橋状把手が付き、突起下には基隆帯と隆起線でやや大きめの渦巻文が施される。これらの間には隆起線や沈線でやや小さめの渦巻文・「S」字状文などの曲線文などが密に施

文される。胴部は口縁部と同じように刻みのある基隆帯と隆起線で、やや大きな渦巻文やめがね状の小突起が付けられる。これらの間には隆起線や沈線でやや小さめの渦巻文・三叉文などの曲線文などが密に施文される。

582～585はD類の破片資料である。582は鋸歯状の口縁をもち、基隆帯が貼付されている。583は波状口縁で口唇部と口縁部に基隆帯が貼付され、橋状把手が付く。584は深鉢の胴部破片で、基隆帯と隆起線の渦巻状文が施文される。585は袋状突起で、基隆帯と隆起線が施される。

第Ⅵ群土器（586～589）

東関東系（阿玉台式）の深鉢形土器である。大木7b～8a式期に並行する。いずれも胎土に雲母が多く混入し、焼成（遺存状況？）は良好である。時期により2細分した。

A類（586・588・589）　阿玉台Ⅰb式の土器である。

586は口唇部・頸部・胴上半部に断面三角形状の隆線を横走させ、1列の角押文を沿わせている。口縁部文様は1列の角押文で描き、胴部には襞状の指頭圧痕が認められる。

588はG器形の大形深鉢である。頸部は隆帯を横走させ、4単位の橋状把手が付く。胴部は橋状把手から「Y」字状隆帯を垂下させる。なお隆帯は頸部・胴部ともに、断面形が三角形を呈する。器面全体に襞状の指頭圧痕を施している。

589は山形の板状大突起である。突起上に刻目、直下に2列の角押文と角押文の渦巻文が施される。

B類（587）　阿玉台Ⅱ式の土器である。

587はD器形の波状口縁をもつ深鉢の口縁部から胴上半部である。頸部に隆線と2列の角押文を横走させ、口縁部と胴部を区分する。口縁部の文様帯は上下に別れ、上部は口唇部と口縁部に刻みのある隆線を貼付し、区画する。区画内には区画隆線に1列の角押文を沿わせ、複列の角押文で曲線文を描いている。下部文様帯は1条の波状沈線が横走する。胴部は隆線で楕円区画文を作り、区画内には2列の角押文を沿わせる。なお、口縁部・胴部ともに区画文の連結部は小瘤状に高くなる。

第Ⅶ群土器（590～591）

その他の系統（勝坂式、円筒上層式）の深鉢形土器である。大木7b～8a式期に並行する。系統別に2細分した。

A類（590）　関東系の勝坂式の土器である。

590は深鉢の胴部破片である。交互に押捺のある隆帯を渦巻状に貼付し、両側に有節沈線を沿わせている。なお、隆帯の先端は小渦巻状となる。

B類（591）　東北系の円筒上層C式の土器である。

591は深鉢の口縁部破片である。口唇部に刻みのある細い隆線を鋸歯状に貼付している。頸部で列点文を横走させ区分した口縁部文様帯は、沈線で区画された幅の狭い楕円区画文を2段組みで連続すると思われる。

第Ⅷ群土器（592～599）

深鉢以外の浅鉢、器台、台付土器、有孔鍔付土器などで、出土数は少ない。様々な系統が含まれるものの、大木7b～8a式期に並行する。器種により細分した。

A類（592～597）　浅鉢形土器である。592が東北系（在地）、596は関東系、ほかは汎北陸系と推定される。

592～595は「く」の字に内反する器形の口縁部破片である。592は沈線による幅の狭い横長の区画

内に、横長の刺突が加えられる。593は胴部との境に稜をもつ。縦位の半隆起線で区画された口縁部文様帯は、横位の爪形文のある半隆起線文と半隆起線文、蓮華文が施文される。594はやや幅の広い口縁部文様帯をもつ。突起下から垂下する半隆起線、沈線で区画された口縁部文様帯は、沈線で曲直線が描かれる。595は半隆起線を密に横走させている。

596・597は無文であるものの、596は口唇部に赤彩が認められ、597は内外の全面が赤彩されている。596は小波状口縁で、内面に稜をもつ。597は口唇部に隆帯を貼付し、緩い波状突起とする。また肥厚した口唇部に沈線が巡る。

B類　器台で、東北系（在地）である。

包含層出土からは出土していない。遺構出土では142がある。

C類（598）　台付土器で、東北系（在地）である。

598は台部であり、台上に鉢か皿が付くものと推定される。4つの円孔が認められ、周囲が盛り上がる。

D類（599）　小形の鉢で、東北系（在地）である。

599はミニチュア土器とするにはやや大きいため、小形の鉢とした。口唇部は隆線を貼付し、肥厚させている。肥厚した口唇部には沈線が巡り、2か所で抉れて低くなる。胴部は沈線で渦巻文を2段組みに連続させる。

E類　有孔鍔付土器で、中部高地系と考えている。

包含層出土からは出土していない。遺構出土では319がある。

c　中期末葉～後期前葉の土器

①　分　類

器種・器形分類　系統・時期により1つの器種でも類種の器形をもつため、まず深鉢形土器・鉢形土器・浅鉢形土器・台付土器・注口土器・壺形土器・蓋等とし、深鉢形土器・鉢形土器に関してはくびれの位置により3つに分類した。深鉢形土器A8はA7に類似しているなど、区別の難しいものもある。

深鉢形土器（器高が口径より大きいもの）

A類：胴部にくびれのないもの

1種：胴部下半から口縁部までほぼ直立するもの（449）

2種：底部から口縁に向かって開きながら立ち上がるもの（438）

3種：底部から開き気味に立ち上がり、口縁部が緩やかに内湾するもの（414）

4種：頸部から大きく内湾し、いわゆるキャリパー形になるもの（356）

5種：胴部下半が「く」字状に張り、口縁が内傾するもの（49）

6種：胴部が緩やかに張り、口縁部が外反するもの（10）

7種：胴部のほぼ中央が膨らみ、口縁に向かって外反気味に立ち上がるもの（378）

8種：底部から開き気味に立ち上がり、口縁に向かって直立するもの（104）

B類：器高の4/5以下の位置で胴部がくびれるもの

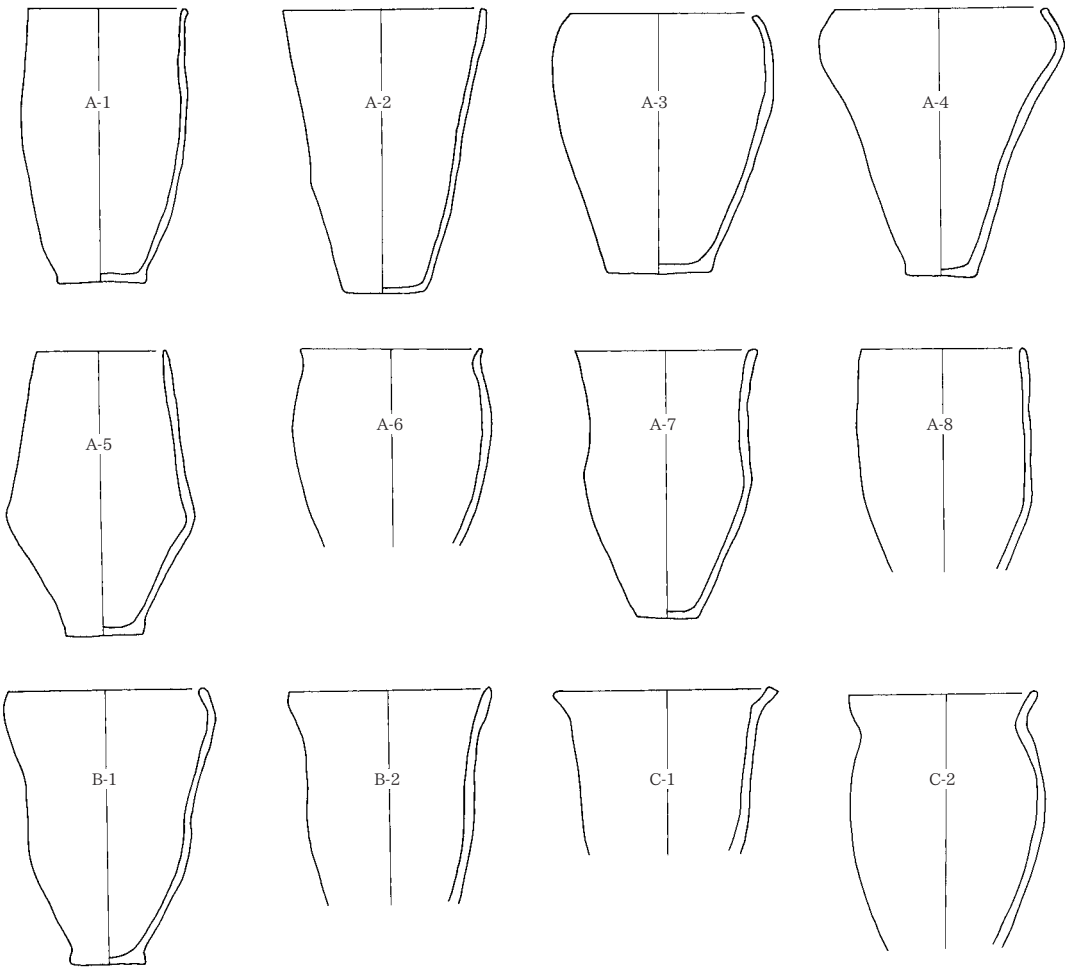
1種：胴部上半で緩やかにくびれ、口縁が内湾するもの（312）

2種：頸部でくびれ、口縁が外傾するもの（605）

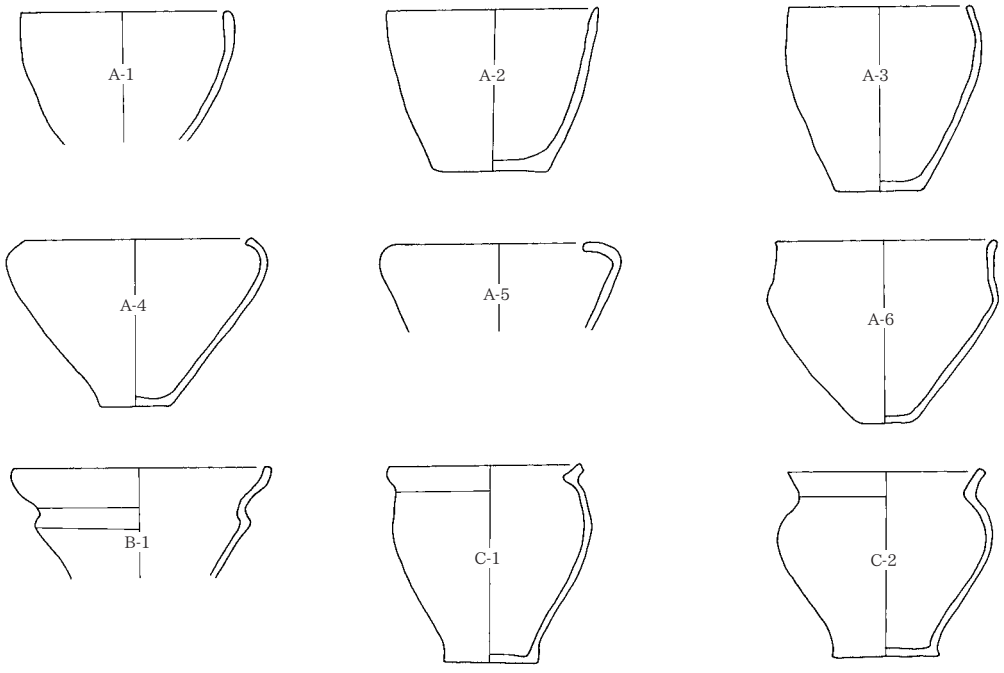
C類：器高の4/5以上の位置でくびれるもの

1種：底部が開き気味に立ち上がり、口端が受け口状になるもの（671）

深鉢形土器



鉢形土器



第 20 図　器形分類図②（中期後葉～後期前葉）

２種：胴部がやや膨らみ、口縁部が「く」字状に外反するもの（195）

鉢形土器（口径が器高と同じ、もしくは口径が器高よりも大きいもの）

Ａ類：胴部にくびれのないもの

１種：口縁が直立するもの（185）

２種：底部から口縁に向かって開きながら立ち上がるもの（392）

３種：胴部上半が緩やかに内湾するもの（439）

４種：底部から直線的に大きく開き、口縁部が強く内湾するもの（180）

５種：口縁が強く内傾するもの（52）

６種：底部から大きく開き、胴部上半がくびれて口縁が外反気味に立ち上がるもの（222）

Ｂ類：器高の4/5以下の位置でくびれるもの

１種：底部から大きく開き、頸部が「く」字状になるもの（632）

Ｃ類：器高の4/5以上の位置でくびれるもの

１種：胴部に膨らみをもち、口端が受け口状になるもの（679）

２種：胴部に膨らみをもち、口縁部が「く」字状に外反するもの（329）

浅鉢形土器（口径に比べて、器高が半分から３分の１くらいになるもの）

底部から広がりながら立ち上がり、頸部で「く」字状に内傾するもの（633）

台付土器（640）

注口土器

口縁部に注口をもつもの（175）

壺形土器

口縁部～胴部がそろばん玉形になるもの（416）

蓋

文様分類の第ＸＩ群に限り出土している器形であり、本遺跡からはＡ～Ｄ類が多く出土し、Ｅ類のように笠状になるものは１点のみの出土である。

Ａ類　断面が板状になり、平面がほぼ円形になるもの（712）

Ｂ類　断面がやや丸みをおび、平面がほぼ円形になるもの（709）

Ｃ類　断面がやや丸みをおび、口端に１対の抉りをもつもの（208）

Ｄ類　断面がやや丸みをおび、口端に２対の抉りをもつもの（720）

Ｅ類　断面が笠状になり、平面がほぼ円形になるもの（723）

系統・文様分類

この地域は時期により複雑な様相をみせる。三十稲場式土器など在地の土器もあるが、それ以外にも他地域からの影響を受けた土器もみられることから、東北系・在地系・関東系に分類し、系統別に文様分類を行う。在地系は新潟県全域をカバーするものではなく、阿賀野川流域を中心に出土する土器群とした。

第Ⅸ群土器　東北系のいわゆる大木９～10式と認識できる土器群である。

器形は深鉢形土器Ａ1・Ａ2・Ａ7・Ａ8・Ｂ1・Ｂ2があり、Ａ7が特徴的にみられる。鉢形土器はＡ3・Ａ4・Ａ5・Ａ6・Ｂ1の器形がみられる。

１類　口縁部に隆帯で横楕円区画文と渦巻文をもち、胴部に隆帯が垂下するもの

２類　沈線や隆帯で人面状の文様を描くもの

3類　胴部に沈線や隆帯で縦に楕円区画を描くもので口縁部文様帯を残しているもの

4類　沈線によって胴部に「C」・「S」・「U」等のアルファベット文や曲線文を描くもの

①　2段のアルファベット文をもつもの

②　「U」字状文をもつもの

③　「S」字状文をもつもの

④　「C」字状文をもつもの

⑤　横「e」字状文をもつもの

5類　胴部下半は縄文を施し、胴部上半に隆帯・隆起線によりアルファベット文等が描かれるもの

①　縄文を区画して文様を描くもの

②　無文帯でアルファベット文を描くもの

6類　口縁下に一条の沈線や隆帯を巡らせるもの

第Ⅹ群土器　関東系の加曽利Ｅ式や称名寺式の流れを組むと考えられる土器。

1類　口縁部に幅狭の無文帯をもち、「U」字状文が上下に向かい合うもの（312）

2類　頸部から胴部に橋状把手をもつもの（331）

第ⅩⅠ群土器　在地系でいわゆる三十稲場式土器である。

器形は深鉢形土器C1・C2の器形があり、この時期に特徴的な甕形の器形である。浅鉢形土器は6類の文様が多く見られる。口縁部が無文になり、胴部に地文として①縄文・撚糸文、②爪形刺突文、③棒状刺突文、④瘤状文、⑤櫛歯状沈線等を施している。以下の分類に続けて地文の分類を加えた。

1類　把手が単純な板状の橋状把手になるもの

2類　1類把手にややひねりのあるもの

3類　2類把手に貼付文・刻み・沈線等の装飾のあるもの

4類　細く棒状把手や突起状のもの

5類　1～4類以外の把手の付くもの

6類　沈線を弧状に区画し、区画内に短沈線をもつもの

第ⅩⅡ群土器　三十稲場式並行もしくは前後に位置付けられ、口縁部に隆帯で文様を描くもの。

1類　口縁部に隆帯を弧状にし、4単位に配置するもの

2類　口縁部を無文帯とし、隆帯を逆「T」・「人」・「入」字状に施し、4単位に配置するもの

3類　口縁～頸部に隆帯を巡らせ、ループ状文が上下に相反するような文様のもの

第ⅩⅢ群土器　中期末葉から後期前葉と考えられる粗製の土器やミニチュア・小形土器を一括したもの。

1類　全面に縄文を施すもの

2類　全面に櫛歯状沈線を施すもの

②　遺構出土の土器（図版82～92・95・103・108～127・341～355・359～373）

住居跡出土の土器（図版82～92・95・341～347・349）

SI26出土土器（1・2）

1は注口土器である。器面には円形刺突と櫛歯状沈線を施す。2は浅鉢形土器の胴部片と考えられる。

SI31 出土土器（3～5）

3は胴部片で地文に縄文RLをもち、沈線が横走し、第ⅩⅣ群土器と考えられる。4は隆起線で区画し、撚糸Lを施す。第Ⅸ群5類土器と思われる。5はミニチュア土器の底部である。

SI47 出土土器（6～8）

6は第Ⅸ群4類③の土器である。口縁下に隆帯を巡らし、胴部中央を沈線で波状に区画した間に沈線により「S」字状文が連続している。区画内は撚糸Rを施す。7は全面に縄文Lを縦位に施す。8は撚糸Lを全面に施す。6・8は炉体土器である。

SI48 出土土器（9～11）

9は口縁部と底部を欠損する炉体土器である。上半部は沈線で楕円状か逆「U」字状に区画すると考えられる。区画内に縄文LRを施す。第Ⅸ群4類土器である。10は口縁が「く」字状に外反する深鉢形土器A6である。全面に櫛歯状沈線を施す。

SI49 出土土器（12～15）

12～15は入れ子状になり出土した炉体土器で、それぞれ全面に縄文を施す。

SI50 出土土器（16・17）

16・17は炉体土器である。16は胴下半部のみ残存し、全面に縄文LRを縦位に施す。17は上半部を欠損する。沈線で逆「U」字状に区画し、区画内に縄文LRを施す。

SI51 出土土器（18）

胴下半部のみ残存し、器面に縄文LRを縦位に施す。底部には2～3枚の笹状圧痕がみられる。

SI52 出土土器（19）

波状口縁の波頂部と思われる。口縁に沿うように隆起線と沈線が巡り、地文に撚糸Lを施す。第Ⅸ群土器である。

SI53 出土土器（20）

炉体土器である。頸部がくびれ、口縁が内湾する深鉢形土器B1である。口縁下に一条の沈線が巡り、胴部中央を沈線で区画し、上半には沈線で横「e」字状や梯子状の区画文様が見られ、区画内には縄文Lを施す。第Ⅸ群4類⑤土器である。

SI54 出土土器（21～23）

22は器面に縄文LRを施す、炉体土器である。23は発掘調査時の写真では頸部付近まで確認できるが、接合・復元時にはみつからなかった。発掘調査時の写真では胴部に沈線で「U」字状の区画文様を確認することができる。区画内には縄文LRを施す。炉周辺の西側、石の下から21の中に23が入れ子状になって出土している。

SI55 出土土器（24）

炉体土器は被熱により、もろくなっている。器面に撚糸文Rと思われる原体を施文する。

SI56 出土土器（25～29）

26は炉体土器である。櫛歯状沈線で文様を描いている。27は沈線を縦位に施す。

SI58 出土土器（30・31）

30は炉体土器である。口縁部と底部を欠損しているが、器形は深鉢形土器A7と考えられる。隆起線で無文帯を横流れ「S」字状とし、間の楕円区画内には縄文LRを充填する。31は口縁部と底部を欠損し、縄文LRを縦位に施す。30は炉内に、31は炉西側外に隣接して埋設されていた。

SI59出土土器（32）

炉体土器である。胴下半部のみ残存し、器面に縄文LRを縦位に施す。

SI60出土土器（33）

炉体土器である。胴下半部のみ残存し、器面に撚糸Rを施す。

SI61出土土器（34）

炉体土器である。胴下半部のみ残存し、器面に撚糸Lを施す。

SI62出土土器（35～37）

35は口縁を欠損している。器面に縄文LRを縦位に施す。36・37はおそらく同一個体で地文に縄文LRをもつ。35の炉体土器を囲むように36・37を埋設していた。

SI72出土土器（38）

炉体土器である。胴下半部のみ残存している。全面に撚糸Rを施す。

SI73出土土器（39）

炉体土器である。胴下半部のみ残存している。全面に撚糸Lを施す。

SI74出土土器（40）

底部を欠損する炉体土器である。口縁下を無文帯にし、胴部に縄文LRを縦位に施す。

SI76出土土器（41・42）

41・42は炉体土器である。41は胴部のみ残存する。器面に縄文LRを縦位に施す。42は胴下半部のみ残存し、櫛歯状沈線を縦位に施す。

SI78出土土器（43～53）

43は第Ⅸ群4種⑤土器である。沈線で横「e」字状区画文を描き、区画内に縄文LRを施す。44は口縁部片で、胎土は緻密である。隆起線を横楕円状に区画し、間に隆帯が鰭状に張り出す。45は口縁に複数の突起をもつ深鉢形土器である。口縁下に縄文LRを施し、頸部に沈線を一条巡らす。胴部を沈線で波打つように区画し、区画内に縄文LRを施す。49は胴部が張り、口縁に向かってすぼまる深鉢形土器A5である。口縁下に沈線を巡らせ、胴部には縄文Lを縦位に施文している。53は炉体土器である。器面に縄文LRを縦位に施す。

SI103出土土器（54～57）

54～57は炉体土器である。石囲炉内に54・57が埋設され、その上部に55・56が入れ子状に埋設される。56は上部に隆帯を巡らせ、その下に沈線で円や縦楕円状に区画し、区画内に縄文LRを施す。

SI122出土土器（58～66）

58・59・61は第Ⅸ群4類⑤土器である。58は胴部が張り、口縁に向かって直立する深鉢形土器A8である。口縁下に2条の沈線が巡り、間に縄文LRを施す。胴部中央を波打つような沈線が巡り、上半には沈線を横「e」字状に区画し、区画内には縄文LRを施す。59は口縁部片で沈線によって文様が描かれ、区画内に縄文LRを施す。胴部は横「e」字状文になると考えられる。61の口縁下には沈線と縄文LRを横位に巡らし、胴部上半には沈線により、胴部下半の文様から突き出るように横「e」字状文が横位に展開する。区画内に縄文LRを施す。62は口縁下に沈線を巡らせ、胴部に縄文Lを施す。胴部に太くて浅い沈線がみられるが、文様になるかは不明。63は鉢形土器A2である。器面に縄文RLを横位に施す。65は口縁に向かってすぼまる器形で、口縁は無文で、胴部には縄文Lを施す。66は炉体土器である。全面に縄文RLを施す。胴部上半で粘土紐の繋ぎ目から壊れているのが確認できる。

SI129 出土土器（67・68）

67 は口縁下にやや太めの沈線が一周し、胴部に縄文 LR を横位に施す。68 は炉体土器である。器面に縄文 LR を縦位に施す。

SI130 出土土器（69）

胎土はボロボロで口縁を欠損する炉体土器である。全面に縄文 LR を縦位に施す。

SI136 出土土器（70～72）

71 は胴部が張り出し、頸部に向かってくびれる深鉢形土器である。隆起線で渦巻状に入り組んだ文様を描き、区画内に縄文 LR を施す。72 は口縁を欠損している。胴部に沈線で「C」字状に区画し、区画内と胴下半部には縄文 LR を施す。炉体土器である。

SI138 出土土器（73・74）

73・74 は炉体土器である。73 は胴部を隆帯で区画し、無文帯が「S」字状になり、それ以外の区画内には縄文 LR を施文する。第Ⅸ群５類②土器である。

SI139 出土土器（75）

炉体土器である。器面に撚糸 L を施文する。

SI175 出土土器（76・77）

76・77 は炉体土器である。76 は口縁を欠損する深鉢形土器である。頸部のくびれ部分を境に文様を上下に２分する。上半は沈線で文様が描かれるが、どのような文様かは確認できない。下半は沈線で横「S」字状の文様を施す。77 は口縁部と底部を欠損している。沈線で横「e」字状の区画文様を描き、区画内に縄文 LR を施す。

SI190a 出土土器（78～82）

78・79・81 は炉体土器である。80 は注口土器で口縁が一部欠損しているが、注口部は４単位になると考えられる。82 は沈線で横「e」字状の区画文を描き、胴下半部は沈線で波濤文を描くか、もしくは上半の文様とつながると考えた。福島県郡山市北向遺跡の SK73 出土土器［本間 1990］を参考に復元した。

SI190b 出土土器（83～85）

83・84 は炉体土器である。85 は第Ⅸ群１類土器でキャリパー形の口縁をもち、口縁部を隆帯で楕円状に区画し間に渦巻きをもち、そのまま隆帯が垂下する。区画内には撚糸 L を施す。

SI191 出土土器（86・87）

86 は鉢形土器 A3 である。口縁部に沈線で「C」字状に区画文様を連続させ、胴部中央を波状に区画する。区画内に縄文 LR を施文する。87 は炉体土器で口縁下に縄文 LR を横位に巡らし、胴部中位に縄文 LR を縦位に重ならないように施し、下半は縄文 LR を縦位に重なり合うように施す。

SI192 出土土器（88）

炉体土器で、口縁部と底部を欠損する。器面に縄文 LR を縦位に施す。

SI193 出土土器（89）

炉体土器である。沈線で横「Y」字状の区画文を描き、区画内に縄文 RL を施す。

SI201 出土土器（90）

炉体土器である。器面に縄文 LR を縦位に施す。

SI202 出土土器（91）

炉体土器である。器面に撚糸 R を施す。

SI206 出土土器（92）

炉体土器である。胴部上半と底部は接合せず、胴部上半は底部を囲むように出土した。器面には撚糸Lを施す。

SI208 出土土器（93・94）

93は第Ⅸ群5類土器である。隆起線で区画し、区画内に縄文LRを施す。94は器面に爪形刺突文を施す。

SI209 出土土器（95・96）

95は炉体土器で、口縁を欠損する深鉢形土器である。器面には縄文LRを縦位に施す。96は全面に縄文LRを施した後、口縁下に沈線を巡らせている。

SI210 出土土器（97）

炉体土器である。口縁部が欠損する。上半に沈線が施され、地文には縄文LRを縦位に施す。この沈線を胴下半部との区画線と考えると第Ⅸ群4類土器であろう。

SI229 出土土器（103）

炉体土器である。底部から口縁に向かって開く器形である。器面には縄文Lを縦位に施す。

SI230 出土土器（104・105）

炉体土器である。隆帯で区画し無文部が「S」字が入り組んだような文様となる。それ以外の区画内には縄文LRを施す。105は隆起線で無文部を横「Y」字状区画し、他の区画内には縄文RLRを施す。

SI238 出土土器（106・107）

106・107は炉体土器である。106は口縁と底部が欠損しているが、胴部が張り出し胴部から口縁部にかけてくびれる深鉢形土器B1と考えられる。文様が上下2段に分かれ、沈線で「U」字などのアルファベット文を描く土器である。107は口縁部と胴部を欠損している深鉢形土器である。縄文Lを縦位に施す。

SI239 出土土器（108・109）

108・109は炉体土器で、ともに口縁部を欠損し、器面に縄文LRを縦位に施す。

SI247 出土土器（112）

上部に隆帯を巡らせ、下半に撚糸Lを施す。底面は抉れるように欠損している。

SI252 出土土器（113～116）

113・114は同一個体である。沈線による横「e」字状の文様と思われ、区画内には縄文Rを施す。114は炉体土器である。115は隆起線で弧状の文様を描く。116は口縁部に突起が付されるミニチュアの鉢形土器である。

SI261 出土土器（117～122）

117・118・121・122は炉体土器である。117は口縁部を欠損する。下部と上部に沈線が巡り、その間を一条の縦長横「S」字状の沈線が連続すると考えられ、区画内に縄文LRを施す。118は胴下半部で、全面に撚糸Lを施す。121・122は同一個体で地文に縄文LRを施す。

SI288 出土土器（123）

炉体土器で、口縁部を欠損する深鉢形土器である。全面に縄文LRを縦位に施す。

SI294 出土土器（124・125）

124は炉体土器である。沈線で横「Y」字状の区画文を描き、区画内と胴下半部に縄文LRを施す。

125は隆起線で文様を描く。第Ⅸ群５類の土器である。

SI295出土土器（126）

炉体土器で、口縁部のみ残存する。口縁下には縄文RLを横位に、胴部は縄文RLを縦位に施す。

SI339出土土器（127・128）

127・128は同一個体である。沈線でアルファベット文と思われる文様を描き、区画内に縄文LRを施す。

SI366出土土器（129）

129は炉体土器である。胴下半部のみ残存し、全面に撚糸Rを施す。

土坑出土の土器（図版96～103・108～110・350～355・359・360）

SK28出土の土器（164・165）

164は口縁下に縄文RLを横位に転がし、頸部に一条の浅い沈線が巡る。胴部には縄文RLを縦位に施文する。165は口縁が内傾する深鉢形土器である。器面に縄文RLを施し、口縁部と胴部に無文帯をもつ。

SK37出土の土器（166～168）

168は復元でややゆがんでしまったが、器高約76.3cm、胴部径41.5cm、底径15.8cmの大形土器である。口縁が「く」字状に外反し、頸部に４単位のややねじれた把手をもち、胴部は撚糸Lである。166は口縁部片である。全面に爪形刺突文を施す。167は棒状の把手をもち、口縁部の接するところには孔が穿たれ、胴部には瘤状突起を貼付している。

SK38出土の土器（169）

注口部を隆帯で渦巻状に縁取る注口土器である。隆起線で文様を描き、地文は縄文LRである。

SK63出土の土器（170）

口縁下に無文帯をもち、頸部に隆起線を帯状に巡らせ、胴部には縄文LRを縦位に施す。

SK64出土の土器（171）

沈線で弧状に上下に向かい合うように区画し、区画内に縄文LRLを施す。第Ⅹ群１類土器であろう。

SK65出土の土器（172）

やや薄い器壁で、無文の注口土器である。

SK75出土の土器（173・174）

174は第Ⅸ群４類⑤土器である。口縁下に縄文LRを横位に施し、頸部に一条の沈線が巡る。胴部には沈線による横「e」字状の文様を向かい合うように配置する。区画内に縄文LRを施す。

SK77出土の土器（175～179）

175は深鉢形土器もしくは鉢形土器で注口部の付く土器である。注口部は１単位確認できラッパ状に開く。口縁部は沈線で楕円状に区画し、間には蒲鉾状の突起を貼り付けている。地文に縄文LRを施す。176は口縁下に縄文LRを横位に、胴部には縄文RLを縦位に施す。177は沈線で「C」字状区画文を描き、区画内に縄文LRを施す。

SK89出土の土器（180）

180は強く内湾する鉢形土器である。口縁部に沈線による「C」字状区画を連続させ、胴下半部は沈線で波濤文を描く。区画内には縄文LRを施す。

SK90出土土器（181）

口縁下に刻み隆帯を「人」字状に配置する土器である。胴部に撚糸LRを施す。

SK115出土土器（183）

口縁下に撚糸Rを施し、頸部に一条の沈線を巡らし、胴部には沈線による「C」字状の区画文がみられる。胴下半部には区画線と考えられる沈線を波状に施す。区画内には細い原体を使用した撚糸Rを施す。

SK117出土土器（184）

第Ⅸ群４類③土器である。口縁下を沈線で横楕円状に区画し、胴部は横「S」字状区画文と考えられる。区画内は縄文RLを施す。

SK124（185）

185は口縁の直立する鉢形土器A1である。隆起線で無文部を横「S」字状に区画し、無文部以外の区画内には縄文LRを施す。

SK126出土土器（186～208）

186・187は第Ⅸ群４類土器、188は第Ⅸ群５類土器、189・191～195・207・208は第ＸⅠ群土器、190・197～198・200は第ＸⅡ群１・２・３類土器、199・201・202・203～206は縄文のみ施す第ＸⅢ群１類土器で、204は櫛歯状沈線のみ施す第ＸⅢ群２類土器である。186は浅鉢形土器である。胴部に沈線で半月状の区画をもち、地文に縄文LRを施す。187は口縁部に沈線で文様を描き縄文RLを充填させる。口縁部文様は沈線で「S」字状に描くと考えられる。188は隆帯で区画文様を描き、口縁に接する部分は隆帯上に沈線を施す。189は口縁が「く」の字状に外反する。把手は欠損しているが、正面と側面ではやや装飾が異なる。口端及び、頸部の隆帯上を爪形刺突が巡り、胴部にも爪形刺突が施される。191も口縁が外反し、把手上部は189と同じように渦巻状になる。頸部には隆帯が巡り、胴部には爪形刺突文を施す。190はやや内湾する鉢形土器C2である。頸部に刻み隆帯を巡らせ、４単位中の３単位は口縁に向かって「入」字状にし、もう１単位はループ文が上下に相反するように向かい合う。胴部には撚糸Rを施す。193は全面に棒状刺突を施し、底面には六単位の窪みをもつ。207に類似する。195は口縁が「く」字状に外反する深鉢形土器C2である。口縁に４単位のねじれた把手をもち、頸部に刻み隆帯が巡る。胴部には爪形刺突文を施す。196は口縁の一部を欠損するが、口縁部破片で刻み隆帯が「入」字状になるものがあったのでそのように復元した。胴部には撚糸Lが施される。197は胴部が張り、口縁に向かってくびれながら直立する。瘤状突起を５つもつがそれぞれ形が異なり、位置も相対性をもたない。１つは刻みのある突起、別のものは「J」字状に刻み状隆帯を施したもの、他はボタン状の突起である。胴部は撚糸Rを施す。198は内湾する深鉢形土器A3である。口縁下に隆帯を「～」状文を４単位配し、隆帯の口縁側の端には沈線が付される。胴部は櫛歯状沈線を縦位に施す。199は口縁下に撚糸rを横走させ、胴部には撚糸rを縦走させている。200は口縁に「入」字状の隆帯をもち、胴部には櫛歯状沈線を縦位に施す。201は口縁が内傾する、ラグビーボール状の器形の深鉢形土器である。胴部には撚糸Lを施す。202は口縁に撚糸Lを横走させ、胴部は撚糸Lを縦走させている。203・204は同一個体で、口縁に突起をもつ深鉢形土器である。地文として櫛歯状沈線を格子状に施す。205は胴部が開き、口縁に向かって直立する無文の土器である。207は193と同じ窪みをもつ底部で、おそらくは６～８単位の窪みをもつと考えられるが、確認できるのは３単位のみである。底面に笹状圧痕をもつ。208は直径9.1cmを測り、断面がやや丸みをおび、口端に２単位の抉りをもち、真ん中には直径2.4cmの孔をもつ蓋である。沈線を外径に沿うように楕円状に区画し、棒状刺突を周辺に施す。真ん中の孔から外径の凹み

に向かって渦巻状の文様を描き、それを挟むように２対の孔がみられる。

SK128出土土器（209・210）

209は口縁が外傾し、口縁下は無文帯になり、胴部に縄文Ｌを縦位に施す。210は細くねじれた把手をもつ深鉢形土器である。把手は配置から推測すると５単位になるかもしれないが、確認できたものは３単位である。頸部には２列の爪形刺突文が巡り、胴部には撚糸Ｌを施す。

SK135出土土器（211）

口縁部に沈線で横「e」字状の文様を描き、胴部下半は緩やかな波状沈線が巡っている。区画内には縄文LRを施す。

SK142出土土器（212）

底部から胴部にかけて広がるように立ち上がり、口縁に向かってやや内湾気味になる深鉢である。縄文LRを地文とする。

SK144出土土器（213）

「く」字状に外反する深鉢形土器である。板状の把手をもつ第ＸⅠ群１類①土器である。口端・把手の両側面・頸部を巡る隆帯上に棒状刺突を施し、胴部には撚糸Ｌを網目状に施す。

SK145出土土器（214）

台付土器である。台部に円孔があり、地文に縄文LRを横位に施す。

SK149出土土器（215）

沈線で横「e」字状に描いていると考えられる。

SK150出土土器（216・217）

216は外傾する器形をし、地文に縄文RLlに縄文LRをＬで巻き付けたものと考えられる原体を施す。本遺跡から出土した土器の中で同種の原体を使ったものは他にはなかった。217は底部片である。底部に網代圧痕をもつ。

SK153出土土器（218）

口縁下に無文帯をもち、頸部に隆帯を巡らせている。胴部には「Y」字状と平行沈線を交互に施す。

SK158出土土器（219）

219は厚手の土器で口縁部は撚糸Ｌを横走させ、胴部には撚糸Ｌを縦走させる。

SK159出土土器（220・221）

220は沈線で横「S」字状文を描き、胴部下半は沈線で瘤状に区画し縄文RLを施す。221は口縁部に楕円区画を配置し、間には突起が付される。地文に縄文Ｌをもつ。175と大きさは違うが、器形と突起の付される場所が共通していることから注口土器なのかもしれない。

SK165出土土器（222）

胴部が張りだし、頸部がくびれて外反気味に立ち上がる鉢形土器A6である。沈線で「C」字状の区画文様をもち、頸部には沈線で下に向かう渦巻文を描き、地文として縄文RLを施す。

SK172出土土器（223～225）

223～225はおそらく同一個体である。地文には縄文LRを縦位に施す。

SK211出土土器（226）

隆起線で区画しているが、描いている区画文様は判別できない。区画内には縄文RLを施す。

SK218出土土器（227）

胴部下半のみ残存している。地文に撚糸RLを施す。

SK244出土土器（228）

胴部下半のみ残存している。縄文Lを縦位に施す。

SK253出土土器（229・230）

229は口縁を飛び出す把手が付けられ隆帯で縦楕円状に区画し、棒状刺突を充填する。口縁下には棒状刺突列を巡らせ、胴部は縄文LRを縦位に施す。把手が2単位になる可能性がある。230は胴部が張り出し、口縁に向かって広がる土器である。口縁部に沈線で「D」字状区画をもち、胴部中央は沈線を巡らす。地文に縄文LRを施す。

SK283出土土器（232～234）

232・233は同一個体である。口縁下が無文帯になり頸部を隆起線が巡り、胴部に撚糸Lを施す。234は口縁下に無文帯をもち、頸部に一条の沈線が巡る。胴部に縄文Lを縦位に施す。

SK287出土土器（235）

235は口縁下に沈線で横楕円区画があり、その間に蒲鉾状の突起が付される。横楕円区画内には棒状刺突を列状に施し、蒲鉾状突起の下には口縁下の横楕円区画と類似した文様を縦に描く。胴部には縄文LRを施す。

SK333出土土器（238）

口縁が「く」字状に外反する。把手の両端に棘状の張り出しをもち中央に棒状刺突をもつ。頸部には隆帯が巡り、胴部は把手下に2列の瘤が貼付される。地文として撚糸Lを施す。

SK347出土土器（239）

口縁に無文帯をもち、頸部に隆帯を巡らせている。胴部には縄文LRを横位に施す。

SK367出土土器（240）

口端を受け口状にする口縁部片である。口縁部に板状把手をもち頸部に刻み隆帯が巡り、胴部に撚糸LRを施す。

SK383出土土器（290・291）

290は隆起線で渦巻き状の文様をもつ。291は口縁付近の破片と考えられ、隆起線で文様を描く。口縁付近は無文帯で、そこに弧状等の突起が貼付されると考えられ、頸部には隆起線が巡り、胴部に無文帯による渦状などの文様がくると考えられる。地文は縄文LRを縦位に施す。

SK390出土土器（292）

292は大きく内傾する鉢形土器と考えられる。口縁下に無文帯で段差をつくり、沈線で横「e」字状の文様を描くと考えられる。区画内に縄文RLを施文する。

SK391出土土器（293～295）

293は外反する口縁で口端部には斜め方向に棒状刺突を施文する。294は口縁部が「く」字状に外反し、口端が受け口状になる。板状把手の上部に孔をもち、頸部には棒状工具を押圧する隆帯が巡り、胴部には爪形刺突文を施す。295は口端を受け口状にし、口縁部に小さな橋状把手をもつ鉢形土器である。胴部には焼成後に開けたと思われる直径2.5cmの孔が穿たれている。

SK395出土土器（296）

口縁下に沈線が巡り、胴部を波状の隆帯と沈線で区画し、区画内に撚糸Rを施す。沈線区画の上部には突起がみられる。

SK417出土土器（305・306）

305・306は同一個体である。隆起線で文様を描いているがどのような文様かは不明で、区画内には縄文LRをもつ。

SK435出土土器（311・312）

311は沈線により「S」字状文を連続させたような波状の区画をもち、区画内には縄文LRを施す。312は胴部が膨らみ頸部でくびれ、口縁が内湾して４単位の突起をもつ深鉢形土器である。口縁下に無文帯をもち、胴部は口縁と底部から沈線で「U」字状に対向させ、互い違いに区画するものを描き、区画内に縄文LRを施文する。口縁の「U」字状区画は４単位あり、１単位のみ無文である。

SK441出土土器（313）

刻み隆帯をもち、爪形刺突文を斜めに施す。刺突方向が変わった土器として掲載したが、蓋の可能性も考えられる。

SK454出土土器（314～318）

314は第Ⅸ群５類土器である。隆起線で文様を描き、地文として縄文RLを施す。

埋設土器（図版111～126・361～372）

10B－２号埋設土器（327）

口縁部を欠損する深鉢形土器である。胴部上半に１対の欠損する把手がみられる。331のような器形になると考えられる。器面に櫛歯状沈線で縦位や「8」字状に施文する。

10B－４号埋設土器（329）

口縁を「く」字状に外反させ、頸部に４単位の捩れた把手をもち、底部が張り出す鉢形土器になる三十稲場式土器である。頸部には刻み隆帯を巡らし、胴部には爪形刺突文を施し、中には逆三角状の刺突もみられる、底部には木葉圧痕がみられる。

10B－６号埋設土器（331）

頸部から胴部にかかる橋状把手をもつ両耳壷のような鉢形土器である。口縁部を無文帯とし、頸部に隆帯が巡り、胴部に撚糸Rを施す。

10B－９号埋設土器（333）

底部から口縁は開くように立ち上がる深鉢形土器である。全面に幅広の浅い沈線を縦位に施す。

10C－１号埋設土器（334）

口縁と底部を欠損する。隆起線を楕円状もしくは「S」・「C」字状等の文様区画が、連続すると考えられる。区画内と胴部下半には縄文LRを充填している。第Ⅸ群５類土器だろう。

10C－２号埋設土器（335）

胴部上半からすぼまり、口縁に向かって直立し、口端が「T」字状になる深鉢形土器である。頸部に刻み隆帯が巡り、胴部には撚糸Rを施す。口端が受け口状になる深鉢形土器C1・鉢形土器C1類のものと同様、蓋をのせられるようにつくった可能性が考えられる。

11B－４号埋設土器（340）

３単位の波状口縁をもつ深鉢形土器である。口縁に沿うように一条の沈線を巡らせて、地文は撚糸Lを施す。

11B－5号埋設土器（341）

４単位の板状把手をもつ深鉢形土器である。口縁部を無文帯とし、頸部に爪形刺突列を１～２条巡らせ、胴部には撚糸Ｌを施す。第ＸⅠ群１類①の土器である。

11C－1号埋設土器（344）

胴下半部のみ残存している。おそらく胴部に沈線でアルファベット文を描き、胴部中央に沈線が巡る土器であろう。

11C－2号埋設土器（345）

深鉢形土器A3である。口縁下に縄文LRを横位に施し、頸部に沈線を巡らせ胴部には縄文LRを縦位に施す。

11C－3号埋設土器（346）

胴部上半に肩をもち、口縁に向かって「く」字状に外反すると考えられる。地文には撚糸Ｌを施す。おそらく第ＸⅠ群土器であろう。

11C－6号埋設土器（347）

口縁部に無文帯をもち、頸部には隆帯を巡らせ、胴部には縄文RLを横位に施す。

11D－2号埋設土器（348）

胴部下半を欠損している。頸部でくびれ口縁が内湾し、３単位の波状口縁をもつ土器と考えられる。口縁に沿って沈線が巡り、沈線が向かい合うように蕨手状になる。大木９式土器に見られる隆帯を「人面状」に施すものに類似している。人面状文の間には沈線で「L」字状の区画をもち、区画内に縄文LRを施文する。

12B－3号埋設土器（350）

口縁が「く」字状に外反する鉢形土器である。頸部には隆帯を上下に相反するようにループ状に配置する。

12C－1号埋設土器（352）

口縁が「く」字状に外反し、４単位の把手を欠損する鉢形土器である。胴部には爪形刺突文を施す。

12C－6号埋設土器（355）

全面に縄文LRを縦位に施す土器である。深鉢形土器A7のように復元したが、もう少し直立する可能性もある。

12C－7号埋設土器（356）

底部から開くように立ち上がり口縁が強く内湾し、４単位の波状口縁になる深鉢形土器である。口縁下に隆帯で波濤文を描き、地文には縄文LRを施す。

12C－8号埋設土器（357）

胴部を大きく欠いている深鉢形土器である。文様は沈線で「U」字状もしくは横「e」字状の文様を描くと考えられる。区画内と胴下半部には縄文LRを施文する。

12D－2号埋設土器（359）

底部から広がり気味に立ち上がり、口縁部が直立する深鉢形土器A1である。全面に櫛歯状沈線を縦位に施す。

13D－2号埋設土器（367）

口縁部が大きく内湾する土器である。全面に撚糸Ｌを施す。

13E－1号埋設土器（369）

口縁が「く」字状に外反し、底部が剥離している鉢形土器である。口縁下に渦巻状隆帯を４単位配置し、胴部には爪形刺突文が施される。第ＸⅠ群４類②の土器である。

13E－2号埋設土器（370）

底部から口縁に向かってほぼ真っ直ぐ立ち上がり、口端上に１対の橋状の突起をもつ深鉢形土器である。頸部には隆帯を巡らし、胴部には縄文RLを横位に施す。

13E－6号埋設土器（374）

口縁に４単位の突起をもつ深鉢形土器である。口縁下に縄文LRを横位に、胴部には縄文LRを縦位に施す。

14C－1号埋設土器（378）

胴部が張り頸部が緩やかにくびれ、口縁が外反気味に立ち上がる深鉢形土器A7である。胴中央部に隆帯を一条巡らし、上半には隆起線で「S」字状の文様を描いている。区画内には縄文RLを充填する。

14C－3号埋設土器（380）

口縁を欠損する深鉢形土器である。地文は縄文LRで、頸部に縄文を磨り消す２条の沈線を巡らせ、胴部も同様に「U」字状に縄文を磨り消す。

14C－4号埋設土器（381）

胴下半部がやや張り出し、口縁に向かって直線的に延びる深鉢と考えられる。口縁下には沈線が巡り、胴上半部には沈線で文様を描くが、本遺跡から多く出土している第Ⅸ群４類土器と異なり、沈線区画内が無文となり、区画外に縄文LRを充填する。

14D－1号埋設土器（385）

口縁が「く」字状に外反し、４単位の棒状化した把手をもつ鉢形土器である。胴部に撚糸rを施す。

14D－2号埋設土器（386）

底部から緩やかに立ち上がり、頸部はややくびれ口縁が内湾する４単位の突起をもつ深鉢形土器である。地文には撚糸Lを施す。

14D－3号埋設土器（387）

ほぼ直立する胴部で底部はすぼまる。口縁下には無文帯をもち、頸部に隆帯が巡る。胴部は縄文LRを縦位に施す。

14D－14号埋設土器（392）

底部から口縁に向かって開くように立ち上がる鉢形土器である。口縁下に隆帯による弧状区画を４単位もち、区画内を撚糸Rで充填する。

14E－1号埋設土器（394）

胴部が張り、緩やかに頸部がくびれて外反気味に立ち上がる深鉢形土器A1である。胴上半部には沈線で「C」や「S」字状区画文を描き、胴下半部に波状沈線を巡らす。区画内には縄文RLを施文する。

14E－3号埋設土器（395）

「く」字状に外反し、４単位の把手に渦状の隆帯をもつ深鉢形土器である。頸部は区画線をもたず、胴部に撚糸Lを施す。第ＸⅠ群３類①の土器である。

14E－4号埋設土器（396）

口縁が「く」字状に外反し、４単位の板状把手をもつ鉢形土器である。頸部に刻み隆帯が巡り、胴部に

は縄文Ｌと結節縄文を縦位に施す。

15B－１号埋設土器（402）

胴部が膨らみ頸部がくびれ口縁がやや内湾する器形であり、口縁に三角状の突起をもつ深鉢形土器である。口縁下を隆起線で弧状に区画し、胴部は１本の蕨手状に区画し一部胴下半部の文様と交わる。区画内には撚糸Ｒを施文する。

15B－２号埋設土器（403）

胴部上半を欠損する。胴部下半は沈線で山形状に区画し、上半は沈線で「U」や横「e」字状等のアルファベット文を描くと考えられる。区画内には縄文LRを施文する。

15B－３号埋設土器（404）

胴部上半を欠損している。確認できる沈線は第Ⅸ群４類に多くみられる胴部中央の沈線区画であろう。

15C－３号埋設土器（406）

口縁が内湾する深鉢形土器である。口縁に「ノ」字状隆帯を貼り付け、地文に櫛歯状沈線を縦位に施す。

15C－５号埋設土器（408）

やや内湾する口縁部のみ残存し、口端に半円状の窪みをもつ。地文は撚糸Ｒである。

15C－８号埋設土器（411）

口縁が大きく内湾する鉢形土器である。口縁下には縄文LRを横位に、胴部には縄文LRを縦位に施文する。

15C－11号埋設土器（414）

やや内湾する深鉢形土器である。口縁部に隆帯で逆「T」字状の文様を４単位配置する。

15D－１号埋設土器（415）

やや内湾する深鉢形土器A3である。頸部に隆帯が水平に巡り、「人」字状になるような文様を描く。胴部には撚糸Ｌを施す。第Ｘ群１類の土器である。

15D－２号埋設土器（416）

そろばん玉形の器形を呈する。正面には注口、裏面には環状の把手をもち、両側面には一対の「8」字状の把手が付されている。底部には台が付く。口縁下は赤彩され頸部には隆帯が巡り、胴部正面には隆帯で「S」字状、側面に隆帯で斜めの「S」と「Z」が交差したような文様区画を描き、区画内を赤彩している。土器の内側と「8」字状把手にも赤彩を施す。類例としては岩船郡朝日村アチヤ平遺跡上段［富樫2002］から大形のものが出土している。

16B－４号埋設土器（428）

胴部が張り頸部がくびれ、口縁に向かって外反気味に立ち上がる深鉢形土器である。口縁下に沈線が巡り、口縁部は沈線で「S」字状文を連続させるような波状の区画文様を描き、胴部区画は沈線を波状に巡らせている。区画内には縄文RLを施文する。

16B－６号埋設土器（430）

内湾する深鉢形土器である。口縁下には棒状刺突列を１条巡らし、胴部には櫛歯状沈線を縦位に施す。

16C－５号埋設土器（434）

口縁部、把手、底部を欠損し、胴部のみ残存する。胴上部には隆帯が巡る。331のような器形になると考えられる。

16D－4号埋設土器（438）

底部から口縁に向かって開く器形の深鉢形土器A2である。口縁下に一条の沈線が巡り、口縁部には「U」字状と円形状の区画文を交互に描く。胴下半部には隆帯が波状に巡り、波状の頂部が嘴状に張り出す。区画内には縄文RLを施文する。

16D－6号埋設土器（439）

内湾する鉢形土器A3である。頸部に隆帯を弧状に連続させながら巡る。胴部には撚糸Lを施す。

16E－1号埋設土器（440）

口縁が内湾し、4単位の突起をもつ深鉢形土器である。胴部は縄文LRを縦位に施す。

16E－2号埋設土器（441）

口縁下に無文帯をもち、頸部に隆帯を巡らせ、胴部には撚糸LRを施す。

17D－2号埋設土器（449）

底部から胴部にかけてやや膨らむが、口縁に向かってほぼ真っ直ぐ立ち上がる深鉢形土器A1である。口縁部に無文帯をもち、頸部に隆帯が巡り、胴部に撚糸Lを施す。

21F－1号埋設土器（454）

底部を欠損しており、口縁部がキャリパー形となる器形である。口縁部は無文帯をもち、胴部は沈線で縦長の逆「U」字状区画が連続し、間に頸部から下に向かって細く浅くなる沈線が垂下する。区画内には縄文RLRを縦位に施文する。

その他の遺構出土の土器（図版127・373）

12B－P7（457）

457は口縁部に注口をもつ破片である。口縁下に縄文LRと沈線を巡らせ、胴部に隆帯を波状にし、弧になる部分が鰭状に張り出す。間には縦の楕円区画を施し、これも弧になる部分を鰭状にしている。区画内には縄文LRを施す。

12D－P4（458・459）

459は口縁下に縄文LRと沈線を巡らし、口縁部に沈線で文様を描くと思われる。どのような文様かは不明だが、第Ⅸ群4類土器だろう。

13E－P3（460）

460は口端が受け口状になり4単位の板状把手をもつ。頸部には棒状刺突をもち、胴部には縄文LRを縦位に施す。

13C－P1（463・464）

463・464は同一個体であろう。口縁には縄文RLを横位に巡らし、口縁部には沈線で縦長の「S」字状区画文を描き、区画内には縄文RLを施文している。

12D－P20（461）

461は台付土器の台部である。

14E－P6（462）

462は蓋である。焼成前に穿孔した2つの孔をもつ。

15C－P9（466）

466は口縁下に縄文RLと沈線を巡らせ、口縁部に「U」字状や円形の文様をもつ。

③　包含層出土の土器（図版134～142・144～146・378～386）

包含層出土の土器は9～17列のB～Eグリッドを中心に多く分布する。ここから出土し主体を占めるものは第Ⅸ～ⅩⅡ群の土器であり、中期末葉の東北系大木10式期、後期前葉の三十稲場式期の土器である。系統と器種ごとに説明を加え、蓋に関しては器形順に文様説明をする。

第Ⅸ群の深鉢形土器（600～621・647）

3類（600）　胴部に沈線や隆帯で縦に楕円区画を描くもの。口縁部文様を有しているもの。

600は波状口縁を呈し、波頂部が前後に少しずれたような双頂になる。波底下を隆帯で弧状に区画し、胴部に縦の逆「U」字状の区画を連続的に配する。区画内に縄文LRを充填している。

4類（601～616）　沈線によって胴部に「C」・「S」・「U」等のアルファベット文や曲線文を描くもの。

601は口縁部のみ残存する。波状口縁で、口縁に沿って縄文LRと沈線が巡り、波頂部下には「U」字状の文様がくる。602は断面の厚みが約2cmもあり、本遺跡から出土した同時期の土器と比べても約2倍の厚みになる。胴部に縦長の「C」字状の区画文様を描き、胴下半部には波濤文で口縁部文様と胴部文様を区画する。区画内には縄文LRを施す。603は胴上半部に沈線で横「S」字状区画文を連続させ、胴下半部との間を弧状の沈線で区画している。604・605・606は深鉢形土器B2で波状口縁を呈する。口縁に沿って沈線で横楕円区画を連続させ、その間には蒲鉾状の突起がみられる。胴部には沈線による「S」字状文を連続させ、区画内に縄文LRを施す。605ではさらに胴下半部に弧状の沈線による区画が見られる。類似した器形で楕円区画をもつものとして613がある。607は深鉢形土器A2で平口縁になる。沈線で「U」字状の区画文様を施すが、胴部下半と区画する沈線や隆帯などをもたず、区画内と胴部下半に縄文LRを施す。608は沈線で向かい合う弧状の区画をもち、間に「S」字状の区画文様をもつ。地文は縄文RLである。

609～616は沈線で文様を描いているが文様構成が不明のものである。

609は残存器高14.0cm、最大径10.1cmと小さく、沈線で縦長の「U」字状区画文をもつ。区画内に縄文LRを施す。610～612はおそらく同一個体であろう。口縁は内傾し、胴部には隆起線で区画文様を描き、内外面には赤・黒色塗彩がみられ、特に内面に層を成して付着している。613は深鉢形土器B1の平口縁を呈す。口縁下に604・605・606のような楕円区画を配置する土器で、胴部には逆「U」字状区画文様をもつ。614は地文として縄文LRを施文後、沈線で文様を描きその上に鰭状の隆帯を貼り付けている。615は数条の沈線で区画文様を描くが、区画内に縄文を施文しない部分がある。616は口縁を無文帯とし、細い沈線が巡る。胴部には直線状の2本の沈線が並行に斜行し、間を無文としている。

5類（617～619）　隆帯・隆起線によってアルファベット文などが描かれるもの。

618は隆起線で横「Y」字状区画文が連続する。地文に縄文LRを施す。619は隆帯による無文の「S」字状の区画と撚糸Lを充填させる円形区画をもつ。隆帯は口縁の突起につながり、突起上部には棒状刺突を施す。620は口縁部片で口縁に三角状の把手をもち、口縁に弧状の隆帯をもち、屈曲下に撚糸Rを施す。621は胴部と考えられるが、器厚1.8cmと厚い土器である。文様は隆起線による円形区画をもち、地文に撚糸Rを施す。

6類（647）　口縁下に一条の沈線や隆帯を巡らすもの。

647は口縁下に無文帯をもち頸部に一条の沈線を巡らし、地文に撚糸Lを施す。

第Ⅸ群の鉢形土器（622～632）

622は強く内湾し胴部を欠損する。隆帯による人面状の文様で、周りに細かい棒状刺突がみられ、下

部には縄文を施す。城之腰遺跡出土土器［藤巻ほか1991］と類似している。623は全体的によく磨かれており、口縁は突起状となる。頂部に渦巻状の隆起線を配置し、以下沈線で文様を描き、一部に縄文を施しているが撚りは判別できなかった。624は口縁下を沈線で弧状に区画し、その中に沈線による縦楕円区画文を描き、上下両端には瘤状の突起がみられる。296に類似する。

4類（625・626）　沈線によって胴上半部に「C」・「S」・「U」等のアルファベット文や曲線文を描くものである。

625・626は同一個体で口縁下に一条の沈線を引き、以下も沈線で文様を描く。おそらく横「e」字状になるだろう。地文は縄文LRである。

5類（627～632）　隆帯・隆起線によってアルファベット文や曲線文を描くもの。

627・628は2本の隆起線による無文帯で「C」字状に区画している。629は口縁が内湾し、突起をもつ。隆帯で無文帯を横流れ「S」字状に区画し、それ以外の区画内に撚糸Lを施す。630は隆起線で文様を描き、内面にも隆帯を貼り付けている。このような例は他に確認できなかった。内外面にススやオコゲが付着している。631は胴部に隆帯による連弧状の区画をもつと考え、復元した。632は波状口縁になり、頸部が強くくびれ胴部が張り出す鉢形土器B1と考えられる。波頂部下のくびれ部には長軸が3.8cmの横長の孔をもち、波底部には橋状の把手がつく。頸部のくびれた部分には縄文LRを施し、孔の下は欠損しているが隆起線を確認できる。胴部は隆起線により波状に区画している。

第Ⅸ群の浅鉢形土器（633～636）

633は口縁下に一条の沈線を巡らせ、胴部には沈線による弧状区画がみられる。634は隆起線で文様を描く。頸部には黒色塗彩がみられる。635は口縁が大きく内傾し、張り出た頸部に環状把手が付く。胴部は隆起線で文様を描く。636は635と同様の把手をもち、把手上に棒状刺突を列状に施し、胴部を沈線で区画し棒状刺突と縄文LRを縦位に施す。

第Ⅸ群の台付土器（638～640）

638～640は台付土器の台部である。640は沈線による「U」字状に区画し、区画内と胴部下半に縄文Lを縦位に施す。

第Ⅸ群の注口土器（637・641～643）

637は底部を欠損しているが、器厚がやや厚くなることから、底部に近いと考えられる。口縁部は内傾し、注口部は直線状に延びるが上部を欠損しており、片口状になるのか筒状になるかは確認できない。頸部には6単位の張り出しが確認でき、注口部の反対側は欠損しているが、張り出しか注口になると考えられる。胴部は沈線を波状に施す。641・642は同一個体である。注口部は上部が欠損し、筒状になるか片口になるのかは不明である。胴部は隆起線で文様を描いている。

第Ⅸ群の壺形土器（644～646）

644・645は同一個体である。646については胎土が似ていることからここに掲載したが、別個体かもしれない。644は口縁部には橋状把手をもち、胴部は隆起線で「S」字状の文様になると考えられ、416に類似する土器だろう。

第Ⅹ群の深鉢形土器（648～664）

648・649は口縁が内湾し、波頂下に指でつまんだような突起をもつ。648は口縁下に無文帯をもち、胴部に沈線で文様を描く。649は口縁下に2列のヘラ状刺突列が巡り、その間には無文帯が認められる。

650は口縁に向かって弧状の貼り付け文をもち、頸部に隆帯を巡らせ、胴部は沈線で渦巻状の文様を

描く。651は口縁下に無文帯をもち、頸部に沈線が巡る。胴部は沈線が縦に垂下し、間に逆「U」字状に沈線を配し、沈線間に縄文LRを施す。652は頸部に一条の沈線を巡らせ、胴部には弧状の区画が連続する。区画内に縄文RLを施す。653～659は関東系の中期末葉～後期初頭になると考えられる突起である。形態は各々異なるが文様に棒状刺突が多用され､全体が鳥頭状や頂部が羊の角状の形になるもの等がある。661・662は同一個体で波頂部に隆帯を渦巻状に貼り付け、口縁下に無文帯をもつ。胴部には沈線で文様を描く。663の突起は朝顔状に開き沈線で縁取り、中央が貫通している。口縁は波状を呈し、胴部は沈線で文様を描く。664は胴部が球形になり、口縁は「く」字状に外反し口端が受け口状となる。胴部は沈線で入り組んだ区画文様を描き、区画内に刺突を規則的に充填させる。三十稲場式土器の特徴的な器形に称名寺式土器の文様がついたような土器である。

第Ⅹ群の注口土器（665）

665は口縁を４単位の波状に作り出し、内２単位は胴部の張り出し部と繋がり橋状把手になる。もう２単位は波頂下に約0.4cm程度の孔をもち、頸部に注口をもつ。胴部には沈線で逆「J」字状の区画がみられ、沈線区画内には短沈線を充填する。内外面に多くのススが付着している。

666は頸部に板状の橋状把手をもち、把手と器面の接合部に刻みを施す。331のような器形になると考えられる。

667は頸部がくびれて口縁がやや内湾し、突起と吊り手をもつ深鉢形土器である。吊り手は接合しなかったが、文様や胎土から同一個体として図上復元した。吊り手部には上面と両側面に刺突と沈線による文様が描かれる。頸部のくびれ部分には２条の沈線が巡り、無文帯としている。地文に櫛歯状沈線を縦位に施す。

第ⅩⅠ群の深鉢形土器（668～676）

１類（668・671・672）　単純で板状の橋状把手が口縁と頸部を繋ぐもの。

668は口縁が直立し、口端に平らな面をもつ。板状把手で頸部に刻み隆帯を巡らす。671は板状把手と中心に孔のある渦巻状の突起が付される。頸部は棒状刺突をもつ隆帯が巡る。672は口端を受け口状にし、口縁に板状把手をもち、頸部に刻み隆帯を巡らす。胴部に縄文LRと結節縄文を縦位に施す。

２類（669・670）　１類把手にややひねりのあるもの。

669・670は同一個体である。把手は大きく左に傾いている。胴部には撚糸Lを施す。

３類（673・674）　２類把手に貼付文・刻み・沈線等の装飾のあるもの。

673は口端が内面に三角状に張り出て、右に傾く把手の両端に円形状の窪みをもつ。頸部に刻み隆帯を巡らす。674は口縁が外反し、隆帯を円形に貼り付ける把手をもち、頸部には刻み隆帯を貼り付ける。胴部には棒状刺突を施す。

４類（675）　把手が細い棒状の把手や突起状のもの。

675は口縁が外反し、口端に刻みや唇状の貼り付けがみられる。隆帯をもつ棒状把手が１つのみで、頸部には棒状刺突が施文される隆帯が巡る。本遺跡から出土する第ⅩⅠ群土器中でも把手が１つしかないものはこれしか確認できなかった。

５類（676）　１～４類の以外の把手のつくもの。

676には透かしのある渦巻状の把手をもち頸部との接触点には瘤状の膨らみをもち、そこから上部に沈線をもつ隆帯を巡らす。胴部には爪形刺突文を施文する。把手下からは沈線をもつ隆帯が胴部中半まで垂下し、隆帯による細長い楕円区画が配される。この文様は反対側でも確認できる。

第ＸＩ群の鉢形土器（677～684）

１類（677）　口縁と頸部を繋ぐ、橋状把手をもつものである。

677は口縁が内湾し、板状の把手をもち頸部は張り出し部に刻みを施す。

２類（679・680・682）　１類把手にややひねりのあるもの。

679は口端が受け口状で上部をひねる把手をもち、頸部隆帯上に指頭圧痕を巡らす。胴部には撚糸Ｒを網目状に施す。680は口端を受け口状にし、口縁で捩れた把手をもつ。頸部を巡る隆帯及び胴部にも爪形刺突を施す。682は頸部に指頭圧痕のある隆帯を巡らし、胴部には爪形刺突を施す。

３類（681・683）　２類把手に貼付文・刻み・沈線の装飾のあるもの。

681は把手上部を弧状にし、側面に刻みをもつ。胴部には爪形刺突を施す。683は把手に渦巻状隆帯を付し、地文には爪形刺突文をもつ。

その他（684～701）　第ＸＩ群の口縁部破片で、全体器形の不明のものである。把手形状から１～５類までがある（685～701）。

684は口縁部、胴部、底部がそれぞれ破片で出土している。口縁部には把手が付いたと考えられる。頸部と胴部の張り出し部に刻み隆帯が巡り、胴部の張り出し部には刻み隆帯に沿うように２条の沈線が施され、途中に渦巻状の貼付文を配置する。さらに円形で中央に窪みのある貼り付け文をもち、そこから口縁に向かって沈線を上部にもつ隆帯が延びる。

692は正面、上部、裏面が貫通する突起をもつ。棒状把手と隆帯で区画され、隆帯に沿うように刺突が施されている。693は「く」字状に外反し棒状把手を２つもち、間を「O」字状にする。胴部に撚糸Ｌを施す。694は板状把手の真ん中に穴をあけ、左右の斜め上からも孔をもつ。695の把手は上部を渦巻状にし、刻みを施す。把手と頸部の接触部を隅丸台形状にし、頸部は鎖状隆帯を巡らす。胴部には棒状刺突を施す。696は口縁が「く」字状に外反し、口端は受け口状になる。把手の真ん中には孔が穿たれている。胴部には指でつまむように瘤状突起をつくる。

第ＸＩ群の把手のみられないもの（697～701）

697は口縁が「く」字状に外反し、口縁下に細い棒状刺突を巡らせ、頸部には不明工具による刺突が巡る。胴部に爪形刺突を施す。698は頸部片のみ残存する。棒状刺突を巡らし、爪形刺突を胴部にもつ。

699は口縁下に棒状刺突を２列施し、胴部には隆起線による縦楕円状の無文帯をもち、それに沿うように棒状刺突を施す。700はやや厚めの土器である。器面には爪形刺突と櫛歯状沈線をもつ。蓋の可能性もある。701は口縁が「く」字状に外反し、口端と胴部に爪形刺突をもつものである。

第ＸＩ群の浅鉢形土器（702～706）

６類（702・703）　沈線を弧状に区画し、区画内に短沈線をもつもの。

702は口縁が内傾する。口縁下に沈線を巡らし、胴部に弧状の区画をもち、区画内に櫛歯状沈線を施す。703は口縁部と胴部の破片からの復元で少し違和感があるが、中央部の欠損部分にはおそらく704のような把手が付されるだろう。胴部は沈線で連弧状に区画し、区画内に短沈線をもつ。胴下半部には短冊状の沈線が垂下する。

704は把手と頸部との接点に円形の孔をもつ。705は浅鉢の胴部であろう。沈線を弧状に施す。706は「く」字状に内傾する浅鉢の頸部片であろう。

第ＸＩ群の注口土器（707）

頸部に注口をもち、胴部に沈線で文様を描いている。

第ＸⅠ群の異形土器（708）

708は器高7.8cm、胴部最大径6.6cm、底径6.0cmを測り、口縁を欠損している。器面に爪形刺突を2条単位で斜めに、下半は1条で弧状に施す。背面上端と開口部の下端に直径1.5～1.9cmの剥がれたあとが確認できる。残存部分から手焙形土器の器形になるだろう。類例としては、柏崎市田塚山遺跡のSK5から出土しており、器高27.9cm、胴部最大径19.2cm、底径推定10cm［中野1996］と大形である。

第Ｘ群の蓋（709～742）

A類（711・712・714）　断面が板状になり、平面がほぼ円形になるもの。

711・712は弧状の隆帯を配置する。714は中央部に橋状把手をもつが欠損している。地文には爪形刺突文を施す。

B類（709・710・713・715～718）　断面がやや丸みをおび、平面がほぼ円形になるもの。

709は中央部に直径約1.1cmの孔をもつ。器面に沈線と隆帯と棒状刺突で文様が描かれている。710は中央部にやや楕円状の孔を穿ち、1対の橋状把手をもつ。器面に短沈線で文様を描く。713は1対の把手をもち、端部は全面欠損し、一部を研磨している。器面は沈線を弧状に区画している。715は半分以上が欠損し、おそらく2対の把手をもつ。器面の縁に沿って2条の刻み隆帯を施す。3つの穴が確認でき、2つは貫通するが、1つは途中で止まっている。717は2重の同心円に近い段をもち、段と段の間には対になる孔をもつ。718は2個1単位の孔をもつ。

C類（719）　断面がやや丸みをおび、口端に1対の抉りをもつもの。

719は1対の把手をもち、平面がやや楕円形になり、器面には爪形刺突を施す。

D類（720～722）　断面がやや丸みをおび、口端に2対の抉りをもつもの。

720は端部に沿うように刻み隆帯を施し、隆帯上に小突起を付し隆帯の内側には沈線が巡る。器面は棒状刺突を施す。721は器面に円形刺突を施したものである。722は中心に孔をもつと考えられる。隆帯を垂下させ、内外の縁に沿って三角状の刺突を施す。

E類（723）　断面が笠状になり、平面がほぼ円形になるもの。

723は本遺跡では少ない器形である。中心に細長い突起をもち、周りに隆帯を風車状に配置し、一部の隆帯には爪形刺突が施される。

724～742は蓋の破片資料である。724～728は蓋の上部である。724・726はつまみをもち中央が貫通している。725は把手下には孔がみられ、把手には棒状刺突を施す。

第ＸⅡ群（743～753）　三十稲場式並行もしくは前後に位置付けられ、口縁部に隆帯で文様を描くもの。

1類（743・744）　口縁部に隆帯を弧状にし、4単位に配置するもの。

744は口縁の無文部分を隆起線で弧状区画し、そのまま口縁から突出し突起状になる。地文は縄文RLである。

2類（745～749）　口縁～頸部に隆帯を逆「T」・「人」・「入」字状にし、4単位に配置するもの。

745は隆帯が「入」字状に配され、胴部には弧状沈線がみられる。747は「人」字状の隆帯をもち、地文に爪形刺突をもつ。749は刻み隆帯を頸部から口縁に向かい「人」字状に施す。隆帯と隆帯の接するところに円形の窪みをもつ。

3類（750）　口縁～頸部に隆帯をループ状文が上下相反するような文様のもの。

750は口縁下に沈線で楕円状に区画し、区画内に棒状刺突列をもつ。口縁に向かって弧状になる部分には刻みを施し、胴部に垂下する部分にはボタン状の隆帯を配置する。

751・752は口縁下と頸部に隆帯を巡らすものである。752は隆帯が垂下し、「エ」字状になり上下の接触部分に円形の刺突を施す。

754～757は東北系の突起としてまとめた。

654～659の突起との区別は難しく、「8」字状や向かい合う弧状に意識しているものをこちらに含めた。754は沈線をもつ隆帯を「8」字状にし、口縁下に棒状刺突を施す。755は突起の上部に向かい合う弧状の沈線と棒状刺突をもつ。側面には円形の貼り付け文もみられる。756は波頂部に沈線をもつ隆帯を「8」字状に貼り付け、口縁に沿って沈線を施す。757は把手状になっているが、どんな器種のどの位置に付されるのかは不明である。758は胴部に櫛歯状沈線で横位、縦位、「8」字状に区画し、地文に縄文LRを縦位に施す。759は縄文帯を枡状に施し、下半に1条の縄文帯を巡らす。

第ⅩⅢ群土器（792・794～831）中期末葉～後期前葉と考えられる粗製土器やミニチュア・小形土器を一括した。

792・794～812は系統や時期の不明なものである。792は台付土器の台部である。隆帯にヘラ状の刺突を施す。795は隆起線をもつ台形状の突起である。796は口縁に円形の隆帯による貼り付けをもち、口縁下に一条の沈線が巡る。地文は撚糸Lである。798は口縁部に無文帯をもち、頸部に刻み隆帯を巡らし、胴部に沈線と刺突列を縦位に施す。799は絵が描かれているのかと疑うほど細い沈線が蕨手状にいくつも施される。800は口縁下に沈線で四角状の文様を描き、地文には撚糸Lを施す。801は把手をもち、内傾する土器である。口縁下に沈線を巡らせる隆帯のある土器である。802は波状口縁を呈し、口縁下に一条の沈線を沿わせ、胴部に櫛歯状沈線を縦位に施す土器である。803は胴部が張り、口縁が外反する土器である。頸部に一条の沈線が巡り、胴部の張り出しには2列の棒状刺突が確認できる。804は口縁下に沈線で連弧状の区画をもち、地文に櫛歯状沈線をもつ。805は口縁下に逆「八」の字状の刺突をもち、胴部に櫛歯状の沈線を施す。806は口縁下の無文帯が指でつまみ上げるように張り出し、その下に瘤状の丸い突起を配す。地文に縄文LRをもつ。807は浅鉢形土器である。口縁を隆帯で「ノ」字状に区画し、胴部には沈線文が施されている。808は口縁部の内側を三角状にし、口縁下に逆T字状に隆帯をもつ。胴部には沈線で文様を描いている。810は内湾する口縁部片である。無文地に隆帯を2条巡らせ、隆帯には縄文LRを施す。811は口縁が強く内傾する無文の土器である。814は4単位の波状を呈する深鉢形土器である。口縁には無文帯をもち、胴部は櫛歯状沈線で格子状の文様を描いているが、規則性は見られない。

815～822は全面に縄文を施すものである。815・816は1か所で重なり合って出土した。821は胴部片で、断面の剥離跡に刻みをもったものである。土器製作に関係する刻みと考え掲載した。823は全面に櫛歯状沈線を縦位に施す。

824～831は底部に圧痕のあるものをまとめた。824～826は木葉圧痕で、827～831は網代圧痕である。824は弧状の葉脈である。825は中心部がやや窪み、十字になる笹状圧痕をもつ。826は木葉圧痕をもち、底面から斜めに孔が対になるように穿孔している。底部の器形から第ⅩⅠ群土器と考えられる。828は表裏面に磨きがみられることや胎土から第ⅩⅣ群の土器であろう。830はカゴ状圧痕で粒状の圧痕が放射状に広がる。この底部は拓本の最中、真ん中に文様があると考えたのだが確認できなかったので、砂が原因と考えひび割れた隙間に詰まっていた砂を落としていたら、粘土が剥げその下から圧痕の真ん中が出てきた。剥離する部分は中心部に限られており、このようになるのはカゴを編むと中心部が盛り上がることからそれを平らにするため粘土を埋め込んだのだろうか[1)]。

1）剥離できる部分はまだあるが元に戻せなくなる可能性があることから大きな部分に限って剥がした。

ミニチュア・小形土器（832～856）

832～835・837～840・842～846は深鉢形土器である。836・847～849は鉢形土器である。850～854は浅鉢形土器である。832は小形土器である。沈線で文様を描いているが、文様構成は判別できない。833は小形土器である。胴部で膨らみ頸部がくびれ口縁部に向かって外反する器形である。口縁に1対の孔をもち、胴部には隆帯を巡らせている。834はミニチュア土器である。全面に縄文Lを縦位に施す。835はミニチュア土器である。全面に縄文LRを縦位に施す。836は小形土器である。頸部に突起を有し沈線を一条巡らす。胴部は沈線を連弧状に施す。837～840はミニチュア土器である。837は沈線で「U」字状の文様を描き、地文に縄文LRを施す。内面は黒色塗彩がみられる。838は口縁を欠損し、頸部に1条の沈線が巡り、地文に縄文RLをもつ土器である。839は手捏土器である。底部は台付状にし、人の爪のような跡が残っている。840はミニチュア土器である。841は全面に沈線を施す不明土器である。842は地文に縄文LRを縦位に施し、底部はやや上げ底である。843～846はミニチュア土器で無文である。847は口縁部を無文帯で頸部を隆起線が巡り、胴部に縄文LRを施す。内外面に赤色塗彩がみられる。848は口縁下に無文帯をもち、地文に縄文LRをもつ土器である。内外面や口端まで赤・黒色塗彩が付着している。849は胴部に櫛歯状沈線を矢羽状に施す。850はミニチュア土器で三角状の突起をもつ手捏土器である。851は小形土器で無文である。852はミニチュア土器で無文である。853は口縁下に無文帯をもち、頸部に沈線が巡り、胴部に沈線で弧状に区画し、間に円形刺突を縦に配す。地文は縄文Lを横位に施す。854は沈線で弧状の区画をもち、胴下半部にも沈線で波状に区画し、区画内に沈線が施される。三十稲場式土器の浅鉢と同様な文様である。855・856の器種は特定できなかった。

d　後期中葉の土器

①　分　類

器種・器形分類

深鉢形土器（口径が器高より小さいもの）

底部から広がりながら立ち上がり、口縁が緩やかに内湾するもの（98）

鉢形土器（口径が器高と同じ、もしくは口径が器高よりも大きいもの）

緩やかに内湾するもの（102）

浅鉢形土器（口径に比べて、器高が半分から3分の1くらいになるもの）

底部から広がりながら立ち上がるもの（300）

台付土器（792）

注口土器

胴部がそろばん玉状になり、口縁が外傾するもの（99）

壷形土器

口縁～胴部まで直立し、胴部から緩やかな曲線を呈するもの（231）

系統・文様分類

新潟県の後期中葉は三仏生式土器［國島1988］があるが、加曽利B式土器との区別が難しく、三仏生式も型式として確立しているとはいえない。それゆえここではこれらの土器群を加曽利B式併行の土器すなわち関東系の土器として扱う。他の系統に関しては抽出できなかったので、ここでは文様分類のみ行う。

第XⅣ群土器　当該期の土器を一括して扱う。

本遺跡から出土した深鉢形土器の器形は、ほぼ全部が底部から広がりながら立ち上がり、口縁が緩やかに内湾するものである。

1類　無文のもの

2類　3～4条の縄文帯が巡り、弧状やクランク状の沈線等で仕切るもの

①　弧状の沈線で仕切るもの

②　クランク状沈線で仕切るもの

③　短沈線で仕切るもの

④　刺突で仕切るもの

⑤　蛇行沈線で仕切るもの

②　遺構出土の土器（図版90・91・95・97・102・109・346・347・349・351・354・359）

住居跡の出土土器（図版90・91・95・346・347・349）

SI228出土土器（98～102）

98は底部から大きく開き、口縁に向かって内湾する深鉢形土器である。口縁下と頸部に縄文帯が3本ずつみられ、縦に沈線で弧状に仕切る。区画内に縄文LRを施す。99は口縁が波状になり、胴部がそろばん玉状の注口土器である。胴上半部には向かい合う弧状の無文帯を描き、胴部の張り出た部分を沈線で縄文LRを帯状に区画し、斜めに沈線を配す。101は炉体土器である。全面が磨かれており、胎土や底部からの立ち上がり方や覆土出土土器から推測すると第ⅩⅣ群土器であろう。102は鉢形土器である。胴部に縄文帯が巡り、弧状沈線で縦に仕切る。

SI243出土土器（110・111）

110は第ⅩⅣ群土器の突起であろう。突起の半分以上を欠損しているが、776・778・779・781のような環状突起になると考えられる。111はやや薄手の口縁部片である。器面に櫛歯状沈線で文様を描く。

SI467出土土器（157）

157は沈線で「Y」・「X」字状に文様を描き、瘤状の突起が付される。地文として縄文LRを施す。

土坑出土土器（図版97・102・109・351・354・359）

SK104出土土器（182）

器壁が薄く、しまりのある胎土の底部片である。胴部は無文でよく磨かれ、底部には網代圧痕をもつ。

SK254出土土器（231）

胴部から口縁に向かって長い頸部をもつ。外面はきれいに磨かれているが、内面は磨かれておらず、輪積み痕が確認できる。

SK394出土土器（298～300）

298は推定で、口径36.1cm、器高55.2cm、底径14.0cmになる大形の深鉢形土器である。全面に縄文LRを施す。299は2重の「人」字状隆帯をもち、胴部には撚糸Lを施す。300は浅鉢形土器である。半分は欠損しているが平面形は方形になると考えられる。口端には刻みをもち、裏面の口縁下には隆起線を巡らしそれに沿って刺突を施す。以下は波頂下に渦巻状沈線をもち、その下には5条の沈線を巡らす。表面は無文である。

SK413出土土器（304）

口縁部に小突起をもち、口唇部には刺突や沈線が配される。胴部は縄文帯で「エ」字状の区画となる。

③　包含層出土の土器（図版143・144・383・384）

第ⅩⅣ群の深鉢形土器（760～792）

1類（760）　無文である。

760は波頂部に横向きの環状突起をもつもので、突起の中心部に窪みをもつ。胴部は無文で口縁に沿って段を形成している。

2類（761～770）　3～4条の縄文帯が巡り、弧状やクランク状の短沈線で仕切るもの。

①　弧状の沈線で仕切るもの（761・762・765）。

761は波頂下に弧状の隆起線を向かい合うように配置し、頸部にも隆起線をもち、胴部に縄文帯を巡らせ弧状の沈線で仕切る。

②　クランク状の沈線で仕切るもの（769）。

769は波頂部を欠損し、4条の縄文帯をもち沈線でクランク状に仕切る。

③　短沈線で仕切るもの（763・766・770）。

770は波頂部を欠損する。隆起線を弧状に配し、縄文帯を口縁に沿って巡らせ縦に平行沈線で仕切る。

④　刺突で仕切るもの（764・767・768）。

764は口端に「8」字状の突起をもち、縄文帯を逆「V」字状に描き、頂点に棒状刺突を施す。767は縄文帯が交わり、刺突を縦に施す。768は波頂部に耳たぶ状の突起をもち、口端には唇状の膨らみがみられる。胴部には沈線が口縁に沿って施され、縦に2列の刺突文をもつ。

⑤　蛇行沈線で仕切られているもの（771～773・777）。

777は口縁を欠損し、3～4本の沈線を巡らせ、蛇行沈線を縦に施す。内外面の上部に黒彩がみられる。狭い範囲で割れている部分などに付いていることから、廃棄後付着したかもしくは口縁を欠いて使用していたと考えられる。

774・775は波状口縁の波頂部である。774は弧状隆帯が入り組み向かい合う。775は沈線で入り組むような文様を描いている。

776・778～781は第ⅩⅣ群の突起である。778・779・781は胴部に縄文帯を巡らせ、縄文帯を沈線で弧状に仕切っている。778は環状突起をもち、突起から口縁にかけて渦巻状の沈線を施す。縄文帯を弧状沈線で縦に区切る。

第ⅩⅣ群の浅鉢形土器（783・784）

783は口端に刻みを施し、口縁下に隆帯を弧状の貼付し、頸部に沈線が巡る。784は突起状の張り出しをもち、張り出し下に孔をもつ。

第ⅩⅣ群の注口土器（785～791）

785・786は注口部を欠損しているが、そろばん玉状の器形と口縁が外反することから注口土器と考えられる。785は口縁下に沈線をもち、胴部に沈線で浮き上がらせるような帯状入り組み文を描き、胴部の張り出し部に沈線が巡る。786は頸部に一条の沈線が巡り、胴部上半に平行沈線を弧状に施し、胴部中央の張り出し部には平行沈線が巡る。787は口縁部が口径5.8cmと小さく注口土器と判断した。788～791は注口部のみ出土である。頸部に縄文帯をもち、口縁内面に一条の沈線を巡らす。

789は注口部をもち、頸部に隆帯を巡らし、胴部には貼り付けの剥がれた跡が確認できる。

e　その他の土器（図版144・384）

1点のみだが晩期の土器が出土した。793は晩期の大洞C式期の土器であろう。

B　土　製　品

発掘調査で出土した土製品は第5表のとおり、土器片円盤、土偶をはじめ各種の土製品が出土している。総数817点を数える。このうち遺構内出土が46点（5.6％）、遺構外出土が771点（94.4％）で、ほとんどが遺構外出土となる。器種別では土器片円盤が752点（92.1％）を占め、次いで土偶33点（4.1％）であり、これ以外は極めて少ない。

器種名 / 出土区分	土器片円盤	土錘	耳飾り	腕輪	土偶	その他の土製品	焼成粘土塊	合計
遺構内出土	40				4	1	1	46
遺構外出土	712	1	9	1	29	13	6	771
合計	752	1	9	1	33	14	7	817
百分率（%）	92.1	0.1	1.1	0.1	4.1	1.7	0.8	100.0

第5表　器種別土製品出土数

出土分布傾向は第21・22図のとおり9～17・B～Eグリッドに集中する。土器・石器の出土分布と同傾向であり、多くは中期末葉～後期初頭の集落跡に伴うものといえる。また、土偶を中心に17～20・Fグリッドからの出土もやや認められる。これは中期前葉～中葉の集落跡に伴う土製品と推定される。

以下、掲載順に各器種の土製品について概要を説明する。

1）土器片円盤（857～898）

土器片を利用した研削具［藤巻1989］とされるもので、土器片の周縁に打ち欠きや研磨痕の認められるものである。総数752点出土し、42点を図示した。

分　　類　周縁の打ち欠きや研磨痕の状態により細分した。

A類（857～866）　周縁を打ち欠いただけのもので研磨痕が認められないもの。

B類（867～886）　周縁の一部（約50％未満）に研磨痕が認められるもの。

C類（887～898）　周縁の大部分（約50％以上）に研磨痕が認められるもの。

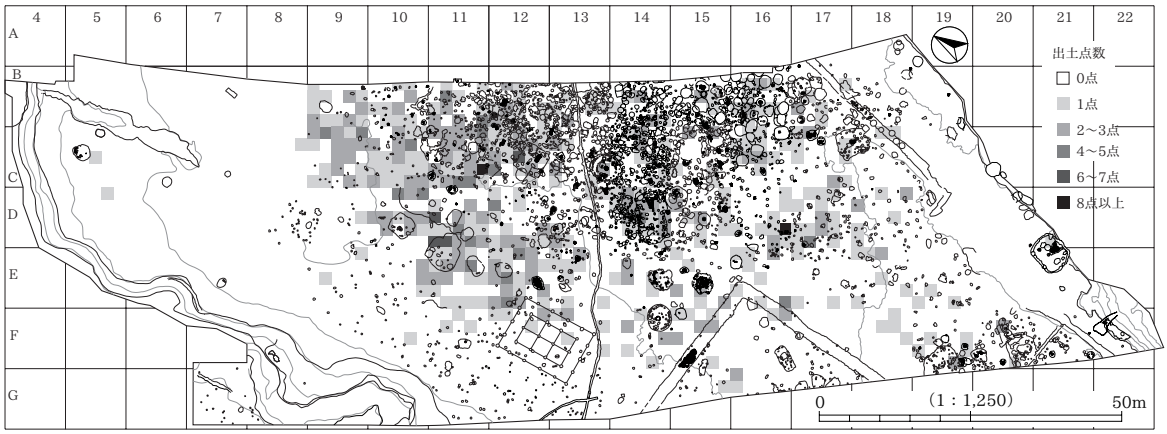
分類不可　破損品、破片のため、周縁の状態が不明で分類できないもの。

分類別ではA類109点（14.5％）、B類428点（56.9％）、C類98点（13.0％）、分類不可117点（15.6％）となり、B類が半数以上を占める。

分　　布　第21図参照。中期末葉～後期初頭の集落跡及びその外側の9～17・B～Fグリッドに分布する。この分布範囲の中では、該期の集落跡の北から西側にあたる9～12・B～Eに集中する傾向が見られる。なお、分類別の片寄りは認められない。分布傾向から中期末葉～後期初頭の集落跡にほとんどが所属するものと推定できる。

法　　量　平均法量はA類長さ4.2cm、幅4.2cm、厚さ1.0cm、重さ23.7g、B類長さ3.9cm、幅3.9cm、厚さ1.0cm、重さ19.4g、C類長さ3.6cm、幅3.6cm、厚さ1.0cm、重さ17.0gである。A類→B類→C類の順に小さく軽くなる傾向が認められる。これは周縁を打ち欠き（刃部作出）、研磨（研削具として使用）、再打ち欠き（刃部再生）の繰り返しの結果を反映したもの［藤巻前掲］といえる。なお厚さが変らないのは、表裏面が使用の対象とならなかったためと考えられる。

素　　材　ほぼすべて深鉢の破片を利用したものと推定され、利用部位は胴部破片750点、口縁部破片1点である。底部破片は認められなかった。



第21図　土器片円盤出土分布図

2）土　　錘（899）

1点のみの出土で、やや扁平な楕円球の短軸と側縁に溝が各一周する有溝土錘である。長さ3.8cm、幅2.6cm、厚さ2.0cm、重さ20.0gを測る。渡辺誠氏の土錘分類の第1類D種に相当する［渡辺1973］。形状から後期中葉の所産である［渡辺前掲］。

3）土製耳飾り（900～906）

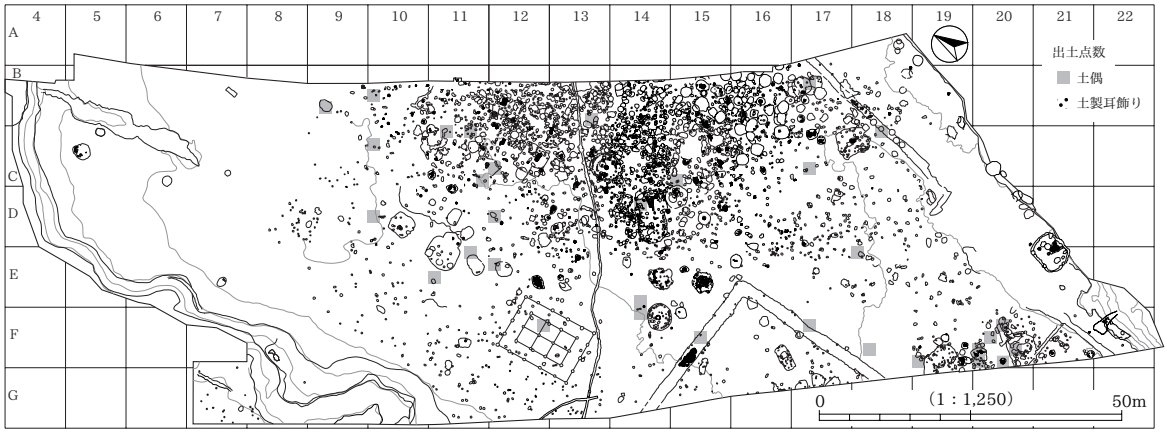
9点出土している。分布は10～16・B～Dグリッドに散在する。

900は小形の鼓状を呈し、直径2.3cm、幅1.6cmを測る。901～904はいわゆる「滑車形耳飾り」と呼称されるものである。901・902は両側縁に刺突が巡り、直径に対して幅が広いタイプである。901は推定直径4.4cm、幅3.2cm、902は推定直径5.0cm、幅3.3cmを測り、胎土には海綿骨針を多く含む精良な粘土を用いている。両耳飾りとも形状、胎土、色調が極めてよく似ており、出土位置も約10m離れただけである。接合しないため別個として取り扱ったが、同一個体の可能性もある。903・904の片側縁に一条（903）、二条（904）の沈線が巡り、直径に対して幅が狭いタイプである。903は推定直径5.7cm、幅1.9cm、904は推定直径6.0cm、幅2.2cmを測る。図示していないが、同タイプの耳飾りの破片がもう1点出土している。905・906はいわゆる「スタンプ形土製品」に近似するが、スタンプ形土製品の印面に相当する部分が外側に膨らまず内湾すること、つまみ部が長いことや穿孔されていないことから耳飾りとした。類例として奥三面遺跡群元屋敷遺跡［滝沢ほか2002］、青森県風張遺跡［八戸市博物館1997］などがある。905・906とも胎土は海綿骨針を多く含む精良な粘土を用い、赤彩されている。図示していないが、同タイプの耳飾りの破片がもう1点出土している。

所属時期は各耳飾りの形状、出土地点と本遺跡の存続時期を照らし合わせると、900～902が中期末葉～後期初頭、903～906が後期中葉と推定される。

4）土 製 腕 輪（907）

1点のみの出土である。推定直径8.0cm、幅3.7cmを測る。文様は縄文LR地の上部・中央部・下部に各1列の円形刺突を巡らせている。中期末葉から後期初頭の所産と推定される。



第22図　土偶・土製耳飾り出土分布図

5）土　　偶（908～931）

33点出土し、24点図示した。4点がSK380、SK430、SX427、12D－P7の遺構内から、これ以外は遺構外からの出土である。第22図によれば遺構内出土のものも含め、9～20・B～Fグリッドに分散出土するが、17～20Fグリッドにやや多くの集中が認められる。これらは中期前葉～中葉の集落跡に伴う土偶と考えられる。

すべて破損品であり、頭部だけ遺存するもの2点、胴部・腰部を中心に遺存するもの11点、腕部だけが遺存するもの11点、脚部だけが遺存するもの9点である。

908・909は河童形土偶の頭部である。908は沈線と刺突、909は隆帯貼付で顔面等を表現している。いずれも胎土には海綿骨針が多く含まれている。910・911は胴部の遺存する土偶である。910は細かな刺突が、911はやや大きな刺突が施される。910は厚みと背中に丸み（猫背状）があり、911は胴部が厚く断面に丸みがあり、板状土偶になるのか明らかでない。912は大形の板状土偶Aタイプ［駒形1992・1998］であり、隆帯貼付と刺突が施される。関連は不明なものの、12B－5号集石（フレーク集石）の近くから同レベルで出土している。913は板状土偶の胴部であり、隆帯貼付と沈線、刺突が施される。914・918は、腹部が膨らみ、背中が反り、やや出尻となる板状土偶Bタイプ［駒形前掲］と思われる。914は腹部が剥落し、脚部が省略されている。915・916・920は板状土偶Aタイプで、沈線が施文される。特に915・920は沈線の曲直線が多用されている。なお、920は脚部が省略されている。921～923は腕部であり、921は沈線、922は刺突が施され、923は無文である。924～931は脚部である。924は地文に縄文LRが施されるが、これ以外は無文である。

所属時期は形状・出土地点から908～910・914～920・922が中期前葉～中葉、911～913・921が中期末葉～後期初頭と推定される。なお、908はSK430（大木7b式期新段階）からの出土であり、頭部だけであるものの大木7b式期新段階の可能性が高いものと考えている。

6）その他の土製品（932～939）

14点出土し、8点を図示した。932は動物意匠の突起または把手と推定されるものである。上面は大きく窪み、周縁に刺突が4か所施される。顔面に相当する部分には穿孔により眼が、細い短沈線により口が表現されている。933・934は太くて短い円形土塊の周囲に、やや太目の沈線（幅約3～4mm）が2条

巡るものである。出土地点が小グリッドで隣接し、形状・胎土も同じことから同一個体と推定される。深鉢等の突起または把手で、対になっていたものと考えている。類似品として小千谷市城之腰遺跡で「泥棒」［藤巻ほか前掲］とされた２点、村上市高平遺跡で「不明土製品」［塩原ほか2001］とされた４点がある。

935は端部が尖る扁平棒状土製品である。いわゆる「カツオ節形石製品」に近似する。936・937はやや幅広な扁平土製品である。福島県飯舘村羽白Ｃ遺跡の「斧状土製品」［三品1989］に近似する。938は正面が楕円形で周縁に弱い縁をもつ。裏面の両側縁には縦長状の脚が付くように見えるが、欠損していて明らかでない。脚付き石皿の模造品のようにも思える。939は穿孔されている土製品の一部で、突起または把手の可能性がある。胎土に石英粒が目立ち、焼成は良好で堅緻である。

所属時期は、形状・出土地点から933・934が中期前葉～中葉、936～939が中期末葉～後期初頭と考えている。

7）焼成粘土塊（940～943）

７点出土し、４点図示した。940は大きな塊からつまんだような粘土塊であり、正面に指紋がはっきりと残っている。941～943は粘土紐をまとめたものであり、所々に粘土紐の痕跡が残る。なお、943には細い沈線が無造作に付けられている。

出土地点から中期末葉～後期初頭の集落跡に伴うものと推定している。

3　石器・石製品

上層の発掘調査で得られた石器・石製品・搬入礫は、1,000箱（箱サイズ約60×40×20cm）以上である。遺跡が沼沢火山灰の二次堆積層上に立地するため、発掘調査で出土する礫は、石器・石製品はもちろんのこと、使用・加工の痕跡が認められない自然礫も何らかの意図をもって遺跡内に搬入されたものである。したがって、調査で得られた礫は、すべて洗浄し、石器（器種石器・剥片類・石核等）・石製品・搬入礫（炉石・敷石・集石等の遺構の構築に使用された礫、調査では意味付けできなかったが何らかの意図をもって遺跡内に搬入された礫など）に選別した。搬入礫は出土点数と重さ、肉眼による被熱の痕跡を記録し廃棄した。

搬入礫も含め石器・石製品は、一部古代以降のものを除き、縄文時代に所属する。土器の所属時期からすれば縄文時代中期前葉～中葉、中期後葉、中期末葉～後期初頭、後期中葉の所産である。この中でも中期末葉～後期初頭、中期前葉～中葉の集落に伴うものがほとんどと推定できる。

A　資料の提示方法

資料の提示は実測図・写真・観察表で行い、本文で分析を加えた。石器・石製品は土器と異なり、細かな時期を反映していない。したがって、資料の掲載にあたっては遺構の内外を問わず、器種・分類の好資料と思われるものを中心に図化・掲載した。出土石器・石製品の図化数量・図化率は第６表のとおりであり、全体の図化数量は520点、図化率は1.4％である。これらの掲載遺物にはすべて観察表をつけた。個々の基本的な諸属性は、この観察表に委ねる。

1）実測図の図化方法

図化作業は、剥片石器や礫石器・石製品などのように器種や大きさ、剥離の有無等の複雑さを勘案し、

器種名	石鏃	石鏃失敗品	尖頭器	石錐	石匙	不定形石器	両極剥離痕のある石器	三脚石器	板状石器	篦状石器	小形磨製石斧	磨製石斧	磨製石斧失敗品	石錘	敲磨石類	多面体敲石	石皿	砥石	石核	剥片類	接合資料	石棒	類石棒	玉類	扁平加工礫	鏡面状の光沢を有する石器	軽石製品	その他の石製品	器種分類不可（未分類）	合計
出土数	56	78	4	116	63	2799	1043	7	178	30	20	147	14	38	3479	270	434	121	1096	27313	7	12	15	7	39	11	10	14	16	37437
掲載数	25	11	4	25	24	70	20	4	24	13	17	34	0	9	76	21	28	15	15	6	7	12	5	7	14	11	9	14	0	520
図化率（%）	39	14	100	22	38	3	2	57	13	43	85	23	0	24	2	8	6	12	1	0.02	100	100	33	100	36	100	90	100	0	1.4

第６表　出土石器の図化数量と図化率

写真実測と簡易実測器を用いた実測に使い分けた。実測方法は基本的には土器の場合と同じであり、断面実測はマコやデバイダー等を用いた通常の手取り実測である。なお、実測図の理解を補助するためにスクリーントーンを貼付した。凡例は図版編の凡例で説明している。

縮 尺 率　第７表のとおり、「軽石製品」を除き器種ごとに統一した。また、図版にはスケールを付け、縮尺も記入した。

器種名	石鏃	石鏃失敗品	尖頭器	石錐	石匙	不定形石器	両極剥離痕のある石器	三脚石器	板状石器	篦状石器	小形磨製石斧	磨製石斧	石錘	敲磨石類	多面体敲石	石皿	砥石	石核	剥片類	接合資料	石棒	類石棒	玉類	扁平加工礫	鏡面状の光沢を有する石器	軽石製品	その他の石製品
縮尺率	2/3	2/3	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2	1/2	1/3	1/3	1/3	1/4	1/4	1/4	1/5	1/4	1/3	1/3	1/3	1/4	1/4	1/2	1/4	1/2	1/2・1/3	1/2・1/3

第７表　各器種の縮尺率

2）写　　真

写真実測で図化した遺物の写真データは、そのまま写真図版のデータとして使用した。簡易実測器を用いた遺物は、新たにデジタルカメラで撮影したデータを編集した。これらをもとに写真図版を作成した。写真実測したものはそのまま写真図版のデータとしたため、実測図と同じく３面～６面の展開写真となっている。また、簡易実測器を用いたものは最低でも正裏面の２面以上の写真となるように努めた。なお、遺物写真図版の縮尺は、実測図の縮尺と同じである。

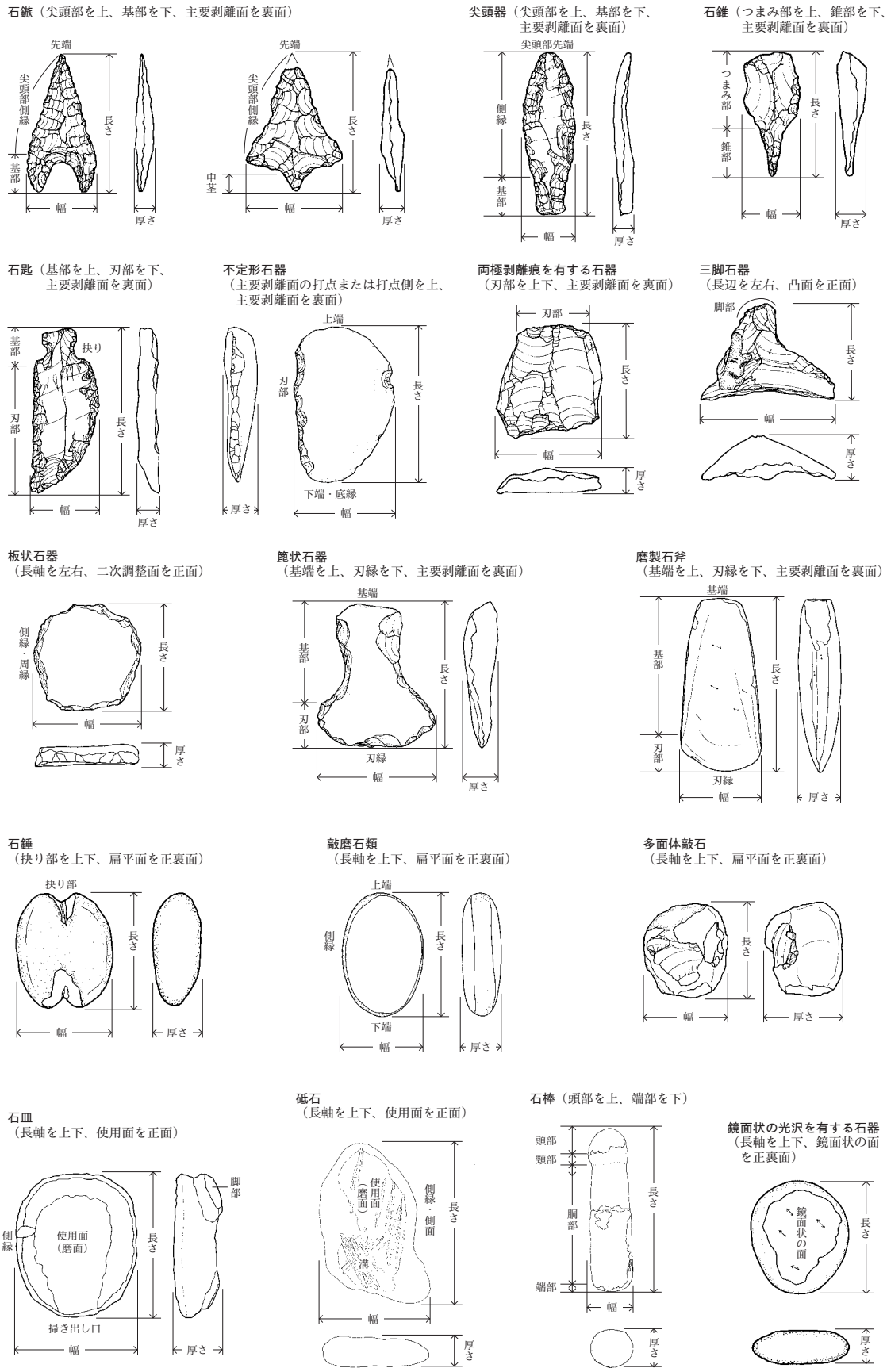
3）観察表の記載

石器・石製品の属性や諸特徴を記入した表である。観察表の主な記載項目は、掲載No.、出土地点・遺構名、層位、分類、計測値、石材、遺存状態、備考などである。各器種の固有の観察項目は、次項「B石器、C石製品」で説明する。

No.　石器・石製品の掲載番号であり、実測図番号、写真番号、観察表のNo.は一致する。

出土地点・遺構名　遺構出土のものは遺構名を、包含層出土のものは原則として小グリッドまでを記入した。なお、遺構出土のもので、炉跡、ピット、周溝などのように遺構内の細かな出土場所が分かるものは、これを遺構名の後に書き加えた。

層　　位　遺構出土のものは、遺構内のどの層位から出土したものか分かる範囲で記入した。具体的には覆土上・中・下層、覆土１・２・３層……、床・底面直上などである。包含層出土のものは基本層序のどの層かローマ数字で記入した。



第23図　主な器種の並べ方及び部位名称と計測基準

分　　類　出土数が一定量以上の器種については、器種ごとにそれぞれの属性や諸特徴をもとに細分類している。この分類記号を記入した。各器種の分類は、次項「B石器、C石製品」で詳述する。

計 測 値　まず器種ごとに並べ方を決定し、これをもとに長さ・幅・厚さ・重さを計測・計量し、値を記入した。各器種の具体的な並べ方及び計測基準は、第23図に示した。ほぼ完形品・破損品・破片であっても、原則として第23図の計測基準に従い、現存値を記入した。

石　　材　各遺物に使用された石材名である。

遺存状態　完形品・略完形品・破損品・破片の区別は、下記のとおりである。破損品・破片は、器種により遺存部位を記入したものや欠損部位を記入したものがある。石皿・砥石・敲磨石類などのように遺存部分を分数で記入したものもある。なお、不定形石器・石核・剥片類は、完形品のイメージの想定が難しいため、遺存状態を記入していない。

完 形 品：それぞれの器種の完形品を想定したものと同じものである。石器・石製品のほぼすべてが使用品と推定されるため、製作完成時（未使用品）と比較すれば、完形品は皆無である。ここでは使用での磨耗や摩滅を除き、まったく破損していないという意味で使っている。

略完形品：わずかに破損するが、完形品と大きく変わらず、計測値も完形品とほとんど変わらないものである。

破 損 品：大きく破損し、完形品と大きく異なるものである。計測値も完形品と大きく異なる。

破　　片：器種のみ特定できる程度のものである。

備　　考　観察項目にないもので、個々の遺物の諸特徴で必要と思われる事柄を記入した。

そ の 他　各器種の部位名称は第23図のとおり、統一するように努めた。

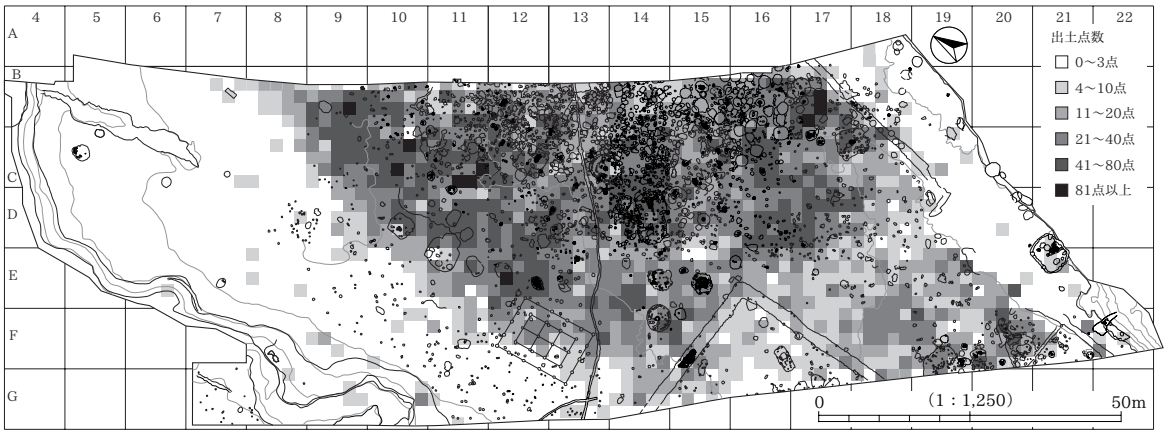
B 石　　器

出土した石器は第8表のとおり、総数37,313点である。遺構内出土が2,976点（8.0％）、遺構外出土が34,337点（92.0％）である。遺構外出土が圧倒的に多い。これは土器の記述でも触れたが、遺構内出土で通常最も多く出土する住居跡に掘り込みの無いものが多く、住居跡の範囲が確定できなかったためである。したがって、本来住居跡出土として処理されるものが、遺構外出土として処理されたものが多かったからである。

石器の出土分布傾向は、第24図のとおり9～17・B～E、18～20・F～Gグリッドに分かれる。前者は中期末葉～後期初頭の集落跡に一致し、後者は中期前葉～中葉の集落跡に一致する。中期末葉～後期初頭の集落跡では、集落跡の北西部の9～12・B～Eグリッドに多い。この傾向は搬入礫の分布、縄文土器の分布傾向とほぼ一致する。

器種名	石鏃	石鏃失敗品	尖頭器	石錐	石匙	不定形石器	両極剥離痕のある石器	三脚石器	板状石器	篦状石器	小形磨製石斧	磨製石斧	磨製石斧失敗品	石錘	敲磨石類	多面体敲石	石皿	砥石	石核	剥片類	接合資料	合計
遺構出土	12	14	0	14	3	199	52	1	6	5	2	13	0	9	339	29	109	30	63	2070	6	2976
包含層出土	44	64	4	102	60	2600	991	6	172	25	18	134	14	29	3140	241	325	91	1033	25243	1	34337
出土数	56	78	4	116	63	2799	1043	7	178	30	20	147	14	38	3479	270	434	121	1096	27313	7	37313
比率（%）	0.6	—	0.0	1.3	0.7	31.8	11.8	0.1	2.0	0.3	0.2	1.7	—	0.4	39.5	3.1	4.9	1.4	—	—	—	99.8

第8表　石器の器種別出土数　比率（％）は失敗品、石核、剥片類、接合資料を除いた器種石器における比率である。



第24図　石器出土分布図

第８表の器種別出土数を見ると縄文時代の集落跡から出土する器種をほぼ網羅し、さらに集落跡の主要部分を調査したため各器種の出土数も膨大である。剥片類・不定形石器・敲磨石類が多いのは、一般的な集落跡の傾向であるが、両極剥離痕のある石器・板状石器・磨製石斧・多面体敲石・石皿・砥石・石核が多く、尖頭器・三脚石器・筬状石器（打製石斧）が少ないのが本遺跡の特徴といえる。石鏃・石錐・石匙は一定量の出土である。

以下、器種ごとに分類、出土分布状況を中心に、石器様相の特徴的な事柄について説明する。

1）石　　鏃（1～25）

尖頭状の狩猟具のひとつで尖頭部・側縁部・基部（脚部）が作出され、左右がほぼ対称のものを石鏃とした。後述する尖頭器とは平面形態で分類され、大きさでも例外を除けば尖頭器より小さくなる。また、石鏃失敗品とは二次調整の進行状況、平面形（左右の対称性）の状況、大きさから区別される。しかし、石鏃としたものでもアスファルト付着の石鏃[1)]と比べるとやや粗雑なものやいくらか左右が不揃いなもの、素材獲得時の打瘤の除去ができなく厚みのあるものなどが存在し、完成品と失敗品の区別が明確でないものも存在する。

石鏃として抽出したものは56点である。

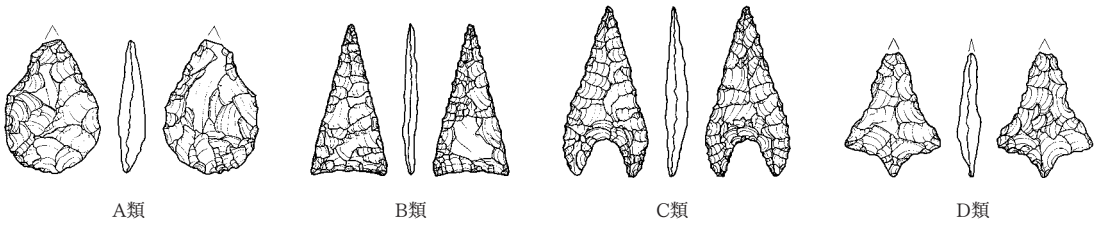
分　　類　基部の形状の様々なものが出土している。細分類は基部形態［鈴木1981］で行った。

A類（1・2）　基部が丸みを帯びる円基鏃である。

B類（3～9）　基部が平らで中茎の無い平基無茎鏃である。側縁が直線的に開くもの（5・6・8・9）、内湾気味に開くもの（3・4・7）があり、基部はやや丸みを帯びるもの（4）、やや抉れるもの（3・5・6・9）がある。

C類（10～23）　基部に抉りがあり、中茎の無い凹基無茎鏃である。抉りの深いもの（12・14）、浅いもの（15～17ほか）があり、側縁形状も直線状（13・15ほか）、やや内湾状（16・17ほか）、やや抉れるもの（18・21）がある。1は側縁下部の脚部との境で抉れるものである。奥三面遺跡群アチヤ平遺跡でH類として分類したものに類例が求められる［阿部ほか前掲］。

1）アスファルト付着の石鏃は、明らかに矢柄に装着したものである。したがって、製作途中で断念した失敗品［阿部2000］・未成品と異なり、確実に完成品といえる。



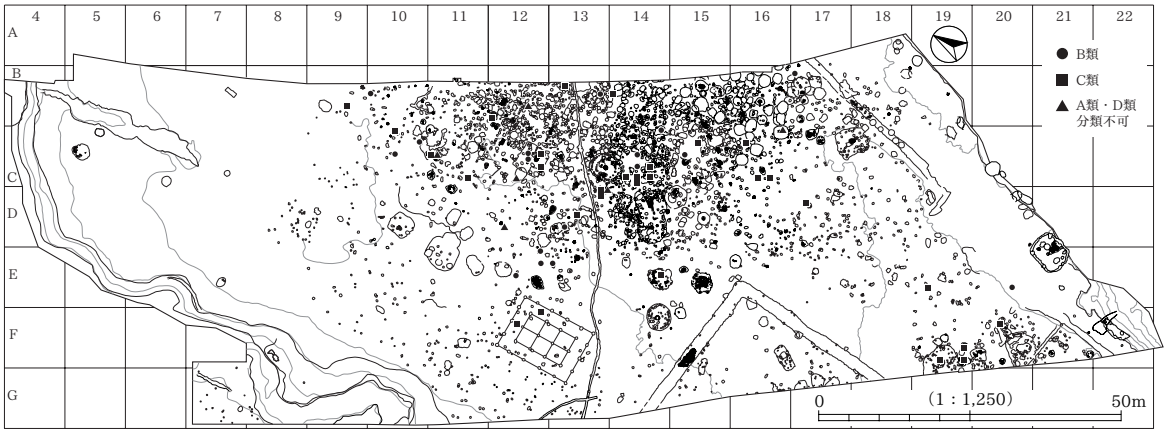
第25図　石鏃分類図

D類（24・25）　中茎のある有茎鏃である。凸基有茎鏃（24）と平基有茎鏃（25）がある。

分類不可　基部の遺存しない破損品・破片であり、分類できないものである。

出土数56点の内、A類2点（4％）、B類17点（30％）、C類33点（59%）、D類2点（4％）、分類不可2点（4％）である。C類が約60％を占め、B類と合わせると90％になる。

分　　布　出土数が比較的少ないため希薄ではあるが、10～16・B～E、19～20・E～Fに分布が分かれる。前者の多くは中期末葉～後期初頭の集落跡、後者の多くは中期前葉～中葉の集落跡に伴うものと考えられる。



第26図　石鏃出土分布図

大きさ・重さ　出土数の多いB類・C類を見れば、大きい（重い）ものから小さい（軽い）ものまで多様である。両者を比較すれば、B類平均長3.0cm、平均幅2.1cm、平均厚0.6cm、平均重4.2g、C類平均長2.5cm、平均幅1.7cm、平均厚0.4cm、平均重1.5gで、B類がC類に比べ大きく重い。ただし、B類には掲載していないものも含め、3・4のように二次調整は全周するが、素材獲得時の打瘤や厚みが残り、他の石鏃と比べ厚く大きいものが何点か存在する。これらは石鏃失敗品の可能性も考えられる。また、確実に矢柄に装着されたアスファルト付きの石鏃（6・8・11・13・17・25）は、掲載していないものも含め、薄手で左右対称のていねいな作りである。

石　　材　第9表参照。頁岩25点（45％）が半数弱を占め、流紋岩7点（13％）、凝灰岩・緑色凝灰岩各6点（11％）が続き、鉄石英（赤）・（黄）、メノウも少量認められる。地元で採集できる、硬質で緻密な石材を使用している。鉄石英（緑）は下層の前

石材／分類	頁岩	流紋岩	凝灰岩	緑色凝灰岩	鉄石英（黄）	鉄石英（赤）	メノウ	鉄石英（緑）	石英	合計
A類		1	1							2
B類	8	1	1	2	2	1	1		1	17
C類	17	4	2	4	1	2	2	1		33
D類		1	1							2
不可			1		1					2
合計	25	7	6	6	4	3	3	1	1	56

第9表　石鏃石材表

期前葉～中葉の限られた時期に使用された石材［髙橋2003］であり、下層から上層へ紛れ込んだものと推定できる。

素　　材　石鏃の長軸に対して素材獲得時の剥離がどの方向かということである。判断できたのは、56点のうち14点である。横方向が13点、縦方向が1点である。必ずしも断定はできないものの、横長剥片を多く用いた可能性が高い。

遺存状態　56点のうち、完形25点、尖頭部を欠く18点、片脚を欠く7点、尖頭部と片脚を欠く4点、尖頭部と両脚を欠く2点である。完形品が半数弱で、破損品では尖頭部を欠くものが最も多く、次いで脚部の片方を欠くものである。分類別では出土数がまとまっているB類・C類を比較したが、大きな違いは認められなかった。

備　　考　アスファルト付着の石鏃は7点（13％）認められた。付着が面的に遺存（6・8・11・13・25）している状況をみる限り、二等辺三角形状に付着していることが分かる。

そ の 他　D類に分類された有茎鏃は、石鏃の変遷［鈴木1983］から後期中葉に所属する。中期前葉～中葉の集落跡から出土している石鏃（10・12）は、掲載していないものも含め12に代表されるように細身で長身のものが多く、しかも薄手でていねいな作りのものが多い傾向にある。これ以外のほとんどは中期末葉～後期初頭の集落跡に伴うと推定できるが、凹基無茎鏃・平基無茎鏃であり、有茎鏃は普及していない。

2）石鏃失敗品（26～36）

小形の剥片に押圧剥離の二次調整を施した定形石器以外を石鏃失敗品とした。言い換えれば石鏃完成品と比べた場合、素材・大きさ・二次調整などから、石鏃の製作を意図したが、何らかの理由により断念（失敗）したと考えられるものである［阿部前掲］。不定形石器とは大きさ・厚さ・二次調整・使用痕の有無などで区別される。総数78点を抽出した。

分　　類　二次調整の進行程度で細分類した。いずれも素材の形状を大きく残すが、B類はA類に比べより素材獲得時の形状をよく残している。

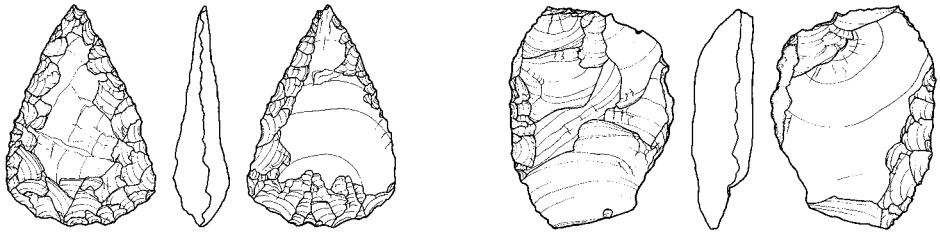
A類（26～31）　周縁の二次調整が半周以上に及ぶもの。

B類（32～36）　周縁の二次調整が一部のみのもの。

分類不可　石鏃失敗品の破損品・破片または折断され、分類できないもの。

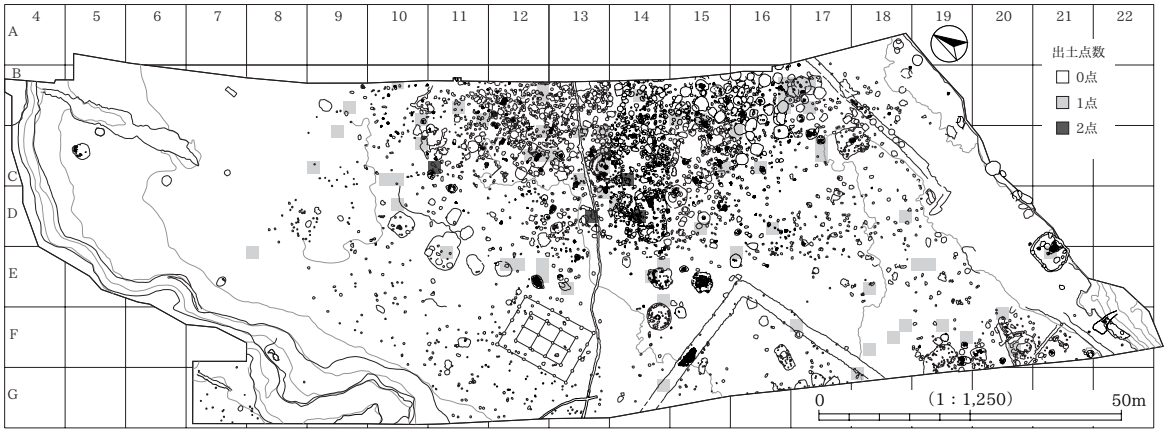
A類49点（63％）、B類26点（33％）、分類不可3点（4％）で、A類が約2/3、B類が1/3となる。

分　　布　出土数が少ないものの、9～17・B～E、18～20Fグリッドの2か所に分布が分かれる。前者の多くは中期末葉～後期初頭の集落跡に、後者の多くは中期前葉～中葉の集落跡に伴うと推定できる。



A類　　B類

第27図　石鏃失敗品分類図



第28図　石鏃失敗品出土分布図

大きさ・重さ　総数の平均長3.3cm、平均幅2.5cm、平均厚0.7cm、平均重5.7gである。石鏃と比べれば長さで0.7cm、幅で0.7cm、厚さで0.2cm、重さで3.4g大きく重いことになる。出土数がまとまっているA類、B類を比較すれば、A類平均長3.3cm、平均幅2.4cm、平均厚0.7cm、平均重5.7g、B類平均長3.5cm、平均幅2.6cm、平均厚0.7cm、平均重6.2gである。二次調整の進行しているA類が、B類に比べ小さく軽い。

石　　材　78点のうち、頁岩29点（37％）が最も多く、次いで流紋岩15点（19％）、緑色凝灰岩12点（15％）である。凝灰岩、鉄石英（赤）、メノウも一定量認められる。いずれも硬質で緻密な石材であり、在地産の多種類の石材を使用している。分類別では石材選択に大きな違いが認められない。また石鏃と比較しても大きな違いが認められず、ほぼ同様な石材選択である。

石材／分類	頁岩	流紋岩	緑色凝灰岩	凝灰岩	鉄石英（赤）	メノウ	鉄石英（黄）	硬砂岩	石英	合計
A類	18	10	6	6	4	3	1	1		49
B類	11	4	5	1	2	2	1			26
不可		1	1						1	3
合計	29	15	12	7	6	5	2	1	1	78

第10表　石鏃失敗品石材表

素　　材　素材が横長剥片か、縦長剥片かということである。二次調整の進行したものは、石鏃失敗品の長軸に対して素材獲得時の主要剥離面が縦方向か、横方向かということで求めた。明確でないものもあるが、横長剥片37点（47％）、縦長剥片22点（28％）、両極剥離痕のある剥片4点（5％）、不明15点（19％）で、横長剥片を多く用いている。分類別の違いは見られなかった。

そ の 他　石鏃失敗品としたものには、打面・打瘤が除去されていないものや打瘤の膨らみが残るものが46点認められた。また、これ以外で素材の厚みを減じていないものが数多く認められている。したがって、石鏃製作の主たる失敗の要因は、打面・打瘤の除去を含めた素材の厚みを減じられないことと考えられる。

3）尖　頭　器（37～40）

先端が尖頭状で、尖頭部・側縁部・基部が作り出され、左右がほぼ対称のものである。平面形は柳葉状を呈する。石鏃とは平面形態で区分でき、長さにおいても石鏃より長くなる。4点のみの出土である。

37は基部のすぼまりかたが緩く、つまみ状になる。山形県押出遺跡で多出した、いわゆる「押出型ポイント」［佐々木・佐藤1986］と呼称されているものである。出土地点の21Eグリッドは、上層と下層の間層であるⅣ層（沼沢火山灰層）が流出しているところであり、また墓地移転のため撹乱の多いところ

であることから下層からの紛れ込みと推定される。38は尖頭器の基部と推定される破片である。薄手で、小形の作りである。39は大形の尖頭器の尖頭部・側縁部と推定される。尖頭部と右側縁は二次調整が進行するものの、左側縁は二次調整が少なく素材の厚みを減じていない。基部は折れている。尖頭器に含めたが、失敗品の可能性も否定できない。40は石英製の中形の尖頭器である。礫表皮の残る横長剥片の周縁から二次調整を加え、やや幅の広い「木葉形」の尖頭器に仕上げている。正面に礫表皮、裏面に主要剥離面を残している。出土地点から中期前葉～中葉の集落に伴うものと考えている。

4）石　　錐（41～65）

剥片の一部または全面に二次調整を加え、錐部を作出した石器である。錐部の多くには、磨耗痕が認められる。総数116点出土している。

分　　類　錐部の形状、つまみ部の形状、素材などから細分した。

A類（41～44）　錐部とつまみ部が明瞭に区分され、錐部が長いもの。

B類（45・46）　厚手で幅の狭い素材のほぼ全面に二次調整が施されるもの。形状は棒状となる。

C類（47～57）　錐部とつまみ部の境が不明瞭で緩やかに広がるもの。素材の形状からさらに細分した。

1類（47～51）　長さに対し幅の比率が小さいもの。錐部からつまみ部への開き角は小さい。

2類（52～57）　長さに対し幅の比率が大きいもの。錐部からつまみ部への開き角は大きい。

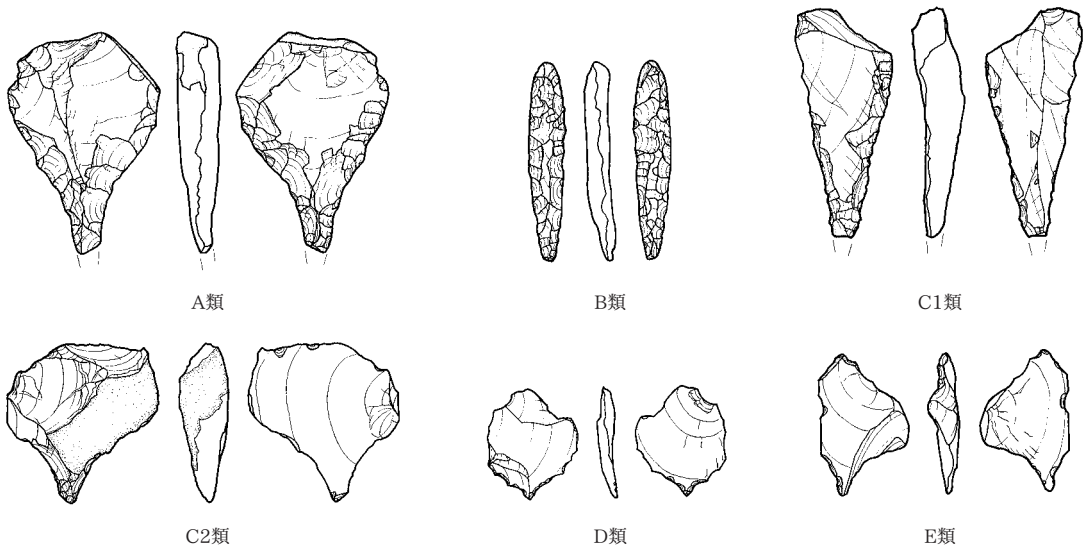
D類（58～61）　素材の端部に二次調整が加えられ、ピック状の短い錐部が作出されるもの。

E類（62～65）　素材の端部を錐部とするが、無加工または二次調整があってもごく一部に限られるもの。

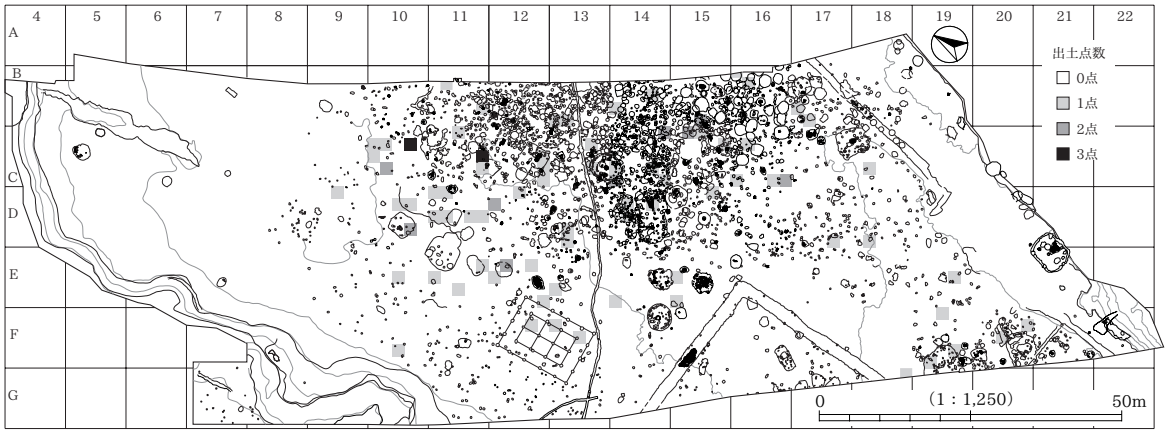
分類不可　破損品、破片で分類不可能なもの。

総数116点のうち、A類12点（10％）、B類3点（3％）、C1類27点（23％）、C2類44点（38％）、D類12点（10％）、E類16点（14％）、分類不可2点（2％）である。錐部とつまみ部の境が不明瞭なC類が約60％を占める。二次調整がていねいで、縄文時代の後期以降に多く出土するB類は少ない。

分　　布　10～17・B～Eと18～20・F～Gグリッドに分布は分かれる。前者は中期末葉～後期初



第29図　石錐分類図



第30図　石錐出土分布図

頭の集落跡の範囲であり、後者は中期前葉～中葉の集落跡の範囲であることから、多くはそれぞれの時期に所属するものと考えている。B類は縄文時代でも後期以降に所属すると推定されるが、1点（45）は後期中葉のSI228から出土している。

大きさ・重さ　総数の平均長4.6cm、平均幅3.1cm、平均厚1.0cm、平均重15.1gである。

分類別では分類基準にもあるように長さはD類が短く、幅はB類・C1類が狭く、厚さはB類・D類が薄くなる。重さはB類（平均4.2g）が最も軽く、次いでA類・D類（平均8.8g）、最も重いのはC2類（平均18.0g）である。

石　　材　総数116点のうち、頁岩42点（36％）、流紋岩27点（23％）、緑色凝灰岩25点（22％）、凝灰岩15点（13％）が多く用いられ、この4種の石材で94％を占める。在地産の硬質で緻密な石材である。

分類別ではC類は頁岩が多く用いられるものの、A・D・E類は多くなく、若干異なった石材選択が認められる。

石材／分類	頁岩	流紋岩	緑色凝灰岩	凝灰岩	鉄石英（赤）	メノウ	鉄石英（黄）	合計
A類	4	5	1	1			1	12
B類	1		1		1			3
C1類	11	4	7	3	1	1		27
C2類	21	11	7	4	1			44
D類	4	1	5	1	1			12
E類	1	5	3	6		1		16
不可		1	1					2
合計	42	27	25	15	4	2	1	116

第11表　石錐石材表

素　　材　総数116点のうち、縦長剥片41点、横長剥片51点、不明24点で、素材選択に大きな片寄りは見られない。分類別ではC1類は縦長剥片が多いのに対し、C2類は横長剥片が多い。分類基準に長さと幅の比率を入れたためと考えられる。他の分類は、全体的な傾向と同じである。

錐部断面形　総数116点のうち、菱形・菱形状のもの52点、三角形・三角形状のもの44点、台形状のもの15点である。

遺存状態　磨耗・摩滅による消耗は含まず、破損したものの集計である。完形89点、錐部が大きく欠損するもの5点、錐部先端が欠損するもの21点、つまみの一部が欠損するもの1点である。当然のこととはいえ、錐部先端の欠損が多い。

そ の 他　素材に折断を加えるものが12点認められた。つまみ部に多く認められ、折断によりつまみ部の形状を整えたものと推定される。

5）石　　匙（66～89）

抉りのあるつまみと刃部を有する剥片石器である。出土数は63点を数える。

分　　類　つまみ部を上、刃部を下にしたときの刃部の長さと幅の比較、刃部の位置で細分した。

A類（66～79）　刃部の長さが幅より大きいもの。いわゆる「縦形石匙」である。刃部は縦に長くなる。

1類（66～71）　刃部は両面調整または半両面調整のもの。

2類（72～76）　刃部は片面調整のもの。裏面は無調整で素材獲得時の剥離面を残す。

3類（77～79）　刃部は無調整、または断片的に一部が調整されているもの。つまみ部が作出されていることから石匙とした。

B類（80～82）　刃部の長さが幅とほぼ同じもの。刃部はA類に比べ縦に短くなり、底縁に付くものもある。

C類（83～85）　刃部の長さが幅より小さいもの。いわゆる「横形石匙」である。刃部は底縁に付く。

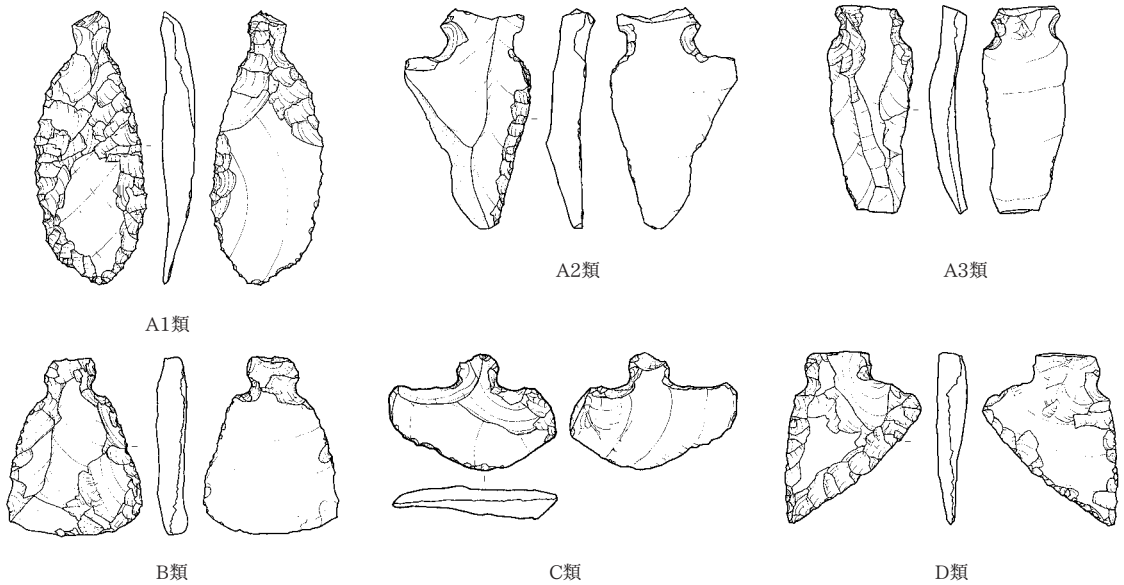
D類（86～89）　刃部の長さが幅とほぼ同じで、刃部はつまみ部に対し斜めになるもの。いわゆる「斜刃形石匙」である。

分類不可　刃部が破損し、分類できないもの。

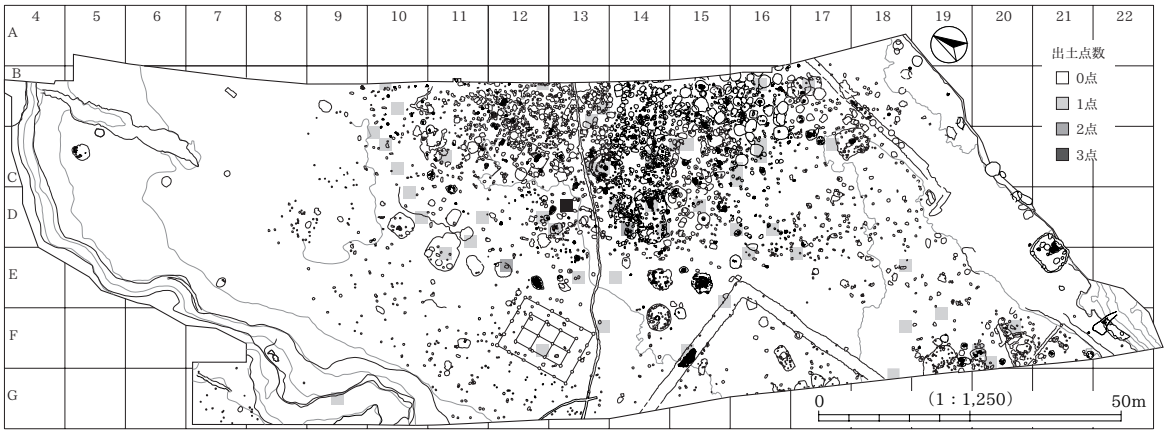
総数63点のうち、A1類18点（29％）、A2類13点（21％）、A3類6点（10％）、B類7点（11％）、C類5点（8％）、D類8点（13％）、分類不可6点（10％）である。縦形石匙のA類が60％を占め、横形石匙のC類が8％、斜刃形石匙のD類が13％となる。

分　　布　出土数が少なく希薄な分布であるものの、10～17・B～Eと18～20・F～Gグリッドに分布が分かれる。前者は中期末葉～後期初頭、後者は中期前葉～中葉の集落跡の範囲である。

分類別の分布では、二次調整の無い縦形石匙のA3類は、すべて中期末葉～後期初頭集落跡の出土であり、二次調整の簡略化とも推定されるが、出土数が少ないため断定できない。この他は分布に偏りは認められない。



第31図　石匙分類図



第32図　石匙出土分布図

大きさ・重さ　縦形石匙、横形石匙、斜刃形石匙と平面形で細分したため、分類ごとに大きさは変わってくる。A類は長さが長く（平均6.7cm）、幅が短い（平均3.3cm）。B類・C類は長さが幅よりやや長い程度であり、C類は長さ（平均4.8cm）と幅（平均4.7cm）がほぼ同じになる。重さは大きさを反映し、A類が重く、D類が軽い傾向にある。

石　　材　総数63点のうち、頁岩27点（43％）、緑色凝灰岩16点（25％）、凝灰岩9点（14％）、流紋岩5点（8％）で、この4種で90％を占める。なお、鉄石英（緑）1点は下層で使用された石材であり、下層からの紛れ込みと推定できる。

石材／分類	頁岩	緑色凝灰岩	凝灰岩	流紋岩	鉄石英（黄）	鉄石英（緑）	鉄石英（赤）	合計
A1類	8	5	2		2	1		18
A2類	8	2	1	1			1	13
A3類	3			3				6
B類	1	3	2		1			7
C類	2	1		1			1	5
D類	4	1	3					8
不可	1	4	1					6
合計	27	16	9	5	3	1	2	63

第12表　石匙石材表

分類別では、B類で頁岩が少なく、緑色凝灰岩・凝灰岩がやや多く使用されている以外、他はほぼ全体的傾向と同じ。硬質で緻密な在地石材を選択している。

素　　材　縦長剥片50点、横長剥片9点、不明4点である。横形石匙のC類で横長剥片がやや多く使用されている以外、縦長剥片が圧倒的に多く使用されている。67・68・74・76～79は良好な縦長剥片である。これらの一部には、山形県最上川中流域で中期中葉～後期前葉にかけて生産された「石刃状剥片」［会田2000］が搬入された可能性が高い。

遺存状態　完形品43点、破損品20点である。すべて刃部の破損であり、刃部が狭く長い縦形石匙のA類が圧倒的に多い。

そ の 他　石匙は一般的に主要剥離面の打点・打面側がつまみ部にあるが、刃部にあるものが6点存在し、うち4点（81・88）は底縁に存在する。

6）不定形石器（90～159）

剥片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や使用痕が認められる不定形な石器である。総数2,799点を数え、器種石器の中では敲磨石類に次いで多い。

分　　類　刃部形状の違いにより細分類した。刃部が2か所以上あり、それぞれの形状が異なる場合は、より主要と思われる刃部を優先した。

A類（90～98）　連続的な押圧剥離による滑らかで長い刃部をもつもの。片面・半両面調整のため、刃部断面形は片刃が主体となる。スクレイパー、掻・削器と呼称されていたものに相当する。

B類（99～108）　連続または連続状の剥離による鋸歯状の刃部をもつもの。片面・半両面調整のため、刃部断面形は片刃が主体となる。鋸歯縁石器、デンティキュレイトと呼称されていたものに相当する。

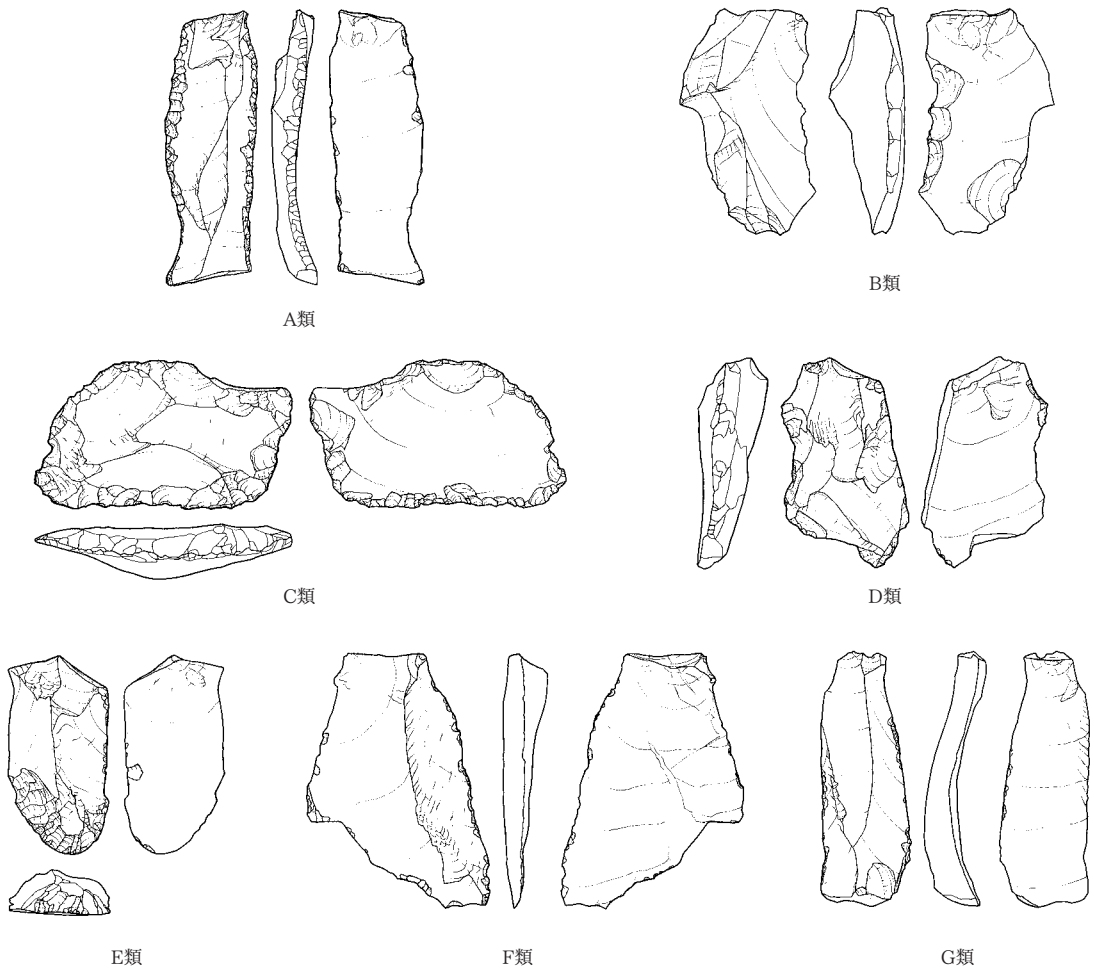
C類（109～118）　両面に連続または連続状の剥離のあるもの。両面調整のため両刃が主体となり、側面観がジグザグ状のものが多い。刃部の二次調整には①交互剥離のほか、②片面の連続剥離後に、一方の片面に連続剥離をするものがある。②はA類の刃部再生の可能性もあるが、明確に判断できないためC類に含めた。

D類（119～128）　抉入状の刃部をもつもの。抉入石器、ノッチと呼称されていたものに相当する。片面調整、両面調整のいずれの調整も存在するが、片面調整のものが多い。

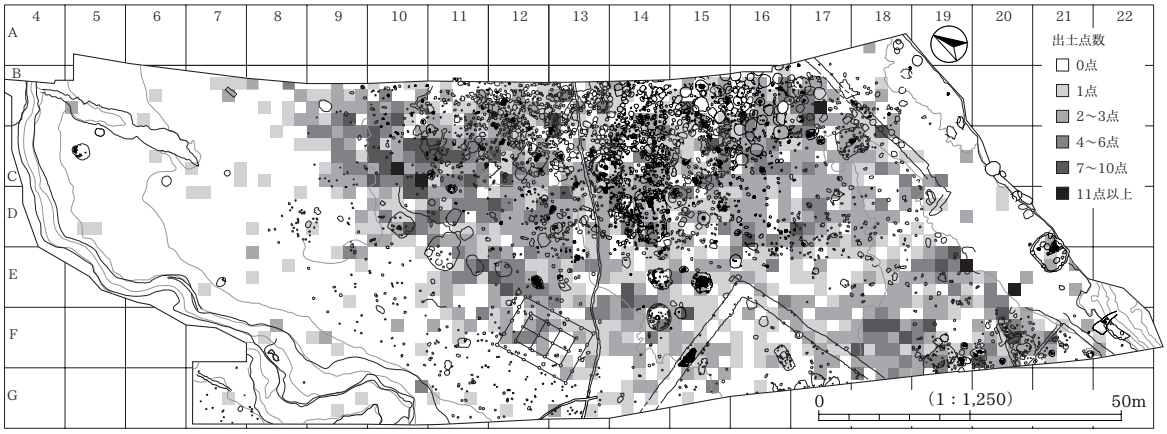
E類（129～138）　素材の端部に連続または連続状の剥離による刃部をもつもの。エンドスクレイパー、掻器と呼称されていたものを含む。A類が側縁から端部という刃部が長いのに対し、E類は刃部が比較的端部に限られる点で区別される。

F類（139～149）　不連続な剥離の刃部をもつもの。

G類（150～159）　明らかに刃部の二次調整が認められないものの、使用の結果と思われる刃こぼれ状の微細剥離・磨耗・光沢などの使用痕が認められるもの。



第33図　不定形石器分類図



第34図　不定形石器出土分布図

総数2,799点のうち、A類81点（3％）、B類263点（9％）、C類122点（4％）、D類311点（11％）、E類185点（7％）、F類1,198点（43％）、G類169点（6％）、分類不可470点（17％）である。不連続剥離の刃部をもつF類が半数弱を占める。分類不可のものも17％を占め、刃部の多様性が窺える。

分　　布　9～17・B～E、18～20・E～Gグリッドに分布が分かれる。前者は中期末葉～後期初頭の集落跡、後者は中期前葉～中葉の集落跡の範囲であり、その多くはそれぞれの集落に伴うものと推定される。なお分類別に分布の片寄りは認められず、全体的な分布傾向にほぼ一致する。

大きさ・重さ　小さいものから大きいものまで、軽いものから重いものまで多様な大きさや重さを示す。分類ごとの平均計測値は第13表のとおりである。一概に比較できないが、B・C類が大きく重く、E類が小さく軽い傾向にある。

計測値／分類	平均長(cm)	平均幅(cm)	平均厚(cm)	平均重(g)
A類	5.8	4.2	1.2	33.2
B類	5.9	5.1	1.7	57.2
C類	5.9	5.0	1.7	53.0
D類	5.2	4.6	1.5	36.0
E類	4.8	3.8	1.3	27.1
F類	5.6	4.6	1.4	39.9
G類	5.4	4.3	1.2	30.3

第13表　不定形石器平均計測値表

石　　材　出土数が多いため、分類ごとに50点、全体で350点を対象とした。全体的に見ると緑色凝灰岩104点（30％）、頁岩100点（29％）、流紋岩90点（26％）、凝灰岩43点（12％）となり、この4種で実に97％を占める。在地産の硬質で緻密な石材を選択している。

石材／分類	緑色凝灰岩	頁岩	流紋岩	凝灰岩	鉄石英(赤)	鉄石英(黄)	メノウ	合計
A類	15	20	8	5	1	1		50
B類	13	8	17	11	1			50
C類	14	14	16	3	2	1		50
D類	18	16	11	5				50
E類	18	9	14	5	1	2	1	50
F類	12	16	13	7	2			50
G類	14	17	11	7		1		50
合計	104	100	90	43	7	5	1	350

第14表　不定形石器石材表

素　　材　分類ごとに50点、全体で350点を対象とした。全体的に見ると縦長剥片212点（61％）、横長剥片91点（26％）、扁平礫3点（1％）、両極剥離痕のある剥片2点（1％）、素材不明42点（12％）である。素材が分かるものをみる限り、縦長剥片が極めて多い。分類別ではA・G類が縦長剥片の比率が76％で多く、C・D類が46％で縦長剥片の占める比率は低くなる。

なお、91～93・100・101・139・143・153・154は石匙の頁でも触れたように「石刃状剥片」に近似するものである。この中でも頁岩製の素材は、山形県最上川中流域より搬入された可能性が高い。

二次調整部位　素材により二次調整部位は大きく異なる。縦長剥片では片側縁及び両側縁に二次調整が施され、横長剥片では底縁に二次調整が施される。

折　　断　分類ごとに50点、全体で350点を対象とした。全体では81点に折断が認められた。分類別ではA類17点、B類11点、C類10点、D類12点、E類9点、F類14点、G類8点である。

7）両極剥離痕のある石器（160～179）

両極技法によると推定される両極剥離痕のある石器である。総数1,043点を数える。

分　　類　素材と刃部形状より細分した。

A類（160～169）　剥片素材のもの。

1類（160～164）　2個一対の刃部をもつもの。

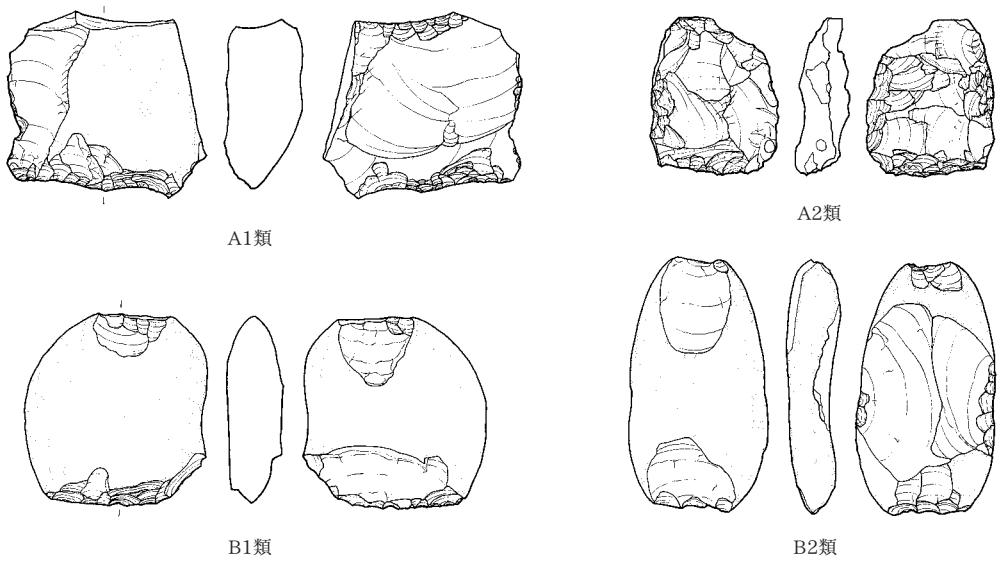
2類（165～169）　4個二対の刃部をもつもの。

B類（170～179）　礫素材のもの。

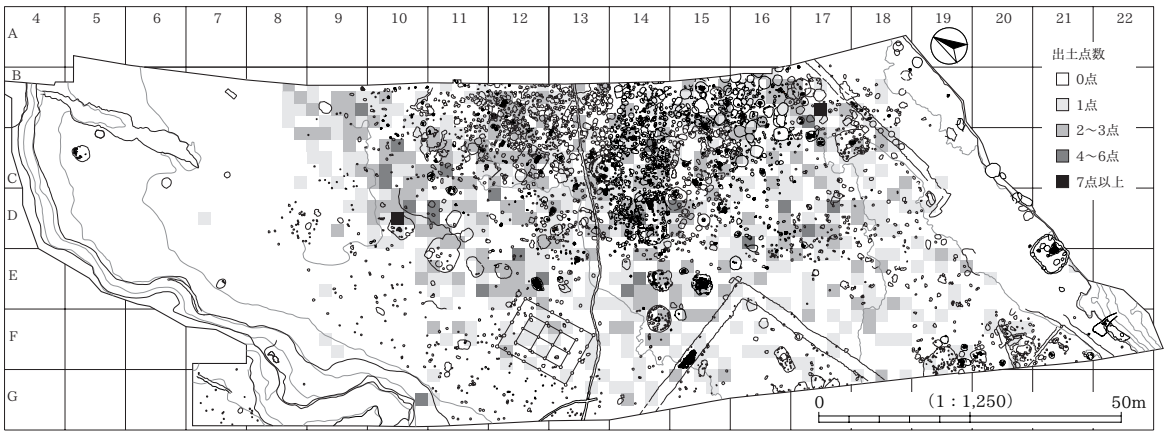
1類（170～174）　2個一対の刃部をもつもの。

2類（175～179）　4個二対の刃部をもつもの。

総数1,043点のうち、A1類568点（54％）、A2類184点（18％）、B1類188点（18％）、B2類103



第35図　両極剥離痕のある石器分類図



第36図　両極剥離痕のある石器出土分布図

点（10％）である。剥片素材のものが72％を占め、礫素材のものが28％である。

分　　布　9～18・B～Eグリッドに半円状に分布する。この範囲は中期末葉～後期初頭の集落跡の範囲に相当する。他器種のように中期前葉～中葉の集落跡（主に18～20・F～Gグリッド）への著しい集中は見られない。

大きさ・重さ　分類別の大きさと重さの平均測定値は、第15表のとおりである。礫素材のB類が、剥片素材のA類より、大きく重い傾向にある。

分類＼計測値	平均長（cm）	平均幅（cm）	平均厚（cm）	平均重（g）
A1類	3.7	3.3	1.4	19.9
A2類	4.1	3.4	1.5	24.0
B1類	6.4	4.3	1.7	63.9
B2類	6.0	4.5	1.5	52.7

第15表　両極剥離痕のある石器平均計測値表

石　　材　全体的に見ると頁岩263点（25％）、緑色凝灰岩231点（22％）、凝灰岩230点（22％）、流紋岩190点（18％）が多く使用され、この4種で87％を占める。これ以外は多種類の石材を少数選択している。

分類別に見るとA類とB類では石材選択に大きな違いが認められる。剥片素材のA類は頁岩・緑色凝灰岩・流紋岩が多く、この他凝灰岩・メノウ・鉄石英（赤・黄）・チャートも一定量認められる。これに対し、礫素材のA類は、凝灰岩が極めて多く使用され、この他頁岩・緑色凝灰岩・流紋岩・安山岩・輝緑岩が一定量認められる。A類は硬質で緻密な石材、B類はA類に比べやや軟質な石材を選択する傾向にある。

石材＼分類	頁岩	緑色凝灰岩	凝灰岩	流紋岩	メノウ	鉄石英（黄）	チャート	安山岩	輝緑岩	鉄石英（赤）	黒曜石	石英	泥岩	粘板岩	鉄石英（緑）	安山岩質凝灰岩	花崗岩	砂岩	不明	合計
A1類	154	167	44	132	22	16	15			10	4	4								568
A2類	80	47	6	38	3	3	1			5					1					184
B1類	23	15	100	16		1	1	12	12				1	1		1	1	1	3	188
B2類	6	2	80	4			1	4	4				1	1						103
合計	263	231	230	190	25	20	18	16	16	15	4	4	2	2	1	1	1	1	3	1043

第16表　両極剥離痕のある石器石材表

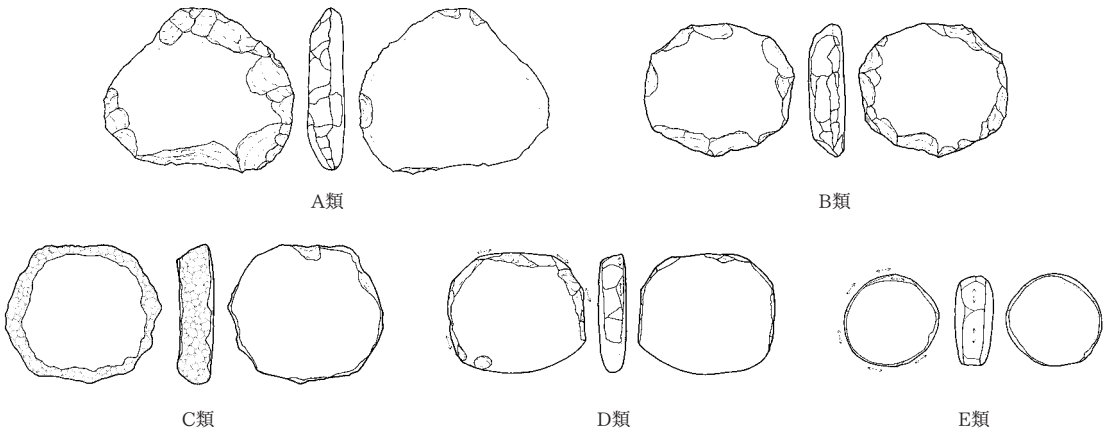
8）三脚石器（180～183）

両面調整で平面形は各辺が内湾する三角形または三角形を呈し、裏面が抉れ三脚状になる石器である。出土数は少なく7点である。このうち5点は18F～20Fから出土し、すべて中期前葉～中葉の集落跡に伴う石器である。石材は緑色凝灰岩5点、流紋岩2点、頁岩1点で、在地産の硬質で緻密な石材を選択している。遺存状態は完形5点、一脚欠損2点で、完形品の平均長3.7cm、平均幅4.6cm、平均厚1.4cm、平均重20.5gの計測値を示す。

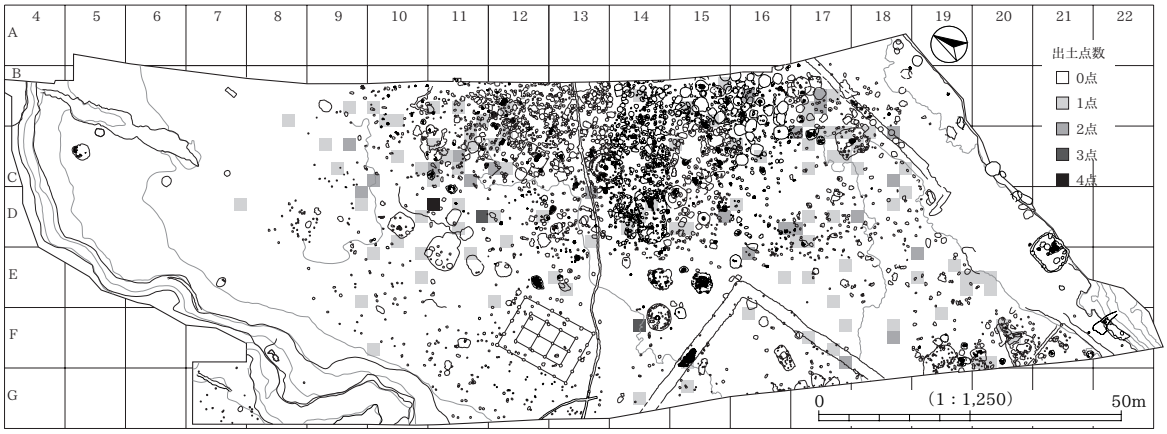
9）板状石器（円盤状石器）（184～207）

板状石器は「扁平礫や板状の剥片を素材とし、裏面から正面への急角度の片面加工が施され、裏面が平板状の石器」［髙橋1992］とされる。しかし、本遺跡では、これ以外に両面調整のもの、周縁に敲打が見られるものや研磨が見られるものなど東北地方では縄文時代遺跡から普遍的に出土するいわゆる「石製円盤・円盤状石製品」［佐々木1988］などと呼称されるものも出土している。したがって、これらを一括りに板状石器（円盤状石器）として取り扱った。総数178点出土している。

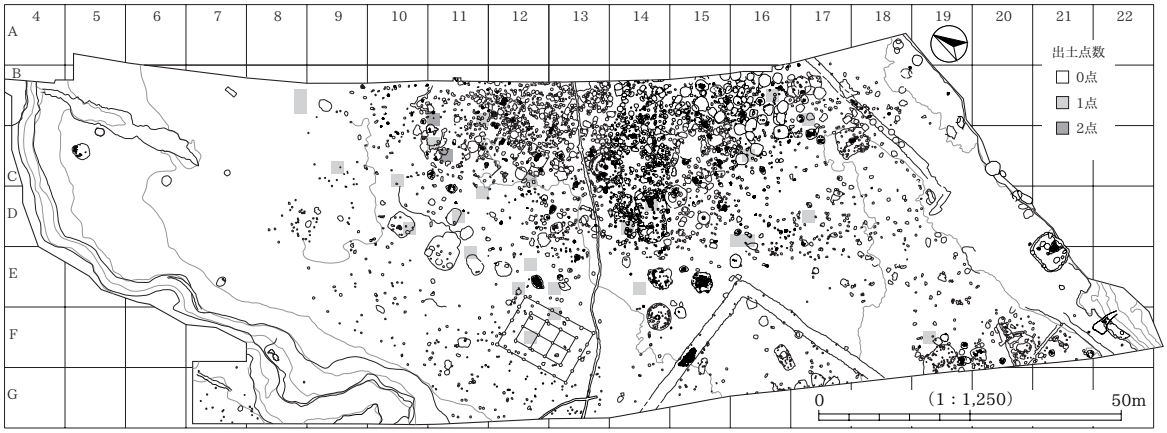
分　　類　他の遺跡例においても普遍的に出土し、しかも出土数が多いため、実用的な石器と推定している。したがって、製作（刃部再生を含む）・使用のいずれによるものか判断し難いが、周縁の状態により細分類した。なお、素材はいずれも扁平礫または板状の割石（剥片）である。



第37図　板状石器（円盤状石器）分類図



第38図　板状石器（円盤状石器）A・B・C類出土分布図



第39図　板状石器（円盤状石器）D・E類出土分布図

A類（184～187）　主に片面調整が施されている。

B類（188～191）　主に両面調整が施されている。

C類（192～196）　主に敲打調整が施されている。

D類（197～201）　剥離や敲打調整後に部分的に研磨されているもの。

E類（202～207）　研磨がほぼ全周する。

分類別ではA類14点（8％）、B類47点（26％）、C類85点（48％）、D類21点（12％）、E類11点（6％）で、C類が1/2弱、次いでB類が1/4を占める。

分　　布　出土数がそれ程多くないためやや希薄であるが、A～C類は9～18・B～E、17F～20Fグリッドに多く分布する。しかし、D・E類は1点を除き、8～17・B～Eに分布する。出土数が少ないため、断定できないが、D・E類は中期末葉～後期初頭の集落跡に伴う可能性が高い。

大きさ・重さ　分類別の平均計測値は第17表のとおりである。A～C類が大きく重く、D・E類が小さく軽い傾向にある。C類が最も大きく重く、E類が最も小さく軽い。重さで比較すると、C類はE類の3倍以上の重さとなる。

分類＼計測値	平均長(cm)	平均幅(cm)	平均厚(cm)	平均重(g)
A類	5.4	6.4	1.5	70.0
B類	5.3	6.5	1.5	69.4
C類	5.4	6.8	1.9	87.5
D類	4.8	5.5	1.2	39.9
E類	4.2	4.6	1.1	24.2

第17表　板状石器（円盤状石器）平均計測値表

石　　材　全体的に見ると178点のうち、凝灰岩88点（49%）で約半数を占める。ついで流紋岩25点（14%）、安山岩17点（10%）、輝緑岩15点（8%）、緑色凝灰岩14点（8%）となる。やや軟質でいくらかざらついた石材を選択している。

分類＼石材	凝灰岩	流紋岩	安山岩	輝緑岩	緑色凝灰岩	頁岩	班レイ岩	石英斑岩	泥岩	砂岩	ひん岩	合計
A類	2	2	3	2	2	1			1		1	14
B類	20	10	7	1	3	5	1					47
C類	44	11	5	10	5	3	4	2		1		85
D類	13	1	2	2	3							21
E類	9	1			1							11
合計	88	25	17	15	14	9	5	2	1	1	1	178

第18表　板状石器（円盤状石器）石材表

分類別ではA類が凝灰岩に集中せず多種類の石材を選択するのに対し、B～E類は全体的な石材選択傾向にほぼ一致する。

そ の 他　正裏面のいずれかまたは両面に磨痕のあるものが32点認められた。内訳はA類2点、B類8点、C類9点、D類6点、E類7点である。分類別の出土数と比較すると、D・E類が多い。周縁以外に正裏面も使用されたものと推定される。

10）篦状石器（打製石斧）（208～220）

中～大形の扁平礫や剥片の両側縁に二次調整を加え、篦状（斧状）に仕上げた石器である。打製石斧とは明確に区分できないため、一括りに篦状石器（打製石斧）として取り扱った。総数30点出土している。

分　　類　平面形から細分した。

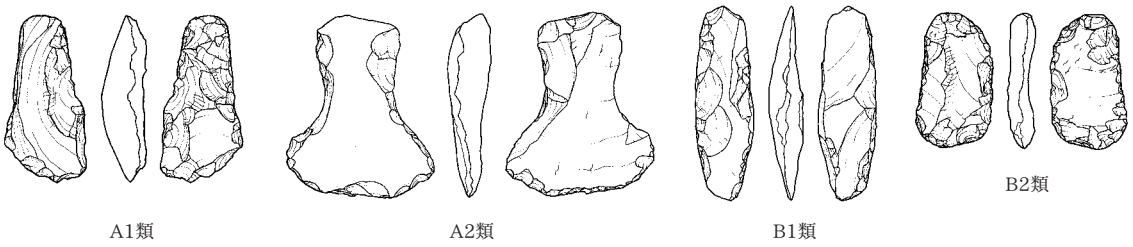
A類（208～216）　刃部幅が広く、基部幅が狭いもの。いわゆる「撥形」と呼称されるが、典型的なものは少ない。

1類（208～212）　刃部から基部への側縁ラインが外湾状ないしは直線状のもの。

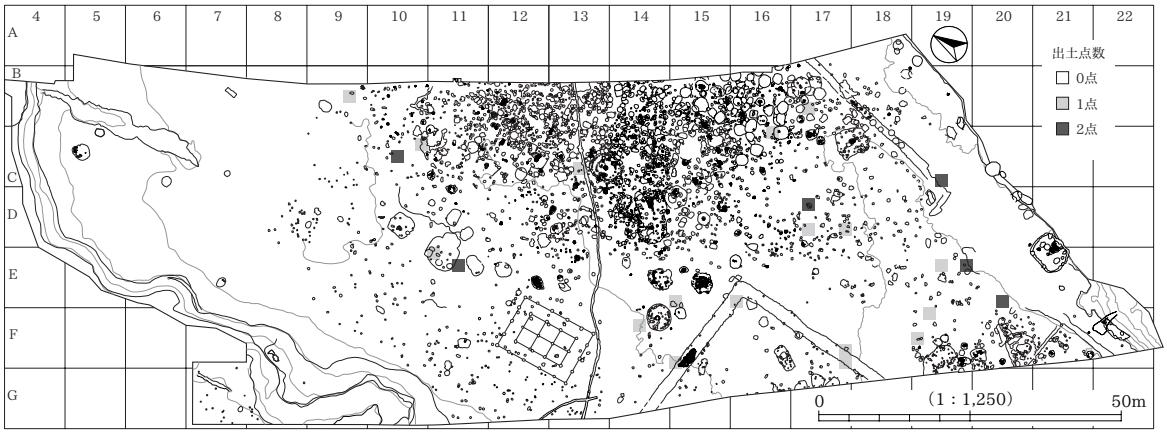
2類（213～216）　刃部から基部への側縁ラインが内湾状のもの。典型的な「撥形」となる。

B類（217～220）　刃部幅と基部幅がほぼ同じもの。いわゆる「短冊形」と呼称されるが、典型的なものは少ない。

1類（217・218）　刃部幅と基部幅がともにやや狭く、細身のもの。



第40図　篦状石器（打製石斧）分類図



第41図　篦状石器（打製石斧）出土分布図

2類（219・220）　刃部幅と基部幅がともにやや広く、太身のもの。

分類不可　破損品・破片のため、分類できないもの。

出土数30点のうち、A1類11点、A2類7点、B1類3点、B2類3点、分類不可6点で、撥形のA類が18点（60％）を占める。

分　　布　出土数が少ないため、9～20・B～Fグリッドに散漫に分布する。

大きさ・重さ　A類はB類に比べ、長さがやや短く、幅が広くなる。重さもやや軽くなる。分類基準の撥形・短冊形を反映した結果と推定される。

石　　材　全体的に見ると流紋岩12点（40％）、頁岩7点（23％）、緑色凝灰岩5点（17％）、輝緑岩3点（10％）となる。在地産の硬質で緻密な石材を選択している。

素　　材　全体では縦長剥片15点、横長剥片6点、扁平礫4点、不明5点である。縦長剥片が半数を占める。分類別ではA2類が扁平礫の1点を除き、縦長剥片で占められる。

刃部断面形　全体では片刃14点、両刃10点、不明6点である。片刃が約半数を占める。

計測値／分類	平均長(cm)	平均幅(cm)	平均厚(cm)	平均重(g)
A1類	8.7	5.1	2.2	99.1
A2類	8.4	5.6	1.8	82.6
B1類	12.5	3.3	2.0	106.0
B2類	8.7	4.6	2.1	110.0

第19表　篦状石器（打製石斧）平均計測値表

石材／分類	流紋岩	頁岩	緑色凝灰岩	輝緑岩	凝灰岩	ホルンフェルス	不明	合計
A1類	5	3	1		1		1	11
A2類	3	1	2			1		7
B1類	1	2						3
B2類		1	1	1				3
不可	3		1	2				6
合計	12	7	5	3	1	1	1	30

第20表　篦状石器（打製石斧）石材表

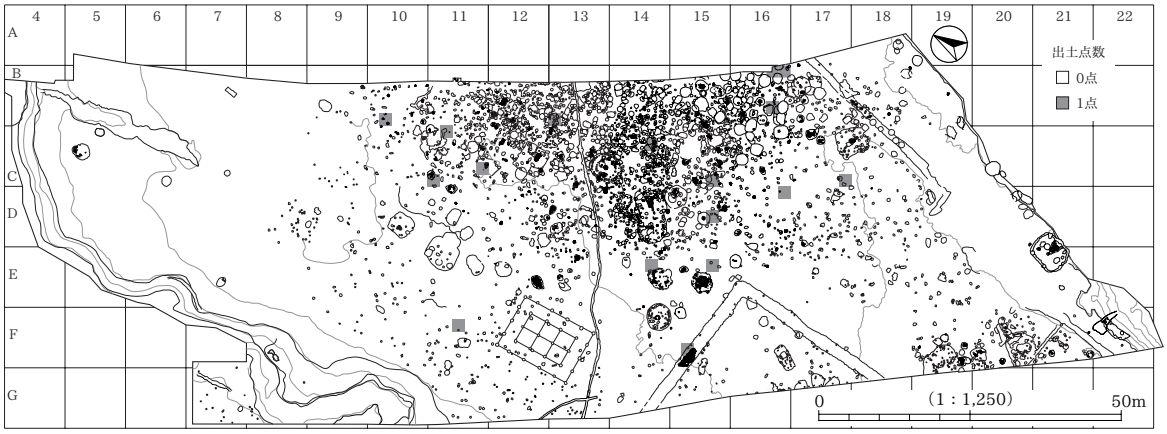
11）小形磨製石斧（221～237）

磨製石斧、磨製石斧失敗品は総数181点出土している。このうち長さ7cm未満の磨製石斧を分離し、小形磨製石斧とした。20点出土[1]している。

分　　布　出土数が少ないため10～17・B～Eグリッドに希薄に分布する。中期末葉～後期初頭の集落跡の範囲とほぼ一致する。

大きさ・重さ　完形・略完形の12点を対象とした。平均長5.2cm、平均幅3.0cm、平均厚1.3cm、平均重31.9gを測る。

石　　材　不明の1点を除いた19点を対象とした。内訳は凝灰岩6点（32％）、蛇紋岩4点（21％）、輝緑岩3点（16％）、頁岩3点（16％）、緑色凝灰岩2点（11％）、ひん岩1点（5％）である。搬入品である蛇紋岩の比率はそれ程高くない。



第42図　小形磨製石斧出土分布図

刃部断面形　刃部が遺存する13点のすべてが両刃である。

遺存状態　完形・略完形品は12点で、基端が欠損するもの2点、刃部が欠損するもの5点、縦に剥落しているもの1点である。

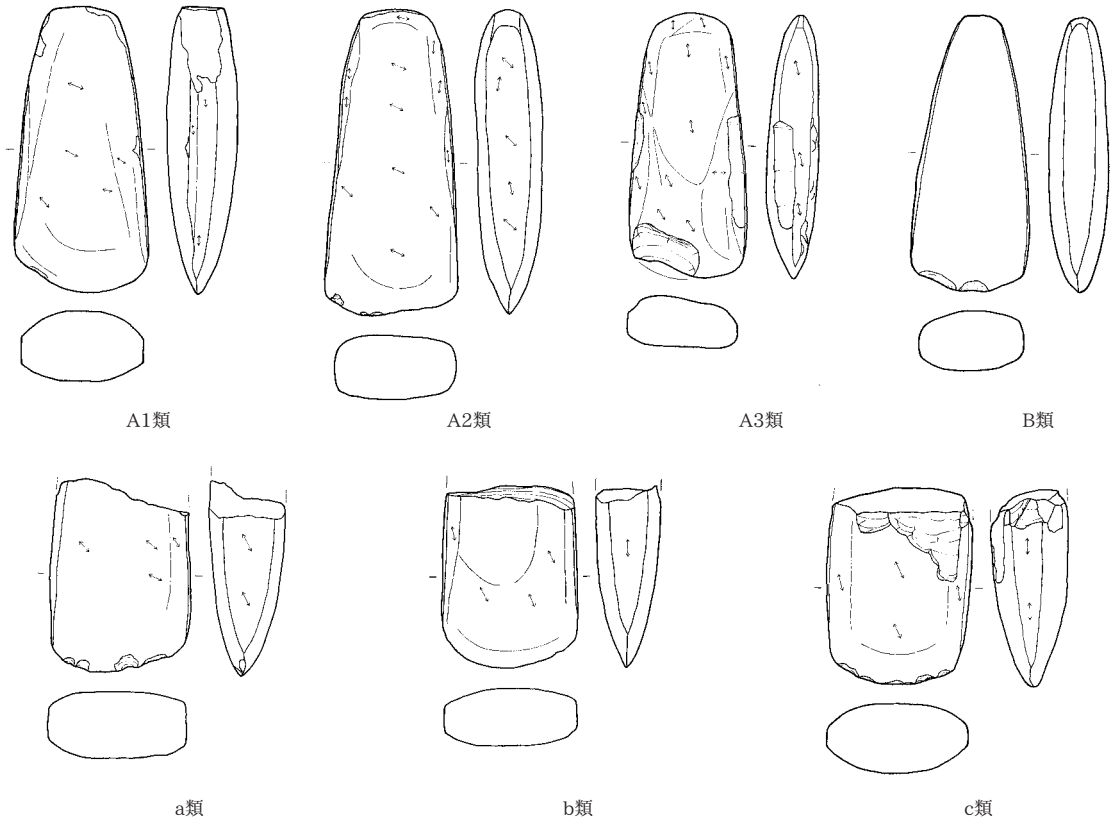
そ の 他　228～230は磨製石斧の破損品を再利用し、小形磨製石斧としている。このうち2点は蛇紋岩である。

12）磨 製 石 斧（238～271）

「剥離・敲打を基本に成形され、研磨で仕上げられた一端に刃部を有する斧形の磨製石器」［滝沢ほか2002］である。総数147点出土している。

分　　類　出土した磨製石斧は完形品が極めて少なく、破損品が多く、遺存部は刃部に比べ基部が多い。したがって、最も多く遺存している基部の形状をもとに分類した。なお、小形磨製石斧の項でも触れたように長さ7cm未満のものは、小形磨製石斧として磨製石斧と区分した。

1）掲載していないが1点のみ、長さ8.3cmのものが含まれている。幅が2.7cmの細身で、中～大形磨製石斧とも異なるため、小形磨製石斧に含めた。



第43図　磨製石斧分類図

分類は基部幅や刃部から基部へのすぼまり方、基部の平面形・断面形、基端の平面形から細分した。

A類（238～259）　基部幅が広いもの。刃部が遺存しないものも含め、刃部から基部へのすぼまり方は弱い。

1類（238～241）　基部平面形が台形状を呈し、基端と側面の稜がはっきりしているもの。基部の縦位断面形は台形状または「コ」字状、基端の平面形は長方形になる。

2類（242～253）　基部平面形が跳び箱状または隅丸方形状を呈し、基端と側面の稜はやや緩くなるもの。基部の縦位断面形は隅丸方形状、基端の平面形は隅丸長方形になる。

3類（254～259）　基端は半円状または孤状を呈し、基端と側面の稜が見られないもの。基端の縦位断面形は半円状または尖頭状、基端の平面形は線状になる。

B類（260～262）　基部幅が狭いもの。刃部が遺存しないものも含め、刃部から基部へ強くすぼまる。いわゆる「撥形」を呈するものである。

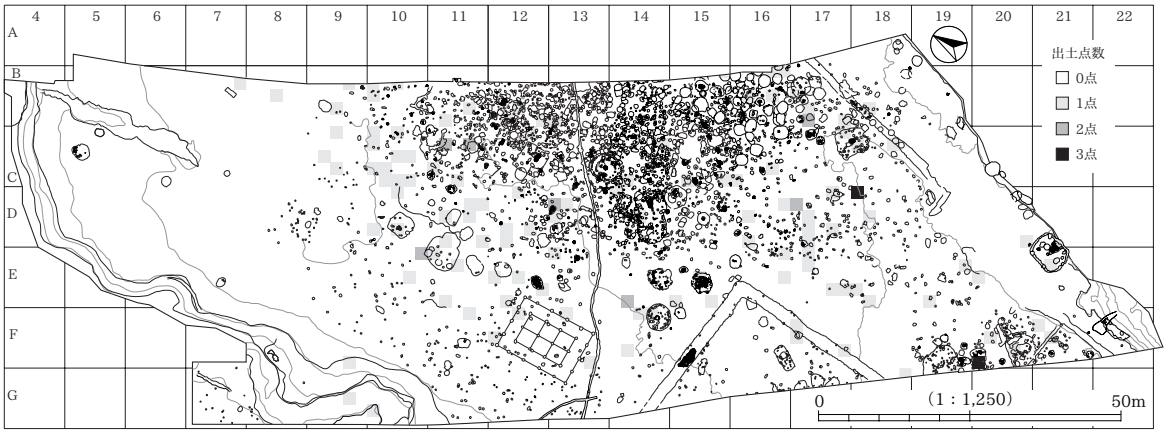
また、基部が遺存していないものも相当数認められ、これについては側面と正裏面の稜の状態により細分した。

a類（263～265）　側面と正裏面の稜がはっきりし、断面形は長方形を呈する。

b類（266～268）　側面と正裏面の稜がやや緩く、断面形は隅丸長方形を呈する。

c類（269～271）　側面と正裏面の稜が見られず、断面形は楕円形または長楕円形状を呈する。

出土数147点のうち基部が遺存するものは89点であり、A1類11点、A2類51点、A3類20点、B類7点である。基部が遺存していないものは49点であり、a類16点、b類29点、c類4点である。分類不



第44図　磨製石斧出土分布図

可の９点は破片資料で、磨製石斧と判断できるだけのものである。基部が遺存するものは基部幅が広く、刃部から基部へのすぼまり方が弱いものである。また、Ａ類の中では基端と側面、正裏面の稜はやや緩いものが多い。基部が遺存しないものでは、側面と正裏面の稜が緩いものが多い。

側面と正裏面をみる限り、基部の有無に関わらず、側面と正裏面の稜が緩いものが多く、同様の傾向である。

分　　布　全体的に見ると９～18・Ｂ～Ｅ、20Ｆグリッドにやや多くの分布が見られる。前者は中期末葉～後期初頭の集落跡、後者は中期前葉～中葉の集落跡に相当する。なお、分類別では明確な分布の片寄りは認められなかった。

大きさ・重さ　完形・略完形・接合完形を対象とした。対象数はA1類２点、A2類16点、A3類２点、B類３点である。A2類以外は対象数が少ない。A2類は他の分類に比べやや小さく軽いものの、他の分類は対象数が少なく明確でない。

計測値／分類	平均長(cm)	平均幅(cm)	平均厚(cm)	平均重(g)
A1類	10.8	5.1	2.6	225.6
A2類	9.9	4.6	2.2	153.4
A3類	12.0	4.8	2.4	247.0
B類	12.0	4.9	2.6	271.2

第21表　磨製石斧平均計測値表

石　　材　147点のうち、輝緑岩69点（47％）が最も多く、次いで蛇紋岩27点（18％）、斑レイ岩12点（8％）となる。この他多種類の石材が使用されている。輝緑岩・斑レイ岩が多く、搬入品の蛇紋岩が少ないのは、蛇紋岩製磨製石斧の生産地（糸魚川地方）に遠いことと、輝緑岩・斑レイ岩製磨製石斧の生産地（安田町、新発田市方面）に近いことによる。

石材／分類	輝緑岩	蛇紋岩	斑レイ岩	ホルンフェルス	ひん岩	安山岩	頁岩	緑色凝灰岩	閃緑岩	凝灰岩	粘板岩	石英斑岩	不明	合計
A1類	5	3	1						1		1			11
A2類	24	9	4	3	2	1	4		2	1		1		51
A3類	9	1	2	2	1	1	1			1	1		1	20
B類	5	1	1											7
a類	9	2	3	1	1									16
b類	16	8		1	3			1						29
c類	1		1			2								4
不可		3		1		1		3					1	9
合計	69	27	12	8	7	5	5	4	3	2	2	1	2	147

第22表　磨製石斧石材表

刃部断面形　刃部が遺存するものをみる限り、すべて両刃である。

遺存状態　分類基準とも多少関係するが、147点のうち完形・略完形21点、刃部を欠くもの68点、基部を欠くもの38点、刃部と基部を欠き胴部が遺存するもの３点、破片15点、接合完形２点である。基部

が遺存するものが、刃部が遺存するものより約1.8倍多い。このことは遺跡外で使用され破損した場合は、柄に装着された基部側がもち帰られたものと考えられる。なお、刃部破片も相当数認められることから、遺跡内でも頻繁に使用されたと推定できる。

基端敲打　製作時の痕跡とは別に基端が敲打されているかどうかである。基端の状態が分かる97点のうち基端が敲打されているもの55点（57％）、敲打されていないもの42点（43％）である。このことから磨製石斧が伐採具のほか、楔としても使用されたものと思われる。

そ の 他　238～240・246～248・257～260などのように成形・製作時の敲打痕が残るものが多く認められた。敲打段階の終了した時点で、磨製石斧の成品として流通したものも存在した可能性が高い。

13）磨製石斧失敗品

磨製石斧の敲打段階で製作を断念（失敗）したものである。図示していないが15点抽出した。破損していないもの４点、破損しているもの11点である。破損しているもので２点は接合する。

破損していない４点の平均長18.2cm、平均幅9.2cm、平均厚5.3cm、平均重1,415gである。磨製石斧成品に比べ大きく重い。特に厚みが厚く、素材の厚さを減じていないことが失敗の要因と推定できる。また製作工程をみる限り、剥離成形段階での成形が稚拙である。破損している11点をみるとほぼ中央部で破損したもの９点、刃部が破損したもの２点である。

９～19・Ｂ～Ｅグリッドに散漫に分布し、中期末葉～後期初頭の集落跡の範囲に一致する。したがって、磨製石斧の生産は本遺跡では中期末葉以降となる。石材は輝緑岩10点、斑レイ岩２点、ホルンフェルス・凝灰岩各１点である。輝緑岩・斑レイ岩の選択は、阿賀野川以北の磨製石斧生産の石材選択［髙橋1999］に共通する。

本遺跡では15点の磨製石斧が出土したものの、その製作は稚拙で、成品とされた磨製石斧とは大きく異なる。自家消費的な生産だったものと推定できる。

14）石　　錘（272～280）

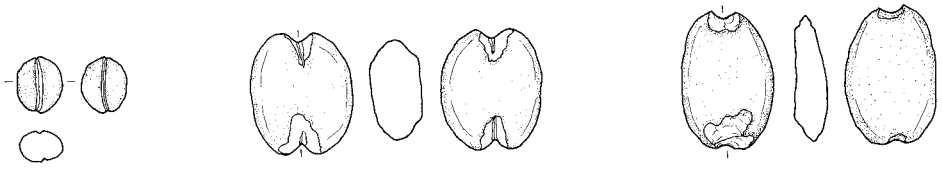
扁平礫の両端を剥離・敲打・擦りにより、抉りが付けられたものである。総数38点を数える。

分　　類　形態により細分した。

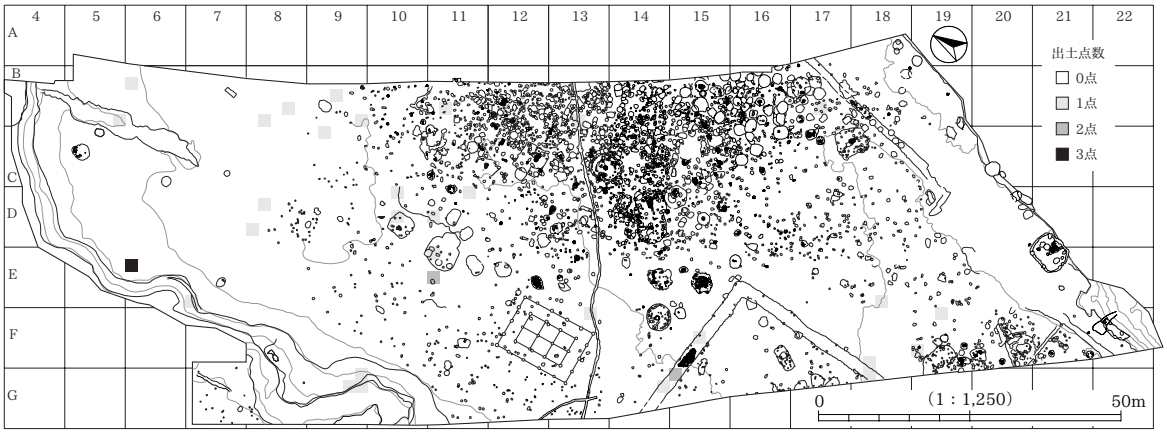
Ａ類（272）　有溝石錘で、溝が長軸を一周するもの。渡辺氏の分類［渡辺1984］の有溝石錘第１類Ａ種に相当する。

Ｂ類（273・274）　切目石錘で、長軸の両端に敲打した後、擦りにより切目を入れたもの。渡辺氏の分類［渡辺前掲］の切目石錘Ａ種に相当する。

Ｃ類（275～280）　礫石錘で、扁平礫の両端に剥離・敲打により抉りが付けられるもの。



第45図　石錘分類図



第46図　石錘出土分布図

分類＼計測値	平均長(cm)	平均幅(cm)	平均厚(cm)	平均重(g)
A類	2.8	2.5	1.7	10.0
B類	6.8	5.3	2.4	80.0
C類	9.8	8.3	2.6	373.9

第23表　石錘平均計測値表

分類＼石材	凝灰岩	安山岩	緑色凝灰岩	流紋岩	輝緑岩	頁岩	砂岩	ひん岩	合計
A類	1								1
B類	2								2
C類		4	1				1		6
不可	14	5	4	3	1	1		1	29
合計	17	9	5	3	1	1	1	1	38

第24表　石錘石材表

総数38点のうち、A類1点（3％）、B類2点（5％）、C類35点（92％）で、C類が圧倒的に多い。

分　　布　A・B類が3点しか出土していないため、C類の分布傾向となる。大きく深いSD127、調査区西側の沢A、8～11・B～Eグリッドにやや多く分布し、これまでの他器種と分布が異なる。これらの遺構やグリッドは、下層の遺跡と重複したり、基本層序が薄かったりしているところである。C類は下層からの紛れ込みの可能性が高い。

大きさ・重さ　完形を対象とした。対象数はA類1点、B類2点、C類28点である。C類以外は対象数が少ない。大きさ・重さの平均値は、A・B類が小さく軽い傾向にある。C類は大きさ・重さに様々なものがあるが、一般的にA・B類より大きく重い傾向にある。

石　　材　全体的に見ると凝灰岩17点（45％）、安山岩9点（24％）、緑色凝灰岩5点（13％）、流紋岩3点（8％）となる。やや軟質で加工しやすい在地の石材が選択されている。A・B類は3点とも凝灰岩である。

遺存状態　38点のうち、31点（82％）が完形である。加工が少なく、壊れにくい石器といえる。

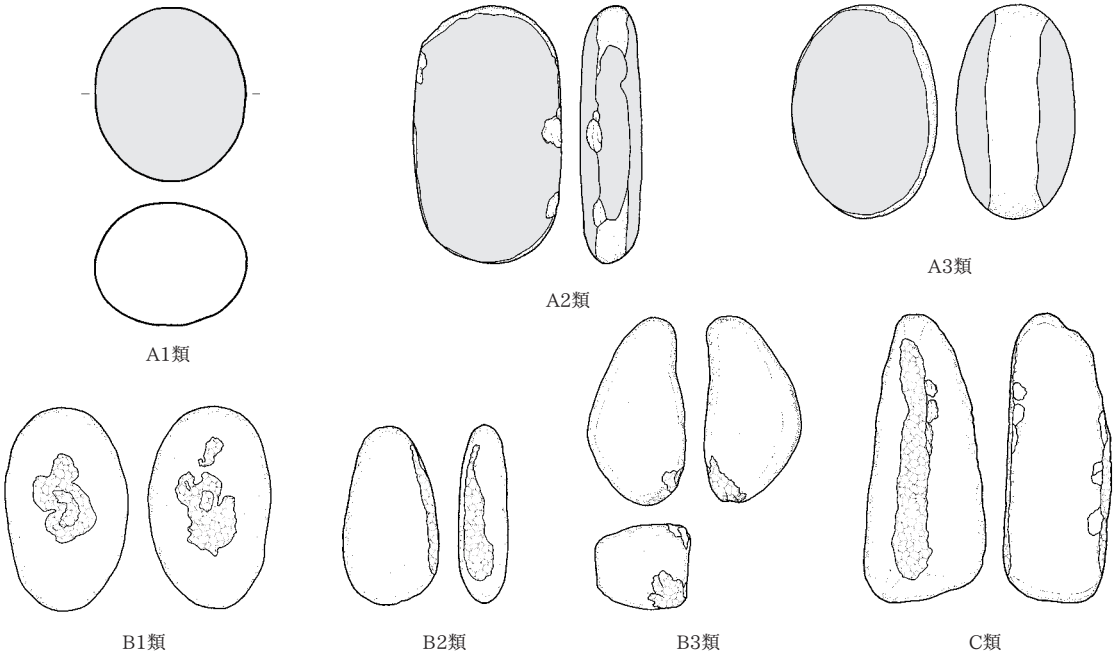
そ の 他　分類と時期的関係を見ると、A類は後期中葉、B類は中期末葉～後期初頭［渡辺前掲］、C類は本遺跡の下層の類例から前期前葉～中葉の所産と推定される。

15）敲 磨 石 類（281～356）

片手ないしは両手で把持できる大きさの礫の表面に、使用の結果と推定される敲打痕や磨痕が認められる石器である。凹痕は敲打痕の集中と理解し、敲打痕に含めた。総数3,479点を数え、器種石器の中で最も多く出土し、40％を占める。

分　　類　使用痕の種類、使用部位等により細分した。

A類（281～318）　礫面のいずれかに磨痕が認められるもの。磨痕のほかに敲打痕も認められるものもある。従来、いわゆる「磨石」と呼称されていたものを含む。



第47図　敲磨石類分類図

1類（281～287）　正裏面・側面・端部のいずれにも磨痕が認められる。礫の形状は一般的に球形・楕円球形を呈する。

2類（288～294）　正裏面・側面に磨痕は認められるが、端部には認められない。礫の形状は一般的に石鹸形を呈する。

3類（295～318）　正裏面に磨痕は認められるが、端部には認められない。礫の平面形は一般的に円形・楕円形を呈する。

B類（319～355）　礫面のいずれにも磨痕が認められず、いずれかに敲打痕が認められるものである。

1類（319～337）　正裏面のいずれかに敲打痕があるもの。側面や端部にも敲打痕があるものもある。礫の平面形は一般的に円形～長楕円形を呈する。従来、いわゆる「凹石」と呼称されていたものを含む。

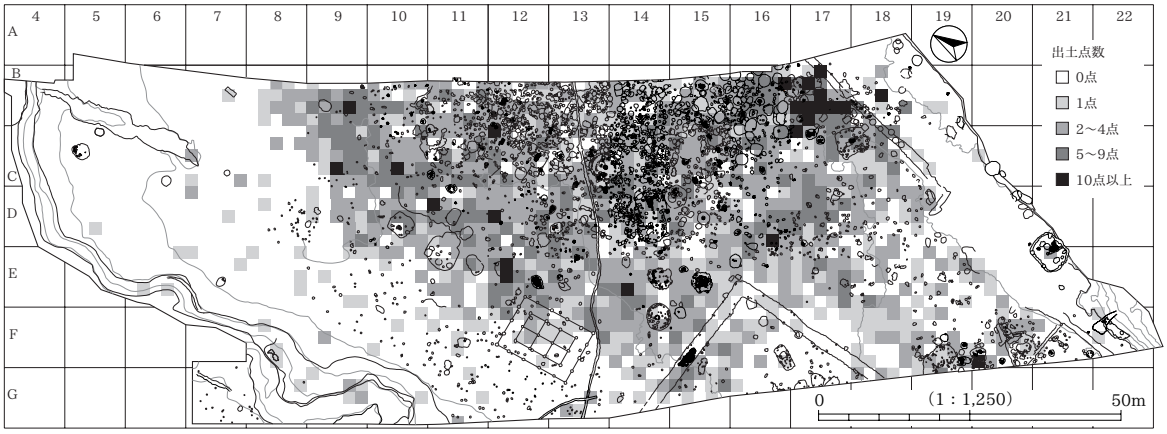
2類（338～345）　正裏面に敲打痕がなく、側面のいずれかに敲打痕があるもの。端部に敲打痕があるものとないものがある。礫の平面形は一般的に楕円形～長楕円形を呈する。

3類（346～255）　正裏面・側面のいずれにも敲打痕がなく、端部のみに敲打痕があるもの。礫の平面形は一般的に長楕円形～棒状を呈する。

C類（356）　主に楕円柱・角柱状の礫の側縁部に磨痕や敲打痕が施され、面をなすもの。横位断面形は一般的に楕円形・方形・三角形を呈する。いわゆる「特殊磨石」［八木1976］と呼称されていたものである。

この他、主に硬質緻密な亜角礫の石材や球状の多面体に敲打痕が認められる石器が多数存在する。これを「多面体敲石」［阿部1984］として器種分類した。次項で詳述する。

総数3,479点のうち、A1類59点（2％）、A2類24点（1％）、A3類1,491点（43％）、B1類1,469点（42％）、B2類176点（5％）、B3類163点（5％）、C類6点（0.2％）、分類不可91点（3％）である。正裏面に磨痕があり、いわゆる磨石と呼称されるA類は1,574点（45％）、いわゆる凹石と呼称されるB1



第48図　敲磨石類出土分布図

類は1,469点（42％）である。但し、A類の中には、正裏面に敲打痕のあるものも少なからず存在するため、凹石はさらに多くなる。C類は6点と少なく、このうち5点は下層まで達する遺構（SD127・SK416）であることから、すべて下層からの紛れ込みと推定できる。

分　　布　全体的に見ると9～18・B～E、18～20・E～Gグリッドに多く分布する。前者は中期末葉～後期初頭、後者は中期前葉～中葉の集落跡の範囲にほぼ一致する。分類別では分布に偏りは認められなかった。なお、17Bグリッドに極めて多く集中するが、発掘調査以前、畑耕作に伴い集め置かれたものである。

大きさ・重さ　完形品を対象とした。対象数はA1類50点、A2類18点、A3類1,179点、B1類1,019点、B2類157点、B3類152点、C類4点である。長さではA1類が短く、C類が長い。幅ではB3類が狭く、A2・A3類が広くなる。厚さではB2・B3類が薄く、A1類が厚い。重さはB2・B3類が軽く、A2・C類が重い。使用痕の種類と位置（使われ方）を反映しているものと推定される。

分類＼計測値	平均長(cm)	平均幅(cm)	平均厚(cm)	平均重(g)
A1類	9.4	7.5	6.1	635.7
A2類	12.0	8.5	4.8	721.4
A3類	10.7	8.3	4.7	569.2
B1類	11.7	7.4	3.8	440.0
B2類	10.8	6.7	3.3	353.5
B3類	10.0	5.7	3.4	288.1
C類	13.9	7.9	5.2	720.0

第25表　敲磨石類平均計測値表

石　　材　分類別に出土数が50点以上の場合は50点、これ以下の場合は出土数のすべてを対象とした。対象数はA2類24点、C類6点を含む280点である。全体的に見ると主な石材は、安山岩96点（34％）、輝緑岩59点（21％）、凝灰岩49点（18％）である。分類別ではA1類は輝緑岩・花崗岩が、B2類は輝緑岩が多い。ほかはおおむね全体的な石材選択傾向に一致する。地元で採取できる火成岩が多く選択されている。

分類＼石材	安山岩	輝緑岩	凝灰岩	花崗岩	流紋岩	緑色凝灰岩	石英斑岩	斑レイ岩	ひん岩	礫岩	ホルンフェルス	頁岩	花崗閃緑岩	砂岩	不明	合計
A1類	6	17	3	12	2	1	1	3		2		1	1		1	50
A2類	11	3	2	2				1	3				1	1		24
A3類	29	4	8	1	1		3		3	1						50
B1類	22	6	14	1	3	4										50
B2類	9	15	9	1	7	2	2	2			1				2	48
B3類	15	13	12		4	3	1	1				1				50
C類	4	1	1													6
合計	96	59	49	17	17	10	7	7	6	3	1	2	2	1	3	280

第26表　敲磨石類石材表

使用の痕跡　観察表には使用の痕跡を「磨・敲」「◎・○・空欄」で示した。「磨」は磨痕、「敲」は敲打痕を表している。「◎」は正裏の両面、両側縁、両端部に、「○」は片面、片側縁、片端部に使用痕が認められることを表している。「空欄」は使用痕が認められない。使用痕の種類と位置は、分類記号に一致する。

遺存状態　大きさ・重さでも完形品に触れたが、完形・ほぼ完形品は2,721点で、総数に対する比率は78％である。おおむね壊れにくい石器といえる。分類別では出土数の少ないＣ類を除き、B2類（93％）・B3類（94％）が高く、A2類（74％）・B1類（74％）が低くなる。

そ の 他　石皿とともに被熱された石器が多く認められている。炉石として再利用されたものが多いためと推定される。

16）多面体敲石（357～377）

硬質緻密な亜角礫の石材や球状の多面体に敲打痕が認められる石器である。いわゆる「多面体敲石」［阿部前掲］と呼称されている。総数270点を数える。

分　　類　敲打面のおおよその広さで細分した。

A類（357～363）　敲打面の広さが、礫の表面積のおおよそ50％未満のもの。

B類（364～370）　敲打面の広さが、礫の表面積のおおよそ50％以上～90％程度のもの。

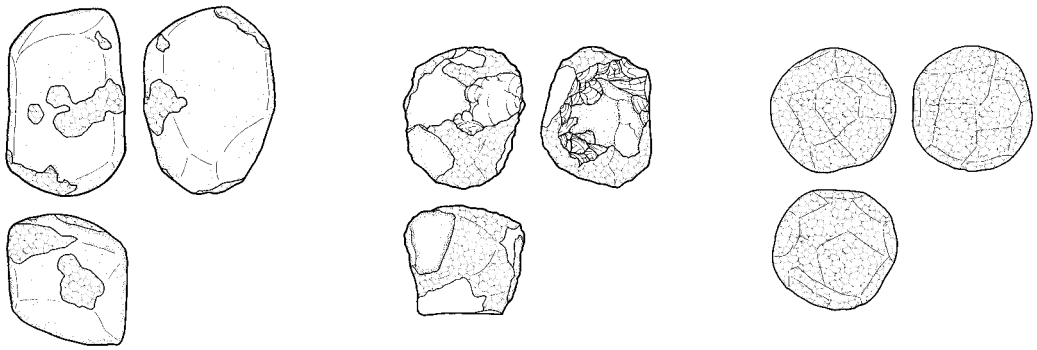
C類（371～377）　敲打面の広さが、ほぼ全面に及ぶもの。

分類不可　破損品・破片のため、分類できないものである。

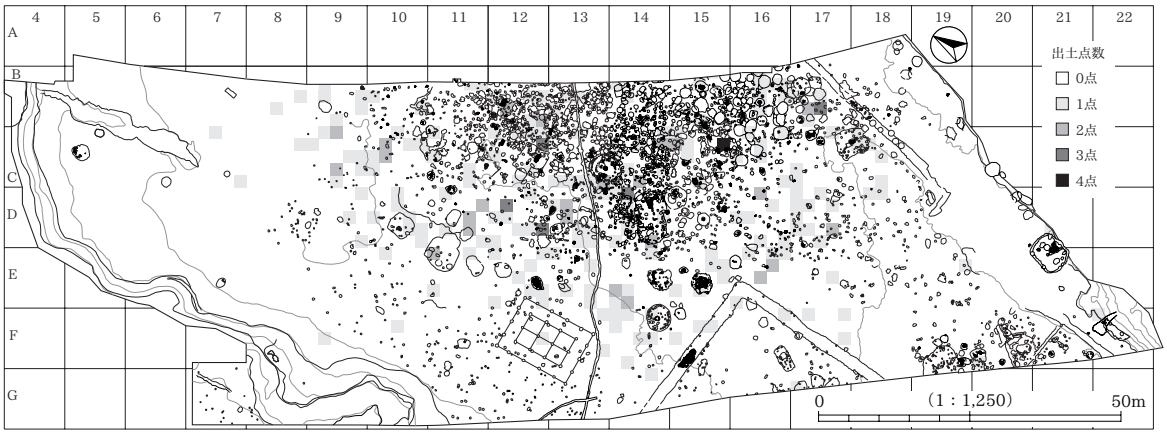
総数270点のうち、A類145点（54％）、B類42点（16％）、C類19点（7％）、分類不可64点（24％）である。あまり使用（敲打）されていないA類が多く、よく使用（敲打）されたC類が少ない。石材が豊富なため、頻繁に使い捨てた結果と推定される。

分　　布　9～17・B～Eグリッドに多く分布し、中期末葉～後期初頭の集落跡の範囲とほぼ一致する。中期前葉～中葉の集落跡からはほとんど出土しないことから、本遺跡では中期末葉からの出現となる。また、分布傾向は磨製石斧失敗品の分布と一致する。多面体敲石は磨製石斧生産遺跡から多数出土することが指摘されている［阿部前掲］ことからも、理にかなっている。なお、分類別では分布に片寄りは認められない。

大きさ・重さ　分類別に見るとA類からC類になるに従い、厚さは変わらないが、長さと幅、重さの値



第49図　多面体敲石分類図



第50図　多面体敲石出土分布図

分類＼計測値	平均長(cm)	平均幅(cm)	平均厚(cm)	平均重(g)
A類	8.0	6.3	4.7	357.1
B類	6.5	5.9	4.5	241.4
C類	5.4	5.2	4.7	191.5

第27表　多面体敲石平均計測値表

が小さくなる。長さと幅では、長さの方が減少傾向は大きい。これは敲打面が広くなる（よく使われる）ほど球形に近くなり、小さくなった結果を反映している。

石　　材　多くの種類の石材を選択している。全体的に見るとチャート93点（34％）、流紋岩42点（16％）、緑色凝灰岩24点（9％）、頁岩23点（9％）、鉄石英（赤）20点（7％）である。在地産の硬質で緻密な石材を選択している。分類別にみても石材選択に片寄りは認められない。多くの種類の石材を選択しているのは豊富な石材環境の反映である。

遺存状態　270点のうち、分類不可の破損品・破片が64点（24％）を数えた。破損品・破片が多いのは、硬い対象物に対しハンマーとして使用された結果と推定される。

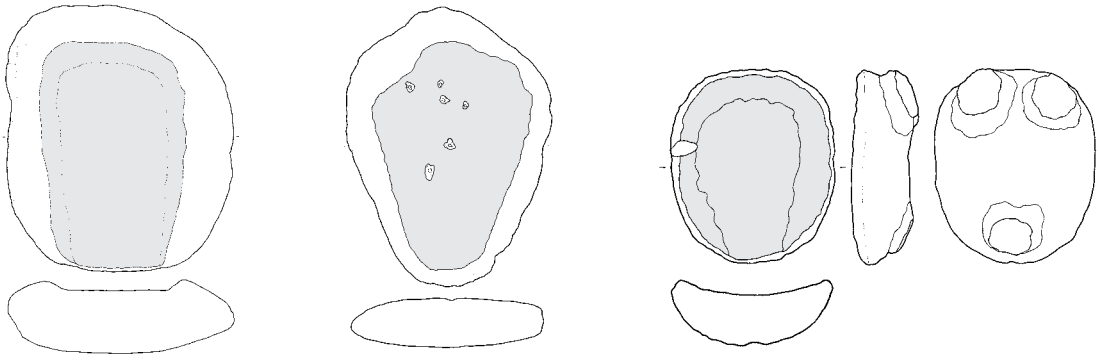
そ の 他　多面体敲石は磨製石斧生産遺跡から多数出土することが指摘されている。本遺跡では多面体敲石270点に対し、磨製石斧失敗品は14点に過ぎない。ベンガラの付着から磨製石斧製作だけでないことも指摘［阿部前掲］され、また、仮に頻繁に使い捨てられたとしても、多過ぎる出土である。磨製石斧製作以外の使用は不明である。

分類＼石材	チャート	流紋岩	緑色凝灰岩	頁岩	鉄石英（赤）	鉄石英（黄）	凝灰岩	斑レイ岩	ホルンフェルス	輝緑岩	メノウ	花崗岩	ひん岩	石英	合計
A類	46	24	12	19	10	4	9	6	7	6	1		1		145
B類	5	6	7	4	5	4	2	1	1		3	4			42
C類	2	5	3		2	4		1	1	1					19
不可	40	7	2		3	2	2	4	2				1	1	64
合計	93	42	24	23	20	14	13	12	11	7	4	4	2	1	270

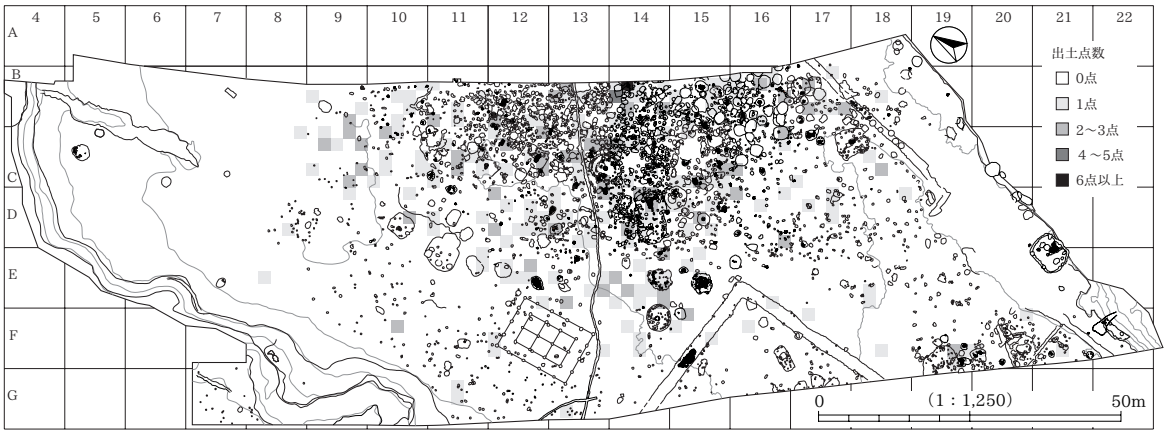
第28表　多面体敲石石材表

17）石　　皿（378～405）

扁平な大形の円・楕円形礫の正面または正裏面に、使用や調製の結果と推定される磨面や敲打痕が認められるものである。使用面は磨面の場合、滑らかな平面または緩やかな曲面をなす。また、使用面の滑らかさはほぼ均質、または中心部の滑らかさが強く、周辺は漸次弱くなる。これらの諸特徴から砥石とはほぼ区別される。また、使用面が敲打状に多数の窪みを付けているものも存在する。これらはいわゆる「蜂の巣石」「雨垂れ石」と呼称されるものであるが、石皿の磨面と兼用されるものが多いため、両者を一括りに石皿として取り扱った。総数435点出土するが、破損品・破片が極めて多い。



第51図　石皿分類図



第52図　石皿出土分布図

分　　類　大きさ、使用面の加工の有無により細分した。

A類（378～388）　長さ15cm以上の中～大形品で、敲打により使用面が作出されているもの。「使用面作出→使用・摩滅→使用面再生」を繰り返すことにより、周縁に縁が形成される。

B類（389～401）　長さ15cm以上の中～大形品で、使用面が作出されず、素材獲得時の礫面を無加工のまま使用しているもの。

C類（402～405）　長さ15cm未満、または重さ1kgの小形品である。すべて加工石皿である。

分類不可　破片資料のため分類できないものである。ほとんどがB類の破片資料と考えている。

総数434点のうち、A類20点（5％）、B類352点（81％）、C類4点（1％）、分類不可58点（13％）である。中～大形の無加工石皿が圧倒的に多く、中～大形の加工石皿、小形石皿は少ない。

分　　布　9～17・B～Eグリッドに多く分布し、中期末葉～後期初頭の集落跡の範囲にほぼ一致する。中期前葉～中葉の集落跡からの出土は、19Fグリッドからやや多く出土する程度である。石皿の多くは、中期末葉～後期初頭の集落跡に伴うものと推定できる。なお、分類別に分布の片寄りは認められない。

大きさ・重さ　完形・略完形・接合完形品を対象とした。対象数はA類4点、B類227点、C類4点である。分類基準に大きさを入れたため、A・B類は大きく重く、C類は小さく軽い。

石　　材　全体的にみると、主な石材は安山岩282点（65％）、凝灰岩95点（22％）、緑色凝灰岩23点

（5％）、花崗岩16点（4％）である。在地産の粒子構造をもつ石材を多く選択している。分類別ではA・C類は凝灰岩が最も多く使用され、全体的傾向と異なる。A・C類は加工石皿であり、軟質で加工しやすい凝灰岩が選択されたと推定できる。

分類＼計測値	平均長(cm)	平均幅(cm)	平均厚(cm)	平均重(g)
A類	34.9	27.2	7.9	7366.7
B類	27.4	21.4	7.1	6216.7
C類	12.8	10.5	3.5	552.0

第29表　石皿平均計測値表

分類＼石材	安山岩	凝灰岩	緑色凝灰岩	花崗岩	輝緑岩	ひん岩	流紋岩	頁岩	砂岩	閃緑岩	斑レイ岩	合計
A類	3	13	3							1		20
B類	235	70	17	16	4	4	4		1		1	352
C類		3	1									4
不可	44	9	2		1	1		1				58
合計	282	95	23	16	5	5	4	1	1	1	1	434

第30表　石皿石材表

遺存状態　完形・略完形品はA類4点（完形率20％）、B類225点（同64％）、C類4点（同100％）である。全体では54％で遺存状態は悪い。炉跡に転用され被熱等で破損したものと故意に破損されたものが考えられる。

そ の 他　434点のうち、202点（47％）に被熱が認められた。前述のように炉跡に転用されたためと考えられる。

18）砥　　石（406～420）

主に凝灰岩・安山岩などの粒子構造をもつ礫の表面に、使用の結果残された磨面（砥面）が認められる石器である。石皿に近似するものもあるが、次の相違点により区別される。

石皿に比べ形が不整形なものが多く、砥面も正裏面だけに限らず、側縁部・端部等一定していない。砥面は石皿ほど広くなく、また滑らかさも均質でない。帯状・溝状の砥面がみられるなどである。

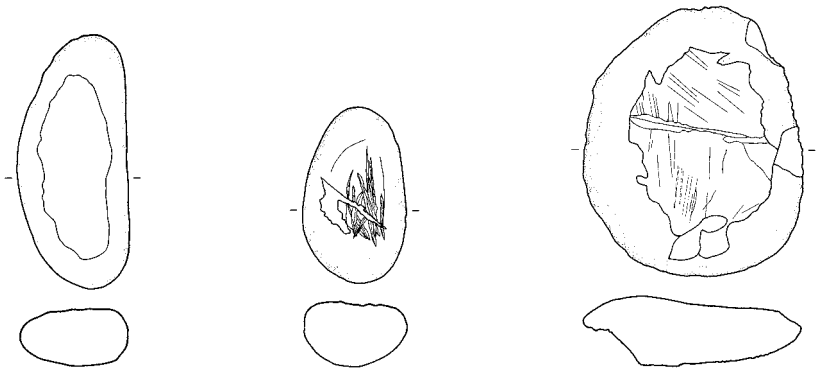
分　　類　砥面の種類により細分した。

A類（406～412）　面状砥面・帯状砥面のもの。主に扁平礫の正面または正裏面に、ある程度の広がりをもつ砥面または帯状の砥面が残されているもの。石皿に比べ砥面は狭く、砥面の形も不整形で、滑らかさも均質でない。

B類（413～416）　溝状砥面のもの。砥面が幅1～15mm程度の溝状に細長くなる。

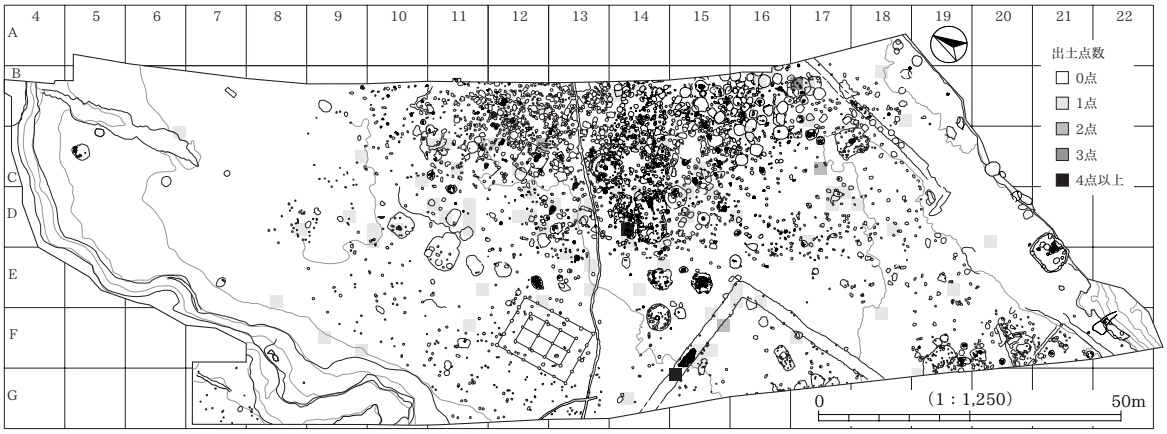
C類（417～420）　面状砥面・帯状砥面と溝状砥面が複合するもの。

分類不可　破片資料で分類できないもの。多くはA類の破片資料と推定される。



A類　　B類　　C類

第53図　砥石分類図



第54図　砥石出土分布図

総数121点のうち、A類83点（69％）、B類7点（6％）、C類9点（7％）、分類不可22点（18％）である。A類が極めて多く、B・C類は少ない。

分　　布　出土数がそれ程多くないため、散漫に分布するが、10～17・B～Eグリッドにやや多く分布する。中期末葉～後期初頭の集落跡の範囲とほぼ一致する。中期前葉～中葉の集落跡からの出土が、ほとんど認められないことから、砥石の多くは中期末葉～後期初頭の集落跡に伴うものと推定される。

大きさ・重さ　完形・略完形品を対象とした。対象数はA類44点、B類2点、C類4点である。分類ごとの大きさ・重さの平均値は、第31表に示した。B類はA・C類に比べ、小さく軽い。A・C類は平均値では大きく重くなるが、大きいものから小さいものまで、重いものから軽いものまで様々である。

計測値／分類	平均長(cm)	平均幅(cm)	平均厚(cm)	平均重(g)
A類	25.5	14.9	7.6	4400.6
B類	8.6	4.6	3.1	117.5
C類	27.3	16.3	6.0	2463.5

第31表　砥石平均計測値表

石　　材　全体的に見ると、主な石材は凝灰岩62点（51％）、安山岩36点（30％）、緑色凝灰岩9点（7％）である。粒子構造をもつ、凝灰岩・安山岩が選択されている。なお、分類別の片寄りは認められない。

石材／分類	凝灰岩	安山岩	緑色凝灰岩	流紋岩	砂岩	輝緑岩	礫岩	花崗岩	頁岩	ひん岩	合計
A類	38	33	4	4	1	1	1			1	83
B類	4		1		1	1					7
C類	7		1		1						9
分類不可	13	3	3	1				1	1		22
合計	62	36	9	5	3	2	1	1	1	1	121

第32表　砥石石材表

遺存状態　完形・略完形品はA類44点（完形率53％）、B類2点（同29％）、C類4点（同44％）である。全体では完形率40％で、遺存状態は悪い。被熱が40点も認められることから、被熱も破損の大きな要因と考えられる。

19）石　　核（421～435）

剥片剥離作業中に何らかの理由により剥離作業を断念した残核、剥片剥離作業終了後の残核である。総数1,097点出土している。全体的に概観すると素材は自然礫・荒割礫・剥片と様々であり、剥離作業の前段階となる打面調整等は見出せない。

分　　類　石核に残された剥離の痕跡から剥離作業に着目し分類した。剥離作業は、剥離作業面数、打面数、剥離方法により様々であるが、10細分し、7分類にまとめた。

A類（剥離作業1）（421・422）　同一打面から同一剥離作業面に同方向の剥離作業が行われるもの。したがって、打面が1面、剥離作業面が1面である。

B類（423・424）　同一剥離作業面に別々の打面（約90・180°ずれる）から剥離作業が行われるもの。したがって、打面は2面以上で、剥離作業面は1面である。打面と剥離作業面との関係からさらに細分される。

（剥離作業2）　同一剥離作業面に約90°ずれた打面からの剥離作業。

（剥離作業3）　同一剥離作業面に約180°ずれた打面からの剥離作業。

（剥離作業4）（423・424）　同一剥離作業面に約90・180°ずれた打面からの剥離作業。

C類（剥離作業5）（425・426）　同一打面から別々の剥離作業面に同方向の剥離作業が行われるもの。したがって、打面が1面で、剥離作業面が2面以上ある。

D類（剥離作業6）（427～429）　石核の稜線上からの交互剥離による剥離作業。稜線上の片面を剥離後、その剥離面を打面として残りの片面に剥離を行う剥離作業。剥離作業は全周しない。剥離作業面は正裏の2面で、打面は剥離作業により更新される。

E類（剥離作業7）（430・431）　石核の稜線上からの交互剥離による剥離作業。稜線上の片面を剥離後、その剥離面を打面として残りの片面に剥離を行う剥離作業。剥離作業は全周する。剥離作業面は正裏の2面で、打面は剥離作業により更新される。D類とE類の剥離作業は同じであり、剥離作業が全周するかしないかの違いだけである。

F類（432・433）　別々の打面と別々の剥離作業面で剥離作業が行われるもの。したがって、打面が2面で、剥離作業面が2面である。打面と剥離作業面との関係からさらに細分される。

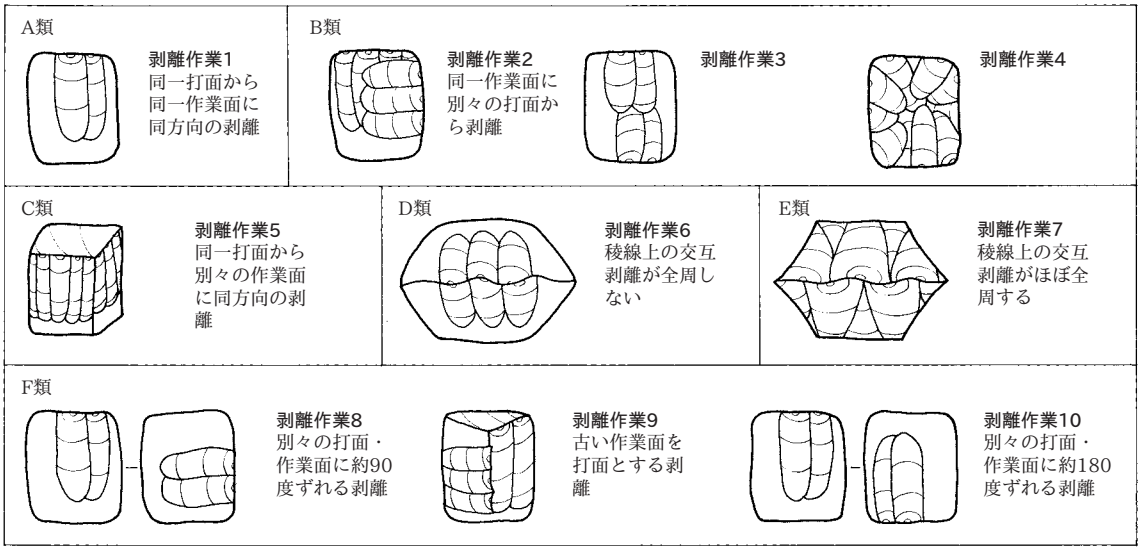
（剥離作業8）（432）　剥離方向が約90°ずれる剥離作業のもの。

（剥離作業9）（433）　片方の打面は古い剥離作業面を利用する。

（剥離作業10）　剥離方向が約180°ずれる剥離作業のもの。

分類不可（434・435）　A～F類以外の剥離作業。そのほとんどはA～F類の剥離作業の組み合わせである。

総数1,096点のうち、A類71点（6％）、B類60点（5％）、C類87点（8％）、D類272点（25％）、E

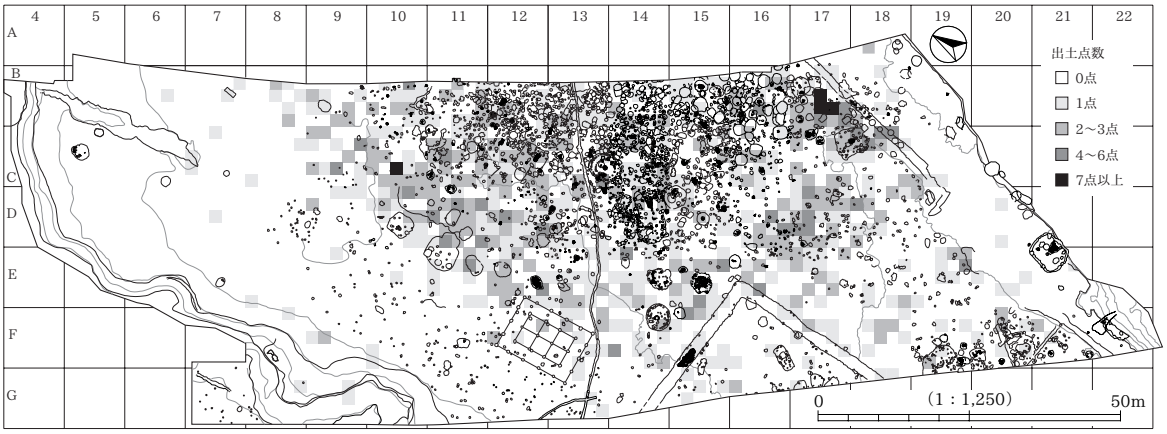


第55図　石核分類図

類91点（8％）、F類24点（2％）、分類不可491点（45％）である。剥離作業には打面が固定し打点が移動するものと打面転移を頻繁に行うものがある。A～C・F類は前者に、D・E類・分類不可のほとんどは後者に含まれる。圧倒的にD・E類・分類不可が多い。このことは、打面転移を頻繁に繰り返し剥片剥離作業が行われたことを意味する。

分　　布　全体的に見ると9～18・B～Eグリッドに多く分布し、中期末葉～後期初頭の集落跡の範囲に一致する。中期前葉～中葉の集落跡の19～21・F～Gグリッド付近では、それ程多くの出土が見られない。分類別では分布の片寄りは認められなかった。

なお、17Bグリッドに極めて多く集中するが、敲磨石類の分布で既述したように、発掘調査以前の畑耕作に伴い集め置かれたものである。



第56図　石核出土分布図

大きさ・重さ　分類ごとの平均測定値は第33表のとおりである。長さ7～8cm、幅5～6cm、厚さ4cm、重さ200～300gのものが多いが、剥片剥離作業の進行状態で様々な大きさ・重さのものがある。分類別では剥片剥離作業が進行したものが少ないと予想されるA・D類が大きく重く、剥片剥離作業が進行したものが多いと予想されるB・C・E類は小さく軽い傾向にある。

分類＼計測値	平均長(cm)	平均幅(cm)	平均厚(cm)	平均重(g)
A類	9.0	6.7	4.5	357.1
B類	7.9	6.2	3.4	191.4
C類	7.7	5.8	3.8	195.3
D類	8.5	6.2	4.0	271.2
E類	7.3	5.7	3.7	191.1
F類	8.2	6.1	4.0	218.2
不可	7.1	5.5	5.2	247.2

第33表　石核平均計測値表

剥片石器の石材環境の悪い岩船郡朝日村奥三面遺跡群と比較すると、アチヤ平遺跡（平均重量59.0g）、元屋敷遺跡（5～50gに集中する）に比べ、極めて大きく重いといえる。剥片石器の石材環境の差と推定できる。

石　　材　分類別に出土数が50点以上の場合は50点、これ以下の場合は出土数のすべてを対象とした。対象数はF類24点を含む、324点である。全体的に見ると主な石材は、流紋岩95点（29％）、緑色凝灰岩88点（27％）、頁岩73点（23％）、凝灰岩41点（13％）で、この4種の石材で92％を占める。在地産の硬質で緻密な石材を選択している。

分類＼石材	流紋岩	緑色凝灰岩	頁岩	凝灰岩	ホルンフェルス	チャート	鉄石英（赤）	鉄石英（黄）	メノウ	輝緑岩	合計
A類	14	11	16	4		1	1	1	1	1	50
B類	15	14	8	12	1						50
C類	16	15	10	4	4	1					50
D類	14	14	11	6	3		1		1		50
E類	17	15	12	4	1			1			50
F類	7	5	5	4		1		2			24
不可	12	14	11	7	2		1		3		50
合計	95	88	73	41	11	3	3	4	5	1	324

第34表　石核石材表

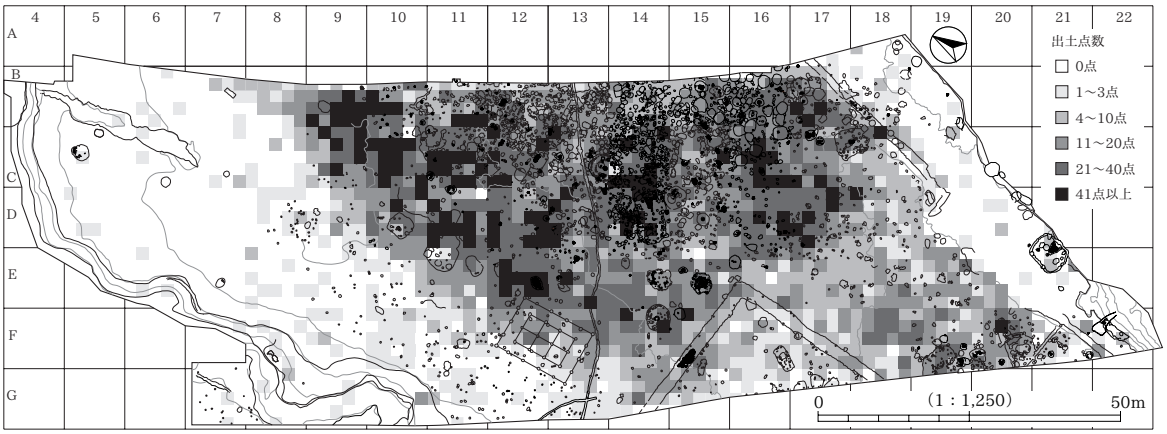
なお、分類別の石材選択に片寄りは見られない。

20）剥　片　類（436～441）

総数27,313点が出土している。分布は9～18・B～F、18～20・F～Gグリッドに分かれる。前者は中期末葉～後期初頭、後者は中期前葉～中葉の集落跡の範囲に一致する。

膨大な出土数であるが、6点のみ掲載した。436～440は縦長剥片で、背面（正面）の剥離状況を観察すれば連続的に縦長剥片が剥離されたことが想像できる。但し、本遺跡の石核を見る限り、縦長剥片を生産した痕跡はまったく認められない。既述のように山形県最上川中流域で中期中葉～後期前葉にかけて頁岩製の「石刃状剥片」が生産され、周辺に搬出されていることが指摘［会田前掲］されている。したがって、図示した縦長剥片で頁岩製のもの（436・437・439）は、石刃状剥片の可能性が非常に高く、搬入されたものと考えている。なお、図示したものも含め、石刃状剥片と推定されるものは数十点出土している。また、石匙や不定形石器などに使用されたものも含めるとさらに多くなる。

441はアスファルトの付着した剥片である。アスファルト付着の石器はそれ程多くないものの、本遺跡では中期末葉～後期初頭からアスファルトの使用が行われたと推定される。



第57図　剥片類出土分布図

21）接 合 資 料（442～448）

時間的な制約があり、剥片の一括出土を中心に剥片類の接合を試みた。接合の結果は図示した7例のみである。6例は剥片集中遺構内の一括であり、448も包含層出土であるが、同一小グリッドであることから、剥片集中出土と考えられる。

下層に比べ著しく接合例が少ないのは、時間的な制約もさることながら、剥片の出土量が膨大なことによる。以下、図示したものについて剥離順序等の説明を加える。

442～446は同一遺構の剥片集中である。すべて流紋岩であるが、442と443～446の2種類の母岩からなっている。剥離作業はすべて同じで、同一打面から同一剥離作業面に同方向の剥離作業が行われる。石核分類のA類（剥離作業1）に相当する。

447は土坑の覆土から出土した剥片である。出土状況をみる限り、廃棄されたようである。447a・b

は同一打面から同一剥離作業面に同方向から剥離作業を行い、447cで約180°打面を転移し、別な剥離作業面に剥離作業を加えている。石核分類のＦ類（剥離作業10）に相当する。

448は図示した剥片、残核448jの剥離面から、稜線上で交互剥離による剥離作業が行われているが、全周していない。石核分類のＤ類（剥離作業6）に相当する。

Ｃ　石　製　品

発掘調査で出土した石製品は第35表のとおり、石棒・玉類などをはじめ各種の石製品が出土している。総数108点を数える。このうち遺構内出土が14点（13％）、包含層出土が94点（87％）で、ほとんどが包含層出土となる。器種別出土数では扁平加工礫39点（36％）、次いで類石棒15点（14％）、石棒12点（11％）、鏡面状の光沢を有する石器11点（10％）、軽石製品10点（9％）となる。扁平加工礫以外は、出土数が少ない。その他の石製品には数種類の石製品が含まれることから、多種類の石製品が出土しているといえる。

器種名	石棒	類石棒	玉類	扁平加工礫	鏡面状の光沢を有する石器	軽石製品	その他の石製品	合計
遺構出土		5	2	3		1	2	14
包含層出土	12	10	5	36	11	9	11	94
出土数	12	15	7	39	11	10	14	108
比率（%）	11	14	6	36	10	9	13	100

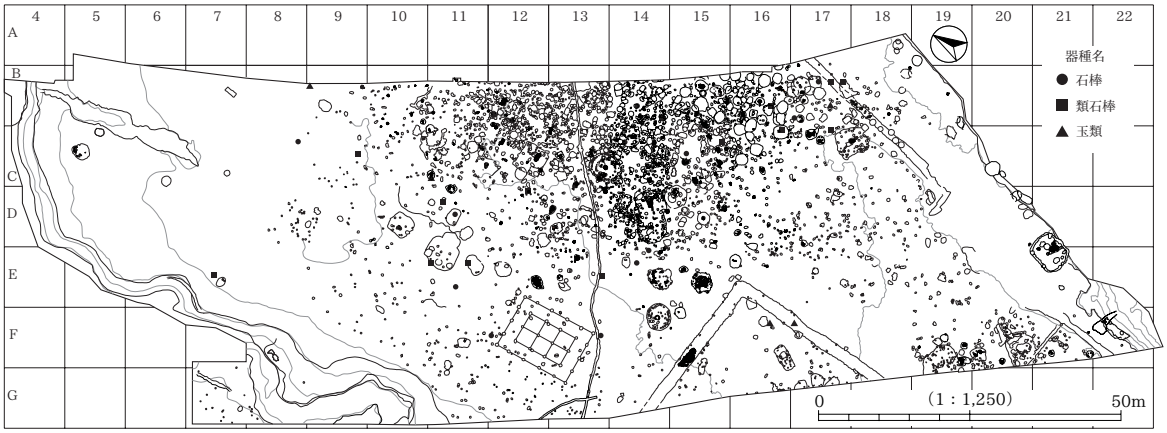
第35表　石製品の器種別出土数

出土分布傾向は、9～17・Ｂ～Ｅグリッドにほとんどが分布する。この範囲は中期末葉～後期初頭の集落跡と一致する。中期前葉～中葉の集落跡からは19Fから２点、20Fから４点しか出土せず、石製品のほとんどは中期末葉～後期初頭の集落跡に伴うものと推定できる。

以下、掲載順に石製品の各器種について概要を説明する。

1）石　　棒（449～460）

12点出土している。8～17・Ｂ～Ｆグリッドの範囲にすべて収まり、中期末葉～後期初頭の集落跡の範囲に一致する。中期前葉～中葉の集落跡からは出土していない。大形品（449・450・453・460）と小形品（451・452・454～459）がある。成形方法として、敲打だけで成形されているもの（449・453・455・460）と磨きが認められるもの（450～452・454・456～459）がある。450は胴中央部が太くなり、454～456は頭部が扁平ないしは扁平気味となる。458は小形の両頭石棒である。石材は凝灰岩４点、安山岩３点、輝緑岩２点、緑色凝灰岩・結晶片岩・泥岩各１点で、比較的軟質で加工のしやすい石材



第58図　石棒・類石棒・玉類出土分布図

を選択している。

2）類　石　棒（461～465）

棒状の礫の一部に敲打や研磨が加えられているが、頭部の作り出しのないものである。「類石棒」［富樫・長田ほか2002］として取り扱った。15点出土している。1点を除き、中期末葉～後期初頭の集落跡の9～17・B～Eグリッドから出土している。461～463は大形の棒状礫に敲打（461・463）、敲打・研磨（462）が施されている。464・465は角柱状の礫の稜線部に敲打が加えられている。石材は安山岩10点、凝灰岩3点、輝緑岩・流紋岩各1点となる。

3）玉　　類（466～472）

7点出土している。出土数が少ないため散漫に分布する。466・468は長さが5cm以上あり、平面形もカツオ節形を呈する。いわゆる「大珠」と呼称されるものである。469も長さこそ5cmに満たないが、太珠に含められる。石材は469がヒスイ、468は被熱しているため断定できないもののヒスイと推定され、466はヒスイを取り囲むアルビタイトである。石材より糸魚川地方からの搬入品である。467は扁平な楕円形のほぼ中央に穿孔されている。凝灰岩製。470は薄くて小形の玉である。縦長の菱形状の孔を穿っている。凝灰岩製。471は大きく厚みのある扁平礫の上部に穿孔している。軟質の緑色凝灰岩製。472は薄くて小形の勾玉状の玉である。正裏面に格子目状の溝が施され、片側縁に刻みがある。本遺跡では、後期中葉の所産と考えている。凝灰岩製。

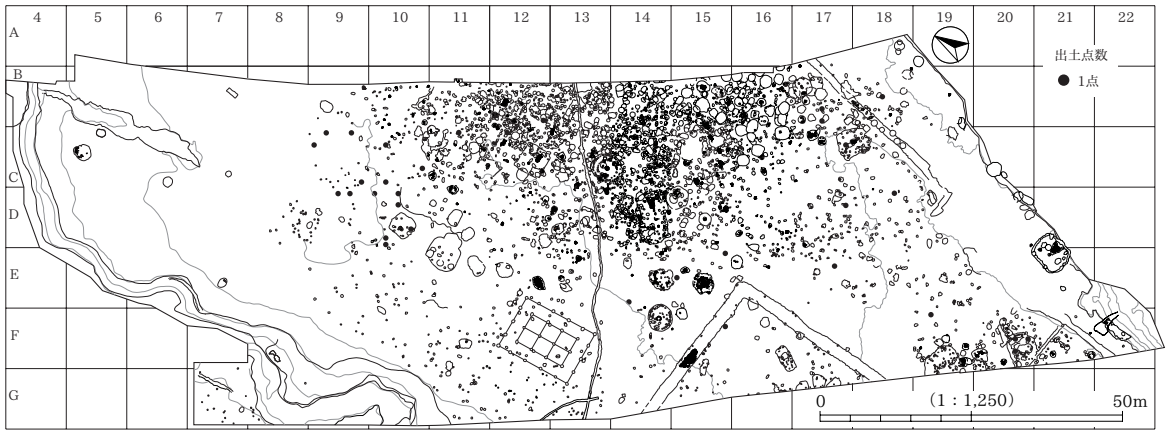
4）扁平加工礫（473～486）

長さ5～10cm程度の扁平礫に敲打や研磨が加えられているものである。他の石器や石製品に当てはまらないものである。39点出土している。出土数が多くないため9～18・B～E、19F・20Fグリッドに散漫に分布する。前者は中期末葉～後期初頭の集落跡、後者は中期前葉～中葉の集落跡の範囲に一致する。473・474・480はほぼ全面に磨痕、475は磨痕以外に両端に敲打痕、476は磨痕以外に側面・両端に敲打痕が認められる。477・478は正裏面・両側面に磨痕、479は両側面に磨痕が認められる。481～483は円形、484・485は楕円形、486は不整形な扁平礫の両面ないしは片面に磨痕が認められる。石材は39点のうち、凝灰岩が29点（74％）を数え、ほかに頁岩3点、安山岩・緑色凝灰岩・斑レイ岩各2点、ひん岩1点で、やや軟質な石材が選択されている。

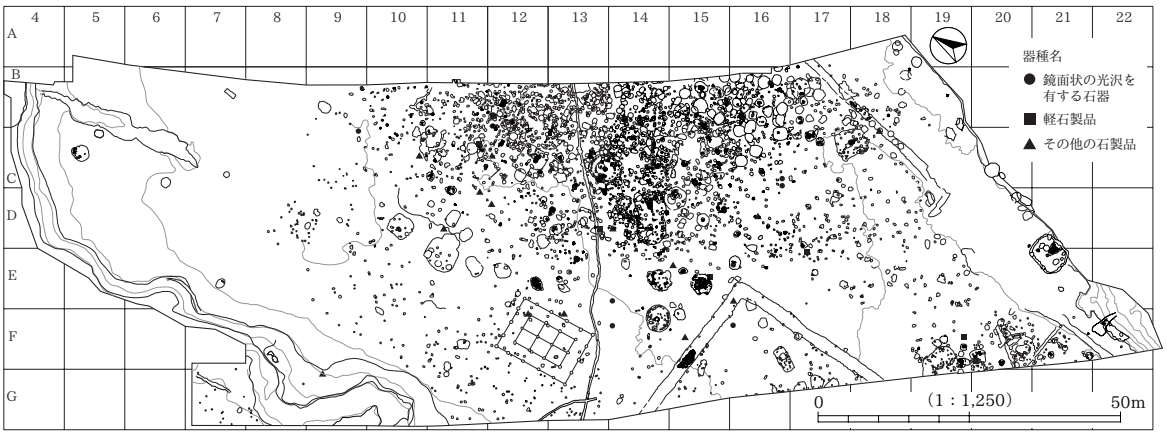
5）鏡面状の光沢を有する石器（487～497）

器種名にあるように、長さ5cm前後のやや小ぶりの大きさの球または楕円球の礫面に、光沢が認められるものである。「鏡面光沢を有する加工礫」［丹野・原川ほか1999］とも呼称されている。11点出土している。分布は中期末葉～後期初頭の集落跡の範囲に一致することから、中期末葉以降の所産である。大きさの平均値は、長さ5.6cm、幅4.2cm、厚さ2.6cm、重さ89.6gを測る。石材はチャート8点、頁岩2点、凝灰岩1点で、硬質で緻密な石材を選択している。

類例は多くないが、東京都多摩ニュータウンNo.796遺跡で13点、同No.67遺跡で3点出土［丹野・原川前掲］している。



第59図　扁平加工礫出土分布図



第60図　鏡面状の光沢を有する石器・軽石製品・その他の石製品出土分布図

6）軽石製品（498～506）

軽石を用いた加工品である。10点出土している。2点は中期前葉～中葉の集落跡の範囲から、残りの8点は中期末葉～後期初頭の集落跡の範囲から出土している。498～500は扁平な軽石に一孔穿いている。501・502は上面を大きく窪めている。503は上面を平坦に、504は球形に仕上げている。図示していないが球形に仕上げた軽石は、ほかに1点出土している。505・506は板状（斧状？）に加工した軽石である。

7）その他の石製品（507～520）

507は高さが高く幅の狭い、軟質な緑色凝灰岩製の石冠である。頭部から基底部にかけて緩く開き、基底部で大きく広がる。底面には円形の凹が施される。土製であるものの、福島県西会津町上小島Ｃ遺跡に近似するものが出土している。

508・509は碗形石製品である。5cm前後の半球の中を窪めたものである。凹部には擦痕が認められる。石材は軟質で加工しやすい凝灰岩（508）、緑色凝灰岩（509）が使用されている。508はSI472－P1の上面から出土していることから、中期後葉（大木9式）の所産と推定される。

510～512は盲孔石製品と命名した。510は両面、511は片面、512は両面が窪んでいるものの、貫

通していない。すべて緑色凝灰岩製。

513～515は扁平な棒状品の破片であり、514・515はよく磨かれている。石剣の破片と推定している。緑色凝灰岩（513）、結晶片岩（514）、頁岩（515）製。

516は環状石斧としたが、刃部が認められないため「環石」とすべきかもしれない。孔側は敲打され、周縁の一部に敲打痕と磨痕が認められる。凝灰岩製。

517～520は分類不可の石製品としたものである。517は円柱状の石製品である。軟質な緑色凝灰岩製のため、風化しており器面の状態は不明である。518は湾曲する扁平礫の内側に磨痕が認められ、正裏面に孤状の溝が施されている。緑色凝灰岩製。519は斧の基部のようなもので、よく磨かれている。花崗岩製。520はほぼ全面研磨され、両端に抉りと長軸に溝を巡らしている。有溝石錘に近似するが左右不対称のため石製品とした。緑色凝灰岩製。

4　古代以降の遺物

本遺跡では古代以降と考えられる遺構も確認されている。遺物も土器・陶磁器類を中心に、土製品、石器、石製品、金属器類など、量は多くないものの多種多様な遺物が出土している。

A　土器・陶磁器類（1～30）

古代から近世まで、様々な時期の土器・陶磁器類が出土している。出土量も少ないことから器形分類等は行わず、時期ごとに各遺物の説明を加える。

1）古　　代

須　恵　器（1～4）

1は小型の短頸壺で推定口径6cmである。頸は短くほぼ直立し、体部はやや肩が張る。2～4は甕の破片である。2は外面格子目、内面同心円叩きである。3は薄い破片で厚さ6mmほどである。外面平行叩きである。4も3と同様外面平行叩き。

土　師　器（5～13）

5～7は内黒の有台椀で、胎土・焼成とも共通する。上半部を欠損するため大きさは不明であるが、台部径は5が6.9cm、6が6.5cmである。5・6は台部残存し、いずれも内面端部有段状となり、外側で接地している。内面は磨かれ光沢をもつ。8は甕の底部である。体部～底部にかけての厚さは同じで、底部接地部もやや丸みをもつ。外面縦ケズリ、内面ナデが認められる。炭化物、ススの付着を見る。10は甕の口縁部破片。推定口径20cmを測る。頸部に明確な稜をもち、口縁は「くの字」状に外反し、端部は直立する。内外面ともヨコナデ。11から13は鍋の口縁部破片。11・12は同一個体と考えられる。口縁部の外反はほとんどなく、口縁の端部断面は三角形に近く、直立する。内外面ともにヨコナデであるが、特に口縁近くに強いヨコナデが加えられる。外面にススが付着する。13は口縁がやや外反する。内外面ともにヨコナデ。9は土師器として分類したが、詳細は不明。器形は体部にやや丸みをもち、口縁は短く外反する。体部上半には、幅7mmほどの薄い粘土紐を貼り付け、指押さえで波状を作り出している。

以上、古代の土器は、内黒土師器有台椀等から9世紀後半～10世紀前半に収まるものと考えられる。なお、須恵器1・3・4は会津大戸窯産の可能性がある。

2）中　　世

青　　磁（14・15）

いずれも碗の口縁部破片。14は厚さ約0.5cm。外面には、幅広で盛り上がりをもち、間弁のある片切彫りの鎬蓮弁が認められる。15はやや薄く、厚さ0.3mmほどである。14と同様に幅広の鎬蓮弁である。

珠　洲　焼（16～22）

16～18は擂鉢。16は口縁部破片。口端部は断面三角形に近く、水平でヨコナデによりやや窪む。櫛目は、上端部から付けられるが単位不明。17は下部破片。櫛目が認められる。18は口縁部に近い破片。櫛工具幅は約2cmで、9本の櫛目が観察できる。19は壷Ｔ種の口縁部破片と考えられる。口縁の開きは少なく、端部は外方に引き出される。ヨコナデ。20～22は甕の破片。20・21は肩部の同一個体である。外面平行叩きで、釉の付着をみる。22は黄灰色を呈し、やや軟質である。胴下半部の破片で、縦平行叩きが認められる。青磁14・15は碗Ⅰ-5a・b類［山本1995］にあたると考えられ、13世紀代前半となる。珠洲焼19は、口縁部形態からⅡ～Ⅲ期と考えられ［吉岡1994］、甕20～22もおよそ同時期であろう。擂鉢もほぼ同時期と考えられるがやや新しい傾向をもつ。

3）近　　世

唐　　津（23）

折縁皿である。削出し高台。口縁部から内面に灰釉。砂目痕。

伊　万　里（24）

皿で口縁部を欠損する。畳付を除き、全面に釉がかかる。見込みに文様が見られる。

23の唐津皿はⅡ期の典型で17世紀前半。24の伊万里皿は、17世紀後半～18世紀前半に収まるであろう。

そ　の　他（25～30）

近世以降で産地の明確でないものである。25は擂鉢の口縁部。やや赤い焼きである。断面三角形に肥厚し、外面2本の沈線が巡る。内面の櫛幅は3cm、9本の櫛目である。口縁部形態は備前焼に共通する。26・27は擂鉢の底部破片。いずれも内面使用による磨耗が著しい。26は素焼きであるが、27は外面錆釉がかかる。28は丸みのある陶器で片口鉢である。片口部分を欠損する。外面中央から上部及び内面にかけて口端部を除き、暗オリーブ色の釉がかかる。地方窯と考えられ、会津焼かもしれない。29・30は素焼きの蓋と壷である。29の蓋は端部が丸く肥厚する。30の壷は頸がなく、端部が丸く肥厚する。体部は緩やかに膨らむ。壷と蓋はセットと考えられ、骨壷の可能性が高い。

B　土　製　品（31～34）

出土数が少ないため、以下、掲載順に説明する。

31・32は**羽口**である。破片ばかり32点出土したが、2点のみ掲載した。上部に焦げ目が付いていることから、炉に接合した部分の破片と推定できる。31は外径8.5cm、孔径2.8cm、32は外径7.1cm、孔径2.3cmと推定される。

33は**土製のスタンプ**と推定されるものである。スタンプ面に花弁状の文様が彫り込まれている。径2.5cmを測る。

34は**土製の脚部**（台部）と推定されるものである。高さ4.2cmを測る。

C　石　　器（35～57）

石器としたものは砥石の１器種であるものの出土数は多い。以下、古代以降の所産と推定される砥石について説明する。

1）古代以降の砥石（35～57・79～81）

総数256点出土し、通常の遺跡では極めて多い。鍛冶遺構や鉄滓などが検出されているため、これとの関連が窺われる。

分　　類　形状や材質等により細分した。

A類（35～46）　転石を利用した砥石である。転石の長軸側面を使用している。当初縄文時代の砥石として取り扱ったが、中世と推定されるSD127（32点出土）やSI26（4点出土）・SI31（7点）から多く出土することが判明したため、これと区別した。縄文時代の砥石とは、側面が必ず使用されている点、金属（刃物）状の痕跡が認められる点、出土地点などで異なる。

B類（47～52）　幅の広い直方体の砥石である。

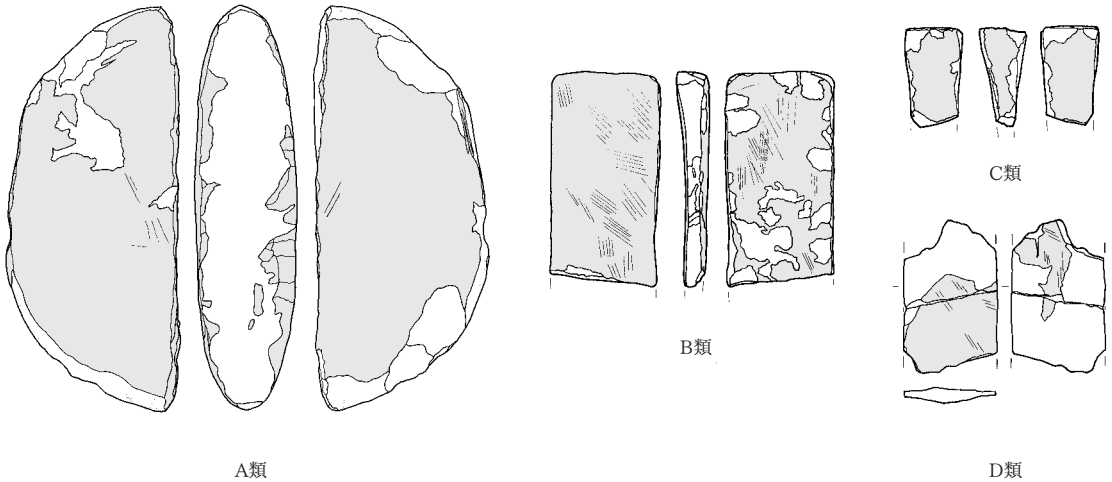
C類（53～57）　幅の狭い直方体の砥石である。

D類（79～81）　京都産の鳴滝砥である。よく使われたせいか、幅の広い薄い砥石である。実測図と観察表の掲載で、実測図は図版編でなく本文中に掲載した。

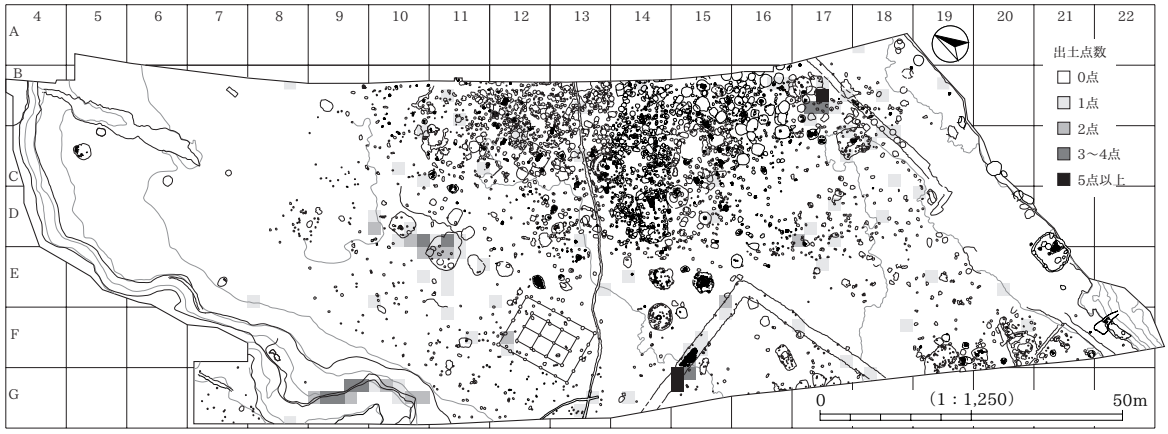
分類不可　破片資料のため分類できないものである。ほとんどがA類の破片と推定される。

A～C類は粒子から荒砥～中砥、D類は仕上げ砥と推定される。256点のうち、A類176点（69％）、B類21点（8％）、C類13点（5％）、D類9点（4％）、分類不可37点（14％）である。在地で採取できるA類が2/3を占め、最も高級品と推定されるD類は少ない。

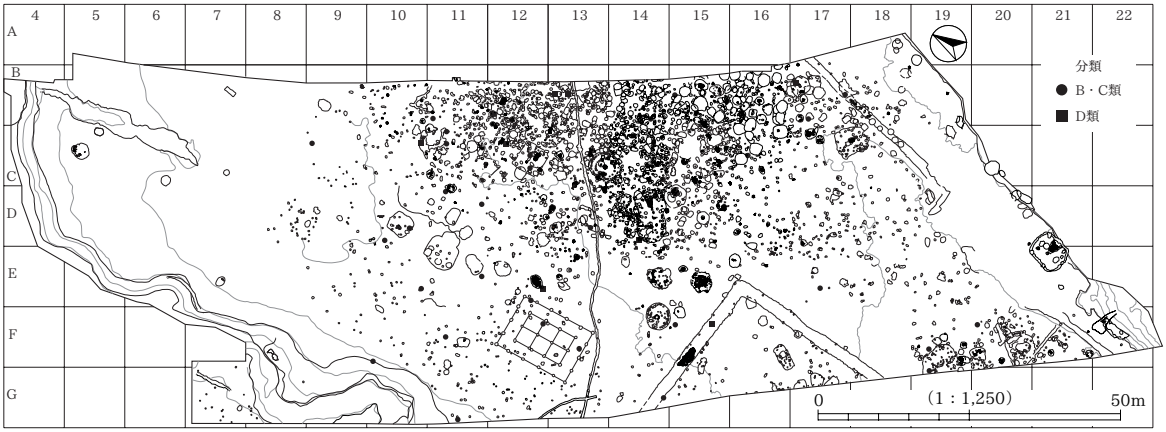
分　　布　A類とB・C・D類では分布が異なる。A類は9～10G、10～11・D～E、15G、17Bグリッドの4か所に集中が分かれ、これ以外のグリッドでは散漫に分布する。9～10Gは沢Aからの出土、10～11・D～EはSI26・SI31の出土、15GはSD127の出土である。17Bグリッドからの出土は他



第61図　古代以降の砥石分類図



第62図　古代以降の砥石（A類）出土分布図



第63図　古代以降の砥石（B・C・D類）出土分布図

器種で述べたように、発掘調査以前の畑耕作に際し集められたものである。B・C・D類は出土数が少ないこともあるが、9～20・B～Gグリッドに散布する。いずれも縄文時代の遺物分布と、大きく異なる。

分類＼計測値	平均長(cm)	平均幅(cm)	平均厚(cm)	平均重(g)
A類	20.0	10.6	5.8	1710.0
B類	8.2	4.7	1.8	113.0
C類	6.4	3.0	1.6	41.0

第36表　古代以降の砥石平均計測値表

大きさ・重さ　完形・略完形・接合完形品を対象とした。対象数はA類33点、B類5点、C類4点である。D類は徹底的に使われ、破片資料しか残っていない。A類は規格品でないため、また採取が容易なため大きく重い。B・C類は規格品であり、A類に比べ小さく軽くなる。B類とC類では、分類基準を反映し、B類は長さと幅が大きくなり重くなる。

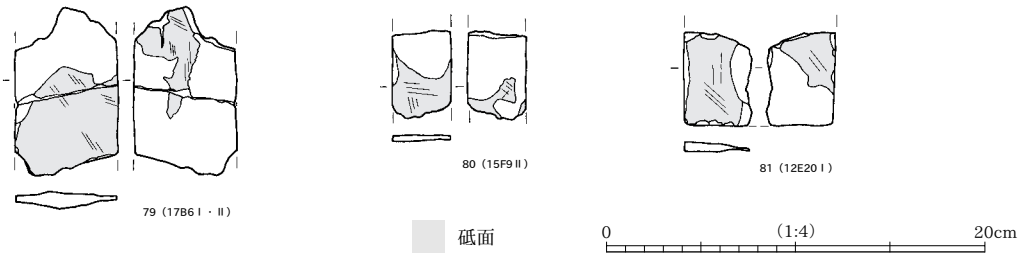
分類＼石材	凝灰岩	緑色凝灰岩	頁岩	合計
A類	104	72		176
B類	20	1		21
C類	10	3		13
D類			9	9
不可	33	4		37
合計	167	80	9	256

第37表　古代以降の砥石石材表

石　　材　分類別に石材選択が大きく異なる。A類は凝灰岩（59％）と緑色凝灰岩[1)]（41％）がほぼ半数ずつ使用されるのに対し、B・C類は凝灰岩[2)]が圧倒的である。D類はすべて頁岩で占められる。分類基準にあるようにA類が在地産砥石、B・C類は規格品、D類は広域流通品であるからである。

1）石材分類した軟質な凝灰岩・緑色凝灰岩は、色で分類したものであり、石質は同じである。したがって、石材名は分かれているが同石材である。

2）B・C類の凝灰岩は、A類の凝灰岩とは同石材名であるものの、石質はA類が軟質、B・C類がやや硬質でまったく異なる。



第64図　古代以降の砥石（D類）実測図

遺存状態　大きさ・重さでも触れたが、完形品の比率が極めて少ない。A類のみ32点（18％）が完形であるが、在地産で採取が容易なためである。これに対し、B・C・D類は貴重な搬入品のため、破損品が廃棄されたものである。

そ の 他　古代以降の砥石は、分類ごとに分布、大きさ・重さ、石材が異なる。A・D類は中世の、B・C類は近世以降の所産と考えている。

D　石　製　品（58～60）

出土数は少なく、3点のみである。

58は**石臼**である。上臼の挽き木孔部分から下面にかけての破片である。安山岩製。

59は一字一石経の**経石**である。長さ3.4cm、幅4.1cmの扁平礫に「礼」の字が書かれている。凝灰岩製。

60は石製品と思われるが、**器種分類不明**である。長さ5.5cm、幅3.7cm、厚さ2.4cmの直方体の礫に一孔穿たれている。当初、砥石と考えたが、一孔穿たれているため、器種分類不明とした。

E　金 属 器 類（61～78）

出土数は多くないが、鉄製品・銭貨・鉄滓などが出土している。以下、掲載順に説明する。

61～64は**鉄製品**である。61はつまみの付く鉄製の蓋、62は鉄製の容器の破片、63は刃渡りの短い刃物類、銅64は断面楕円状の棒状鉄製品である。

65は銅製の**かんざし**である。

66～68は江戸時代の**銭貨**である。66～67は「寛永通宝」（寛永3年：1626年初鋳）、68は「文久永宝」（文久3年：1863年初鋳）である。江戸時代の銭貨はこの他25枚出土しているが、近世墓の「六道銭」と推定される。

69～78は**鉄滓**として掲載したものである。分析の結果、69・71・74～76は鍛冶滓、70・78は含鉄鉄滓、72は青銅塊、77は鉄塊系遺物、73は滓またはコークスと推定されている。73は近代以降の紛れ込みと推定される。69～78は科学分析をしているため、「第Ⅵ章1　北野遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」に詳述されている。

第Ⅵ章　自然科学の分析

1　北野遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

大澤正己・鈴木瑞穂（九州テクノリサーチ・TACセンター）

A　いきさつ

北野遺跡は新潟県東蒲原郡上川村大字九島字長木に所在する。中世以降に推定される土坑（SX465）及びその周辺から鉄滓、羽口などの鍛冶関連遺物が出土している。遺跡内の金属器生産の実態を検討するため、金属学的調査を行う運びとなった。

B　調査方法

1）供　試　材

第38表に示す。鍛冶・鋳銅関連遺物計10点の調査を行った。

2）調査項目

a　肉眼観察：遺物の外観上の観察所見を簡単に記載した。これらをもとに分析試料採取位置を決定している。

b　マクロ組織：本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の５倍もしくは10倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

c　顕微鏡組織：滓中に晶出する鉱物及び鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の３μと１μで順を追って研磨している。なお金属鉄の調査では５％ナイタル（硝酸アルコール液）を、銅ないし銅合金の調査では酢酸・硝酸・アセトン混合液を腐食（Etching）に用いた。

d　ビッカース断面硬度：鉄滓中の鉱物と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

e　EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査：化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。さらに標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

f　化学組成分析：供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法

炭素（C）、硫黄（S）、：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析

g　耐火度：主に炉材の性状調査を目的とする。耐火度は、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態の温度で表示される。胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、1分間当たり10℃の速度で温度1000℃まで上昇させ、以降は4℃に昇温速度を落し、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度を示している。

C　調 査 結 果

KTN－1：椀形鍛冶滓

a　肉眼観察： 670gを測る大型の二段椀形鍛冶滓である。側面1面が破面であるが、完形に近い。上段部は特殊金属探知機での反応はないが、暗茶褐色の銹化物が広範囲で観察される。

また下段の上面及び側面から下面にかけて、長さ10mm以下の細かい木炭痕が密にみられる。下面の周辺には一部灰褐色の鍛冶炉床土が固着しており、表面には暗灰色の鍛造剥片が複数確認される。

b　マクロ組織：第73図に断面を示した。供試材の採取位置では、試料表層に微細な金属鉄ないし銹化鉄が散在しているが、まとまった鉄部はみられない。また全体に発達した白色粒状のウスタイト（Wustite：FeO）が晶出している。

c　顕微鏡組織：第66図①～③に示す。①の中央は試料表層に付着する鍛造剥片（注1）である。断面表層（写真上側）からヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、ウスタイト（Wustite：FeO）の3層が確認された。さらにウスタイトには結晶粒の痕跡が残存しており、鍛打工程前半段階の派生物の可能性が高い。②③は滓部の拡大である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。これは鍛錬鍛冶滓でごく一般的な組成である。

d　ビッカース断面硬度：第66図③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は422Hvであった。ウスタイトの文献硬度値（注5）450～500Hvの下限をやや下回るが、測定時の亀裂等による誤差と考えられる。

e　化学組成分析：第39表に示す。全鉄分（Total Fe）59.87％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.13％、酸化第1鉄（FeO）55.87％、酸化第2鉄（Fe_2O_3）23.32％の割合であった。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）17.95％で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は1.96％である。主に製鉄原料の砂鉄に由来する二酸化チタン（TiO_2）は0.10％、バナジウム（V）が0.01％と非常に低値である。また酸化マンガン（MnO）も0.06％と少なく、銅（Cu）0.02％であった。鉄分の割合が高く、砂鉄に由来する脈石成分（Ti，V，Mn）は極めて低値であった。鉱物・化学組成の特徴から、当試料は鉄器製作の鍛錬鍛冶工程での排出滓である。

KTN－2：含 鉄 鉄 滓

a　肉眼観察： 288gを測る比較的大型で不定形の含鉄鉄滓である。端部にごく小さな破面は見られる

が、ほぼ完形の滓である。試料上面には一部黒色ガラス質滓が付着しており、羽口先端の溶融滴下物の可能性が高い。さらにその周囲には、暗灰色で流動状の滓が広がる。また端部にはやや扁平な鉄部が確認される。この箇所は特殊金属探知機のＬ（●）で反応があり、まとまった金属鉄が遺存する。

下面には灰褐色砂質の鍛冶炉床土が広い範囲で固着している。さらに暗灰色の鍛造剥片が複数観察された。

ｂ　マクロ組織：第74図に示す。当試料中には不定形の金属鉄部が遺存する。内部には中小の気孔が多数発生するが、まとまりのある鉄塊である。また鉄中の炭素含有量は高く、過共析（＞0.77％C）組織～白鋳鉄（＜4.23％C）組織が確認された。

ｃ　顕微鏡組織：第66図④～⑧に示す。④は滓部である。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛冶滓の晶癖であった。

⑤～⑧は金属鉄を５％ナイタルで腐食した組織である。⑤のような亜共晶組成白鋳鉄組織が広範囲で分布する。ただし⑥の中央のような過共析組織を呈する箇所も点在する。

ｄ　ビッカース断面硬度：第66図⑦⑧の白鋳鉄の硬度を測定した。⑦の素地パーライトの硬度値は358Hv、⑧のレデブライトの硬度値は785Hvであった。それぞれ組織に見合った値である。

ｅ　化学組成分析：第39表に示す。滓部の調査を実施した。全鉄分（Total Fe）39.28％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.25％、酸化第１鉄（FeO）37.35％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）14.29％の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は44.03％と高値で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）も6.11％と多い。主に製鉄原料の砂鉄に由来する二酸化チタン（TiO_2）は0.18％、バナジウム（V）が0.01％と非常に低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.23％、銅（Cu）0.03％である。

当試料中の金属鉄は、大半が鋳鉄組織を呈する炭素含有量の高い鉄塊であった。内部の気孔は圧着のない状態から、鍛打作業前の鍛冶原料と判断される。鉄器の用途に応じた炭素量に調整する前に、鍛冶炉内に落下して、滓中に取り残された可能性が考えられる。当試料の滓部は鉱物、化学組成をみると、製鉄原料の砂鉄に由来するチタン（Ti）の影響はほとんど無い。脱炭を目的とした下げ過程の滓とみてよかろう。なお鋳鉄塊を主な鍛冶原料とする場合、チタン含有量が高くはなるまい。炭素含有量の低い鋼と比べて、鋳鉄は低温で溶融するので滓と分離し易く、鍛冶原料（製錬系鉄塊もしくは廃鉄器鋳鉄）の製錬滓の固着が少ないためである。

KTN－３：椀形鍛冶滓片

a　肉眼観察：比較的大型の椀形鍛冶滓の中核部破片で510gを測る。上面から側面にかけて４面ほど破面があるが、本来の平面は真円に近い。また表層部に沿って大小の気孔が多数散在する。しかし内部は非常に緻密で、破面には強い光沢がある。下面は凹凸が少なく、深い椀形を呈する。表層には灰褐色の炉床土が固着している。

b　顕微鏡組織：第67図①～③に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色盤状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。またウスタイト粒内の微小晶出物はヘーシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）である。これも鍛錬鍛冶滓にごく一般的な組成といえる。なお鉱物組成に関しては、EPMA調査の項で詳述する。

c　ビッカース断面硬度：第67図①の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は484Hvであった。ウスタイトに同定される。

d　EPMA調査：第78図の１段目に反射電子像（COMP）を示す。１の番号を付けた素地のガラス質滓部分の定量分析値は36.9％SiO_2－16.8％Al_2O_3－7.4％CaO－4.8％K_2O－29.9％FeOであった。珪酸塩に微細ファイヤライトの析出が想定される。また2、４の番号を付けた白色樹枝状結晶の定量分析値は、２が98.2％FeO、４が99.3％FeOであった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。３の番号を付けた白色結晶内の微小晶出物の定量分析値は51.7％FeO－46.2％Al_2O_3－1.7％TiO_2であった。ヘーシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）に同定される。なおわずかにチタン（Ti）を固溶する。さらに５の番号を付けた淡灰色盤状結晶の定量分析値は69.2％FeO－1.7％MgO－30.4％SiO_2であった。ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）に同定される。

e　化学組成分析：第39表に示す。全鉄分（Total Fe）49.47％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.10％、酸化第１鉄（FeO）55.15％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）9.30％の割合であった。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）34.09％で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は3.74％である。主に製鉄原料の砂鉄に由来する二酸化チタン（TiO_2）は0.45％、バナジウム（V）が0.02％と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.09％、銅（Cu）0.02％である。鉱物・化学組成の特徴から、当試料は鍛錬鍛冶工程での排出滓に分類される。

KTN－４：青銅塊（芯部：鋳鉄板）

a　肉眼観察：平面が不整三角形状で扁平な流動状の青銅塊の端部破片である。幅約20mm、最大厚8mm程の流動状の銅が２条平走した状態で固着している。表面には緑青がみられ、銅ないし銅合金と推定されるが、表面には茶褐色の錆化物も顕著である。なお、側面をみると芯に薄板状の錆化鉄部が挟まっており、銅と鉄が複合した遺物といえる。

b　マクロ組織：第75図に示す。上段は腐食なし、下段は青銅部の金属組織観察のため、酢酸・硝酸・アセトン混合液で腐食した状態を示した。観察面では、芯部に厚さ2mm程の板状の鋳鉄片が２か所確認される。さらにその周囲を流動状の青銅部が取り巻いている。青銅部は（二の字状）の試料左側と（工の字状）の右側で若干色調が異なり、右側の方が明るい赤銅色を呈する。また顕微鏡組織の項で詳述するが、金属組織も違いがある。なお断面の状態から右側→左側の順に凝固したと推定される。断面にはきれいな円形の気孔がみられるが、左側ではごく少数、右側には多数点在している。

c　顕微鏡組織：第67図④～⑧、第68図①～⑤に示す。第67図④～⑥は試料上面の青銅部の拡大である。④はマクロ写真左側（二の字状）の暗色部の組織を示した。樹枝状初晶及び素地に多角形結晶が確認された。また⑤⑥はマクロ写真右側（工の字状）の明色部の組織である。こちらには樹枝状初晶はみられず、比較的発達した多角形結晶が晶出している。⑦⑧は芯部の錆化鉄部拡大である。自然腐食を受けた、亜共晶組成白鋳鉄組織である。第68図①は試料中央である。２条の流動状青銅部の接合部分を連続写真で提示している。また②～⑤は試料下面側青銅部の拡大である。②③は明色部の拡大で、やはり発達した多角形結晶のみが晶出する。さらに粒界には微細な青灰色の銅鈹（注6）が散在する。④⑤は暗色部の拡大で、全面に樹枝状初晶がみられるため、明色部と比較して凝固速度が速かったものと判断される。

d　ビッカース断面硬度：第68図①の青銅部の硬度を複数箇所測定した。明色部の硬度値は41～58Hvと非常に低値であった。これに対して、暗色部の硬度値は72～80Hvと全体に硬質である。これはEPMA調査の項で詳述する金属中に固溶する不純物（As、Sb）の有無を反映したものであろう。

e　EPMA調査：第78図の２段目左側に、青銅（明色部）の反射電子像（COMP）を示した。１の番号を付けた結晶粒界の不定形暗青灰色部は、特性Ｘ線像をみると硫黄（S）に強い反応がある。定量分析値は87.3％Cu－1.4％Sn－11.4％Sで白鈹（Cu_2S）に同定される。素地の多角形結晶は、特性Ｘ線像を見ると銅（Cu）の反応が強く、錫（Sn）にも外周部を中心に弱い反応がある。また２の番号を付けた素地部分の定量分析値は98.1％Cu－1.9％Snであった。少量錫を添加した青銅である。さらにもう１視野第79図の１段目左側に、青銅（暗色部）の反射電子像（COMP）を示した。特性Ｘ線像をみると、銅中に点在する青灰色部は亜鉛（Zn）、鉛（Pb）、硫黄（S）に反応がある。１の番号を付けた暗青灰色部の定量分析値は53.6％Cu－28.5％Pb－4.8％Zn－3.3％As－2.2％Sb－1.7％Sn－1.9％Sであった。銅（Cu）、鉛（Pb）を主体とするが、多数の金属元素を含む化合物であった。さらに２の番号を付けた明青灰色部は38.1％Cu－46.9％Pb－4.6％As－9.0％Sb－1.1％Snであった。この箇所も銅（Cu）、鉛（Pb）を主体であるが、アンチモン（Sb）の高値傾向が著しい。

また明赤銅色を呈する樹枝状初晶部は、特性Ｘ線像をみると銅（Cu）にのみ強い反応がある。これに対して素地部分には、錫（Sn）、砒素（As）、アンチモン（Sb）が分布している。３の番号を付けた樹枝状初晶部の定量分析値は98.1％Cu－0.9％Sb－1.1％Sn。４の番号を付けた素地部分の89.0％Cu－6.2％As－2.7％Sb－2.2％Snであった。初晶部は銅の純度が高く、素地部分では砒素（As）、アンチモン（Sb）の含有量が高い。

以上の結果から、当試料の表層は少量（約１～２％）錫（Sn）を添加した青銅と判断される。また当試料は流動状の青銅が２条接着しているが、両者には脈石成分差が認められる。マクロ写真左半部は砒素（As）、アンチモン（Sb）の含有量が高く、さらに鉛（Pb）、亜鉛（Zn）も検出されている。これに対して右半部は硫化物（銅鈹）が多数散在しているが、銅（Cu）、錫（Sn）以外の金属元素は検出されなかった。これは原料の銅鉱石の成分差を反映している。金属組織をみると、両者の冷却速度にはかなり差があると考えられる。この２条の青銅は時間差をおいて、流動・凝固したと推測される。

さらに芯部には薄板状の白鋳鉄片が存在するが、意図的なものか偶然混入したか判然としない。当試料は青銅製品の鋳造に伴う派生物であることは間違いないが、どのように生じたかに関しては不明な点が多い。

KTN－5：滓？（コークスか？）

a　肉眼観察：不整方柱状の破片である。微細な気孔が密に存在する、非常に軽い質感の試料である。ガラス質成分の高い滓のようにも、熱影響を強く受けた炉材破片のようにもみえ、外観からはその性状が判然としない。

b　顕微鏡組織：第69図①～⑤に示す。全体に非晶質の暗色部が広がり、気孔が密に分布している。ただし部分的に繊維状の組織がみられる。さらに繊維状組織の周辺の小孔は石炭に残存する道管の可能性がある。これが道管であれば木部に道管をもつ被子植物が出現する、新しい時期（ジュラ紀以降）の石炭を原料としたと推測される。

c　化学組成分析：第39表に示す。炭素（C）86.76％、硫黄（S）0.45％であった。

当試料は多孔質で金属光沢のある黒灰色を呈すること、炭素が主成分で硫黄の含有量が高いなどの特徴を示す。このため石炭ないし石油蒸留残留物を、高温で蒸し焼きして、製造するコークスの可能性が高い。近代以降の混入品と推測される。

KTN－6：椀形鍛冶滓

a　肉眼観察：83gと小型で完形の椀形鍛冶滓である。平面は細かい不規則な凹凸のある不整楕円形を呈する。地の色調は光沢の強い黒灰色で緻密な滓である。また上面は比較的平滑で中央部がやや膨らんでいる。下面には中小の気孔が散在する。

b　顕微鏡組織：第70図①に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。

c　ビッカース断面硬度：第70図①の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は426Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の下限を下回るが、測定時の亀裂等による誤差と考えられる。ウスタイトとみてよかろう。

d　化学組成分析：第39表に示す。全鉄分（Total Fe）68.08％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.04％、酸化第1鉄（FeO）71.81％、酸化第2鉄（Fe_2O_3）17.48％の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）9.55％と低値で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は0.67％である。主に製鉄原料の砂鉄に由来する二酸化チタン（TiO_2）は0.04％、バナジウム（V）が0.01％と非常に低値であった。また酸化マンガン（MnO）も0.04％と少ない。銅（Cu）が0.02％である。鉄分主体で、製鉄原料に由来する脈石成分（Ti、V、Mn）は非常に低減した成分系であった。廃鉄器の再溶解の滓とみてもおかしくない。鉱物・化学組成の特徴から、当試料は鍛錬鍛冶滓と推定される。

KTN－7：椀形鍛冶滓片

a　肉眼観察：扁平な椀形鍛冶滓の端部破片と推定される。平面は不整四角形で、上下面と側面1面は本来の自然面であるが、残る側面3面は直線状の破面である。上面表層は、強い酸化雰囲気に曝されたためか黒灰色を呈する。また地の色調は灰褐色である。上面表層は滑らかな流動状で、下面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。破面には細かい気孔が散在するが、緻密な滓である。

b　顕微鏡組織：第70図②～④に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

c　ビッカース断面硬度：第70図②の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は498Hvで、ウスタイトに同定される。

d　化学組成分析：第39表に示す。全鉄分（Total Fe）58.90％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.03％、酸化第1鉄（FeO）66.35％、酸化第2鉄（Fe_2O_3）10.43％の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は22.10％で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は1.13％である。主に製鉄原料の砂鉄に由来する二酸化チタン（TiO_2）は0.19％、バナジウム（V）が0.02％と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.05％、銅（Cu）0.02％である。鉄分が高く、脈石成分の低減した組成であった。前述KTN－6椀形滓よりも脈石成分は多い。当試料も鍛錬鍛冶滓に分類されるが鉄素材の素性に差異をもつ。

KTN－8：椀形鍛冶滓

a　肉眼観察：329gを測る大型で扁平な椀形鍛冶滓である。側面2面が破面であるが、比較的本来の形状を保っており、平面は細長い形状であったと推測される。上面端部よりにごく狭い範囲で黒色ガラス質滓が付着しており、羽口先端溶融物の可能性が高い。また上面端部は酸化雰囲気に曝されたのか、一部紫紅色を呈する。下面は細かい木炭痕による凹凸が顕著で、広範囲に灰褐色の炉床土が付着する。

b　顕微鏡組織：第70図⑤～⑦に示す。当試料中には球状や板状の白色部が多数分散される。⑤～⑦の白色部はその拡大で、白色粒状結晶ウスタイトが凝集気味に晶出している。鉄素材の表面が加熱により再酸化して生じたものと推定される。さらに素地の暗黒色ガラス質滓中には淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトや、炉材の溶融物が主成分である暗色多角形結晶などが存在する。製鉄原料の砂鉄に由来するチタン（Ti）を含む晶出物がなく、鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

c　ビッカース断面硬度：第70図⑤の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は470Hvで、ウスタイトに同定される。

d　化学組成分析：第39表に示す。全鉄分（Total Fe）44.01％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.07％、酸化第1鉄（FeO）39.87％、酸化第2鉄（Fe_2O_3）18.51％の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は37.21％と高値で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は5.25％である。主に製鉄原料の砂鉄に由来する二酸化チタン（TiO_2）は0.15％、バナジウム（V）0.01％であった。また酸化マンガン（MnO）は0.13％、銅（Cu）0.01％である。当試料は炉材に由来する造滓成分（Si、Al、Ca、Mg、K、Na）の割合が高く、製鉄原料の砂鉄に由来する脈石成分（Ti、V、Mn）は低値であった。赤熱鉄素材の酸化防止に塗布された粘土汁の影響が表われたのだろうか。当試料も鍛錬鍛冶滓と推定される。

KTN－9：鉄塊系遺物

a　肉眼観察：36gと小型で不定形の鉄塊系遺物である。外観上明瞭な滓部は見られない。また特殊金属探知機のL（●）で全面に反応がある、鉄主体の遺物である。表面は滑らかな流動状で、炭素含有量の高い鋳鉄塊の予測が付く。ただし表面の凹凸は細かい木炭痕によると考えられ、鍛冶処理中途の鉄塊系遺物の可能性が考えられる。本来は廃鉄器（鋳鉄）だった位置づけは出来ないだろうか。

b　マクロ組織：第76図に示す。全面亜共晶組成白鋳鉄組織を呈する鉄塊であった。表層に滓の固着はみられない。また内部の気孔はわずかで緻密な鉄塊である。

c　顕微鏡組織：第71図①～⑧に示す。①は腐食無しの状態で、鉄中非金属介在物を示した。暗色部

は微細な硫化鉄（FeS）である。また中央の硫化物は明暗２相が確認されるが、一部マンガン（Mn）を固溶していると推測される。なお介在物の組成に関しては、EPMA 調査の項で詳述する。②～⑧は５％ナイタルで腐食した組織を示した。白色柱状のセメンタイト、蜂の巣状のレデブライト、黒色層状のパーライトからなる亜共晶組成白鋳鉄組織が確認された。また黒色点列状のステダイト（Steadite：Fe－Fe_3C－Fe_3P）が晶出しており、燐（P）の影響がみられる。

d　ビッカース断面硬度：第 71 図⑦⑧の白鋳鉄組織の硬度を測定した。⑦のパーライト部分の 314Hv、⑧のセメンタイト部分の硬度値は 1017Hv であった。それぞれは硬質であるが組織に見合った値である。

e　EPMA 調査：第 80 図の１段目に反射電子像（COMP）を示す。６の番号を付けた、黒色点列状の共晶組織個所の定量分析値は 119.0 ％ FeO－33.6 ％ P_2O_5 であった。酸化物定量での測定値のため、100 ％を超える値となっているが、ステダイト（Steadite：Fe－Fe_3C－Fe_3P）に同定される。さらに硫化物の組成調査を行った。７の番号を付けた暗色部の定量分析値は 43.7 ％ FeO－37.1 ％ MnO－34.5 ％ S であった。硫化鉄（FeS）と硫化マンガン（MnS）の固溶体である。また８の番号を付けた明色部の定量分析値は 85.6 ％ FeO－2.9 ％ TiO_2－1.2 ％ V_2O_3－30.1 ％ S であった。硫化鉄（FeS）で、若干 Ti、V を固溶している。このため、当試料の始発原料は砂鉄と推定される。

当試料は砂鉄を製錬して造られた鋳鉄塊で、鍛冶原料として搬入された可能性が高い。鋳鉄塊は処女鉄か廃鉄器か問題となろう。同様の鉄塊を鍛冶原料とした場合、付着滓の除去を行う必要はなく、鍛冶炉で脱炭処理後鉄器製作を行ったと推測される。また鉄中には硫黄（S）、リン（P）の影響があり、高温で製錬（注 7）された鉄塊と判断される。なお鉄中の硫黄やリンは、鍛冶加工時の鍛接不良や製品の脆化といった影響を及ぼすため、鍛造製品への悪影響が懸念される。

KTN－10：含鉄鉄滓（鍛冶系）

a　肉眼観察：36g と小型で扁平な形状の含鉄鉄滓である。表層は細かい凹凸がある暗灰色の滓に覆われており、鍛冶系の含鉄鉄滓の可能性が高い。また試料表面には暗茶褐色の錆化鉄部があり、それを中心に錆化による放射割れが発生する。この部分は特殊金属探知機の特Ｌ（☆）で反応があり、まとまった鉄部を内包する。

b　マクロ組織：第 77 図に示す。滓中には小型のまとまった金属鉄部を遺存する。亜共析組織～共析組織の鉄塊である。また鉄部表層や気孔の周囲は、フェライトの面積率が高く、加熱により脱炭された可能性が高い。

c　顕微鏡組織：第 72 図①～⑨に示す。①～③は滓部である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライトが素地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。④～⑨は金属鉄を５％ナイタルで腐食した組織である。パーライト素地に針状セメンタイトが析出する亜共析組織部分の拡大である。なお⑧左側の針状フェライト中央部には、点列状の黒色部がみられる。これは燐化鉄共晶（α＋Fe_3P）である。

d　ビッカース断面硬度：第 72 図①の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は 420Hv であった。ウスタイトの文献硬度値の下限をやや下回るが、測定時の亀裂等による誤差と考えられる。ウスタイトに同定される。

また第 72 図⑧⑨の亜共析組織部分の硬度を測定した。⑧の発達した針状フェライトが晶出する箇所の硬度値は 151Hv、⑨は素地のパーライト部分で硬度値は 195Hv であった。後者はやや軟質傾向を呈した

がそれぞれ組織に見合った値といえる。

e　EPMA調査：第80図の２段目に滓部の反射電子像（COMP）を示す。12の番号を付けた素地のガラス質滓部分の定量分析値は42.3％SiO2－13.7％Al_2O_3－7.5％CaO－5.7％K_2O－26.3％FeOであった。珪酸塩に微細ファイヤライトの析出が想定される。また13の番号を付けた白色粒状結晶の定量分析値は、99.1％FeOでウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。さらに14の番号を付けた淡灰色木ずれ状結晶の定量分析値は68.3％FeO－1.7％MgO－30.3％SiO_2であった。ファイヤライト（Fayarite：2FeO・SiO_2）に同定される。なお微量Mgを固溶する。

金属鉄中の不純物調査を実施した。第80図の３段目左上に調査箇所の反射電子像（COMP）を示す。写真中央の球状暗色部は非晶質珪酸塩系の介在物で、その上側に共晶組織、両者を取り巻くように微小黄色異物がみられる。特性Ｘ線像を見ると、共晶組織に対応して燐（P）が分布しており、この箇所は燐化鉄共晶（$\alpha + Fe_3P$）が存在する。さらにその周囲にも若干燐が固溶している状況があるために、定量分析を実施した。１の番号を付けた共晶組織の定量分析値は、86.0％Fe－13.4％Ｐであった。また２の番号を付けた箇所の定量分析値は94.2％Fe－3.1％P、３の番号を付けた箇所の定量分析値は99.0％Fe－0.8Pであった。共晶組織を中心に、その周囲にも燐偏析が生じていることが判明した。

さらにもう１視野、金属鉄中の不純物の調査を行った。第81図の１段目左上に調査箇所の反射電子像を示す。また特性Ｘ線像を見ると、中央の不整円形の黄褐色異物に対応して硫黄（S）が分布している。９の番号を付けたこの箇所の定量分析値は62.6％Fe－37.4％Ｓであった。硫化鉄（FeS）に同定される。またその周囲の共晶組織部分と対応して、燐（P）の分布が確認される。10の番号を付けたこの箇所の定量分析値は91.9％Fe－3.5％Ｐであった。燐化鉄共晶（$\alpha + Fe_3P$）と推定される。さらにその周囲に晶出するフェライト部分の定量分析も実施した。11の番号を付けた箇所の定量分析値は、99.1％Fe－0.6％Pで若干燐（P）を固溶する。以上のように、当試料中の鉄部には硫黄（S）、燐（P）の影響が確認された。

f　化学組成分析：第39表に示す。全鉄分（Total Fe）60.43％に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.15％、酸化第１鉄（FeO）19.03％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）65.04％の割合であった。含鉄試料のため錆化鉄の影響が強く、酸化第２鉄が高い割合を占めている。造滓成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）14.80％で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は1.06％である。主に製鉄原料の砂鉄に由来する二酸化チタン（TiO_2）は0.10％、バナジウム（V）が0.01％と微量検出された。また酸化マンガン（MnO）は0.04％、銅（Cu）が0.04％である。さらに硫黄（S）は0.04％、五酸化燐（P_2O_5）は0.22％で、ともにやや高値であった。

当試料の金属鉄中にも硫黄（S）、燐（P）の影響が確認された。やはり高温製錬で造られた鉄塊の特徴が残る。また金属鉄外周部は、芯部と比較してやや炭素量が低い。当鉄塊は脱炭途中で鍛冶炉内に取り残された可能性が考えられる。また滓中は製鉄原料の砂鉄に由来するチタン（Ti）を含む晶出物がなく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

Ｄ　ま　と　め

北野遺跡から出土した鍛冶・鋳銅関連遺物を調査した結果、次の点が明らかになった。

１）鍛冶関連遺物

当遺跡では、主に炭素含有量が高く不純物の少ない鋳鉄塊（銑）や廃鉄器が、鍛冶原料に用いられてお

り、主に脱炭処理と鉄器製作が一貫して行われた可能性が高い。

a　鉄塊系遺物（KTN－9）は不定形小型の白鋳鉄で、鍛冶原料の製錬系鉄塊もしくは廃鉄器鋳鉄と推測される。また鍛冶工程で派生した含鉄鉄滓（KTN－2）中にも炭素含有量が高く、ほぼ鋳鉄組織からなる金属鉄部を遺存する。これらの金属鉄の調査結果から、当遺跡内には主に炭素含有量が高く、製錬滓の固着が少ない鉄塊が搬入されたと推測される。

また介在物の組成調査の結果から、鉄塊系遺物（KTN－9）の原料は砂鉄と推定される。さらに鉄中には硫黄（S）、燐（P）などの不純物の影響が大きいところから、高温製錬で造られた鉄塊と判断される。なお鍛冶工程で派生した含鉄鉄滓（KTN－10）の金属鉄中でも、同様に硫黄（S）、燐（P）の影響が確認された。これらの元素は、鍛冶加工時の鍛接不良や製品の脆化等を起こす原因となるため、鍛造製品への悪影響が懸念される。

b　分析調査を実施した鉄滓はすべて（KTN－1、3、6～8）鍛錬鍛冶滓に分類される。何れも製鉄原料の砂鉄に由来する脈石成分（Ti、V、Mn）は微量であった。前述した、不純物の少ない鉄塊もしくは廃鉄器が鍛冶原料との推測と符合する結果が指摘できる。

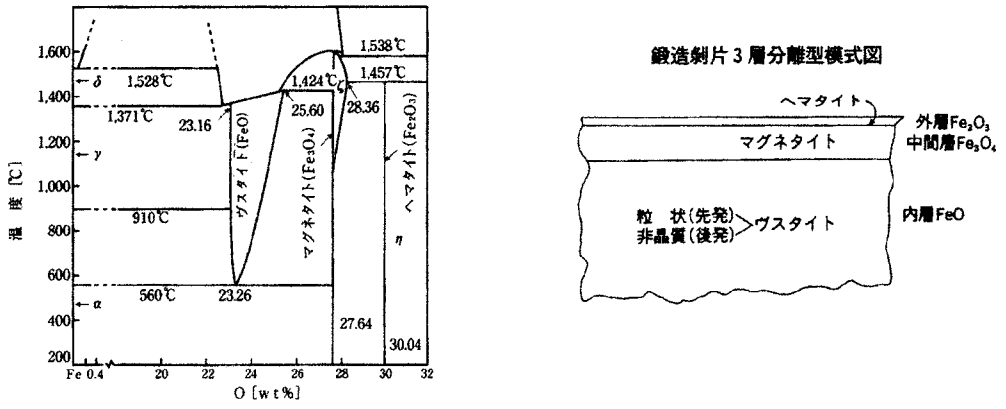
なお椀形鍛冶滓（KTN－8）表層の土砂中には、鍛打に伴い派生する鍛造剥片が検出された。当遺跡では鉄器製作の鍛錬鍛冶工程が主に行われた裏付けとなりうる。

2）鋳銅関連遺物

青銅塊（芯部：鋳鉄片）（KTN－4）が出土して、スクラップとしての搬入か、遺跡内では青銅製品の製作も行われたのか注目される。KTN－4の表層は流動状の青銅が2条接着した状態であり、ともに少量（約1～2％）の錫（Sn）を添加した青銅であった。ただし両者の冷却速度には差がみられる。マクロ写真左半（暗色）部は砒素（As）、アンチモン（Sb）の含有量が高く、鉛（Pb）、亜鉛（Zn）も含まれる。しかし右半（明色）部は硫化物（銅鈹）が多数散在するが、銅（Cu）、錫（Sn）以外の金属元素は含まれない。これは原料の銅鉱石の成分差を反映したものと推測される。

また断面の形状から、青銅部は明色部→暗色部の順に凝固したと判断される。暗色部は全面に樹枝状初晶が分布するのに対し、暗色部は比較的発達した多角形結晶のみが晶出するため、両者の冷却速度にはかなり差があったと判断される。この2条の青銅はある程度の時間をおいて、流動・凝固したのであろう。

さらに芯部には厚さ2mm程の薄板状の白鋳鉄片が存在する。これが意図的なものか偶然混入したものかは判然としない。当試料が青銅鋳造に伴う派生物なのは確実である。しかし、派生した状況に関しては



第65図　鍛造剥片3層分離型模式図

不明な点が多い。

（注）

（1）鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢を発する）へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる。(注2) 鍛造剥片も粒状滓同様に極めて微細な鍛冶派生物であり、発掘調査中に土中から肉眼で識別するのは難しい。通常は鍛冶趾の床面の土砂を水洗することにより検出される。鍛冶工房の調査に当っては、鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を取り上げ、水洗・選別・秤量により分布状況を把握できれば、工房内の作業空間配置の手掛りとなりうる重要な遺物でもある。(注3)
鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、大部分は内層ウスタイト（Wüstite：FeO）の３層から構成される。(注4)
鍛造剥片を王水（塩酸３：硝酸１）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）は黄変する。内層のウスタイト（Wüstite：FeO）は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ウスタイト（Wüstite：FeO）が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

（2）大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘　年報15』（平成３年度）千葉県房総風土記の丘　1992

（3）①栃木県教育委員会「5.東野田遺跡」『一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過』（栃木県埋蔵文化財調査報告書第95集）　1988
小林広治「奈良・平安時代の鍛冶の復元的考察」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊15集』哲学・史学編　1988
②大澤正己「岩田遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『岩田遺跡』（福島市埋蔵文化財報告書第91集）　1991
③大澤正己「南諏訪原遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『南諏訪原遺跡』（福島市埋蔵文化財調査報告書）　1992

（4）森岡ら「鉄鋼腐食化学」『鉄鋼工学講座』11　朝倉書店　1975

（5）日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968
ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。ウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ（Al）が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となるとさらに硬度値は上昇する。このため700Hvを超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。

（6）伊藤尚『金属通論』1983　3-2-3　Cu製錬　の記載をもとに加筆
銅の主要な鉱石に黄銅鉱（$CuFeS_2$）が挙げられる。これは主に銅（Cu）鉄（Fe）硫黄（S）で構成される鉱物である。このため鉱石中から金属銅を採取するには鉄、硫黄分を除去する作業が必要となる。
今日ではCu40～50％の銅鈹を採取し、これから金属銅を採取するのが普通である。第１段階を製鈹、第２段階を製銅という。
銅（Cu）は硫黄（S）、酸素（O）と結びつく力（親和力）にあまり差がないが、鉄（Fe）は硫黄より酸素と結びつく力の方が著しく大きい。この性質を利用して鉱石を加熱酸化するとFeSが優先的に酸化されて、鉄は酸化物（FeO）の滓になる。この滓は製錬中途の硫化銅と硫化鉄の混合物（xCu_2S・yFeS）より軽いため、炉のなかで上に浮き分離される。また硫黄はSO_2ガスとなる。
製錬中途の硫化銅と硫化鉄の混合物（xCu_2S・yFeS）をマット（鈹）、分離された滓をからみと呼ぶ。できた鈹はさらに酸化製錬され、まずFeSが除去される。次に残ったCu_2S（白鈹）が酸化されると銅（Cu）から硫黄（S）が取り除かれて金属銅が得られる。

（7）新井宏「古代日本に間接製錬法があったか」『ふぇらむ』Vol.5（2000）No.10
5　鉄滓・銑・鍮間のＰ分配理論
鉄滓と溶銑の間にＰがどのように分配されるか、Turkdoganの方法を用いて熱力学的に検討した結果、Ｐの配分には温度の影響が極めて大きく、1250℃以下では鉄滓に、1300℃以上では溶銑に配分されることを明らかにした。
さらに生成鉄が製鉄炉内で溶融状態の銑鉄であったか、固相のγ（オーステナイト）鉄であったかでＰの固溶状態は異なり、γ鉄では銑鉄に比べ１/３程度しかＰを固溶しないことを指摘している。

符号	出土位置			遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目				
	グリッド	遺構名	層			大きさ（mm）	重量（g）			マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	EPMA	化学分析
KTN-1	22F6	SX 465	覆土	椀形鍛冶滓（二段）	不明（中世以降か？）	115×86×59	670		銹化（△）	○	○	○		○
KTN-2				含鉄鉄滓（鍛冶系）		100×83×43	288	○	L（●）	○	○	○		○
KTN-3	17B13		Ⅰ層	椀形鍛冶滓		91×77×53	510	○	なし		○	○	○	○
KTN-4	10C13		Ⅱ層	青銅塊（芯部：鋳鉄板）		51×40×10	51	○	特L（☆）	○	○	○	○	
KTN-5	10E13			滓？コークス？		60×49×43	48		なし		○			○
KTN-6	10D22		Ⅰ層	椀形鍛冶滓		58×45×27	83	○	なし		○	○		○
KTN-7	10D14		Ⅱ層	椀形鍛冶滓片		43×35×20	45	○	なし		○	○		○
KTN-8	17A24		Ⅱ層	椀形鍛冶滓		130×77×35	329	○	なし		○	○		○
KTN-9	10F10		Ⅱ層	鉄塊系遺物		39×27×24	36	○	L（●）	○	○	○	○	
KTN-10	22F1		Ⅱ層	含鉄鉄滓		53×30×17	36	○	特L（☆）	○	○	○	○	○

第38表　供試材の履歴と調査項目

符号	出土位置		遺物名称	全鉄分（Total Fe）	金属鉄（Metallic Fe）	酸化第1鉄（FeO）	酸化第2鉄（Fe_2O_3）	二酸化珪素（SiO_2）	酸化アルミニウム（Al_2O_3）	酸化カルシウム（CaO）	酸化マグネシウム（MgO）	酸化カリウム（K_2O）	酸化ナトリウム（Na_2O）	酸化マンガン（MnO）	二酸化チタン（TiO_2）	酸化クロム（Cr_2O_3）	硫黄（S）	五酸化燐（P_2O_5）	炭素（C）	バナジウム（V）	銅（Cu）	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe
KTN-1	22F6 SX465	覆土	椀形鍛冶滓	59.87	0.13	55.87	23.32	12.03	2.35	1.44	0.52	1.34	0.27	0.06	0.10	0.03	0.05	0.33	0.15	0.01	0.02	17.95	0.29982	0.00167
KTN-2			含鉄鉄滓（鍛冶系）	39.28	0.25	37.35	14.29	27.32	5.53	4.48	1.63	4.19	0.88	0.23	0.18	0.06	0.10	0.75	0.19	0.01	0.03	44.03	1.12093	0.00458
KTN-3	17B13	Ⅰ層	椀形鍛冶滓	49.47	0.10	55.15	9.30	23.87	5.07	2.76	0.98	1.12	0.29	0.09	0.45	0.01	0.02	0.41	0.09	0.02	0.02	34.09	0.6891	0.0091
KTN-5	10E13		滓？コークス？	0.57	0.09	0.50	0.13	3.80	1.56	0.35	0.16	0.11	0.09	<0.01	0.06	0.05	0.45	0.11	86.76	<0.01	0.02	6.07	10.6491	0.10526
KTN-6	10D22	Ⅰ層	椀形鍛冶滓	68.08	0.04	71.81	17.48	7.31	1.04	0.45	0.22	0.41	0.12	0.04	0.04	<0.01	0.02	0.20	0.19	0.01	0.02	9.55	0.14028	0.00059
KTN-7	10D14	Ⅱ層	椀形鍛冶滓片	58.90	0.03	66.35	10.43	14.61	5.44	0.68	0.45	0.71	0.21	0.05	0.19	0.03	0.01	0.26	0.08	0.02	0.02	22.10	0.37521	0.00323
KTN-8	17A24	Ⅱ層	椀形鍛冶滓	44.01	0.07	39.87	18.51	23.16	4.01	3.68	1.57	4.14	0.65	0.13	0.15	<0.01	0.08	0.55	0.30	0.01	0.03	37.21	0.84549	0.00341
KTN-10	22F1	Ⅱ層	含鉄鉄滓	60.43	0.15	19.03	65.04	10.72	2.04	0.66	0.40	0.80	0.18	0.04	0.10	<0.01	0.04	0.22	0.30	0.01	0.04	14.80	0.24491	0.00165

第39表　供試材の組成

符号	出土位置		遺物名称	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
	グリッド	層			Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	造滓成分	Cu	
KTN-1	22F6 SX465	覆土	椀形鍛冶滓（二段、含鉄）	滓部：W＋F、付着鍛造剥片	59.87	23.32	1.96	0.10	0.01	0.06	17.95	0.02	鍛錬鍛冶滓
KTN-2			含鉄鉄滓	滓部：W＋F、金属鉄部：過共析組織～白鋳鉄組織	39.28	14.29	6.11	0.18	0.01	0.23	44.03	0.03	鉄部：鍛冶処理途中（脱炭前）の鉄塊
KTN-3	17B13	Ⅰ層	椀形鍛冶滓	滓部：W（微小H晶出）＋F	49.47	9.3	3.74	0.45	0.02	0.09	34.09	0.02	鍛錬鍛冶滓
KTN-4	10C13	Ⅱ層	青銅塊（芯部：鋳鉄板）	外周部：流動状青銅、明色部：多角形結晶、白皺散在、暗色部：樹枝状結晶＋多角形結晶、芯部：白鋳鉄片（銹化、自然腐食）	–	–	–	–	–	–	–	–	青銅鋳造での派生物、外周：少量錫（Sn）を添加した青銅、2条の流動単位ごとに成分・凝固速度が異なる
KTN-5	10E13		滓？コークス？	非晶質暗色部＋繊維状組織	0.57	0.13	0.51	0.06	<0.01	<0.01	6.07	0.02	コークス片の可能性が高い、金属器生産に関わる遺物ではなく、近代以降の混入品の可能性が高い
KTN-6	10D22	Ⅰ層	椀形鍛冶滓	滓部：W＋F	68.08	17.48	0.67	0.04	0.01	0.04	9.55	0.02	鍛錬鍛冶滓
KTN-7	10D14	Ⅱ層	椀形鍛冶滓片？	滓部：W＋F	58.9	10.43	1.13	0.19	0.02	0.05	22.10	0.02	鍛錬鍛冶滓
KTN-8	17A24	Ⅱ層	椀形鍛冶滓	滓部：W＋F	44.01	18.51	5.25	0.15	0.01	0.13	37.21	0.03	鍛錬鍛冶滓
KTN-9	10F10	Ⅱ層	鉄塊系　遺物	金属鉄：亜共晶組成白鋳鉄（ステダイト）、介在物：硫化物	–	–	–	–	–	–	–	–	鋳鉄塊（鍛冶原料、始発原料：砂鉄、高温製錬での生成鉄塊）廃鉄器鋳鉄塊の可能性も看過できない
KTN-10	22F1	Ⅱ層	含鉄鉄滓	滓部：W＋F、金属鉄部：亜共析組織～共析組織（燐化鉄共晶）、介在物：非晶質珪酸塩、硫化鉄	60.43	65.04	1.06	0.10	0.01	0.04	14.80	0.04	滓部：鍛錬鍛冶滓、鉄部：鍛冶処理途中（脱炭中）の鉄塊、（高温製錬での生成鉄）

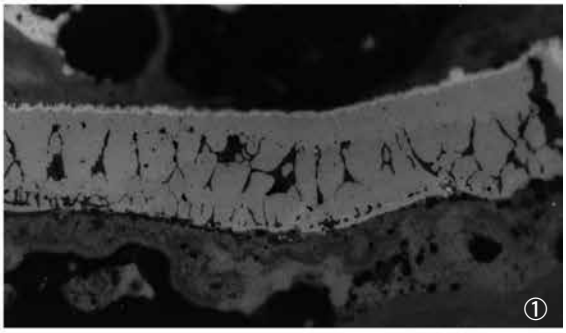
第40表　出土遺物の調査結果のまとめ

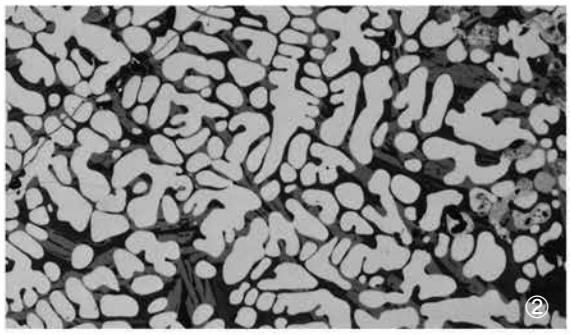
w:wustite（FeO）、F:Favalite（2FeO・SiO_2）、H:Hercvnite（FeO・Al_2O_3）

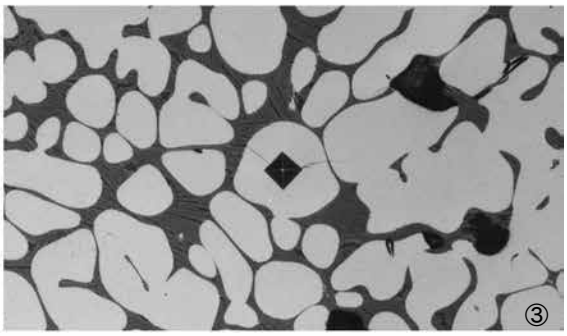
KTN-1
椀形鍛冶滓（二段）
①× 352 付着鍛造剥片
3 層分離型　内層ウスタイト凝集
②× 88 ウスタイト・ファイヤライト
③× 176 硬度圧痕：422Hv
ウスタイトか（200gf）

図版425-69

69
分析番号：KTN-1



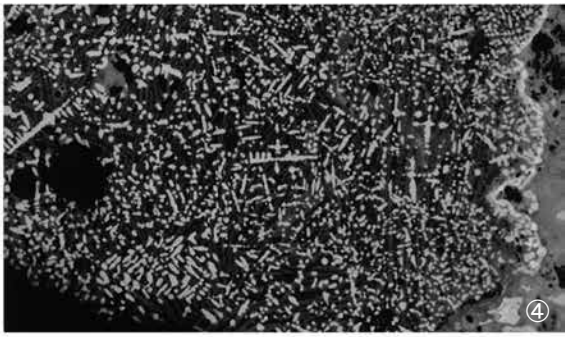


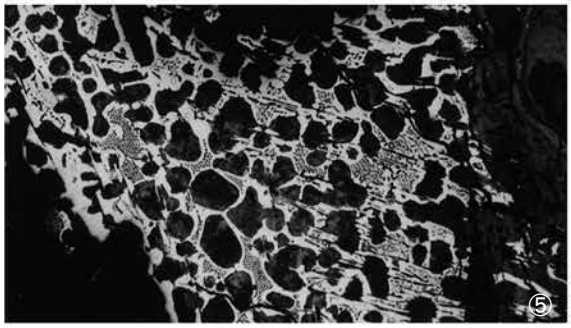


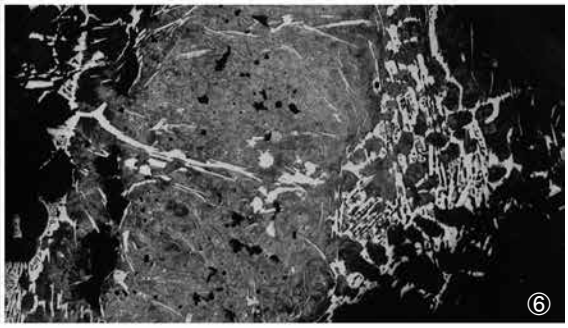
KTN-2
含鉄鉄滓（鍛冶系）
④× 88 滓部：ウスタイト・ファイヤライト
⑤～⑧金属鉄部　ナイタル etch
⑤× 44 亜共晶組成白鋳鉄組織
⑥× 44 過共析組織～白鋳鉄組織
⑦⑧× 176 硬度圧痕：
⑦ 358Hv　⑧ 785Hv（200gf）

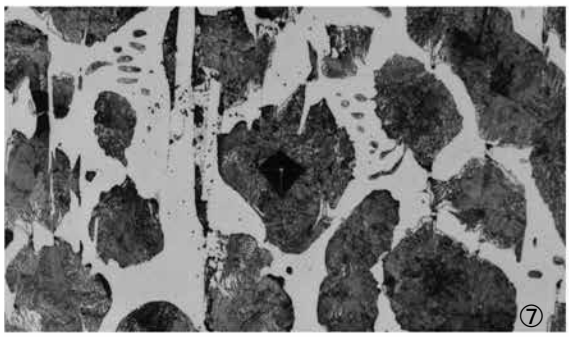
図版425-70

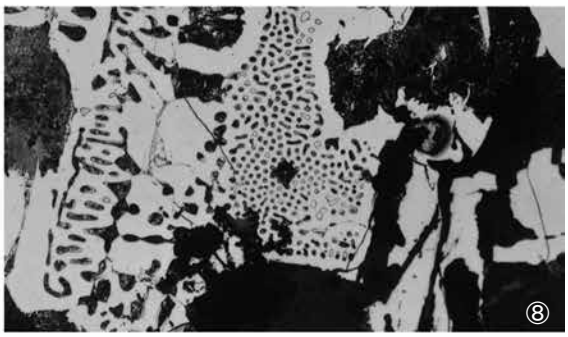
70
分析番号：KTN-2









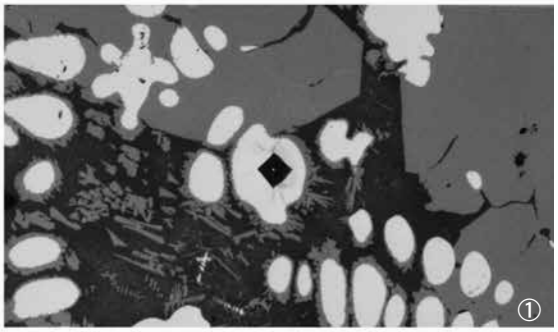


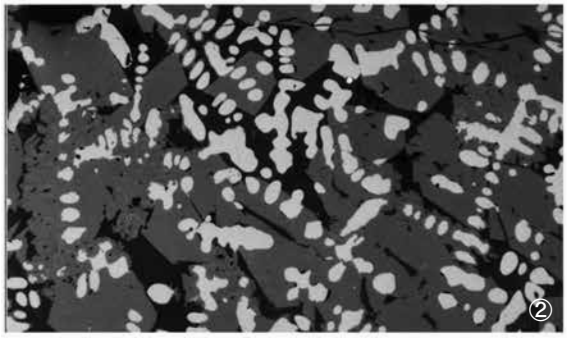
第 66 図　椀形鍛冶滓・含鉄鉄滓の顕微鏡組織

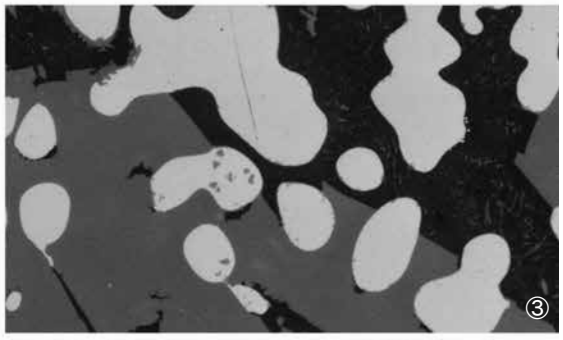
KTN-3
椀形鍛冶滓
①× 176 硬度圧痕：484Hv
ウスタイト（200gf）
②× 88 ③× 352 ウスタイト
（粒内微小・ヘーシナイト）・
ファイヤライト

図版425-71

71
分析番号：KTN-3



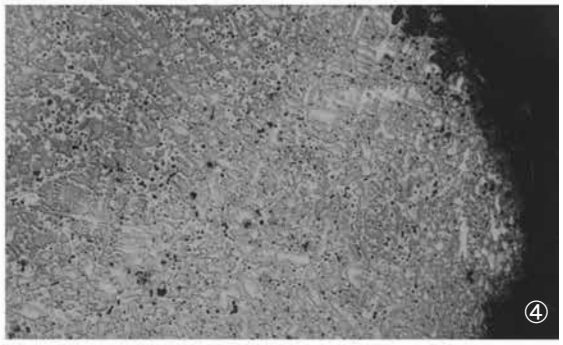


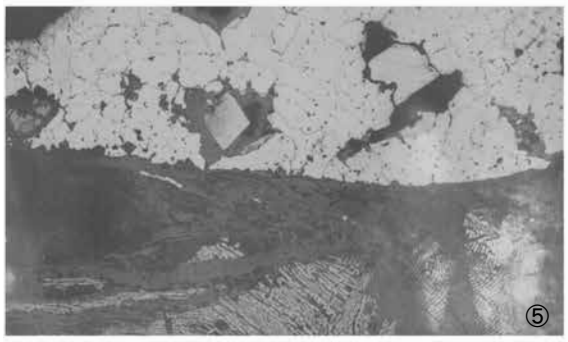


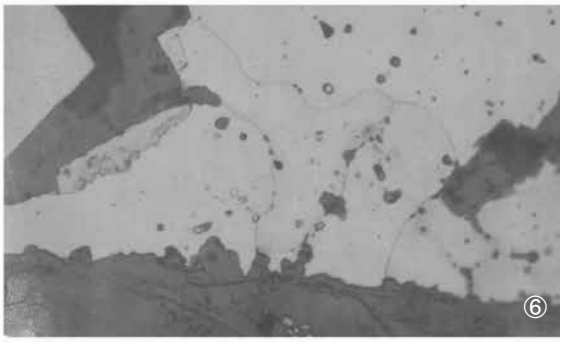
KTN-4（1）
青銅塊（芯部：鋳鉄板）
④～⑧第 69 図①の拡大
④～⑥試料上面側 青銅部
酢酸・硝酸・アセトン etch
④× 88 樹枝状初晶＋多角形結晶
⑤× 88 ⑥× 352 多角形結晶
⑦× 88 ⑧× 352 芯部：鋳鉄部
錆化・自然腐食
亜共晶組成白鋳鉄組織痕跡

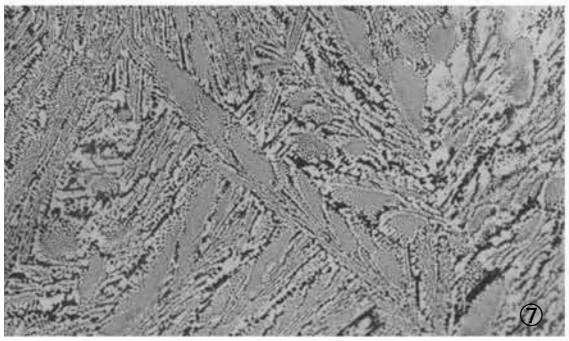
図版425-72

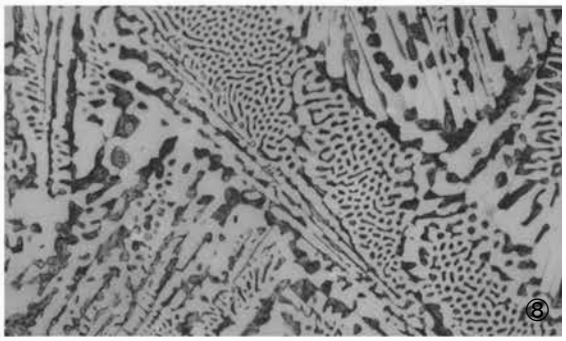
72
分析番号：KTN-4









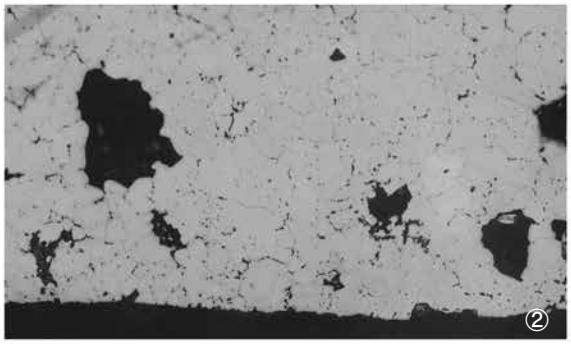


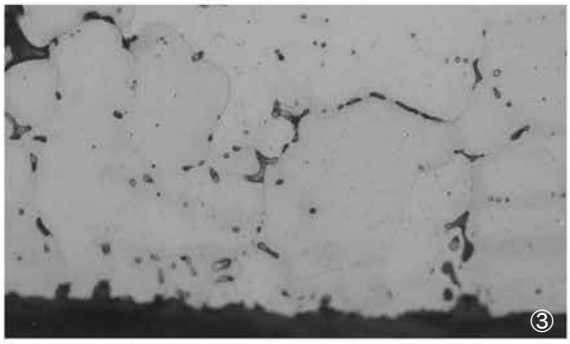
第 67 図　青銅塊（芯部：鋳鉄板）の顕微鏡組織

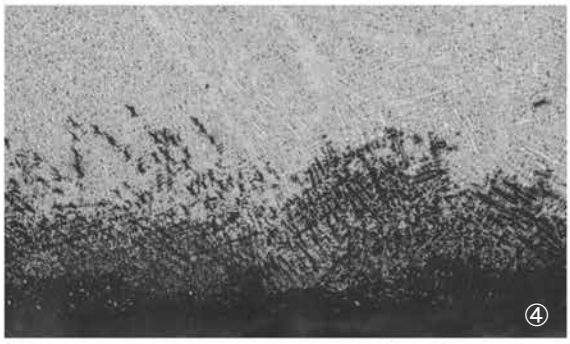
KTN-4（2）
青銅塊（芯部：鋳鉄板）
①× 44 試料断面（硬度 200gf）
中央：板状鋳鉄片（白鋳鉄）
周囲：流動状青銅
酢酸・硝酸・アセトン etch
②～⑤試料下面
②× 88 ③× 352 多角形結晶
④× 88 ⑤× 352 樹枝状初晶＋
多角形結晶

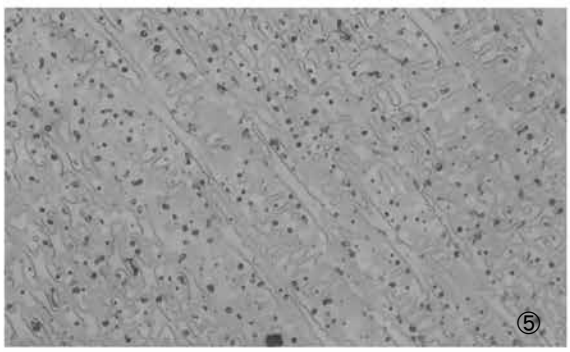
図版425-72

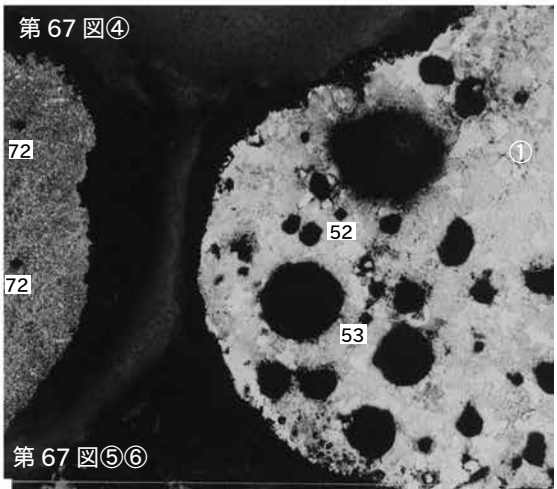
72
分析番号：KTN-4

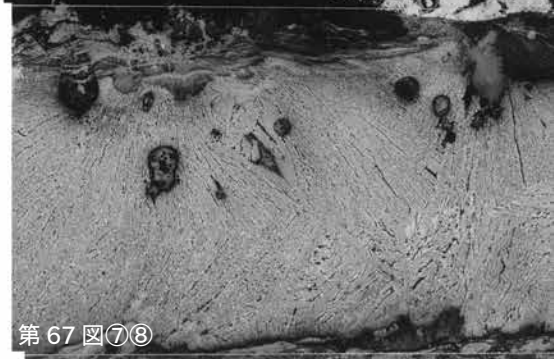


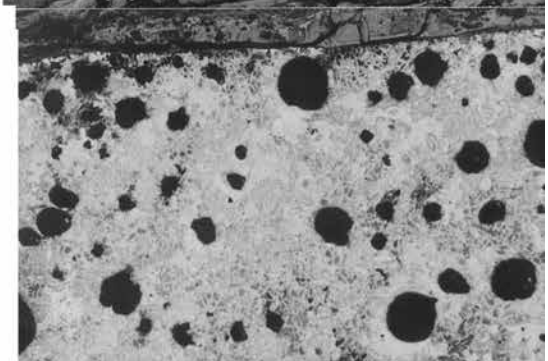


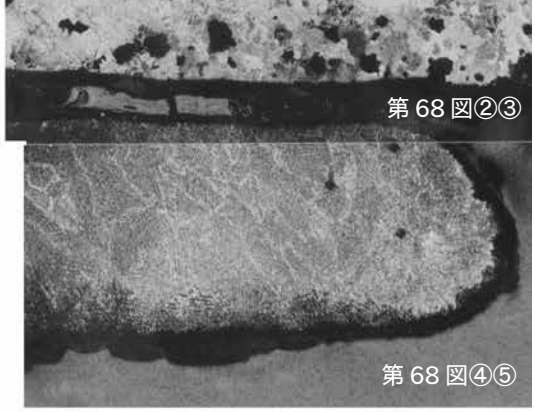












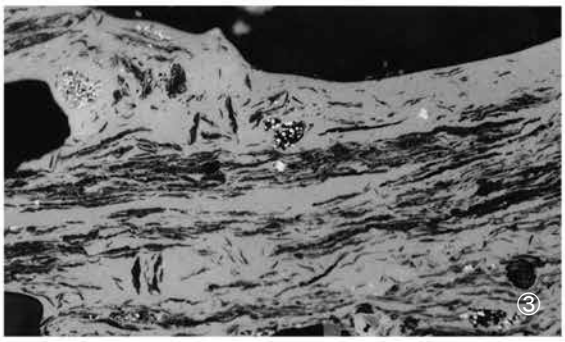
（硬度：200gf）

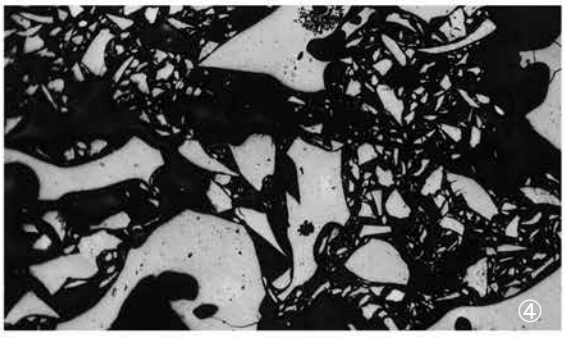
第 68 図　青銅塊（芯部：鋳鉄板）の顕微鏡組織

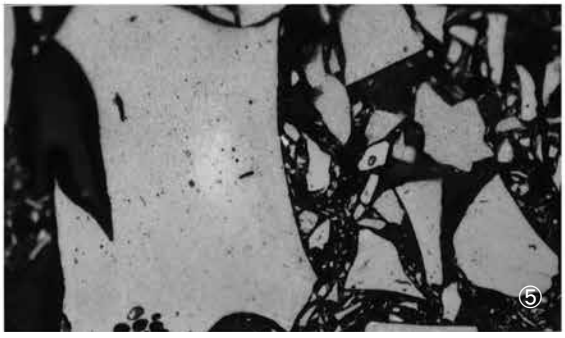
KTN-5
コークス？
①× 44 試料断面
素地：非晶質暗色部
部分的：繊維状組織
②× 88 ③× 352 ①の拡大
④× 88 ⑤× 352 同上

図版425-73

73
分析番号：KTN-5





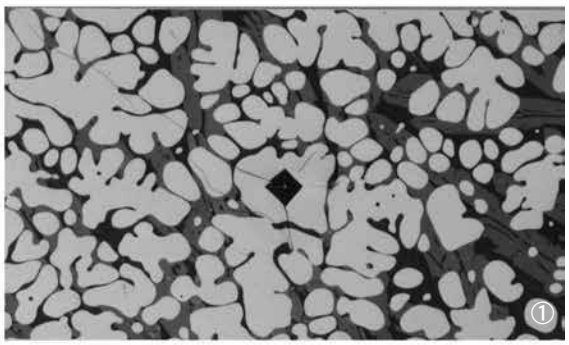


第 69 図　コークス？顕微鏡組織

KTN-6
椀形鍛冶滓
①× 176 硬度圧痕：426Hv
ウスタイトか（200gf）
＋ファイヤライト

図版425-74

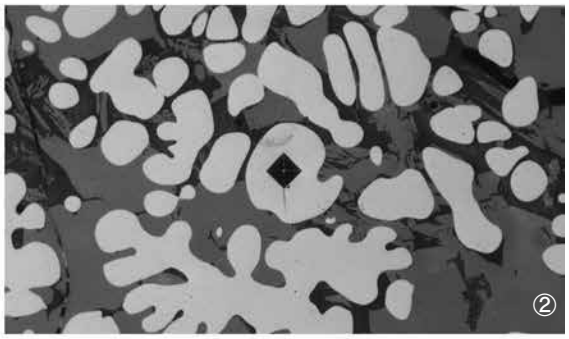
74
分析番号：KTN-6

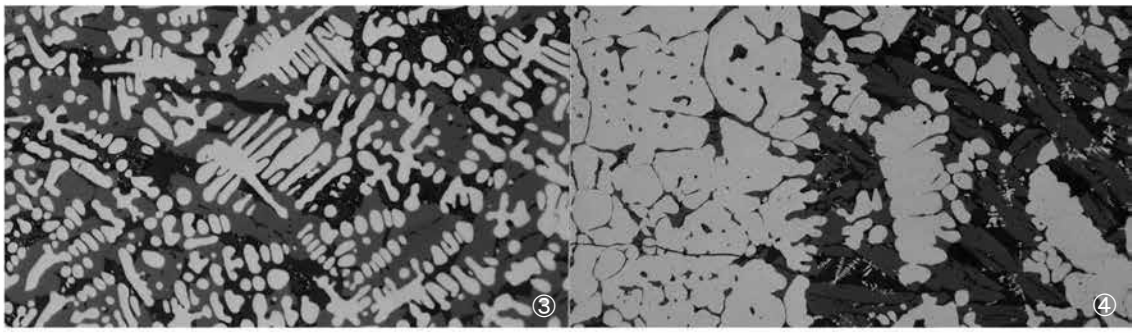


KTN-7
椀形鍛冶滓片
②× 176 硬度圧痕：498Hv
ウスタイト（200gf）
③× 88 ウスタイト・ファイヤライト
④× 88 同上

図版425-75

75
分析番号：KTN-7

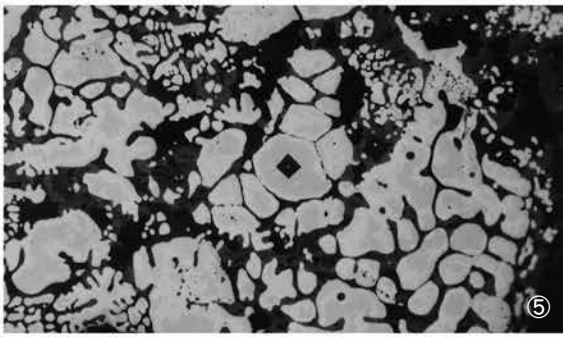


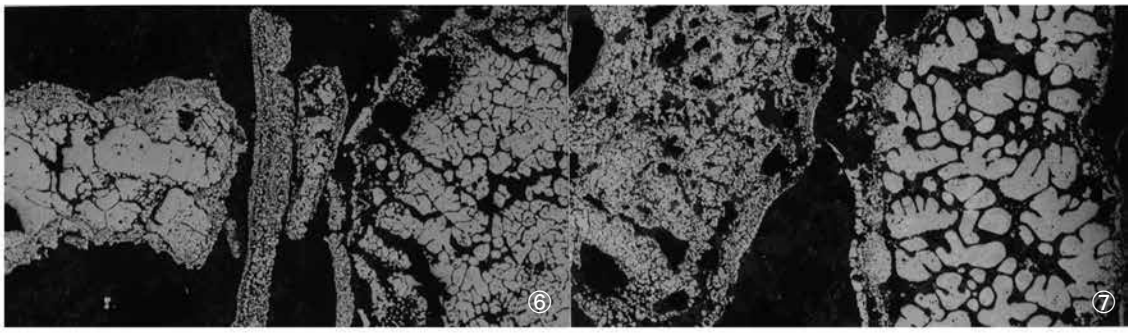


KTN-8
椀形鍛冶滓
⑤× 176 硬度圧痕：470Hv
ウスタイト（100gf）
⑥× 88 ウスタイト凝集
⑦× 88 ウスタイト・ファイヤライト

図版425-76

76
分析番号：KTN-8



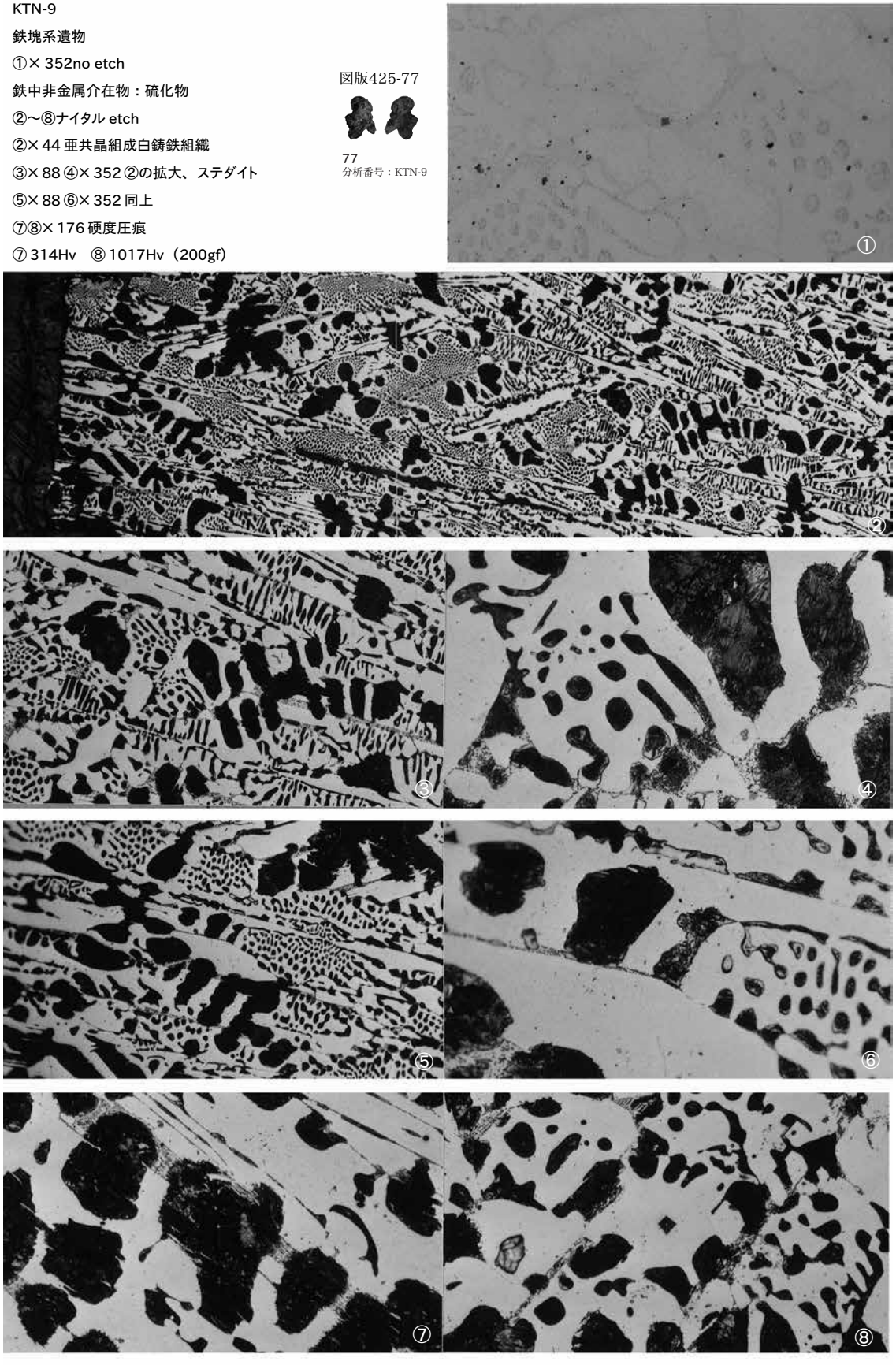


第 70 図　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

KTN-9
鉄塊系遺物
①× 352no etch
鉄中非金属介在物：硫化物
②～⑧ナイタル etch
②× 44 亜共晶組成白鋳鉄組織
③× 88 ④× 352 ②の拡大、ステダイト
⑤× 88 ⑥× 352 同上
⑦⑧× 176 硬度圧痕
⑦ 314Hv　⑧ 1017Hv（200gf）

図版425-77

77
分析番号：KTN-9

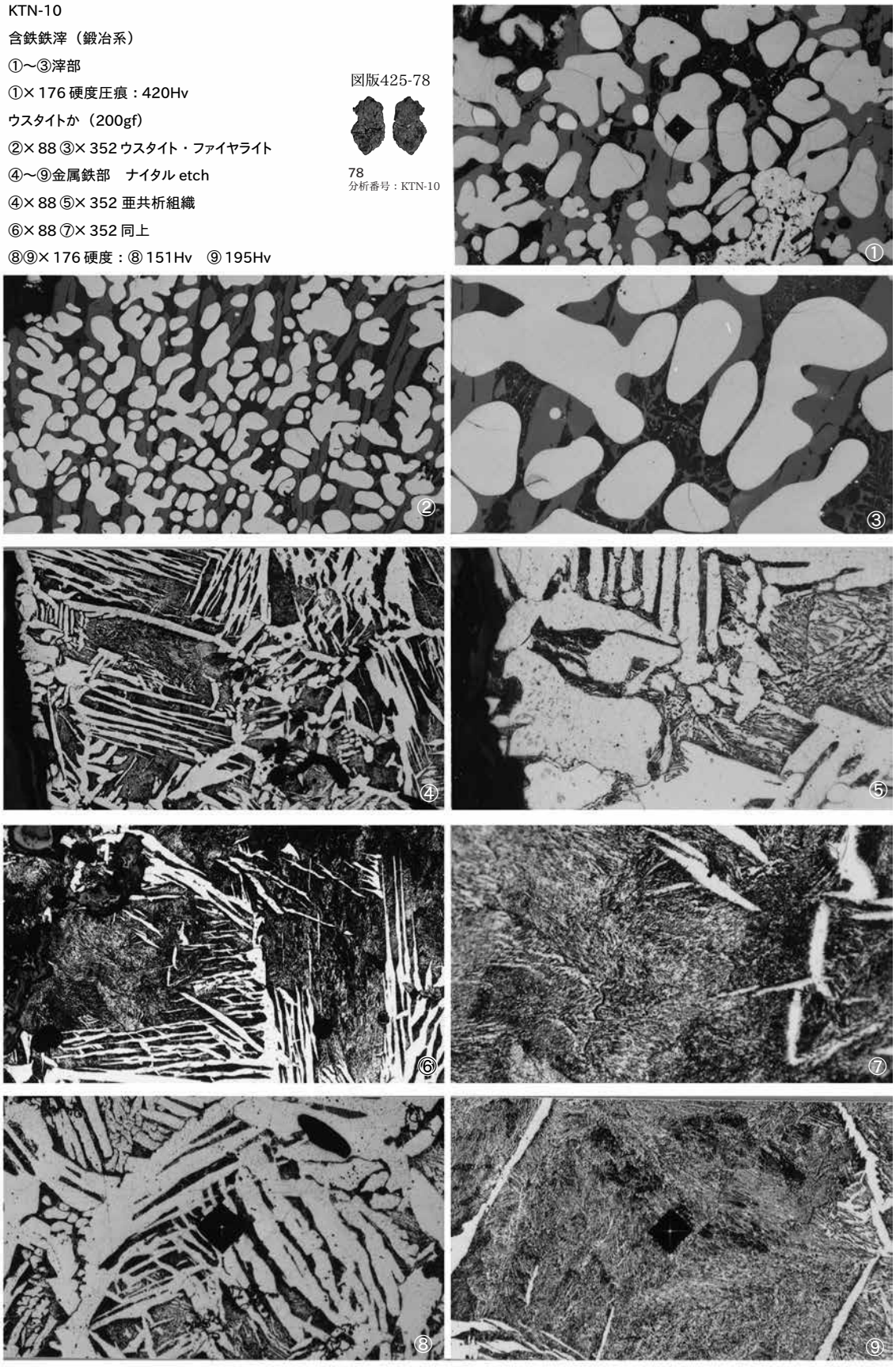


第 71 図　鉄塊系遺物の顕微鏡組織

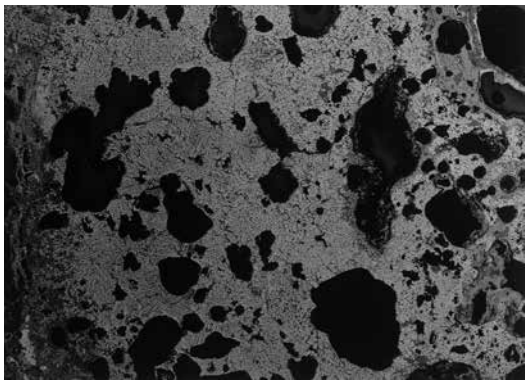
KTN-10
含鉄鉄滓（鍛冶系）
①～③滓部
①× 176 硬度圧痕：420Hv
ウスタイトか（200gf）
②× 88 ③× 352 ウスタイト・ファイヤライト
④～⑨金属鉄部　ナイタル etch
④× 88 ⑤× 352 亜共析組織
⑥× 88 ⑦× 352 同上
⑧⑨× 176 硬度：⑧ 151Hv　⑨ 195Hv

図版425-78

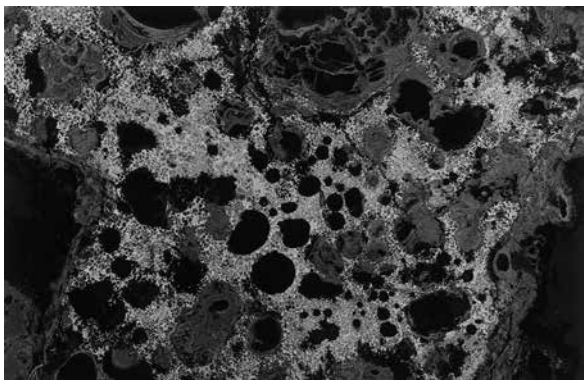
78
分析番号：KTN-10



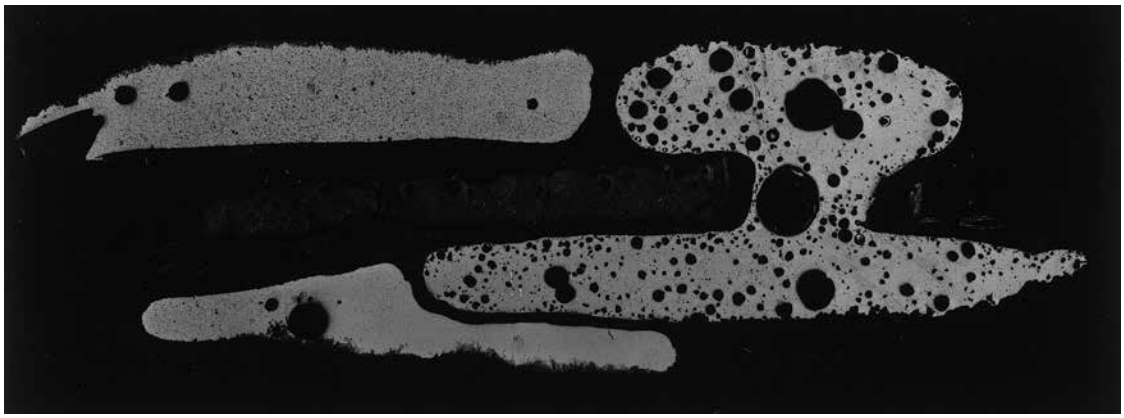
第 72 図　含鉄鉄滓の顕微鏡組織

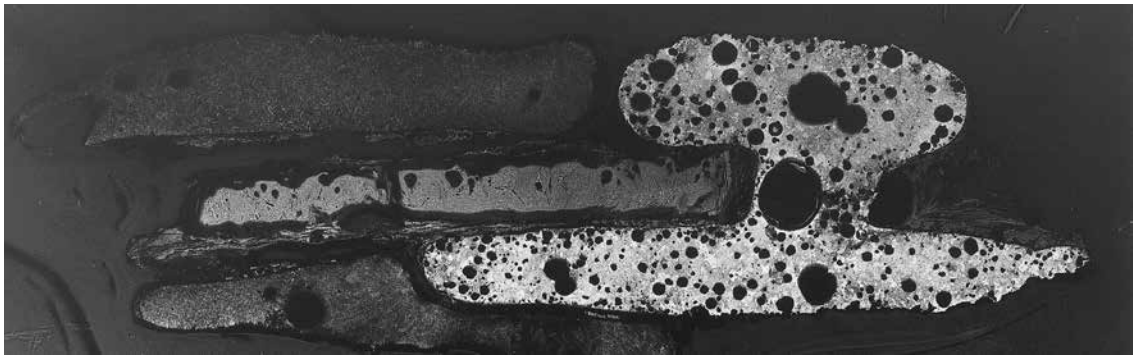


第73図　椀形鍛冶滓（KTN-1）**のマクロ組織**（×5）
（左側が試料上面側）

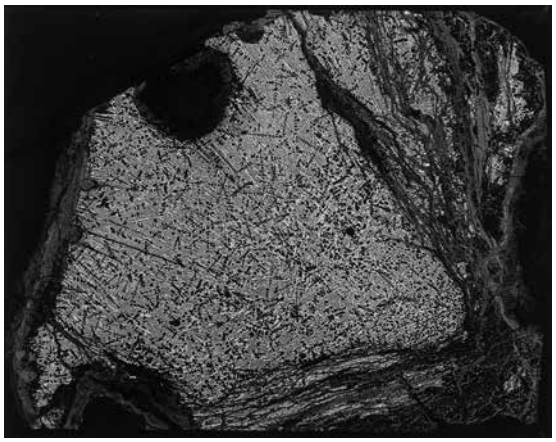


第74図　含鉄鉄滓（KTN-2）**のマクロ組織**（×5）

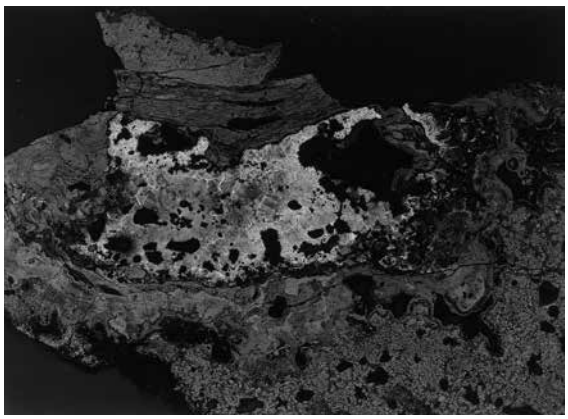




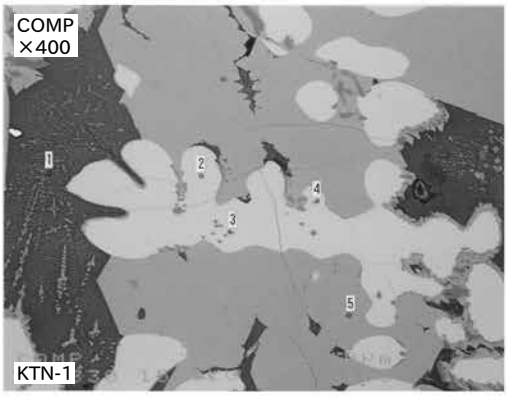
第75図　青銅塊（芯部：鋳鉄板）（KTN-4）**のマクロ組織**（×5）
（上段：腐食無し、下段：アセトン・酢酸・硝酸混合液で腐食錆化）



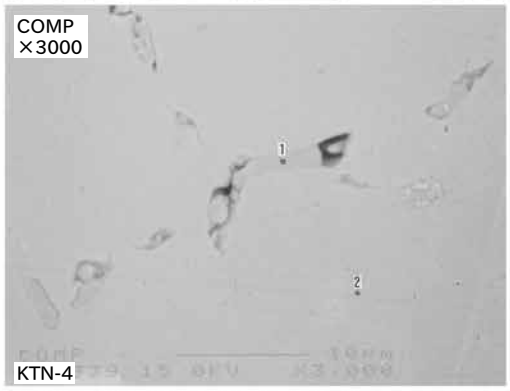
第76図　鉄塊系遺物（KTN-9）**のマクロ組織**（×5）

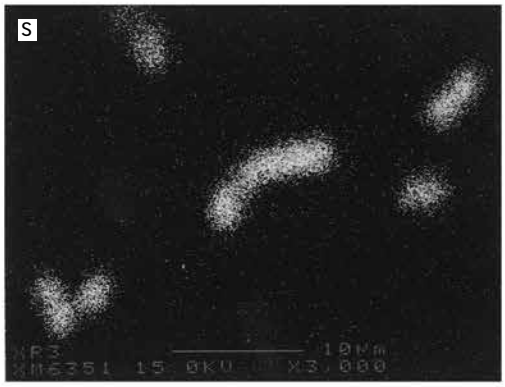


第77図　含鉄鉄滓（KTN-10）**のマクロ組織**（×5）



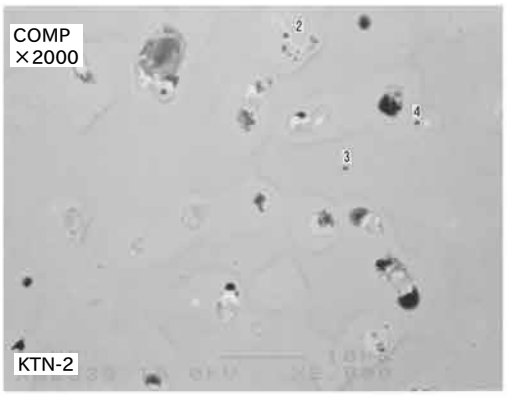
Element	1	2	3	4	5
MgO	0.023	0.054	0.216	0.082	1.687
Al2O3	16.801	0.434	46.218	0.388	0.112
SiO2	36.918	0.282	0.273	0.259	30.440
P2O5	1.019	0.002	0.039	0.002	-
S	0.098	0.018	-	0.015	-
K2O	4.804	0.009	0.013	0.014	-
CaO	7.383	-	-	-	0.398
TiO2	0.125	0.831	1.693	0.686	-
MnO	0.011	0.064	-	0.049	0.048
FeO	29.942	98.173	51.657	99.301	69.228
ZrO2	0.136	0.021	-	-	0.011
CuO	0.078	-	0.010	-	0.028
V2O3	0.005	0.067	0.239	0.085	0.029
As2O5	-	0.015	0.074	-	-
Total	97.319	99.966	100.432	100.877	101.981

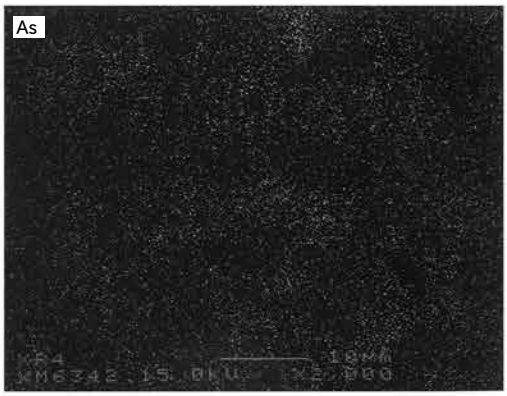


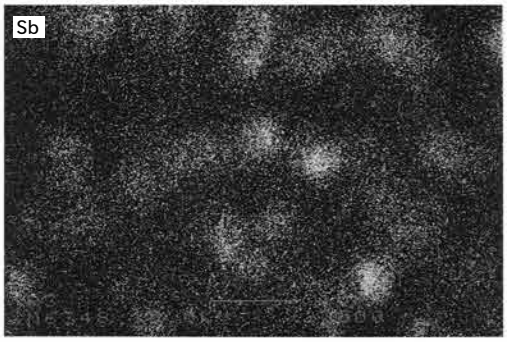


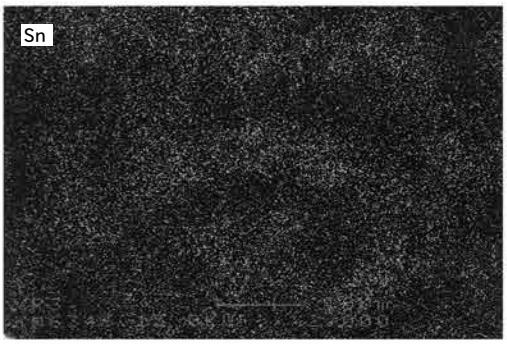
Element	1	Element	2
S	11.353	Cu	98.092
Cu	87.287	Sn	1.908
Sn	1.360		
Total	100.000	Total	100.000

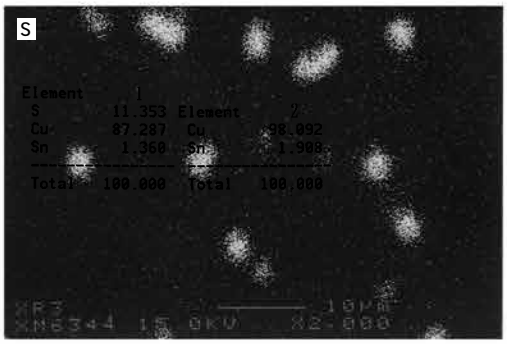
第78図　EPMA調査　反射電子像（COMP）及び特性X線像〔70％縮小〕と定量分析値



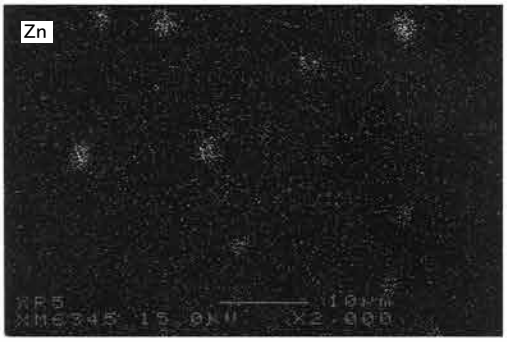








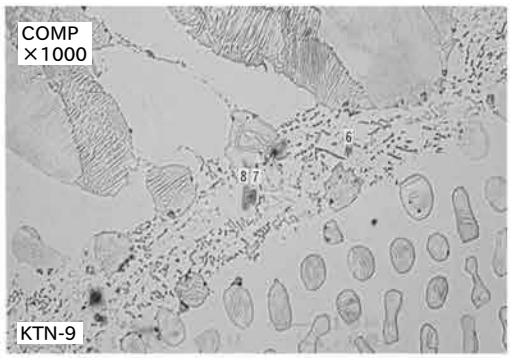
Element	1	Element	2
S	11.353	S	0.092
Cu	87.287	Cu	98.092
Sn	1.360	Sn	1.908
Total	100.000	Total	100.000



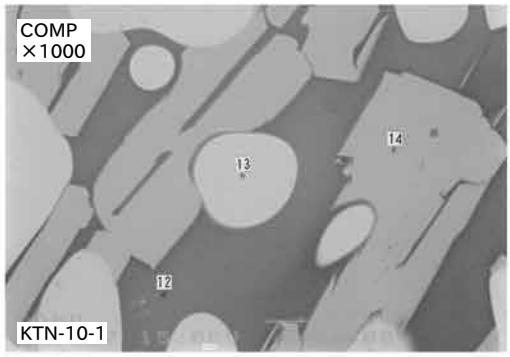
Element	1	Element	2
O	3.826		
P	0.334		
S	1.860	S	0.301
Cu	53.605	Cu	38.108
Zn	4.769	As	4.584
As	3.278	Sn	1.124
Sn	1.651	Sb	9.019
Sb	2.150	Pb	46.864
Pb	28.527		
Total	100.000	Total	100.000

Element	3	Element	4
Cu	98.090	Cu	88.968
Sn	1.058	As	6.208
Sb	0.852	Sn	2.163
Total	100.000	Sb	2.661
		Total	100.000

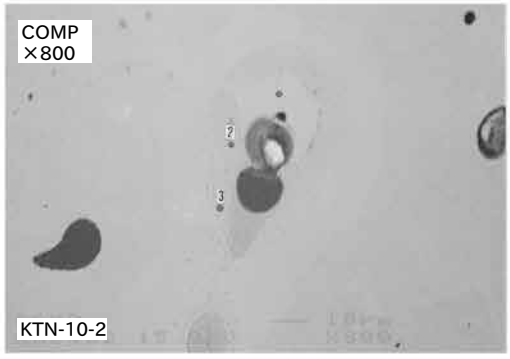
第79図　EPMA調査　反射電子像（COMP）及び特性X線像〔70％縮小〕と定量分析値

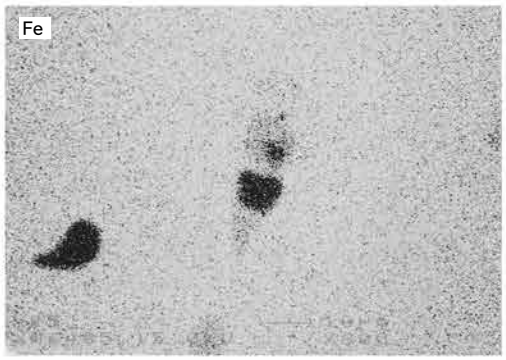


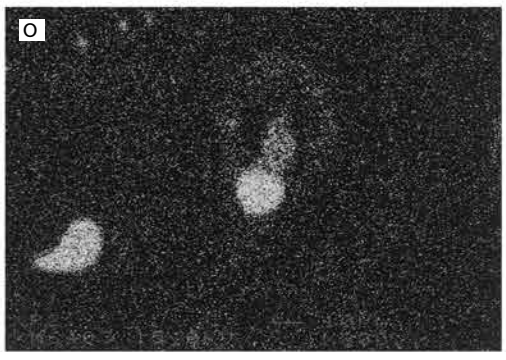
Element	6	7	8
MgO	0.010	-	0.005
Al2O3	0.009	-	0.049
SiO2	0.017	0.032	0.026
P2O5	33.623	0.172	2.639
S	0.250	34.475	30.070
K2O	0.014	0.007	0.019
CaO	-	-	-
TiO2	-	0.453	2.855
MnO	-	37.144	0.849
FeO	119.044	43.709	85.621
ZrO2	-	-	0.137
CuO	0.072	0.401	0.311
V2O3	0.028	0.342	1.173
As2O5	-	-	0.013
Total	153.005	108.132	116.264



Element	12	13	14
MgO	0.111	0.078	1.654
Al2O3	13.658	0.336	0.103
SiO2	42.303	0.243	30.289
P2O5	0.868	-	0.002
S	0.127	0.026	-
K2O	5.660	0.051	0.050
CaO	7.520	-	0.797
TiO2	0.091	0.179	0.036
MnO	-	0.088	0.132
FeO	26.335	99.095	68.341
ZrO2	0.159	-	-
CuO	0.046	0.144	-
V2O3	-	-	0.010
As2O5	-	-	0.071
Total	96.846	100.234	101.485

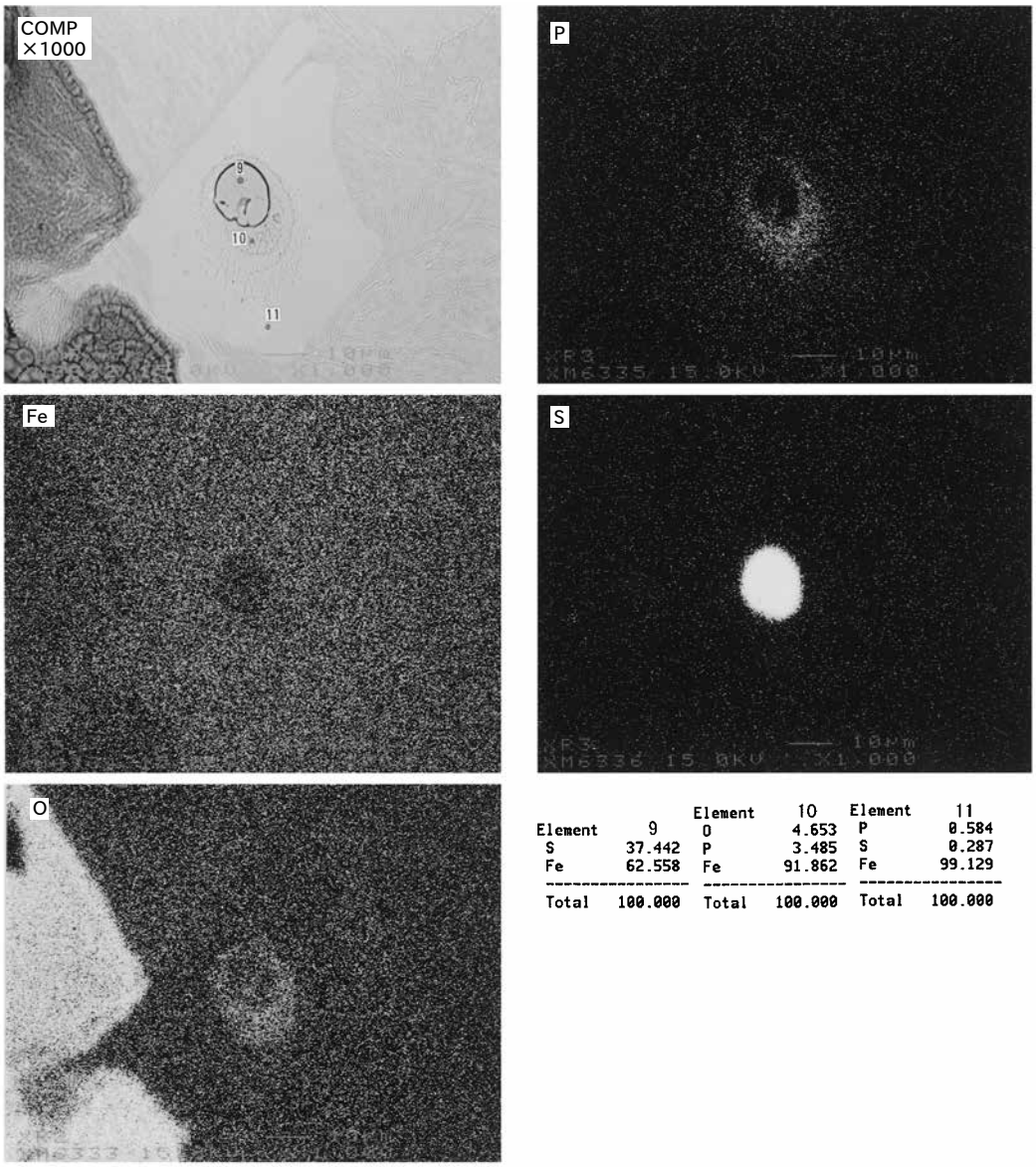






Element	1	Element	2	Element	3
P	13.418	O	2.726	P	0.766
S	0.555	P	3.051	S	0.242
Fe	86.027	Fe	94.223	Fe	98.991
Total	100.000	Total	100.000	Total	100.000

第80図　EPMA調査　反射電子像（COMP）及び特性X線像〔70％縮小〕と定量分析値



Element	9
S	37.442
Fe	62.558
Total	100.000

Element	10
O	4.653
P	3.485
Fe	91.862
Total	100.000

Element	11
P	0.584
S	0.287
Fe	99.129
Total	100.000

第81図　EPMA調査　反射電子像（COMP）及び特性X線像〔70％縮小〕と定量分析値

2　北野遺跡の古環境及び埋設土器・土坑の内容物について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

北野遺跡（新潟県東蒲原郡上川村大字九島字長木3,429番地ほかに所在）は、阿賀野川の支流である常浪川によって形成された段丘上の平坦地に立地する。

平成５～６年度の発掘調査では、遺跡の鍵層であるⅣ層（地表下約50cm深の沼沢火山灰層：約5,000年前の軽石質火山灰流堆積物の二次堆積物）よりも上位の層が調査された。その結果、縄文時代の中期～後期・晩期、平安時代、中世、近世以降の遺構・遺物が認められたが、その多くは縄文時代の中期末葉～後期初頭に属し、当時の集落像の実態が明らかにされつつある。遺構の配置からこの時期の集落は直径約90m前後の環状または馬蹄形と推定され、住居跡群の内側にみられる土坑群は墓域と考えられている。住居跡内外に単独で検出される埋設土器は130基以上もあるが、その多くは居住域と推定される範囲に重複して分布している。ほとんどが正位であり、土器よりやや大きい土坑内に埋設されている。また、少数ではあるが、扁平礫の蓋石があるものも認められている。土器の外面にはスス、内面にはオコゲの付着があり、日常生活に用いたものを再利用したことが指摘されている。

今回の自然科学分析調査では、埋設土器の覆土の土壌分析による内容物の推定を行う。これまで住居跡内の埋甕については、胎盤埋納施設または幼児骨・胎児骨の埋葬施設である可能性が指摘されている［木下1981］。検出された埋設土器についても同様の機能が予想されるので、土壌分析による遺体の痕跡を検証することにした。また、土坑群についても墓擴の可能性が指摘されていることから、同様の方法を用いて遺体の痕跡を検証する。

ところで、気候が温暖多湿、土壌の排水性が良好かつ酸性が強いところでは、土壌中の有機物は分解されやすく、その水溶成分は土壌中を下方へ流亡してしまう。すなわち、土器や土坑に遺体、人骨などが埋納されていたとしても、上記環境条件下では長期間その形状を保つことは稀である。火山灰を起源とする台地上の土壌であるような環境が多く、本遺跡もその可能性が高い。そこで、今回は人を含む動物の骨に多量に含まれ、しかも土壌中で比較的流亡しにくいリン酸量を測定し、その濃集状態から人体の痕跡を定性的に推定するリン分析［竹迫1981］を実施した。また、リン酸とともに骨の主成分であるカルシウムについても分析を行った。

なお、土壌中を流亡しにくいリン酸も年月の経過に伴い、当時の含有量をそのまま保持することはできない。したがって、含量対比のための対照試料が必要である。今回は基本土層のⅠ～Ⅳ層の土壌を対照試料としたが、埋設土器については土器を埋設した土坑の脇の基本土層（通称地山）も採取し、参考とした。

一方、発掘調査区西端には沢状の浅谷が認められ、集落が展開した縄文時代中期末葉～後期初頭に形成されたと考えられている。

この浅谷は、調査区西側から北側にかけて検出されており、西側の段丘崖より発していると思われる。この谷の埋積物は湧水により湿っており、埋積物中には当時の谷内の水質や植生を反映した微化石の包含が期待された。そこで、水質については珪藻分析、古植生については花粉分析によってそれぞれ情報を得ることとした。

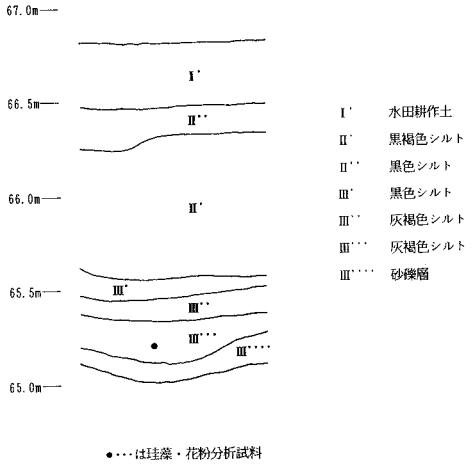
A　北野遺跡周辺の古環境

1）試　　料

調査区内の堆積層は、下位よりⅦ層～Ⅰ層に区分されている。このうち、Ⅴ層が縄文時代前期遺物包含層、Ⅳ層が約5,000年前の沼沢火山灰泥流層、Ⅲ層上面が縄文時代中期～晩期の遺構構築面、Ⅱ層が縄文時代中期～晩期の遺物包含層である。調査区西端の浅谷は、Ⅳ層を掘り込んで形成されている。

試料は、谷底部の埋積物（10グリッド西壁の最下層）であるⅢ'''層より１点を採取した。本層及びその上位のⅢ''・Ⅲ'層からは、縄文時代中期の土器が出土する。試料の土質は、暗褐色の粘土質シルトであり、砂が混じる（第82図）。

分析の際は、この試料を分割して珪藻・花粉両分析に供した。



第82図　谷部基本土層と珪藻・花粉分析試料採取位置

2）分 析 方 法

a　珪 藻 分 析

湿重6.3gの試料について、過酸化水素水（H_2O_2）、塩素（HCl）処理、自然沈降法、傾斜法の順に物理・科学処理を施し、珪藻殻の濃縮を行う。検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入し、プレパラートを作成する。

検鏡は、光学顕微鏡（油浸600倍あるいは1000倍）で、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。珪藻化石の少ない試料は、この限りではない。同時に完形殻と壊れた殻を区別して計数し、珪藻化石の存在度（完形殻数／総数×100）を求め、考察の際に参考とした。珪藻の種の同定は、K. Krammer & Lange・Bertalot［1986・1988・1991］などを用いた。なお、珪藻の生態性の解説を第41表に示した。

推積環境の解析にあたっては、まず塩分濃度に対する適応性から産出種を海水－汽水－淡水生種に分類し、淡水生種についてはさらに塩分・水素イオン濃度（pH）・水流に対する適応性について生態区分する。そして、産出率2.0％以上を示す分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。図中の

塩分濃度に対する区分		塩分に対する適応性		生　育　環　境　（例）
海水生種：	強塩生種（Polyhalobous）	塩分濃度40.0‰以上に出現するもの		低緯度熱帯海域、塩水湖など
	真塩生種（Euhalobous）	海産生種、塩分濃度40.0～30.0‰に出現するもの		一般海域（ex 大陸棚及び大陸棚以深の海域）
汽水生種：	中塩生種（Mesohalobous）	汽水生種：塩分濃度30.0～0.5‰に出現するもの	強中塩生種（α-Mesohalobous） 弱中塩生種（β-Mesohalobous）	河口・内湾・沿岸・塩水湖・湿など
淡水生種：	貧塩生種（Oligohalobous）	淡水生種：塩分濃度0.5‰以下に出現するもの		一般陸水域（ex 湖沼・池・沼・河川・川・沼沢地・泉）
塩分・pH・流水に対する区分		塩分・pH・流水に対する適応性		
塩分に対する適応性	貧塩－好塩性種（Halophilous）	小量の塩分がある方がよく生育するもの		高塩類域（塩水湧上域・温泉・耕作土壌）
	貧塩－不定性種（Indifferent）	小量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの		一般陸水域（湖沼・池・沼・河川・沼沢地など）
	貧塩－嫌塩性種（Halophobous）	小量の塩分にも耐えることができないもの		湿原・湿地・沼沢地
	広域塩性種（Euryhalinous）	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現するもの		一般淡水～汽水域
pHに対する適応性	真酸性種（Acidobiontic）	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・火口湖（酸性水域）
	好酸性種（Acidophilous）	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・沼沢地
	pH－不定性種（Indifferent）	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの		一般陸水（ex 湖沼・池沼・河川）
	好アルカリ性種（Alkaliphilous）	pH7.0付近に出現、pH7.0以上の水域で最もよく生育するもの		
	真アルカリ性種（Alkalibiontic）	特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く出現するもの		アルカリ性水域（少ない）
流水に対する適応性	真止水性種（Limnobiontic）	止水にのみ出現するもの		流入水のない湖沼・池沼
	好止水性種（Limophilous）	止水に特徴的であるが、流水にも出現するもの		湖沼・池沼・流れの緩やかな川
	流水不定性種（Indifferent）	止水にも流水にも普通に出現するもの		河川・川・池沼・湖沼
	好流水性種（Rheophilous）	流水に特徴的であるが、止水にも出現するもの		河川・川・小川・上流域
	真流水性種（Rheobiontic）	流水域にのみ出現するもの		河川・川・流れの速い川・渓流・上流域
陸生珪藻	好気性種（Aerophilous）	好気的環境（Aerial habitats） 水域以外の常に大気に曝された特殊な環境に生育する珪藻の一群で多少の湿り気と光さえあれば、土壌表層中やコケの表面に生育可能 特に、土壌中に生育する陸生珪藻を土壌珪藻という		・土壌表層中や土壌に生えたコケに付着 ・木の根元や幹に生えたコケに付着 ・濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 ・滝の飛沫で湿ったコケや石垣・岩とのコケに付着 ・洞窟入口や内部の照明の当った所に生えたコケに付着

註）塩分に対する区分は、Lowe（1974）、pHと流水に対する区分は、Hustedt（1937-38）による

第41表　珪藻の生態性

海水－汽水－淡水生種の帯グラフと各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の帯グラフは淡水生種の合計を基数とした相対頻度で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示した。なお、●は１％未満の算出を示す。推積環境の解折にあたっては、安藤［1990］、伊藤・堀内［1991］、渡辺ほか［1988］の環境指標種を参考とする。

b　花粉分析

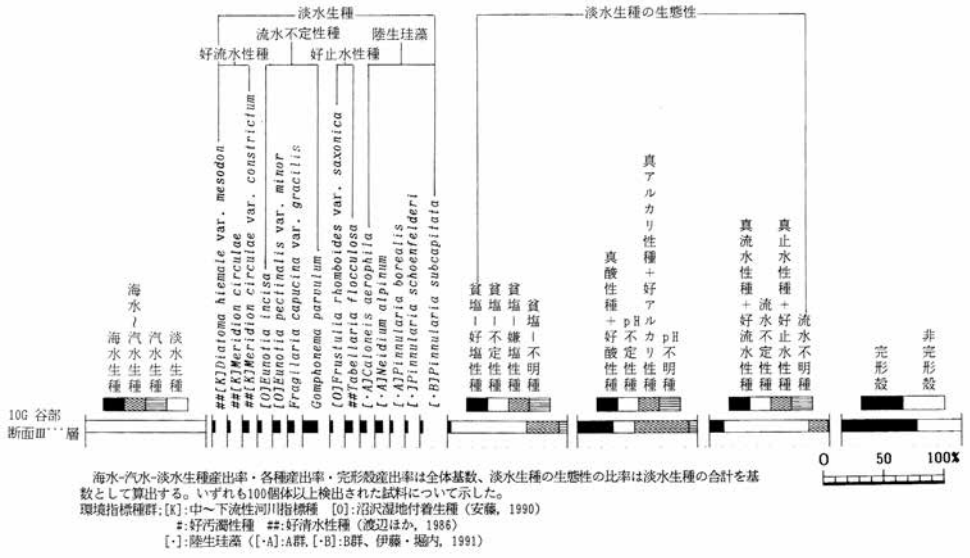
花粉・胞子化石は、湿重約10gの試料についてKOH処理、篩別（250 υ m）、重液分離（$ZnBr_2$：比重2.2）、HP処理、アセトリシス処理の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入し、プレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面に走査しながら、出現するすべての種類（Taxa）について同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

3）結　　果

a　珪藻化石

珪藻分析結果を第42表・第83図に示す。産出分類群数は20属63種であり、すべての淡水生種で構成される。完形殻の出現率は、62％である。また、淡水生種の３適応性（塩分・pH・流水に対する適応度合い）についてみると、貧塩－不定性種、真・好アルカリ性種と真・好酸性種、流水不定性種がそれぞれ優占する。

産出種は、すべての淡水域に分布し特定の水域を指標しない淡水産広布種［安藤1990］のGomphonema parvulum、流水不定性種のFragilaria capusina var. gracilis、沼沢湿地付着生種群のBunotia pactinalis var. minor、B. incisa，Frustulia rhomboides vra. saxonica、好止水性種のTaballaria flocculosa、中～下流性河川指標種群（K）のMeridion ciroclar var. constricta、Meridion circulae、Diatoma hirmale vae. mrsodon、陸生珪藻のＡ群［伊藤・堀内1991］のCaloneis aerophila、Neidium alpnum、Pinnularia borealisなどである。このように、様々な環境を指標する種群が混在する組成が認められる。



第83図　10G谷部断面Ⅲ‴層の主要珪藻化石群集

b　花粉化石

検出化石は、非常に少なく、保存状態も不良である（第43表）。検出された種類は、マツ属、イネ科、シダ類胞子などである。また、栽培植物のソバ属がわずかに認められる。

Species Name	Ecology			10G 谷部 断面Ⅲ層
	H.R.	pH	C.R.	
##*Achnanthes convergens* H.Kobayasi	Ogh-ind	ind	r-ph	1
[K]*Achnanthes lanceolata* (Breb.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	1
Achnanthes minutissima Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	2
Achnanthes oblongella Oestrup	Ogh-unk	unk	unk	3
[O]*Anomoeoneis brachysira* (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	l-ph	4
Anomoeoneis gomphonemacea (Grun.)H.Kobayasi	Ogh-ind	ac-il	ind	1
[N]*Aulacoseira ambigua* (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	1
[N]*Aulacoseira distans* (Ehr.)Simonsen	Ogh-hob	ac-il	l-bi	1
Aulacoseira italica (Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	1
[･A]*Caloneis aerophila* Bock	Ogh-ind	al-il	ind	11
Caloneis bacillum (Grun.)Mereschkowsky	Ogh-ind	al-il	r-ph	1
##[O]*Cymbella aspera* (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	1
Cymbella amphioxys (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	ac-il	ind	1
Cymbella gracilis (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	ind	l-ph	1
[O]*Cymbella naviculiformis* Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	1
##*Cymbella silesiaca* Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	3
##[K]*Diatoma hiemale* var. *mesodon* (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	5
Eunotia alpina (Naeg.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	1
Eunotia bilunaris (Ehrenberg)Mills	Ogh-hob	ac-il	ind	4
Eunotia gracilis (Ehr.)Rabenhorst	Ogh-hob	ind	l-bi	1
[O]*Eunotia incisa W.Smith ex* Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind	6
Eunotia muscicola var. *tridentula Noerpel &* Lange-Bertalot	Ogh-hob	ac-il	ind	2
[O]*Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	13
##*Fragilaria capucina* Desmazieres	Ogh-ind	al-il	ind	1
Fragilaria capucina var. *gracilis (Oestr.)*Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	12
Fragilaria capucina var. *rumpens* (Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	1
[O]*Frustulia rhomboides* var. *saxonica* (Rabh.)De Toni	Ogh-hob	ac-bi	l-bi	5
[O]*Gomphonema gracile* Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	l-ph	1
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	27
##*Gomphonema sphaerophorum* Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	1
[･A]*Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	1
##[K]*Meridion circulae* Agardh	Ogh-ind	al-il	r-bi	5
##[K]*Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	r-bi	12
##[･A]*Navicula contenta* Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	1
[O]*Navicula elginensis* (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	r-ph	1
#[･A]*Navicula mutica* Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	3
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1
#*Navicula pupula* Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	3
Neidium affine var. *longiceps* (Greg.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	1
[･A]*Neidium alpinum* Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	13
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	1
[･]*Neidium bisulcatum* (Lagerst.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	2
[･B]*Nitzschia brevissima* Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	2
Nitzschia frustulum (Kuetz.)Grunow	Ogh-hil	al-bi	ind	1
[･B]*Pinnularia appendiculata* (Ag.)Cleve	Ogh-hob	ind	ind	4
[･A]*Pinnularia borealis* Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	5
Pinnularia braunii (Grun.)Cleve	Ogh-hob	ac-bi	ind	4
Pinnularia brevicostata var. *sumatrana* Hustedt	Ogh-ind	ac-il	l-ph	1
[O]*Pinnularia gibba* Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	1
Pinnularia gibba var. *linearis* Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	1
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-hob	ac-il	ind	2
#*Pinnularia microstauron* (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	1
[･A]*Pinnularia obscura* Krasske	Ogh-ind	ind	ind	4
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-ind	ind	ind	1
[･]*Pinnularia schoenfelderi* Krammer	Ogh-ind	ind	ind	5
[･]*Pinnularia schroederii* (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	1
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	2
[･B]*Pinnularia subcapitata* Gregory	Ogh-ind	ind	ind	5
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-hil	al-bi	ind	4
[･B]*Stauroneis obtusa* Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	2
[O]*Stauroneis phoenicenteron* fo. *gracilis* (Ehr.)Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-bi	1
##*Tabellaria flocculosa* (Roth)Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-bi	14
Marine Water Species				0
Marine to Brackish Water Species				0
Brackish Water Species				0
Fresh Water Species				220
Total Number of Diatoms				220

凡例

H.R.：塩分濃度に対する適応性
- Ogh-hil：貧塩好塩性種
- Ogh-ind：貧塩不定性種
- Ogh-hob：貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi：真アルカリ性種
- al-il：好アルカリ性種
- ind　：pH不定性種
- ac-il：好酸性種
- ac-bi：真酸性種
- unk　：pH不明種

C.R.：流水に対する適応性
- l-bi：真止水性種
- l-ph：好止水性種
- ind　：流水不定性種
- r-ph：好流水性種
- r-bi：真流水性種
- unk　：流水不明種

環境指標種群

[K]：中～下流性河川指標種　[N]：湖沼沼沢湿地指標種　[O]：沼沢湿地付着生種（安藤，1990）

#：好汚濁性種　##：好清水性種（渡辺ほか，1986）

[･]：陸生珪藻（[･A]：A群，[･B]：B群、伊藤・堀内，1991）

第42表　珪藻分析結果

4）考　　察

谷底部のⅢ'''層からは、沼沢湿地付着生種群、中～下流性河川指標種群、陸生珪藻のＡ群など様々な環境を指標する珪藻化石種群が認められた。そのため、谷内の水質を指定することは困難である。なお、谷は西側の段丘崖より下流している。珪藻化石の産状を考慮すれば、水流が背後の段丘崖から段丘平坦地までの様々な環境下で推積した推積物を削って、谷が埋積したことが窺える。

また、花粉化石はマツ属、イネ科、シダ種胞子などがわずかに認められたに過ぎない。浅谷の埋積過程を考慮すれば、これからの種類は平坦地までに生育していた種類と思われる。しかし、その保存状態が悪かったことから、分解・消失した種類も多いことが予想され、植生についての詳細な検討は困難である。

種類(Taxa)	試料番号
木本花粉	
マツ属	1
スギ属	1
クルミ属	1
ブナ属	1
コナラ属コナラ亜属	1
草本花粉	
イネ科	4
カヤツリグサ科	1
ソバ属	1
ヨモギ属	1
不明花粉	4
シダ類胞子	
シダ類胞子	12
合計	
木本花粉	5
草本花粉	7
不明花粉	4
シダ類胞子	12
総花粉・胞子	28

第43表　花粉分析結果

なお、栽培植物のソバ属が、わずかに検出された。これより、縄文時代中期末葉～後期初頭にソバ栽培があったことが示唆される。本地域のソバ栽培の消長を考える上で重要な情報のひとつである。なお、本地域での該期の古植生に関する調査例はほとんどなく、自然環境や生業を考える上での重要な古植生に関する情報に乏しいのが現状である。今後さらにこのような浅谷や低湿地において同様な分析調査を実施することが望まれる。

引用文献

安藤一男　1990　『淡水産珪藻による環境指標種群の指定と古環境復元への応用』東北地理42　p73-88

Hustedt，F.　1937-1939　Systematischr nud okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java，Balf und Sumatra．Nach dem Material der Deutshen Iimnologische Sunda-Expedition．Ter　Band.15　p.131-506　Band.16　p.1.155．274-394.

Krammer，K．and Lange-Bertalot，H.　1986　Bacillariophyceae，Teil 1，Naviculaceae．Band 2/1 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa　876p．Gustav Fischer Verlag

Krammer，K．and Lange-Bertalot，H.　1988　Bacillariophyceae，Teil 2，Epithemiaceae，Bacllariaceae，Surirellaceae．Band 2/2 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa　536p．Gustav Fischer Verlag

Krammer，K．and Lange-Bertalot，H.　1991a　Bacillariophyceae，Teil 3，Centrales，Fragilariaceae，Eunotiaseae．Band 2/3 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa　230p．Gustav Fischer Verlag

Krammer，K．and Lange-Bertalot，H.　1991b　Bacillariophyceae，Teil 4，Achnanthaceae．Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae）und Gomphonema．Bend 2/4 von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa　248p．Gustav Fischer Verlag

伊藤良永・堀内誠示　1991　「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『Diatom』6　p.23-45

Lome，R．L.　1974　Environmental Requirenents and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms　334p．In Environmental Mnoitoring Ser．EPA Report 670/4-74-005.Nat．Environmental Res．Center Office of Res.Develop．U.S.Environ.Proect.Agency　Cincinati

渡辺仁治・山田妥恵子・浅井一視　1988　「珪藻群集による有機汚濁指数（DAIpo）の止水域への適用」『水質汚濁研究』11　no.12　p.756-773

B　北野遺跡の埋設土器・土坑の内容物

1）試　　料

分析対象とした埋設土器は、10C－3号、13D－2号、13E－3号、14C－2号、16B－1号埋設土器の5基である。（第84図）。また土坑は、SK211、SK212、SK213、SK235の4基である。（第84図）。

埋設土器のうち、10C－3号では土器内覆土（土器内試料）3点、土器を埋没した土坑の覆土（土器外試料）3点、埋設土器のすぐわきの基本土層のⅢ・Ⅳ層各1点（対照試料）を採取した。13D－2号は、土器内試料3点、土器外試料3点、対照試料（Ⅲ層）1点を採取した。13E－3号は、土器内試料3点、土器外試料3点、対照試料（Ⅲ層）1点を採取した。14C－2号は、土器内試料6点、土器外試料1点、対照試料（Ⅲ、Ⅳ層）各1点、土器直下部分（土器直下試料）の1点を採取した。16B－1号は、土器内試料3点、土器外試料3点、対照試料1点を採取した。

一方、土坑のうち、SK211では土坑中央1点と、底部付近8点の計9点を採取した。また、SK212では土坑中央2点、底部付近7点の計9点採取した。SK213は、SK212と重複する。SK213の覆土のうち、上層（2層）中央の上下2点、下層（3層）の中央2点とその底部付近5点の計9点を採取した。SK235は、土坑中央の上中下3点、底部付近6点の計9点を採取した。以上の対照試料として、基本土層のⅠ～Ⅳ層より各1点計4点を採取した。

これらの試料全点を分析に供し、その際に土性・土色などの土質観察を行った（第44・45表）。したがって、埋設土器の分析試料の合計は38点（対照試料も含む）、土坑の分析試料の合計は40点（対照試料も含む）であり、合計78点である。

2）分 析 方 法

リン・カルシウムの測定は、土壌標準分析・測定法委員会［1986］、土壌養分測定法委員会［1981］、東京大学農学部農芸化学教室［1957］などを参考にして、以下の操作行程で行った。

試料を風乾後、軽く粉砕して0.2mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えた分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別に、ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これらの測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

3）土坑内の埋納物

a　分 析 結 果

リン・カルシウム分析の結果を第44表に示し、以下基本土層と調査土坑ごとに記す。

基本土層（第84図）

リン酸含量は、Ⅱ層が3.65P_2O_5mg/gと最も高く、Ⅳ層（沼沢火山灰層）が1.63P_2O_5mg/gと最も低い。一方、カルシウム含量は、Ⅳ層が1.97CaOmg/gと最も高く、Ⅱ層が1.14CaOmg/gでこれに次ぐ。Ⅰ層とⅢ層は、1.00CaOmg/gをわずかに切る数値で、ともに近似する。

今回、縄文時代中期末葉～後期初頭の土坑や埋設土器から採取した試料の含量を評価する際には、同時期の遺物包含層であるⅡ層の数値を主な比較試料とすることにした。なお、Ⅱ層のリン酸含量が他の基本土層や後述する自然賦存量より大きいのは、当時の生活残渣などの累積が影響しているものと考えられる。

一方、土壌中には本来リン酸・カルシウムが含まれている。これを自然賦存量と呼ぶ。今回のような分析調査を行う場合、この自然賦存量も考慮する必要がある。様々な調査事例［Bowen1983 ；Bolt-Bruggenwent1980 ；川崎ほか1991 ；天野ほか1991］より、リン酸の自然賦存量の上限値は約3.0 P_2O_5mg/g程度と考えられる。一方、カルシウムの自然賦存量は、1.0～50.0CaOmg/g［藤貫1979］と考えられており、リン酸より含量幅が大きい。

なお、今回はt検定などの統計学的手法による検討は行わない。

SK211

リン酸含量はいずれの試料も3.00P_2O_5mg/g 前後で、Ⅱ層よりやや低い。一方、カルシウム含量は、中央部の床面直上試料（試料番号3～7）でⅡ層の含量を超える数値が得られている。最も高いのは、試料番号5の2.13CaOmg/gである。

SK212

床面直上試料（試料番号3～9）のリン酸含量は、いずれも3.00P_2O_5mg/g前後であり、Ⅱ層よりやや低い。その上位の覆土1層試料はⅡ層よりやや高い。大まかにみて、土坑中央部付近は含量が高い傾向にある。一方、カルシウム含量は全試料とも1.0CaOmg/g前後であり、覆土試料（試料番号1・2）や床面直上試料のうち試料番号3～6でⅡ層の含量と同等もしくはやや上回る数値が得られた。

SK213

リン酸含量は、いずれの試料もⅡ層の含量より低いかほぼ同等である。床面直上試料のうち両脇に位置する試料番号5・9は、1.0P_2O_5mg/g前後とかなり低い。相対的にみて床面直上試料・覆土試料とも中央部の含量が高い。一方、カルシウム含量は、覆土3層（試料番号3・4）で2.0CaOmg/g前後とⅡ層の含量を大きく上回るが、他は1.0CaOmg/gとⅡ層とほぼ同等である。

SK235

リン酸含量は、いずれの試料も3.00P_2O_5mg/g前後であり、Ⅱ層より低い。相対的にみて、覆土試料（試料番号1～3）や床面直上試料のうち中央部付近の試料番号6～9の含量がやや高い。一方、カルシウム含量は1.0～2.0CaOmg/gであり、Ⅱ層とほぼ同等かそれ以上の数値が得られた。相対的にみて、中央部の試料番号3・6や坑底立ち上り部分の試料番号9で含量が高い傾向がある。

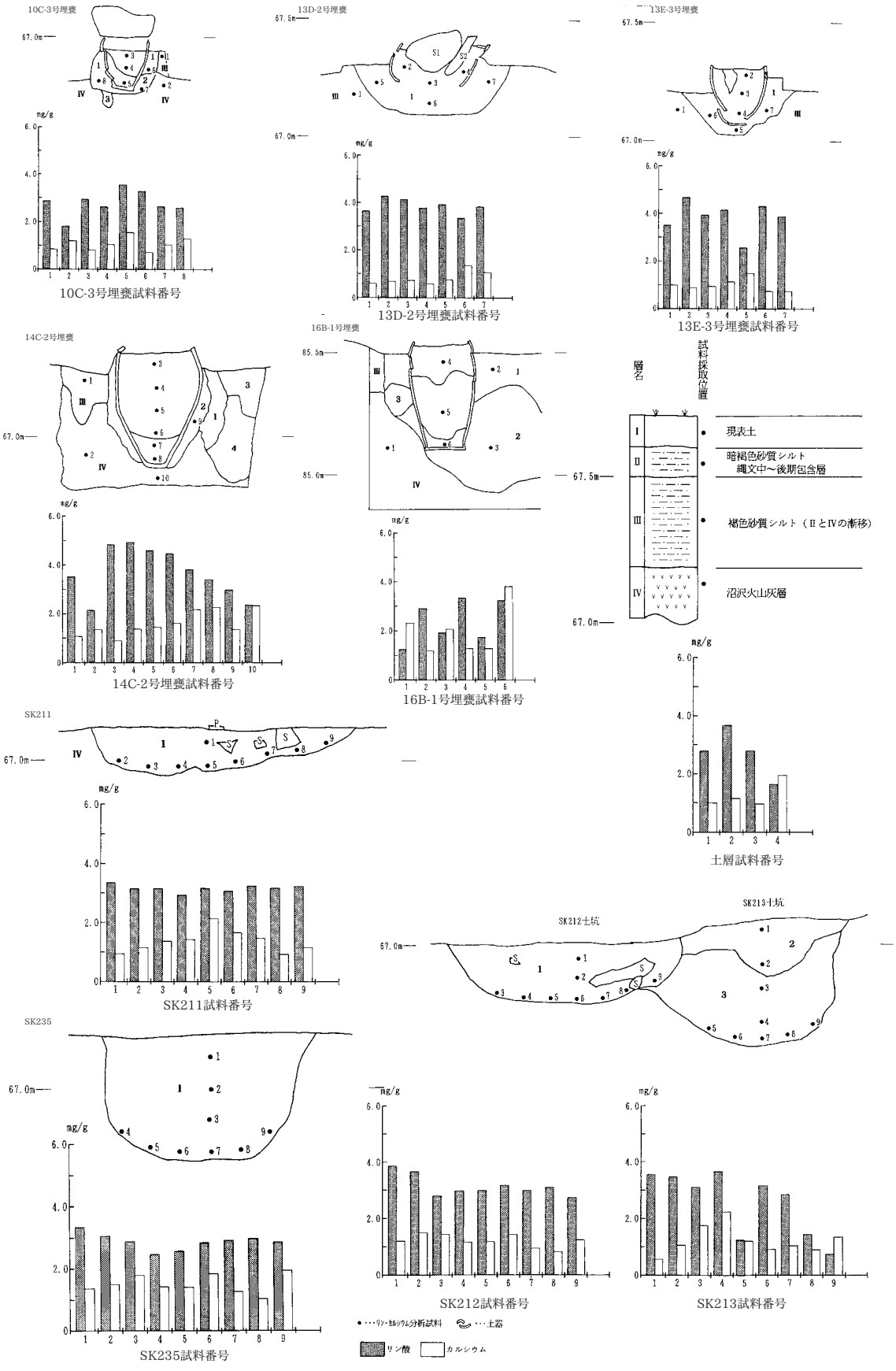
b　土坑の内容物について

縄文時代中期末葉～後期初頭の集落内で墓域と考えられている場所から検出された土坑について、リン酸・カルシウム両分析結果に基づき、内容物の検討を試みる。

土坑内のリン酸含量は、自然賦在量とほぼ同等の3.00P_2O_5mg/g前後のものが多く、遺物包含層（Ⅱ層）の数値を超えるものはほとんどない。

一方、カルシウム含量は1.0～2.0CaOmg/gの範囲のものが多く、いずれの土坑でも自然賦存量の範囲内にある。以上の結果からみれば、土坑内への遺体埋納の可能性が低いと言わざるを得ない。

ところで、土坑内の両成分含量の分布をみると、SK211のリン酸含量のようにほぼ同様な数値がまんべんなく分布するものや、SK213のリン酸含量のように試料採取位置によって含量の差が大きいものが



第84図　リン酸・カルシウム分析試料採取位置及び含量変化

ある。そこで、両含量の偏在状況を確認しておきたい。

SK211を除く各土坑では、覆土下部や中央部付近の床面直上試料などでリン酸含量が高い傾向にある。また、カルシウム含量も、ほぼ同様の偏在傾向を示す。このうち、カルシウム含量については、覆土中のⅣ層土ブロックの影響を無視することはできない。すなわち、各土坑とも比率は異なるが斑文状にⅣ層土ブロックを含み、しかもⅣ層土は遺物包含層であるⅡ層の２倍程度のカルシウム含量を有するのである。しかし、目につくⅣ層土ブロックは試料採集時に除去したこと、Ⅳ層土ブロックの混入比率とは相関せずに含量の高い部分が存在すること、及び複数の土坑で中央部付近の含量が高い傾向があることなどにより、Ⅳ層土が土坑覆土のカルシウム含量に及ぼした影響がさほど大きくないと判断される。

試料名		リン酸含量 P_2O_5mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土色・土性
基本土層	Ⅰ層	2.78	0.99	10YR3/2黒褐・L　＞根、>>礫
	Ⅱ層	3.65	1.14	10YR2/3黒褐・L　>>根
	Ⅲ層	2.80	0.96	10YR4/3.5にぶい黄褐～褐・L　>>根
	Ⅳ層	1.63	1.97	10YR6/3.5にぶい黄橙・L
SK211	1	3.36	0.93	10YR3/3暗褐＞10YR5/4にぶい黄褐・L　>>根
	2	3.16	1.14	10YR3/3暗褐＞10YR5/4にぶい黄褐・L　>>根
	3	3.13	1.37	10YR3/3暗褐＞10YR5/4にぶい黄褐・L　>>根
	4	2.94	1.43	10YR3/3暗褐＞10YR5/4にぶい黄褐・L　>>根
	5	3.16	2.13	10YR3/3暗褐＞10YR5/4にぶい黄褐・L　>>根
	6	3.03	1.66	10YR3/3暗褐＞10YR5/4にぶい黄褐・L　>>根
	7	3.24	1.47	10YR3/3暗褐＞10YR5/4にぶい黄褐・L　>>根
	8	3.17	0.92	10YR3/3暗褐＞10YR5/4にぶい黄褐・L　>>根
	9	3.23	1.16	10YR3/3暗褐＞10YR5/4にぶい黄褐・L　＞根
SK212	1	3.87	1.20	10YR3/2黒褐・L　>>根、>>炭化物
	2	3.67	1.50	10YR3/2黒褐＞10YR6/4にぶい黄褐・L　>>根、>>炭化物
	3	2.80	1.42	10YR3/2黒褐＞10YR6/4にぶい黄褐・L　>>根
	4	2.99	1.17	10YR3/2黒褐≧10YR6/4にぶい黄褐・L　>>根
	5	3.00	1.20	10YR3/2黒褐≧10YR6/4にぶい黄褐・L　>>根
	6	3.18	1.44	10YR3/2黒褐≧10YR6/4にぶい黄褐・L　>>根
	7	3.00	0.99	10YR3/2黒褐≧10YR6/4にぶい黄褐・L　>>根
	8	3.10	0.72	10YR3/2黒褐＞10YR6/4にぶい黄褐・L　>>根
	9	2.76	1.23	10YR3/2黒褐≧10YR6/4にぶい黄褐・L　>>根
SK213	1	3.54	0.56	10YR3/3暗褐・L　>>根
	2	3.48	1.04	10YR3/2黒褐・L　>>根
	3	3.11	1.76	10YR3/2黒褐>>10YR5/4にぶい黄褐・L　>>根
	4	3.67	2.24	10YR3/2黒褐＞10YR5/4にぶい黄褐・L　>>根
	5	1.23	1.19	10YR2/3黒褐>>10YR5/4にぶい黄褐・L　>>根、>>礫
	6	3.18	0.88	10YR3/2黒褐≧10YR5/4にぶい黄褐　>>礫 >>10YR1.7/1黒・L
	7	2.84	1.04	10YR3/2黒褐≧10YR5/4にぶい黄褐 >>10YR1.7/1黒・L
	8	1.45	0.88	10YR2/3黒褐＞10YR5/4にぶい黄褐　>>礫
	9	0.75	1.34	7.5YR2/2黒褐・L
SK235	1	3.33	1.35	10YR3/2黒褐・L　>>根
	2	3.02	1.49	10YR3/2黒褐≧10YR5/4にぶい黄褐・L
	3	2.88	1.80	10YR3/2黒褐≧10YR5/4にぶい黄褐・L
	4	2.47	1.41	10YR5/4にぶい黄褐≧10YR3/2黒褐・L
	5	2.56	1.41	10YR5/4にぶい黄褐≧10YR3/2黒褐・L
	6	2.84	1.82	10YR3.5/3暗褐～にぶい黄褐 ＞10YR5/4にぶい黄褐・L
	7	2.91	1.26	10YR3.5/3暗褐～にぶい黄褐 ＞10YR5/4にぶい黄褐・L
	8	2.94	1.01	10YR3.5/3暗褐～にぶい黄褐 ＞10YR5/4にぶい黄褐・L
	9	2.85	1.92	10YR3.5/3暗褐～にぶい黄褐　>>根、>>礫 ＞10YR5/4にぶい黄褐・L

注.（１）土　色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。>>･･･少量混在。＞･･･混在。≧･･･含む。
（２）土　性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性の判定法による。L･･･壌土（砂と粘土を半々に感じる。）
（３）備　考：>>･･･少量混在。＞･･･混在。

第44表　縄文時代の土坑のリン酸・カルシウム分析結果

以上から、各土坑の覆土では、対照試料としたⅡ層や自然賦存量を大きく越えるリン酸・カルシウム含量が認められなかったが、覆土内で相対的に含量の高い部分が偏在することなどから、土坑内への遺体埋納の可能性はあると判断する。その含量が後述する埋設土器より全体的に低いのは、土器に比べ土坑の壁や底となるⅢ・Ⅳ層の方が透過性が高いため、両成分が系外に流出する割合が高かったためと考えられる。

4）埋設土器の内容物

a　分 析 結 果

リン酸・カルシウム分析結果を第45表に示し、以下土器ごとに記す。なお、対照試料としては、前項に示した基本土層Ⅱ層の含量を主に用いる。

10C－3号埋設土器

リン酸含量は、すべての試料でⅡ層と同等からこれより低い。土器覆土試料と土器外試料を比べると、概して土器覆土の方が含量が高い。また、土器覆土では、底部付近の試料番号5が最も高い。一方、カルシウム含量は、土器底部の試料番号5が最も高く、Ⅱ層の含量を超える数値である。また、土器外の土坑覆土もⅡ層の含量と同等の数値が得られている。

13D－2号埋設土器

リン酸含量は、土器覆土の飼料番号2～4及び土坑覆土の試料番号5・7でⅡ層の含量を超えている。一方、カルシウム含量は土坑覆土の飼料番号6で最も高い。この試料は、リン酸含量は最も低いが、本遺構で唯一Ⅱ層のカルシウム含量を超えるものである。

13E－3号埋設土器

リン酸含量は、土器覆土の試料番号2～4、及び土坑覆土の試料番号6・7でⅡ層の含量を超えている。なお、試料番号3は土器覆土であるが、Ⅳ層類似土である。土器覆土中では最も低い数値であるが、基本土層Ⅳ層の含量より高い数値である。一方、カルシウム含量は、土器底部直下の試料番号5でⅡ層の含量を超えるが、他はⅡ層同等かそれ以上である。

14C－2号埋設土器

リン酸含量は、概して土器覆土は高く、試料番号3～7でⅡ層の含量を超える。土器覆土では上位の試料ほど含量が高い傾向があり、底部付近で最も低い。一方、カルシウム含量は、Ⅱ層と同等かそれ以上のものが多い。概して土器覆土の方が高いが、リン酸とは逆相関の関係にあり、底部付近で最も高い。また、土器底部直下の土坑覆土（試料番号10）でも、土器覆土のうち底部付近（試料番号8）と同等の含量である。試料番号4～8・10でⅡ層の含量を超えている。

16B－1号埋設土器

リン酸は、全試料ともⅡ層の含量以上である。概して土器覆土試料の方が高いが、ほとんどⅣ層土で構成される試料番号5は基本土層Ⅳ層に近似した含量で、相対的には低いと言える。カルシウム含量は、全試料ともⅡ層と同等かそれ以上である。土器覆土の試料番号6では、今回分析対象とした全試料中で最も高い3.82CaOmg/gの数値を得た。

b　埋設土器の内容物について

リン酸・カルシウム含量とも、相対的に土器覆土の方が高い傾向にあること、土器底部付近から土器直下・土器の上位の覆土などに含量の高い部分が偏ること、土器覆土に基本土層Ⅱ層の数値を超える含量が

見られることなどから、各埋設土器中に遺体を埋納した可能性が高いと判断する。なお、土坑覆土に比較して全体的に両含量の数値が高かったのは、土器の透過性が土坑の壁・底より低かった可能性がある。

（平成６年11月１日）

試料名		リン酸含量 P_2O_5mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土色・土性	
10C 3号	1(Ⅲ)	2.89	0.85	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐>>2.5Y5/4黄褐・CL	
	2(Ⅳ)	1.82	1.21	2.5Y5/4黄褐・CL	
	3	2.96	0.82	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐>>2.5Y5/4黄褐・CL	
	4	2.66	1.04	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐>>2.5Y5/4黄褐・CL	
	5	3.58	1.54	10YR3/4暗褐・CL	>>根
	6	3.30	0.77	10YR3/3暗褐・CL	≧根、>>礫
	7	2.66	1.03	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐>>2.5Y5/4黄褐・CL	>>根
	8	2.61	1.31	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐>>2.5Y5/4黄褐・CL	
13D 2号	1(Ⅲ)	3.67	0.61	10YR3/2黒褐・L	>>根、≧礫
	2	4.29	0.70	10YR3/2黒褐>>2.5Y5/4黄褐・L	≧礫
	3	4.16	0.76	10YR3/2黒褐・L	≧礫
	4	3.80	0.60	10YR3/2黒褐・L	≧礫
	5	3.95	0.74	10YR3/2黒褐・CL	
	6	3.37	1.35	10YR3/2黒褐・CL	
	7	3.87	1.09	10YR3/2黒褐・CL	>>炭化材
13E 3号	1(Ⅲ)	3.51	1.00	2.5Y5/4黄褐・CL	>>炭化材
	2	4.69	0.88	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐>>2.5Y5/4黄褐・CL	>>根
	3	3.96	0.94	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐>>2.5Y5/4黄褐・CL	
	4	4.17	1.15	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐>>2.5Y5/4黄褐・CL	>>根
	5	2.56	1.51	2.5Y5/4黄褐・CL	
	6	4.33	0.76	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	
	7	3.90	0.78	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐>>2.5Y5/4黄褐・CL	
14C 2号	1(Ⅲ)	3.51	1.08	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・L	
	2(Ⅳ)	2.14	1.36	2.5Y5/4黄褐・L	
	3	4.82	0.90	10YR3/2黒褐・CL	>>根
	4	4.92	1.38	10YR3/2黒褐・CL	
	5	4.61	1.42	10YR3/2黒褐・CL	
	6	4.48	1.68	10YR3/2黒褐・CL	>>根
	7	3.81	2.18	10YR3/2黒褐・CL	>>炭化材
	8	3.40	2.27	10YR3/2黒褐・CL	>>礫
	9	2.99	1.83	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・L	
	10	2.38	2.35	2.5Y5/4黄褐・L	
16B8 1号	1(Ⅳ)	1.25	2.31	2.5Y5/4黄褐・L	
	2	2.91	1.19	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	
	3	1.94	2.04	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	
	4	3.35	1.30	10YR3/2黒褐・CL	
	5	1.76	1.29	2.5Y3/3暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	
	6	3.24	3.82	10YR3/2黒褐・CL	

注．（１）土　色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。>>･･･少量混在。>･･･混在。≧･･･含む。＝･･･同量。
（２）土　性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性の判定法による。L･･･壌土（砂と粘土を半々に感じる。）、CL･･･埴壌土（砂よりも土を多く感じる。）
（３）備　考：>>･･･少量混在。>･･･混在。≧･･･含む。＝･･･同量。

第45表　縄文時代埋設土器のリン酸・カルシウム分析結果

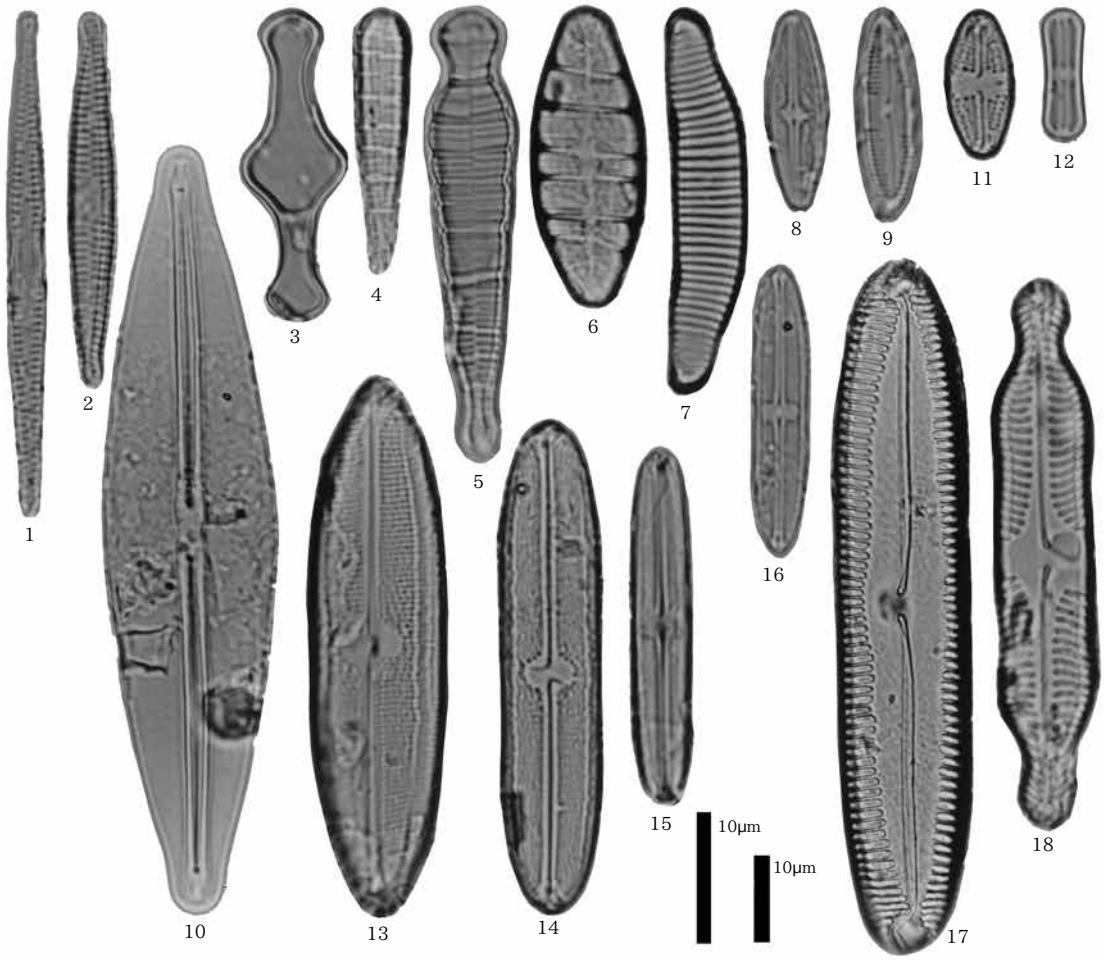
引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敦・中井　信　1991　「中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『土壌蓄積リンの再生環境利用技術の開発』 農林水産省農林水産技術会議事務局編　p.28-36

Bowen，H．J．M．1983『環境無機化学－元素の循環と生化学－』浅見輝男・茅野充男訳　博友社　p.297
〔Bowen，H．J．M．　1979　Bnvironmental Cemistry of Blements〕

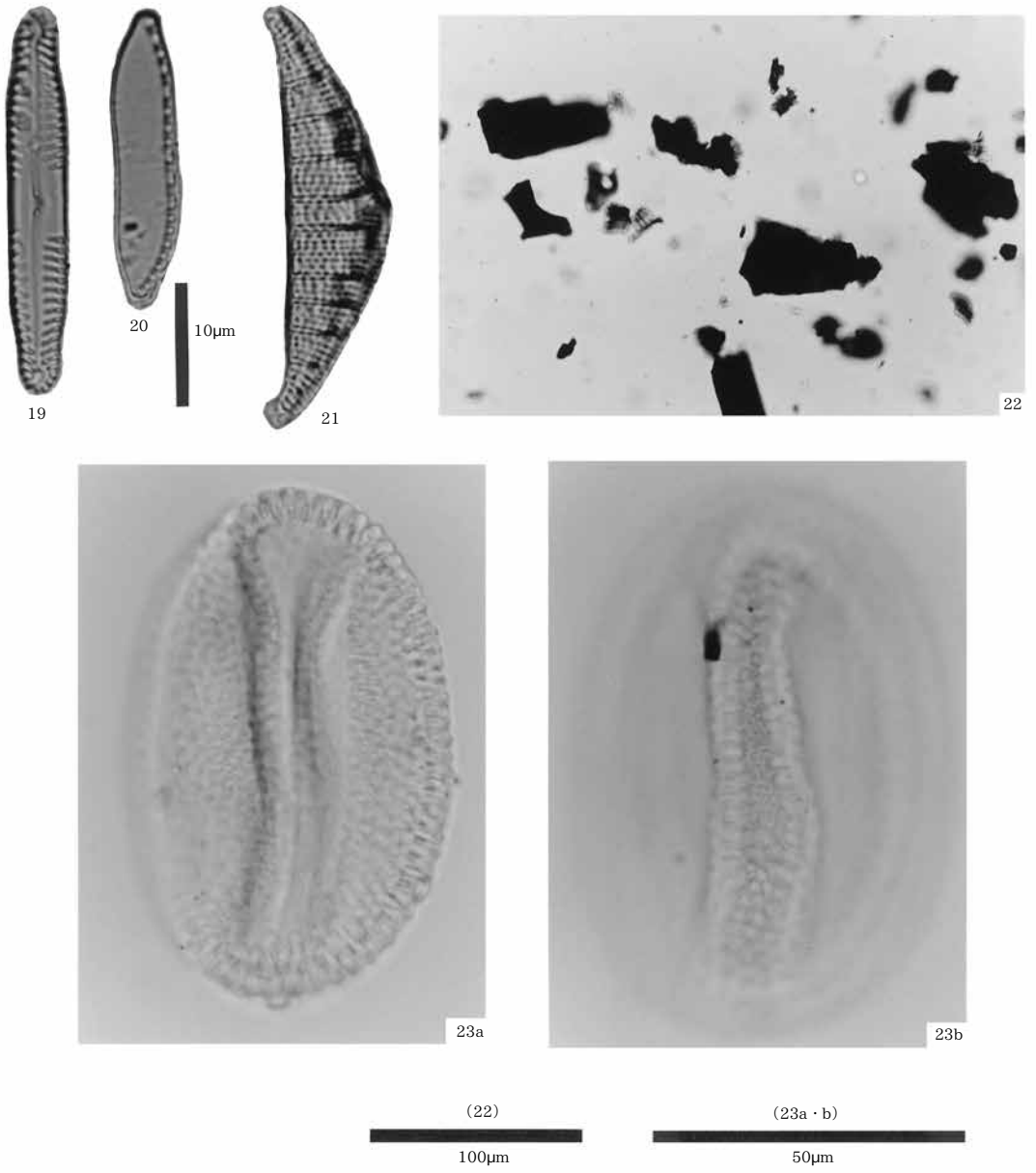
Bolt，G．H．Bruggenwert，M．G．M．　1980　『土壌の化学』岩田進午・三輪容太郎・井上隆弘・陽 捷行訳　学会出版センター　p.309〔Bolt，G．H．and Bruggenwert，M．G．M．（1976）SOIL CHEMISTRY〕　p.235～236

土壌標準分析・測定法委員会編　1986　『土壌標準分析・測定法』博友社　p.354
土壌養分測定法委員会編　1981　『土壌養分分析法』養賢堂　p.440
藤貫　正　　1979　「カルシウム」『地質調査所科学分析法』地質調査所　p.50：57～61
川崎 弘・吉田　澪・井上恒久　1991　「九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量」『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』農林水産省農林水産技術会議事務局編　p.149：23～27
木下　忠　　1981　「埋甕－古代の出産習俗」『考古学選書』18　雄山閣　p.262
東京大学農学部農芸化学教室編　1957　『農芸化学実験書』第1巻　p.411
農業図書・農林省農林水産技術会議事務局監修　1967　『新版標準土色帖』
ペドロジスト懇談会編　1984　『土壌調査ハンドブック』　博友社　p.156



1,2. *Fragilaria capucina* var. *gracilis* (Oestr.) Hustedt
3. *Tabellaria flocculosa* (Roth) Kuetzing
4. *Merdion circulae* Agardh
5. *Meridion circulae* var. *constrictum* (Ralfs) V. Heurck
6. *Diatoma hiemale* var. *mesodon* (Ehr.) Grunow
7. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst
8. *Anomoeoneis brachysira* (Breb.) Grunow
9. *Caloneis aerophila* Bock
10. *Frustulia rhomboides* ver. *saxonica* (Rabh.) De Toni
11. *Navicula mutica* Kuetzing
12. *Navicula contenta* Grunow
13. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer
14. Neidium bisulcatum (Lagerst.) Cleve
15,16. *Neidium alplinum* Hustedt
17. *Pinnularia brevicostata* ver. *sumatrana* Hustedt
18. *Pinnularia mesolepta* (Ehr.) W. Smith

第85図　10G谷部断面Ⅲ'''層より検出された珪藻化石



19.*Pinnularia subcapitata* Gregory
20.*Nitzschia brevissima* Grunow
21.*Rhopa lodia gibberula* (Ehr.) 0.Muller
22. 花粉分析プレパラートの状況写真
23a・b. ソバ属

第86図　10G谷部断面Ⅲ'''層より検出された珪藻化石・花粉化石

3　北野遺跡出土土器の熱ルミネッセンス年代測定

橋本　哲夫（新潟大学）

新潟県東蒲原郡上川村北野遺跡から出土した土器の石英粒子を使用した赤色熱ルミネッセンス（RTL）年代測定を試みた。測定結果は第46表のとおりである。平均的な年代値としての3,700年の値は、土器出土層が約5,000年前の沼沢火山灰層（基本層序Ⅳ層）の直上層に位置していることから、層序的にも整合性のよい値と評価できる。

縄文土器から得た石英粒子の備蓄RTLは大変弱いため、ロッド型ライトパイプを採用し、高感度化したTL測定器で初めて精度よく測定可能となった。TLの繰り返し測定から備蓄線量（PD）に対しては10％前後と見積もっているが、同程度に線量率測定にも付随する誤差が避けられない。したがって、年代値への全体的な実験誤差としては、15％程度と見積もった。

試料	出土層位（基本層序）	備蓄線量（Gy）	TL生産温度範囲	TL年代値（年）
縄文土器片・1	Ⅲ層	58	250～370°	3,800
		58	260～310°	3,800
縄文土器片・2	Ⅲ層	56	250～370°	3,600
		56	260～310°	3,600

年間線量：1.54mGy（土器片からの粉末試料をα線スペクトロメトリーに基き見積もった）

第46表　備蓄線量と縄文土器のTL年代値（新潟県北野遺跡出土）

第Ⅶ章　ま　と　め

これまで遺構と遺物について事実報告を述べてきた。その結果、上層では沼沢火山灰の二次堆積が終了した直後の縄文時代前期末葉（大木６式新段階）から中期を経て後期、古代、中世、近世・近代までの様々な時期の遺構・遺物の存在が明らかになった。ここではこれまで述べてきたことと重複する部分も多いが、今一度整理し、若干の検討を加えまとめとする。

１　遺跡と遺構について

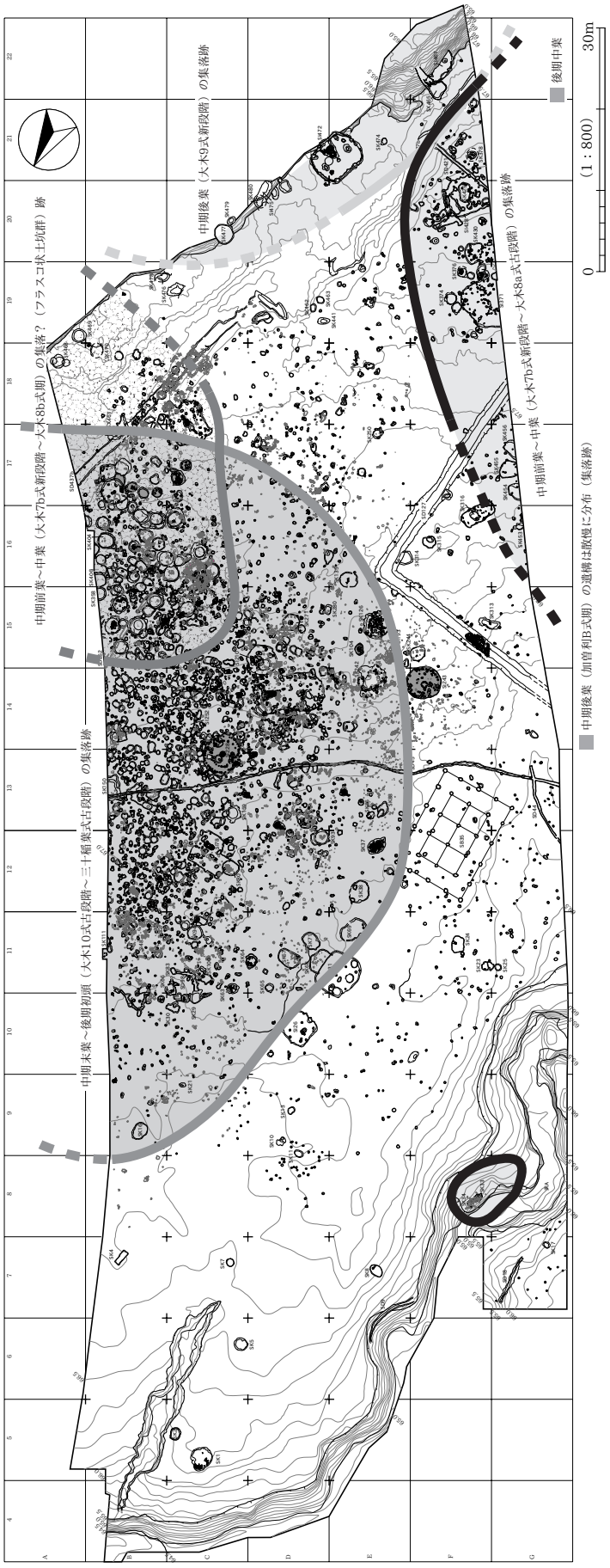
Ａ　縄文時代の遺跡と遺構

上層で検出された遺構は、住居跡64基、土坑328基、埋設土器132基、焼土18基、集石22基、掘立柱建物１棟、溝９条、性格不明遺構５基、ピット多数などである。これらの遺構は、その多くが遺物を伴わないため詳細な時期決定は難しい。しかし、遺構周辺から出土する遺物とその分布は地区ごとにある程度区分され、また、遺構の分布と形状から不明確ながらある程度、それぞれの遺構群の所属時期が推定できる。

所属時期の最も大きい決め手となる根拠は、遺構に共伴する土器で、次いで遺構周辺に分布する土器である。既述のように中期末葉～後期初頭（大木10式古段階～三十稲場式古段階）の土器は調査区北東部の９～17・Ｂ～Ｅグリッドに多く分布し、中期前葉～中葉（大木7b式新段階～8a式古段階）の土器は17～21・Ｅ～Ｇにほとんどが分布する。それぞれの時期の遺構もこの範囲内にすべて収まる。後期中葉（加曽利Ｂ式）の土器はSI228の存在する13C、同じくSI243の14F、SK413・412・401・410・394・395が弧状に並ぶ17B～Ｃグリッドに多いものの、遺構が少なく分散するため調査区内に散漫に分布する。中期後葉（大木９式新段階）の土器は、20D・21D～Ｅ・22Fの集落跡のSI472・21F－１号埋設土器からはある程度出土するが、包含層からの出土は少ない。常浪川の段丘崖に接するため、包含層遺物は流出した可能性が高い。中期中葉（大木8b式）の土器は、出土数が少ないためか散漫に分布する。

また15～19・Ｂ～Ｃに分布するフラスコ状土坑群は、遺構の切り合いから中期末葉の遺構より確実に古くなる。遺物はほとんど出土しないものの、SK322からは大木8b式、SK400からは大木7b式新段階の土器が出土していることから、この地区のフラスコ状土坑群は大木7b～8b式期の所産と推定される。しかし、中期前葉～中葉（大木7b式新段階～8a式古段階）の集落は、17～21・Ｆ～Ｇグリッドに存在し、フラスコ状土坑を備えている。このフラスコ状土坑はいずれも一括遺物を出土する点で大いに異なる。15～19・Ｂ～Ｃに分布するフラスコ状土坑群に接するSI396は土器敷き炉から新崎式Ⅲ段階（大木7b式新段階並行）と推定されるが、住居跡及び炉の長軸方向は、17～21・Ｆ～Ｇグリッドの中期前葉～中葉（大木7b式新段階～8a式古段階）の集落跡の住居とは異なる。

遺構・遺物の時期別の分布を図に示すと第87図のようになり、時期ごとに集落が変遷していた様子が窺える。



第87図　遺構・遺物の分布と集落跡の立地

B　古代以降の遺構

古代以降の遺構と推定される主なものは、大規模の溝のSD127、掘立柱建物のSB35、竪穴状遺構のSI26・SI31、鍛冶遺構と推定されるSX465がある。これらの位置関係は、第88図のとおりとなり、次のように共通点は多い。

① SD127、SB35、SI26、SI31は北方向に向かって縦列に並び、主軸方位もSD127：N－4.5°－E、SB35：N－1.5°－W、SI26：N－11.5°－E、SI31：N－4.5°－Eとなり、ほぼ一致する。

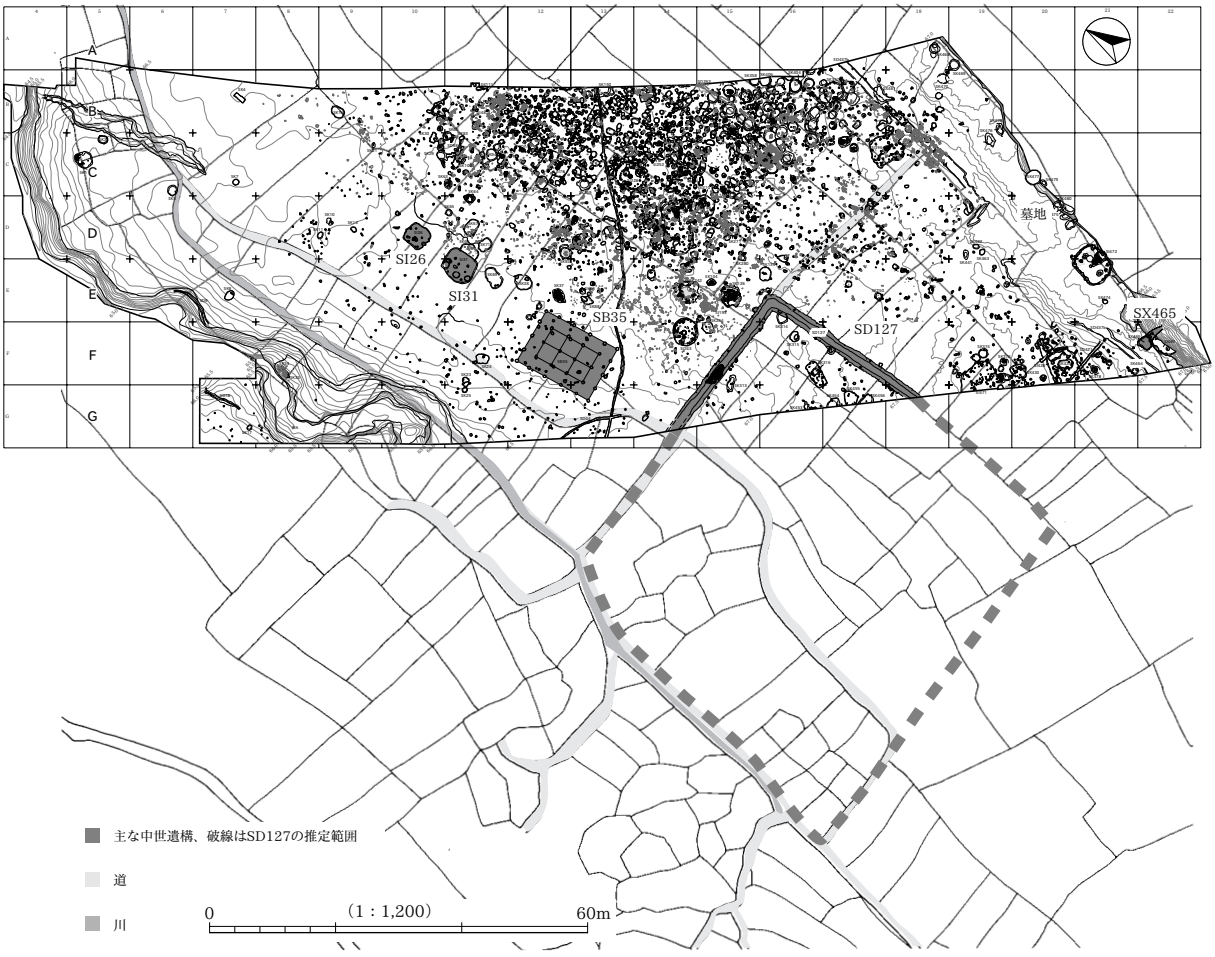
② 古代以降の砥石A類がSD127、SI26、SI31から多く出土している。出土数はSD127から32点、SI26から4点、SI31から7点を数える。

③ 鉄滓・羽口がSI26、SI31、SX465及びこれらの遺構周辺から多く出土している。

したがって、これらの遺構は関連性が非常に強く、鉄製品生産に関わったものと考えられる。

これらの遺構の時期は、土器の出土が少なく判然としないが、SD127で出土した珠洲焼から珠洲編年のⅡ～Ⅲ期（13世紀代）と推定され、他の遺構もおおむねこの時期と考えている。

さらにこれらの遺構群を明治期に作成した更正図に重ねるとSD127は赤道と土地境界線に一致する。これを基にSD127の規模を求めれば一辺約60mの方形溝となるものと予想される。さらに方形溝のほ



第88図　中世の遺構とSD127の推定範囲

ぼ中央にある赤道は、北に延びるが、SD127で礫集中にほぼ一致[1]し、SB35を迂回する。SD127の礫集中部分は土橋の役割をしたもので、ここを通る赤道はSB35を意識して構築されたと推定される。

2　土器について

A　出土土器の編年的位置

北野遺跡では既述のように沼沢火山灰の二次堆積終了直後から、中期をへて後期中葉の土器が出土した。その量は膨大で多様である。これらの土器群の編年的位置について簡単にまとめたい。

1期　第Ⅰ群A類で前期末葉の大木6式新段階に相当する。沼沢火山灰の二次堆積終了後の土器であり、出土数は少ない。福島県磐梯町法正尻遺跡［松本前掲］などで類例が見られる。

2期　第Ⅰ群B類で中期初頭の大木7a式に相当する。出土数は少なく、沼沢火山灰の二次堆積が終了してからこの時期までは、調査区で活発な活動の痕跡は見られない。福島県磐梯町法正尻遺跡［松本前掲］などで類例が見られる。

3期　第Ⅱ群A・B・D・E・F・G類に含めた大部分で中期前葉の大木7b式に相当し、さらに新段階のものが多い。深鉢の器形は頸部から口縁部が緩く開くD器形、口縁部が短く外反するB器形、胴部が膨らみ、頸部がすぼまり、口縁部が外反するG器形、バケツ状のH器形が多い。これらの器形の口唇部に円形、瘤状の突起が付く。また、口縁部から頸部にかけて橋状把手が付くものも多い。文様は交互刺突文、断面三角形の「Y」字状の隆線、縄圧痕文、口縁部から頸部にかけての無文帯や楕円区画文、また口縁部や胴部の区画内には沈線で曲直線が描かれる。

これらの土器群に汎北陸系の蓮華文が施文される第Ⅴ群A類、半隆起線文及び爪形文の付された半隆起線文の曲直線施文のB類、大波状口縁をもち、器面全体に半隆起線や沈線が密に施文されるC類が一定量伴う。

さらに東関東系の阿玉台Ⅰb式の第Ⅵ群A類、阿玉台Ⅱ式のB類が一定量伴い、関東系の勝坂1式と推定される第Ⅶ群A類がわずかに混じる。

3・4期の過渡期　第Ⅱ群C類のすべて、E～I、M類の一部に大木7b・8a式の過渡的な土器が見られる。第Ⅱ群土器は口縁部が球体状に膨らみ、口唇部が短く外反するA器形の深鉢である。文様は有節沈線が多用される1類、沈線文が主文様となる2類がある。1類は福島県石川町七郎内C遺跡の第Ⅱ群第2段階Aタイプで、大木8a式に先行する土器［松本前掲］とされ、その後、大木7b・8a式の過渡期［松本前掲・森前掲］とされた。

2類は1類と同時期と推定されるが、類例が少なく注目されていない。本遺跡の地域性の反映なのか検討を要する。

4期　第Ⅱ群H・I・J・K・L・M・N・O類に含めた大部分で中期中葉の大木8a式に相当し、さらに古段階のものが多い。深鉢の器形はいわゆるキャリパー形のF類が圧倒的に多く、次いで、頸部から口縁部が緩く開くD器形である。これらの器形の口唇部や口縁部には隆帯で加飾された突起や把手が付き、これが発達し全周するものもある。また隆帯貼付による区画文や比較的細い粘土紐を貼付し曲直線を表すものもある。口縁部や胴部文様は3条単位の沈線でクランク状文や渦巻文などの曲直線を描くものが多い。

1）図版編印刷後に、SD127の礫集中がずれていることに気付いた。礫集中部分はさらに5ｍほど西側に移動する。

時期		東北系土器		在地系土器		関東系土器		その他
		東北編年	北野分類	在地編年	北野分類	関東編年	北野分類	
前期末葉	北野１期	大木６新	Ⅰ群Ａ					
中期初頭	北野２期	大木7a・円筒上層ａ	Ⅰ群Ｂ	剣野Ｅ				
中期前葉	北野３期	大木7b・円筒上層ｂ	Ⅱ群・Ⅶ群Ｂ	清水上前葉①～③	Ⅴ群Ａ・Ｂ・Ｃ	阿玉台Ⅰｂ	Ⅵ群Ａ、Ⅶ群Ａ	
						阿玉台Ⅱ	Ⅵ群Ｂ	
中期中葉	北野４期	大木8a・円筒上層ｃ		清水上中葉①～③（馬高Ⅰ）	Ⅴ群Ｂの一部 Ⅴ群Ｄ			
	北野５期	大木8b	Ⅲ群	馬高Ⅱ				
中期後葉	北野６期	大木９	Ⅸ群１～３類					
中期末葉	北野７期	大木10	Ⅸ群４類 Ⅸ群５・６類			加曽利Ｅ4	Ⅹ群１・２	ⅩⅡ群
後期初頭	北野８期			城之腰Ⅵ		称名寺		
				三十稲場	ⅩⅠ群１～６			
後期中葉	北野９期			三仏生		加曽利Ｂ	ⅩⅣ群	

第47表　北野遺跡上層土器編年対比表

これらの東北系の土器に、東北北部の円筒上層ｃ式の土器がわずかに伴う。

また、大木8a式土器に汎北陸系の第Ⅴ群Ｂ類の半隆起線や爪形文の付く半隆起線が、縦方向の隆帯に爪形文や矢羽状短沈線に変化したもの、大波状口縁をもち、器面全体に基隆帯＋隆起線、隆起線や沈線が密に施文されるＤ類が一定量伴う。

5期　第Ⅲ群土器で中期中葉の大木8b式に相当する。出土量は多くないものの大木8b式で占められ、他系統のものは出土しない。深鉢の器形はキャリパー形のＦ類、バケツ状のＨ類でほぼ占められる。

中期前葉（大木7b式）から中葉（大木8b式）での深鉢の器形変化は、おおむね頸部で口縁部が緩く開くものからいわゆるキャリパー形へと変化するが、大木8b式になるに従い口縁部の内湾がより強くなる傾向である。

6期　第Ⅸ群土器１～３類で中期後葉の大木９式に相当する。調査区南側の常浪川との段丘沿いに大木９式期の集落を検出したが出土遺物は多くない。いずれも大木９式新段階のものである。ただし、図示したものの多くは大木９式期の集落跡からのものでなく、中期末葉～後期初頭の集落跡からのものであり、大木９式の特徴を残した大木10式古段階の土器の可能性がある。

7期　第Ⅸ群土器４・５・６類で中期末葉の大木10式に相当する。８期とともに最も出土量が多い。沈線により「C」「S」「U」などのアルファベット文や曲線文を描くもの（4類）、胴部上半に隆帯や隆起線によりアルファベット文を描くもの（5類）、口縁部の下に一条の沈線や隆帯を巡らすもの（6類）である。文様自体は複雑な施文でない。

これらの東北系の土器に第Ⅹ群の関東系の加曽利Ｅ4式が一定量見られる。さらに加曽利Ｅ4式土器は８期に影響し、称名寺Ⅰ式ｂ類へと変化する。口縁部に幅の狭い無文帯をもち、「U」字状文が上下に向かい合い入り組むもの（1類）、頸部から胴部に橋状把手をもつもの（331）がある。

8期　第ⅩⅠ群土器１～６類で後期初頭の三十稲場式古段階のものである。深鉢・鉢形土器ともに口端が受口状になるC1、口縁部が「く」の字状に外反するC2器形となり、この時期の特徴的で、典型的な器形となる。口縁部に単純な板状の把手が付くもの（1類）、１類の把手にややひねりのあるもの（2類）、２類の把手に貼付文・刻み・沈線等の装飾があるもの（3類）、細い棒状把手や突起状のもの（4類）、１～４類以外の把手が付くもの（5類）、沈線を弧状に区画し、区画内に短沈線をもつもの（6類）がある。

また、系統ははっきりしないが第８期の三十稲場式古段階に並行もしくは前後に位置付けられ、口縁部に隆帯で文様を描くものが認められる。口縁部に隆帯を弧状にし、４単位に配置するもの（1類）、口縁部を無文帯とし、隆帯を逆「T」・「人」・「入」字状にし、４単位に配置するもの（2類）、口縁部から頸

部にかけて隆帯のループ状文を上下に相反するように向かい合わせるもの（3類）がある。

9期　第ⅩⅣ群土器で後期中葉の加曽利B1式のものである。新潟県では後期中葉に三仏生式土器が比定されているが、加曽利Ｂ式土器との区別が難しいため、加曽利Ｂ式として一括した。遺構は住居跡２基、土坑数基と少ないため遺物の出土量は多くない。無文のもの（1類）、３～４条の縄文帯が巡り、弧状やクランク状の沈線等で仕切るもの（2類）がある。

以上の事柄をまとめると第47表のようになり、北野遺跡（上層）の土器編年のおおよその流れとなる。

3　石器について

A　石 器 組 成

北野遺跡（上層）の石器群の様相・特徴をより明らかにするため、本遺跡の存続時期[1)]に近い遺跡と比較してみたい。比較する遺跡は奥三面遺跡群アチヤ平遺跡［富樫ほか前掲］、小千谷市城之腰遺跡［藤巻ほか前掲］である。これらの遺跡の石器組成表は第48表に示したが、比較遺跡の概要を説明する。

アチヤ平遺跡　新潟県北部の岩船郡朝日村奥三面に所在する遺跡である。遺跡は三面川上流、末沢川との合流点の右岸段丘上に立地し、その遺構・遺物・規模から拠点的集落と考えられる。主体となる時期は、中期末葉（大木10式新段階並行）～後期前葉（南三十稲場式新段階並行）である。石器群の特徴として磨製石斧の大量生産遺跡であることから、磨製石斧製作関連の石器が多い。剥片石器の石材環境は極めて悪く、剥片石器の石材のほぼすべては山形県から供給されたものと推定される。また、遺跡の立地が段丘礫層・礫を含んだ黒色土上に立地したため、敲磨石類をはじめとする礫石器の出土数が多くなることが予想される。地理・地形的には、山形県に近いため東北地方的な石器群と予想される。

城之腰遺跡　新潟県南部の魚沼地方の小千谷市に所在する遺跡である。遺跡は信濃川中流域の右岸の段丘上に立地し、その遺構・遺物・規模から拠点的集落と考えられる。主体となる時期は、中期末葉（大木10式古段階並行）～後期前葉（南三十稲場式新段階並行）である。石器群の特徴として信濃川に近いことから石材環境の良さが上げられる。また、打製石斧の多さなどから新潟県中南部の山間地域の石器様相を示している。

３遺跡の石器組成を比較するにあたり、器種石器の使用品・完成品と推定されるものを対象とし、これ以外の失敗品（従来、いわゆる「未成品」と呼称されていたもの）、剥片類、石核は除外した。また、三脚石器は出土数が少なく、時期的な検討も要するため除外している。

まず３遺跡とも共通する出土数の多い器種は不定形石器、両極剥離痕のある石器、敲磨石類、石皿である。両極剥離痕のある石器を除いて、ほかの３器種は中期以降一般的な遺跡では多い傾向にある。特に不定形石器は、どの遺跡でも極めて多く出土し、不定形石器の出土数が他器種の出土比率を左右するほどである。城之腰遺跡も出土数が多いものの、比率は高くなく、他の２遺跡と異なる。

また、不定形石器の多い遺跡では、剥片石器の充実ぶりが窺われる。不定形石器の最も多いアチヤ平遺跡では、石鏃、石錐、石匙、篦状石器が多く出土している。両極剥離痕のある石器は素材か器種石器か検討を要する余地もあるが、多く出土している。逆に不定形石器の少ない城之腰遺跡では石錐、石匙、両極

1)　ここでは主体となる時期が中期末葉～後期初頭であるため、この時期に限定して論を進める。したがって、比較する遺跡も中期末葉～後期初頭に近い遺跡を対象とした。

遺跡名	器種名	石鏃	尖頭器	石錐	石匙	不定形石器	両極剥離痕のある石器	板状石器	篦状石器	打製石斧	小形磨製石斧	磨製石斧	石錘	敲磨石類	多面体敲石	石皿	砥石	合計	磨製石斧失敗品	三脚石器	石鏃失敗品	石核	剥片類	石棒	類石棒	玉類	扁平加工礫
北野遺跡(上層)	出土数（点）	56	4	116	63	2,799	1,043	178	30		20	147	38	3,479	270	435	121	8,799	14	7	78	1,097	27,311	12	15	7	39
	百分率（%）	0.6	0.04	1.3	0.7	31.8	11.9	2	0.3		0.2	1.7	0.4	39.5	3.1	4.9	1.4	99.84									
アチヤ平遺跡	出土数（点）	800	42	623	150	10,601	2,227	1,630	168	40	45	286	5	3,192	109	978	393	21,289	1,599		844	253	29,548	60	9	2	54
	百分率（%）	3.8	0.2	2.9	0.7	49.8	10.5	7.7	0.8	0.2	0.2	1.3	0.02	15	0.5	4.6	1.8	100.02									
城之腰遺跡	出土数（点）	122	24	101	8	337	328	16		373	49	267	688	2,896	32	867	23	6,131		11	54	184	4,049	19		20	4
	百分率（%）	2	0.4	1.6	0.1	5.5	5.3	0.3		6.1	0.8	5.2	11.2	47.2	0.5	14.1	0.4	100.7									

第48表　主要遺跡の石器組成表

剥離痕のある石器が少ない。器種石器の素材となる剥片類を見れば、その出土数は歴然としている。本遺跡の不定形石器の出土数は、この両者の中間的な数であり、他の剥片石器の出土数、剥片類の出土数もおおむねアチヤ平遺跡と城之腰遺跡の中間的な出土傾向である。なお、実測図ではなかなか表現できなく、かつ統計的に結果は出ないが、剥片石器の調整は一般的にアチヤ平遺跡がていねいなつくりで、城之腰遺跡は粗雑なつくりの傾向にあり、本遺跡はその中間的なものが多い。

個別器種をみるとアチヤ平遺跡では磨製石斧、多面体敲石、砥石、磨製石斧失敗品が多い。既述のように磨製石斧生産遺跡にその要因が求められる。板状石器はアチヤ平遺跡に極めて多く、本遺跡にやや多く、城之腰遺跡に極めて少ない。板状石器は遺跡により出土数の多少が激しいことが既に指摘［髙橋前掲］されていることから、これが各遺跡の特徴を反映している。篦状石器はアチヤ平遺跡で極めて多く、北野遺跡（上層）で一定量、城之腰遺跡では計上されていない。本遺跡では打製石斧との区別がつかないため、一括りにしたが、城之腰遺跡では篦状石器に代わる器種として打製石斧が用いられたと思われる。石錘は城之腰遺跡で極めて多く、本遺跡、アチヤ平遺跡では極めて少ない。さらに、本遺跡では38点のうち、3点を除き35点は前期の所産と推定される。石錘の多さは、城之腰遺跡の特徴と推定される。多面体敲石は本遺跡で極めて多く、磨製石斧を生産したアチヤ平遺跡より多く出土している。多面体敲石の項でも触れたが、頻繁な使い捨て以外に、磨製石斧に変わる生産品を検討する必要がある。

器種石器の素材となる石核や剥片を見ると、北野遺跡（上層）は他の2遺跡に比べ、その出土数が多い[1)]。また、石核の項でも述べたように、石核と剥片の大きさは、アチヤ平遺跡よりはるかに大きい。本遺跡が剥片石器や礫石器の石材環境の良好な地に営まれたからである。

1）剥片類の出土数はアチヤ平遺跡がやや多いが、器種石器の数と比較した場合、その数は多いといえる。

要　　約

1　北野遺跡は、新潟県東蒲原郡上川村大字九島字長木3,429番地ほか（通称：北野）に所在する。遺跡は阿賀野川の支流、常浪川左岸の段丘に立地し、標高68mを測る。

2　調査は磐越自動車道の建設に伴い、平成５～７年の３か年にわたり実施した。調査面積は上・下層それぞれ8,900㎡である。上・下層の区分は縄文時代前期末葉（約5,000年前）に噴火したとされる沼沢火山の二次堆積層を間層とし、これより上を上層、下を下層とした。

3　調査の結果、下層では縄文時代早期前葉～前期末葉までの遺構・遺物が発見された。上層では縄文時代前期末葉以降の遺構・遺物が発見されている。なお、下層の発掘調査記録は、平成14年度に刊行されている。

4　遺構は住居跡64基、土坑328基、埋設土器132基、焼土18基、集石22基、掘立柱建物１棟、溝９条、鍛冶遺構を含む性格不明遺構５基、ピット多数である。これらは主に縄文時代中期前葉～中葉、中期後葉、中期末葉～後期初頭、後期中葉の集落跡を構成する遺構である。

5　遺物は土器・土製品・石器・石製品である。縄文土器は沼沢火山の二次堆積が終了した直後の前期末葉の大木６式新段階から中期・後期を経て晩期まで断続的ながら出土している。主体は中期末葉（大木10式古段階）～後期初頭（三十稲場式古段階）であり、次いで中期前葉（大木7b式）～中葉（大木8a式）である。この他、後期中葉（加曽利B1式）も一定量認められ、中期後葉（大木９式）、中期中葉（大木8b式）も少量出土している。

　土器群の系統は中期前葉～中葉では、東北系の大木式が主体であり、これに北陸系、越後系、東関東系が客体的に混じる。中期末葉～後期初頭では東北系の大木10式から在地系の三十稲場式が主体となり、これに関東系の加曽利E4式、称名寺Ⅰ・Ⅱ式が混じる。

　地理的関係からか土器様相は、福島県会津地方の土器様相に近似する。

6　石器は、遺構・土器が多時期にわたることから、多様な石器群が認められ、ある程度中期から後期への石器群の変遷過程が窺える。石器群の地域的様相は東北的な（具体的には奥三面遺跡群）石器群と越後的な（具体的には魚沼地方）石器群との中間的な様相を示すものと考えている。

　土製品も土偶をはじめ多種多様な土製品が出土し、石製品も石棒、鏡面状の光沢を有する石器など様々な石製品が出土している。

7　上層・下層の遺跡を総合すると、この地は縄文時代早期以来、頻繁に集落跡が営まれていたことが分かり、遺構・遺物からこの地域の拠点的集落が営まれていたものと推定できる。

参考・引用文献

会田容弘　2000　「縄文時代の頁岩製石刃製作と流通－東北地方南部のありかた」『山形考古学　第６巻　第４号』山形県考古学会

赤羽正春・富樫秀之　1991　『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ 下クボ遺跡』新潟県朝日村教育委員会

赤羽正春・富樫秀之・川村三千男・田海義正　1993　『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ 前田遺跡』新潟県朝日村教育委員会

阿部明彦・佐々木洋治・佐藤正俊ほか　1984　『山形県埋蔵文化財調査報告書 第75集 水木田遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会

阿部朝衛　1983　「バイポーラーテクニックの技術的有効性」『考古学論叢』Ⅰ　東出版寧楽社

阿部朝衛　1984　「多面体を呈する敲石について」『豊栄市史研究第２号』新潟県豊栄市

天野和孝ほか 1995　『地学のガイドシリーズ21 新潟県地学のガイド（下）新潟県北部・佐渡の地質と化石をめぐって』コロナ社

荒木　隆　1998　「初期複式炉の発生と展開について（予察）ー安部郡東和町上台遺跡の発掘調査報告」福島県考古学会

石田明夫ほか 2001　『会津若松市文化財調査報告書 第70号 本能原遺跡』会津若松市教育委員会

伊藤玄三・小倉淳一ほか　1992　『田島町文化財調査報告書 第十集 会津田島 寺前遺跡』田島町教育委員会・法政大学文学部考古学研究室

稲葉　明ほか 1976　「津川・野沢間の阿賀野川沿岸の第四系について」『研究報告』第９号　新潟県立教育センター

遠藤　佐　1995　『よみがえる縄文時代 ー村内遺跡発掘調査概要１ー』上川村教育委員会

遠藤　佐　2000　『よみがえる縄文時代Ⅱ ー縄文早期の集落跡　大谷原遺跡ー』上川村教育委員会

小野　昭　1986　『上川村文化財調査報告書２ 人ヶ谷岩陰』上川村教育委員会

小野　昭・鈴木俊成編　1994　『環日本海地域の土器出現期の様相』雄山閣出版

加藤三千雄　1988　「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観３中期Ⅱ』小学館

加藤三千雄　1995　「北陸における中期前葉の土器群について一新保・新崎式土器一」『第８回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会

神村　透　1999　「特殊磨石・折損特殊磨石 ー視点 文献考古学的ー」『信濃 第51巻 第10号』信濃史学会

駒形敏郎　1992　「新潟県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告 第37集』国立歴史民俗博物館

駒形敏郎　1998　「新潟県の縄文中期土偶」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究（2)』勉誠社

神谷地域学術総合調査団　1996　『新潟県上川村神谷地域学術総合調査報告書 かみたに（自然編)』上川村

國島　聡　1990　「後期初頭・前葉の土器群」『第４回 縄文セミナー 縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会

國島　聡・田辺早苗・藤巻正信　1991　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第29集 城之腰遺跡』新潟県教育委員会

齋田美穂子　2000　「新潟県域における大木7b式系統の浅鉢 ー新発田市石田遺跡出土資料の紹介を兼ねてー」『北越考古学第11号』北越考古学研究会

坂井陽一　1981　「新潟砂丘における腐植層と砂丘砂の鉱物組成 ー新潟砂丘の形成について（その１）ー」『研究報告』第49号　新潟県立教育センター

佐々木洋治・佐藤正俊　1986　「山形県・押出遺跡」『月間文化財 第278号』第一法規出版株式会社

佐々木嘉直　1988　「岩手県内出土の石製円盤・土製円盤について」(財)岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター

沢田　敦・飯坂盛泰ほか　1994　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集 上ノ平遺跡Ａ地点』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

沢田　敦・飯坂盛泰　1994　「中峰遺跡・上ノ平遺跡Ｃ地点・吉ヶ沢遺跡Ｂ地点」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成５年度』（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

沢田　敦　1996　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第73集 上ノ平遺跡Ｃ地点』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

山武考古学研究所　1985　『原遺跡発掘調査報告書』津川町教育委員会
塩原知人・竹内　裕　2001　『村上市文化財調査報告書 高平遺跡』新潟県村上市教育委員会
品田高志　1988　「王冠型土器をめぐる諸問題について」『新潟考古学談話会会報 第１号』新潟考古学談話会
縄文セミナーの会　2003　『第16回 縄文セミナー中期後半の再検討』縄文セミナーの会
鈴鹿良一　1986　「複式炉と敷石住居」『福島の研究①地質・考古篇』清文堂
鈴鹿良一・三品勝幸　1989　『福島県文化財調査報告書 第210集 羽白Ｃ遺跡（第２次） 宮内Ａ遺跡（第１次） 宮内Ｂ遺跡（第２次）』福島県教育委員会・(財)福島県文化財センター
鈴木俊成　1999　「早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
鈴木俊成・髙橋保雄　1993　「石器の実測方法」『考古学ジャーナル』No.360　ニューサイエンス社
鈴木道之助　1981　『図録石器の基礎知識 Ⅲ』柏書房
鈴木道之助　1983「石鏃」『縄文文化の研究 第７巻 道具と技術』雄山閣出版
須藤高志　1994　「北野遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成５年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
芹沢清八ほか 1987　『栃木県埋蔵文化財調査報告63集 御城田遺跡』財団法人栃木県文化財振興事業団
只見川第四紀グループ　1966a　「福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部からより産出した木材のC14年代 ―日本の第四紀層のC14年代ＸＸⅥ―」『地球科学』第20号
只見川第四紀グループ　1966b　「只見川・阿賀野川流域の第四系の編年 ―とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について―」『第四紀総合研究連絡誌』8
高木公輔　2002　『広神村埋蔵文化財発掘調査報告書 第２集 大清水遺跡』広神村教育委員会
田中耕作　2003　「第173回 新潟考古学談話会発表資料 縄文時代後期中葉の住居 ―新発田市二タ子沢Ｃ遺跡の事例紹介―」新潟考古学談話会
田中耕作　1980　『新発田市埋蔵文化財調査報告書２ 石田遺跡発掘調査概報』新発田市教育委員会
田中耕作　1985　「所謂「三十稲場式土器」の成立について」『信濃 第37巻 第４号』信濃史学会
田中耕作　1989　「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観 ４後期・晩期・続縄文』小学館
田中　琢・佐野　真ほか　2002　『日本考古学事典』三省堂
田辺早苗　1991　「第Ⅲ章　遺構」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第29集 城之腰遺跡』新潟県教育委員会
高橋　保・髙橋保雄ほか　1990　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第55集 清水上遺跡』新潟県教育委員会
髙橋保雄　1992　「石器類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第57集 五丁歩遺跡』新潟県教育委員会
髙橋保雄　1995　「東蒲原郡上川村北野遺跡の調査概要」『研究紀要』(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
髙橋保雄　1996a　「北野遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成７年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
髙橋保雄　1996b　「新潟県上川村北野遺跡の調査概要―縄文時代前期後葉～末葉の集落跡を中心に―」『すまいの考古学―住居の廃絶をめぐって』山梨県考古学会
髙橋保雄　1999　「阿賀野川以北の磨製石斧生産の様相」『新潟考古学談話会会報 第20号』新潟考古学談話会
髙橋保雄・荒谷伸郎　2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第119集 北野遺跡Ⅰ（下層）』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
滝沢規朗・北村　亮ほか　1995　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第68集 大坂上道遺跡・猿額遺跡・中棚遺跡・牧ノ沢遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
滝沢規朗・髙橋保雄・池田淳子・酒井亜紀・八木勝枝ほか　2002　『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ＸＸⅡ 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』新潟県朝日村教育委員会
丹野隆明・本間　宏　1991　『福島県文化財調査報告書 第266集 国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告ＸⅠ 鹿島遺跡・平林Ｂ遺跡・権現山下遺跡』福島県教育委員会
丹野雅人・原川雄二　1999　『東京都埋蔵文化財センター調査報告 第50集 多摩ニュータウン遺跡－No.72・795・796遺跡－』東京都埋蔵文化財センター
丹羽　茂　1989　「中期大木式土器様式」『縄文土器 大観１ 草創期・早期・前期』小学館
塚原孝一ほか 1994　『栃木県埋蔵文化財調査報告書第 143集 三輪仲町遺跡』栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

津川町文化財調査審議委員会　2004　『津川町の歴史と文化財』津川町教育委員会
土任　隆ほか 2001　『五泉市文化財報告書（6）大蔵遺跡』新潟県五泉市教育委員会
寺崎裕助・鈴木俊成ほか　1996　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第72集 清水上遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
富樫秀之・阿部友晴・金内　元・長田友也・高橋　優　2002　『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ＸＸＩ アチヤ平遺跡 上段』新潟県朝日村教育委員会
戸沢充則ほか 1994　『縄文時代研究事典』東京堂出版
中村孝三郎　1960　『小瀬が沢洞窟』長岡市立科学博物館
中村孝三郎・小片　保　1960　『室谷洞窟』長岡市立科学博物館
長島雄一・長尾　修・木本元治・馬場秀之ほか　1997　『西会津町史 別巻２ 上小島Ｃ遺跡』西会津町史刊行委員会
日本貨幣商共同組合　1989　『日本貨幣型録1990年版』日本貨幣商共同組合
芳賀英一・石井宏幸・小沢弘道　1983　『福島県山都町文化財調査報告 第４集 上ノ原遺跡』福島県山都町教育委員会
芳賀英一・藤谷　誠　1986　『福島県文化財調査報告書 第164集 国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県教育委員会
芳賀英一ほか 1983　『福島県会津高田町文化財調査報告書 第４集 上ノ原遺跡』福島県会津高田町教育委員会
芳賀英一ほか 1984　『福島県会津高田町文化財調査報告書 第５集 宵宮西遺跡』福島県会津高田町教育委員会
芳賀英一ほか 1990　『福島県文化財調査報告書 第227集 国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅷ 宵宮西遺跡』福島県教育委員会
芳賀英一　2001　「福島県における縄文時代集落の諸様相」『第１回研究集会 基礎資料集 列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
八戸市博物館　1997　『特別展 風張遺跡の縄文社会』八戸市博物館
福島県河沼郡柳津町教育委員会　1991　『石生前遺跡発掘調査報告書 福島県河沼郡柳津町文化財報告書 第１集』福島県河沼郡柳津町教育委員会
福島県教育委員会　1982　『福島県文化財調査報告書 第108集 七郎内Ｃ遺跡・七郎内Ｄ遺跡』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
原田昌幸　1988　「縄文人の装い」『古代史復元３ 縄文人の道具』講談社
藤巻正信　1989　「土器片円盤について」『新潟考古学談話会会報 第３号』新潟考古学談話会
本間　宏　1989　「福島県における縄文後期前葉土器群の変遷」『シンポジュウム縄文の配石と集落 ―三春町西片前遺跡と柴原Ａ遺跡の問題点』福島県三春町教育委員会
本間　宏　1990　「東北地方南部における縄文後期前葉土器群の変遷」『第４回 縄文セミナー縄文後期の諸問題』縄文セミナーの会
本間　宏ほか 1990　『福島県文化財調査報告書 第232集 牧場山遺跡（第２次）・北向遺跡』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
増子正三　1988　「新潟県における東北系複式炉について」『北越考古学 創刊号』北越考古学研究会
松本　茂ほか 1982　『福島県埋蔵文化財調査報告書 第108集 七郎内Ｃ遺跡・七郎内Ｄ遺跡』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
松本　茂ほか 1991　『福島県埋蔵文化財調査報告書 第243集 法正尻遺跡』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
南　雄二　1995　「北野遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成６年度』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
三上徹也　1995　「土器利用炉の分類とその意義 ―縄文時代における吊す文化と据える文化―」『長野県立歴史館研究紀要 第１号』長野県立歴史館
三品勝幸　1989　「土製品」『福島県文化財調査報告書 第210集 羽白Ｃ遺跡』福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター
三宅徹也　1989　「円筒土器上層様式」『縄文土器大観１草創期・早期・前期』小学館

目黒吉明　1982　「縄文の炉」『縄文文化の研究』雄山閣出版
森　幸彦　1991　『企画展縄文絵巻』福島県立博物館
森　幸彦　1998　「福島県内の大木8a式土器について」『第11回 縄文セミナー 中期中葉から後葉の諸様相』縄文セミナーの会
宮本長二郎　1996　『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版
三輪茂雄　1978　『ものと人間の文化史 25 臼』(財)法政大学出版局
八木光則　1976　「いわゆる「特殊磨石」について ―中部地方における縄文早期の石器群研究への問題提起―」『信濃 第28巻 第4号』信濃史学会
山本信夫　1995　「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　真陽社
柳田　誠　1979　「阿賀野川中流域の地形発達史」『地理学評論』52－12
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館
渡辺　誠　1973　『縄文時代の漁業』雄山閣

土坑観察表

No.	図　版	位置（グリッド）	分類	平面形	断面形	規模（cm）			長軸方向	出土遺物	新旧関係（古→新）	時　期	備　考
						長径	短径	深さ	N-°-E	土器:点/g、石器:器種名/点数、礫:点/g、その他（種別:点）			
1	5·230	5C6.11.12.13	F	不整楕円形	逆台形	308	260	32	145°	石器:敲磨石3.石核1.剥片3、礫:142/48,283		中世以降	覆土下層に礫が多く混入する。
2	5·230	5C3.4	E1	楕円形	U字形	152	122	24	134.5°	礫:2/362			
4	6·8·230	7B9.14.15	F	長方形	U字形	192	76	22	158.5°	礫:5/66		中世以降	
5	5·230	6C24	F	円形	U字形	172	156	30	37°	礫:8/1,402		中世以降？	
7	6·8·231	7C19.24	F	円形	小フラスコ形	102	90	37	97.5°	石器:剥片1、礫:1/76		中世以降？	
8	7·8·231	7E13.14.18.19	E1	楕円形	逆台形	178	128	18	71°	土器:12/245、石器:不定形1.剥片1、礫:1/560、石製品:1			
10	6·8·231	9D6.11.12	G	不整形	不整形	120	96	20	166.5°	土器:2/20、礫:1/5			
11	7·8·231	8D20·9D11.16	F	楕円形	U字形	116	84	42	63.5°	土器:4/45、石器:剥片1、礫:5/120		中世以降	
13	9·10·232	9D13	F	楕円形	逆台形	98	74	32	166.5°	土器:2/5、礫:1/50		中世以降？	
16	9·10·232	9B12.17.18	E1	楕円形	皿形	228	176	12	162.5°	土器:11/50、石器:剥片5、礫:2/56		中期末～後期初？	
17	7·8·232	7G20	F	楕円形	皿形	88	72	16	66°			中世以降？	
19	9·10·232	9B19.24	D2	不整楕円形	不整形	80	56	24	37°	土器:6/60、礫:3/60			
21	9·10·233	9C5.10	D2	不整楕円形	スリ鉢形	80	50	18	32.5°				
22	12·13·233	10E21.22·10F1.2	G	不整楕円形	スリ鉢形	170	84	24	162°	礫:2/810			
23	12·13·233	11F22·11G2	G	不整形	皿形	152	110	12	23.5°	礫:2/15			SK24·25に覆土、位置、形状が近似する。
24	12·13·233	11F13.14.18.19	E1	不整楕円形	皿形	208	152	8	121.5°	礫:3/3,540			石組みの被熱ピット（11F-P7）あり。
25	12·13·234	11G2	C1	円形	U字形	88	80	18	92.5°	石器:剥片1、礫:9/5,190			SK23·24に覆土、位置、形状が近似する。
28	14·16·234	10C5.10	A3	円形	U字形	108	104	48	173.5°	土器:34/980、石器:石鏃失敗品1.敲磨石1.剥片10、礫:40/715	SK28→SK32	大木10	
29	14·16·234	10E5.10·11C6.11	B2	不整楕円形	スリ鉢形	160	134	58	135.5°	土器:24/435、石器:石鏃1.剥片5、礫:10/300		中期末～後期初	
30	9·10·234·235	10B25·10C4.5	G	不整形	不整形	168	140	56	51°	土器:37/460、石器:両極1.剥片5		中期末～後期初	
32	14·16·235	10C5	G	不整形	不整形	120	100	32	61.5°		SK28→SK32	中期末～後期初	
33	7·8·235	8F18.23	G	不整形	皿形	124	80	20	171°	土器:22/480、石器:不定形1.敲磨石3.剥片5、礫:42/181,225		大木8a	上部に集石状の礫があり。
34	7·8·235	8F17.18	G	不整形	皿形	88	84	4	88.5°	土器:30/820、石器:不定形2.敲磨石2.石皿1.剥片4、礫:36/161,335		大木8a	上部に集石状の礫があり。
36	12·13·235·236	11E6.7	F	円形	U字形	108	104	40	149.5°	土器:2/30、礫:1/9	SI31→SK36	中世以降	
37	27·28·236	12E14.15.19.20	E1	不整楕円形	逆台形	274	176	38	164°	土器:812/18,640、石器:石錐1.不定形4.両極3.敲磨石2.石核4.剥片87、礫:129/13,035		三十稲場	覆土上～中層に遺物多く混入する。
38	27·28·236	12E6.7.11.12	E1	楕円形	逆台形	300	252	28	159°	土器:64/1,635、石器:不定形3.敲磨石1.剥片5	SK38→12E-3号焼土	中期末～後期初	
39	27·28·236	12E18	F	不整円形	楕形	92	84	33	35.5°	土器:3/20、石器:不定形1.石核1.敲磨石2.剥片1、礫:26/5,650		中世以降？	SD44·45·127、SB35に覆土が近似する。
40	27·28·237	12E22	F	不整円形	楕形	96	84	36	100.5°	土器:5/235		中世以降？	SK39に形状が近似する。
41	12·13·237	11E7	F	円形	逆台形	96	90	23	82.5°	土器:3/114	SI31→SK41	中世以降	
42	12·13·237	11E1	F	不整円形	楕形	90	82	62	155°	土器:4/80、礫:31/2,559	SI31→SK42→SK43	中世以降	
43	12·13·237	10E5·11E1	F	不整円形	楕形	136	120	36	92°	土器:6/130、礫:1/2,410	SI31→SK42→SK43	中世以降	
63	14·17·237	11C16.21	A3	不整楕円形	小フラスコ形	160	126	62	23°	土器:136/3,820、石器:不定形5.両極1.磨斧1.石核2.剥片9、礫:5/1,244		大木10古	
64	14·17·238	11C22.23·11D23	A3	不整形	小フラスコ形	190	144	47	129.5°	土器:163/4,575、石器:不定形4.両極3.敲磨石1.石皿1.剥片20、礫:20/3,584		大木10古	
65	14·17·238	11D16	A3	不整円形	小フラスコ形	116	108	48	107.5°	土器:89/2,080、石器:敲磨石1.剥片19、礫:18/2,165		中期末～後期初	
66	14·17·238	10C5·11B21·11C1	B1	不整形	楕形	196	138	39	128.5°	土器:21/460、石器:不定形1.剥片6、礫:1/4		中期末～後期初	
67	14·17·238	11D8.12.13.17.18	E1	楕円形	逆台形	286	196	27	63°	礫:1/1,940		中期末～後期初	
68	12·13·238	11D17.18.22.23·11E3	E1	不明	皿形			19		礫:7/150	SK68→SI31	中期末～後期初	
69	21·23·239	11E10.14.15	E1	楕円形	皿形	272	220	16	4.5°	土器:1/45、石器:剥片1		中期末～後期初	
71	14·17·239	11D18.19.23.24	E1	楕円形	皿形	238	184	20	82.5°	礫:1/16		中期末～後期初	
75	14·17·239	12B13.18	D1	楕円形	U字形	76	62	43	86.5°	土器:52/6,200、石器:不定形1.石皿2.剥片4、礫:6/7,512		大木10古	上面に土器あり、その下に扁平礫あり。
77	14·17·240	12B22.23	B1	円形	U字形	92	86	35	59°	土器:80/4,770、石器:両極1.剥片4、礫:9/350		大木10古	覆土最上層より土器多く出土する。
80	21·23·240	12C18.19.23.24	E1	不整円形	逆台形	216	190	42	37.5°	土器:83/1,420、石器:石鏃1.不定形1.砥石1.石核1.剥片22、礫:183/15,762	SI78→SK80	中期末～後期初	覆土最上層より礫多く出土する。
81	14·17·240	10B25	B1	円形	U字形	88	88	38		土器:45/880、石核1.剥片6、礫:41/1,670		中期末～後期初	遺物は覆土下層より出土する。
82	14·17·241	10B20·11B16	B1	楕円形	U字形	132	98	30	174°	土器:6/70、石器:剥片2、礫:4/100	SK82→SI73	中期末葉	
83	14·17·241	11C2	C2	楕円形	逆台形	89	59	20	90.5°	礫:2/30		中期末～後期初	
84	14·17·241	11B15.20	B2	不整楕円形	皿形	102	58	32	84.5°	土器:1/10、石器:剥片2	SK85→SK84	中期末～後期初	
85	14·17·241	11B14.15	B2	不整楕円形？	皿形	88		37	73.5°		SK85→SK84	中期末～後期初	
86	27·28·241	13E11.12	A3	不整円形	小フラスコ形	104	92	44	156.5°	土器:48/865、石器:不定形1.敲磨石1.剥片3、礫:4/6,590		中期末～後期初	
87	27·28·242	13E16.17	F	楕円形	皿形	116	66	19	148.5°	土器:2/40	SK88→SK87	中世以降？	
88	27·28·242	13E16.17	E1	不整楕円形	皿形		132	22		土器:1/10	SK88→SK87	中期末～後期初	
89	14·16·242	12B12.17	B1	円形	楕形	86	86	43		土器:3/1,150、石器:不定形1.両極1、礫:7/606	SK89→SI76→12-3号埋設	大木10古	
90	35·36·242	13E3.8	C1	円形	逆台形	92	92	20		土器:84/4,660、石器:剥片2		三十稲場	覆土に土器が多く混入する。

No.	図　版	位置（グリッド）	分類	平面形	断面形	規模（cm）			長軸方向	出土遺物 土器:点/g、石器:器種名/点数、礫:点/g、その他（種別:点）	新旧関係（古→新）	時　期	備　　考
						長径	短径	深さ	N-°-E				
93	21･23･242	12D20.25･12E5･13D21	A3	不整形	小フラスコ形	228	190	98	8°	土器:255/6,035、石器:不定形4.両極6.石皿1.砥石1.石核2.剥片30、礫:320/35,110		中期末～後期初	2層にわたり焼土が堆積する。
94	14･18･243	11C9.10.14.15	E1	不整円形	逆台形	204	180	34	46°	土器:30/535、石器:敲磨石3.剥片6、礫:45/2,274		中期末～後期初	
95	14･18･243	11C4.5.9.10	B1	不整楕円形	U字形	130	116	43	139°	土器:13/480、石器:不定形2.剥片3、礫:43/801		中期末～後期初	
96	14･18･243	11C5	D1	楕円形	不整形	87	66	21	79.5°			中期末～後期初	
97	14･18･243	11C8.9	G	不整円形		100	100	29		土器:1/10、石器:不定形2、礫:1/3,350		中期末～後期初	
100	14･18･244	11C11.12	G	不整形	不整形	168	128	10	41.5°	礫:1/1,990	SK100→11C-2号埋設	中期末～後期初	
104	47･48･244	15E6.7.11.12	A3	不整楕円形	小フラスコ形	152	104	44	121.5°	土器:89/2,307、石器:両極2.剥片5、礫:4/84,100		加曽利B	上面に長さ35～60㎝の棒状礫あり。
105	14･18･244	12B21･12C1	C2	不整円形	椀形	96	68	19	116.5°	土器:1/20		中期末～後期初	覆土中層に48×39㎝の扁平礫あり。
106	29･31･245	13B9	D1	円形	U字形	68	66	30		土器:1/110、礫:2/35		中期末～後期初	
107	29･31･245	13B19.20	D1	隅丸長方形	U字形	70	58	38	97.5°			中期末～後期初	
108	29･31･245	13B17.22	C3	隅丸長方形	U字形	124	72	26	51.5°	礫:3/16	SX169→SK108	中期末～後期初	
109	29･31･245･246	13B20･14B16	B3	隅丸長方形	逆台形	102	84	31	122.5°	土器:3/82、石器:不定形1.剥片1、礫:16/160		中期末～後期初	
110	29･31･245･246	13B15･14B11	C1	円形	逆台形	96	82	16	167°			中期末～後期初	
111	14･18･246	11B8.9	G	不明	椀形			36		土器:2/43	SK111→11B-4号埋設	中期末～後期初	
112	14･18･246	11B23	B1	不整円形	U字形	113	97	56	73.5°	土器:63/1,135、石器:石錐1.不定形1.敲磨石1.剥片10、礫:9/585	SK112→SI48	中期末葉	
113	14･18･246	11B15	B2	不整楕円形	不整形	132	92	40	164.5°	土器:4/27、礫:15/140	SK113→SI48	中期末葉	
114	14･18･246	11B8	D1	不整楕円形	逆台形	88	70	30	122.5°	土器:1/16		中期末～後期初	
115	14･18･247	12B16.21	B1	円形	逆台形	136	116	30	98.5°	土器:37/1,070、石器:石皿2.剥片1、礫:8/101,429		大木10古	覆土中～下層に土器、棒状礫、扁平礫あり。
116	29･31･247	12B25	B1	円形	U字形	100	91	34	44°	土器:17/277、石器:不定形1.両極1.剥片11、礫:4/16,580	SK117→SK116	中期末～後期初	
117	29･31･247	12B20.25	B2	楕円形？	逆台形			35		土器:12/2,962、石器:剥片13、礫:22/2,475	SK117→SK116	大木10古	
118	14･18･247	12B16.17.21.22	C1	円形	椀形	96	89	26	166°			中期末～後期初	
119	29･31･248	13B23.24･13C3.4	C2	楕円形	逆台形	144	100	21	153.5°	土器:1/10、礫:8/400		中期末～後期初	
120	14･18･248	12B6	G	不明	U字形			64		土器:26/520、石器:不定形2.剥片6、礫:43/25,696	SK149→SK120	中期末～後期初	
123	21･24･248	12D15･13D11	B1	円形	椀形	100	100	31		土器:29/1,220、石器:剥片1、礫:7/1,769	SI122→SK123	中期末～後期初	
124	21･24･248	12D5.10	C1	不整円形	U字形	108	108	18		土器:15/610、石器:敲石1.剥片1、礫:9/3,114		大木10新	
125	21･24･248･249	12D24	D1	楕円形	U字形	90	66	33	3.5°	土器:5/350、石器:敲磨石2、礫:5/910		中期末～後期初	
126	47･48･249	15E12.13.14.18.19	E2	不整形	スリ鉢形	386	342	44	1°	土器:1,908/54,689、石器:石錐1.不定形5.敲磨石3.石皿4.石核5.剥片136、礫:920/144,797		三十稲場	覆土に遺物が極めて多く混入する。
128	21･24･249	13D16.17.21	E2	不整楕円形	スリ鉢形	228	164	42	77°	土器:88/5,680、石器:石匙1.不定形5.敲磨石2.剥片16、礫:125/148,576	SI122→SK128	三十稲場	覆土に遺物が極めて多く混入する。
131	29･31･249	13D19.20	B2	楕円形	椀形	148	100	32	118°	土器:13/440、石器:剥片6、礫:21/2,204	SK131→13D-4号埋設→SD45	三十稲場	
132	29･31･250	13D13.14.18.19	G	不明	椀形？					土器:3/80	SK132→SK133→SI55	中期末～後期初	
133	29･31･250	13D13.14.18.19	B2	楕円形	U字形	136	82	48	2.5°	土器:9/380、石器:不定形1.剥片2、礫:6/6,452	SK132→SK133→SI55	中期末～後期初	
134	29･32･250	13D4.5	D1	楕円形	U字形	97	70	44	81.5°	土器:13/250、石器:不定形1.剥片2、礫:23/7,470		中期末～後期初	
135	61･62･250	15E10･16E1.6	E1	楕円形	逆台形	228	188	10	35.5°	土器:64/2,030、石器:敲磨石1、礫:4/3,640		大木10古	
141	29･32･251	12B19	C1	円形	椀形	108	108	29		土器:13/170、石器:剥片3、礫:1/20		中期末～後期初	
142	29･32･251	12B14.15	D2	楕円形	椀形	68	60	18	13°	土器:25/890、石器:不定形1.剥片5.多面体敲石1	SK142→12B-2号焼土	中期末～後期初	覆土中層に遺物がやや多く混入する。
143	29･32･251	13B16.21	D1	不整楕円形	スリ鉢形	68	44	30	113.5°	土器:6/110、石器:剥片2、礫:22/813		中期末～後期初	
144	29･32･251	13B11.12	C1	円形	皿形	92	84	14	82.5	土器:19/760、礫:5/33		三十稲場	覆土下層に土器が混入する。
145	29･32･252	13B7.12	B2	不整楕円形	U字形	134	92	45	104.5°	土器:59/2,170、石器:両極1.敲磨石1.剥片17、礫:296/2,383	SK145→13B-2号集石	中期末～後期初	覆土に遺物がやや多く混入する。
146	29･32･252	13B18.22.23	G	不明	逆台形			20		土器:1/10、石器:剥片2、礫:7/850	SK146→SD45	中期末～後期初	上面に扁平礫、棒状礫あり。
147	29･32･252	13B20.25･14B16.21	B2	楕円形	U字形	144	95	30	131.5°	土器:14/260、礫:14/207		中期末～後期初	南側はテラス状に高くなる。
148	29･32･252	13B14.15.19.20	C1	円形	U字形	96	84	24	69°	土器:6/80、石器:不定形1.剥片8	SK148→SK167	中期末～後期初	
149	14･18･253	11B10･12B6	G	不明	椀形？			72		石器:剥片9、礫:25/1,669	SK149→SK120	大木10古	
150	29･32･253	13B7.8.9.12.13.14	G	方形？	椀形			128		土器:48/1,520、石器:不定形1.敲磨石1.剥片8、礫:122/8,726	SK150→SD45		底面、側壁の凹凸が激しい。
152	21･24･253	12C3	D1	不整方形	U字形？	84	83	40	127.5°	土器:14/190、石器:両極1.敲磨石1.剥片6、礫:58/1,312		中期末～後期初	
153	21･24･253	12C3.4.8.9	C2	楕円形	逆台形	142	96	18	19°	土器:44/1,685、石器:両極1.剥片25、礫:65/3,260	SI50→SK153	後期初頭？	
155	21･253	12C20.25	G	不整楕円形	U字形	89	68		149.5°			中期末～後期初	
156	21･253･254	12C19.20.24.25	C1	不整円形	皿形	92	80		175.5°			大木10古	土器1個体出土するが、照合できず。
157	21･24･254	13C11.16	G	不明	逆台形			13		礫:2/2,160、石製品:1	SK157→SK172	中期末～後期初	
158	21･24･254	13C11.12	B2	不整楕円形	U字形	150	124	42	128.5°	礫:80/2,400、石器:敲磨石6.石皿1.石核1.剥片17、礫:45/7,247		中期末～後期初	
159	21･24･254	13C16.17.21.22	B3	不整方形	椀形	165	145	50	133.5°	土器:88/1,665、石器:不定形1.剥片12、礫:7/1,580	SK159→SK183	大木10古	
160	21･24･254	12C10	G	楕円形	不整形	118	72	29	158°	土器:6/55、石器:剥片1、礫:1/10	SI175→SK160	中期末～後期初	
162	29･32･254	13B14	D1	不整円形	U字形	84	72	33	60.5°	石器:剥片1、	SK163→SK162	中期末～後期初	
163	29･32･254	13B14	G	不明	皿形			12		土器:2/60、礫:3/49	SK163→SK162	中期末～後期初	
165	29･32･254	13B24	G	不明	皿形			12		土器:243/3,855、礫:4/1,605		大木10古	
166	29･32･254	13B24	D2	楕円形	皿形	72	56	14	83.5°	土器:3/290、礫:2/170		中期末～後期初	
167	29･32･252	13B14.15	G	不明	皿形			9		土器:3/50、石器:両極1	SK148→SK167	中期末～後期初	

No.	図　版	位置（グリッド）	分類	平面形	断面形	規模（cm）			長軸方向	出土遺物	新旧関係（古→新）	時　期	備　　考
						長径	短径	深さ	N-°-E	土器:点/g、石器:器種名/点数、礫:点/g、その他（種別:点）			
168	29･32･255	12B15･13B11	G	不明	U字形			40		土器:2/20、礫:1/212		中期末～後期初	
170	29･32･255	13B10	G	楕円形	不明			29		土器:1/40、石器:剥片1、礫:3/100		中期末～後期初	
171	21･24･255	13C1.6	G	不明	皿形			14		土器:8/115、石器:剥片4、礫:3/5,800	SI175→SK171	中期末～後期初	
172	21･24･255	13C16	B2	楕円形	椀形	100	64	32	135°	土器:69/2,730	SK157→SK172	中期末～後期初	覆土に遺物がやや多く混入する。
173	29･32	13C17.18	C1	不整円形	不整形	96	84	20	167.5°	土器:8/65、石器:両極1.石核2.剥片2、		中期末～後期初	
174	29･32･253･255	13C3.4	B1	不整円形	U字形	102	96	46	169.5°	土器:4/75、石器:剥片2、礫:2/26		中期末～後期初	
176	21･24･256	12C2.3.8	B1	円形	椀形	140	130	32		土器:38/840		中期末～後期初	
181	29･32･256	13C7.8	B1	不整円形	椀形	104	98	30	174.5°			中期末～後期初	
182	29･32･256	13C12.13	C2	不整楕円形	皿形	133	104	16	104.5°	土器:11/250、石器:剥片2、礫:1/19		中期末～後期初	
183	21	13C16.17	G	不整楕円形	不明	96	76		149.5°	土器:62/1,180、石器:剥片4、礫:4/116	SK159→SK183	中期末～後期初	
184	21･24･256	11C10.15	C2	楕円形	スリ鉢形	176	88	16	60°	土器:3/30	SK184→11C-6号埋設	中期末～後期初	
187	29･32･255	13B11	D1	不整円形？	U字形			37		石器:剥片1		中期末～後期初	
188	29	13C4	D2	楕円形	不明	72	60	12	38.5°			中期末～後期初	
189	29･32･255	13B10	B1	不整円形	不明	96	88	45	84.5°	土器:10/240、石器:石核1.剥片3		中期末～後期初	
211	29･32･256	14B17.22.23	C1	円形	皿形	90	90	16		土器:16/747		大木10古	
212	29･32･257	14B16.17	C1	円形	椀形	96	96	23		土器:14/390、石器:剥片2、礫:25/2,211	SK213･351→SK212	大木10古	
213	29･32･257	14B16.17	D1	円形	U字形	84	72	43	36.5°	礫:8/4,033	SK213→SK212	中期末～後期初	
215	29･32･257	14B16.17	B2	楕円形	逆台形	108	80	30	139.5°	土器:18/316、石器:石核1.剥片3、礫:20/412		中期末～後期初	
216	29･33･257	14B6.7.11.12	B2	楕円形	椀形	135	104	39	90.5°	土器:8/146、石器:不定形2.敲磨石1、礫:19/759	SK217→SK216	中期末～後期初	上面に扁平礫多数あり。
217	29･33･257	14B11.12	G	不明	U字形			45		土器:9/55、石器:剥片4、礫:35/55	SK217→SK216	中期末～後期初	上面に扁平礫多数あり。
218	29･33･257･258	14B12	C2	楕円形	逆台形	112	90	16	156.5°	土器:5/2,390、石器:不定形1.敲磨石2.剥片2、礫:15/531	SK219･220→SK218	中期末～後期初	
219	29･33･257･258	14B7.12	B2	不整楕円形	U字形	124	102	38	91°	土器:30/458、石器:不定形1.剥片12、礫:48/10,285	SK219→SK218	中期末～後期初	
220	29･33･257･258	14B12.13	B2	楕円形	U字形	100	72	32	83.5°	土器:4/150、石器:剥片1、礫:1/1,920	SK220→SK218	中期末～後期初	
221	29･33･258	13C5	C1	円形	逆台形	109	102	28		土器:80/1,194、石器:不定形1.敲磨石1.剥片2、礫:29/4,107	SK221→SK222	中期末～後期初	覆土下層に遺物がやや多く混入する。
222	29･33･258	13C5.10	D1	楕円形	U字形	68	56	45	154.5°	土器:7/87、石器:剥片2、礫:14/421	SK221→SK222	中期末～後期初	
223	29･33･258	13C5･14C1	B2	楕円形	椀形	90	70	36	41.5°	土器:42/2,840、石器:剥片1、礫:50/2,530		中期末～後期初	
224	29･33･258･259	13C9.10	D1	円形	U字形	74	74	54		土器:2/90、石器:剥片4、礫:1/2		中期末～後期初	
225	29･33･259	13C10	C1	不整円形	逆台形	110	100	26	183°			中期末～後期初	
231	37･41･259	14B18	D1	不整円形	U字形	76	68	42	153°	土器:1/25、礫:22/1,119		中期末～後期初	
232	37･41･259	14B8.3	B2	楕円形	U字形	112	80	51	63.5°	土器:8/134、石器:剥片3、礫:38/10,860	SK233→SK232	中期末～後期初	
233	37･41･259	14B13	D1	楕円形	U字形	88	64	44	156.5°	土器:1/10、石器:剥片2、礫:3/900	SK233→SK232	中期末～後期初	
234	37･41･260	14B8	G	不明	U字形			46			SK234→14B-2号埋設	中期末～後期初	
235	37･41･260	14B14.19	D1	円形	U字形	76	72	40	73.5°			中期末～後期初	
236	37･41･260	14B25	D1	不整円形？	U字形	84	74	46	32.5°	土器:1/7、石器:剥片1、礫:1/3		中期末～後期初	
242	47･49･260	14E9.10.14.15.19.20･15E6.11.16	E2	不整形	スリ鉢形	444	368	48	143.5°	土器:111/3,082、石器:不定形1.両極1.敲磨石4.石皿1.剥片11、礫:134/169,022	241集石、14E-8号埋設→SK242	中期末～後期初	覆土上層に礫が多く混入する。
244	47･48･260	15F1.2	E1	円形	逆台形	204	172	15	162°	土器:8/970		中期末～後期初	
249	71･72･261	17E7.8.12.13	C1	不整円形	皿形	108	108	13		土器:2/40、石器:剥片1、礫:3/153			
250	71･72･261	17E15.20	A3	不整形	小フラスコ形	140	118	44	147°	土器:6/145、石器:敲磨石1、礫:6/1,120			
253	37･41･224	14C7.8.12.13	C2	楕円形	逆台形	116	64	28	136°	土器:31/3,855、石器:不定形1.剥片22、礫:175/13,606		三十稲場	
254	37･41･261･262	14C13.14	B2	楕円形	U字形	122	86	37	80°	土器:39/816、石器:石鏃1.両極1.敲磨石1.石皿2.剥片6、礫:22/3,733	SK254→14C-9号埋設	加曽利B	覆土に遺物が多く混入する。
256	37･41･262	14C19	B3	不整長方形	U字形	116	92	34	114°	土器:5/635、石器:石皿1、礫:9/40,015		中期末～後期初	覆土に大礫が混入する。
258	37･41･262	14C23.34	G	不整形	不整形	136	96	37	143.5°	土器:16/205、石器:多面体敲石1.剥片6、礫:22/1,280		中期末～後期初	
259	37･41･262	14C14.15.19.20	E2	不整形	不整形	184	168	32	169.5	土器:14/234、石器:磨斧1.石皿1.石核2.剥片5、礫:63/39,313		中期末～後期初	覆土に礫が多く混入。内面の凹凸が激しい。
263	37･41･263	14B20.025･15B16.21	C3	不整隅丸長方形	逆台形	104	84	24	142.5°	土器:1/20		中期末～後期初	
264	37･41･263	15B16.21	C2	不整楕円形	皿形	146	108	28	166.5°	土器:6/176、石器:石錐1.不定形1.剥片4、礫:29/2,342		中期末～後期初	
265	37･41･263	15B17	B2	不整楕円形	椀形	140	106	30	77°	土器:1/7、礫:9/1,915		中期末～後期初	覆土中～下層に大礫が混入する。
266	37･41･263	15B21.22	D1	楕円形	U字形	92	80	44	36.5°	土器:9/276、礫:1/2,140		中期末～後期初	
267	37･42･264	15B11.12.16	B2	不整楕円形	逆台形	124	102	38	17.5°	土器:4/30、石器:剥片5、礫:46/2,832		中期末～後期初	
268	37･42･264	15C2	D1	円形	U字形	84	76	52	155.5°	土器7/160	SK269→SK268	中期末～後期初	
269	37･42･264	15B22･15C2	C1	円形？	皿形			20			SK269→SK268	中期末～後期初	
270	37･42･264	15B8.9.13	A1	不整形	フラスコ形	220	190	96	139.5	土器:15/476、石器:敲磨石3.多面体敲石1.剥片4、礫:1,052/171,540	SK270→SK297	中期前～中葉	覆土中層に礫が多く混入する。
271	37･42･264･265	15D13.14.18.19	E1	円形	皿形	216	206	12	18.5°	土器:27/813、石器:石鏃失敗品1.石錐1.剥片15、礫:74/5,176	SK271→15D-2号･3号･9号埋設	中期末～後期初	
272	47･49･265	15D11.12	B2	楕円形	椀形		90	34		土器:4/70、礫:1/3,740	SK272→SK273	中期末～後期初	
273	47･49･265	15D11.12.16.17	C2	不整楕円形	逆台形	112	92	28	109.5°	土器:8/60	SK272→SK273	中期末～後期初	
274	37･42･265	15D12	C2	不整楕円形	逆台形	108	86	20	97.5°			中期末～後期初	
275	47･49･265	15D18	C2	円形	逆台形	105	94	18	119°			中期末～後期初	

No.	図　版	位置（グリッド）	分類	平面形	断面形	規模（cm）			長軸方向	出土遺物	新旧関係（古→新）	時　期	備　　考
						長径	短径	深さ	N-°-E	土器:点/g、石器:器種名/点数、礫:点/g、その他（種別:点）			
276	37･42･266	15D7.12	B3	隅丸長方形	U字形	136	100	44	54.5°	土器:10/170、石器:剥片1、礫:38/4,891	SK276→SK277	中期末～後期初	
277	37･42･266	15D6.7.11.12	B1	円形	椀形	96	86	44	164.5°	土器:12/350、礫:1/2	SK276→SK277	中期末～後期初	
278	37･39･220･266	14D5.10･15D1.6	A1	円形	フラスコ形	168	152	88	163°	石器:両極1.剥片2	SK278→SI210→SK337		
279	61･62･266	16D16.21	B2	楕円形	U字形	122	92	63	80.5°	土器:80/1,980、石器:不定形1.敲石5.剥片2、礫:17/9,985		中期末～後期初	
280	47･49･266	15D24･15E4	B2	楕円形	スリ鉢形	122	84	30	137.5°	土器:7/60、礫:3/41		中期末～後期初	
282	37･42･267	15C211.16	G	不整形	スリ鉢形	124	106	41	15°	土器:4/40、礫:21/35,448		中期末～後期初	覆土に礫が多く混入する。
283	37･42･267	15C12.17	G	不明	不明			40		土器:34/4,675、石器:不定形2.石核1.剥片30、礫:45/3,621、石製品:1		大木10	覆土中～下層に遺物が多く混入。
285	29･33･267	13C14.15	D1	円形？	U字形	77		44		土器:3/100	SK285→SI228	中期末～後期初	
286	29･33･267	13C10.15	C2	不整楕円形	逆台形	92	72	21	9.5°	土器:4/180		中期末～後期初	
287	29･33･267	13C14.19	G	不整形	不整形	192	106	70	22.5°	土器:13/1,470、石器:剥片15、礫:5/149	SK287→SI228、SD45	中期末～後期初	
289	29	14C11	G	不整楕円形	不明	112	80		140.5°	土器:6/75、礫:1/6	SK289→SI228	中期末～後期初	
290	29	14C11.12.16.17	G	不整円形	不明	92	82		140.5°	土器:5/115	SK290→SI228	中期末～後期初	
291	37･42･268	15C2.3	C1	円形	逆台形	121	108	18	90.5°	土器:5/90	SK292→SK291→15C-2号埋設	中期末～後期初	
292	37･42･268	15B23･15C2.3	G	不整形	椀形	116	100	50	56.5°	土器:17/330、石器:剥片3、礫:34/4,025	SK292→SK291	中期末～後期初	
293	37･42･268	15B23	B2	楕円形	不整形	146	106	30	163.5°	土器:9/370、石器:剥片3、礫:19/530		中期末～後期初	
296	37･42･268	15B6.7.11.12	A1	不整円形	フラスコ形	184	174	98	143.5°	土器:4/65、石器:剥片3、礫:71/8,824、石製品:1	SK296→SD262	中期前～中葉	
297	37･42･268	15B13.14	B1	不整円形	椀形	124	112	40	17.5°		SK270→SK297→SD262	中期末～後期初	
298	37･43･268･269	14B147	B3	隅丸方形	不整形	97	80	40	161.5°	土器:3/60	SK300→SK298	中期末～後期初	
299	37･43･268･269	14B15	C3	不整長方形	皿形	128	96	20	96°	土器:3/30、礫:11/5,909	SK300→SK299	中期末～後期初	
300	37･43･268･269	14B14.15.19	B2	不明	不明			0		土器:6/50、礫:2/8,330	SK300→SK298・299	中期末～後期初	
301	37･43･269	14C4.9	B2	不整楕円形	不明	126	94	39	40°	土器:6/425、石器:敲磨石1.石皿1、礫:1/490	SK301→SI230	中期末葉	
302	29･33･269	14C21.22	C2	楕円形	スリ鉢形	120	100	21	145.5°	土器:1/10		中期末～後期初	
303	37･43･269	14C8.9.14	B3	隅丸長方形	U字形	156	90	36	172°			中期末～後期初	
304	37･269	14C9.10.14.15	G	不整形	不明	148	116		27.5°		SK304→14C-3号･7号埋設	中期末葉	
306	29･33･269･270	13C15.20	B1	円形	U字形	100	100	25		土器:4/100	SK306→SI228	中期末～後期初	
307	37･43･270	14C4.5	G	不整形	不整形	128	114	35	80.5°	土器:9/110		中期末～後期初	
311	37･43･270	14B8.9.10.14	C2	不整楕円形	逆台形			19		土器:2/10、石器:両極1、礫:2/20	SK311→SK312	中期末～後期初	
312	37･43･270	14B10.14.15	C2	不整楕円形	皿形	132	100	12	86.5°	土器:1/10、石器:剥片4、礫:4/90	SK311→SK312	中期末～後期初	
313	47･49･270	15F23.24･15G3	E2	不整楕円形	スリ鉢形	268	108	42	47°	土器:16/320			
314	61･62･270	16E22.23･16F2.3	E1	不整方形	U字形	180	167	52		土器:1/10、石器:不定形1、礫:4/17	SK314→SD127		
315	61･62･270･271	16F3.4.8.9	E2	不整円形	不整形	172	154	29	54.5°	土器:7/145、石器:不定形1.剥片1		中期前～中葉	
316	71･72･271	16F19.20.24.25･16G5･17F21･17G1	E2	隅丸長方形	皿形	440	208	8	179.5°	土器:5/230、石器:剥片3、礫:15/7,515		中期前～中葉	
317	37･43･271	15B13.14.18.19	A1	円形	フラスコ形	210	206	162		土器:56/1,000、石器:敲磨石1.剥片2、礫:175/11,463	SK317→SK318、SD262	中期前～中葉	
318	37･43･271	15B17.18	B2	楕円形	椀形	128	100	36	169.5°		SK317→SK318→SK319	中期末～後期初	
319	37･43･271	15B18.23	D2	円形	皿形	80	68	12	92.5°	石器:石皿2、礫:1/2,520	SK317→SK318→SK319	中期末～後期初	
320	52･55･271･272	15B19.20.24.25	A1	円形	フラスコ形	220	192	108	46.5°	礫:6/2,753	SK320→SK321	中期前～中葉	
321	52･55･271･272	15B19.24	E1	不整円形	U字形	166	148	42	28.5°	土器:15/670、石器:敲磨石2.石皿1.剥片17、礫:162/20,036	SK320→SK321	中期末～後期初	
322	52･56･272	15B9.10.14.15	A1	円形	フラスコ形	216	188	120	47.5°	土器:42/1,945、石器:不定形2.磨斧1.敲磨石3.多面体敲石1.剥片4、礫:280/81,226		大木8b	覆土下層に遺物が混入する。
324	37･43･272	14B10	G	不明	U字形			48				中期末～後期初	調査区外に延びる。
325	37･43･272	14B9.10	G	不明	不整形			68				中期末～後期初	調査区外に延びる。
327	52･56･272	15C4.5	B2	不整楕円形	U字形			46		土器:2/20、石器:剥片2、礫:2/14	SK417→SK327	中期末～後期初	
328	37･43･273	15C1.2	B2	楕円形	U字形	148	84	34	198.5°	土器:2/20、石器:剥片1、礫:1/2,460		中期末～後期初	
329	37･43･273	14B23.24	C2	不整楕円形	皿形	96	74	19	162.5°	土器:9/115、石器:石核1.剥片7、礫:2/10,000		中期末～後期初	覆土に扁平礫が混入する。
331	35･36･273	14D25･15D21	C1	不整円形	皿形	132	114	18	152.5°			中期末～後期初	
332	47･49･273	14D19	B2	不整楕円形	逆台形	128	70	24	81.5°	礫:3/100		中期末～後期初	
333	47･49･374	14D17.18.22.23	G	楕円形	不整形	126	68	56	68.5°	土器:2/20、礫:22/7,076		三十稲場	
335	29･33･274	14D11	C1	不整円形？	皿形	114	106	20		礫:3/145	SK335→SK336	中期末～後期初	
336	29･33･274	14D11.12	E1	隅丸長方形	U字形	80	64	45	120.5°	石器:剥片1、礫:8/480	SK335→SK336→14D-6号焼土	中期末～後期初	
337	37･39･274	15D1	B1	不整円形	逆台形	136	116	30	71°	土器:24/450、石器:剥片1、礫:18/4,523	SK278→SI210→SK337	中期末～後期初	
338	29･33･274	14D6.11	G	不整形	U字形	120	86	32	171°			中期末～後期初	
340	37･43･275	14D3.8	A3	円形	小フラスコ形	132	132	104		土器:24/460	SK340→204号集石		
341	63･64･275	16C11.12.16.17	A1	円形	フラスコ形	206	194	126	（157.5°）	土器:20/130、礫:38/12,047	SK341→SI190a･b	中期前～中葉	
342	37･43･275	15C6	B2	楕円形	U字形	126	65	45	41.5°	土器:11/370、石器:両極1.剥片2、礫:18/1,608		中期末～後期初	
344	63･64･275	16C6.11	G	不整形	不整形	168	100	12	75°	土器:3/70、礫:8/26,950	SK344→SI190a	中期末～後期初	上面に礫あり。礫のあり方はSK457に近似する。

No.	図版	位置（グリッド）	分類	平面形	断面形	規模（cm）			長軸方向	出土遺物 土器:点/g、石器:器種名/点数、礫:点/g、その他（種別:点）	新旧関係（古→新）	時期	備考
						長径	短径	深さ	N-°-E				
346	63･64･275	16C6	D2	隅丸方形	逆台形	68	58	18	161.5°	土器:1/260、石器:剥片2、礫:2/27	SK346→SI190a	中期末～後期初	
347	29･33･275	14C11.16	B1	円形	U字形	124	124	18		土器:3/2,355	SK347→SI228	大木10	
348	52･56･276	15C10	D2	円形	皿形	64	58	11	170.5°		SK348→SI190a	中期末～後期初	上面に大礫が混入する。
351	29･33･276	14B16.17	D1	不整円形	U字形	75		40		土器:2/15	SK351→SK212	中期末～後期初	
352	68･69･276	17B1.2.6.7.11.12	E1	不整円形	皿形	346	324	16	37°	土器:41/760、礫:5/70,500	SK353･360→SK352→SK413、17B-1号・2号焼土	中期末～後期初	南西部に棒状礫5点が並べられている。
353	68･69･277	17B2.3.7.8	E2	不整方形	皿形		195	32		土器:7/455、石器:敲磨石2.剥片2、礫:138/11,565	SK354→SK353→SK352→SK413	中期末～後期初	
354	68･69･277	17B8.12.13	A1	不整円形	フラスコ形	218	200	136	130°	石器:不定形1.敲磨石1.剥片1、礫:17/2,538	SK354→SK353→SK413	中期前～中葉	
355	29･33･277	14B11.12	D1	不整長方形	U字形	82	50	48	99.5°	石器:剥片1、礫:1/54	SK355→SK217	中期末～後期初	
356	29･33･277	14B6.7	G	不明	U字形			70		礫:1/1,220		中期末～後期初	調査区外に延びる。
358	52･56･278	15B5.10	A1	不明	フラスコ形			120		土器:2/660、石器:剥片2、礫:11/9,545	SK406→SK358	中期前～中葉	調査区外に延びる。
359	52･56･278	15B10.15･16B6	A1	不整円形	フラスコ形	134	116	116	92°	土器:4/40、石器:不定形1.敲磨石1.剥片1、礫:84/2,251	SK359→SK382	中期前～中葉	
360	52･57･278	16B10.15･17B6.11	A1	不整円形	フラスコ形	204	180	74	159°	土器:57/1,866、石器:石鏃失敗品1.敲磨石2.剥片13、礫:26/1,003	SK408→SK360→SK381･352→17B-2号焼土	中期前～中葉	
361	37･43･278	15C24	B1	不整円形	U字形	100	96	46	70°	土器:10/450、石器:剥片2、礫:15/385		中期末～後期初	
362	37･43･278･279	15C23･15D3	C2	楕円形	逆台形	116	90	28		土器:9/210	SK362→SK365	中期末～後期初	
363	37･44･279	15C18.19.23.24	C2	楕円形	U字形	136	92	28	165.5°	土器:3/20、石器:不定形1		中期末～後期初	
364	37･44･279	15C24･15D3.4	C2	楕円形	逆台形	124	83	21		土器:8/205、石器:敲磨石1.剥片3		中期末～後期初	
365	37･43･279	15D3.4	G	不明	皿形			12		土器:15/405、石器:敲磨石1.剥片6、礫:23/715	SK362→SK365	中期末～後期初	
367	71･72･279	17D21.22	C1	不整円形	椀形	110	102	25	1.5°	土器:65/1,656、石器:不定形1.両極1.磨斧1.敲磨石4.剥片3、礫:45/6,923		三十稲場	覆土に遺物がやや多く混入する。
368	68･70･280	17D4.5.9.10	B2	不整楕円形	不整形	138	92	40	94.5°	石器:石皿1、礫:2/7,940	SK369→SK368		
369	68･70･280	17D4.5	C2	楕円形？	皿形	146		28		石器:敲磨石1.剥片2、礫:2/5,910	SK369→SK368		
372	76･77･280	19F12.13.18	E1	不整形	皿形	160	124	20	126.5°	土器:18/390、礫:41/702		中期前～中葉	
373	76･77･280	19F16.21	G	不整形	不整形	138	76	36	95.5°	土器:13/180、石器:剥片1、礫:23/1,571		中期前～中葉	底面、側壁の凹凸が激しい。
374	76･77･280	19F13.14	A2	円形	フラスコ形	160	152	92	6.5°	土器:52/2,295、石器:不定形1.剥片10、礫:95/5,967		大木8a古	
375	76･77･281	19F24.25	A2	不整円形	フラスコ形	156	136	114	54.5°	土器:202/20,244、石器:不定形6.敲磨石2.剥片64、礫:118/18,025、石製品:1	SK375→SK379	大木8a古	覆土中層に遺物が極めて多く混入する。SK379と同一遺構の可能性あり。
376	76･77･281	19F15.20	A2	不整形	フラスコ形	150	114	148	4.5°	土器:431/17,975、石器:不定形1.石鏃失敗品1.敲磨石4.石皿1.石核1.剥片57、礫:1,167/78,178、石製品:2		大木7b･8a過渡期	覆土中～下層に遺物が極めて多く混入する。
377	76･77･281	19F19.20	B1	不整円形	U字形	96	96	44				中期前～中葉	
378	78･80･282	21F17.22	A2	不整円形	フラスコ形	164	148	140	156.5°	土器:98/12,340、石器:石錐1.不定形7.敲磨石2.多面体敲石1.剥片38、礫:1,225/248,424		大木7b･8a過渡期	覆土中～下層に遺物が極めて多く混入する。
379	76･77･281･282	19F25	E2	不整楕円形	椀形	218	104	48	140.5°	土器:48/710、石器:剥片1、礫:6/83	SK375→SK379	中期前～中葉	SK375と同一遺構の可能性あり。
380	78･80･282	20F23	A3	不整円形	小フラスコ形	100	100	55		土器:89/2,805、石器:敲磨石1.剥片9、礫:21/22,900		大木8a古	覆土中～下層に遺物が極めて多く混入する。
381	52･57･282	16B15.20･17B11.16	B2	楕円形	椀形	163	136	44	134°	土器:13/350、石器:剥片1、礫:45/2,977	SK360･402→SK381	中期末～後期初	
382	52･56･278	15B10.15･16B6.11	C2	不整楕円形	椀形	144	96	28	66.5°		SK359→SK382	中期前～中葉	
383	52･57･282･283	16B6.7.11.12	C3	不整長方形	U字形	164	100	26	52.5°	土器:49/1,870、石器:剥片7、礫:116/7,270		綱取Ⅰ	
384	52･57･283	16B11.16	A1	不整円形	フラスコ形	156	137	80	0.5°	礫:1/1,100	SK384→SK386	中期前～中葉	
385	52･57･283	16B16.17	C2	楕円形	皿形	168	105	24	68.5°	土器:25/780、石器:剥片1、礫:4/15		中期末～後期初	
386	52･57･283	16B11.12.17	C2	不整楕円形	逆台形	112	94	15	18.5°		SK384･387→SK386	中期末～後期初	
387	52･57･283	16B12.17	A1	不整楕円形	フラスコ形	128	101	102	68.5°	土器:5/110、礫:7/203	SK387→SK385･386	中期前～中葉	
388	52･57･284	15B20･16B16	A1	円形	フラスコ形	140	120	72	18.5°	土器:1/120、礫:3/7,430	SK388→SI239・SK389	中期前～中葉	
389	52･57･284	16B16.21	B2	不整楕円形	逆台形	144	96	32	8.5°		SK388→SK389	中期末～後期初	
390	63･64･284	16B16.17.21.22	B1	円形	逆台形	116	116	36		土器:90/2,010、石器:剥片6、礫:36/381	SK390→237集石	大木10古	覆土に棒状大礫が多く混入する。
391	63･64･284	16C18	C2	楕円形	皿形	134	80	10	3.5°	土器:91/2,420、石器:石鏃失敗品1、礫:26/9,480		三十稲場	覆土に遺物がやや多く混入する。
392	63･64･285	16C7.8.12.13	A1	不整円形	フラスコ形	228	214	138		土器:3/40、石器:石核1.剥片1、礫:116/14,915		中期前～中葉	
393	63･65･285	17C1	C2	不整楕円形	皿形	148	114	12	128°	土器:2/320、礫:42/741		中期末～後期初	
394	63･65･285	17C2.3.7	E1	不整方形	逆台形	174	160	36	101°	土器:121/5,455、石器:不定形1.敲磨石1.剥片9、礫:38/54,371		加曾利B1	覆土中～下層に遺物が多く混入する。
395	63･65･285	17C3.8	B1	円形	椀形	142	134	56	70.5°	土器:33/1,185、石器:敲磨石2.多面体敲石1.石皿1.剥片2、礫:43/23,146		加曾利B1	形状、覆土、扁平礫のあり方がSK394に近似する。
397	63･65･286	16C2.7	A1	不整楕円形	フラスコ形	176	116	82	1.5°	土器:5/45、礫:71/6,728	SK397→SK434	中期前～中葉	
398	68･69	17C10	D1	不整形	U字形	92	68	28	131.5°		SK398→SI396	中期前～中葉	
399	37･44･286	15C8.9.13	G	不整形	不整形	216	112	32	31°	土器:7/440、石器:敲磨石1、礫:50/8,499		中期末～後期初	上面西側に礫が集中する。
400	63･65･286	16C4.5.9.10	A1	不整円形	フラスコ形	272	248	136	142.5°	土器:33/2,030、石器:敲磨石1.剥片3、礫:3/6,029	SK400→SI192、17C-1号・5号埋設	大木7b新	底面直上より、左時期の土器出土。
401	63･65･286･287	16B18.19.24	E1	不整形	逆台形	192	164	28	38°	土器:2/125、礫:10/515	SK401→237集石	中期末～後期初	
402	52･57･59･287	16B15.19.20	A1	楕円形	フラスコ形	234	188	132	50°	土器:1/175、石器:剥片2、礫:37/4,336	SK403･437a→SK402→SK381	中期前～中葉	

No.	図　版	位置（グリッド）	分類	平面形	断面形	規模（cm）			長軸方向	出土遺物	新旧関係（古→新）	時　期	備　　考
						長径	短径	深さ	N-°-E	土器:点/g、石器:器種名/点数、礫:点/g、その他（種別:点）			
403	52·57·59·287	16B20.24.25	A1	不整形	フラスコ形	208	160	116	10°	土器:4/260、礫:2/23,702	SK437a・438→SK403→SK402	中期前～中葉	
404	52·58·287	16B3.4.8.9	A1	円形	フラスコ形	208	196	120	24.5°	石器:敲磨石1.剥片2、礫:72/8,603		大木8a	
405	52·58·287	16B4.5.9.10	A1	不整形	フラスコ形	180	168	120	20°		SK405→237集石	中期前～中葉	
406	52·56·278	15B5.10·16B1.6	A1	不明	フラスコ形			132			SK406→SK358	中期前～中葉	
407	52·58·288	16B3	A1	不明	フラスコ形			141		礫:24/1,587		中期前～中葉	調査区外に延びる。
408	52·57·288	16B10	A1	不明	フラスコ形			77		土器:12/310、石器:剥片4、礫:9/1,920	SK408→SK360→SK352→17B-1号焼土	中期前～中葉	
409	52·58·288	16B5.10·17B1.6	B2	楕円形	椀形	120	96	52	110.5°	石器:石鏃1.敲磨石1、礫:5/175		中期末～後期初	
410	63·66·288	17B21.22	C1	円形	不整形	134	124	28	177.5°	土器:50/660、石器:敲磨石1.石皿1.剥片4、礫:39/19,215		加曽利B1	
411	63·66·288·289	17B16.17	B1	不整円形	椀形	144	124	46	101.5°	土器:31/590、石器:敲磨石1.剥片3、礫:24/4,728		加曽利B1	
412	68·70·289	17B11.12.16.17	A3	不整楕円形	U字形	153	124	52	159°	土器:30/380、石器:不定形1.石核1.剥片5、礫:17/12,427		加曽利B1	
413	68·70·289	17B7.12	B2	楕円形	U字形	184	148	64	90°	土器:73/2,080、石器:剥片1、礫:17/3,407	SK354→SK353→SK352→SK413	加曽利B1	
414	63·66·289	17B22	C1	不整円形	スリ鉢形	134	120	26	144°	土器:6/120、石器:剥片1、礫:22/1,688		中期末～後期初	
415	52·58·289·290	16B2.7	A3	不整円形	小フラスコ形	124	124	80		礫:2/40		中期前～中葉	
416	52·58·290	16B6.7	A3	不明	小フラスコ形			48		土器:11/260、石器:不定形2.敲磨石2.石皿1.剥片7、礫:6/7,912		中期末～後期初	
417	52·58·290	15C4.5.9.10	A1	不整形	フラスコ形	268	200	120	98.5°	土器:11/145、石器:不定形1.剥片4、礫:62/14,407	SK417→SI294・295、SK327	中期前～中葉	
418	37·44·290	15B3.4.8.9	G	不明	椀形			24		土器:4/140、石器:剥片1、礫:14/1,321		中期末～後期初	調査区外に延びる。
419	37·44·290	15B7.8	G	不明	不明			26		土器:7/100		中期末～後期初	調査区外に延びる。
420	52·59·290	15B15.20	C3	隅丸方形	不整形	96	80	24	13.5°	土器:42/420、石器:敲磨石2.剥片2、礫:2/3,904		中期末～後期初	
422	78·80·291	20F13.14	C2	楕円形？	皿形	134	90	14		土器:15/165、石器:剥片2、礫:4/77	SK422→SK426	中期前～中葉	
424	78·80·291	20F3.8	C2	不整楕円形	皿形	128	104	16	62.5°	土器:43/520、石器:剥片1、礫:13/2,391	SK425→SK424	中期前～中葉	
425	78·80·291	20F8	C2	楕円形	皿形	120	96	16	44.5°	土器:6/120、石器:剥片1、礫:1/8,400	SK425→SK424	中期前～中葉	
426	78·80·291	20F8.9.13.14	C2	不整楕円形	皿形		90	18	166.5°	土器:68/840、石器:不定形1.剥片8、礫:24/39,542	SK422→SK426	中期前～中葉	
429	78·79·227·292	20F15.19.20	E1	楕円形	皿形	322	144	16	118.5°	土器:15/1,570、石器:敲磨石1.石核1.剥片3、礫:17/25,694	SI428→SK429	中期前～中葉	
430	78·80·292	19F20·20F16.17.21.22	E1	不整形	皿形	288	210	22	144.5°	土器:80/2,595、石器:剥片4、礫:175/30,799		大木7b新	住居跡の可能性あり。
431	52·59·292	15C5	D1	楕円形	椀形	79	58	19	57.5°	石器:不定形1.剥片1		中期末～後期初	
432	63·66·292	16B21.22·16C1.2	A1	円形	フラスコ形	200	200	120		土器:3/45、石器:剥片1、礫:87/7,686	SK432→SK434、237集石、16B-7集石	中期前～中葉	
433	63·66·292	16B17.18.22.23	C3	隅丸方形	皿形	126	124	20		土器:8/455、石器:石核1.剥片3、礫:202/18,480	SK433→237集石、16B-2埋設	中期末～後期初	覆土に小礫が多く混入する。
434	63·66·293	16B22.23·16C2.3	A1	楕円形	フラスコ形	248	184	156	62.5°	土器:6/105、石器:多面体敲石1.剥片5、礫:343/49,380	SK397・432→SK434	中期前～中葉	
435	63·66·293	16B23.24	E1	円形	皿形	168	168	12		土器:26/3,415、石器:剥片2、礫:9/1,286	SK435→237集石	大木10古	
436	52·59·293	16B6.11	C2	不整楕円形	皿形	92	78	16	39°	石器:石皿1、礫:3/12,500		中期末～後期初	
437a	52·59·293	16B19.20	A1	不明	フラスコ形			84			SK437a→SK403→SK402	中期前～中葉	
438	52·59·293	16B24	G	不明	U字形			46			SK438→SK403	中期前～中葉	
439	52·59·294	16B6.7	B2	不整楕円形	逆台形	140	88	34	93.5°	土器:16/620、石器:敲磨石2.石皿1.剥片4、礫:55/28,794		中期末～後期初	
440	52·59·294	16B13.18	A1	楕円形	フラスコ形	152	126	60	111.5°	土器:1/10	SK440→SI240→237集石	中期前～中葉	
441	75·294	19D22	C2	楕円形	スリ鉢形	153	80	28	21.5°	土器:1/20、石器:剥片1、礫:16/480			
451	76·77·294	19G4.5	G	不明	椀形			60		土器:6/145、石器:剥片2		中期前～中葉	調査区外に延びる。底面の凹凸が激しい。
452	37·294	15B16.17	G	不明	不整形					土器:4/140、石器:剥片2、礫:11/280		中期末～後期初	
453	61·62·295	16G9	G	不明	不整形			58				中期前～中葉	調査区外に延びる。底面、側壁の凹凸が激しい。
454	71·72·295	17G6.7	E2	不明	不整形		214	32		土器:32/1,770、礫:1/2,870		大木8a古	調査区外に延びる。底面、側壁の凹凸が激しい。
455	71·72·295	17G2.3.7.8	E2	不明	不整形		209	32		土器:5/520、石器:石皿1.剥片1、3/110		大木7b新	調査区外に延びる。底面、側壁の凹凸が激しい。
456	71·72·295	17G4.9	E2	不明	皿形			20		土器:27/790		中期前～中葉	調査区外に延びる。底面、側壁の凹凸が激しい。
457	63·66·295	16C6	C2	楕円形	皿形	96	74	14	156.5°	礫:11/641		中期末～後期初	上面に大礫5個あり。礫のあり方はSK344に近似する。
458	63·64·295	16C6	D2	不整楕円形	皿形	72	60	10	1°			中期末～後期初	
459	52·59·295	16B4.5	A1	不明	フラスコ形			132				中期前～中葉	調査区外に延びる。
460	73·74·296	18B24.25	C1	不整円形	スリ鉢形	88	78	24	29.5°				
462	75·296	19D17.18.22.23	B2	楕円形	逆台形	104	74	30	134°				
463	75·296	19D23	B1	不整円形	U字形	104	88	42	62.5°	土器:1/10			
464	81·296	21F20.25·22F16	A4	円形	小フラスコ形	126	121	37	87.5°	土器:26/590		大木7b·8a過渡期	
468	73·74·297	18A18.19	A4	円形	皿形	168	154	12	106.5	土器:2/30			

No.	図　版	位置（グリッド）	分類	平面形	断面形	規模（cm）			長軸方向	出土遺物	新旧関係（古→新）	時　期	備　　考
						長径	短径	深さ	N-°-E	土器:点/g、石器:器種名/点数、礫:点/g、その他（種別:点）			
469	73·74·297	19A21	A4	円形	逆台形	180	166	44	15.5°				
470	73·74·297	18B5.10	A4	円形	U字形	186	156	44	121.5°				
471	73·74·297	18B10.14.15	A4	円形	皿形	116	104	6	103.5°	土器:2/30			
474	78·80·298	21E18	C2	不整楕円形	皿形	96	72	11	153.5°				
476	73·74·298	19C3.4.9	E2	不整形	スリ鉢形	228	140	37	2.5°	石器:剥片1、礫:1/10			
477	75·298	20C12.17.18.22	A4	円形	U字形	256	240	92	92°	土器:1/25			
478	73·74·298	19B24.25·19C5	A4	不整楕円形	U字形	194	66	60	15.5°				
479	75·298	20C18.23	C2	楕円形	皿形	116	80	15	167.5°				
480	75·298	20D4.5.9	A4	円形？	椀形	152	152				SK480→SI475		
481	52·59	15C19.20.24.25	G	不整形	不整形			21				中期末～後期初	
482	29·33	13C14	G	不明	不明			24			SK482→SI228	中期末～後期初	

埋設土器観察表

遺構名	土器番号	遺構図版	位　置	土器状態	埋設状況	蓋	器種	出土遺物	新旧関係（古→新）	時　期	備　　考
10B-1号	326	9·11·299	10B22	B4	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	焼土·炭化粒が多く混入する。周辺は10B-4号·5号、10C-2号·3号埋設とともに集中する。
10B-2号	327	9·11·299	10B12	A3	斜位	無	深鉢	剥片3		三十稲場	
10B-3号	328	9·11·299	10B8	A3	正位	無	深鉢	石鏃失敗品1		中期末葉～後期初頭	
10B-4号	329	9·11·299	10B22	A1	正位	無	深鉢			三十稲場	周辺は10B-1号·5号、10C-2号·3号埋設とともに集中する。
10B-5号	330	9·11·300	10B17.22	A1	正位	無	深鉢			三十稲場	周辺は10B-1号·4号、10C-1号·3号埋設とともに集中する。
10B-6号	331	9·11·300	10B9.10	A1	正位	無	深鉢	石核1		中期末葉～後期初頭	
10B-7号	332	14·19·300	10B10	A3	正位	無	深鉢			後期初頭？	
10B-9号	333	14·19·300	10B15	C1	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
10C-1号	334	14·19·300	10C15	B4	正位	無	深鉢			大木10古	
10C-2号	335	9·11·301	10C2	A1	斜位	れき	深鉢			三十稲場	周辺は10B-1号·4号·5号、10C-3号埋設とともに集中する。
10C-3号	336	9·11·301	10C2	C1	正位	れき	深鉢			中期末葉～後期初頭	10B-1·4·5、10C-2号埋設とともに集中する。
11B-1号	337	14·19·301	11B16	A1	正位	無	深鉢	剥片1		中期末葉～後期初頭	
11B-2号	338	14·19·301	11B20	A3	正位	無	深鉢	不定形1.剥片4		中期末葉～後期初頭	
11B-3号	339	14·19·302	11B8	A3	不明	無	深鉢	敲石2.多面体敲石1.剥片1		中期末葉～後期初頭	撹乱が激しい。
11B-4号	340	14·19·302	11B9	A1	正位	無	深鉢		SK111→11B-4号埋設	大木10？	
11B-5号	341	14·20·302	11B20	A1	横位	無	深鉢		11B-5号埋設→SI48	三十稲場	
11B-6号	342	14·20·303	11B20	B2	横位	無	深鉢	敲石1		中期末葉～後期初頭	
11B-7号	343	14·20·303	11B15	C1	正位	無	深鉢	剥片1		中期末葉～後期初頭	
11C-1号	344	14·20·303	11C1	A3	斜位	無	深鉢	剥片1	SK66→11C-1号埋設	大木10古	
11C-2号	345	14·20·303	11C11	A1	正位	れき	深鉢	不定形1.剥片5.石皿1		大木10古	若干ずれるが、石皿片を蓋に用いている。
11C-3号	346	14·20·303·304	11C8	A3	正位	れき	深鉢		SI47→11C-3号埋設	中期末葉～後期初頭	
11C-6号	347	21·25·304	11C10	A1	横位	無	深鉢	敲石1.石皿1.剥片6	SK184→11C-6号埋設	中期末葉～後期初頭	
11D-1号		14·20·304	11D8	A3	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	調査後、土器の照合ができなかった。
11D-2号	348	14·20·304	11D13	B2	逆位	無	深鉢	石錐1		大木9新～10古	
11G-1号	349	12·13	11G8	A3	不明	無	深鉢			加曽利B？	土器胴下半部は磨かれ、器壁の薄さ、胎土が中期末葉～後期初頭期のものと異なる。
12B-1号		14·20·305	12B22	A3	正位	土器	深鉢	両極1.剥片9		中期末葉～後期初頭	調査後、土器の照合ができなかった。埋設土器は外面縄文、土器蓋は条線文。
12B-3号	350	14·16·305	12B12.17	A1	斜位？	無	深鉢		SI76→12B-3号埋設	三十稲場	
12B-8号	351	14·20·305	12B7	A3	不明	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
12C-1号	352	21·25·305	12C12	A1	斜位	無	深鉢	剥片2		三十稲場	
12C-2号	353	21·25·305·306	12C12	A3	正位	れき	深鉢	剥片6		中期末葉～後期初頭	
12C-3号	354	14·20·306	12C18	A3	正位	れき	深鉢	敲石2.剥片5		中期末葉～後期初頭	
12C-5号		21·25·306	12C1	A1	横位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	調査後、土器の照合ができなかった。
12C-6号	355	21·25·306	12C7	B2	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	

遺構名	土器番号	遺構図版	位　置	土器状態	埋設状況	蓋	器種	出土遺物	新旧関係（古→新）	時　期	備　考
12C-7号	356	21·25·306	12C22.23	A1	逆位	無	深鉢			大木10古	
12C-8号	357	21·25·307	12C10	A1	正位	無	深鉢			大木10古	調査後、土器底部の照合ができなかった。
12D-1号	358	21·25·307	12D8	C1	斜位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	口縁部わずかに残る。
12D-2号	359	21·25·307	12D15	C1	正位	無	深鉢		SI122→12D-2号埋設	後期初頭	
12D-3号	360	21·26·307	12D9	A3	正位	無	深鉢			三十稲場	
12D-4号	361	21·26·307	12D19	A3	不明	無	深鉢	剥片2		中期末葉～後期初頭	
12D-5号	362	21·26·308	12D11.12.16.17	A1	横位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	覆土はしまりのある炭化粒を含んだ暗褐色土。
12D-8号	363	21·26·308	12D3	A3	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	覆土の黄色土は他の埋設と異なる。
12E-1号	364	21·26·308	12E5	A3	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
13B-1号	365	29·34·308	13B11	A3	正位	れき	深鉢	敲石1.剥片2		中期末葉～後期初頭	上面に棒状礫2点あり。
13D-1号	366	21·26·309	13D12	A1	正位	無	深鉢	剥片1		中期末葉～後期初頭	接合しないが、口縁部わずかに残る。
13D-2号	367	35·36·309	13D23	B2	逆位	れき	深鉢			中期末葉～後期初頭	覆土に小礫が多く混入する。上面に扁平礫2枚あり。
13D-4号	368	29·34·309	13D19	A3	正位	れき	深鉢		SK131→13D-4号埋設→SD45	中期末葉～後期初頭	同一個体の土器が二重に巡るように埋設する。
13E-1号	369	21·26·309	13E2	C1？	正位	無	深鉢			三十稲場	
13E-2号	370	21·26·310	13E7	A1	正位	無	深鉢			大木10新？	
13E-3号	371	21·26·310	13E2	A1	正位	れき	深鉢			中期末葉～後期初頭	
13E-4号	372	35·36·310	13E3	B4	不明	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	同一個体を入れ子状に2～3重に埋設する。
13E-5号	373	21·26·310·311	13E1.2	C1	斜位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
13E-6号	374	27·28·311	13E8	A1	斜位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	覆土下層に焼土が薄く堆積することから炉跡の可能性もあり。
13E-7号	375	35·36·311	13E5	A3	横位	無	深鉢		13E-7号埋設→SD45	中期末葉～後期初頭	
14B-1号	376	29·34·311	14B7	B2	横位	土器	深鉢	剥片1		中期末葉～後期初頭	土器がつぶれたのでなく、上下に土器片を敷いたもの。土器内に約10×7cmの扁平礫あり。
14B-2号	377	37·44·311·312	14B8	A3	正位	無	深鉢	剥片2	Sk234→14B-2号埋設	中期末葉～後期初頭	
14C-1号	378	37·44·312	14C24	A1	斜位	無	深鉢		SI229→14C-1号埋設	大木10古	
14C-2号	379	37·45·312	14C10.15	C1	正位	無	深鉢	多面体敲石1.砥石1.剥片3	SI230→14C-2号埋設	中期末葉～後期初頭	覆土中層より丸石、底面より剥片出土。
14C-3号	380	37·45·312	14C9	B2	正位	無	深鉢	剥片2	SI304→14C-3号埋設	大木10古	接合しないが、口縁部わずかに残存する。覆土上層は焼土と異なるが、にぶい橙褐色土である。
14C-4号	381	37·45·313	14C21	A1	正位	無	深鉢	剥片5		大木10古	
14C-5号	382	37·45·313	14C25	A3	斜位？	無	深鉢	剥片6		中期末葉～後期初頭	
14C-7号	383	37·45·313	14C9.14	B4	逆位	無	深鉢		SI230、SK304→14C-7号埋設	中期末葉～後期初頭	調査後、土器の半分照合できず。
14C-9号	384	37·45·313	14C13.14	A3	正位	無	深鉢		SI230、SK304→14C-9号埋設	中期末葉～後期初頭	
14D-1号	385	37·45·313·314	14D9	A1	正位	無	深鉢		SI209→14D-1号埋設	三十稲場	北隣に14D-2号埋設あり。
14D-2号	386	37·45·313·314	14D9	A1	正位	無	深鉢	不定形1	SI209→14D-2号埋設	三十稲場	南隣に14D-1号埋設あり。
14D-3号	387	37·45·314	14D10	B2	正位	無	深鉢		SI209→14D-3号埋設	中期末葉～後期初頭	
14D-7号	388	29·34·314	14D7	A3	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
14D-9号	389	29·34·314	14D7.12	A3	斜位	れき	深鉢	剥片1		中期末葉～後期初頭	
14D-12号	390	47·50·314·315	14D19.20	A3	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
14D-13号	391	37·45·315	14D8	A1	横位	れき	深鉢		SI209→14D-13号埋設	中期末葉～後期初頭	
14D-14号	392	37·45·315	14D4	A1	正位	れき	鉢		SI209→14D-14号埋設	大木10新	
14D-16号	393	29·34·315	14D2	B4	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
14E-1号	394	35·36·315·316	14E12	A1	正位	無	深鉢			大木10古	
14E-3号	395	47·50·316	14E5	B2	逆位	？	深鉢	剥片3	14E-3号埋設→241号集石	三十稲場	上面に241号集石の礫あり。14E-5·6·7号と同時期か。
14E-4号	396	35·36·316	14E1	A1	正位	無	深鉢			三十稲場	
14E-5号	397	47·50·316·317	14E14	A3	正位	？	深鉢		14E-5号埋設→241号集石	三十稲場	上面に241号集石の礫あり。14E-3·6·7号と同時期か。
14E-6号	398	47·50·316	14E5	C3	不明	？	深鉢		14E-6号埋設→241号集石	三十稲場	上面に241号集石の礫あり。14E-3·5·7号と同時期か。
14E-7号	399	47·50·316·317	14E5	A3	不明	？	深鉢		14E-7号埋設→241号集石	三十稲場	上面に241号集石の礫あり。14E-3·5·6号と同時期か。
14E-8号	400	47·50·317	14E15	B4	正位	無	深鉢	剥片1	14E-8号埋設→SK242	中期末葉～後期初頭	
14F-1号	401	47·51·317	14E23・14F3	A1	不明	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	同一個体の破片を重ねて埋設している。
15B-1号	402	37·45·317	15B14	A1	斜位	無	深鉢			大木10新	
15B-2号	403	37·46·317	15B19	A3	斜位	無	深鉢	不定形1.剥片4		大木10古	
15B-3号	404	37·46·318	15B14	A3	正位	無	深鉢			大木10古？	
15C-2号	405	37·46·318	15C2	B4	正位	無	深鉢	石錐1.剥片1	SK291→15C-2号埋設	中期末葉～後期初頭	

遺構名	土器番号	遺構図版	位置	土器状態	埋設状況	蓋	器種	出土遺物	新旧関係（古→新）	時期	備考
15C-3号	406	37·46·318	15C19	A1	正位	無	深鉢			三十稲場	
15C-4号	407	37·46·318	15C23	A1	斜位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
15C-5号	408	37·46·319	15C23	B2	斜位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
15C-6号	409	37·46·319	15C25	C3	正位	無	深鉢			三十稲場？	東隣に15C-7号埋設あり。
15C-7号	410	37·46·319	15C25	A3	正位	無	深鉢	剥片1		三十稲場	西隣に15C-6号埋設あり。
15C-8号	411	52·60	15C25・16C21	A1	正位	無	深鉢	敲石1		中期末葉～後期初頭	16C-3号埋設とはレベル差15㎝あり、関連はない。
15C-9号	412	37·46·318·319	15C14	C3	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
15C-10号	413	52·60·319	15C19	C1	斜位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
15C-11号	414	52·60·319	15C5	A1	正位	無	深鉢			三十稲場	
15D-1号	415	47·51·320	15D20	B2	不明	無	深鉢			三十稲場	
15D-2号	416	47·51·320	15D14	A1	斜位	無	把手付注口壷	剥片1	SK271→15D-2号埋設	綱取Ⅰ	
15D-3号	417	47·51·320	15D14	A1	正位	無	深鉢	剥片1	SK271→15D-3号埋設	中期末葉～後期初頭	同一個体を入れ子状に埋設する。
15D-4号	418	37·46·320	15D8.13	C3	正位	れき	深鉢	石核1		中期末葉～後期初頭	
15D-5号	419	37·46·320	15D7	A1	正位	？	深鉢		15D-5号埋設→209号集石	中期末葉～後期初頭	上面に209号集石が乗っている。
15D-6号	420	47·51·321	15D13	A3	不明	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
15D-7号	421	47·51·321	15D17	A3	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	調査後、底部以外照合できなかった。
15D-8号	422	47·51·321	15D24	A3	不明	れき	深鉢	不定形1		中期末葉～後期初頭	
15D-9号	423	37·46·321	15D13	B2	正位	土器	深鉢		SK271→15D-9号埋設	中期末葉～後期初頭	土器片を蓋状に敷き詰めている。
15F-2号	424	47·51·321·322	15F6	B2	横位	無	深鉢			加曽利B？	器壁の薄さ、胎土の精良さは、中期末葉～後期初頭期のものと異なる。
16B-1号	425	63·66·322	16B8	A1	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
16B-2号	426	63·66·322	16B17	B4	正位	無	深鉢		SK433→16B-2号埋設	三十稲場	
16B-3号	427	52·60·322	16B16	A3	正位	れき	深鉢			中期末葉～後期初頭	
16B-4号	428	52·60·323	16B13	A1	正位	無	深鉢			大木10古	
16B-5号	429	63·67·323	16B21	B2	横位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
16B-6号	430	52·60·323	16B9	A1	横位	無	深鉢	剥片1		中期末葉～後期初頭	
16C-1号	431	63·67·323	16C4.5	B4	斜位	無	深鉢		SK400→16C-1号埋設	中期末葉～後期初頭	
16C-3号	432	52·60	15C25・16C21	A1	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
16C-4号	433	63·67·323·324	16C10	A1	横位	無	深鉢	剥片5		中期末葉～後期初頭	覆土に小礫·炭化粒を含見、底部に礫あり。周辺には埋設土器がやや多く集中する。
16C-5号	434	63·67·324	16C5	B4	正位	無	深鉢			三十稲場	
16D-1号	435	63·67·324	16D18	A1	正位	無	深鉢	石核2.剥片4		三十稲場	覆土に小礫が入る。遺存状況はA1類と思われるが撹乱のため遺存は悪い。
16D-2号	436	63·67·324	16D2	A3	斜位	無	深鉢	剥片2		中期末葉～後期初頭	
16D-3号	437	63·67·324·325	16D16	B3	斜位	無	深鉢	両極1.剥片1		中期末葉～後期初頭	
16D-4号	438	63·67·325	16D3	A1	正位	れき	深鉢	剥片1		大木10古	棒状礫が乗っている。
16D-6号	439	71·72·325	16D20	A1	斜位	れき	深鉢			三十稲場	
16E-1号	440	61·62·325	16E9	A1	正位	無	深鉢	剥片1		三十稲場	
16E-2号	441	61·62·325·326	16E9	A1	正位	無	深鉢	剥片1		中期末葉～後期初頭	
16E-3号	442	71·72·326	16E4	A3	正位	無	深鉢		SI247→16E-3号埋設	中期末葉～後期初頭	
16E-4号	443	61·62·326	16E8	B2	横位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
17B-4号	444	68·70·326	17B14	A3	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
17B-5号	445	68·70·327	17A21・17B1	B4	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
17C-1号	446	63·67·327	17C1	A1	正位	無	深鉢	剥片1		中期末葉～後期初頭	
17C-2号	447	63·67·327	17C21	B3	横位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
17C-3号	448	63·67·327	17C6	C3	正位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
17D-2号	449	71·72·327·328	17D16	A1	横位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
18B-1号	450	73·74·328	18B19	B2	横位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
18B-2号	451	73·74·328	18B5	A3	逆位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
18D-1号	452	68·70·328	18D2	A3	横位	無	深鉢			中期末葉～後期初頭	
19B-1号	453	73·74·328	19B13.14	B2	逆位	れき	深鉢			中期末葉～後期初頭	
21F-1号	454	81·328	21F15	B2	正位	無	深鉢	剥片2		大木9新	

焼土遺構観察表

No.	図版	位置（グリッド）	焼土範囲（cm）			出土遺物　土器:点/g、石器（器種名）点、礫:点/g	新旧関係（古→新）	時期	備考
			長径	短径	深さ				
8B-1号焼土	6·8·329	8B15	50	34	6			不明	周辺に礫2点あるものの、10㎝以上のレベル差あり。
8B-2号焼土	6·8·329	8B25	50	48	8	礫:1/525		不明	
10D-1号焼土	12·13·329	10D21	42	27	6	土器:26/430、礫:3/311		不明	約60㎝南に範囲24×18㎝、深さ2㎝の焼土あり。
10D-2号焼土	12·13·329	10D22・10E2	55	39	4	土器:2/205、礫:52/4,400		不明	
10D-3号焼土	9·10·329	10D12	85	22	14			不明	
11E-1号焼土	12·13·329	11E1	78	62	12			不明	確認面はⅡ層上面、廃棄焼土か。
11E-2号焼土	12·13·330	11E16	78	48	16	礫:1/330		不明	確認面はⅡ層上面、廃棄焼土か。
12B-2号焼土	29·34·330	12B15	52	32	8		SK142→12B-2号焼土	不明	
12D-6号焼土	21·25·330	12D22	40	20	9			不明	
12E-2号焼土	21·25·330	12E1	48	33	7			不明	確認面はⅡ層上面。
12E-3号焼土	27·28·330	12E6	36	14	4		SK38→12E-3号焼土	不明	
14C-10号焼土	29·34·330·331	14C22	78	35	16	土器:3/40、剥片1、礫:1/9		不明	
14D-6号焼土	37·44·331	14D7.12	29	24	10		SK336→14D-6号焼土	不明	確認面はⅡ層上面。
14E-2号焼土	35·331	14E14.15.19.20	324	180	不明		SK242→14E-2号焼土→241号集石	中期末葉～後期初頭	廃棄焼土か。
17B-1号焼土	52·59·331	17B6	44	24	7		SK352→17B-1号焼土	不明	廃棄焼土である。
17B-2号焼土	52·59·331	17B6	100	77	14		SK352·360→17B-2号焼土	不明	廃棄焼土である。
18D-1号焼土	71·72·331	18D21	96	56	16			不明	
18D-2号焼土	71	18D16	69	40	不明			不明	

集石遺構観察表

No.	図版	位置（グリッド）	範囲（cm）		出土遺物　土器:点/g、石器（器種名）点、礫:点/g	新旧関係（古→新）	時期	備考
			長径	短径				
8B-1号集石	6·8·332	8B19.24	85	58	礫:5/36,870		不明	礫16点あり。内15㎝以上は4点である。
9D-2号集石	9·10·332	9D20.25	60	30	土器:3/45、礫:6/？		不明	礫6点の内3点被熱する。
10B-10号集石	14·18·332	10B25	90	30	土器:4/455、礫:22/33,275		中期末葉～後期初頭	大きさ90×30㎝、厚さ18㎝の礫が3分割されている。北に10B-11遺構（硬化面）と接する。
10C-4号集石	9·10·332	10C3	73	38	石皿1、礫:1/650		中期末葉～後期初頭	扁平礫5点が集中する。
12B-5号集石	14·19·332	12B11	46	40	剥片26、礫:2/5,300		中期末葉～後期初頭	2つの母岩からなる26の剥片が置かれていた。内20点が接合する。扁平礫2点、土偶1点に囲まれている。
12D-7号集石	29·34·332	12D10.15·13D6.11	138	95	土器:421/1,060、敲磨石1.剥片1、礫:5？/127？	SI122→12D-7号集石	中期末葉～後期初頭	礫が多数出土する。
12D-9号集石	21·25·333	12D4	280	100	土器:38/1035	SI103→12D-9号集石	後期初頭	
13B-2号集石	29·34·333	13B7.12	88	46	土器:6/200、不定形1.剥片5、礫:10/38,220	SK145→13B-2号集石	中期末葉～後期初頭	長さ25㎝以上の棒状礫3点を並べている。ややずれるが下にSK145あり。
14D-8号集石	37·44·333	14D18	105	88	土器:12/430、石皿2.剥片4、礫:21/76,552	SI208→14D-8号集石	中期末葉～後期初頭	立石4点と横位の礫の組み合わせ。SI208内にあるが関連不明。
15B-9号集石	52·59·333	15B9	48	44	礫:2？/85？		中期末葉～後期初頭	扁平礫4点が集中する。
16C-7号集石	52·59·333	16C1	77	50	礫:8/5,300	SK432→16C-7号集石	中期末葉～後期初頭	礫13点が集中する。
16C-8号集石	52·59·333	16C2.3	264	218	礫:2？/40？	SK397·434→16C-8号集石	中期末葉～後期初頭	扁平礫が多く集中する。SI288炉跡と重複するが関連は不明である。
17B-3号集石	68·70·333	17B14.15.19.20	250	150		17B-4号埋設→17B-3号集石	中期末葉～後期初頭	棒状礫がやや多く集中する。
19F-1号集石	76·77·333·334	19F16	36	30	敲磨石類1、礫:6/10,175		中期前葉～中葉	集石下にピット状の落ち込みあるが、撹乱の可能性もあり。
20D-1号集石	75·334	20D25	50	36	礫:1/8,000		不明	棒状礫2点並べている。
21E-1号集石	78·80·334	21E1	60	50		SI472→21E-1号集石	不明	被熱礫8点が集中する。
203号集石	29·34·334	14D12.13.17.18	226	206	土器:33/1,114、敲磨石類3.石皿1.砥石3.剥片7、礫:64/71,075		後期初頭	比較的大形の扁平礫や棒状礫がやや多く集中する。東側にSI60あり。
204号集石	37·44·334	14D3.4.8	388	44	石皿2.砥石1、礫:11/118,660	SI209、SK340→204号集石	中期末葉～後期初頭	棒状礫を弧状に1列に並べている。
205号集石	47·50·334	15D16.17.21.22	400	205	磨製石斧1.石皿2.剥片1、礫:35/278,257	SI62→205号集石	後期初頭	15D-7号埋設と重複するが、新旧不明。
207号集石	37·44·335	15D7.8.12.13.18	364	280	土器:12/456、敲磨石類6.石皿4.砥石1、礫:46/266,160	SK271·274·276、15D-5号埋設→207号集石	中期末葉～後期初頭	
237号集石	52·60·335	16B·16C	1,064	452	礫:107/783,048	SI240→237号集石→16B-2号埋設	後期初頭	長さ約10mの列状の集石。
241号集石	47·50·334·335	14D·14E·15D·15E	1,040	164	土器:2/60、敲磨石類4.石皿1.砥石1、礫:121/630,515	SK242、14E-3号·5号·6号·7号埋設、14E-2号焼土→241号集石	後期初頭	長さ約10mの弧状の集石。

溝観察表

No.	図版	位置（大グリッド）	規模			出土遺物（点）	新旧関係（古→新）	時期	備考
			長さ（m）	幅（cm）	深さ（cm）	土器:点/g、石器（器種名）点、礫:点/g			
SD9	7·8·337	6E・7E～F	8.22	20～56	5～16	石錘1、礫:429/24,833		近世以降？	沢Aの肩部に沿う。覆土は水田耕作土に近似する。
SD18	7·8·337	7G	6.4	26～64	8.5～20	礫:25/6,627		近世以降？	覆土はSK17に近似する。形状、位置、底面の高さからSD9の続きか。
SD44	27·28·337	12～13G	9.68	20～36	2～12	礫:1/40		近世以降？	表土層から掘り込まれている。SD45と重複するが、新旧関係不明である。
SD45	27·28·337·338	13B～G	54.08	24～64	12～90	土器:67/1,275、不定形2.石錘1.敲磨石類12.石皿1.砥石1.石核4.剥片18、礫:306/240,150	SK131·146·150、SX169、13D-4号·13E-7号埋設→SD45	近世以降？	表土層から掘り込まれている。SD44と重複するが、新旧関係不明である。
SD98	14·18·338	10～11C	4.2	24～72	18		SK29·83→SD98	中世以降？	覆土は黒褐色土で、しまり無く新しいか。
SD127	47·49·338·339	14G・15～16EF・17F・18FG	55.6	160～220	66～77	土器:1,640/24,015、石鏃失敗品1.石錐1.不定形29.両極3.篦状4.磨製石斧2.石錘5.敲磨石88.多面体敲石2.石皿12.砥石19.石核18.剥片188.石製品2、礫:3,755/1,439,800	SK314→SD127	中世	北側の一部に礫が大量に廃棄される。方形溝の一部。
SD262	52·59·339	15B	10.88	20～80	4～8	土器:2/50、礫:22/21,632	SK296·297·317·320→SD262	近世以降？	覆土は黒褐色土で、しまり無く新しいか。
SD421	78·80·339	20～21F	10	32～56	23	土器:6/85、剥片4、礫:34/6,316	SI428→SD421	近世以降？	表土層から掘り込まれている。
SD437b	68·70·339	17A・18B・19C・20E・21Fほか	北29.7南10.5	92～160	15～54	土器:23/405、不定形1.磨製石斧1.敲磨石3.剥片3、礫:24/55,980		近世以降？	表土層から掘り込まれている。境界溝か。

土器観察表1（前期末葉～中期中葉）

No.	遺構名・出土地点	層位	分類	器種・器形		残存部位・残存率	計測値（cm）	文様・施文等	縄文原体	色調（内/外）	付着物（内/外）	混和材等	時　期	備　考
70	SI136	フク土上	Ⅱ-M	深鉢		口縁部片		口:隆帯加飾、沈線横走。		灰白色/黄橙色	/ス ス	海綿	大木8a?	
130	SI371	フク土	Ⅱ-C1	深鉢・A	突	口縁部～胴部上半1/3	高:（20.4） 口:25.6	口・胴:隆線区画、区画沿いに有節沈線、突起は橋状把手。	LR↓	暗褐色/褐色	/ス ス	砂	大木7b・8a	焼成良。
131	SI371	フク土3	Ⅱ-C1	深鉢・A		口縁部片		口:隆線による楕円区画、区画内有節沈線。		明黄褐色/明黄褐色		砂・角閃石	大木7b・8a	
132	SI371	フク土	Ⅱ-I	深鉢・C		口縁部～底部4/5	口1:23.8 底:10.2 高1:27.6	口:隆帯貼付、コブ状貼付文、横位列点文。 胴:3条の沈線の曲直線。	LR↓	褐色/黄褐色	オコゲ/ス ス	砂礫	大木7b・8a	底部に網代圧痕。
133	SI371	フク土3	Ⅱ-I	深鉢・C		口縁部～底部4/5	口:17.9 底:10.5 高:23.3	口:縦位短沈線、2条の沈線の区画。 胴:2条沈線のクランク状文。	LR↓	暗褐色/橙色	オコゲ/ス ス	海綿・砂礫	大木8a	焼成良、底部に網代圧痕。
134	SI371	フク土	V-C	深鉢・D	波	胴部上半～底部1/3	高1:30.4 底:15.0	口:半隆起線、爪形文、鋸歯状帯文、円形貼付文、縦位沈線。胴:縦位半隆起線ほか。	L↓	赤褐色/赤褐色	オコゲ/ス ス	海綿・礫	前葉3	焼成良、451bと同一個体。
135	SI371	フク土	V-C	深鉢・D	波	口縁部片		口:半隆起線、爪形文、鋸歯状帯文、円形刺突ほか。		赤褐色/赤褐色		海綿・礫	前葉3	焼成良、451aと同一個体。
136	SI371	フク土	Ⅱ-H4	深鉢・F		口縁部～胴部上半片	高:（15.0） 口1:33.0	口:隆帯加飾（区画文）、隆線貼付。	LR↓RL↓	明黄褐色/黄褐色		砂	大木8a	焼成良。
137	SI371	フク土	Ⅱ-F	深鉢・G	突	口縁部～胴部上半3/4	高:（26.3） 口1:27.5	口:S字隆帯区画。 胴:縦位列点文、沈線で4区画、上下に2分、沈線の区画文、波状文など。	LR↓	黄橙色/明黄橙色	オコゲ/ス ス	砂	大木7b新	
138	SI371	フク土	Ⅱ-I	深鉢・G	突	口縁部片		口:隆帯加飾（S字状？）、縦位短沈線、突起下に橋状把手。		黄橙色/黄褐色	オコゲ/ス ス	砂	大木7b・8a過渡期	
139	SI371	フク土	Ⅱ-C2	深鉢・A		口縁部～胴部1/3	高:（17.0） 口:22.3	口頭:2条の沈線横走。	LR↓	黄褐色/黄褐色		海綿	大木7b・8a過渡期	
140	SI371	フク土	Ⅶ-A	浅鉢	波	口縁部～底部1/2	高:8.8 底:6.2 口:22.2	口・胴:縄文LR押圧。	LR→	黒褐色/暗褐色	オコゲ/ス ス			焼成良、波頂部穿孔。
141	SI371	フク土	Ⅶ-A	浅鉢		口縁部～胴部片			LR→	橙色/明褐色		海綿・砂	前葉2	やや厚手の作り。
142	SI371	フク土	Ⅶ-B	器台		体部片	底:24.6	体:円孔を沈線で半円状に巡る。		黒褐色/明褐灰色	/ス ス	砂礫	大木8a	焼成良。
143	SI371	フク土	Ⅶ-C	台付土器		台部1/2	高:（8.3） 底:15.4	無文		暗褐色/明褐色		砂	大木8a	焼成良。
144	SI396炉	底面	Ⅱ-N	深鉢・D？		口縁部片		口:隆線貼付による渦巻文。		褐色/褐色	/ス ス	海綿	大木8a	土器敷炉の土器。
145	SI396炉	底面	Ⅱ-J	深鉢	波	口縁部片		口:隆線貼付、隆線沿いに2条沈線。	LR↓	黄褐色/黄橙色		海綿・砂礫	大木8a	土器敷炉の土器、146と同一個体。
146	SI396炉	底面	Ⅱ-J	深鉢	波	口縁部片		口:隆線貼付、隆線沿いに2条沈線。	LR↓	黄褐色/黄橙色		海綿・砂礫	大木8a	土器敷炉の土器、145と同一個体。
147	SI396炉	底面	V-B	深鉢		胴部片		胴:半隆起線が横走。	LR↓	灰黄褐色/浅黄橙色		砂礫	前葉2～3	土器敷炉の土器、148.149と同一個体。
148	SI396炉	底面	V-B	深鉢		胴部片		胴:3条単位の半隆起線の曲直線。	LR↓	暗褐色/明黄褐色		砂礫	前葉2～3	土器敷炉の土器、147.149と同一個体。
149	SI396炉	底面	V-B	深鉢		胴部下半片	高（9.2）	胴:3条単位の半隆起線の垂下。	LR↓	暗褐色/明黄褐色	オコゲ/	砂礫	前葉2～3	土器敷炉の土器、147.148と同一個体。
150	SI396炉	底面	V-B	深鉢		胴部下半片		胴:粗雑な半隆起線の垂下。	LR↓	明褐色/黄橙色		海綿・砂礫	前葉2～3	焼成良、土器敷炉の土器。
151	SI428	フク土下	V-D	深鉢・D	波	口縁部～底部3/5	口1:21 底:13.0 高1:25.2	口・胴:基隆帯+隆起線、小橋状把手。		明褐色/明灰褐色	オコゲ/	礫	中葉1	王冠型土器。
152	SI428.4区	フク土	Ⅱ-J	深鉢・B		口縁部1/2	高:（8.6） 口:27.5	口:隆帯貼付、隆帯による渦巻状文。	LR↓	黄褐色/黄褐色		礫・石英	大木8a	風化激しい。
153	SI428.P6	フク土	Ⅱ-A	深鉢・D？		口縁部片		口:横走沈線間に交互刺突。	LR↓	橙色/橙色		砂	大木7b	
154	SI428	フク土	Ⅲ	深鉢・F		口縁部片		口:隆線貼付、区画内に矢羽状沈線	RL↓	褐色/褐色	オコゲ/ス ス	海綿・砂	大木8b	
155	SI428.P3	フク土	V-D	深鉢・D	波	口縁部片		口:基隆帯+隆起線、めがね状の貼付文、有節沈線。		黒褐色/橙色		礫	中葉1	焼成良、王冠型土器。
156	SI428.周溝	フク土	Ⅱ-H5	深鉢		口縁部片		口:隆帯加飾、（橋状把手）隆帯上交互刺突及び沈線文。	LR↓→	橙色/橙色		砂	大木7b・8a過渡期	焼成良。
158	SK472	フク土上	Ⅱ-H5	深鉢	突	口縁部片		口:隆帯加飾、渦巻状小突起、隆帯上に沈線。	LR↓	褐色/黄褐色	/ス ス	砂礫	大木8a	
236	SI316	フク土	Ⅱ-O	深鉢		胴部片		胴:隆帯沿いに沈線、区画内に沈線。	LR↓	黄橙色/明黄橙色		砂	大木7b	焼成良。
237	SK322	フク土下	Ⅲ	深鉢・I		口縁部～胴部上半1/3	高:（26.0） 口1:39.2	口:隆沈線の渦巻文、長方形区画、区画内矢羽状沈線。 胴:2～4条単位の沈線の曲直線。	RL↓	黄橙色/褐色	/ス ス	海綿	大木8b	焼成良。
241	SK372	フク土3	Ⅱ-H3	深鉢		口縁部片		口:隆帯加飾、隆帯上に沈線（渦巻文）。	LR↓	褐色/褐色	/ス ス	海綿・礫	大木8a	焼成良、やや厚手の作り。
242	SK374	フク土最下	Ⅱ-E	深鉢・E	突	口縁部～胴部上半1/3	高:（25.6） 口:25.8	口:環状突起、隆帯による楕円区画、区画内2条の沈線巡る。 胴:3条単位の沈線の曲直線。	LR↓	褐色/褐色	/ス ス	海綿・礫	大木7b・8a過渡期	
243	SK374	フク土最下	Ⅱ-H2	深鉢・F？	突	口縁部～胴部片		口:隆帯加飾（S字状文）、隆線貼付、2～4条沈線の曲直線。	LR↓	暗褐色/褐色	オコゲ/ス ス	砂・角閃石	大木8a	焼成良。
244	SK374	フク土	V-A	深鉢・D？		口縁部片		口:半隆起線の区画、区画内縦位細沈線及び刻み目。		黒褐色/褐色	オコゲ/ス ス	礫	前葉3	
245	SK374	フク土	Ⅳ	深鉢・E		口縁部～胴部片		口:無文。 胴:L結節縄文。	RL↓	褐色/暗褐色	オコゲ/ス ス	海綿・礫	大木7b～8a	やや厚手の作り。
246	SK374	フク土	Ⅳ	深鉢		胴部片		胴:3条の沈線が横走。	撚糸R	褐色/黄褐色	オコゲ/ス ス	砂	？	焼成良。
247	SK375	フク土上	Ⅱ-H3	深鉢・F	突	口縁部～胴部上半5/6	高:（11.8） 口:23.8	口:隆帯加飾（渦巻文）、斜めに短沈線。 胴:沈線が横走し、口縁部と胴部を区画。	LR↓	橙色/橙色	オコゲ/ス ス	海綿	大木8a	焼成良。
248	SK375	フク土	Ⅱ-H3	深鉢・I		口縁部～胴部下半2/3	高:（28.0） 口:29.1	口:隆帯加飾、一部渦巻文。 胴:地文のみ。	LR↓	褐色/褐色	オコゲ/ス ス		大木8a	焼成良。

No.	遺構名・出土地点	層位	分類	器種・器形		残存部位・残存率	計測値（cm）	文様・施文等	縄文原体	色調（内/外）	付着物（内/外）	混和材等	時　期	備　考
249	SK375	フク土下	Ⅱ-K	深鉢・I		口縁部～胴部上半1/2	高:（10.1） 口:10.5	口:隆線貼付による渦巻文（刻みあり）、格子目文。 胴:隆線貼付。	LR↓	褐色/黄橙色	オコゲ/ススa		大木8a	
250	SK375	フク土下	Ⅳ	深鉢・H	波	口縁部～底部2/3	高:30.0 口:23.3 底:14.0	口:2条の沈線が横走。 胴:沈線による1対の扁平逆U字文。	L↓	明黄橙色/橙色	オコゲ/ススa	海綿・砂	大木8a	
251	SK375	フク土下	Ⅱ-H2	深鉢・F	突	口縁部片	高:（13.3） 口1:18.3	口:隆帯の加飾、渦巻文、隆帯区画、区画内にクランク状文。	RL→	黄褐色/黄褐色		砂礫	大木8a	焼成良。
252	SK375	フク土下	Ⅱ-H4	深鉢・F?	突	口縁部～胴部上半1/2	高:（10.7） 口:24.3	口:隆帯加飾（横S字）。 胴:2条の沈線の連弧文、隆線貼付。	LR→	黄褐色/褐色	/ススa	海綿	大木8a	焼成良。
253	SK375	フク土下	Ⅳ	深鉢・H		ほぼ完形	口:25.6 底:11.8 高37.6	地文のみ。	撚糸L	黄色褐色/黄褐色	オコゲ/ススa	砂	大木7b～8a	焼成良。
254	SK375	フク土下	Ⅱ-I	深鉢・D	突	口縁部～胴部上半4/5	高:（18.1） 口1:33.3	口:隆帯加飾、円形刺突、2条の沈線区画。区画内3条沈線の曲直線、袋状突起。	LR↓	黄橙色/黄橙色	?/ススa	海綿	大木8a	焼成良、279bと同一個体。
255	SK375	フク土下	Ⅱ-I	深鉢・D		胴部片	高:（9.8）	胴:3条単位沈線のクランク状文。	LR↓	黄橙色/黄橙色	オコゲ/ススa	海綿	大木8a	焼成良、279aと同一個体。
256	SK375	フク土	Ⅱ-G	深鉢	突	突起片		口:口唇に1条の沈線、隆線貼付、突起下に穿孔。		褐色/黄褐色		海綿	大木8a?	焼成良。
257	SK375	フク土下	Ⅱ-H	深鉢・C	突	口縁部～胴部上半1/3	高:（23.0） 口1:32.1	口:隆帯加飾。胴:3条の沈線が横走し区画。	LR↓	橙色/黄橙色	/ススa	砂礫	大木8a	焼成良。
258	SK375	フク土下	Ⅱ-I	深鉢・G		口縁部～胴部上半片	高:（13.5） 口:28.2	口:隆帯による楕円区画文、隆帯上に押捺。	LR↓	褐色/黒褐色	/ススa	砂・海綿	大木8a	
259	SK375	フク土下	Ⅱ-H4	深鉢・F?		口縁部1/2	高:（7.4） 口:27.2	口:隆帯横走、隆線貼付による菱形文。	LR↓	褐色/暗褐色			大木8a	282bと同一個体、焼成良。
260	SK375	フク土下	Ⅱ-H4	深鉢・F?	突	口縁部片		口:隆帯横走、円文、渦巻文、隆線貼付よる菱形文。	LR↓	明黄橙色/黄橙色			大木8a	282aと同一個体、焼成良。
261	SK376	フク土下	Ⅷ-A1	浅鉢	突	口縁部～底部4/5	口1:30.8 底:7.0 高1:14.6	口:縄文LR押圧、隆起線の渦巻文、隆線貼付。 胴:縄文LR押圧。	LR	灰白色/灰白色		砂礫	大木7a・8a過渡期	焼成良、主突起、副突起各4あり。
262	SK376	フク土下	Ⅷ-A1	浅鉢	突	口縁部～底部1/1	高:10.9 口1:21 底:5.4	口:縄文LR押圧、隆起線の渦巻文、隆線貼付。 胴:縄文LR押圧。	RL↓	褐色/暗褐色	オコゲ/ススa		大木7a・8a過渡期	焼成良、主突起、副突起各4あり。
263	SK376	フク土下	Ⅷ-A	浅鉢	突	口縁部～底部7/8	高:10.9 底:6.0 口1:20.6	口:縄文LR押圧、隆起線の渦巻文、隆線貼付。 胴:縄文LR押圧。	LR↓	褐色/褐色			大木7a・8a過渡期	主突起、副突起各4あり。
264	SK376	フク土下	Ⅱ-H1	深鉢・F	突	口縁部～胴部下半1/1	高:（37.7） 口1:28.2	口:隆帯加飾、一部有節沈線あり。 胴:3条単位の沈線のクランク状文。	LR↓	黄褐色/黄褐色	オコゲ/ススa	小礫、石英	大木8a	焼成良。
265	SK376	フク土下	Ⅱ-E	深鉢・C	突	口縁部～胴部上半1/1	高:（22.9） 口1:26.6	口:隆帯による楕円区画文、区画内沈線文、列点文。	RL→	明褐色/明褐色	オコゲ/ススa	礫・石英	大木7b・8a過渡期	
266	SK376	フク土下	Ⅳ-B	深鉢・G	波	口縁部～胴部上半1/3	高:（26.2） 口:23.3	口:波頂部下渦巻状文。	なし	褐色/暗褐色	オコゲ/ススa	海綿	大木7b～8a	焼成良、やや薄手の作り。
267	SK376	フク土下	Ⅱ-I	深鉢・C	突	口縁部胴部上半～底部1/2	高:（14.6） 口:14.8 底:8.2	口:隆帯上に刻み目、コブ状小突起。	L↓	褐色/褐色	/ススa	砂礫・海綿	大木7b	焼成良。
268	SK376	フク土下	Ⅱ-O	深鉢		胴部1/3	高:（24.3）	胴:3条単位の沈線のクランク状文、渦巻文。	L↓	黄褐色/黄褐色	オコゲ/ススa	砂	大木8a	焼成良。
269	SK376	フク土下	Ⅱ-O	深鉢		胴部～底部1/3	高:（26.1） 底:14.0	胴:縦位短沈線、3条の沈線が横走。	L↓	明黄褐色/明黄褐色	オコゲ/ススa	砂・海綿	大木8a	
270	SK376	フク土	Ⅱ-H5	深鉢	突	突起片		口:隆帯加飾。		黄橙色/橙色		砂礫	大木8a	
271	SK376	フク土	Ⅱ-A	深鉢・D?		口縁部片		口:隆線貼付、交互刺突、波状沈線が横走、2条の縦位沈線の区画。	LR↓RL↓	黒褐色/黒褐色	オコゲ/ススa		大木7b	
272	SK376	フク土	Ⅳ-D	深鉢・H?		口縁部片		口:折り返し口縁。	LR↓	灰黄褐色/褐灰色	/ススa	海綿	大木7b	
273	SK378	底面直上	Ⅱ-C2	深鉢・A	突	口縁部～胴部下半1/2	高:（27.9） 口:19.4	口:獣面突起、上下に沈線横走、沈線間に逆U字文。 胴:3条の沈線横走による区画文。	RL↓	暗褐色/褐色	オコゲ/ススa	砂礫	大木7b・8a過渡期	
274	SK378	フク土最下	Ⅳ	深鉢・H		ほぼ完形	口:22.2 底:9.3 高:21.1	口:指頭圧痕状の押捺。	L↓	褐色/黄褐色	オコゲ/ススa	海綿・砂	大木7b～8a	焼成良。
275	SK378	フク土最下	Ⅱ-I5	深鉢・H	突	口縁部～底部1/2	口:15.0 底:9.6 高1:18.7	口:隆帯区画、区画内列点文。	RL→	暗褐色/黄褐色	オコゲ/ススa	海綿	大木8a	底部に網代圧痕。
276	SK378	フク土最下	Ⅱ-C1	深鉢・A	波	口縁部～胴部下半1/4	高:（31.5） 口1:28.0	口:隆線貼付、隆線沿いに有節沈線、波頂部にコブ状の貼付文。 胴:隆線区画、区画内有節沈線。	LR↓	黒褐色/褐色	オコゲ/ススa	砂	大木7b･8a過渡期	焼成良。
277	SK378	フク土直下	Ⅳ	深鉢・E		口縁部～胴部下半1/3	高:23.3 口:24.5	口:指頭圧痕状の押捺。	LR↓	明黄褐色/黄橙色	オコゲ/ススa	海綿・砂	大木7b～8a	
278	SK378	底面直上	Ⅱ-F	深鉢		口縁部片		口:コブ状突起、沈線による曲直線。	?	黄褐色/黄褐色		海綿・砂	大木7b	
279	SK378	フク土	Ⅳ	深鉢・H		口縁部～胴部上半1/4	高:（9.6） 口:13.8		撚糸L	暗褐色/暗褐色	オコゲ/ススa	海綿・砂	大木7b～8a	
280	SK378	底面直上	Ⅳ	深鉢・G	波	口縁部～胴部上半1/3	高:（18.2） 口:23.7	口:隆帯貼付、列点文、波頂部にコブ状の貼付文。 胴:波状沈線が垂下。	R↓	明黄褐色/明黄褐色	/ススa	海綿	大木7a～8a	焼成良。

No.	遺構名・出土地点	層位	分類	器種・器形		残存部位・残存率	計測値（cm）	文様・施文等	縄文原体	色調（内/外）	付着物（内/外）	混和材等	時　期	備　考
281	SK378	底面直上	Ⅱ-C2	深鉢・A	突	口縁部～胴部上半1/6	高:（10.0） 口:16.5	口:突起下に橋状把手、隆線貼付、沈線による曲直線。	LR↓	黒褐色/黒褐色	オコゲ/スス	海綿・砂礫	大木7b・8a過渡期	
282	SK378	フク土最下	Ⅳ	深鉢・B		口縁部～胴部上半片	高:（11.9） 口:23.3	頚:2条の沈線が横走。	LR↓R↓	灰白色/灰黄褐色	/スス	海綿	大木7b～8a	
283	SK378	フク土最下	Ⅳ	深鉢・E	突	口縁部～胴部上半片	高:（17.3） 口1:21.5	口:沈線横走、刻みのある円形状突起を貼付。	LR↓	明黄褐色/灰黄褐色		海綿	大木7b～8a	
284	SK378	底面直上	Ⅱ-C2	深鉢・A		口縁部～胴部上半1/8	高:（23.4） 口:30.5	口:指頭圧痕状の押捺、2～3条の沈線横走。沈線間は無文、以下沈線文。	LR↓	褐色/暗褐色	/スス	海綿・砂礫	大木7b・8a過渡期	
285	SK375	フク土下	Ⅱ-H2	深鉢・F	突	口縁部～胴部上半1/4	高:（47.4） 口1:41.6	口:隆帯加飾が全周。 胴:3条単位の沈線の曲直線。	RL→	橙色/黄橙色	/スス		大木8a	焼成良。
286	SK379	フク土	Ⅱ-A	深鉢・B？		口縁部片		頚:交互刺突文、横位の波状沈線。		橙色/橙色			大木7b	
287	SK379	フク土	Ⅳ-B	深鉢	突	口縁部片		口:横C字状突起。	LR↓	褐色/褐色	/スス	海綿・砂	大木7b～8a	
288	SK380	フク土下	Ⅱ-I	深鉢・G		口縁部～胴部上半1/3	高:（21.8） 口:23.4	口:縦位の縄文L押圧、横走隆帯に押捺、コブ状貼付文。	LR↓	褐色/褐色	オコゲ/スス	海綿・砂礫	大木7b・8a過渡期	焼成良。
289	SK380	フク土3	Ⅱ-I	深鉢・E	突	口縁部～底部2/3	高1:15.7 底:7.0 口:13.5	口:横走隆帯に押捺、短沈線。 胴:横走沈線、列点文、2条単位の沈線の曲直線。	L↓	暗褐色/明褐色	オコゲ/スス	砂礫	大木7b・8a過渡期	
297	SK400	底面直上	Ⅱ-B	深鉢・C		口縁部～胴部上半7/8	高:（21.4） 口:23.5	口:隆帯による楕円区画、区画内沈線巡る。 胴:Y字状隆帯区画、区画内は縦位の沈線文。	LR↓	黄褐色/黄褐色	/スス	砂	大木7b	焼成良。
301	SK404	フク土	V-D	深鉢	突	突起片		突:筒状突起、基隆帯+隆起線。		明褐色/明褐色		小礫	大木8a	焼成良。
302	SK404	フク土	Ⅱ-O	深鉢		胴部片		胴:2～3条単位の沈線区画文。	LR↓	明褐色/橙色		海綿	大木8a	
303	SK412	フク土	Ⅳ	深鉢・G	突	口縁部片		口:突起部下が小コブ状に肥厚。 胴:地文のみ。	LR↓	黒褐色/褐色	オコゲ/スス	砂	大木7b～8a	焼成良。
307	SK430.2区	フク土	Ⅱ-A	深鉢・E？		口縁部片		口:渦巻状の小突起、隆線区画、区画内交互刺突文と沈線文。	RL→	褐色/暗褐色		砂礫	大木7b	
308	SK430	フク土	Ⅱ-B	深鉢・G		口縁部～胴部下半1/3	高:（25.0） 口:21.5	口:2条の沈線横走。 胴:Y字状隆帯区画、区画内に沈線の曲直線。	結束↓	暗褐色/褐色	オコゲ/スス	海綿・砂	大木7b	
309	SK430	フク土	V-D	深鉢・G	突	口縁部～胴部上半1/3	高:（14.4） 口1:30.3	口・胴:基隆帯+隆起線の曲直線。		褐色/明褐色	/スス	砂礫	中葉1	焼成良。
310	SK430	フク土	Ⅱ-A	深鉢	波	口縁部片		口:隆線による三角形状区画、区画内交互刺突文。		橙色/黄褐色		海綿	大木7b	焼成良。
315	SK454	フク土	Ⅱ-O	深鉢		口縁部片		口:隆帯沿いに2条単位の沈線文。	LR↓	明褐色/褐色	/スス		大木8a	焼成良、やや厚手の作り。
316	SK454	フク土	Ⅱ-H3	深鉢・F		口縁部1/3	高:（11.9） 口1:35.6	口:隆帯加飾によるS字文と楕円区画文、隆線貼付。	RL↓	褐色/暗褐色	/スス	砂	大木8a	焼成良、やや厚手の作り。
317	SK454	フク土	Ⅱ-H3	深鉢・G		口縁部1/3	高:（15.0） 口:30.0	口:隆帯加飾による楕円区画文。	LR↓	明黄褐色/明黄褐色		砂礫	大木8a	焼成良、やや厚手の作り。
318	SK454	フク土	Ⅳ	深鉢・G		口縁部片		口:隆帯貼付、波状に押捺。	LR↓	灰白色/灰白色	スス/スス	海綿	大木7b～8a	
319	SK455	フク土	Ⅷ-E	有孔鍔付		胴部片		口:隆帯貼付。		黒褐色/暗赤褐色		砂礫		焼成良、内外面ナデ、やや厚手の作り。
320	SK455	フク土	Ⅷ-A	浅鉢	突	口縁部片		口:隆線区画、区画内に半隆起線文。		灰黄褐色/黄橙色		小礫	前葉3	
321	SK455	フク土	V-B	深鉢	波	口縁部片		口:半隆起線文、爪形状文の刻目文。		黄褐色/黄褐色		砂礫・石英	前葉3	焼成良。
322	SK456	フク土	Ⅱ-I	深鉢・E		口縁部片	高:（7.5） 口1:19.2	口:隆帯貼付、縄文Rの押圧。	LR↓	黄橙色/黄橙色			大木7b・8a過渡期	
323	SK464	フク土	Ⅱ-C1	深鉢・A	波？	口縁部片		口:隆線沿いに有節沈線。	LR↓	黄褐色/褐色			大木7b・8a過渡期	焼成良、324と同一個体。
324	SK464	フク土	Ⅱ-C1	深鉢・A		口縁部片		口:隆線沿いに有節沈線。	LR↓	黄褐色/褐色			大木7b・8a過渡期	焼成良、323と同一個体。
325	SK464	フク土	Ⅱ-H1	深鉢	波	口縁部片		口:隆帯・隆線貼付、鋸歯状文、隆線間に有節沈線。	RL↓	暗褐色/暗褐色	オコゲ/スス		大木7b・8a過渡期	焼成良。
455	SD421	フク土	Ⅱ-M	深鉢	突	口縁部片		口:横C字状突起、突起内有節沈線、隆帯貼付、隆帯上に指頭圧痕状の押捺。		褐色/褐色	/スス	海綿	大木7b・8a過渡期	
456	11D-P9	フク土	V-D	深鉢		胴部片		胴:隆帯貼付、半隆起線文。		黒褐色/灰黄褐色		小礫	前葉3	焼成良。
465	15B-P5	フク土	Ⅲ	深鉢	波	口縁部片		口:肥厚する口唇部に沈線、波頂部で渦巻文。	LR↓	暗褐色/暗褐色	オコゲ/スス		大木8b	
467	20F-P3	フク土	Ⅱ-A	深鉢・E？	波	口縁部片		口:沈線区画、区画内に交互刺突文。		褐色/暗褐色	/スス		大木7b	
468	20F-P7	フク土	V-C	深鉢		胴部下半片		胴:縦位半隆起線文、横位の短沈線。		明褐色/橙色		海綿・礫	前葉3	焼成良。
469	20F-P1	フク土	Ⅱ-G	深鉢	波	口縁部片		口:小波状、沈線区画。	LR↓	褐色/褐色	オコゲ/スス	海綿	大木7b～8a	
470	SX427	フク土	Ⅱ-G	深鉢	突	口縁部片		口:隆帯貼付、刻みのある山形突起。	LR↓	暗褐色/橙色		砂	大木7b新	
471	SX427	フク土	V-B	深鉢・D	波	口縁部～胴部上半1/3	高:（13.9） 口:26.0	口:半隆起線文が横走、波頂部に横長の切れ込み。	LR→	浅黄橙色/灰黄褐色	/スス		前葉2～3	
472	10B18	Ⅱ	Ⅰ-A	深鉢	突	口縁部片		口:細隆線貼付後、細かい爪形文、コブ状突起。		橙色/明黄褐色		砂	大木6新	焼成良。
473	12E12.12E13	Ⅱ・Ⅲ	Ⅰ-B	深鉢・H		口縁部～胴部上半1/2	高:（7.8） 口:14.4	口:口唇部刻目文、横走沈線。 胴:沈線による曲直線。		暗褐色/暗褐色	/スス	砂礫・石英	大木7a	
474	12D18	Ⅲ	Ⅰ-B	深鉢・F		口縁部～胴部片1/3	（高12.0） 口:22.2	口:沈線区画、区画内短沈線。 胴:隆線貼付、隆線上刻目文、縦位・横位の沈線文、三角形状交互刺突。	L	明黄褐色/橙色		砂	大木7b	
475	19E8	Ⅱ	Ⅱ-A	深鉢・D?	突	口縁部片		口:沈線区画、区画内交互刺突文、横S字状小突起。	LR↓	明黄褐色/褐色	/スス	砂	大木7b	
476	19F24	Ⅲ	Ⅱ-A	深鉢・D	突	口縁部～胴部片		口:口唇部刻目文、渦巻状突起、縦位の隆線区画、区画内交互刺突文と沈線文。 胴:沈線による区画文。	LR↓	黒褐色/灰褐色	オコゲ/スス	砂	大木7b	焼成良。

No.	遺構名・出土地点	層位	分類	器種・器形		残存部位・残存率	計測値（cm）	文様・施文等	縄文原体	色調（内/外）	付着物（内/外）	混和材等	時　期	備　考
477	20F19	Ⅱ	Ⅱ-A	深鉢・D？	突	口縁部片		口:口唇部刻目文、交互刺突文、沈線による曲直線、小突起。	L↓	黒褐色/褐色	オコゲ/スス	砂	大木7b	
478	15D10	Ⅲ	Ⅱ-A	深鉢・D?		口縁部片		口:沈線文横走、交互刺突文。	LR↓	黄橙色/橙色		礫	大木7b	焼成良。
479	21F21	Ⅲ	Ⅱ-A	深鉢・D？		口縁部片		口:交互刺突文、沈線文横走、橋状把手。 胴:沈線による区画文。	LR斜↓	黒色/黒色	オコゲ/スス	砂	大木7b	
480	20F8	Ⅲ	Ⅱ-A	深鉢・D？	突	口縁部片		口:橋状把手、把手上渦巻状突起、交互刺突文、沈線文横走。 胴:沈線による曲線文。	LR→	黒褐色/黒褐色	/スス	砂	大木7b	やや薄手の作り。
481	20F14	Ⅲ	Ⅱ-A	深鉢・D？	波	口縁部片		口:隆線貼付、隆線沿いに交互刺突文。	LR↓	暗褐色/暗褐色	/スス	砂	大木7b	焼成良。
482	10B13.17	Ⅱ	Ⅱ-A	深鉢・C		口縁～胴部上半1/6底部片	高:（29.2） 口:26.4 底:15.8	口:橋状把手、隆線による楕円区画文、区画内交互刺突文、C字状沈線区画、区画内交互刺突文。 胴:沈線文横走、交互刺突文。		橙色/橙色	/スス	砂	大木7b	底部に網代圧痕。
483	17C6	Ⅲ	Ⅱ-A	深鉢		口縁部片		口:沈線文密に横走、交互刺突文。	LR↓	橙色/褐灰色	/スス		大木7b	焼成良。
484	20F2.21	Ⅲ	Ⅱ-A	深鉢・H	突	口縁部～胴部上半1/6	高:（11.9） 口:16.1	口:山形突起に刻目、沈線文横走、交互刺突文。 胴:沈線文横走、縦位に結束縄文。	LR→	黒褐色/明黄褐色	オコゲ/スス	砂	大木7b	風倒木からも出土。
485	20E19	表土	Ⅱ-A	深鉢・B		口縁～胴部上半片		頸:交互刺突文、隆帯貼付、指頭圧痕状の押捺。 胴:波状沈線文。		黄橙色/暗赤褐色	/スス	砂礫・石英	大木7b	
486	21D22	Ⅱ	Ⅱ-A	深鉢・B	突	口縁部片		口:突起下に橋状把手、隆線区画、区画内に交互刺突文。渦巻状の突起。		灰白色/灰白色		砂	大木7b	
487	20F11	Ⅲ	Ⅱ-A	深鉢・B		口縁部片		口:交互刺突文。 胴:押捺のある隆線による区画、区画内に沈線巡る。	RL→	灰白色/灰白色		砂	大木7b	焼成良。
488	20F8	Ⅲ	Ⅱ-A	深鉢・B	波	口縁部片		口:隆線・沈線の横走、交互刺突文。	なし	暗褐色/暗褐色		雲母・砂礫	大木7b	やや厚手の作り。
489	20F11	Ⅲ	Ⅱ-A	深鉢・B		口縁部片		口:横走隆帯、隆帯上に指頭圧痕、交互刺突文。		浅黄橙色/橙色	/スス	砂	大木7b	焼成良。
490	19F19	Ⅲ	Ⅱ-B	深鉢	突	口縁部片		口:渦巻状突起、Y字状隆帯区画、区画内横走沈線。	R↓	黒褐色/明褐灰色		砂	大木7b	焼成良。
491	20F12	Ⅱ	Ⅱ-B	深鉢・E?	突	口縁部片		口:S字状突起、隆線貼付、隆線上刺突と上下に押捺。	なし	黄褐色/暗褐色	/スス	砂礫	大木8a	
492	21F10	Ⅰ	Ⅱ-B	深鉢・H	突	口縁部片		口:小突起、Y字状の隆線区画、区画内に沈線の曲直線、刺突文。		橙色/浅黄橙色		海綿・砂	大木7b	焼成良、493と同一個体。
493	20F14	Ⅲ	Ⅱ-B	深鉢・H		口縁部～胴部片		口:沈線区画、区画内刺突文。 胴:沈線の渦巻文。		橙色/橙色		海綿・砂	大木7b	焼成良、492と同一個体。
494	20F8	Ⅲ	Ⅱ-B	深鉢・D		口縁部～胴部上半1/4	高:（12.8） 口:25.8	口:隆線区画、区画内沈線文。 胴:Y字状に隆線区画。	LR↓	褐色/浅黄橙色	/スス	砂	大木7b	
495	12C21	Ⅱ	Ⅱ-B	深鉢		口縁部片		口:口唇部刻み目文、Y字状隆帯貼付。	L↓	明黄褐色/灰黄褐色	/スス	海綿	大木7b	
496	20F4		Ⅱ-C1	深鉢・A	突	口縁部片		口:コブ状小突起、隆線貼付、隆線沿いに2条の有節沈線。	LR↓	黒褐色/暗褐色	オコゲ/スス		大木7b・8a過渡期	
497	18F25	Ⅱ	Ⅱ-D	深鉢	突	口縁部片		口:縄文L押圧、小突起。	LR→	暗褐色/暗褐色	/スス	砂礫	大木7b	
498	20F21	Ⅲ	Ⅱ-D	深鉢・G？	突	口縁部片		口:C字状突起、縦位の隆線区画、区画内横走沈線と列点文・縄文RL押圧。	RL↓	褐色/暗褐色	/スス	砂	大木7b	焼成良。
499	19E23	Ⅱ	Ⅱ-D	深鉢・H	突	口縁部片		口:隆線貼付、縄文LR押圧、隆線沿いに有節沈線。	LR↓	橙色/橙色		砂	大木7b	
500	18F3	Ⅱ	Ⅱ-E	深鉢・G	突	口縁部片		口:横S字状大突起、突起下に橋状把手、交互刺突文、隆線貼付による楕円区画文。	LR↓	浅黄橙色/灰褐色		海綿	大木7b	
501	不明		Ⅱ-E	深鉢・G	突	口縁部片		口:コブ状小突起、隆線貼付による楕円区画文。		黒褐色/暗褐色	オコゲ/スス		大木7b	
502	17G9	Ⅲ	Ⅱ-E	深鉢・B		口縁部～胴部上半1/4	高:4.3 口:9.8	口・胴:隆線による楕円区画文、区画内沈線文。		黒褐色/暗褐色	オコゲ/スス	砂礫	大木7b	焼成良。
503	12C11	Ⅱ	Ⅱ-E	深鉢		口縁部片		口:隆線貼付による楕円区画文、区画内沈線巡る。		褐色/灰褐色	/スス	礫	大木7b	
504	17D12	Ⅱ	Ⅱ-E	深鉢		口縁部片		口:隆線貼付による区画文。		明褐色/暗赤褐色		礫	大木8a	焼成良。
505	20F14.21	Ⅲ	Ⅱ-E	深鉢	突	口縁片1/3	高:（10.3） 口1:28.8	口:突起下橋状把手、隆線による区画、隆線上刻目文。	LR↓	褐色/褐色	/スス	砂礫	大木7b・8a過渡期	
506	18F25	Ⅱ	Ⅱ-F	深鉢・B？		胴部片		胴:隆線貼付、隆線沿いに沈線文、波状沈線文。	LR↓	黒褐色/褐色		砂	大木7b・8a過渡期	焼成良、やや厚手の作り。
507	20F2		Ⅱ-F	深鉢・B	突	口縁部		口:コブ状小突起、隆線貼付、隆線に指頭圧痕状の押捺、沈線区画、区画内に連弧文。	なし	浅黄橙色/灰黄褐色	/スス		大木7b	焼成良、風倒木から出土。
508	19D18		Ⅱ-F	深鉢	突	口縁部片		口:突起下に橋状把手、把手に隆線貼付。沈線・波状沈線横走		明黄褐色/明黄褐色	/スス	砂	大木7b	
509	不明		Ⅱ-G	深鉢	波	口縁部片		口:山形波状口縁、隆線・波状沈線横走。	L↓	暗褐色/明褐色	オコゲ/	雲母・砂	大木7b	焼成良。
510	20F11	Ⅲ	Ⅱ-G	深鉢	突	突起片		突:獣面突起		暗褐色/褐色	オコゲ/スス	砂	大木8a	
511	11B15	Ⅱ	Ⅱ-G	深鉢	波	口縁部片		口:波頂部に円形状の貼付文、波頂部下の両側に三角形状区画文。		浅黄橙色/明黄褐色	/スス	砂	大木7b	
512	12B16	Ⅰ	Ⅱ-G	深鉢	波	口縁部片		口:波頂部より隆線垂下。隆線区画沿いに沈線巡る。		暗褐色/褐色			大木7b・8a過渡期	焼成良。
513	19G1	Ⅱ	Ⅱ-G	深鉢	突	口縁部片		口:内側に隆帯・隆線貼付、口唇部に沈線文。		浅黄橙色/褐色		海綿	大木8a	
514	18F17	Ⅱ	Ⅱ-G	深鉢	突	口縁部片		口:大型皿状突起、突起に刻目・沈線文、橋状把手、逆U字状の隆線貼付。		浅黄橙色/黄橙色		砂	大木7b	
515	11C15	Ⅲ	Ⅱ-G	深鉢	突	口縁部片		口:円形突起、口唇部刻目文、2条単位の沈線文。		橙色/灰白色			大木7b？	
516	20F14	Ⅱ	Ⅱ-G	深鉢・H	波	口縁部片		口:二重円形内コブ状貼付文、半隆起線の曲線文、契状の刺突。		灰黄褐色/浅黄橙色		海綿・砂	大木7b	
517	18E4	Ⅲ	Ⅱ-H1	深鉢・D	突	口縁部～胴部上半1/4	高:（19.6） 口1:43.0	口:隆帯加飾、隆帯上有節沈線や横走沈線文、有節沈線の渦巻文、縦位の短沈線文。	LR↓	黄橙色/明黄橙色	/スス	海綿	大木7b・8a過渡期	
518	20E8		Ⅱ-H2	深鉢・F	突	口縁部片		口:隆帯加飾（S字、渦巻文）、沈線による渦巻文。	RL↓LR↓	橙色/橙色		砂礫	大木8a	焼成良。
519	10C2	Ⅱ	Ⅱ-H2	深鉢・F	波	口縁部片		口:隆帯加飾、口縁沿い2条沈線、3条縦位沈線。	LR↓	橙色/明褐色	/スス	礫	大木8a	底部に網代圧痕あり。
520	19F15	Ⅱ	Ⅱ-H2	深鉢・F	突	口縁部片		口:隆帯加飾、沈線文。	LR↓	黒褐色/明褐色	/スス	海綿・砂	大木8a	焼成良。
521	18D4	Ⅰ	Ⅱ-H2	深鉢		口縁部片		口:隆帯加飾（S字、渦巻文など）。	RL→	橙色/橙色	/スス	礫	大木8a	焼成良。

No.	遺構名・出土地点	層位	分類	器種・器形		残存部位・残存率	計測値（cm）	文様・施文等	縄文原体	色調（内/外）	付着物（内/外）	混和材等	時　期	備　考
522	20F12	Ⅱ	Ⅱ-H5	深鉢	波？	口縁部片		口:隆帯加飾（渦巻文）、横走列点文。		黒褐色/明褐色	オコゲ/	砂・石英	大木8a	
523	20F2		Ⅱ-H5	深鉢	波	口縁部片		口:隆帯加飾（渦巻文）、隆帯横走、隆帯沿いに2条単位の沈線。	LR↓	暗褐色/暗褐色	オコゲ/ススス	砂	大木8a	風倒木から出土。
524	20F12	Ⅱ	Ⅱ-H5	深鉢	突	突起片		口:大型板状突起、隆帯加飾、内面S字文。	LR↓	暗褐色/暗褐色		雲母・石英	大木8a	焼成良。
525	18G4	Ⅰ	Ⅱ-H5	深鉢	突	突起片		口:隆帯加飾の突起。		褐色/褐色		砂	大木8a	焼成良。
526	20F3	Ⅲ	Ⅱ-H5	深鉢・F？		口縁部片		口:隆帯加飾（渦巻文）。		灰白色/明褐色		砂礫	大木8a	
527	12E19	Ⅱ	Ⅱ-H5	深鉢・F	突	口縁部片		口:隆帯加飾		黄橙色/黄橙色		礫	大木8a	焼成良、厚手の作り。
528	17C16	Ⅱ	Ⅱ-H5	深鉢・E	突	突起片		口:隆帯加飾。		褐灰色/褐灰色		海綿・礫	大木8a	
529	19E9	Ⅱ	Ⅱ-H5	深鉢	突	突起片		口:隆帯加飾、隆帯上交互の押捺、内面隆線貼付。	RL→	褐色/褐色	オコゲ/ススス	砂礫・石英	大木8a	焼成良。
530	17E1	Ⅱ	Ⅱ-I	深鉢・D	突	口縁部～胴部上半1/2	高:（8.0） 口1:24.2	口:横走隆帯貼付、縦位短沈線、渦巻状隆線。 胴:沈線横走。	LR↓	明黄褐色/明黄褐色			大木8a	
531	16C16	Ⅱ	Ⅱ-I	深鉢	突	口縁部片		口:隆帯加飾（渦巻文など）、隆線貼付、隆帯上短沈線、3条単位の沈線文。	LR↓	浅黄橙色/橙色	オコゲ/	砂	大木8a	焼成良。
532	17G2		Ⅱ-I	深鉢・F？		口縁部片		口:コブ状突起、隆帯横走、縦位の短沈線、2条の沈線横走。	LR↓	暗褐色/明黄褐色	オコゲ/ススス	砂	大木7b・8a過渡期	
533	18F9	Ⅱ	Ⅱ-I	深鉢・F？	突	口縁部片		口:突起下に橋状把手、隆帯・隆線の貼付、渦巻文、短沈線文。鋸歯状文。		浅黄橙色/暗褐色	オコゲ/ススス		大木8a	
534	20F21	Ⅲ	Ⅱ-I	深鉢・F？		口縁部片		口:隆帯貼付、縦位短沈線、3条単位沈線の曲線文。	L↓	明黄橙色/褐色	/ススス	海綿・砂	大木8a	焼成良。
535	19F20	Ⅲ	Ⅱ-I	深鉢・D		口縁部～胴部上半	高:（17.0） 口:22.5	口:隆帯貼付、横位の刺突、横走沈線区画、区画内連弧文か。	LR↓	褐色/暗褐色	/ススス	海綿・砂礫	大木8a	焼成良。
536	20F13	Ⅲ	Ⅱ-I	深鉢・G	突	口縁部1/5	高:（5.9） 口:27.9	口:隆帯貼付、口唇部細沈線、横走沈線文・列点文横走。	LR↓	褐灰色/浅黄橙色		海綿・砂礫	大木7b	
537	20F3	Ⅲ	Ⅱ-I	深鉢・G	突	口縁部片		口:隆帯貼付、口唇部縦位細沈線、横C字状突起、1孔有。	LR↓	浅黄橙色/灰黄褐色	オコゲ/ススス	海綿	大木8a	
538	9C14・10C16	Ⅱ	Ⅱ-I	深鉢・F		口縁部片～胴部上半片		口:横走隆線区画、区画内矢羽状沈線、沈線・波状沈線横走。	LR↓	浅黄橙色/灰白色		海綿・礫	大木8a	
539	15E17	Ⅰ	Ⅱ-I	深鉢・A		口縁部～胴部上半1/5	高:（21.5） 口:24.2	口:隆線区画、区画内縄文L押圧、横走沈線間に大波状沈線文。	LR↓	黄橙色/暗褐色	/ススス	砂礫	大木7b・8a過渡期	
540	19D25		Ⅱ-I	深鉢		口縁部片		口:横走隆帯貼付、2条の有節沈線、下部の隆帯に刻目文。		黒褐色/褐色	オコゲ/ススス	砂	大木7b・8a過渡期	
541	21E3		Ⅱ-J	深鉢	突	口縁部片		口:小突起、隆帯貼付、口唇部に沈線、2条の沈線区画。	LR↓	黄橙色/橙色		海綿・礫	大木8a	
542	20F17	Ⅲ	Ⅱ-J	深鉢		口縁部片		口:隆帯貼付、隆帯上に指頭圧痕状の押捺・横長刺突、横走沈線文、口唇部刻目。	LR↓	褐色/黒褐色	/ススス		大木8a	
543	不明		Ⅱ-L	深鉢		口縁部片		口:横走沈線、3条単位の列点文。	なし	黒褐色/黒褐色	/ススス		大木8a	
544	13F6.7.11.12	Ⅱ	Ⅱ-L	深鉢・F	波	口縁部～胴部下半1/3	高:（19.5） 口:22.6	口:波頂部にコブ状貼付文、4条単位の有節沈線文。 胴:隆線による縦位区画、1～3条の有節沈線文。	L↓	橙色/橙色		砂	阿玉台Ⅱ	
545	20F2		Ⅱ-N	深鉢・B		口縁部～胴部片		口:無文帯。 胴:隆線区画、区画内隆線の曲線文。	LR↓	明黄褐色/黄橙色		砂	大木8a	風倒木から出土。
546	12E7	Ⅱ	Ⅲ	深鉢・F		口縁部～胴部上半3/4	高:（6.5） 口:13.7	口:隆沈線の区画文、渦巻文。 頸:無文帯。 胴:沈線区画。	LR↓	黒褐色/褐色	オコゲ/ススス	海綿・礫	大木8b	
547	18B25	Ⅰ	Ⅲ	深鉢・F	波	口縁部片		口:横走隆沈線。	L↓	黒褐色/灰黄褐色	オコゲ/ススス		大木8b	焼成良。
548	20F25		Ⅲ	深鉢・F		口縁部片		口:横走隆沈線区画、区画内矢羽状沈線。		暗褐色/灰褐色	オコゲ/ススス	海綿・礫	大木8b	
549	10B21	Ⅰ	Ⅲ	深鉢・H	突	口縁部片		口:口唇部に隆帯貼付、口唇部に沈線文、小突起。	L↓	灰白色/浅黄橙色	/ススス	海綿	大木8b	
550	12E16	Ⅱ	Ⅲ	深鉢・H	突	口縁部片		口:口唇部に隆線貼付、口唇部に沈線文。突起下より隆線垂下、隆線上に円形刺突。		褐色/橙色			大木8b	
551	10C20	Ⅱ	Ⅲ	深鉢・G	波	口縁部～胴部上半1/4	高:（9.1） 口:16.0	口・胴:横走隆沈線間に隆沈線の渦巻文。	LR→	暗褐色/褐色	/ススス		大木8b	
552	11C1	Ⅰ	Ⅲ	深鉢・H？		口縁部片		口:横走沈線下に渦巻状の沈線文。	LR↓	黒褐色/明黄褐色	オコゲ/ススス		大木8b	
553	12D20・12E7	Ⅱ	Ⅳ	深鉢・H		口縁部1/4	高:（7.5） 口:30.6	口:横走沈線、連弧文。	L↓	暗褐色/灰黄褐色	オコゲ/	海綿	大木7b～8a	
554	14D		Ⅳ	深鉢・G？	突	口縁部片		口:コブ状突起に刺突文。	RL→	暗褐色/明赤褐色	オコゲ/ススス		大木7b～8a	
555	16C16	Ⅱ	Ⅳ	深鉢・H	波	口縁部片		口:波頂部に円形貼付文。	LR↓	暗褐色/暗褐色	オコゲ/ススス	海綿	大木7b～8a	
556	19G4	Ⅰ	Ⅳ	深鉢・H		口縁部片		口:円形貼付文、横走隆線、隆線上に指頭圧痕状の押捺。	RL↓	黄褐色/黒褐色	/ススス	海綿・砂礫	大木7b～8a	
557	不明		Ⅳ	深鉢・B	突	口縁部片		口:半円状小突起下に橋状把手。 胴:剥落するが隆線垂下。	LR↓	暗褐色/黒褐色	オコゲ/ススス	砂	大木7b～8a	
558	18F7	Ⅱ・Ⅲ	Ⅳ	深鉢・G		口縁部片1/6	高:（4.3） 口:14.5	口:折り返し口縁。 胴:縦位に沈線・波状沈線・結束縄文。	RL→	暗褐色/灰黄褐色	オコゲ/ススス	海綿・砂	大木7b	
559	16E12	Ⅰ	Ⅳ	深鉢・H		口縁部片		口:折り返し口縁、縄文L押圧（鋸歯状）。	LR↓	明黄褐色/明黄褐色		海綿・砂	大木7b	
560	18F25	Ⅱ	Ⅳ	深鉢・H	波	口縁部片		口:口唇部に沈線、波頂部には押奈。	LR↓	橙色/橙色			大木8b	
561	9C8.10.14	Ⅱ	Ⅳ	深鉢・D	波	口縁～底部1/2	口:16.7 底:9.3 高:15.7	地文のみ	L↓	暗褐色/橙色	オコゲ/ススス	海綿・砂	大木7b～8a	底部に網代圧痕あり。
562	10D4・11C22	Ⅱ・Ⅰ	Ⅳ	深鉢・H		口縁部～胴部上半1/4	高:（17.8） 口:24.0	口:LR→	LR↓	明黄褐色/橙色			大木7b～8a	焼成良。
563	10B18	Ⅰ	Ⅳ	深鉢		口縁部片		胴:Rの結束縄文。	RL↓	黒褐色/明褐色		海綿・礫	大木7b～8b	

No.	遺構名・出土地点	層位	分類	器種・器形		残存部位・残存率	計測値（cm）	文様・施文等	縄文原体	色調（内/外）	付着物（内/外）	混和材等	時　期	備　考
564	9C3・12E6	Ⅱ	V-A	深鉢・H		口縁部片		口:半隆起線文、連華文。 胴:木目状撚糸文。	木目撚糸	灰白色/褐灰色			前葉3	
565	20F12.18	Ⅱ	V-A	深鉢・D	波	口縁片3/5	高:（8.3） 口:19.0	口:半隆起線文、爪形文、連華文、波頂部下に渦巻文。		灰黄褐色/灰黄褐色	オコゲ/ススi		前葉2	
566	19F25	Ⅲ	V一B	深鉢・D		口縁部片		口:半隆起線文、爪形文、コブ状突起。		黒褐色/黒褐色	オコゲ/ススi		前葉2～3	
567	20F3	Ⅱ	V-B	深鉢・D？	波	口縁部片		口:半隆起線文、爪形文、円形刺突文。		橙色/黄橙色	オコゲ/		前葉3	
568	17F25	Ⅱ	V-B	深鉢		口縁部片		口:半隆起線文、爪形文、コブ状突起。		橙色/橙色	オコゲ/	礫・石英	前葉2～3	
569	20F4	Ⅱ	V-B	深鉢・D？	波	口縁部片		口:半隆起線、爪形文、円形刺突。		黒褐色/明褐色	オコゲ/ススi	砂礫	前葉3	
570	18F19	Ⅲ	V-B	深鉢・D	波	口縁部片		口:半隆起線文、爪形文。	RL→	赤褐色/灰褐色	/ススi	雲母	前葉3	焼成良。
571	18F19	Ⅲ	V-B	深鉢・D		口縁部片		口:半隆起線文、爪形文。	RL→	赤褐色/灰褐色	/ススi	雲母	前葉3	焼成良。
572	20E12	Ⅱ	V-B	深鉢・D	波	口縁部片		口:横位・縦位の半隆起線文。	LR↓	浅黄橙色/褐灰色		海綿・礫	前葉3	
573	不明		V-B	深鉢	波	口縁部片		口:半隆起線文、爪形文。	LR↓	褐色/黄褐色	オコゲ/ススi		前葉3	
574	20F21	Ⅲ	V-B	深鉢・H	波	口縁部片		口:半隆起線文、爪形文、波頂部より隆線垂下、隆線上に矢羽状沈線。		黒褐色/橙色	オコゲ/		前葉3	
575	18E14	Ⅲ	V-B	深鉢・H	波	口縁部1/5	高:（7.0） 口:14.6	口:隆線貼付、隆線上爪形文。 胴:半隆起線文区画、区画内爪形文。	L↓	明黄褐色/明黄褐色	/ススi	海綿・砂礫	前葉3	
576	20E11	Ⅱ	V-C	深鉢		頸部～		頸～胴:半隆起線文、無文帯上下に刻目、横位短沈線、コブ状突起。		橙色/橙色			前葉3	焼成良。
577	20E4		V-C	深鉢		胴部下半～底部1/1	高:（2.6） 底:4.2	胴:半隆起線文垂下、区画内横位短沈線。		赤褐色/明赤褐色			前葉3	焼成良。
578	19E23・19F7	Ⅰ	V-C	深鉢		胴下半1/3	高:（16.0）	胴:半隆起線文垂下、区画内横位短沈線、鋸歯状文。		赤褐色/赤褐色	/ススi	礫・雲母・石英	前葉3	焼成良。
579	19G2		V-C	深鉢・D	波	口縁部～胴部上半1/3	高（16.0） 口:24.9	口:隆起線による曲直線、玉抱き三叉文、円形刺突。 胴:隆起線文。		明赤褐色/明赤褐色		海綿・礫	前葉3	焼成良。
580	17E9	Ⅱ・Ⅲ	V-D	深鉢・D	波	口縁部～胴部1/3、、底部片	高:（23.3） 底:14.0	口:基隆帯十隆起線（連弧文など）、めがね状貼付文。 胴:基隆帯十隆起線、横位短沈線。		黒褐色/橙色	オコゲ/	礫	中葉1	焼成良。
581	21F18	Ⅲ	V-D	深鉢・F	波	口縁部～胴部上半1/2	高:（21.4） 口1:27.8	口:隆帯加飾、基隆帯十隆起線。 胴:基隆帯十隆起線、コブ状貼付文。		黒褐色/灰黄褐色	/ススi	海綿・礫	中葉1～2	
582	20F21		V-D	深鉢		口縁部片		口:隆帯貼付、口唇部鋸歯状文。		褐色/暗褐色	/ススi	砂礫	中葉1	風倒木から出土。
583	20F19	Ⅲ	V-D		波	口縁部片		口:隆帯加飾、基隆帯十隆起線。		橙色/浅黄橙色		礫・石英	中葉1	
584	16E12	Ⅰ	V-D	深鉢		胴部片		胴:基隆帯十隆起線の渦巻文。		黒褐色/褐色			中葉1	焼成良。
585	21F20	Ⅰ	V-D	深鉢	突	突起片		突:袋状突起、基隆帯十隆起線。		灰褐色/褐色		海綿・礫	中葉1	焼成良。
586	18E20	Ⅱ	Ⅵ-A	深鉢・G？		口縁部～胴部片		口:区画文内に一列角押文。 胴:区画文内に一列角押文・襞状文。		赤褐色/暗赤褐色	/ススi	雲母・礫・石英	阿玉台Ⅰb	焼成良。
587	19F2	Ⅰ	Ⅵ-B	深鉢・D	波	口縁部～胴部上半1/4	高:（17.7）	口:隆線による区画、隆帯上刻み、区画内に角押文。 胴:楕円区画文、区画内2列の角押文。		黒褐色/黒褐色		雲母	阿玉台Ⅱ	焼成良。
588	18E13.18.19	Ⅱ	Ⅵ-A	深鉢・G		口縁部～胴部上半1/2	高:（4.02） 口:38.0	口:折り返し口縁、橋状把手、輪積痕。 胴:Y字状隆線、壁状の輪積痕。		橙色/明赤褐色	オコゲ/ススi	砂礫	阿玉台1b	やや厚手の作り。
589	20F5	Ⅰ	Ⅵ-A	深鉢	突	口縁部片		口:山形板状大突起、刻目文、1列の有節沈線。		褐色/暗褐色		雲母・砂礫	阿玉台Ⅰb	焼成良。
590	18F11	Ⅱ	Ⅶ-A	深鉢		胴部片		胴:隆帯貼付（渦巻文）、隆帯沿いに有節沈線文。		明褐色/明褐色		砂	勝坂系	焼成良。
591	20F4	Ⅲ	Ⅶ-B	深鉢・F		口縁部片		口:口唇部に細隆線鋸歯状貼付、細隆線上に細刻目、沈線による区画文。横走列点文。		黒褐色/灰黄褐色	オコゲ/ススi		円筒上層C	薄手の作り。
592	19G2		Ⅷ-A	浅鉢		口縁部片		口:横位沈線文、沈線間に横長刺突。		浅黄橙色/褐色	/ススi	雲母	前葉3	焼成良。
593	18F13	Ⅱ	Ⅷ-A	浅鉢		口縁部片		口:半隆起線文、爪形文、蓮華文。	RL→	灰白色/浅黄橙色		礫	前葉3	焼成良。
594	20F13	Ⅲ	Ⅷ-A	浅鉢	突	口縁部片		口:半隆起線文で区画、区画内沈線の曲直線。		橙色/橙色			前葉3	焼成良。
595	不明		Ⅷ-A	浅鉢		口縁部片		口:横走半隆起線文。		黒褐色/黒褐色			中葉1～2	
596	18F24	Ⅱ	Ⅷ-A	浅鉢	波	口縁部片		口:小波状、ナデ。	なし	暗褐色/褐色	/ススi	砂	阿玉台系	焼成良、赤彩。
597	20F18.19	Ⅱ・Ⅲ	Ⅷ-A	浅鉢	突	口縁部～胴部上半1/3	口:46.3 底:8.2 高:15.5	口:口唇部沈線。		灰黄褐色/灰黄褐色		砂礫	前葉2	全面赤彩。
598	15C4	Ⅲ	Ⅷ-C	台付土器		台部1/1	高:（3.7） 底:6.8	4か所に円孔、隆帯貼付。		赤褐色/赤褐色		砂礫	大木8a	焼成良。
599	10D10	Ⅱ	Ⅷ-D	小型鉢	突	口縁部～底部1/4	口1:8.8 底:5.9 高:5.0	口:小突起、口唇部に沈線、2か所に抉れ。 胴:沈線による渦巻文。		黒褐色/黒褐色	オコゲ/ススi		大木8b	

土器観察表2（中期後葉～後期中葉）

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
1	SI26	フク土	XIII		注口土器		平？	口縁部～胴部			にぶい黄橙/にぶい黄橙	砂			
2	SI26	フク土	XI	6	浅鉢			胴部片			浅黄橙/浅黄橙	密		三十稲場	
3	SI31	フク土	XIV？		不			胴部片	RL		黒褐/黒褐	小礫	オコゲ/ススI	加曽利B？	
4	SI31	フク土	IX	5	不明			胴部片	撚糸L		灰褐/浅黄橙	小礫	/ススI		
5	SI31	フク土	XIII		ミニチュア			底部4/5		高：(1.1) 底:3.4	黒褐/にぶい黄橙	砂			
6	SI47　炉体土器		IX	4③	深鉢	A1	平	胴部～底部1/3	撚糸R	高：(34.5)	黄橙/橙	白色粒子			
7	SI47	フク土下	XIII	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部	L↓	高：(26.8) 口：(33.0)	浅黄橙/灰黄褐	小礫			
8	SI47　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部1/3	撚糸L	高：(14.4) 底:14.2	浅黄橙/黄橙	白色粒子			底部に筵状圧痕
9	SI48　炉体土器		IX	4②？	深鉢			胴部片2/5	LR（磨消）	高：(19.6)	にぶい黄橙/にぶい黄橙	白色粒子・石英	/ススI		
10	SI48	フク土	XIII	2	深鉢	A6	平	口縁部～胴部1/2		高：(35.0) 口:32.6	にぶい黄橙/浅黄橙	砂	オコゲ/ススI		
11	SI48	フク土	XIII	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部3/4	撚糸L	高：(32.8) 口:22.6	にぶい黄橙/灰黄褐	砂	/ススI		
12	SI49　炉体土器		XIII	1	深鉢	A2	平	口縁部～底部9/10	撚糸L	高:14.3 口:16.2 底:9.5	浅黄橙/黄橙	白色粒子			底部に筵状圧痕
13	SI49　炉	フク土	XIII	1	不明			胴部片	撚糸R		浅黄橙/黄橙	砂			
14	SI49　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部3/5	撚糸R	高：(10.9) 底:9.8	黄橙/橙	角閃石			底部に筵状圧痕
15	SI49　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部2/5	撚糸R	高：(7.7) 底:13.0	黄橙/浅黄橙				
16	SI50　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部1/4	LR↓	高：(9.7) 底:9.3	にぶい黄橙/黄橙	砂			
17	SI50　炉体土器		X		深鉢			胴部～底部2/3	LR（磨消）	高：(16.1) 底:8.5	にぶい黄橙/にぶい黄橙			加曽利E	
18	SI51　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部5/9	LR↓	高：(8.0) 底:16.0	黄橙/黄橙	白色粒子			底部に筵状圧痕
19	SI52　炉		IX	4、5	不明			口縁部片	撚糸L		浅黄橙/にぶい黄橙			大木10	
20	SI53　炉体土器		IX	4⑤	深鉢	B1	平	口縁部～底部9/10	L（磨消）	高:43.4 口:29.2 底:9.3	浅黄橙/橙	角閃石・白色粒子	オコゲ/ススI		
21	SI54　炉周辺		XIII	1	深鉢			胴部片2/3	LR↓	高:23.0	黄橙/褐灰				
22	SI54　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部4/9	LR↓	高:14.5	浅黄橙/黄橙	角閃石	/ススI		
23	SI54　炉周辺		IX	4②？	深鉢			胴部～底部5/9	LR（磨消）	高：(10.6) 底:7.2	にぶい黄橙/橙				
24	SI55　炉体土器		XIII	1	深鉢			底部3/4	撚糸r？	高：(5.4) 底:12.0	浅黄橙/浅黄橙	角閃石			
25	SI56　炉周辺		XIII	1	深鉢			胴部片7/12	撚糸R	高：(12.7)	黄橙/黄橙	白色粒子			
26	SI56　炉体土器		XIII	2	不明			胴部片1/5			橙/橙				
27	SI56　炉周辺		XIII	2	深鉢			胴部～底部5/9		高：(9.2) 底:9.3	浅黄橙/黄橙	白色粒子			
28	SI56　炉周辺		XIII	1	深鉢			胴部～底部3/5	撚糸R	高：(9.4) 底:12.6	浅黄橙/黄橙	白色粒子			
29	SI56　炉周辺		XIII	1	深鉢			胴部～底部1/7	撚糸L	高：(8.0) 底:12.4	灰白/にぶい黄橙				底部に筵状圧痕
30	SI58　炉体土器		IX	5②	深鉢			胴部片5/6	RL（磨消）	高：(18.8)	黄橙/橙	白色粒子	/ススI	大木10	
31	SI58　炉西側外埋設土器		XIII	1	深鉢			胴部片3/4	LR↓	高：(9.1)	灰褐/橙		/ススI		
32	SI59　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部3/10	LR↓	高：(6.2) 底:8.9	にぶい黄橙/橙	白色粒子			
33	SI60　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部3/5	撚糸R	高：(9.5) 底:12.8	浅黄橙/黄橙	白色粒子			
34	SI61　炉体土器		XIII	1				胴部～底部2/5	撚糸LR	高：(6.1) 底:13.6	浅黄橙/黄橙	白色粒子			
35	SI62　炉体土器		XIII	1				胴部～底部3/5	LR↓	高：(20.5) 底:9.7	にぶい黄橙/黄橙	砂			
36	SI62　炉体土器		XIII	1				口縁部～胴部	LR		橙/黒褐	砂	/ススI		37と同一個体
37	SI62　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部	LR	高：(29.9) 口：(23.4)	橙/黒褐	砂	/ススI		36と同一個体

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
38	SI72　炉体土器		XIII	1				胴部～底部3/8	撚糸R	高:（14.0） 底:14.6	浅黄橙/黄橙				
39	SI73　炉体土器		XIII	1				胴部～底部3/8	撚糸L	高:（6.9） 底:10.0	明黄橙/黄橙	白色粒子			
40	SI74　炉体土器		XIII	1	深鉢	A1	平	口縁部～胴部2/3	LR↓	高:（36.5） 口:33.0	黄橙/橙	白色粒子	/ススス		
41	SI76　炉体土器		XIII	1				胴部片1/4	LR↓	高:（15.5）	灰黄褐/灰黄褐	海綿・白色粒子			
42	SI76　炉体土器		XIII	2	深鉢			胴部～底部4/9		高:（16.7） 底:14.9	にぶい黄橙/灰黄褐	白色粒子			底部に笹状圧痕
43	SI78	フク土No2.3	IX	4⑤	深鉢		平	口縁部～胴部	LR（磨消）		浅黄橙/灰黄褐	海綿			
44	SI78	フク土No1	IX	5	不明		波	口縁部片1/3	RL（磨消）		黒/黒褐			大木10	
45	SI78	フク土No8	IX	4	深鉢	A3	突	口縁部～胴部1/4	LR→・LR（磨消）	高:（12.6） 口:（14.0）	黄橙/橙	石英		大木10	
46	SI78	フク土No8	IX	4	深鉢	A7	平	口縁部～胴部	RL（磨消）	高:13.0 口:（14.8）	褐灰/灰黄褐	砂	オコゲ/ススス	大木10	
47	SI78	フク土No1	XIII	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/3	LR↓	高:（25.8） 口:（28.8）	にぶい黄橙/浅黄橙		/ススス		
48	SI78	フク土No6	XIII	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/5	LR↓	高:（41.7） 口:（28.8）	灰黄褐/にぶい黄橙	白色粒子	/ススス		
49	SI78	フク土No8.9	IX	6	深鉢	A5	平	口縁部～底部1/1	L↓	高:（38.0） 口:（17.5） 底:（10.8）	浅黄橙/にぶい黄橙	砂	オコゲ/ススス	大木10	
50	SI78	フク土No3	XIII	1	深鉢	A1	平	口縁部～胴部1/2	LR↓	高:（33.2） 口:（31.0）	褐灰/にぶい黄橙		/ススス		
51	SI78	フク土No8	XIII	1	深鉢	A1	平	口縁部～胴部1/2	LR↓	高:（19.6） 口:（28.2）	黒褐/灰褐		/ススス		
52	SI78	フク土No1	XIII	1	鉢	A5	平	口縁部～胴部4/5	LR→	高:（8.7） 口:（17.6）	浅黄橙/黄橙	白色粒子	オコゲ/ススス		
53	SI78　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部片4/5	LR↓	高:（27.4）	褐灰/にぶい黄橙	白色粒子	/ススス		
54	SI103　下部炉体土器		XIII	1	深鉢	A3	平	口縁部～底部1/4	撚糸L	高:（26.0） 口:（13.6） 底:11.8	黄橙/明黄橙	海綿	/ススス		
55	SI103　上部炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部9/10	撚糸L	高:（23.4） 底:13.8	黄橙/黄橙	白色粒子			底部に笹状圧痕
56	SI103　上部炉体土器		IX	5	壺形土器？				LR（磨消）	高:（12.5）	浅黄橙/浅黄橙			大木10	
57	SI103　下部炉体土器		XIII	1				胴部～底部4/7	撚糸R	高:（10.4） 底:13.2	灰黄褐/にぶい黄橙	小礫			
58	SI122	フク土	IX	4⑤	深鉢	A8	平	口縁部～胴部5/7	LR（磨消）	高:58.2 口:31.7	橙/灰黄褐	海綿	/ススス		
59	SI122	フク土	IX	4⑤	深鉢	A6？	平	口縁部片2/5	LR（磨消）	高:17.2 口:31.2	浅黄橙/褐灰	砂		大木10	
60	SX121	フク土	XIII	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/4	RL↓→	高:（21.0） 口:（34.4）	にぶい黄橙/黒褐	白色粒子	/ススス・オコゲ		
61	SI122	フク土	IX	4⑤	深鉢	A6	平	口縁部片3/4	LR→・LR（磨消）	高:（25.5） 口:（36.0）	にぶい黄橙/浅黄橙				
62	SI122	フク土	IX	6			平	口縁部片	L		灰黄褐/灰黄褐	角閃石・海綿	/ススス	大木10	
63	SI122	フク土	XIII	1	深鉢	A2	平	口縁部～胴部1/3	RL→	高:（13.6） 口:（11.4）	浅黄橙/黒褐	海綿・砂	/ススス		
64	SI122	フク土	XIII		深鉢	A6	平	口縁部～底部3/4		高:27.8 口:22.7 底:11.0	浅黄橙/灰黄褐	砂	/ススス		
65	SI122	フク土	XIII	1	深鉢	A5	平	口縁部～胴部3/5	L→↓	高:（31.3） 口:30.0	橙/橙	海綿			
66	SI122　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部1/1	RL	高:（31.4）	灰黄褐/橙	砂	オコゲ/		底部に網代圧痕
67	SI129	フク土	IX	6	深鉢	A3	平	口縁部～底部4/5	LR→	高:24.7 口:26.2 底:9.0	にぶい黄橙/橙	海綿	/ススス	大木10	
68	SI129　炉体土器		XIII	1	深鉢	A1		口縁部～胴部4/5	LR↓	高:（28.4） 口:25.7	にぶい黄橙/にぶい黄橙	白色粒子			
69	SI130　炉体土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部1/2	LR↓	高:27.5 底:12.0	浅黄橙/黄橙	白色粒子			
71	SI136	フク土上	IX	5	深鉢			胴部～底部1/3	LR（磨消）	高:（24.2） 底:8.6	灰黄褐/橙		オコゲ/ススス	大木10	
72	SI136　炉体土器		IX	4④	深鉢	A6?		胴部～底部4/5	LR（磨消）	高:（25.8） 底:13.8	浅黄橙/橙		/ススス		

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
73	SI138　炉体土器		Ⅸ	5②	深鉢			胴部～底部4/5	LR（磨消）	高:（18.7）	灰黄褐/にぶい黄橙		/ススo	大木10	
74	SI138　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部4/7	撚糸R	高:（34.5） 底:10.4	にぶい黄橙/橙	小礫	/ススo		
75	SI139　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/2	撚糸L	高:11.1 底:15.0	浅黄橙/浅黄橙				底部に笹状圧痕
76	SI175　炉体土器		Ⅸ	4	深鉢	B1？		胴部～底部5/6	LR（磨消）	高:（15.6） 底:5.0	にぶい黄橙/にぶい黄橙				
77	SI175　炉体土器		Ⅸ	4⑤	深鉢			胴部片5/6	LR（磨消）	高:（15.5）	にぶい黄橙/にぶい黄橙				
78	SI190　炉2　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢		平	口縁部片1/4	LR→↓	高:（17.0） 口:（29.0）	浅黄橙/黄橙	細かい角閃石			
79	SI190　炉2　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/3	LR↓	高:（23.5） 底:13.6	浅黄橙/橙	白色粒子			
80	SI190	フク土	Ⅸ		注口土器		平	口縁部片3/8	LR（磨消）	高:（9.1） 口:24.8	黒褐/黒褐	角閃石・石英	/ススo		
81	SI190　炉2　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部片1/3	撚糸r	高:（13.5）	にぶい黄橙/黄橙				
82	SI190	フク土　2層	Ⅸ	4⑤	深鉢	A6	平	口縁部～胴部1/2	LR（磨消）	高:（28.0） 口:33.6	にぶい黄橙/浅黄橙	白色粒子	オコゲ/ススo		
83	SI190　炉1　炉体土器		ⅩⅢ	1	不明			底部4/7	撚糸L	高:（5.9） 底:11.8	にぶい黄橙/黄橙				底部に網代圧痕？
84	SI190　炉1　炉体土器		ⅩⅢ	1	不明			底部4/7	撚糸L	高:（5.0） 底:13.5	浅黄橙/黄橙				
85	SI190　炉	フク土	Ⅸ	1	深鉢	B1	平	口縁部片1/6	RL		浅黄橙/浅黄橙			大木9	
86	SI191　炉	フク土	Ⅸ	4④	鉢	A5	平	口縁部～胴部1/3	LR（磨消）	高:（18.7） 口:（26.0）	灰黄褐/にぶい黄橙	角閃石・赤色粒子	/ススo		
87	SI191　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢	A1	平	口縁部～胴部3/5	LR↓	高:（25．8） 口:22.2	灰黄褐/にぶい黄橙	白色粒子	/ススo		
88	SI192　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部片3/4	LR↓	高:（26.7）	にぶい黄橙/黄橙	白色粒子	/ススo		
89	SI193　炉体土器		Ⅸ	4			平	口縁部片	RL（磨消）		にぶい黄橙/黄橙	海綿		大木10	
90	SI201　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/2	LR↓	高:（19.0） 底:9.4	褐灰/橙	白色粒子			底部に笹状圧痕
91	SI202　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢			底部4/7	撚糸L	高:（5.2） 底:10.6	にぶい黄橙/橙	石英			
92	SI206　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/3	撚糸L	高:（42.0） 底:15.6	浅黄橙/橙	白色粒子・角閃石・石英			
93	SI208　P5	フク土	Ⅸ	5				胴部片	LR（磨消）		灰黄褐/灰黄褐	角閃石		大木10	
94	SI208　P1	フク土	ⅩⅠ	②				胴部片			にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石		三十稲場	
95	SI209　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/1	LR↓	高:（27.2） 底:10.2	橙/明黄橙	白色粒子	オコゲ/		
96	SI209	フク土	Ⅸ	6	深鉢	A1	平	口縁部～胴部1/3	LR→	高:（34.2） 口:（37.4）	にぶい黄橙/灰白		/ススo	大木10	
97	SI210　炉体土器		Ⅸ	4	深鉢			胴部～底部7/9	LR（磨消）	高:（20.7） 底:8.0	灰黄褐/にぶい黄橙	雲母	/ススo	大木10	
98	SI228	フク土	ⅩⅣ	2	深鉢	A4	波	口縁部～底部1/2	LR（磨消）	高:36.2 口:35.3 底:11.3	灰黄褐/褐灰	海綿	/ススo	加曽利B	
99	SI228	フク土	ⅩⅣ		注口土器		波？	口縁部～胴部4/5	LR（磨消）	高:（25.5） 口:18.8	にぶい黄橙/褐灰	海綿		加曽利B	
100	SI228　覆土　下層	フク土下	ⅩⅢ	1	深鉢	A2	平	口縁部片2/5	LR↓	高:39.8 口:30.3 底:11.0	にぶい黄橙/浅黄橙		/ススo		
101	SI228　炉埋設土器		ⅩⅣ	1	深鉢			胴部～底部5/6		高:（11.7）	黄橙/灰黄褐	海綿	/オコゲ	加曽利B	
102	SI228	床面直上	ⅩⅣ	2②	鉢	A3	平	口縁部～底部ほぼ完形	L（磨消）	高:6.3 口:4.8 底:1.75	黒褐/黒	石英		加曽利B	
103	SI229　炉体土器		ⅩⅢ	1	鉢	A2	平	口縁部～胴部4/9	L↓	高:14.0 口:（21.8） 底:9.0	浅黄橙/黄橙	白色粒子			
104	SI230　炉体土器		Ⅸ	5②	深鉢	A8	平	口縁部～底部3/7	LR（磨消）	高:（38.3） 口:28.9	浅黄橙/にぶい黄橙	角閃石		大木10	
105	SI230	フク土	Ⅸ	5②	深鉢			胴部片1/2	RLR（磨消）	高:（14.6）	明黄橙/橙	砂	/ススo	大木10	
106	SI238　炉体土器		Ⅸ	4	深鉢	A6?		胴部片1/4	LR（磨消）	高:（12.7）	赤褐/赤橙	砂	オコゲ/ススo		
107	SI239　炉体土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部片3/4	L↓	高:（14.6）	灰黄褐/にぶい黄橙	海綿			

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
108	SI239　炉	フク土	XⅢ	1	深鉢			胴部～底部4/5	LR↓	高:（20.1） 底:6.1	橙/灰黄褐	白色粒子	/ススス		
109	SI239　炉体土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部5/7	LR↓	高:（14.1） 底:10.2	橙/橙	白色粒子			底部に笹状圧痕
110	SI243	フク土	XⅣ					突起片			黒褐/にぶい褐		/ススス	加曽利B	
111	SI243	フク土　5層	XⅢ	2			平	口縁部片			橙/黒褐	海綿		加曽利B？	
112	SI247　炉体土器		Ⅸ	5	深鉢			胴部～底部3/5	撚糸L	高:（9.4） 口:9.0	にぶい黄橙/橙	白色粒子		大木10	
113	SI252	フク土上	Ⅸ	4⑤？	深鉢			胴部片	R（磨消）		明褐/橙	雲母・砂多			114と同一個体
114	SI252　炉体土器		Ⅸ	4	深鉢			胴部片	R（磨消）		褐灰/にぶい褐	雲母・砂多		大木10	113と同一個体
115	SI252	フク土	XⅢ				波	口縁部片			灰黄褐/にぶい黄橙	海綿			
116	SI252	フク土	XⅢ		ミニチュア鉢	A3	波	口縁部片			浅黄橙/浅黄橙				内面を赤彩
117	SI261　炉体土器		X		深鉢			胴部～底部3/5	LR（磨消）	高:（16.0） 底:6.6	にぶい褐/にぶい赤褐	白色粒子	/ススス	加曽利E	
118	SI261　炉体土器		XⅢ	1	深鉢			胴部片1/2	撚糸L	高:（18.3）	黄橙/橙	白色粒子			
119	SI261	フク土	XⅢ	1	深鉢			胴部片1/2	LR↓	高:（10.1）	明黄橙/橙	角閃石多・海綿			
120	SI261　石組部埋設土器		XⅢ	1				胴部片	RLR↓		にぶい褐/浅黄橙	海綿			
121	SI261　炉体土器		XⅢ	1				胴部片	LR		にぶい黄橙/浅黄橙	砂多			122と同一個体
122	SI261　炉体土器		XⅢ	1				胴部片	LR		にぶい黄橙/黄橙	砂多			121と同一個体
123	SI288　炉体土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部4/5	RL	高:（14.8） 底:（9.7）	にぶい黄橙/明黄橙	砂	オコゲ/ススス・オコゲ		
124	SI294　炉体土器		Ⅸ	4	深鉢			胴部～底部3/5	LR（磨消）	高:21.6 底:8.4	にぶい橙/橙	砂・小礫	オコゲ/	大木10	
125	SI294　石組部	底面	Ⅸ	5			平	口縁部片	LR（磨消）		橙/にぶい黄橙	砂		大木10	
126	SI295　炉体土器		XⅢ	1	深鉢		平	口縁部片2/3	RL→↓	高:（10.9） 口:29.4	橙/にぶい褐	海綿			
127	SI339　炉	フク土	Ⅸ	4	深鉢			胴部片	LR（磨消）		灰黄褐/にぶい黄橙	海綿・赤色粒子		大木10	128と同一個体
128	SI339　炉	フク土	Ⅸ	4				胴部片	LR（磨消）		にぶい黄橙/黒	海綿・赤色粒子		大木10	127と同一個体
129	SI366　炉体土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/3	撚糸R	高:（7.8） 底:15.0	浅黄橙/黄橙	小礫			底部に笹状圧痕
157	SI467	フク土	XⅣ					胴部片	LR		橙/にぶい黄橙	海綿		加曽利B	
159	SI472　炉体土器3		XⅢ	1	深鉢	A6	平	口縁部～底部3/5	RL	高:（21.1） 口:26.7 底:8.0	橙/橙				
160	SI472	床面直上	XⅢ	1	深鉢		平	口縁部～胴部1/3	RL↓	高:（10.8） 口:（17.3）	灰褐/灰褐		オコゲ/ススス		
161	SI472　炉体土器2		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/1	LR↓	高:32.4 底:13.6	灰黄褐/橙		/ススス		
162	SI472　1号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/1	RL↓	高:（30.7） 底:13.0	にぶい黄橙/橙	白色粒子	オコゲ/ススス		
163	SI472	床面直上	X		ミニチュア深鉢			底部4/5	LR（磨消）	高:（4.5） 底:4.7	黒褐/灰褐		オコゲ/ススス	加曽利E	
164	SK28	フク土	Ⅸ	6	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/6	RL↓		灰褐/灰黄褐	雲母・石英	/ススス	大木10	
165	SK28	フク土	XⅢ		深鉢	A4？	平	口縁部～胴部1/4	RL→	高:（15.7） 口:（17.0）	黒/にぶい黄橙	雲母			
166	SK37	1層	XⅠ	②	深鉢	A3	平	口縁部～胴部			灰黄褐/灰黄褐	石英	/ススス	三十稲場	
167	SK37	1層	XⅠ	4④	深鉢	C2	平	口縁部片			灰黄褐/褐灰	石英		三十稲場	
168	SK37	1層	XⅠ	2	深鉢	C2	平	口縁部～底部2/3	撚糸L	高:76.3 口:29.2 底:15.8	浅黄橙/灰白			三十稲場	
169	SK38	1層	Ⅸ	5	注口土器		平	口縁部片	LR（磨消）		褐/黒褐	石英・角閃石	オコゲ/ススス		
170	SK63	フク土	Ⅸ	6	深鉢	A5？	平	口縁部～胴部1/3	LR↓	高:（15.5） 口:（22.4）	浅黄橙/にぶい黄橙	角閃石・赤色粒子・石英・海綿	/ススス	大木10	
171	SK64	フク土	X		深鉢	B		胴部片1/3	RLR（磨消）	高:（16.7）	黄橙/浅黄橙	石英・白色粒子	オコゲ/	加曽利E	
172	SK65	フク土	XⅣ？	5	注口土器			口縁部片			黒褐/黒	雲母		加曽利B？	
173	SK75	フク土	XⅢ	1	深鉢			胴部片7/9	LR↓	高:（20.8）	黄橙/橙	白色粒子			
174	SK75	フク土	Ⅸ	4⑤	深鉢	A1	平	口縁部～胴部2/3	LR（磨消）	高:30.4 口:32.3	明赤褐/暗褐	白色粒子・海綿			
175	SK77	フク土	Ⅸ	1	注口土器			口縁部～胴部2/3	LR→（磨消）	高:（17.4） 口:（35.0）	灰白/黒褐	角閃石・石英	/ススス		
176	SK77	フク土	XⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/4	LR→↓	高:（16.3） 口:（20.0）	にぶい褐/にぶい褐	海綿・砂	オコゲ/ススス		

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
177	SK77	フク土	Ⅸ	4④	深鉢		平	口縁部片	LR（磨消）		黒褐/橙	海綿			
178	SK77	フク土	ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部3/4	LR↓	高:（11.5） 底:11.9	にぶい赤褐/橙	海綿	オコゲ/オコゲ		底部に網代圧痕
179	SK77	フク土	ⅩⅢ	1	深鉢			底部6/7	LR↓	高:（8.0） 底:15.2	灰白/橙				
180	SK89	フク土	Ⅸ	4④	鉢	A4	平	口縁部～底部1/3	LR（磨消）	高:22.3 口:（29.4） 底:9.3	灰褐/にぶい赤褐	角閃石	オコゲ/ススオコゲ		
181	SK90	フク土	ⅩⅡ	2	鉢	A4	平	口縁部～底部3/5	撚糸LR	高:（51.2） 口:（28.4） 底:17.8	橙/にぶい褐		/ス		底部に笹状圧痕
182	SK104	1層	ⅩⅣ	1	深鉢			底部3/4		高:9.0 底:6.8	橙/橙	角閃石		加曽利B	底部に網代圧痕
183	SK115	フク土	Ⅸ	4④	深鉢	A7	平	口縁部～胴部1/3	撚糸R	高:（25.3） 口:（27.2）	黄橙/にぶい黄橙	海綿			
184	SK117	フク土	Ⅸ	4③	深鉢	A7	平	口縁部～胴部1/4	RL（充填）	高:（42.6） 口:（38.5）	赤褐/にぶい黄橙	角閃石	/ス		
185	SK124	フク土	Ⅸ	5②	鉢	A3	平	口縁部片1/4	LR（充填）	高:（17.1） 口:（27.6）	黄橙/橙	角閃石	オコゲ/ス	大木10	
186	SK126	フク土	Ⅸ	4	浅鉢		平	口縁部片	LR（磨消）		にぶい橙/にぶい赤褐	石英	/ス	大木10	
187	SK126	フク土	Ⅸ	4③？	深鉢	A6	平	口縁部片1/4	RLR（充填）	高:（15.0） 口:（30.6）	にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石	オコゲ/ス		
188	SK126	フク土	Ⅸ	5②	深鉢		平	口縁部片	撚糸L		灰黄褐/浅黄橙	角閃石・赤色粒子	オコゲ/	大木10	
189	SK126	フク土	ⅩⅠ	②	深鉢	C2	平	口縁部～胴部1/3		高:（8.4） 口:13.1	褐/褐灰		オコゲ/ススオコゲ	三十稲場	
190	SK126	フク土	ⅩⅡ	2	鉢	A3	平	口縁部～底部5/7	撚糸R	高:（26.5） 口:25.0 底:14.4	にぶい黄橙/にぶい黄橙		オコゲ/ス		底部に笹状圧痕
191	SK126	フク土	ⅩⅠ	②	深鉢	C2	平	口縁部～胴部1/3		高:（9.3） 口:12.6	橙/黒褐	角閃石	/ス	三十稲場	
192	SK126	フク土	ⅩⅠ	②	深鉢			胴部～底部1/2		高:（10.7） 底:13.2	黄橙/橙			三十稲場	底部に笹状圧痕？
193	SK126	フク土	ⅩⅠ	③	深鉢			胴部～底部2/3		高:（20.0） 底:12.0	黄橙/橙	白色粒子		三十稲場	
194	SK126	フク土	ⅩⅠ	②	深鉢	C2	平	口縁部～底部1/5		高:（24.6） 口:（21.6） 底:13.0	にぶい黄橙/黒	赤色粒子・角閃石		三十稲場	底部に笹状圧痕
195	SK126	フク土	ⅩⅠ	②	深鉢	C2	平	口縁部～胴部4/5		高:（22.3） 口:16.6	にぶい黄橙/灰黄褐		/ス	三十稲場	
196	SK126	フク土	ⅩⅡ	2	深鉢	A3	平	口縁部～底部1/2	撚糸L	高:25.1 口:22.0 底:14.0	浅黄橙/黄橙		/ス	三十稲場	
197	SK126	フク土	ⅩⅡ		深鉢	A5	平	口縁部～底部　ほぼ完形	撚糸L	高:35.5 口:19.8 底:15.3	にぶい黄橙/灰黄褐	細かい砂？	/ス	後期前葉	底部に笹状圧痕
198	SK126	フク土	ⅩⅡ	3？	深鉢	A3	平	口縁部～底部3/4		高:30.5 口:19.9 底:14.0	にぶい褐/灰褐	白色粒子	オコゲ/ス	三十稲場	底部に笹状圧痕
199	SK126	フク土	ⅩⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/3	撚糸r	高:（33.7） 口:（20.0）	浅黄橙/浅黄橙	小礫	/ス		
200	SK126	フク土	ⅩⅡ	2	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/5		高:（30.3） 口:24.5	浅黄橙/にぶい赤褐			三十稲場	
201	SK126	3層	ⅩⅢ	1	深鉢	A6	平	口縁部～胴部　11/12	撚糸L	高:42.5 口:17.3 底:15.3	灰黄褐/灰黄褐		/ス		
202	SK126	フク土	ⅩⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～底部3/4	撚糸L	高:35.0 口:23.2 底:15.1	橙/橙		/ス		
203	SK126	フク土	ⅩⅢ	2	深鉢		突	口縁部片			褐灰/灰黄褐	角閃石			204と同一個体
204	SK126	フク土	ⅩⅢ	2	深鉢			胴部～底部1/3		高:（8.8） 底:9.3	灰黄褐/灰黄褐	角閃石			205と同一個体
205	SK126	フク土	ⅩⅢ	無	鉢	A1	平	口縁部～胴部2/3		高:20.5 口:25.3	にぶい黄橙/灰黄褐	角閃石・海綿	/ス		

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
206	SK126	フク土	XIII	1	深鉢	A1	平	口縁部～胴部1/4	撚糸L	高:34.8 口:32.3	灰黄褐/橙	海綿			
207	SK126	フク土			深鉢			底部1/4		高:（2.5） 底:10.0	浅黄橙/灰黄褐				底部に笹状圧痕？
208	SK126	フク土	XI		蓋	C		7/8		高:1.6 直:9.1	灰白/灰白	石英		三十稲場	
209	SK128	フク土	XIII	1	深鉢	A6？	平	口縁部片	L↓		褐灰/灰黄褐		オコゲ/		
210	SK128	フク土	XI	4②	深鉢	C2	平	口縁部～底部1/2	撚糸L	高:（29.8） 口:23.2 底:12.4	浅黄橙/灰白	赤色粒子・角閃石	/ススス	三十稲場	
211	SK135	フク土	IX	4⑤	深鉢	A7	平	口縁部～胴部1/4	LR（磨消）	高:26.9 口:29.3	灰褐/灰褐	海綿	/ススス		
212	SK142	フク土	XIII	1	深鉢	A1	平	口縁部～底部4/9	LR	高:17.2 口:15.8 底:7.0	灰黄褐/にぶい黄橙		オコゲ/ススス		
213	SK144	フク土	XI	1②	深鉢	C2	平	口縁部～胴部1/2	撚糸L（網目状）	高:（17.6） 口:21.0	黄橙/黄橙	小礫・海綿		三十稲場	
214	SK145	フク土	IX？		台付土器			台部1/2	LR→	高:（4.6）	橙/橙	砂利			
215	SK149	フク土	IX	4⑤？	深鉢			胴部片	RL（磨消）		灰黄褐/黒褐	海綿・角閃石		大木10	
216	SK150	フク土	XIII	1	深鉢	A2	平	口縁部～胴部1/3	RLにLRをLで巻きつけたもの	高:（14.6） 口:（27.8）	灰黄褐/極暗赤褐	石英	オコゲ/ススス		
217	SK150	フク土			深鉢			底部1/1		高:（3.9） 底:12.7	にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石	オコゲ/		
218	SK153	フク土上	XIII		深鉢	A3	平	口縁部～底部1/2		高:29.6 口:22.2 底:13.5	灰褐/灰黄褐	白色粒子	/ススス		底部に笹状圧痕
219	SK158	フク土上	XIII	1	深鉢		平	口縁部～胴部	撚糸L		黄橙/黄橙	海綿・角閃石			
220	SK159	フク土	IX	4③	深鉢	A7	平	口縁部～胴部1/6	RL（磨消）	高:（23.2） 口:（23.2）	灰白/褐	海綿・角閃石	/ススス		
221	SK159	フク土	IX		注口土器？		平	口縁部片1/6	L→	高:（4.0） 口:（21.4）	黒褐/黒	石英	/ススス		
222	SK165	フク土	IX	4④	鉢	A6	平	口縁部～底部3/5	RL→	高:33.6 口:（40.2） 底:9.2	灰褐/浅黄橙	角閃石	オコゲ/ススス		
223	SK172	フク土	XIII	1	深鉢		平	口縁部片	LR↓		橙/浅黄橙	白色粒子			224と225は同一個体
224	SK172	フク土	XIII	1	深鉢			底部	LR↓	高:12.6	橙/黄橙	白色粒子・砂	オコゲ/		223と225は同一個体
225	SK172	フク土	XIII	1	深鉢			胴部片	LR↓	高:17.1	橙/黄橙	白色粒子・砂			223と224は同一個体
226	SK211	フク土	IX	5	深鉢			胴部片	LR（磨消）		にぶい黄橙/暗褐			大木10	
227	SK218	フク土	XIII	1	深鉢			胴部～底部2/3	撚糸RL	高:（21.5） 底:16.8	にぶい黄橙/浅黄橙		/ススス		底部に笹状圧痕
228	SK244	フク土	XIII	1	深鉢			底部4/5	L↓	高:（9.1） 底:14.5	浅黄橙/黄橙	海綿・白色粒子	オコゲ/		
229	SK253	フク土	XI	5	深鉢	C1	平	口縁部～胴部1/6	LR↓	高:（13.6） 口:（14.8）	橙/にぶい赤褐	角閃石	オコゲ/ススス	三十稲場	
230	SK253	フク土	IX	4	深鉢		平	口縁部～胴部1/3	LR（磨消）	高:（8.2） 口:（13.0）	にぶい橙/にぶい赤褐		/ススス	大木10	
231	SK254	フク土	XIV	1	壺形土器		平	口縁部～胴部3/4		高:（12.0） 口:5.1	褐灰/黒褐			加曽利B	
232	SK283	フク土	IX	6	深鉢		平	口縁部片	撚糸L		浅黄橙/浅黄橙	赤色粒子・角閃石・石英		大木10	233と同一個体
233	SK283	フク土			深鉢			胴部～底部3/8	撚糸L	高:（33.1） 底:15.0	浅黄橙/黄橙	赤色粒子・角閃石・石英	オコゲ/ススス		232と同一個体
234	SK270	フク土上	IX	6	深鉢		平	口縁部～胴部1/4	L↓	高:（39.9） 口:（34.2）	にぶい赤褐/灰黄褐	白色粒子		大木10	
235	SK287	フク土	XIII		深鉢		平	口縁部片	LR		にぶい黄橙/にぶい黄橙	海綿		中期末葉？	
238	SK333	フク土	XI	5④	深鉢	C2	平	口縁部～底部2/7	撚糸R	高:（22.8） 口:（17.8） 底:11.4	黄橙/にぶい黄橙	角閃石	/ススス	三十稲場	
239	SK347	フク土	IX	6	深鉢		平	口縁部～胴部1/2	LR→	高:（53.3） 口:（36.7）	灰黄褐/にぶい黄橙	石英	オコゲ/ススス	大木10	
240	SK367	フク土	XI	1	深鉢	C1	平	口縁部片	撚糸LR		灰褐/暗褐	海綿	/ススス	三十稲場	
290	SK383	フク土					平	口縁部片			にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石	/ススス		
291	SK383	フク土						胴部片	LR↓		にぶい黄橙/にぶい黄橙		/ススス	後期前葉	

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
292	SK390	フク土	Ⅸ	4	鉢	A6	平	口縁部～胴部1/6	RL（磨消）	高:9.2 口:（33.4）	にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石	/ス ス	大木10	
293	SK391	フク土	ⅩⅢ				平	口縁部片			褐灰/灰黄褐	白色粒子	オコゲ/		
294	SK391	フク土	ⅩⅠ	1③	深鉢	C1	平	口縁部片1/4	高:4.8 直:12.8		灰褐/褐灰	白色粒子	/ス ス	三十稲場	
295	SK391	フク土			鉢		平	口縁部～底部　完形	撚糸L	高:7.1 口:13.4	浅黄橙/浅黄橙	白色粒子	/ス ス		底部に笹状圧痕
296	SK395	フク土	Ⅸ		鉢？		平	口縁部片	撚糸R		にぶい黄橙/灰白		オコゲ/	大木9	
298	SK394	フク土	ⅩⅢ	1	深鉢	A1	平	口縁部～底部1/3	LR	高:（55.2） 口:（36.1） 底:14.0	にぶい黄橙/灰黄褐		/ス ス		底部に笹状圧痕
299	SK394	フク土	ⅩⅢ		深鉢		平	口縁部～胴部	撚糸L		浅黄橙/灰黄褐	白色粒子	/ス ス		
300	SK394	フク土	ⅩⅣ		浅鉢		波	口縁部片1/2		高:11.2 口:（23.3） 底:7.0	黒褐/黒褐	海綿		加曽利B	底部に網代圧痕
304	SK413	フク土			深鉢	A3	突	口縁部～胴部1/3	L（磨消）	高:（11.9） 口:（15.8）	褐/黒	海綿多	/ス ス		
305	SK417	フク土	Ⅸ	5	深鉢		平	口縁部片	LR（磨消）		橙/にぶい黄橙	白色粒子	/ス ス	大木10	306と同一個体
306	SK417	フク土	Ⅸ	5	深鉢			胴部片	LR（磨消）		橙/灰黄褐	白色粒子	/ス ス	大木10	305と同一個体
311	SK435	フク土	Ⅸ	4③	深鉢	A7	平	口縁部～胴部1/6	LR（磨消）	高:（30.9） 口:（33.8）	にぶい黄橙/にぶい橙	白色粒子			
312	SK435	フク土	Ⅹ	1	深鉢	B1	平	口縁部～底部4/5	LR（磨消）	高:21.4 口:21.5 底:9.0	橙/橙	石英	/ス ス	加曽利E	
313	SK441	フク土	ⅩⅠ		蓋？						黒褐/にぶい橙	角閃石		三十稲場	
314	SK454	フク土	Ⅸ	5	深鉢		平	口縁部片	撚糸L		黒褐/黒褐	石英		大木10	底部に笹状圧痕
326	10B-1号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部片1/3	RL↓	高:（24.6）	浅黄橙/にぶい黄橙	赤色粒子・角閃石	オコゲ/ス ス		
327	10B-2号埋設土器		Ⅹ	2	深鉢			胴部～底部4/5		高:（28.9） 底:13.8	橙/にぶい黄橙	角閃石多	オコゲ/ス ス	加曽利E？	
328	10B-3号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/2	撚糸L	高:（11.4） 底:12.4	にぶい褐/黄橙	石英	オコゲ/		
329	10B-4号埋設土器		ⅩⅠ	2②	鉢	C2	平	口縁部～底部5/6		高:28.4 口:28.1 底:16.0	にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石	オコゲ/ス ス	三十稲場	底部に笹状圧痕
330	10B-5号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢		平	口縁部～底部1/3	LR→↓	高:（50.0） 口:（22.0） 底:11.4	浅黄橙/にぶい黄橙	砂	/ス ス		
331	10B-6号埋設土器		Ⅹ	2	深鉢	A3	平	口縁部～底部4/5	撚糸R	高:34.8 口:19.0 底:10.4	にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石	オコゲ/ス ス	加曽利E？	
332	10B-7号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/5	撚糸L	高:（23.5） 底:13.6	にぶい黄橙/にぶい橙	砂	オコゲ/ス ス		
333	10B-9号埋設土器		ⅩⅢ	沈線	深鉢	A2	平	口縁部～底部5/6		高:29.9 口:27.2 底:15.7	褐灰/灰黄褐	砂	/ス ス		底部に笹状圧痕
334	10C-1号埋設土器		Ⅸ	5	深鉢			胴部片3/5	LR（充填）	高:（18.0）	にぶい黄橙/にぶい黄橙	白色粒子	オコゲ/	大木10	
335	10C-2号埋設土器		ⅩⅠ		深鉢	C1	平	口縁部～底部1/2	撚糸R	高:23.5 口:14.1 底:13.0	黄橙/にぶい黄橙	角閃石・赤色粒子	/ス ス	三十稲場	
336	10C-3号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢	A2	平	口縁部～底部4/5	LR→↓	高:22.2 口:21.5 底:9.5	黒褐/灰黄褐	海綿	/ス ス		
337	11B-1号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢	A2	平	口縁部～底部9/10	撚糸L	高:46.7 口:27.1 底:15.0	にぶい黄橙/灰黄褐	白色粒子	/ス ス		
338	11B-2号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/3	撚糸L	高:（27.3） 底:16.8	浅黄橙/浅黄橙	小礫	/ス ス		
339	11B-3号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/3	LR↓	高:（18.2） 底:10.0	にぶい橙/浅黄橙		/ス ス		底部に網代圧痕
340	11B-4号埋設土器		Ⅸ	6	深鉢	A3	波	口縁部～底部9/10	撚糸L	高:（22.3） 口:（19.5） 底:10.5	灰褐/にぶい黄橙	海綿	/ス ス	大木10	
341	11B-5号埋設土器		ⅩⅠ	1②	深鉢	C2	平	口縁部～底部5/6	撚糸L	高:42.9 口:18.4 底:15.0	にぶい黄橙/浅黄橙	白色粒子		三十稲場	

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
342	11B-6号埋設土器		XⅢ	1	深鉢		平	口縁部片	LR↓		にぶい橙/にぶい黄橙	角閃石・赤色粒子			
343	11B-7号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/2	撚糸L	高:（19.2） 底:11.0	黒褐/黒褐	海綿・赤色粒子	/ススス		
344	11C-1号埋設土器		Ⅸ	4	深鉢			胴部～底部3/4	RL（磨消）	高:（14.1） 底:8.8	にぶい橙/にぶい橙	海綿多	/ススス	大木10	
345	11C-2号埋設土器		Ⅸ	6	深鉢	A3	平	口縁部～底部3/5	LR→↓	高:35.8 口:23.3 底:9.4	浅黄橙/にぶい黄橙	砂	オコゲ/ススス	大木10	
346	11C-3号埋設土器		XⅠ？		深鉢			胴部～底部4/5	撚糸L	高:30.5 底:11.6	にぶい黄橙/浅黄橙	小礫		三十稲場	
347	11C-6号埋設土器		Ⅸ	6	深鉢	A3	平	口縁部～底部7/9	RL→	高:40.3 口:25.9 底:14.0	橙/にぶい赤褐	角閃石	/ススス	大木10	底部に笹状圧痕
348	11D-2号埋設土器		Ⅸ	2	深鉢	B1	波	口縁部片2/3	LR（磨消）	高:（15.9） 口:26.0	浅黄橙/浅黄橙	海綿		大木9	
349	11G-1号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部5/7	RL→	高:（22.1） 底:5.5	にぶい橙/黄橙	砂	オコゲ/ススス		底部に網代圧痕
350	12B-3号埋設土器		XⅡ	3	鉢	C2	平	口縁部～底部1/3		高:（26.0） 口:25.6 底:12.6	にぶい黄橙/浅黄橙	白色石多	オコゲ/ススス	三十稲場	
351	12B-8号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			底部4/9	撚糸L	高:（6.7） 底:16.5	浅黄橙/にぶい黄橙	赤色粒子・角閃石	オコゲ/		底部に網代圧痕
352	12C-1号埋設土器		XⅠ	②	深鉢	C2	平	口縁部～底部3/5		高:18.4 口:18.1 底:10.6	にぶい赤褐/にぶい橙	白色粒子	オコゲ/ススス	三十稲場	
353	12C-2号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/5	撚糸L	高:（13.0） 底:11.5	灰褐/黄橙	角閃石	/オコゲ		底部に笹状圧痕
354	12C-3号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/2	撚糸L	高:（24.6） 底:17.5	にぶい橙/黄橙	小礫多	オコゲ/ススス		底部に笹状圧痕
355	12C-6号埋設土器		XⅢ	1	深鉢	A6？	平	口縁部～胴部3/5	LR↓	高:（46.0） 口:（31.4）	浅黄橙/にぶい黄橙	白色粒子	オコゲ/ススス		
356	12C-7号埋設土器		Ⅸ	5	深鉢	A4	波	口縁部～底部9/10	LR（磨消）	高:35.6 口:31.2 底:10.9	黄橙/にぶい橙	白色粒子・石英	/ススス	大木10	
357	12C-8号埋設土器		Ⅸ	4	深鉢	A6	平	口縁部～胴部1/2	LR（磨消）	高:（26.1） 口:21.5	灰褐/褐灰	角閃石・海綿・赤色粒子	/ススス	大木10	
358	12D-1号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			底部3/4	撚糸R	高:（16.4）	灰褐/にぶい黄橙		/ススス		底部に笹状圧痕
359	12D-2号埋設土器		XⅢ	2	深鉢	A3	平	口縁部～底部2/3		高:18.4 口:21.0 底:11.8	灰褐/浅黄橙	白色粒子	/ススス		底部に笹状圧痕
360	12D-3号埋設土器		XⅠ	②	深鉢			底部3/7		高:5.1 底:10.0	橙/にぶい橙	石英	オコゲ/ススス	三十稲場	
361	12D-4号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/4	撚糸R	高:15.2 底:11.5	灰赤褐/灰黄褐		/ススス		底部に笹状圧痕
362	12D-5号埋設土器		XⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～底部7/9	撚糸R	高:53.2 口:24.7 底:11.2	浅黄橙/にぶい黄橙		オコゲ/ススス		
363	12D-8号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部4/5	撚糸L	高:（35.0） 底:13.0	黄橙/浅黄橙	黒色粒子	/ススス		
364	12E-1号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/5	LR↓	高:（17.5） 底:16.2	にぶい橙/浅黄橙	海綿・石英			底部に笹状圧痕
365	13B-1号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部4/5	撚糸L	高:（33.5） 底:12.0	にぶい橙/にぶい褐	砂	/ススス		
366	13D-1号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部片3/4	LR↓	高:（47.6） 底:10.0	にぶい黄橙/にぶい褐	角閃石	オコゲ/ススス		
367	13D-2号埋設土器		XⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部3/4	撚糸L	高:（24.5） 口:（30.0）	にぶい黄橙/にぶい黄橙	白色粒子	/ススス		
368	13D-4号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/5	RL→	高:（21.4） 底:18.0	浅黄橙/にぶい黄橙	白色粒子	/ススス		
369	13E-1号埋設土器		XⅠ	4②	深鉢	C2	突	口縁部～底部6/7		高:（19.0） 口:16.5 底:11.3	橙/にぶい橙	石英	/ススス	三十稲場	
370	13E-2号埋設土器		Ⅸ		深鉢	A1	突	口縁部～底部6/7	RL→	高:24.8 口:（20.1） 底:11.0	灰黄褐/にぶい黄橙	海綿多	オコゲ/ススス	大木10	

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
371	13E-3号埋設土器		XⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～底部4/5	LR↓	高:24.8 口:21.3 底:8.0	黒褐/灰褐	白色粒子・角閃石・海綿	/ススス		
372	13E-4号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部片1/2	RL↓	高:33.2	灰黄褐/褐灰	角閃石	/ススス		
373	13E-5号埋設土器		XⅢ	1	深鉢		平	口縁部～底部1/2	撚糸LR	高:30.8 口:22.1 底:11.0	褐灰/にぶい黄橙	白色粒子	/ススス		
374	13E-6号埋設土器		XⅢ	1	深鉢		突	口縁部～底部3/5	LR→↓	高:（24.5） 口:23.3 底:11.0	にぶい橙/にぶい橙	赤色粒子	/ススス		底部に笹状圧痕
375	13E-7号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/5	撚糸R	高:（24.5） 底:12.2	橙/浅黄橙	白色粒子	/ススス		
376	14B-1号埋設土器		XⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部5/7	RLR→	高:41.5 底:（28.7）	浅黄橙/にぶい黄橙	角閃石	/ススス		
377	14B-2号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/2	LR→	高:31.7 底:14.7	にぶい橙/橙	白色粒子	/ススス		底部に網代圧痕？
378	14C-1号埋設土器		Ⅸ	5	深鉢		平	口縁部～底部7/8	RL（磨消）	高:41.1 口:28.2 底:8.6	にぶい黄橙/にぶい黄橙	雲母	オコゲ/ススス	大木10	
379	14C-2号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/1	LR→↓	高:51.4 底:10.8	にぶい黄橙/にぶい黄橙	海綿	/ススス		
380	14C-3号埋設土器		Ⅸ	4	深鉢	A5		胴部7/9	LR（磨消）	高:（28.1）	灰褐/橙	白色粒子	/ススス	大木10	
381	14C-4号埋設土器		Ⅸ	4	深鉢	A6？	平	口縁部～底部4/5	LR（充填）	高:（14.8） 口:14.2 底:8.3	にぶい橙/浅黄橙	白色粒子	オコゲ/ススス・オコゲ	大木10	底部に笹状圧痕
382	14C-5号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/5	LR↓	高:（25.3） 底:14.6	橙/橙	白色粒子	/ススス		
383	14C-7号埋設土器		XⅢ	1				胴部片	L↓		にぶい褐/灰褐	白色粒子			
384	14C-9号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/5	LR↓	高:（11.6） 底:9.2	褐灰/灰黄褐	雲母			
385	14D-1号埋設土器		ⅩⅠ	4	深鉢	C1？	平	口縁部～底部9/10	撚糸r	高:19.7 口:21.6 底:12.0	灰褐/にぶい橙		オコゲ/ススス・オコゲ	三十稲場	
386	14D-2号埋設土器		XⅢ	1	深鉢	B1	突	口縁部～胴部3/5	撚糸L	高:19.5 口:13.3 底:7.9	灰褐/灰褐	白色粒子・角閃石	オコゲ/ススス・オコゲ		
387	14D-3号埋設土器		Ⅸ	6	深鉢	A7	平	口縁部～胴部1/3	LR↓	高:18.6 口:10.0	にぶい褐/にぶい黄橙	海綿・石英	/ススス	大木10	
388	14D-7号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部3/5	撚糸L	高:17.4 底:12.0	褐灰/にぶい褐	白色粒子	/ススス		
389	14D-9号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部4/7	撚糸r	高:（27.5） 底:9.7	浅黄橙/灰褐	角閃石	/ススス		
390	14D-12号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			胴部～底部5/6	RL↓	高:（34.9） 底:13.0	にぶい橙/灰黄褐	角閃石	/ススス		
391	14D-13号埋設土器		XⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～底部7/8	撚糸R	高:450 口:21.5 底:14.0	にぶい黄橙/褐灰	角閃石・海綿	オコゲ/ススス		
392	14D-14号埋設土器		XⅡ	1	鉢	A2	平	口縁部～底部9/10	撚糸r（充填）	高:17.5 口:22.8 底:12.7	にぶい橙/浅黄橙	赤色粒子・角閃石	オコゲ/	三十稲場	
393	14D-16号埋設土器		XⅢ	1				胴部片1/4	RL↓・LR↓	高:（18.0）	灰褐/浅黄橙	石英	オコゲ/		
394	14E-1号埋設土器		Ⅸ	4③④	深鉢		平	口縁部～底部2/5	RL	高:33.6 口:28.2 底:9.5	黒褐/褐灰	石英	オコゲ/ススス	大木10	
395	14E-3号埋設土器		ⅩⅠ	2	深鉢		平	口縁部～胴部5/7	撚糸L	高:19.2 口:33.5 底:10.4	にぶい褐/にぶい黄橙	白色粒子	オコゲ/ススス	三十稲場	
396	14E-4号埋設土器		ⅩⅠ	2	深鉢		平	口縁部～底部4/5	L↓・結節	高:19.2 口:21.0 底:10.4	黒褐/黒褐	雲母・白色粒子	オコゲ/ススス・オコゲ	三十稲場	底部に笹状圧痕
397	14E-5号埋設土器		XⅢ	1	深鉢			口縁部～底部3/4	撚糸r	高:22.5 口:24.2 底:13.9	橙/橙		オコゲ/ススス		底部に笹状圧痕
398	14E-6号埋設土器		ⅩⅠ	②	深鉢			胴部～底部3/5		高:11.8 底:10.3	褐灰/褐灰	白色粒子		三十稲場	

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
399	14E-7号埋設土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部3/4	撚糸L	高:（29.3） 底:13.4	浅黄橙/浅黄橙				底部に笹状圧痕
400	14E-8号埋設土器		XIII	1				胴部片1/2	撚糸R	高:（6.0）	にぶい赤褐/にぶい橙	白色粒子			
401	14F-1号埋設土器		XIII	1	深鉢	A3	平	胴部～底部1/3	撚糸R	高:39.0 底:8.6	浅黄橙/にぶい褐	白色粒子・石英	オコゲ/ススI		
402	15B-1号埋設土器		IX	5	深鉢	B1	突	口縁部～底部9/10	撚糸R	高:34.0 口:21.0 底:8.6	にぶい橙/にぶい橙	石英	オコゲ/ススI	大木10	
403	15B-2号埋設土器		IX	4	深鉢			胴部～底部1/2	LR（磨消）	高:（12.8） 底:6.5	黒褐/にぶい赤褐	石英・白色粒子		大木10	
404	15B-3号埋設土器		IX	4	深鉢			胴部～底部2/3	LR	高:17.1 底:11.4	にぶい橙/黄橙	石英・白色粒子	オコゲ/ススI	大木10	
405	15C-2号埋設土器		XIII	1	深鉢			胴部片1/2	撚糸r	高:（26.9）	にぶい黄橙/浅黄橙		オコゲ/ススI		
406	15C-3号埋設土器		XII		深鉢	A3	突	口縁部～底部5/6		高:27.9 口:17.8 底:13.8	にぶい褐/灰褐		/ススI		底部に笹状圧痕
407	15C-4号埋設土器		XIII	1	深鉢	A3	平	口縁部～底部1/3	LR↓	高:63.9 口:29.4 底:15.0	黒褐/にぶい黄橙		オコゲ/ススI		
408	15C-5号埋設土器		XIII	1	深鉢？		平	口縁部片1/3	撚糸R	高:15.1 口:（19.9）	灰褐/黒褐	砂	/ススI		
409	15C-6号埋設土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部1/2	撚糸L	高:15.2 底:10.0	黒褐/にぶい赤褐	石英	オコゲ/ススI		底部に笹状圧痕
410	15C-7号埋設土器		XI	②	深鉢			胴部～底部3/7		高:13.9 底:18.0	橙/橙	白色粒子	/ススI	三十稲場	
411	15C-8号埋設土器		XIII	1	鉢	A5		口縁部～底部1/3	LR↓→	高:22.8 口:（24.4） 底:10.0	褐灰/にぶい黄橙	海綿・石英	/ススI		
412	15C-9号埋設土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部3/5	LR↓	高:22.5 底:10.0	橙/橙		/ススI		
413	15C-10号埋設土器		XIII	1	深鉢	A3	平	口縁部～底部5/7	撚糸L	高:28.6 口:20.1 底:12.6	にぶい橙/灰褐	石英	/ススI		
414	15C-11号埋設土器		XII	2	深鉢	A3	平	口縁部～底部7/8		高:22.9 口:18.4 底:10.1	にぶい褐/にぶい褐	石英		三十稲場	
415	15D-1号埋設土器		XII	2	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/3	撚糸L	高:（33.1） 口:27.5	にぶい橙/浅黄橙	赤色粒子・石英	/ススI	三十稲場	
416	15D-2号埋設土器		IX	5	壺形土器		平	口縁部～台部6/7		高:15.1 口:9.3	黄橙/黄橙	白色粒子			内外面を赤彩
417	15D-3号埋設土器		XIII	1	深鉢	A1？	平	口縁部～底部2/5	撚糸L	高:50.0 口:29.0 底:15.0	浅黄橙/灰白	角閃石・赤色粒子・海綿			底部に笹状圧痕
418	15D-4号埋設土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部4/7	R→	高:（31.6） 底:16.3	にぶい褐/灰褐	白色粒子	/ススI		
419	15D-5号埋設土器		XIII	1	深鉢	A3	突	口縁部～底部7/8	撚糸L	高:（40.6） 口:（22.5） 底:14.5	にぶい黄橙/にぶい黄橙		オコゲ/ススI		底部に笹状圧痕
420	15D-6号埋設土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部1/3	撚糸R	高:（20.3） 底:17.8	灰褐/にぶい橙	白色粒子	/ススI		
421	15D-7号埋設土器		XIII	1	深鉢			底部1/4		高:（3.0） 底:11.7	にぶい橙/にぶい黄橙	砂			
422	15D-8号埋設土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部1/2	LR↓	高:（38.5） 底:10.0	にぶい橙/黄橙	白色粒子	/ススI		底部に不明圧痕
423	15D-9号埋設土器		XIII	1	深鉢		平	口縁部～胴部5/8	撚糸L	高:（22.4） 口:18.4	にぶい黄橙/浅黄橙		/ススI		
424	15F-2号埋設土器		XIII	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/3	撚糸r	高:25.2 口:30.0	にぶい黄橙/灰褐	海綿	/ススI		
425	16B-1号埋設土器		XIII	1	深鉢	A3	平	口縁部～底部　ほぼ完形	R↓	高:43.9 口:20.9 底:10.0	にぶい黄橙/にぶい褐		/ススI		
426	16B-2号埋設土器		XI	②	深鉢			胴部片3/5		高:（28.4）	灰褐/にぶい橙	白色粒子	/ススI	三十稲場	
427	16B-3号埋設土器		XIII	1	深鉢			胴部～底部9/10	LR→	高:（36.2） 底:10.0	にぶい橙/黄橙		/ススI		

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
428	16B-4号埋設土器		Ⅸ	4③	深鉢	A6	平	口縁部～底部7/9	RL（磨消）	高:30.7 口:22.1 底:9.0	黒褐/にぶい橙	白色粒子	/ス ス		
429	16B-5号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢	A1	平	口縁部～胴部1/3	LR↓	高:（37.9） 口:30.8	灰褐/浅黄橙	白色粒子・海綿・赤色粒子			
430	16B-6号埋設土器		ⅩⅢ	2	深鉢	A3	平	口縁部～底部1/2		高:52.2 口:27.8 底:18.0	浅黄橙/浅黄橙		/ス ス		底部に笹状圧痕
431	16C-1号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部片	L		黒褐/にぶい褐	石英	オコゲ/ス ス		
432	16C-3号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢	A1	平	口縁部～底部1/2	撚糸L	高:（15.4） 口:（18.3） 底:10.3	にぶい褐/にぶい黄橙	白色粒子	/ス ス		底部に笹状圧痕
433	16C-4号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～底部3/5	LR↓	高:54.1 口:31.2 底:15.4	にぶい橙/浅黄橙	赤色粒子・海綿			
434	16C-5号埋設土器		Ⅹ	2	深鉢			胴部片1/3	撚糸L	高:（21.0）	にぶい黄橙/にぶい橙	海綿	オコゲ/ス ス		
435	16D-1号埋設土器		ⅩⅠ	②	深鉢			胴部～底部		高:（16.0） 底:6.7	にぶい褐/にぶい黄橙	白色粒子	/ス ス	三十稲場	
436	16D-2号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部5/7	撚糸L	高:（43.8） 底:15.5	浅黄橙/にぶい橙	小礫	オコゲ/ス ス		底部に笹状圧痕
437	16D-3号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部4/5	撚糸L	高:（47.8） 口:（26.7）	にぶい黄橙/にぶい橙	海綿・石英	オコゲ/ス ス		
438	16D-4号埋設土器		Ⅸ	4②	深鉢	A2	平	口縁部～底部9/10	RL（磨消）	高:48.0 口:38.0 底:11.5	橙/橙	角閃石	/ス ス		
439	16D-6号埋設土器		ⅩⅡ	1	深鉢		平	口縁部～底部　完形	撚糸L	高:22.2 口:23.3 底:10.4	黒褐/灰褐		/ス ス	三十稲場	底部に笹状圧痕？
440	16E-1号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢		突	口縁部～底部2/7	LR↓	高:24.7 口:（20.0） 底:10.0	黒褐/にぶい橙	海綿・石英	/ス ス		
441	16E-2号埋設土器		Ⅸ	6	深鉢	A3	平	口縁部～底部7/9	撚糸L	高:（53.1） 口:28.6 底:18.1	橙/にぶい黄橙	石英		大木10	
442	16E-3号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部3/5	撚糸L	高:28.0 底:14.0	浅黄橙/黄橙				
443	16E-4号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢		平	胴部片1/4	撚糸L	高:（28.6）	褐灰/にぶい黄橙	白色粒子	/ス ス		
444	17B-4号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			底部2/3		高:（7.4） 底:7.0	黒褐/褐灰	白色粒子			底部に笹状圧痕
445	17B-5号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部片1/2	撚糸R	高:（30.9）	灰褐/にぶい赤褐	白色粒子	/ス ス		
446	17C-1号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～底部6/7	LR	高:35.8 口:22.5 底:11.0	にぶい黄橙/にぶい橙	海綿	/ス ス		
447	17C-2号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部1/2	撚糸L	高:（18.9） 底:13.0	浅黄橙/浅黄橙		オコゲ/		
448	17C-3号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			底部3/5		高:（10.8） 底:12.4	灰褐/灰黄褐	角閃石・白色粒子	/ス ス		底部に網代圧痕
449	17D-2号埋設土器		Ⅸ	6	深鉢	A1	平	口縁部～底部9/10	撚糸L	高:33.6 口:18.1 底:11.0	黄橙/にぶい黄橙		オコゲ/ス ス	大木10	底部に笹状圧痕？
450	18B-1号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢	A6	平	口縁部～底部3/5	撚糸l	高:（41.4） 底:28.0	にぶい橙/にぶい橙		オコゲ/ス ス		
451	18B-2号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/5	撚糸r	高:（16.6） 底:17.0	灰白/灰白	赤色粒子	/ス ス		底部に木葉圧痕
452	18D-1号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/3	LR	高:（34.1） 底:12.2	にぶい橙/にぶい橙	白色粒子	/ス ス		底部に笹状圧痕
453	19B-1号埋設土器		ⅩⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/3	LR↓	高:（42.0） 口:（34.0）	黄橙/灰褐	砂	オコゲ/ス ス		
454	21F-1号埋設土器		Ⅸ	3	深鉢	A4	平	口縁部～胴部3/4	RLR↓（磨消）	高:（24.4） 口:28.6	灰黄褐/灰黄褐	角閃石	/ス ス	大木9	
457	12B-P7		Ⅸ		注口土器		平	口縁部片	LR→・LR（磨消）		にぶい橙/にぶい橙	白色粒子	オコゲ/ス ス	大木9	
458	12D-P4		ⅩⅢ	1	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/4	RL→↓	高:（20.7） 口:（30.0）	浅黄橙/黒褐	白色粒子	/ス ス		
459	12D-P4		Ⅸ	4	深鉢	A6	平	口縁部片1/8	LR→・LR（磨消）		にぶい橙/にぶい黄橙	海綿	/ス ス	大木10	

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
460	13E-P3・4・7	Ⅲ	ＸⅠ	1	深鉢	C1	平	口縁部片1/2	LR↓	高:（11.9） 口:（25.2）	浅黄橙/浅黄橙	赤色粒子	/ススス	三十稲場	
461	13D-P20		Ⅸ		台付土器			台部1/2		高:（3.6） 底:5.8	赤褐/橙	石英			
462	14F-P6		ＸⅠ		蓋			1/2		高:1.7 直:6.0	明黄橙/にぶい黄橙	海綿		三十稲場	
463	13C-P1	Ⅲ	Ⅸ	4③	深鉢	A7？	平	口縁部～胴部1/3	RL（磨消）	高:（14.3） 口:34.0	灰褐/にぶい赤褐	海綿	オコゲ/ススス		
464	13C-P1	Ⅲ	Ⅸ	4③	深鉢			胴部片1/6	RL（磨消）	高:（32.4）	にぶい褐/灰褐	海綿	オコゲ/ススス		
466	15C-P9		Ⅸ	4	深鉢		平	口縁部片	RL→		黒褐/黒褐	白色粒子	/ススス		
600	12C12.13	Ⅱ	Ⅸ	3	深鉢	B1	波	口縁部～胴部3/5	LR（充填）	高:（27.3） 口:13.0	にぶい橙/にぶい橙	石英・雲母	オコゲ/ススス	大木9	
601	12B8　P-1		Ⅸ	4	深鉢	B1？	波	口縁部片1/6	LR（磨消）	高:（7.0） 口:（10.0）	褐灰/褐灰	白色粒子	オコゲ/ススス		
602	12C4 12B8	Ⅰ、Ⅱ	Ⅸ	4④	深鉢			胴部～底部2/3	LR（充填）	高:53.1 底:17.2	にぶい黄橙/にぶい橙	角閃石	/ススス		
603	15C15		Ⅸ	4③	深鉢	A3	平	口縁部～胴部1/3	RL（磨消）	高:（35.0） 口:（25.2） 底:11.4	浅黄橙/にぶい黄橙	海綿			
604	11D2	Ⅱ	Ⅸ	4③	深鉢	B2	波	口縁部～胴部2/3	LR（磨消）	高:（15.7） 口:（18.4）	暗褐/にぶい橙	海綿	/ススス		
605	14C8	Ⅱ	Ⅸ	4③	深鉢	B2	波	口縁部～胴部2/5	LR（磨消）	高:（19.2） 口:18.8	にぶい赤褐/灰褐	海綿	/ススス		
606	13C9	Ⅱ	Ⅸ	4③	深鉢	B2	波	口縁部片	LR（磨消）		にぶい黄橙/浅黄橙	海綿・砂			
607	9B 9C9.10	Ⅱ	Ⅸ	4②	深鉢	A2	平	口縁部～胴部1/2	LR（磨消）	高:17.7 口:19.9	にぶい橙/灰褐	角閃石	/ススス		
608	14C14.25	Ⅱ、Ⅲ	Ⅸ	4	深鉢	A6？		胴部片1/4	RL（磨消）	高:（18.4）	にぶい赤褐/にぶい褐	角閃石・海綿	/ススス	大木10	
609	13C2	Ⅱ	Ⅸ	4②？	深鉢	B1？		胴部～底部1/2	LR（磨消）	高:（14.0） 底:5.3	黒褐/にぶい赤褐	石英	/ススス		
610	15E21	Ⅱ	Ⅸ	5	深鉢		平	口縁部片	LR		黒/極黒赤褐	雲母		大木10	内外面を赤彩・黒彩。611と612は同一個体
611	15E21	Ⅱ	Ⅸ		深鉢			胴部片	LR		黒/黒褐	雲母		大木10	内外面を赤彩・黒彩。610と612は同一個体
612	14F13	Ⅱ	Ⅸ	4	深鉢			底部1/1		高:（2.0） 底:7.8	褐灰/にぶい褐	雲母		大木10	内外面を赤彩・黒彩。610と611は同一個体
613	15C23		Ⅸ	4	深鉢	B2	平	口縁部～胴部1/2	LR（磨消）	高:22.4 口:28.0	にぶい褐/灰褐	海綿	オコゲ/ススス	大木10	
614	10B7	Ⅱ	Ⅸ	4	深鉢			胴部片	LR↓		にぶい赤褐/灰褐	海綿・角閃石	/ススス	大木10	
615	14C9	Ⅱ	Ⅸ	4⑤？	深鉢			胴部～底部2/9	LR↓	高:（9.5） 底:6.0	黒褐/灰黄褐	角閃石		大木10	
616	11C12	Ⅱ	Ⅸ	5	深鉢	A6	平	口縁部片1/6	R（磨消）	高:10.4 口:23.0	黒褐/橙	白色粒子	オコゲ/ススス	大木10	
617	14F12	Ⅲ	Ⅸ	5	深鉢		平	口縁部片	撚糸L（充填）		灰黄褐/にぶい赤褐	角閃石	/ススス	大木10	
618	12D20	Ⅲ	Ⅸ	5	深鉢	A6	平	口縁部～胴部1/3	RL・LR（充填）	高:（25.2） 口:（19.0）	暗赤褐/にぶい赤褐		/ススス	大木10	
619	9B 9C5	Ⅱ	Ⅸ	5②	深鉢		平	口縁部～底部4/5	撚糸L（充填）	高:34.8 口:26.2 底:13.4	灰黄褐/灰褐		/ススス	大木10	底部に木葉圧痕
620	8B9	Ⅱ	Ⅸ				平	口縁部片	撚糸R		黒褐/にぶい橙	海綿	オコゲ/	大木10	
621	9C18	Ⅱ	Ⅸ	5				胴部片	撚糸R		にぶい褐/橙	小礫		大木10	
622	12D12	Ⅱ	Ⅸ	2	鉢？	A3	平	口縁部片1/8	縄	口:（16.4）	灰黄褐/黒褐			大木9	
623	12D9	Ⅱ	Ⅸ	4	鉢		突？	口縁部片	縄		黒/黒	白色粒子	オコゲ/ススス	大木10	
624	17C8	Ⅱ	Ⅸ	4	鉢？	A3	平	口縁部片	撚糸LR（磨消）		にぶい黄橙/灰黄褐	海綿	/ススス	大木9	
625	16E4	Ⅱ	Ⅸ	4⑤	鉢		平	口縁部片	LR（磨消）		灰褐/暗赤褐	角閃石・白色粒子			626と同一個体
626	16D24 16E4	Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ	Ⅸ	4⑤	鉢			底部1/1	LR（磨消）	高:5.0 底:6.6	灰褐/黒褐	角閃石・白色粒子			625と同一個体
627	10B16 10C13.18	Ⅰ、Ⅱ	Ⅸ	5②	鉢		平	口縁部片	RL（磨消）	高:（17.1） 口:（40.0）	橙/にぶい橙	白色粒子		大木10	
628	12E8	Ⅱ	Ⅸ	5②	鉢		平	口縁部片1/6	撚糸L（磨消）	高:（12.9） 口:（18.4）	黒褐/黒褐	雲母	オコゲ/オコゲ	大木10	
629	10B24	Ⅱ	Ⅸ	5②	鉢		平	口縁部～胴部2/5	撚糸L（磨消）	高:（13.6） 口:（21.9）	黒褐/にぶい橙	海綿	/ススス	大木10	
630	12E20.24	Ⅰ、Ⅱ	Ⅸ	5②？	鉢		平	口縁部～胴部	LR（磨消）		黒褐/黒	石英	オコゲ/ススス・オコゲ	大木10？	

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
631	12E2.12	Ⅰ、Ⅱ	Ⅸ	5	鉢	A3	平	口縁部～底部1/2		高:8.5 口:（14.2） 底:7.6	黒褐/黒	石英	オコゲ/オコゲ	大木10？	
632	13D19		Ⅸ	5②	鉢	B1	波	口縁部～胴部	LR（磨消）	高:（15.0） 口:（37.6）	黒/黒	黄色粒子		大木10	
633	17D15.20	Ⅱ	Ⅸ	4	浅鉢		平	口縁部～底部1/3	RL（磨消）	高:10.2 口:18.0 底:9.4	にぶい褐/黒褐		/ス ス	大木10	
634	15C10	Ⅱ	Ⅸ	5	浅鉢？		平	口縁部片	RL（磨消）		赤褐/赤褐		オコゲ/ス ス	大木10	内外面を黒彩？
635	15B16	Ⅱ	Ⅸ？	5	浅鉢		平	口縁部片			浅黄橙/浅黄橙	角閃石		大木10？	
636	17D2	Ⅱ	Ⅸ？	4	浅鉢		平	口縁部～胴部	LR↓		にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石・赤色粒子		大木10？	
637	9B 9C4～5	Ⅱ、Ⅲ	Ⅸ？	4	注口土器		平	口縁部～胴部1/1		高:（7.8） 口:（17.1）	極黒赤褐/黒	雲母多	オコゲ/ス ス・オコゲ	大木10？	
638	13D19.20	Ⅱ	Ⅸ		台付土器			胴部下半片3/5	LR→		灰黄褐/にぶい橙	海綿・白色粒子	オコゲ/		
639	13D11.12	Ⅱ、Ⅲ	Ⅸ		台付土器			台部2/3	LR↓	高:（3.5）	灰褐/にぶい橙	海綿・角閃石			
640	10C11～12	Ⅱ	Ⅸ	4	台付土器			胴部下半～台部3/4	L↓	高:（11.4） 底:9.0	褐灰/橙	角閃石・石英		大木10	
641	17D6.11	Ⅰ、Ⅱ	Ⅸ	5②	注口土器		平	口縁部片1/6	撚糸L	高:（8.9） 口:（29.0）	黒褐/にぶい赤褐	石英	オコゲ/ス ス	大木10	642と同一個体
642	17D6	Ⅰ、Ⅱ	Ⅸ	5②	注口土器		平	口縁部～胴部	撚糸L		にぶい褐/にぶい褐	石英	オコゲ/ス ス	大木10	641と同一個体
643	12C5	Ⅱ	Ⅸ	5	注口土器		平	口縁部～胴部	RL	高:（19.0） 口:（23.9）	にぶい褐/灰褐	石英	/ス ス	大木10	
644	12E7 13E7	Ⅰ、Ⅱ	Ⅸ	5	壷形土器		平	口縁部片			にぶい橙/にぶい黄橙	白色粒子		大木10	645と同一個体。646と同一個体？
645	10D24.25 12D25	Ⅱ	Ⅸ	5	壷形土器			胴部片			にぶい橙/浅黄橙	白色粒子		大木10	644と同一個体。646と同一個体？
646	12E6.20	Ⅰ、Ⅱ	Ⅸ		壷形土器？			底部1/4	LR↓	高:（9.8） 底:13.0	にぶい黄橙/にぶい黄橙	白色粒子			644と645同一個体？
647	12B7		Ⅸ	6	深鉢		平	口縁部～底部9/10	撚糸L	高:46.6 口:27.6 底:14.6	浅黄橙/にぶい黄橙		オコゲ/ス ス	大木10	底部に木葉圧痕
648	16D3	Ⅱ	Ⅹ		深鉢	A4	波	口縁部片	RL（磨消）		橙/暗赤褐	小礫	/ス ス	加曽利E	
649	13D4.21	Ⅱ	Ⅹ		深鉢？		平？	口縁部片	LR（磨消）		にぶい褐/にぶい橙	角閃石		加曽利E	
650	11B7	Ⅰ、Ⅱ	Ⅹ		不明		平	口縁部片	LR（磨消）		黒褐/黒褐		オコゲ/オコゲ	加曽利E	
651	9C3.10.15	Ⅱ、Ⅲ	Ⅹ		深鉢		平	口縁部～胴部1/3	LR（磨消）	高:（14.6） 口:（25.0）	浅黄橙/灰褐	角閃石・赤色粒子		加曽利E	
652	8E1	Ⅱ	Ⅹ		不明		平	口縁部片1/3	RL（充填）	高:（10.8） 口:（30.0）	灰褐/灰褐	海綿多		加曽利E	
653	10C14	Ⅱ	Ⅹ		深鉢		突	口縁部片	LR（磨消）		灰褐/赤黒	海綿	/ス ス	加曽利E	
654	19C2		Ⅹ				突	突起片	RL		にぶい黄橙/橙	角閃石・海綿		加曽利E	
655	17B7	Ⅲ	Ⅹ？				突	突起片	LR↓		橙/暗赤褐		/ス ス	加曽利E？	
656	14F2	Ⅱ	Ⅹ？				突	突起片	LR		褐灰/にぶい橙		/ス ス	加曽利E？	
657	11D14	Ⅱ	Ⅹ？				突	突起片			にぶい黄橙/にぶい黄橙	白色粒子		加曽利E？	
658	15F3	Ⅱ	Ⅹ？				突	突起片			にぶい橙/にぶい橙	角閃石		加曽利E？	
659	11B13	Ⅲ	Ⅹ？				突	突起片			橙/橙	石英		加曽利E？	
660	16E11	Ⅲ	ⅩⅢ				平	口縁部片			黒褐/黒	白色粒子	オコゲ/ス ス		
661	10D7	Ⅱ	Ⅹ		深鉢		波	口縁部片	LR（磨消）		にぶい橙/にぶい褐	白色石		加曽利E	662と同一個体
662	10D6	Ⅱ	Ⅹ		深鉢			胴部片	LR（磨消）		にぶい褐/にぶい褐	白色石		加曽利E	661と同一個体
663	12C13.14	Ⅱ	Ⅹ	1？	深鉢		波	口縁部～胴部	LR（磨消）		にぶい黄橙/灰褐	石英・雲母	/ス ス	加曽利E	
664	10D7.8.25	Ⅰ	Ⅹ		深鉢	C1	平	口縁部～胴部1/4		高:（17.1） 口:（15.1）	灰黄褐/にぶい橙	角閃石・白色粒子		加曽利E	
665	12C16	Ⅱ	Ⅹ		注口土器		突	口縁部～底部3/4		高:（10.1） 口:12.0 底:6.2	黒褐/黒	白色粒子・石英	オコゲ/ス ス・オコゲ	加曽利E	
666	10C14	Ⅱ	Ⅹ	2	深鉢		平	口縁部片	RL↓		にぶい黄橙/にぶい橙	角閃石	/ス ス	加曽利E？	
667	12E12.18 15C5	Ⅱ、Ⅲ	Ⅹ？		吊り手		突	口縁部～底部1/2		高:11.8 口:（13.5） 底:8.4	灰褐/灰黄褐	小礫	オコゲ/ス ス	加曽利E？	
668	14D13.17	Ⅱ、Ⅲ	ⅩⅠ	1	深鉢		平	口縁部～胴部1/4	LR↓	高:（11.3） 口:（18.6）	にぶい橙/橙	角閃石	/ス ス	三十稲場	
669	13E14	Ⅰ、Ⅱ	ⅩⅠ	1	深鉢		平	口縁部片	撚糸L		暗赤褐/にぶい褐		オコゲ/ス ス	三十稲場	670と同一個体
670	13E14	Ⅱ	ⅩⅠ		深鉢			胴部片	撚糸L		にぶい褐/にぶい褐			三十稲場	669と同一個体

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
671	14D8	Ⅱ	ＸⅠ	1	深鉢	C1	平	口縁部～胴部2/3	LR↓	高:（10.2） 口:12.8	灰褐/にぶい赤褐	角閃石	オコゲ/ススオコゲ	三十稲場	
672	9C21	Ⅰ	ＸⅠ	1	深鉢	C1	平	口縁部片	LR↓・結節↓		暗赤褐/にぶい橙			三十稲場	
673	16D24	Ⅱ	ＸⅠ	3②	深鉢		平	口縁部～胴部1/6		高:（10.5） 口:（25.8）	灰褐/黒	白色粒子・石英		三十稲場	
674	10B17.21.22	Ⅱ	ＸⅠ	3③	深鉢		平	口縁部片1/4		高:（10.6） 口:（21.2）	浅黄橙/にぶい橙	白色粒子	/ススス	三十稲場	
675	18E6	Ⅱ	ＸⅠ	4	深鉢		平	口縁部～胴部1/2	LR↓	高:（16.8） 口:17.2	黒褐/暗赤褐	雲母	/ススオコゲ	三十稲場	
676	10D4.5.10	Ⅰ、Ⅱ	ＸⅠ	5②	深鉢		平	口縁部～底部1/2		高:28.1 口:（16.5） 底:11.9	にぶい赤褐/灰褐	白色粒子	/ススス	三十稲場	底部に木葉圧痕
677	14B22	Ⅱ	ＸⅠ	1	鉢	A3	平	口縁部片	RL→		暗赤褐/にぶい赤褐	角閃石・石英	/ススス	三十稲場	
678	11C19	Ⅱ	ＸⅠ		鉢	C1	平	口縁部片	LR↓		黒褐/にぶい褐	石英・小礫	/ススス	三十稲場	
679	12C11	Ⅱ	ＸⅠ	2	深鉢		平	口縁部～底部1/2	撚糸R（網目状）	高:30.2 口:26.2 底:14.4	灰褐/にぶい橙	白色粒子	/ススス	三十稲場	
680	11B21	Ⅰ、Ⅲ	ＸⅠ	2②	深鉢		平	口縁部～底部4/7		高:21.2 口:21.8 底:11.8	極黒赤褐/にぶい赤褐	石英	オコゲ/ススス	三十稲場	底部に木葉圧痕
681	14D2	Ⅲ	ＸⅠ	4②	深鉢		平	口縁部～底部1/2		高:18.7 口:15.4 底:10.0	灰褐/灰黄褐	石英		三十稲場	
682	10B22.23 10C1.3	Ⅰ、Ⅱ	ＸⅠ	3②	深鉢	C2	平	口縁部～底部2/5		高:（25.0） 口:（19.0） 底:13.4	橙/浅黄橙	角閃石・石英		三十稲場	
683	12B14.15	Ⅰ、Ⅱ	ＸⅠ	4②	深鉢	C2	平	口縁部～胴部1/2		高:（15.2） 口:（21.0）	にぶい橙/にぶい褐	石英	/ススス	三十稲場	
684	15F2.3	Ⅰ、Ⅱ	ＸⅠ	③	深鉢	C2	平	口縁部～底部1/2		高:（17.0） 口:（15.6） 底:9.6	にぶい橙/にぶい褐	海綿	オコゲ/ススス	三十稲場	底部に笹状圧痕
685	16E1		ＸⅠ	1④		C2	平	口縁部片1/4		高:（6.1） 口:24.0	にぶい黄橙/にぶい赤褐	白色粒子	/ススス	三十稲場	
686	H4試掘　T15	Ⅱ	ＸⅠ	1	深鉢	C2	平	口縁部片	撚糸r		浅黄橙/灰褐		/ススス	三十稲場	
687	13D2		ＸⅠ	2	深鉢	C2	平	口縁部片	撚糸L		黒褐/浅黄橙	石英	オコゲ/ススス	三十稲場	
688	14D25	Ⅱ	ＸⅠ	3②	深鉢	C2	平	口縁部片			にぶい黄橙/浅黄橙	石英	/ススス	三十稲場	
689	14E24	Ⅱ	ＸⅠ	2	深鉢	C2	平	口縁部片1/4	撚糸L↓	高:（10.2） 口:（37.6）	にぶい橙/浅黄橙	石英・白色粒子		三十稲場	
690	12C15	Ⅱ	ＸⅠ	3②	深鉢	C2	平	口縁部片			にぶい橙/にぶい橙	赤色粒子・小礫	/ススス	三十稲場	
691	14F1	Ⅱ	ＸⅠ	3②	深鉢		平	口縁部片			にぶい橙/にぶい橙	石英	オコゲ/ススス	三十稲場	
692	17B7	Ⅱ	ＸⅠ	4	深鉢？		突？	口縁部片			褐灰/黒褐	白色粒子		三十稲場	
693	17D4	Ⅱ	ＸⅠ	4	深鉢		平	口縁部片	撚糸L		にぶい橙/にぶい褐		/ススス	三十稲場	
694	14C24	Ⅲ	ＸⅠ	5②	深鉢		平	口縁部片		高:（5.4） 口:（13.6）	褐灰/にぶい橙	石英・海綿	オコゲ/ススス	三十稲場	
695	15D14	Ⅱ	ＸⅠ	5③	深鉢		平	口縁部片			黒褐/灰褐	海綿	オコゲ/ススス	三十稲場	
696	8E18	Ⅱ	ＸⅠ	5④	深鉢		平	口縁部片			灰褐/赤	白色粒子		三十稲場	
697	14B19	Ⅱ	ＸⅠ	②	深鉢		平	口縁部片			にぶい褐/黒褐	石英	/ススス	三十稲場	
698	10C5	Ⅱ	ＸⅠ	②	深鉢		平	頸部片			褐灰/灰褐	白色粒子	/ススス	三十稲場	
699	10C6	Ⅱ	ＸⅢ		深鉢		平	口縁部～胴部1/6	撚糸R	高:（14.6） 口:（18.4）	にぶい黄橙/にぶい橙	石英・海綿			
700	16C18	Ⅱ	ＸⅠ	②、⑤	蓋？		平	口縁部片か蓋			灰褐/にぶい橙	白色石		三十稲場	
701	16C1	Ⅱ	ＸⅠ	②	深鉢		平	口縁部片			にぶい黄橙/にぶい橙		/ススス	三十稲場	
702	10C5	Ⅱ	ＸⅠ	6	浅鉢		平	口縁部片			にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石		三十稲場	
703	12B21	Ⅱ	ＸⅠ	6	浅鉢		平	口縁部～底部1/3		高:（11.1） 口:（17.8） 底:8.6	にぶい黄橙/浅黄橙	石英・赤色粒子		三十稲場	
704	16E6　T2	Ⅱ	ＸⅠ	6？	浅鉢		平	口縁部片			浅黄橙/灰白	赤色粒子・角閃石		三十稲場	
705	15E6	Ⅱ	ＸⅠ	6？	浅鉢			胴部片			灰褐/灰褐	海綿・石英		三十稲場	
706	15D14	Ⅱ	ＸⅠ	6？	浅鉢			胴部片			にぶい橙/にぶい橙	石英	/ススス	三十稲場	
707	16D14	Ⅱ	ＸⅠ	6？	注口土器		平	口縁部片			灰褐/にぶい橙	海綿・角閃石		三十稲場	
708	11B15	Ⅰ	ＸⅠ	②	特殊			胴部～底部1/1		高:（7.8） 底:6.0	灰褐/灰褐	赤色粒子・角閃石		三十稲場	

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
709	10B11	Ⅰ	ⅩⅠ		蓋	B		1/3		高:2.3 直:13.5	橙/橙	赤色粒子		三十稲場	
710	13D16.22	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋	B		3/4		高:2.9 直:（11.5）	浅黄橙/灰白	角閃石・赤色粒子		三十稲場	
711	13E7　T2	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋	A		1/1		高:2.2 直:10.6	にぶい黄橙/灰褐	角閃石・小礫		三十稲場	
712	12C1	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋	A		1/1		高:10.1 直:8.0	にぶい黄橙/にぶい黄橙	石英・海綿		三十稲場	
713	10C18	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋	E		ほぼ完形		高:2.8 直:（9.4）	黒褐/褐灰	小礫		三十稲場	
714	12E16	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋	A		1/2		高:2.1 直:13.2	にぶい黄橙/にぶい黄橙	小礫		三十稲場	
715	10C20.25	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋	B		1/3		高:（3.7） 直:14.0	にぶい橙/にぶい橙	角閃石		三十稲場	
716	9B13	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋	B		1/2	LR→	高:（2.9） 直:（17.6）	橙/にぶい橙	雲母・石英		三十稲場	
717	14D12	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋	B		ほぼ完形		高:2.1 直:8.1	にぶい橙/にぶい橙	海綿		三十稲場	
718	不明	不明	ⅩⅠ		蓋	B		2/3		高:1.6 直:（7.9）	赤/赤	白色粒子・海綿		三十稲場	
719	14C6	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋	C		1/1		高:3.2 直:10.0	にぶい黄橙/にぶい橙	角閃石・赤色粒子		三十稲場	
720	14B		ⅩⅠ		蓋	D		1/3		高:（3.8） 直:13.8	にぶい褐/黒褐	角閃石・赤色粒子		三十稲場	
721	10B16	Ⅰ	ⅩⅠ		蓋	D		1/3		高:3.9 直:11.7	黒褐/灰褐	海綿・白色粒子		三十稲場	
722	10B17.21	Ⅰ、Ⅱ	ⅩⅠ		蓋	D		1/4		高:（3.6） 直:（21.7）	にぶい赤褐/にぶい赤褐	海綿・石英		三十稲場	
723	16E1	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋	E		1/1		高:4.6 直:6.7	黒褐/黒褐	白色粒子		三十稲場	
724	11B		ⅩⅠ		蓋						にぶい橙/にぶい橙	白色粒子		三十稲場	
725	14F2	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋						にぶい黄橙/にぶい橙			三十稲場	
726	15C19	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋						赤褐/赤褐	雲母・白色粒子		三十稲場	
727	11E3	Ⅲ上	ⅩⅠ		蓋						灰褐/灰褐	白色粒子		三十稲場	
728	13B18	Ⅰ	ⅩⅠ		蓋						にぶい褐/橙			三十稲場	
729	14C6	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋						灰褐/灰褐	石英		三十稲場	内外面を赤彩
730	11E4	Ⅲ上	ⅩⅠ		蓋						赤褐/明赤褐	白色粒子・石英		三十稲場	
731	11E5	Ⅰ	ⅩⅠ		蓋						にぶい黄橙/にぶい橙	角閃石	オコゲ/ススス	三十稲場	
732	10C6	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋						灰黄褐/にぶい黄橙	白色粒子		三十稲場	
733	12C9 12E5	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋			1/3		高:（3.3） 直:（1.9）	にぶい橙/にぶい黄橙			三十稲場	
734	12B17.21	Ⅰ、Ⅱ	ⅩⅠ		蓋						にぶい赤褐/橙	雲母・角閃石	/ススス	三十稲場	
735	11D9	Ⅲ	ⅩⅠ		蓋						にぶい赤褐/にぶい赤褐		/ススス	三十稲場	
736	10B16	Ⅰ	ⅩⅠ		蓋						橙/橙	石英		三十稲場	
737	11C9	Ⅰ	ⅩⅠ		蓋						にぶい褐/灰褐	石英		三十稲場	
738	11B21	Ⅰ	ⅩⅠ		蓋						にぶい赤褐/橙	角閃石		三十稲場	
739	15F11	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋						にぶい橙/にぶい橙	角閃石・石英		三十稲場	
740	11D14 12C12	Ⅰ、Ⅱ	ⅩⅠ		蓋						にぶい橙/橙	角閃石		三十稲場	
741	11C18	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋？						にぶい橙/にぶい赤褐			三十稲場	
742	16E3	Ⅱ	ⅩⅠ		蓋				RL		にぶい橙/灰褐		オコゲ/	三十稲場	
743	12D19		ⅩⅡ	1	深鉢		平	口縁部～胴部1/3	撚糸L	高:（15.7） 口:（24.4）	褐灰/にぶい褐	角閃石・白色粒子	/ススス	後期前葉	
744	14E6	Ⅰ、Ⅱ	ⅩⅡ	1	不明		平	口縁部～胴部1/4	LR↓	高:（7.5） 直:23.6	にぶい褐/灰褐	石英		後期前葉	
745	11B15	Ⅱ	ⅩⅡ	2			平	口縁部片			にぶい黄橙/灰褐		/ススス	後期前葉	
746	14F1	Ⅱ	ⅩⅡ	2			平	口縁部片	LR		にぶい橙/灰褐	角閃石・石英	/ススス	後期前葉	
747	15B16		ⅩⅡ	2			平	口縁部片			褐灰/灰褐		/ススス	後期前葉	
748	15D6	Ⅱ	ⅩⅡ				平	口縁部片			浅黄橙/にぶい黄橙	角閃石	/ススス		
749	14B6.7　T1	Ⅰ	ⅩⅡ	2	深鉢		平	口縁部片	LR↓		にぶい黄橙/灰白	角閃石			
750	11D18.19	Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ上	ⅩⅡ	3	深鉢		平	口縁部～胴部1/3	撚糸LR	高:（11.2） 口:（21.2）	にぶい橙/灰褐	白色粒子・石英	/ススス		

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
751	11C11.12	Ⅱ	ⅩⅡ		深鉢		平	口縁部～胴部	撚糸R		にぶい黄橙/にぶい橙	小礫			
752	9B15	Ⅱ	ⅩⅡ				平	口縁部片			浅黄橙/浅黄橙				
753	17D21	Ⅱ			不明			胴部片	撚糸L		にぶい褐/黒褐	海綿	/ス		
754	15E25	Ⅲ					波	突起片			にぶい赤褐/にぶい赤褐	小礫			
755	12B21	Ⅱ					突	突起片			にぶい黄橙/にぶい黄橙				
756	T11				深鉢		突	口縁部片	L↓		灰褐/橙	石英			
757	11D17	Ⅱ						把手			にぶい褐/にぶい褐	石英			
758	20D25	撹乱			深鉢			胴部片1/3	LR↓	高:（10.2）	にぶい褐/橙	角閃石・石英		南三十稲場	
759	15B14.15	Ⅰ、Ⅱ						胴部片1/4	L（磨消）	高:（7.8）	灰黄褐/灰褐	海綿・石英			
760	13C1	Ⅱ	ⅩⅣ	1			波	口縁部片			褐灰/灰褐	角閃石・海綿		加曽利B	
761	14C12	Ⅱ	ⅩⅣ	2			波	口縁部片	LR（磨消）		黒褐/灰黄褐	海綿	オコゲ/	加曽利B	
762	14E2	Ⅰ	ⅩⅣ	2			平	口縁部片	LR→（磨消）		黒褐/黒褐			加曽利B	
763	11D18	Ⅰ	ⅩⅣ	2③			波	口縁部片	RL（磨消）		にぶい黄橙/にぶい褐	角閃石・石英	/ス	加曽利B	
764	18B	Ⅰ	ⅩⅣ	2④	深鉢			口縁部片	RL		橙/明黄褐	白色粒子・石英	/ス	加曽利B	
765	14F3	Ⅱ	ⅩⅣ	2	深鉢		波	口縁部片	LR（磨消）		灰褐/黒褐	角閃石・石英	/ス	加曽利B	
766	14C13	Ⅱ	ⅩⅣ	2③	深鉢		波	口縁部片	LR（磨消）		黒褐/黒	白色粒子・石英	/ス	加曽利B	
767	13D　排土	排土	ⅩⅣ	2④				胴部片	RL（磨消）		灰褐/黒褐		/ス	加曽利B	
768	10C16	Ⅰ	ⅩⅣ	2④	深鉢		波	口縁部片			黒褐/にぶい赤褐	石英	オコゲ/	加曽利B	
769	11F17	Ⅱ	ⅩⅣ	2②	深鉢		波	口縁部片1/4	LR（磨消）	高:（11.3） 口:（26.2）	褐灰/にぶい黄橙	角閃石・石英		加曽利B	
770	14D15	Ⅱ	ⅩⅣ	2③	深鉢		波	口縁部片1/6	LR（磨消）	高:（12.6） 口:（19.4）	灰褐/黒褐	石英・雲母	/ス	加曽利B	
771	11G2	Ⅱ	ⅩⅣ	2⑤	深鉢		波	口縁部～胴部2/3	RL	高:（16.1） 口:18.4	黒褐/灰褐		オコゲ/ス・オコゲ	加曽利B	
772	14F15	Ⅱ	ⅩⅣ	2⑤	深鉢		波	口縁部片	LR（磨消）		橙/褐灰	角閃石・石英		加曽利B	
773	11G8.11	Ⅱ	ⅩⅣ	2⑤	深鉢		波	口縁部片1/3	LR	高:（8.8） 口:23.8	黒褐/黒褐	白色粒子		加曽利B	
774	不明	不明	ⅩⅣ				波	口縁部片			褐灰/黒	海綿		加曽利B	
775	15F6	Ⅱ	ⅩⅣ				波	口縁部片	LR		黒褐/にぶい褐	角閃石	/ス	加曽利B	
776	12C21	Ⅱ	ⅩⅣ				突	突起片			灰褐/灰褐		オコゲ/ス	加曽利B	
777	9B19.25	Ⅰ	ⅩⅣ	2⑤	深鉢		突	胴部～底部1/3		高:（10.8） 底:7.4	灰褐/橙	白色粒子・石英	オコゲ/ス	加曽利B	
778	14E10	Ⅰ	ⅩⅣ	2			突	口縁部片	RL（磨消）		灰褐/灰褐	角閃石		加曽利B	
779	14C13	Ⅱ	ⅩⅣ	2			突	口縁部片	LR（磨消）		灰黄褐/にぶい黄橙	石英		加曽利B	
780	不明	排土	ⅩⅣ		深鉢		突	口縁部片			黒褐/灰褐	石英		加曽利B	
781	14C14	Ⅲ	ⅩⅣ	2			突	突起片	LR（磨消）		灰黄褐/黒褐	石英		加曽利B	
782	14F3	Ⅱ	ⅩⅣ	2	不明		突	口縁部片	LR（磨消）		にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石・白色粒子・海綿	/ス	加曽利B	
783	12E・12F　排土	排土	ⅩⅣ		浅鉢		平	口縁部片			にぶい黄橙/にぶい黄橙	海綿	オコゲ/	加曽利B	
784	15E12	Ⅱ	ⅩⅣ	1	浅鉢		平	口縁部～底部5/8		高:6.4 口:13.2 底:4.0	灰黄褐/にぶい黄橙	石英		加曽利B	底部に木葉圧痕
785	10D7	Ⅱ	ⅩⅣ		注口土器		平	口縁部～底部5/7		高:12.6 口:7.8 底:4.0	黒褐/灰褐	海綿・白色粒子		加曽利B	底部に網代圧痕
786	13C25	Ⅱ	ⅩⅣ		注口土器			胴部～底部3/4		高:（5.6） 底:4.2	褐灰/にぶい赤褐	雲母・石英		加曽利B	底部に網代圧痕？
787	16B12	Ⅱ	ⅩⅣ		注口土器		平	口縁部片	L	高:（3.8） 口:5.8	黒褐/黒褐	海綿		加曽利B	
788	14D6	Ⅱ	ⅩⅣ		注口土器			注口部片			灰褐/灰褐	石英		加曽利B	
789	17B18	Ⅰ	ⅩⅣ		注口土器		平	口縁部～胴部			にぶい橙/にぶい赤褐	石英・角閃石	/ス	加曽利B	
790	12B15	Ⅰ	ⅩⅣ					注口部片			褐灰/にぶい橙	石英		加曽利B	
791	9B21	Ⅱ	ⅩⅣ		注口土器						灰褐/褐灰		/ス	加曽利B	
792	14D9	Ⅲ	ⅩⅣ		台付土器			台部		高:（2.2） 底:3.9	にぶい褐/褐灰	白色粒子・角閃石		加曽利B	
793	8C21	Ⅲ					平	口縁部片	LR→		黒/黒		オコゲ/ス・オコゲ		
794	17F12	Ⅱ	ⅩⅡ				突	突起片			橙/橙	石英			
795	13E6	Ⅱ	ⅩⅡ				突	突起片			浅黄橙/浅黄橙	角閃石			
796	14D16	Ⅲ	ⅩⅡ		深鉢		突	口縁部～胴部	撚糸L		にぶい橙/にぶい橙	海綿・石英			
797	9B17	Ⅱ	ⅩⅡ				突	口縁部～胴部			黒褐/灰黄褐	白色粒子	オコゲ/ス		

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
798	11D8～15	Ⅱ	ⅩⅡ		深鉢		平	口縁部片1/4		高:8.6 口:（18.0）	にぶい橙/灰褐		オコゲ/ススス		
799	11C5 12C6	Ⅱ	ⅩⅡ		鉢		平	口縁部片1/6		高:（6.8） 口:（9.8）	にぶい橙/黒褐	白色粒子			
800	9C25 10C11.13.16	Ⅱ	ⅩⅡ		深鉢		平	口縁部～胴部1/3	撚糸L	高:（14.4） 口:（31.1）	灰褐/褐灰	白色粒子・赤色粒子			
801	9C8.9.14.15 10D1.8	Ⅰ、Ⅱ	ⅩⅡ		不明		平	口縁部片1/2		高:（3.3） 口:（20.0）	橙/橙	角閃石・石英			
802	9B23	Ⅱ	ⅩⅡ				波	口縁部片			褐灰/にぶい橙	角閃石	オコゲ/		
803	11B21 11C2	Ⅰ、Ⅱ	ⅩⅡ		不明		平	口縁部～胴部1/3		高:（5.0） 口:14.6	黒褐/黒褐	白色粒子	オコゲ/ススス		
804	17D4.9	Ⅱ	ⅩⅡ		深鉢		平	口縁部片			にぶい黄橙/にぶい黄橙				
805	18D7	Ⅰ	ⅩⅡ		深鉢		平	口縁部片			浅黄橙/浅黄橙				
806	17G16	Ⅱ	ⅩⅠ		深鉢		平	口縁部片	LR↓		橙/灰褐	小礫・海綿	/ススス	三十稲場	
807	14F2	Ⅱ	ⅩⅡ		浅鉢		平	口縁部片			黒/黒		オコゲ/ススス・オコゲ		
808	16B19		ⅩⅡ		深鉢		平	口縁部片			黒褐/にぶい褐		オコゲ/ススス		
809	15F19	Ⅱ	ⅩⅡ		鉢		平	口縁部～胴部		高:（5.2） 口:（10.8）	黒/黒		オコゲ/ススス・オコゲ		
810	13E5	Ⅱ	ⅩⅡ		不明		平	口縁部片1/4	LR	高:4.6 口:（20.4）	褐灰/褐灰	海綿	/ススス		
811	18D13	Ⅱ	ⅩⅡ		鉢	A5	平	口縁部片			褐灰/灰褐	角閃石・白色粒子			
812	13E11.16	Ⅱ	ⅩⅡ		深鉢			胴部～底部1/4		高:（10.6）	灰黄褐/にぶい褐	海綿	/ススス		底部に木葉圧痕？
813	12E7	Ⅱ	ⅩⅢ	1	深鉢		平	口縁部～胴部1/1	撚糸L	高:（13.0） 口:10.7	褐灰/橙	雲母・角閃石	オコゲ/		
814	14C14.19	Ⅱ	ⅩⅢ	2	深鉢		波	口縁部～胴部1/3		高:18.0 口:15.4	にぶい赤褐/にぶい赤褐	白色粒子・海綿	/ススス		
815	14D9	Ⅱ	ⅩⅢ	1	深鉢		平	口縁部～底部2/3	撚糸L	高:51.6 口:30.0 底:15.8	浅黄橙/浅黄橙	小礫	オコゲ/ススス		
816	14D9	Ⅱ	ⅩⅢ	1	深鉢		平	口縁部～底部3/4	撚糸L	高:50.2 口:29.0 底:14.2	にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石・海綿	/ススス		
817	10B17	Ⅱ	ⅩⅢ	1	深鉢		平	口縁部～胴部3/4	撚糸L	高:（20.7） 口:22.7	褐灰/灰褐	角閃石・黄色粒子	/ススス		
818	16D15	Ⅱ	ⅩⅢ	1	深鉢		平	口縁部～胴部2/5	LR↓	高:29.4 口:26.8	橙/にぶい褐	石英	/ススス		
819	12B7	Ⅲ	ⅩⅢ	1	深鉢		平	口縁部～胴部2/9	LR↓	高:21.1 口:（23.4）	にぶい黄橙/にぶい橙	海綿	/ススス		
820	14F3	Ⅱ	ⅩⅢ	1			平	口縁部片	LR→↓		暗赤褐/黒	海綿			
821	11C7	Ⅰ	ⅩⅢ	1				胴部片	LR→		橙/橙				
822	14D8		ⅩⅢ	1	深鉢			胴部～底部2/5	LR	高:29.3 底:13.2	にぶい橙/浅黄橙		/ススス		
823	13B11		ⅩⅢ	2	深鉢		平	口縁部～胴部1/2		高:（28.0） 口:（27.0）	にぶい黄橙/にぶい黄橙	白色粒子・角閃石	/ススス		
824	13G8	Ⅰ、Ⅱ						底部1/2		高:（2.3） 底:11.0	浅黄橙/浅黄橙				底部に木葉圧痕？
825	13F4	Ⅱ						底部3/4		高:（1.6） 底:7.0	灰黄褐/灰黄褐	白色粒子			
826	10C9	Ⅰ						底部1/1		高:（1.5） 底:7.2	灰黄褐/褐灰	白色粒子			底部に木葉圧痕
827	19F6	Ⅰ	ⅩⅠ？					底部1/6	LR↓	高:（3.4） 底:14	橙/橙	石英			底部に網代圧痕
828	14C6	Ⅱ	ⅩⅣ					底部2/3		高:（1.2） 底:8.4	灰褐/灰褐	海綿・石英			底部に網代圧痕
829	19F4	Ⅰ						底部1/4		高:（2.3） 底:13.4	橙/にぶい赤褐	雲母・白色粒子			底部に網代圧痕
830	19G2　T3							底部3/4		高:（2.2） 底:14.8	浅黄橙/黄橙				底部にカゴ状圧痕
831	14C2	Ⅱ						底部1/2		高:（3.0） 底:10.0	にぶい橙/灰褐	海綿・石英			底部に網代圧痕
832	12E24	Ⅱ	ⅩⅢ		ミニチュア深鉢		平	口縁部～底部		口:8.3 底:4.6	灰褐/灰褐	海綿・石英			

No.	遺構名・出土位置	層　位	系統	文様分類	器種	器形	口縁	残存部位・残存率	縄文原体	計測値（cm）	色調内/外	混和材等	付着物（内/外）	時　期	備　考
833	15E25	Ⅲ			小型深鉢		平	口縁部～底部1/3		高:9.4 口:9.8 底:4.6	にぶい黄橙/にぶい黄橙	角閃石			
834	11C23	Ⅱ	XⅢ		ミニチュア深鉢		平	口縁部～底部　ほぼ完形	L↓	高:5.9 口:4.8 底:3.8	にぶい黄橙/にぶい黄橙				
835	16C14	Ⅱ	XⅢ		深鉢		平	口縁部～底部1/2	LR↓	高:6.2 口:5.0 底:4.2	灰黄褐/にぶい黄橙	赤色粒子	オコゲ/		
836	9C8.10.14	Ⅱ			小型鉢			胴部～底部1/1		高:（7.9） 底:7.2	にぶい褐/にぶい赤褐	石英	オコゲ/ススス		
837	15B19	Ⅱ	XⅢ		ミニチュア深鉢			胴部片1/4	LR↓	高:（5.2） 底:4.2	黒褐/灰褐	白色粒子			内面を黒彩
838	13C25 14C16	Ⅱ	XⅢ		ミニチュア深鉢			胴部～底部1/2	RL→↓	高:7.5 底:3.6	灰褐/褐灰				
839	不明		XⅢ		ミニチュア深鉢			胴部～底部1/2		高:（3.2） 底:2.7	灰黄褐/にぶい黄橙	海綿			
840	12F4	Ⅱ	XⅢ		ミニチュア深鉢			底部1/1		高:3.0 底:3.8	灰黄褐/灰黄褐	海綿多			
841	19F20	Ⅰ			不明						灰黄褐/にぶい黄橙	海綿			
842	10D5	Ⅱ			小型深鉢			底部1/2	LR↓	高:（6.0） 底:6.4	褐灰/橙	海綿・石英	オコゲ/ススス		
843	20E19	表土	XⅢ		ミニチュア深鉢			胴部～底部1/2		高:（5.2） :4.8	橙/にぶい黄橙	海綿			
844	14F2	Ⅱ	XⅢ		ミニチュア深鉢			胴部～底部2/3		高:（4.6） 底:3.4	浅黄橙/にぶい黄橙	石英	/ススス		
845	不明	Ⅱ	XⅢ		ミニチュア深鉢			胴部～底部1/1		高:（2.6） 底:3.8	褐灰/にぶい褐	海綿			
846	10C1	Ⅰ	XⅢ		ミニチュア深鉢			底部1/1		高:4.6 底:3.4	にぶい橙/にぶい橙	赤色粒子			
847	12D18 12F3 15F23	Ⅱ			小型鉢	A2	平	口縁部～底部1/4	LR↓	高:（5.8） 口:（9.0） 底:3.4	褐灰/褐灰	白色粒子・角閃石			内外面を赤彩
848	11C21	Ⅱ			小型鉢	A3	平	口縁部片	LR↓		褐灰/黒				内外面を赤彩・黒彩
849	16C7.12	Ⅱ	XⅢ		ミニチュア鉢		平	口縁部～底部1/4		高:3.7 口:6.0 底:4.6	灰黄褐/浅黄橙	小礫			
850	17D8	Ⅱ	XⅢ		ミニチュア鉢		平	口縁部～胴部5/6		高:4.3 口:7.5 底:3.6	にぶい橙/にぶい橙	赤色粒子・角閃石・海綿			
851	10D12	Ⅱ			小型鉢	A2	平	口縁部～底部　ほぼ完形		高:5.2 口:11.4 底:6.7	灰褐/黒褐	石英	オコゲ/ススス		
852	15B17	Ⅲ	XⅢ		ミニチュア鉢		平	口縁部～底部1/3		高:3.8 口:7.2 底:3.4	灰褐/にぶい褐	石英・海綿	オコゲ/		
853	14F9	Ⅲ	XⅢ		ミニチュア鉢	A4？	平	口縁部～胴部1/3	L→	高:（3.9） 口:（11.8）	灰褐/灰褐	石英			
854	10D5	Ⅱ	XⅢ		ミニチュア鉢		平	口縁部～胴部			灰褐/にぶい褐	角閃石			
855	10C20	Ⅱ			不明			底部1/2		高:4.6 底:2.9	橙/橙	白色粒子			
856	11E15	Ⅱ			不明			口縁部片？			にぶい黄橙/黄橙				

土器片円盤観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	使用部位	遺存状況	備考
857	9E5	Ⅱ	A	5.9	6.2	1.1	50.6	胴部	完形	
858	不明		A	5.9	6.1	1.2	46.7	胴部	完形	
859	不明		A	5.3	5.9	1.6	53.2	胴部	完形	
860	16E7	Ⅱ	A	5.7	6.1	1.3	47.3	胴部	完形	
861	11E24	Ⅱ	A	5.0	5.7	0.8	26.1	胴部	完形	
862	12C19	Ⅱ	A	4.8	5.3	0.9	26.8	胴部	完形	
863	11E3	Ⅱ	A	4.9	5.2	1.2	27.4	胴部	完形	
864	不明		A	4.1	5.1	0.9	22.5	胴部	完形	
865	11C4	Ⅰ	A	4.2	5.2	0.9	20.2	胴部	完形	
866	16D20	Ⅱ	A	4.1	4.2	1.0	20.3	胴部	完形	
867	9B11	Ⅱ	B	5.6	5.8	1.2	42.0	胴部	完形	
868	11C20	Ⅱ	B	5.3	6.1	1.0	35.1	胴部	完形	
869	11E9	Ⅱ	B	4.7	5.6	1.0	27.8	胴部	完形	
870	14B6		B	4.9	5.1	1.0	25.7	胴部	完形	
871	12B7	Ⅲ	B	4.6	4.7	1.4	28.8	胴部	完形	
872	17C11	Ⅱ	B	4.2	4.3	1.4	27.9	胴部	完形	
873	10D15	Ⅱ	B	4.3	4.7	0.9	20.8	胴部	完形	
874	13D21	Ⅱ	B	4.1	4.5	1.1	18.6	胴部	完形	
875	11D18	Ⅱ	B	3.8	4.2	1.1	20.3	胴部	完形	
876	12C6	Ⅱ	B	3.5	4.4	0.8	14.4	胴部	完形	
877	15F24	Ⅲ	B	3.8	3.9	1.0	15.7	胴部	完形	
878	10C6	Ⅱ	B	3.5	3.6	1.2	14.5	胴部	完形	
879	12B21	Ⅱ	B	3.0	3.5	1.2	14.6	胴部	完形	
880	14C14	Ⅱ	B	3.0	3.4	0.9	10.1	胴部	完形	
881	9B21	Ⅱ	B	3.3	3.5	1.3	15.3	胴部	完形	
882	不明		B	3.4	3.5	1.1	12.9	胴部	完形	
883	11C16	Ⅱ	B	3.1	3.3	1.4	15.6	胴部	完形	
884	12E3	Ⅱ	B	3.0	3.2	1.1	10.8	胴部	完形	
885	12C13	Ⅱ	B	2.7	3.0	0.9	8.6	胴部	完形	
886	17C2	Ⅱ	B	2.8	3.0	0.9	8.8	胴部	完形	
887	12E11	Ⅱ	C	5.8	6.1	0.8	33.4	胴部	完形	
888	12E23	Ⅱ	C	5.1	5.6	1.1	38.8	胴部	完形	
889	11E9	Ⅱ	C	4.3	4.3	0.5	35.2	胴部	完形	
890	10E15	Ⅲ	C	4.2	4.3	1.1	23.4	胴部	完形	
891	15F7	Ⅱ	C	4.1	4.3	1.0	20.3	胴部	完形	
892	17D8	Ⅱ	C	3.6	3.8	1.1	18.2	胴部	完形	
893	14D2	Ⅲ	C	3.1	3.3	1.0	11.5	胴部	完形	
894	SK65	フク土	C	2.7	2.9	0.9	8.9	胴部	完形	
895	11B21	Ⅰ	C	2.9	2.9	1.0	8.4	胴部	完形	
896	12E12	Ⅱ	C	2.8	3.0	0.9	8.9	胴部	完形	
897	不明		C	2.7	2.8	0.8	7.6	胴部	完形	
898	12D14		C	2.2	2.2	0.8	5.0	胴部	完形	

土錘観察表

No.	出土地点	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	遺存状況	時期	備考
899	12E23	Ⅱ	3.8	2.6	2.0	20.0	完形	後期中葉	楕円球の短軸と側縁に溝が各一周する。

土製耳飾り観察表

（ ）は推定値

No.	出土地点	層位	高さ（cm）	直径（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	遺存状況	時期	備考
900	11B12	Ⅰ	1.6	2.3	0.8	6.2	ほぼ完形	中期末葉～後期初頭	小型の鼓状の耳飾り。
901	11C24	Ⅱ	3.2	(4.4)	1.2	8.8	破片	中期末葉～後期初頭	滑車形耳飾り。両側縁に刺突あり。
902	11D23	Ⅰ	3.3	(5.0)	1.3	14.9	1/3	中期末葉～後期初頭	滑車形耳飾り。両側縁に刺突あり。
903	不明		1.9	(5.7)	0.8	3.8	破片	後期中葉？	滑車形耳飾り。片側縁に1条の沈線が巡る。
904	10D5	Ⅱ	2.2	(6.0)	0.9	8.3	破片	後期中葉？	滑車形耳飾り。片側縁に2条の沈線が巡る。
905	不明		4.8	2.9		16.9	ほぼ完形	後期中葉？	スタンプ状の耳飾り。全面赤彩あり。
906	16C21	Ⅰ	(4.4)			9.3	軸部のみ	後期中葉？	スタンプ状の耳飾り。全面赤彩あり。

土製腕輪観察表

（ ）は推定値

No.	出土地点	層位	高さ（cm）	直径（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	遺存状況	時期	備考
907	11D25	Ⅲ	3.7	(8.0)	1.0	21.0	1/5	中期末葉～後期初頭	縄文LR地に上部･中央部･下部に円形刺突列。

土偶観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	部位	計測値（cm）	重さ（g）	文様・装飾	時期	備考
908	SK430	フク土	頭部	前後:3.0、左右:2.6	9.7	沈線、刺突	大木7b新？	河童形土偶。胎土に海綿骨針多い。頭部と胴部を繋ぐ芯棒の痕跡あり。
909	18E1	Ⅱ	頭部	前後:3.0、左右:3.7	16.9	隆帯	中期前葉～中葉	河童形土偶。胎土に海綿骨針多い。
910	15F13	Ⅱ	頭部を欠く上半身	両手間:7.3	35.9	刺突	中期前葉～中葉	
911	10D11	Ⅱ	胴部片	前後:3.3、左右:4.2	56.9	刺突	中期末葉～後期初頭	
912	11E11・12B11	Ⅱ	頭部、胸部を欠く上半身	両手間:15.1、胴部前後:2.5	338.0	刺突、隆帯	中期末葉～後期初頭	胎土に礫多い。大型板状土偶Aタイプ。
913	17B7	Ⅱ	胴部片	前後:2.2	49.2	沈線、刺突、隆帯	中期末葉～後期初頭	胎土に礫、海綿骨針多い。板状土偶。
914	19F21	Ⅲ	腹部を欠く胴部片	腰部前後:4.8、左右:6.4	130.6	沈線	中期前葉～中葉	胎土に砂、海綿骨針多い。脚部省略。板状土偶Bタイプ。
915	20F12	Ⅱ・Ⅲ	頭、胸、腹部を欠く上半身	両手間:8.3、腰部前後:2.6、左右:6.7	174.6	沈線	中期前葉～中葉	胎土に海綿骨針多い。板状土偶Aタイプ。
916	14F3	Ⅱ	胴部片	前後:1.8	46.9	沈線	中期前葉～中葉	胎土に角閃石、海綿骨針多い。板状土偶Aタイプ。
917	20F19	Ⅱ	胴部片	前後:1.7	18.8	沈線	中期前葉～中葉	胎土に海綿骨針多い。板状土偶。
918	17F7.18	Ⅲ	胴部片	腹部前後:4.0、腰部前後:4.7、左右:7.7	165.1	沈線	中期前葉～中葉	胎土に海綿骨針多い。板状土偶Bタイプ。
919	SX427	フク土	頭部、片腕を欠く上半身	胸部前後:2.6、左右:3.5	52.1	沈線	中期前葉～中葉	胎土に海綿骨針多い。板状土偶B？タイプ。
920	17C17	Ⅱ	頭、腕、胸部を欠く上半身	腰部前後:2.1、左右:4.4	61.0	沈線	中期前葉～中葉	板状土偶Aタイプ。脚部省略。
921	11C4	Ⅰ	腕部	腕部前後:1.8、上下:1.8	25.7	沈線	中期末葉～後期初頭？	頭部と胴部を繋ぐ芯棒の痕跡あり。
922	20F8	Ⅰ	腕部	腕部前後:2.2、上下:2.7	45.9	刺突	中期前葉～中葉	板状土偶。胎土に海綿骨針多い。
923	11C25	Ⅰ	腕部	腕部上下:2.1	10.3			
924	11C	Ⅱ	脚部	前後:4.4、左右3.2	44.0	LR縄文		胎土に角閃石多い。
925	14D8		脚部	前後:5.3、左右3.6	74.3			胎土に角閃石多い。
926	12C16	Ⅱ	脚部	前後:5.3、左右3.4	52.0			胎土に礫、海綿骨針多い。
927	10B11	Ⅰ	脚部	前後:5.9、左右3.5	41.9			胎土に海綿骨針多い。
928	12F10	Ⅲ	脚部	前後:3.8	49.0			胎土に海綿骨針多い。
929	18C3	Ⅰ	脚部	前後:5.5、左右:3.1	53.6			
930	11E4	Ⅲ	脚部	前後:4.1、左右:2.8	19.9			
931	14E23	Ⅱ	脚部	前後:5.0	33.3			胎土に砂礫、海綿骨針多い。

その他の土製品観察表

No.	出土地点	層位	計測値（cm）	重さ（g）	時期	備考
932	12E19	Ⅱ		8.6		動物意匠の把手または突起か？　0.4cm穿孔あり。上面は大きく凹、周縁に4か所刺突あり。
933	19F21	Ⅲ	径5.0×4.9	100.4	中期前葉～中葉	太くて短い円形土製品に2条の沈線が巡る。「泥棒」呼称していることもある。
934	19F22	Ⅰ	径5.0×4.4	73.0	中期前葉～中葉	太くて短い円形土製品に2条の沈線が巡る。「泥棒」呼称していることもある。
935	12E20	Ⅱ	長さ:6.6、幅:2.1、厚さ:1.2	16.3		「カツオ節形石製品」に近似する。胎土に角閃石、海面骨針が多い。
936	14D8	Ⅱ	長さ:4.5、幅:3.9、厚さ:1.4	19.7	中期末葉～後期初頭	「斧状土製品」とも呼称されている。胎土に角閃石、海面骨針が多い。
937	12C10	Ⅲ	長さ:7.1、幅:5.3、厚さ:1.8	53.6	中期末葉～後期初頭	「斧状土製品」とも呼称されている。
938	12C11	Ⅱ	長さ:5.1、幅:3.4、厚さ:1.9	31.7	中期末葉～後期初頭	
939	10C17	Ⅱ	長さ:3.3、幅:3.1、厚さ:1.1	10.8	中期末葉～後期初頭	0.5cmの穿孔あり。胎土に石英粒が目立つ。焼成良好。

焼成粘土塊観察表

No.	大グリッド	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	遺存状況	備考
940	9C14	Ⅱ	3.5	1.9	1.3	6.9	完形	つまんだような粘土塊であり、正面に指紋がよく残っている。
941	13C15	Ⅲ	4.1	2.8	2.3	16.4	一部欠損	紐状の粘土をまとめたものである。
942	12C14	Ⅱ	4.0	3.7	2.9	18.5	一部欠損	紐状の粘土をまとめたものである。
943	17D16	Ⅱ	5.2	3.9	2.3	38.1	完形	紐状の粘土をまとめたものである。細い沈線が無造作に付けられている。

石鏃観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	石材	素材	遺存状態	備考
1	12D17	表採	A	3.1	1.8	0.7	2.5	流紋岩	横長	完形	やや粗雑なつくり。
2	16C5	Ⅰ	A	2.9	2.1	0.6	2.1	凝灰岩		尖頭部欠	
3	SI78	フク土	B	6.5	3.9	1.3	22.0	頁岩		完形	大形品。失敗品の可能性あり。
4	13B-P38	フク土	B	4.3	2.9	0.9	8.8	頁岩	横長	完形	やや大形品。
5	12E13	Ⅰ	B	3.3	1.7	0.3	1.2	頁岩		完形	
6	SK29	フク土中	B	3.0	1.5	0.4	1.1	鉄石英（黄）		片脚欠	アスファルト付着。
7	13E6	Ⅱ	B	2.4	1.5	0.7	2.1	鉄石英（赤）		片脚欠	やや粗雑なつくり。
8	SK409	フク土下	B	2.3	1.5	0.3	0.7	頁岩		片脚欠	アスファルト付着。薄手の作り。
9	10C13	Ⅱ	B	1.9	1.5	0.3	0.7	頁岩		片脚欠	
10	19F25		C	3.7	2.2	0.5	3.6	頁岩	横長	完形	
11	12B-P16	フク土	C	4.0	2.1	0.6	3.1	頁岩		完形	アスファルト付着。
12	20F8	Ⅱ	C	4.0	1.4	0.5	2.3	緑色凝灰岩		尖頭部・片脚欠	
13	14B6	Ⅰ	C	3.4	1.6	0.5	2.0	頁岩		完形	アスファルト付着。
14	11C24	Ⅱ	C	3.7	1.9	0.5	1.7	頁岩		完形	
15	11C	Ⅰ	C	3.1	2.0	0.6	2.2	流紋岩		完形	
16	10C3	Ⅲ	C	3.0	2.0	0.5	2.4	流紋岩	横長	完形	やや粗雑なつくり。
17	11C16	Ⅱ	C	2.9	1.7	0.4	1.3	頁岩		完形	アスファルト付着。
18	12F5	表採	C	2.8	2.2	0.4	1.7	頁岩		完形	
19	16C23	Ⅰ	C	2.9	1.5	0.3	0.9	頁岩		完形	薄手の作り。
20	13D13	Ⅱ	C	2.6	1.6	0.3	0.9	鉄石英（黄）	縦長	完形	
21	17D7	Ⅱ	C	2.1	2.0	0.6	1.2	頁岩		尖頭部欠	
22	13D5	Ⅱ	C	2.1	1.7	0.4	1.1	緑色凝灰岩	横長	尖頭部欠	
23	12C20	Ⅲ	C	1.7	1.5	0.4	0.7	頁岩	横長	完形	
24	13D5	Ⅱ	D	2.7	2.1	0.5	1.3	流紋岩		尖頭部欠	
25	SK80	フク土上	D	2.4	1.7	0.3	0.9	凝灰岩		尖頭部欠	アスファルト付着。

石鏃失敗品観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ(g)	石材	素材	備考
26	14C-P30	フク土	A	4.4	3.2	0.7	10.5	頁岩	縦長	打瘤の一部残。
27	19E6	Ⅰ	A	4.4	2.4	0.8	8.3	頁岩	横長	有茎鏃の失敗品か。打瘤の一部残。
28	15B23	Ⅲ	A	3.9	3.3	0.6	7.1	頁岩	縦長	打面・打瘤残。
29	不明	表採	A	4.4	3.0	1.1	10.7	鉄石英（赤）	縦長	打瘤残。
30	11B25	Ⅱ	A	3.7	2.6	0.6	6.5	鉄石英（赤）	横長	打瘤の一部残。
31	14C22	Ⅰ	A	4.0	2.4	1.1	7.4	流紋岩	縦長	有茎鏃の失敗品。
32	14D-P3	フク土	B	3.3	2.3	0.8	6.4	メノウ	縦長	打面・打瘤残。
33	12E7	Ⅱ	B	4.4	3.3	1.2	16.3	頁岩	縦長	打面・打瘤残。
34	20F3	Ⅲ	B	4.2	3.0	0.8	11.3	凝灰岩	横長	凹基無茎鏃の失敗品。打瘤一部残。
35	15C20	Ⅱ	B	3.0	2.0	0.7	4.4	緑色凝灰岩	横長	有茎鏃の失敗品。
36	14C22	Ⅱ	B	2.9	2.0	0.5	2.3	メノウ	縦長	打面・打瘤残。

尖頭器観察表

No.	出土地点	層位	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	石材	素材	遺存状態	備考
37	21E7	Ⅱ	5.8	1.8	0.6	5.2	頁岩	縦長	完形	押出型ポイント。下層からの紛れ込みと推定される。
38	12C9	Ⅰ	3.0	1.4	0.6	2.4	緑色凝灰岩	?	尖頭部欠	
39	10D12	Ⅱ	10.4	2.6	1.7	54.8	頁岩	扁平礫	基部欠	失敗品の可能性もあり。
40	19F23		6.5	2.5	1.1	17.3	石英	横長	基部欠	やや幅の広く、木葉形を呈する。

石錐観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	石材	素材	錐部断面形	遺存状態	備考
41	不明		A	6.1	8.0	1.4	4.5	流紋岩	横長	菱形	錐部先端欠	
42	17B	Ⅰ	A	5.9	4.2	1.1	2.4	流紋岩	縦長	菱形	錐部先端欠	
43	11C3	Ⅱ	A	4.4	2.0	0.9	5.8	鉄石英（黄）	縦長	菱形	完形	
44	16C25	Ⅰ	A	3.1	2.9	0.6	4.1	緑色凝灰岩	横長	菱形	完形	
45	SI228	フク土	B	5.3	0.9	0.7	3.8	頁岩	?	菱形	完形	
46	10D8	Ⅰ	B	4.1	1.2	0.6	3.8	鉄石英（赤）	?	菱形状	完形	
47	15E11	Ⅰ	C1	6.2	2.5	1.0	14.1	メノウ	横長	台形状	錐部先端欠	つまみ部の一部欠損か。
48	12C20	Ⅱ	C1	6.5	3.4	0.8	11.0	緑色凝灰岩	横長	三角形状	完形	
49	15B23	Ⅲ	C1	5.3	3.2	1.1	17.0	凝灰岩	縦長	菱形状	錐部先端欠	
50	15C3	Ⅰ	C1	4.4	2.5	0.8	5.7	頁岩	横長	菱形	完形	
51	14D7	Ⅱ	C1	3.7	2.1	0.7	4.1	頁岩	縦長	菱形	完形	
52	18C17	Ⅱ	C2	8.7	6.8	2.6	132.0	頁岩	横長	三角形状	完形	
53	15E21	Ⅱ	C2	7.0	6.7	1.0	29.0	頁岩	横長	三角形	完形	
55	14B14	Ⅱ	C2	6.8	4.4	1.0	16.5	凝灰岩	?	台形状	完形	
55	12E11	Ⅱ	C2	4.3	4.1	1.3	18.0	流紋岩	横長	三角形	完形	
56	10D9	Ⅱ	C2	4.3	3.4	0.6	11.0	緑色凝灰岩	縦長	三角形	完形	つまみ部上面折断あり。
57	16C24	Ⅰ	C2	3.1	2.0	0.4	2.5	緑色凝灰岩	縦長	台形状	完形	
58	12D6	Ⅱ	D	5.3	4.8	1.8	38.0	鉄石英（赤）	?	菱形	完形	
59	14C5	Ⅱ	D	2.9	3.4	0.8	18.0	頁岩	?	菱形	完形	
60	14E21	Ⅱ	D	3.7	2.0	0.4	9.0	緑色凝灰岩	横長	三角形	完形	
61	10D19	Ⅱ	D	3.0	2.5	0.4	2.8	頁岩	横長	菱形	完形	
62	9D3	Ⅱ	E	5.7	3.6	1.1	24.0	緑色凝灰岩	縦長	三角形状	完形	
63	12E7	Ⅱ	E	4.5	3.9	0.9	21.0	凝灰岩	横長	三角形状	完形	
64	SD127	フク土	E	3.8	2.5	0.8	4.0	凝灰岩	横長	三角形状	完形	
65	11C15	Ⅰ	E	3.2	2.1	0.6	3.0	緑色凝灰岩	縦長	三角形状	完形	

石匙観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	素材	遺存状態	備考
66	10C18	Ⅰ	A1	8.9	3.6	1.1	28.6	頁岩	横長	完形	
67	13D16	Ⅱ	A1	8.5	3.6	1.1	26.7	頁岩	縦長	完形	
68	13D7	Ⅱ	A1	7.7	3.5	1.1	32.4	頁岩	縦長	完形	
69	14D6	Ⅱ	A1	5.8	3.2	0.9	17.7	緑色凝灰岩	縦長	完形	
70	13D7	Ⅲ	A1	5.6	2.7	0.7	9.7	頁岩	縦長	完形	
71	14E	Ⅰ	A1	5.1	3.0	0.9	10.0	緑色凝灰岩	縦長	完形	
72	14D17	Ⅲ	A2	7.2	4.3	1.2	24.4	凝灰岩	縦長	刃部先端部欠	
73	18E10	Ⅱ	A2	7.5	4.5	1.7	30.3	緑色凝灰岩	縦長	完形	
74	19F3	Ⅰ	A2	6.8	2.9	0.9	16.8	頁岩	縦長	完形	
75	15C6	Ⅱ	A2	5.3	3.1	1.1	14.4	頁岩	縦長	完形	
76	20F16	Ⅰ	A2	7.6	2.5	0.8	12.3	流紋岩	縦長	完形	
77	11C12	Ⅱ	A3	7.3	2.5	1.5	13.2	流紋岩	縦長	完形	
78	16C21	Ⅲ	A3	9.9	3.3	1.6	41.1	頁岩	縦長	完形	
79	SK128	フク土	A3	6.8	2.9	1.3	17.1	頁岩	縦長	刃部先端部欠	
80	不明		B	6.3	5.0	0.9	24.0	緑色凝灰岩	縦長	完形	
81	16C13	Ⅱ	B	5.7	4.0	0.9	17.5	緑色凝灰岩	縦長	完形	打面、打点が下になる。
82	13C19	Ⅱ	B	5.8	4.4	0.8	23.1	凝灰岩	縦長	完形	
83	16B8	Ⅱ	C	5.6	5.0	1.2	28.5	緑色凝灰岩	横長	刃部一部欠	
84	10D4	Ⅱ	C	4.0	4.7	0.9	13.4	鉄石英（赤）	横長	完形	
85	12D15		C	3.8	5.5	1.0	15.2	頁岩	縦長	完形	打面、打点が横になる。
86	16D16	Ⅲ	D	5.6	4.4	1.0	23.1	頁岩	縦長	完形	
87	14D-P31	フク土	D	6.8	4.7	0.7	13.0	頁岩	横長	完形	打面、打点が下になる。
88	不明		D	7.1	4.0	0.7	13.8	凝灰岩	縦長	完形	
89	10C7	Ⅱ	D	5.6	4.8	1.3	24.8	緑色凝灰岩	縦長	完形	

不定形石器観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	素材	二次調整部位	切断	備考
90	20F9	Ⅲ	A	9.0	7.5	2.0	119.0	緑色凝灰岩	縦長	片側縁～底縁	無	
91	17C25	Ⅱ	A	11.0	3.7	1.8	61.5	鉄石英（赤）	縦長	両側縁	有	石刃状剥片?
92	17B	Ⅰ	A	8.0	3.7	1.1	33.1	緑色凝灰岩	縦長	両側縁	無	石刃状剥片?
93	13E18	Ⅱ	A	8.9	3.0	0.9	29.6	頁岩	縦長	両側縁	無	石刃状剥片。
94	12F4	Ⅱ	A	7.8	5.0	1.6	59.4	緑色凝灰岩	縦長	片側縁	無	
95	14D12	Ⅲ	A	7.2	4.3	1.3	45.7	緑色凝灰岩	縦長	片側縁～底縁	無	
96	不明		A	6.2	4.2	0.9	24.1	頁岩	縦長	両側縁～底縁	無	
97	16C10	Ⅱ	A	6.0	4.1	1.0	23.2	頁岩	縦長	両側縁～底縁	無	
98	14E17	Ⅰ	A	5.9	6.1	1.4	41.9	緑色凝灰岩	横長	片側縁～底縁	無	
99	16D2	Ⅱ	B	7.3	6.9	2.1	65.0	流紋岩	横長	片側縁	無	
100	18F7	Ⅱ	B	11.4	4.6	1.7	72.2	流紋岩	縦長	片側縁	有	石刃状剥片?
101	16D3	Ⅰ	B	8.2	4.1	0.9	29.5	凝灰岩	縦長	片側縁	無	石刃状剥片?
102	14E22	Ⅱ	B	7.4	4.2	2.3	54.5	頁岩	縦長	片側縁	無	
103	SK412	フク土	B	6.3	5.2	1.9	45.6	鉄石英（赤）	横長	底縁	無	
104	SK375	フク土	B	7.1	5.5	1.7	64.8	頁岩	縦長	片側縁	無	
105	19E9	Ⅱ	B	6.0	6.7	1.5	55.7	頁岩	横長	底縁	無	
106	21F10	Ⅰ	B	5.4	6.5	1.3	36.5	緑色凝灰岩	縦長	底縁	無	
107	20E23	Ⅲ	B	4.8	5.1	1.7	33.3	流紋岩	横長	両側縁～底縁	無	
108	18C6	Ⅰ	B	5.3	5.6	1.7	41.6	流紋岩	横長	片側縁	無	
109	16C18	Ⅱ	C	10.8	4.2	1.6	46.7	流紋岩	縦長	両側縁～底縁	無	
110	19E24	Ⅱ	C	6.5	8.4	2.2	109.1	流紋岩	横長	片側縁～底縁	無	
111	15C5	Ⅱ	C	9.0	7.5	1.6	93.0	緑色凝灰岩	縦長	片側縁～底縁	無	
112	17C11	Ⅰ	C	8.5	5.2	1.9	67.2	流紋岩	縦長	片側縁	無	
113	15C23	Ⅰ	C	4.9	8.6	1.4	61.8	頁岩	横長	両側縁～底縁	無	
114	13E21	Ⅱ	C	6.0	6.8	1.1	33.0	鉄石英（黄）	横長	片側縁～底縁	無	
115	18F7	Ⅱ	C	6.2	3.9	0.9	22.5	頁岩	縦長	両側縁～底縁	有	
116	16C19	Ⅱ	C	2.5	4.7	1.0	9.5	凝灰岩	横長	全周	無	
117	15C23	Ⅱ	C	4.4	4.1	1.7	25.6	緑色凝灰岩	?	全周	無	
118	SK363	フク土	C	4.5	5.8	1.0	21.5	頁岩	横長	片側縁～底縁	無	
119	15E23	Ⅱ	D	9.0	8.0	2.4	133.1	頁岩	縦長	底縁	無	
120	18F14	Ⅱ	D	9.5	8.2	1.2	88.7	頁岩	縦長	片側縁	無	
121	18G4	Ⅰ	D	5.7	5.1	1.3	29.3	緑色凝灰岩	縦長	片側縁	無	
122	15C20	Ⅱ	D	7.0	4.2	1.3	41.5	頁岩	縦長	片側縁	無	
123	19F-P7	フク土	D	7.0	4.2	2.0	52.7	緑色凝灰岩	縦長	片側縁	無	
124	14B11	Ⅱ	D	4.7	4.3	1.0	23.8	緑色凝灰岩	縦長	底縁	有	
125	20F22	Ⅰ	D	4.2	7.9	1.6	41.3	流紋岩	横長	片側縁～底縁	無	
126	14C24	Ⅱ	D	6.2	6.6	1.5	43.0	頁岩	横長	底縁	無	
127	16C17	Ⅱ	D	3.2	6.4	1.2	24.6	頁岩	横長	底縁	無	
128	16C2	Ⅱ	D	5.0	3.5	1.2	17.7	頁岩	縦長	片側縁	無	
129	11C21	Ⅰ	E	5.5	2.0	0.7	8.0	流紋岩	縦長	片側縁～底縁	無	
130	SK128	フク土	E	9.5	3.9	1.4	39.0	頁岩	縦長	底縁	無	
131	14E20	Ⅱ	E	8.0	6.3	2.1	99.2	緑色凝灰岩	縦長	底縁	無	
132	16E9	Ⅰ	E	6.9	2.0	1.1	14.6	鉄石英（黄）	縦長	両側縁～底縁	無	
133	12E11	Ⅱ	E	6.5	3.4	1.5	30.1	鉄石英（赤）	縦長	底縁	無	
134	12C11	Ⅱ	E	4.8	2.7	1.6	15.1	頁岩	縦長	底縁	無	
135	14D4	Ⅲ	E	6.4	3.2	1.4	21.5	緑色凝灰岩	縦長	底縁	無	
136	13E25	Ⅱ	E	3.6	3.3	0.8	10.1	緑色凝灰岩	縦長	底縁	無	
137	不明		E	6.3	2.9	1.1	19.0	頁岩	縦長	全周	無	石錐と兼用品。
138	13C22	Ⅱ	E	4.6	3.8	1.2	15.6	流紋岩	縦長	底縁	無	
139	14E5	Ⅱ	F	11.0	4.7	1.2	46.6	頁岩	縦長	片側縁	無	石刃状剥片。
140	12B23	Ⅰ	F	7.9	5.5	3.1	127.8	凝灰岩	縦長	片側縁	無	
141	13D19	Ⅰ	F	8.4	5.8	1.3	42.2	頁岩	縦長	両側縁～底縁	無	

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	素材	二次調整部位	切断	備考
142	12E14	Ⅰ	F	8.1	5.4	1.1	65.2	鉄石英（赤）	縦長	両側縁	有	
143	10D13	Ⅱ	F	8.1	2.4	0.8	15.9	頁岩	縦長	両側縁	有	石刃状剥片。
144	14D6	Ⅱ	F	6.1	3.1	1.0	12.6	頁岩	縦長	両側縁～底縁	無	
145	14E24	Ⅲ	F	7.1	3.8	1.3	33.5	流紋岩	縦長	片側縁	無	
146	19F12	Ⅰ	F	8.1	6.5	1.9	77.5	頁岩	縦長	片側縁	無	
147	11G11	Ⅱ	F	5.1	7.1	1.8	46.7	凝灰岩	横長	片側縁～底縁	無	
148	SK64	フク土	F	5.0	8.9	1.5	59.3	頁岩	横長	底縁	無	
149	12D15	Ⅱ	F	5.4	5.7	1.4	33.1	頁岩	横長	両側縁～底縁	無	
150	17D15	Ⅱ	G	10.5	5.5	2.2	107.1	流紋岩	縦長	片側縁	無	
151	14D19	Ⅲ	G	8.7	4.3	1.7	67.3	緑色凝灰岩	縦長	両側縁	無	
152	17E5	Ⅱ	G	6.2	3.8	1.0	17.9	緑色凝灰岩	縦長	片側縁	無	
153	11C9	Ⅱ	G	8.4	3.0	1.2	29.2	頁岩	縦長	両側縁	無	石刃状剥片。
154	13D21		G	8.8	4.0	1.3	31.4	凝灰岩	縦長	両側縁	無	石刃状剥片?
155	11D8	Ⅱ	G	5.2	7.9	1.6	55.3	頁岩	横長	底縁	無	
156	SI371	フク土	G	7.1	6.7	1.4	58.2	頁岩	横長	両側縁～底縁	無	
157	11B24	Ⅲ	G	7.2	5.3	1.8	53.8	頁岩	縦長	片側縁	無	
158	16B10	Ⅱ	G	3.5	5.7	0.9	19.6	流紋岩	横長	底縁	有	
159	20E22	Ⅲ	G	5.1	5.4	1.1	22.0	緑色凝灰岩	横長	片側縁～底縁	無	

両極剥離痕のある石器観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	備考
160	不明		A1	5.0	5.5	2.4	64.1	頁岩	
161	18D		A1	3.2	6.4	1.9	30.1	頁岩	
162	9C6	Ⅱ	A1	3.6	3.5	0.8	10.4	流紋岩	
163	16F8	Ⅰ	A1	4.4	3.3	3.2	28.7	流紋岩	
164	18C8	Ⅱ	A1	4.4	4.4	1.5	30.2	頁岩	
165	12D6	Ⅱ	A2	5.8	4.1	1.5	35.4	頁岩	
166	15D18	Ⅱ	A2	5.7	5.0	1.7	68.5	頁岩	
167	不明		A2	4.6	3.4	1.3	20.7	緑色凝灰岩	
168	12B18	Ⅱ	A2	4.5	4.0	1.3	28.3	頁岩	
169	11C9	Ⅱ	A2	4.2	3.3	0.8	12.1	緑色凝灰岩	
170	18E22	Ⅱ	B1	9.1	6.7	1.9	111.7	凝灰岩	
171	19D6	Ⅰ	B1	8.3	4.0	3.5	173.4	チャート	
172	14E17	Ⅰ	B1	5.1	4.9	1.5	50.8	凝灰岩	
173	14C9	Ⅱ	B1	7.8	2.9	1.2	32.9	頁岩	
174	14D11	Ⅲ	B1	3.8	3.8	1.5	36.4	頁岩	
175	18C3	Ⅱ	B2	8.2	6.0	1.7	97.7	凝灰岩	
176	9F12	Ⅱ	B2	7.1	6.3	1.2	96.6	流紋岩	
177	14D15	Ⅱ	B2	5.5	5.4	1.0	29	凝灰岩	
178	13F7	Ⅱ	B2	6.8	3.7	1.4	39.7	凝灰岩	
179	17B11	Ⅰ	B2	7.6	4.0	1.2	53.8	凝灰岩	

三脚石器観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
180	20F14	Ⅲ	4.3	4.2	2.5	43.3	緑色凝灰岩	完形	
181	SI371	フク土	2.6	3.7	0.5	4.0	緑色凝灰岩	完形	
182	18F6	Ⅲ	3.4	4.8	1.5	15.4	緑色凝灰岩	完形	
183	20F	Ⅰ	4.3	5.0	1.3	19.5	緑色凝灰岩	完形	

板状石器（円盤状石器）観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
184	14D9	Ⅱ	A	5.6	6.4	1.3	41	凝灰岩	完形	
185	13D24	Ⅱ	A	5.8	6.7	1.3	74	安山岩	完形	
186	20F22	Ⅲ	A	5.0	5.7	2.1	67	輝緑岩	完形	
187	11B25	Ⅰ	A	5.3	5.5	1.1	40	緑色凝灰岩	完形	
188	17F10	Ⅰ	B	6.2	7	1.9	110	頁岩	完形	
189	12D11	表採	B	6.8	6.7	1.7	83	凝灰岩	完形	裏面磨痕。
190	不明		B	4.9	5	0.9	31	流紋岩	完形	
191	10D15	Ⅱ	B	4.7	5.2	1.3	42	流紋岩	完形	
192	18C4	Ⅱ	C	7.2	7.6	1.9	136	安山岩	完形	
193	10E5		C	5.4	6.2	2.2	92	流紋岩	完形	
194	12C6	Ⅱ	C	4.9	5.4	1.3	33	緑色凝灰岩	完形	
195	16F2	Ⅲ	C	4.9	5.4	1.3	44	凝灰岩	完形	裏面磨痕。
196	9D5	Ⅱ	C	4.4	4.8	0.9	25	流紋岩	完形	裏面磨痕。
197	10C23	Ⅰ	D	6.2	6.5	1.2	56	砂岩	完形	
198	11E4	Ⅲ	D	5.2	5.4	1	33	凝灰岩	完形	
199	17D12	Ⅰ	D	4.7	4.9	0.9	28	流紋岩	完形	両面磨痕。
200	11C12	Ⅰ	D	4.8	4.7	0.9	24	緑色凝灰岩	完形	
201	11D13	Ⅱ	D	4.2	4.8	0.9	20	緑色凝灰岩	完形	
202	SI190	フク土	E	5	5.2	1.4	40	緑色凝灰岩	完形	
203	14D17	Ⅲ	E	4.8	5.1	0.7	21	凝灰岩	完形	裏面磨痕。
204	12F14	Ⅱ	E	2.7	2.7	0.9	8	凝灰岩	完形	
205	9C18	Ⅰ	E	5	5.3	1	38	凝灰岩	完形	裏面磨痕。
206	14D8	Ⅰ	E	4.1	4.3	0.8	18	凝灰岩	ほぼ完形	両面磨痕。
207	8B15	Ⅱ	E	3.1	3.3	1.3	14	凝灰岩	完形	

筈状石器（打製石斧）観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	素材	刃部断面形	遺存状態	備考
208	不明		A1	13.3	5.1	3.0	154.6	頁岩	?	両刃	完形	
209	19E8	Ⅱ	A1	11.3	7.6	2.7	223.9	流紋岩	縦長	片刃	完形	
210	SD127	フク土	A1	8.8	4.2	2.4	84.1	流紋岩	横長	両刃	完形	
211	19E10	Ⅱ	A1	7.8	5.3	1.7	62.0	流紋岩	縦長	片刃	完形	
212	14F8	Ⅰ	A1	6.9	4.9	2.2	61.1	流紋岩	縦長	片刃	完形	
213	8G沢A		A2	9.7	8.0	2.1	147.1	ホルンフェルス	縦長	両刃	完形	
214	19E10	Ⅰ	A2	8.5	3.7	1.1	37.2	流紋岩	縦長	片刃	完形	
215	SI31	フク土下	A2	8.3	6.3	1.7	87.9	流紋岩	縦長	片刃	完形	両側縁につぶしあり。
216	SD127	フク土	A2	7.6	5.2	2.3	75.7	頁岩	縦長	片刃	完形	
217	15E21	Ⅱ	B1	14.9	2.8	2.0	101.5	頁岩	横長	片刃	完形	両側縁につぶしあり。
218	17D7	Ⅱ	B1	10.3	3.1	1.7	44.6	頁岩	横長	両刃	完形	両側縁につぶしあり。
219	11E8	Ⅱ	B2	11.7	5.2	3.5	243.1	輝緑岩	礫	両刃	完形	粗雑なつくり。
220	9B14	Ⅰ	B2	7.1	4.1	1.3	43.1	緑色凝灰岩	縦長	両刃	完形	

小形磨製石斧観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	刃部断面形	遺存状態	基端敲打	備考
221	17C25	Ⅱ	3.4	2.0	0.8	6.9	凝灰岩	両刃	基端欠	?	
222	SD127	フク土	3.7	1.6	0.7	6.2	頁岩	両刃	完形	無	
223	15C24	Ⅱ	4.2	2.4	0.8	8.3	凝灰岩	両刃	完形	無	
224	16D5	Ⅱ	2.9	1.8	0.7	3.8	凝灰岩	?	刃部欠	無	
225	14E9		2.8	1.4	0.5	3.1	頁岩	両刃	基端欠	?	
226	10B22	Ⅰ	2.2	1.6	0.5	1.5	緑色凝灰岩	?	刃部欠	無	
227	11F8	Ⅱ	2.6	1.5	0.5	4.3	頁岩	?	刃部欠	無	
228	不明		4.7	2.1	1.0	17.9	蛇紋岩	両刃	完形	無	破損品の再利用か。
229	15E9	Ⅱ	4.0	3.0	1.0	14.6	凝灰岩	両刃	完形	無	破損品の再利用か。
230	11C2	Ⅰ	4.3	2.8	1.2	25.9	蛇紋岩	両刃	完形	?	破損品の再利用か。
231	15D14	Ⅱ	5.6	2.7	1.0	21.6	凝灰岩	両刃	完形	無	
232	16B19	Ⅱ	6.7	3.8	1.7	59.3	輝緑岩	両刃	完形	有	
233	SI48	フク土	6.6	3.6	1.6	56.2	ひん岩	両刃	ほぼ完形	無	
234	16B5		6.0	3.8	1.6	50.3	輝緑岩	両刃	完形	?	敲打調整痕を多く残す。
235	不明		6.4	2.6	1.5	39.9	輝緑岩	両刃	完形	有	
236	14C9	Ⅰ	5.5	3.1	1.5	39.7	緑色凝灰岩	両刃	完形	?	風化著しい。
237	13B21	Ⅲ	5.2	4.1	1.7	43.1	凝灰岩	両刃	完形	有?	

磨製石斧観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重（g）	石材	刃部断面形	遺存状態	基端敲打	備考
238	9G14沢A	底面	A1	11.8	5.4	2.8	279.2	輝緑岩	両刃	完形	無	基部側に敲打成形痕残る。
239	SI371	フク土	A1	9.7	4.7	2.4	172.0	輝緑岩	両刃	ほぼ完形	無	基部側に敲打成形痕残る。
240	17D4	Ⅱ	A1	7.2	4.8	1.7	100.1	蛇紋岩	?	刃部欠	?	
241	20F21	Ⅲ	A1	5.5	3.7	1.4	52.6	蛇紋岩	?	刃部欠	無	
242	SK63	フク土	A2	11.4	5.8	3.1	353.4	ひん岩	?	刃部欠	有	
243	SI472	フク土	A2	11.8	5.1	2.8	292.1	石英斑岩	両刃	刃部欠	有	
244	11B22	Ⅱ	A2	12.2	5.3	2.5	286.3	輝緑岩	両刃	完形	有	
245	15E13	Ⅱ	A2	12.0	5.2	2.7	321.3	斑レイ岩	両刃	完形	無	
246	12D3	Ⅱ	A2	11.7	4.7	2.2	193.8	輝緑岩	両刃	完形	?	敲打成形痕を多く残す。
247	16B5		A2	10.8	4.9	2.6	22.4	輝緑岩	両刃	ほぼ完形	有	刃部に敲打状のつぶれ多くあり。
248	7B10.12	Ⅲ・Ⅰ	A2	11.7	5.0	2.4	208.5	輝緑岩	両刃	接合完形	?	敲打成形痕を多く残す。2分割。
249	13E1	Ⅰ	A2	8.9	4.6	2.1	136.4	輝緑岩	両刃	完形	?	風化著しい。
250	11F4	Ⅱ	A2	9.9	4.0	2.4	141.0	ひん岩	両刃	接合完形	?	基部側の風化著しい。2分割。
251	9B18	Ⅱ	A2	8.2	4.1	1.9	105.9	輝緑岩	両刃	完形	?	風化著しい。
252	11C7	Ⅱ	A2	8.2	4.1	1.8	96.7	輝緑岩	両刃	完形	無	
253	SK322	フク土下	A2	8.1	3.7	1.5	69.7	ホルンフェルス	両刃	完形	無	
254	11C23	Ⅱ	A3	10.6	4.6	2.1	168.4	輝緑岩	両刃	ほぼ完形	無	
255	17D19	Ⅱ	A3	8.5	4.9	2.5	182.4	ホルンフェルス	?	刃部欠	無	
256	16E15	Ⅱ	A3	6.5	4.3	2.2	106.2	斑レイ岩	?	刃部欠	無	
257	10C16	Ⅱ	A3	7.8	5.5	2.7	215.7	輝緑岩	?	刃部欠	無	側面に敲打成形痕が多く残る。
258	18E22	Ⅱ	A3	11.8	5.7	2.9	335.8	蛇紋岩	?	刃部欠	無	刃部は敲打状につぶれている。
259	15B6		A3	13.4	5.0	2.7	325.6	輝緑岩	両刃	完形	?	敲打成形痕を多く残す。
260	17B11	Ⅱ	B	14.5	6.3	4.1	589.5	輝緑岩	?	刃部欠	無	刃部は敲打状につぶれている。
261	17C5	Ⅱ	B	11.1	4.8	2.3	207.0	輝緑岩	両刃	完形	有	
262	17F20	Ⅱ	B	11.1	4.7	2.3	189.6	輝緑岩	両刃	完形	?	風化やや著しい。
263	16C18	Ⅲ	a	9.4	5.2	2.9	212.5	ホルンフェルス	両刃	基部欠	有	楔に使用か。
264	9B19	Ⅱ	a	6.7	4.8	2.5	147.2	輝緑岩	両刃	基部欠	有	楔に使用か。
265	20F12	Ⅲ	a	7.8	5.5	3.0	203.4	斑レイ岩	両刃	基部欠	?	
266	12B18	Ⅲ	b	13.1	5.8	2.7	335.2	輝緑岩	?	刃部欠	有	楔に使用か。
267	19G4	Ⅰ	b	7.6	5.8	2.2	189.9	蛇紋岩	両刃	基部欠	?	
268	16B12	Ⅱ	b	7.3	5.4	2.5	160.8	輝緑岩	両刃	基部欠	?	
269	17F19	Ⅱ	C	7.9	5.7	3.0	219.5	斑レイ岩	両刃	基部欠	有	楔に使用か。
270	17F20	Ⅱ	C	6.2	4.9	3.1	105.8	輝緑岩	両刃	基部欠	無	
271	14C22	Ⅲ	C	12.1	4.6	2.9	252.4	安山岩	?	刃部欠	有	楔に使用か。

石錘観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
272	11B17	Ⅰ	A	2.8	2.5	1.7	10	凝灰岩	完形	
273	9G沢A		B	6.6	5.4	2.9	70	凝灰岩	完形	
274	11E11	Ⅱ	B	6.9	5.2	1.8	90	凝灰岩	完形	
275	18E23	Ⅰ	C	5.5	4.9	1.7	50	安山岩	完形	
276	19F16	Ⅰ	C	7.2	4.9	1.8	80	砂岩	完形	
277	11D4	Ⅰ	C	7.1	6.7	3.0	200	安山岩	完形	
278	6E6.11	Ⅰ	C	12.0	12.1	3.5	550	緑色凝灰岩	完形	
279	9G沢A		C	16.8	13.0	3.7	970	安山岩	完形	
280	9G沢A		C	17.0	13.2	3.7	1,100	安山岩	完形	

敲磨石類観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	石材	表裏面		側縁		端部		遺存状態	備考
									磨	敲	磨	敲	磨	敲		
281	SK242	フク土	A1	12.6	7.7	7.1	997.5	礫岩	◎		◎		◎		完形	
282	14D7	Ⅱ	A1	12.6	9.7	6.4	1,110.5	輝緑岩	◎		◎		◎		完形	被熱。
283	11B18	Ⅰ	A1	9.3	8.2	6.6	714.5	花崗岩	◎		◎		◎		完形	
284	14D7	Ⅱ	A1	8.4	8.0	7.3	689.2	花崗岩	◎		◎		◎		完形	
285	16E15	Ⅱ	A1	9.7	6.7	6.3	591.2	頁岩	◎		◎		◎		完形	
286	17F1	Ⅱ	A1	7.7	7.0	5.0	386.1	輝緑岩	◎		◎		◎		完形	
287	17D23	Ⅱ	A1	11.2	10.3	8.6	1,371.1	輝緑岩	◎		◎		◎		完形	
288	19D9	Ⅱ	A2	13.7	8.0	3.3	493.1	安山岩	◎		◎				完形	被熱。
289	12E14	Ⅱ	A2	12.1	9.7	4.6	715.5	砂岩	◎	◎	◎				完形	
290	10C1	Ⅱ	A2	11.6	8.8	4.3	713.1	輝緑岩	◎		◎				完形	
291	10E3	Ⅱ	A2	10.0	9.5	5.5	789.6	安山岩	◎	◎	◎				完形	
292	SK429	フク土	A2	12.9	7.2	5.1	770.9	ひん岩	◎	◎	◎			○	完形	被熱。
293	SI371	フク土	A2	11.9	7.6	4.3	478.9	安山岩	◎	◎	◎				完形	
294	13D9	Ⅲ	A2	12.5	9.3	4.7	889.9	花崗岩	◎		◎			◎	完形	
295	11B12	Ⅱ	A3	11.4	7.8	6.4	691.2	安山岩	◎						完形	
296	11D12		A3	15.8	8.6	4.2	887.4	礫岩	◎						完形	
297	不明		A3	15.0	8.8	5.5	1,087.5	輝緑岩	◎						完形	
298	20F13	Ⅲ	A3	11.6	9.5	5.5	779.1	安山岩	◎	◎					完形	
299	16B25	Ⅱ	A3	10.8	9.7	4.2	564.0	石英斑岩	◎	◎					完形	
300	13D23	Ⅱ	A3	11.9	7.9	3.8	551.3	輝緑岩	◎						完形	
301	不明		A3	9.5	8.6	3.5	410.2	凝灰岩	◎						完形	
302	13E4	Ⅱ	A3	9.3	7.9	4.1	424.5	安山岩	◎	◎					完形	
303	13E1	Ⅱ	A3	11.7	8.8	4.6	590.1	安山岩	◎	◎					完形	
304	13D8	Ⅱ	A3	9.0	8.7	5.1	539.1	安山岩	◎	◎					完形	
305	20F16	Ⅲ	A3	12.2	10.1	5.7	1,008.3	安山岩	◎					◎	完形	
306	15D1	Ⅲ	A3	9.6	9.3	4.4	607.2	輝緑岩	◎					◎	完形	
307	18F1	Ⅱ	A3	9.1	8.6	4.2	471.7	安山岩	◎					○	完形	
308	11C25	Ⅱ	A3	10.7	7.8	2.5	250.9	凝灰岩	○					○	完形	
309	14B13	Ⅱ	A3	12.1	7.1	4.5	505.4	安山岩	◎		◎			◎	完形	
310	13D15	Ⅱ	A3	9.0	6.3	4.7	361.3	ひん岩	◎		○			◎	完形	
311	13B6	Ⅲ	A3	10.3	8.9	4.7	636.5	安山岩	◎		◎				完形	
312	10G		A3	9.4	7.3	5.2	445.4	流紋岩	◎		◎				完形	
313	12E12	Ⅱ	A3	13.2	6.8	3.6	452.6	安山岩	◎	◎				○	完形	
314	SK270	フク土上	A3	11.1	8.2	4.8	491.1	凝灰岩	◎	◎	◎			◎	完形	
315	11D10	Ⅰ	A3	11.7	7.7	4.0	455.8	安山岩	◎	◎	○			○	完形	
316	不明		A3	11.8	9.0	5.6	803.3	安山岩	◎	◎	○			◎	完形	
317	12D25	Ⅱ	A3	10.9	7.8	5.1	638.4	石英斑岩	◎	◎	○			○	完形	
318	12E24	Ⅰ	A3	11.4	8.7	5.3	724.6	輝緑岩	◎	◎	◎				完形	
319	不明		B1	13.0	7.4	2.9	443.7	輝緑岩		◎					完形	
320	12E7	Ⅱ	B1	10.0	9.7	5.2	580.4	安山岩		◎					完形	
321	11D12	Ⅰ	B1	11.0	7.6	3.6	393.7	流紋岩		◎					完形	
322	15C6	Ⅱ	B1	10.9	36.6	3.4	289.3	安山岩		◎					完形	被熱。
323	不明		B1	8.3	7.3	5.6	345.6	安山岩		◎					完形	
324	12C23	Ⅱ	B1	8.7	4.3	2.2	102.5	凝灰岩		◎					完形	
325	11E9	Ⅱ	B1	12.4	9.1	2.3	359.4	緑色凝灰岩		◎		○			完形	
326	7D1	Ⅰ	B1	10.0	6.6	3.5	260.8	安山岩		◎		◎			完形	
327	9D15	Ⅱ	B1	9.6	5.1	2.7	148.5	凝灰岩		◎		◎			完形	
328	16B20	Ⅱ	B1	11.6	7.1	3.0	222.9	凝灰岩		◎		◎			完形	
329	16C4	Ⅱ	B1	15.4	5.8	3.8	520.7	輝緑岩		◎				○	完形	
330	17B3	Ⅰ	B1	14.0	4.5	3.1	305.0	凝灰岩		◎				◎	完形	被熱。
331	11B25	Ⅱ	B1	12.3	8.8	4.4	448.4	流紋岩		◎				○	完形	
332	9C24	Ⅱ	B1	17.4	6.3	3.5	563.4	凝灰岩		◎				○	完形	
333	SD127	フク土1	B1	20.4	7.0	3.5	499.7	緑色凝灰岩		◎		○		○	完形	
334	14E24	Ⅱ	B1	20.8	7.5	5.8	1,289.5	安山岩		◎		○		○	完形	
335	16E10	Ⅱ	B1	15.2	6.0	4.2	455.0	凝灰岩		◎		○		○	完形	
336	16D		B1	16.3	9.0	3.0	612.6	安山岩		◎		◎		◎	完形	
337	11E20	Ⅱ	B1	10.6	7.6	1.8	208.1	輝緑岩		◎		◎		◎	完形	
338	17B18	表採	B2	14.9	8.3	2.5	523.0	斑レイ岩				◎			完形	
339	14D17	Ⅱ	B2	9.6	5.1	2.7	170.5	凝灰岩				○			完形	
340	16B17・16C25	Ⅱ・Ⅲ	B2	11.9	6.7	3.6	402.9	輝緑岩				◎		○	接合完形	
341	13C22		B2	26.6	7.6	5.4	1,588.7	流紋岩				○			完形	
342	15D16	Ⅲ	B2	20.2	6.8	5.8	1,316.8	輝緑岩				◎		◎	完形	
343	16B13	Ⅱ	B2	22.3	6.3	4.3	823.5	輝緑岩				○		◎	完形	被熱。
344	不明		B2	19.6	11.6	4.2	1,480.5	流紋岩				◎			完形	
345	17D7	Ⅰ	B2	10.2	4.5	2.2	123.9	凝灰岩				◎		◎	完形	被熱。
346	16B6	Ⅱ	B3	16.7	9.9	4.1	1,012.7	緑色凝灰岩						○	完形	
347	SK124	フク土	B3	16.5	7.5	5.0	933.7	緑色凝灰岩						○	完形	

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	表裏面		側縁		端部		遺存状態	備考
									磨	敲	磨	敲	磨	敲		
348	16C18	Ⅱ	B3	14.3	7.0	5.1	553.9	流紋岩						○	完形	
349	不明		B3	12.9	4.6	4.2	316.0	安山岩						◎	完形	
350	12B24	Ⅰ	B3	13.8	3.7	3.6	224.7	緑色凝灰岩						◎	完形	
351	16D9	Ⅱ	B3	9.1	4.7	3.2	224.4	凝灰岩						◎	完形	
352	15C9	Ⅲ	B3	10.0	5.2	4.6	322.8	安山岩						○	完形	
353	16D22	Ⅰ	B3	7.8	3.5	1.9	71.0	凝灰岩						○	完形	
354	14E16	Ⅱ	B3	8.8	2.9	2.2	74.3	凝灰岩						◎	完形	
355	13E9	Ⅰ	B3	13.3	5.9	2.7	297.4	凝灰岩						◎	完形	
356	SD127	フク土1	C	15.7	6.3	5.7	709.5	安山岩			◎				完形	

多面体敲石観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
357	16C8	Ⅱ	A	10.7	7.1	3.2	379.8	斑レイ岩	完形	
358	17D3	Ⅱ	A	13.6	9.6	6.7	1,117.2	鉄石英（赤）	完形	
359	17B18	Ⅰ	A	10.0	7.3	6.4	656.7	流紋岩	完形	
360	SI261	フク土	A	10.4	8.4	5.0	616.8	流紋岩	完形	
361	18C3	Ⅱ	A	11.0	9.4	8.3	993.8	緑色凝灰岩	完形	
362	14D15	Ⅱ	A	11.3	8.4	4.9	731.8	緑色凝灰岩	完形	
363	10C9	Ⅰ	A	6.2	5.8	4.1	310.5	チャート	完形	
364	18C7		B	7.0	7.0	3.5	239.5	緑色凝灰岩	完形	
365	SI252	フク土	B	7.5	6.4	5.4	362.4	メノウ	完形	
366	16E9	Ⅱ	B	7.0	6.9	4.1	193.9	頁岩	完形	
367	14D2	Ⅱ	B	6.9	6.7	5.6	317.1	頁岩	完形	
368	17D17	表採	B	7.5	6.4	6.0	366.4	緑色凝灰岩	完形	
369	17G6		B	6.4	6.0	5.0	251.8	緑色凝灰岩	完形	
370	14C5	Ⅱ	B	7.8	7.6	4.7	397.3	チャート	完形	
371	16B15	Ⅱ	C	6.5	6.4	6.4	378.6	鉄石英（赤）	完形	
372	16B18	Ⅱ	C	6.2	5.1	3.9	194.0	斑レイ岩	完形	
373	13D5	Ⅲ	C	5.1	4.5	4.5	166.7	流紋岩	完形	
374	16D3	Ⅱ	C	5.3	5.3	4.7	178.0	緑色凝灰岩	完形	
375	17B17	表採	C	5.3	5.2	4.1	153.9	輝緑岩	完形	
376	17D19	Ⅱ	C	5.6	5.3	4.8	160.8	緑色凝灰岩	完形	
377	11D17	Ⅱ	C	4.9	4.7	4.3	141.0	鉄石英（黄）	完形	

石皿観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
378	16C10	Ⅱ	A	39.1	33.7	10.8	12,000	緑色凝灰岩	完形	掃出し口あり。
379	12E13	Ⅱ	A	19.8	12.0	2.7	249	緑色凝灰岩	2/3	掃出し口あり。
380	16B16	Ⅲ	A	25.8	33.5	7.3	3,311	凝灰岩	1/3	被熱。
381	SK64	フク土	A	22.6	18.5	7.9	2,500	凝灰岩	1/2	被熱。掃出し口あり。
382	SI48	フク土	A	40.7	26.1	8.7	7,000	凝灰岩	完形	掃出し口あり。
383	SD127	フク土	A	18.1	18.1	7.2	2,030	凝灰岩	1/4	
384	不明		A	13.0	9.0	5.3	53	安山岩	破片	被熱。
385	10D6・11C20	Ⅱ	A	14.7	26.1	6.7	3,000	安山岩	1/3	被熱。
386	不明		A	45.2	26.4	10.1	13,000	凝灰岩	ほぼ完形	
387	12E25	Ⅱ	A	29.8	15.9	5.1	1,472	凝灰岩	2/3	掃出し口あり。
388	18F18		A	24.8	21.8	4.2	3,100	安山岩	完形	
389	13E20		B	24.1	19.7	6.3	3,500	凝灰岩	完形	
390	13B12		B	34.0	26.7	5.4	6,000	安山岩	完形	
391	14C25		B	25.7	20.9	6.8	5,000	緑色凝灰岩	完形	
392	12C20		B	31.5	23.2	5.7	5,000	安山岩	完形	
393	205集石		B	33.4	27.3	5.6	7,700	安山岩	完形	
394	14D20・14F8	Ⅱ	B	41.3	26.3	7.5	12,600	安山岩	接合完形	2分割。
395	15B22		B	45.7	25.3	12.3	17,100	安山岩	完形	
396	不明		B	22.2	18.3	5.4	2,400	凝灰岩	完形	被熱。
397	不明		B	22.0	10.5	4.5	1,525	安山岩	完形	
398	17B17	Ⅱ	B	20.4	14.5	6.7	2,600	花崗岩	完形	被熱。
399	10C2	Ⅰ	B	30.7	10.8	7.2	4,000	安山岩	完形	
400	不明		B	21.2	21.0	8.2	4,500	安山岩	完形	
401	16D1	Ⅱ	B	18.6	13.2	8.2	2,200	安山岩	完形	
402	14C8	Ⅱ	C	14.2	11.9	4.9	852	凝灰岩	完形	被熱。三脚あり。掃出し口あり。
403	20F16	Ⅲ	C	12.7	8.6	2.8	349	凝灰岩	完形	掃出し口あり。
404	18D5	Ⅰ	C	11.3	8.5	1.7	148	凝灰岩	ほぼ完形	
405	14E18	Ⅲ	C	11.6	11.0	2.7	455	緑色凝灰岩	完形	

砥石観察表

番号	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
406	14D22	Ⅱ	A	33.8	24.8	12.3	9,500	凝灰岩	完形	
407	15D4	Ⅱ	A	17.6	15.3	8.7	2,500	凝灰岩	完形	
408	SD127	フク土1	A	21.4	13.6	7.0	2,500	凝灰岩	3/4	被熱。
409	SK93	フク土	A	29.0	25.0	9.6	8,500	安山岩	完形	
410	17D15	Ⅱ	A	31.3	12.4	9.5	5,000	安山岩	完形	被熱。
411	SD127	フク土1	A	13.6	5.8	3.5	365	安山岩	完形	
412	SI58	フク土	A	8.7	6.5	2.8	199	安山岩	完形	
413	SK80	フク土	B	7.8	3.7	2.5	86	凝灰岩	完形	
414	16D11	Ⅱ	B	9.3	5.5	3.6	149	緑色凝灰岩	完形	
415	11D19	Ⅱ	B	7.2	5.2	2.4	77	凝灰岩	1/2	
416	14B8	Ⅱ	B	8.9	10.3	3.2	173	凝灰岩	1/2	
417	18B25	Ⅰ	C	20.3	7.9	4.8	526	砂岩	完形	
418	6C	Ⅰ	C	15.4	11.8	4.1	578	凝灰岩	ほぼ完形	
419	203集石		C	37.4	21.5	6.5	4,250	凝灰岩	完形	
420	17C18	Ⅰ	C	36.2	24.1	8.6	4,500	凝灰岩	完形	

石核観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	備考
421	12D20	Ⅱ	A	6.8	5.5	3.6	142.6	緑色凝灰岩	
422	10C24	Ⅱ	A	11.0	9.9	5.9	650.0	頁岩	
423	13B19	Ⅱ	B	7.4	6.8	3.4	149.7	頁岩	
424	13D24	Ⅱ	B	6.1	4.5	2.2	50.9	頁岩	
425	10D5	Ⅱ	C	6.8	6.9	4.4	146.1	頁岩	
426	13E20		C	14.3	6.8	6.3	644.1	緑色凝灰岩	
427	SK37	フク土1	D	11.3	4.8	3.1	152.2	頁岩	
428	9E-P1	フク土	D	15.9	7.3	4.2	625.2	頁岩	
429	10B20	Ⅱ	D	11.6	7.8	7.1	687.2	緑色凝灰岩	
430	不明		E	8.1	5.3	4.2	161.0	流紋岩	
431	13D2	Ⅱ	E	6.7	6.1	3.3	119.7	流紋岩	
432	14B25	Ⅰ	F	7.4	4.4	3.4	95.5	緑色凝灰岩	
433	12E17	Ⅱ	F	11.3	9.6	5.0	439.4	鉄石英（黄）	
434	14G	Ⅰ	不可	12.4	6.5	5.3	417.0	緑色凝灰岩	
435	11D25	Ⅱ	不可	10.3	8.8	7.2	578.1	凝灰岩	

剥片類観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	備考
436	11B15	Ⅱ	9.4	4.8	1.7	82.9	頁岩	石刃状剥片。
437	13D11	Ⅱ・Ⅲ	7.0	2.8	0.7	11.5	頁岩	石刃状剥片。
438	12C1	Ⅲ	6.5	2.1	6.2	7.1	流紋岩	石刃状剥片？
439	SK374	フク土	6.6	2.6	1.0	19.9	頁岩	石刃状剥片。
440	SK174	フク土	6.6	2.4	1.6	6.4	緑色凝灰岩	石刃状剥片？
441	14C19	Ⅱ	4.1	3.1	1.3	14.9	鉄石英（黄）	アスファルト付着。

接合資料観察表

No.	器種名	出土地点・遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	備考
442	接合資料	12B-5号集石		7.1	8.1	2.2	65.0	流紋岩	
a	剥片	12B-5号集石		3.6	3.6	0.9	7.0	流紋岩	
b	剥片	12B-5号集石		4.1	2.3	1.3	7.2	流紋岩	
c	剥片	12B-5号集石		6.4	5.5	0.9	18.8	流紋岩	
d	剥片	12B-5号集石		4.1	4.7	1.3	21.8	流紋岩	
e	剥片	12B-5号集石		3.8	4.0	0.9	10.2	流紋岩	
443	接合資料	12B-5号集石		5.6	6.8	4.5	86.7	流紋岩	443～446同一母岩。
a	剥片	12B-5号集石		4.7	4.8	1.5	26.4	流紋岩	
b	剥片	12B-5号集石		5.6	6.4	1.5	40.0	流紋岩	
c	剥片	12B-5号集石		4.2	4.5	0.6	8.0	流紋岩	
d	剥片	12B-5号集石		4.8	3.7	0.9	12.3	流紋岩	
444	接合資料	12B-5号集石		4.8	7.9	3.0	42.8	流紋岩	443～446同一母岩。
a	剥片	12B-5号集石		3.2	3.4	1.4	11.1	流紋岩	
b	剥片	12B-5号集石		3.5	4.9	1.2	13.1	流紋岩	
c	剥片	12B-5号集石		2.8	3.6	0.7	4.1	流紋岩	
d	剥片	12B-5号集石		3.0	4.9	0.7	5.5	流紋岩	
e	剥片	12B-5号集石		3.8	3.7	1.0	9.0	流紋岩	
445	接合資料	12B-5号集石		4.4	6.5	2.2	24.0	流紋岩	443～446同一母岩。
a	剥片	12B-5号集石		2.5	4.7	1.0	8.0	流紋岩	
b	剥片	12B-5号集石		3.6	6.0	1.3	16.0	流紋岩	
446	接合資料	12B-5号集石		5.2	6.2	2.3	33.4	流紋岩	443～446同一母岩。
a	剥片	12B-5号集石		2.4	3.2	1.1	6.0	流紋岩	
b	剥片	12B-5号集石		4.0	6.1	1.6	27.4	流紋岩	
447	接合資料	SK283	フク土	9.6	14.2	5.6	380.4	緑色凝灰岩	
a	剥片	SK283	フク土	8.1	3.4	2.2	51	緑色凝灰岩	
b	剥片	SK283	フク土	8.5	7.6	2.4	129.5	緑色凝灰岩	
c	剥片	SK283	フク土	9.6	3.4	4.7	124.6	緑色凝灰岩	
d	剥片	SK283	フク土	3.9	4.3	1.8	29.2	緑色凝灰岩	
e	剥片	SK283	フク土	5.5	5.3	2.2	46.1	緑色凝灰岩	

No.	器種名	出土地点・遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	備考
448	接合資料	16F21	Ⅰ・Ⅱ	19.6	14.6	7.7	1,881.5	頁岩	
a	剥片	16F21	Ⅰ	3.5	6.5	1.2	25.6	頁岩	
b	剥片	16F21	Ⅰ	4.5	6.6	1.8	40	頁岩	
c	剥片	16F21	Ⅱ	6.5	3.8	1.9	37.1	頁岩	
d	剥片	16F21	Ⅰ	6.2	4.5	1.5	33.9	頁岩	
e	剥片	16F21	Ⅰ	5.2	10.5	3.5	148.6	頁岩	
f	剥片	16F21	Ⅰ	6.3	4.5	1.3	32.2	頁岩	
g	剥片	16F21	Ⅱ	3.9	7.1	2.5	46.4	頁岩	
h	剥片	16F21	Ⅰ	6.9	5.1	2.1	59	頁岩	
i	剥片	16F21	Ⅰ	3.8	3.4	1	9.3	頁岩	
j	剥片	16F21	Ⅰ	10.7	16.4	7.9	1,449.1	頁岩	

石棒観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
449	14C7・14E8	Ⅱ	33.0	8.5	7.8	3,296	安山岩	接合完形	胴中央部で破損。
450	15C12	Ⅱ	20.0	9.7	7.9	1,297	緑色凝灰岩	胴～端部欠	
451	14E4	Ⅱ	10.6	4.3	4.2	302	輝緑岩	胴～端部欠	
452	8C10	Ⅱ	15.6	5.5	4.3	275	泥岩	端部欠	
453	13C25		17.3	7.2	6.8	1,196	安山岩	胴～端部欠	
454	11E18	Ⅱ	11.5	3.1	2.1	112	結晶片岩	端部欠	頭部は偏平。
455	13F15	Ⅱ	7.8	3.1	2.2	82	輝緑岩	胴～端部欠	
456	17B21	Ⅱ	7.5	2.6	2.3	75	凝灰岩	胴～端部欠	
457	12F11	Ⅲ	6.7	3.1	2.1	29	凝灰岩	縦に破損	
458	17B8	Ⅱ	5.6	1.9	1.5	10	凝灰岩	ほぼ完形	両頭石棒。
459	11D13	Ⅰ	5.7	4.3	3.5	47	凝灰岩	胴～端部欠	
460	14B18	Ⅱ	7.2	6.4	5.8	397	安山岩	頭～胴部欠	

類石棒観察表

No.	出土地点･遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
461	17B	Ⅰ	33.7	13.8	10.3	6,500	凝灰岩	完形	敲打痕あり。
462	SI396	フク土	31.4	11.4	10.0	5,300	安山岩	完形	磨痕あり。
463	9C15		23.3	11.2	9.1	3,800	安山岩	1/2	敲打痕、磨痕あり。
464	11E9	Ⅱ	19.8	7.6	7.2	1,557	安山岩	1/2	敲打痕あり。
465	11D7	Ⅲ	13.5	6.8	6.2	849	安山岩	1/2	敲打痕あり。被熱。

玉類観察表

No.	出土地点･遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
466	17B19	Ⅲ	7.6	3.5	2.9	109.0	アルビタイト	完形	大珠。
467	9B11	Ⅱ	5.6	4.3	1.5	42.8	凝灰岩	完形	
468	SD127	フク土	6.0	3.3	1.8	50.7	ヒスイ？	ほぼ完形	大珠。被熱。
469	11C21	Ⅱ	4.5	2.6	1.2	29.3	ヒスイ	完形	
470	SK283	フク土	3.4	2.5	0.4	4.6	凝灰岩	完形	長菱形状の穿孔あり。
471	不明		5.2	4.9	2.0	26.2	緑色凝灰岩	2/3	
472	16F9	Ⅰ	3.0	2.3	0.7	4.8	凝灰岩	2/3	穿孔部より上位欠損。片側縁刻みあり。

扁平加工礫観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
473	20F19	Ⅲ	15.1	7.4	2.6	499	ひん岩	完形	ほぼ全面磨痕あり。
474	14D13	Ⅲ	12.6	7.8	2.2	397	斑レイ岩	完形	ほぼ全面磨痕あり。
475	14E22	Ⅱ	12.7	3.8	2.0	152	頁岩	完形	正裏面・両側面磨痕、両端敲打痕あり。
476	18D4	Ⅲ	7.6	3.2	1.4	69	斑レイ岩	完形	正裏面磨痕、両側面･両端敲打痕あり。
477	12C6	Ⅲ	7.4	2.6	2.4	48	緑色凝灰岩	1/2	正裏面・両側面磨痕あり。
478	17D10	Ⅱ	5.6	3.4	0.8	23	凝灰岩	完形	正裏面・両側面磨痕あり。
479	20F15	Ⅰ	5.3	2.7	1.1	25	頁岩	完形	両側面磨痕あり。
480	15E5	Ⅱ	4.8	2.6	0.9	15	凝灰岩	完形	ほぼ全面磨痕あり。
481	10C22	Ⅱ	6.5	5.5	1.6	87	安山岩	完形	正面磨痕あり。
482	9C2	Ⅱ	6.0	5.2	1.8	69	頁岩	完形	正裏面磨痕あり。
483	16C13	Ⅰ	8.5	7.5	1.6	100	凝灰岩	ほぼ完形	正面磨痕あり。
484	10D3	Ⅱ	8.2	6.6	2.0	124	凝灰岩	ほぼ完形	正面磨痕、片側縁敲打痕あり。
485	17E9	Ⅱ	8.2	5.5	1.5	79	凝灰岩	完形	正裏面・片側面磨痕あり。
486	19F2	Ⅰ	6.4	5.2	2.3	120	安山岩	完形	正面磨痕、上端敲打痕あり。

鏡面状の光沢を有する石器観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
487	14F6	Ⅱ	7.7	4.2	3.2	159	チャート	完形	
488	16B9	Ⅱ	7.7	4.4	2.2	112	頁岩	完形	
489	9C5	Ⅱ	6.2	5.7	3.5	121	凝灰岩	完形	
490	14E21	Ⅱ	3.8	3.9	2.0	42	チャート	完形	
491	16F6	Ⅰ	4.3	2.9	2.5	44	チャート	完形	
492	16C25	Ⅱ	5.7	5.3	2.9	105	チャート	1/3	
493	不明		6.4	3.6	2.3	80	チャート	完形	
494	不明		6.5	4.5	2.7	114	チャート	完形	
495	16E6	Ⅱ	5.0	4.3	2.9	87	チャート	完形	
496	16C25	Ⅱ	4.8	4.6	3.2	99	チャート	完形	
497	不明		3.2	3.0	1.6	23	頁岩	完形	

軽石製品観察表

No.	出土地点・遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	備考
498	13C25		4.5	3.9	1.4	9.3	軽石	穿孔あり。
499	11C10		3.7	2.9	1.9	7.6	軽石	穿孔あり。
500	SK376	フク土	3.3	3.4	1.6	5.8	軽石	穿孔あり。
501	20F21	Ⅲ	7.2	5.1	2.7	42.0	軽石	凹あり。
502	15E14	Ⅱ	6.3	6.2	5.6	72.2	軽石	凹あり。
503	不明		11.0	7.5	2.9	182.0	軽石	片面は平坦に加工。
504	13D20		4.3	4.3	3.7	26.0	軽石	球形に加工。被熱。
505	17E2	Ⅲ	7.3	5.4	1.7	36.6	軽石	定角式磨製石斧の基部に近似。
506	不明		3.7	3.3	1.2	5.3	軽石	定角式磨製石斧の刃部に近似。

その他の石製品観察表

No.	器種名	出土地点・遺構名	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
507	石冠	19G2		6.4	6.1	3.7	9.4	緑色凝灰岩	完形	
508	碗形石製品	SI472-P1	フク土	4.8	4.2	2.6	38.6	凝灰岩	完形	
509	碗形石製品	13F2	Ⅱ	5.7	5.3	2.9	44.6	緑色凝灰岩	一部欠	
510	盲孔石製品	15F12	Ⅱ	7.7	4.5	1.7	42.3	緑色凝灰岩	完形	
511	盲孔石製品	11D17	Ⅱ	6.9	3.4	1.5	35.0	緑色凝灰岩	完形	
512	盲孔石製品	SI59	フク土	8.3	6.1	16.8	58.0	緑色凝灰岩	一部欠	
513	石剣	12D6	表採	7.7	4.3	2.2	90.8	緑色凝灰岩	破片	
514	石剣	10C15	Ⅱ	5.0	3.9	1.7	53.0	結晶片岩	破片	
515	石剣	12C11	Ⅰ	4.6	2.3	0.5	4.3	頁岩	破片	
516	環状石斧	10G19・11D5	Ⅱ・Ⅰ	8.8	7.2	2.0	98.9	凝灰岩	一部欠	未成品か？
517	分類不可	15E6	Ⅱ	5.9	6.1	5.2	173.0	緑色凝灰岩	？	円柱状石製品。
518	分類不可	SD127	フク土	8.0	4.8	1.7	34.5	緑色凝灰岩	？	
519	分類不可	12F4・18C3	Ⅱ	7.0	4.1	3.4	125.0	花崗岩	？	磨製石斧の基部、大珠に近似。
520	分類不可	16D13	Ⅰ	5.3	2.9	1.4	13.7	緑色凝灰岩	一部欠	有溝石錘に近似。

古代以降の土器観察表

（ ）は現存値

No.	種別	器種	遺構名	出土地点	層位	残存部位	計測値（cm）	時期	備考
1	須恵器	小型壺		13F4	Ⅱ	口縁部～胴部片	口:6.0 高:（5.7）	10C初	大戸窯？
2	須恵器	甕		17B	Ⅰ	胴部片		9C後半～10C初頭？	
3	須恵器	甕		16B9	Ⅱ	胴部片		9C後半～10C初頭	大戸窯。
4	須恵器	甕		10G		胴部片		9C後半～10C初頭	大戸窯。
5	土師器	有台椀		8E1	Ⅱ	胴部下半～底部	底:6.9 高:（2.4）	9C後半～10C初頭	内面黒色処理。
6	土師器	有台椀		18D15	Ⅰ	底部3/4	底:6.5 高:（1.8）	9C後半～10C初頭	内面黒色処理。
7	土師器	有台椀		不明		底部片		9C後半～10C初頭	内面黒色処理。
8	土師器	甕	SK62		フク土	胴部下半～底部1/3	底:7.2 高:（5.4）	9C後半～10C初頭	
9	土師器			17G8		口縁部片			
10	土師器	甕		9B23	Ⅱ	口縁部1/7	口:20.0 高:（4.2）	9C後半～10C初頭	
11	土師器	鍋		18E12	Ⅰ	口縁部片		9C後半～10C初頭	
12	土師器	鍋		18E7	Ⅱ	口縁部片		9C後半～10C初頭	
13	土師器	鍋		不明		口縁部片		9C後半～10C初頭	
14	青磁	椀		16E17	Ⅲ	口縁部片		13C前半	
15	青磁	椀		20F9	Ⅱ	口縁部片		13C前半	
16	珠洲焼	擂鉢		20C20	Ⅱ	口縁部片		珠洲編年Ⅲ～Ⅳ期	
17	珠洲焼	擂鉢		15F18	Ⅲ	胴部片		珠洲編年Ⅲ～Ⅳ期	
18	珠洲焼	擂鉢		18C3	Ⅰ	胴部片		珠洲編年Ⅲ～Ⅳ期	
19	珠洲焼	甕または壷		19F12	Ⅰ	口縁部片		珠洲編年Ⅱ～Ⅲ期	
20	珠洲焼	甕または壷	SD127		フク土	胴部片		珠洲編年Ⅱ～Ⅲ期	21と同一個体。
21	珠洲焼	甕または壷		18G1	Ⅰ	胴部片		珠洲編年Ⅱ～Ⅲ期	20と同一個体。
22	珠洲焼	甕または壷	SD127			胴部片		珠洲編年Ⅱ～Ⅲ期	
23	唐津焼	折縁皿		20E4・21E13	Ⅰ	口縁部～底部2/3	口:12.0 底:4.4　高:3.0	1610～1650	砂目。
24	伊万里焼	椀		11C8	Ⅰ	胴部下半～底部1/3	口:（1.8） 底:7.4	17C後半～18C前半	
25	堺焼？	擂鉢		10C23	Ⅰ	口縁部片		18C以降？	備前焼コピー？
26	不明	擂鉢		17E8	Ⅱ	底部片			
27	堺焼？	擂鉢		9D3・10D16.17	Ⅰ	胴部下半～底部片	底:11.6 高:（3.0）	18C以降？	備前焼コピー？
28	会津焼？	片口		17B17	Ⅰ	口縁部～胴部9/10	口:24.8 底:14.4	19C	
29	素焼き	骨壷　蓋		19C20ほか		端部3/4	径:21.6 高:（3.0）	19C以降	
30	素焼き	骨壷　蓋		18E7・19C20・19D13		口縁部～胴部1/6	口:17.6 高:（21.6）	19C以降	

古代以降の土製品観察表

No.	器種名	出土地点・遺構名	層位	計測値（cm）	重さ（g）	遺存状態	備考
31	羽口	21F9		外形:8.5、孔径:2.8	254.7	破片	炉に接合する部分。
32	羽口	9G沢A		外形:7.1、孔径:2.5	128.6	破片	炉に接合する部分。
33	その他の土製品	21F4		高さ:4.7、底径:2.5	47.5	スタンプ部分？	土製スタンプか？
34	その他の土製品	13F7	Ⅱ	高さ:4.2、幅:3.7	27.5	脚部？	焼き物の脚部？

古代以降の金属器類観察表

No.	器種名	出土地点・遺構名	層位	計測値（cm）	重さ（g）	遺存状態	備考
61	鉄製蓋	20E24	Ⅰ	径:9.6、高さ:1.3	119.3	2/3残	
62	鉄製容器	18C13	Ⅱ	高さ:5.4、	64.4	破片	口縁部破片。
63	刃物	12E21	Ⅱ	長さ:7.7、幅:2.7、厚さ:0.7	35.5	ほぼ完形？	刃渡りは短い。
64	分類不可鉄製品	11E24	Ⅰ	長さ:7.6、幅:3.5、厚さ:1.3	143.9	破片	断面楕円状の棒状品。
65	かんざし	9C18	Ⅰ	長さ:18.0、幅:0.9、厚さ:0.2	11.5	完形	
66	銭貨	20F10	Ⅰ	直径2.2	2.2	完形	
67	銭貨	20F10	Ⅰ	直径2.2	2.0	完形	
68	銭貨	14C24	Ⅰ	直径2.2	3.2	接合完形	2つに割れている。
69	椀形鍛冶滓	SX465	フク土	長さ:11.5、幅:8.6、厚さ:5.9	670.0		分析番号:KTN1。
70	含鉄鉄滓	SX465	フク土	長さ:10.0、幅:8.3、厚さ4.3	288.0		分析番号:KTN2。
71	椀形鍛冶滓片	17B13	Ⅰ	長さ:9.1、幅:7.7、厚さ:5.3	510.0		分析番号:KTN3。
72	青銅塊	10C13	Ⅱ	長さ:5.1、幅:4.0、厚さ1.0	51.0		分析番号:KTN4。
73	滓？	10E13		長さ:6.0、幅:4.9、厚さ:4.3	48.0		分析番号:KTN5。
74	椀形鍛冶滓	10D22	Ⅰ	長さ:5.9、幅:4.5、厚さ:2.7	83.0		分析番号:KTN6。
75	椀形鍛冶滓片	10D14	Ⅱ	長さ:4.3、幅:3.5、厚さ:2.0	45.0		分析番号:KTN7。
76	椀形鍛冶滓	17A24	Ⅱ	長さ13.0、幅:7.7、厚さ:3.5	329.0		分析番号:KTN8。
77	鉄塊系遺物	10F10	Ⅱ	長さ:3.9、幅:2.7、厚さ:2.4	36.0		分析番号:KTN9。
78	含鉄鉄滓	22F1	Ⅱ	長さ:5.3、幅:3.0、厚さ:1.7	36.0		分析番号:KTN10。

古代以降の砥石観察表

（ ）は現存値

No.	出土地点・遺構名	分類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	石材	遺存状態	備考
35	SD127	A	35.9	22.6	14.4	9,000	緑色凝灰岩	ほぼ完形	
36	9G10沢A	A	21.8	7.6	7.0	1,336	緑色凝灰岩	ほぼ完形	
37	9G13沢A	A	19.2	13.1	8.5	3,500	緑色凝灰岩	完形	
38	20F10	A	10.3	10.2	6.0	1,607	緑色凝灰岩	完形	
39	8G	A	32.1	9.1	5.6	577	緑色凝灰岩	1/2	
40	9G沢A	A	19.0	11.9	9.2	4,950	緑色凝灰岩	完形	
41	SD127	A	21.8	12.1	5.4	1,361	凝灰岩	完形	
42	17B13	A	22.9	15.7	6.2	2,000	凝灰岩	2/3	
43	SI31	A	11.7	12.1	5.3	1,648	緑色凝灰岩	完形	被熱。
44	SI31	A	14.3	6.0	2.2	219	緑色凝灰岩	完形	
45	15E25	A	10.9	6.2	3.3	342	緑色凝灰岩	完形	
46	SD127	A	9.8	9.5	4.1	482	凝灰岩	完形	
47	11C7	B	9.7	5.0	3.0	184	凝灰岩	4/5	
48	17B15	B	12.6	6.3	1.9	193	凝灰岩	3/4	
49	17B	B	10.9	5.4	1.8	155	凝灰岩	完形	
50	不明	B	9.2	5.5	1.6	106	凝灰岩	4/5	
51	12C14	B	8.9	5.6	3.2	220	凝灰岩	完形	
52	12C19	B	9.4	4.5	2.0	139	凝灰岩	ほぼ完形	
53	11D10	C	5.7	3.3	2.7	61	凝灰岩	3/4	
54	11E15	C	5.3	2.5	2.0	42	凝灰岩	完形	
55	14B23	C	5.5	2.6	0.8	14	凝灰岩	完形	
56	9C6	C	3.7	3.0	1.6	22	凝灰岩	1/2	
57	17E18	C	3.5	1.9	0.9	8	凝灰岩	2/3	
79	17B6	D	9.0	5.5	1.1	50	頁岩	3/4	鳴滝砥。本文挿図第64図に実測図あり。
80	15F9	D	4.4	3.1	0.4	10	頁岩	1/2	鳴滝砥。本文挿図第64図に実測図あり。
81	12E20	D	4.9	3.6	0.7	18	頁岩	1/2	鳴滝砥。本文挿図第64図に実測図あり。

古代以降の石製品観察表

No.	器種名	出土地点・遺構名	層位	計測値（cm）	重さ（g）	遺存状態	備考
58	石臼	8E24	Ⅱ		96.5	破片	上臼の挽き木孔部分。
59	経石	22F16	表土	長さ:3.4、幅:4.1、厚さ:1.2	9.4	完形	「礼」の字あり。
60	分類不可	17D13	Ⅱ	長さ:5.5、幅:3.7、厚さ:2.4	46.7	?	穿孔あり。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きたのいせき
書　　名	北野遺跡Ⅱ（上層）
副 書 名	磐越自動車道関係発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第141集
編 著 者 名	髙橋保雄・高橋　保・児玉泰裕・斉藤　準
編 集 機 関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所　在　地	〒956-0845　新潟市金津93番地1　　TEL 0250（25）3981
発行年月日	2005（平成17）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
北野遺跡（下層）	新潟県東蒲原郡上川村大字九島字長木3,429番地ほか	153834	7	37度 39分 18.61783秒	139度 28分 8.22627秒	19930419～19931203 19940412～19941122 19950412～19950831	8,900	道路（磐越自動車道）建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北野遺跡（上層）	集落	縄文時代（中期・後期）	住居跡64基、土坑328基、埋設土器132基、焼土18基、集石22基、ピット多数	縄文土器・土製品・石器・石製品	沼沢火山灰の二次堆積層直上の集落跡。縄文時代中期前葉～中葉、中期後葉、中期末葉～後期初頭、後期中葉の4集落を検出。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第141集

磐越自動車道関係発掘調査報告書

北野遺跡Ⅱ（上層）本文編

平成17年3月16日印刷
平成17年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986
URL http://www.maibun.net

印刷・製本　株式会社 第一印刷所
〒950-8724 新潟市和合町2丁目4番18
電話　025（285）7161